

# 女神転生Genesis

てんぞー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界は既に滅んだ——故に始めよう、わるあがき世界再生を。

目次

序章 開幕

崩壊した世界

—

1

崩壊した世界 II

—

19

一章 創世までの一歩

死神と塔

—

37

死神と塔 II

—

53

死神と塔 III

—

66

死神と塔 IV

—

83

死神と塔 V

—

95

死神と塔 VI

—

108

死神と塔 VII

—

119

死神と塔 VIII

—

132

死神と塔 IX

—

144

二章 東京アポカリプス

再生し始める世界

—

160

再生し始める世界 II

—

178

再生し始める世界 III

—

193

再生し始める世界 IV

—

205

再生し始める世界 V

—

218

再生し始める世界 VI

—

232

再生し始める世界 VII

—

243

再生し始める世界 VIII

—

255

再生し始める世界 IX

—

267

再生し始める世界 X

—

278

再生し始める世界 XI

再生し始める世界 XII

三章 覚悟と友情

大正二十年 314

大正二十年 325

大正二十年 338

大正二十年 350

大正二十年 361

大正二十年 372

大正二十年 381

大正二十年 392

大正二十年 406

大正二十年 418

大正二十年 426

大正二十年 435

大正二十年 446

大正二十年 454

大正二十年 465

大正二十年 474

大正二十年 487

大正二十年 500

四章 人間性の行き先

神州混沌行脚 511

神州混沌行脚 523

神州混沌行脚 534

大破壊	II		762
大破壊			753
五章 運命を変える為に必要な事			
神州混沌行脚	XXIII		744
神州混沌行脚	XXII		735
神州混沌行脚	XXI		724
神州混沌行脚	XX		714
神州混沌行脚	XIX		705
神州混沌行脚	XVIII		693
神州混沌行脚	XVII		684
神州混沌行脚	XVI		674
神州混沌行脚	XV		664
神州混沌行脚	XIV		652
神州混沌行脚	XIII		642
神州混沌行脚	XII		632
神州混沌行脚	XI		622
神州混沌行脚	X		613
神州混沌行脚	IX		603
神州混沌行脚	VIII		593
神州混沌行脚	VII		582
神州混沌行脚	VI		571
神州混沌行脚	V		560
神州混沌行脚	IV		549

## 序章 開幕 崩壊した世界

心臓を締め付けられるような思いと共に目が覚める。見上げる天井は未だに見慣れない景色であり、ベッドの感触も柔らかく、自分が普段から使っているものとはまるで違う柔らかさを持った寝具だった。そして目を開き、胸を押さえれば、横から手が伸びて、手を掴んでくれる。横へと視線を向ければ、そこには一人の少女の姿が見える。長い、青髪の彼女は表情に乏しく、一見、何を考えている様には解らない。だがその手は此方の手を握り、その無表情のまま、

「サマナー……大丈夫……？」

静かだが、労わる様な声をくれる。彼女の顔を走る紋様はまるでトライバルなものを想像させ、それがペイントによって施されたように思えるが——違う。その紋様は彼女の肌に刻まれたものだった。まるで人ならざる事を示すかの様な紋様だった。実際に、彼女は純粋な人ではない。だがそんな事は今、どうでも良かった。彼女の手から感じる暖かいぬくもりが、凍り付いた体を溶かすようだった。そうやって握る手を彼女は胸元へと持って行き、抱きしめる。

「大丈夫……サマナー、は……私が……守る、から」

そうやって落ち着かせてくれる彼女の声を聞いて、更に自分と言う男の情けなさに失望する。女にこう言われ、守られないとどうしようもない自分の弱さに苛立つ。だけど同時に、こうされなきや自分の心は早々折れていたであろうのも事実で、劣等感と感謝が入り混じった、複雑な心境を生み出していた。

「……サマナー？」

彼女は此方を、変化のない表情で見てる。優しい子であるのは、既に知っていた。それが演技なのか、俺が契約者であるからなのか、なんてのは判別がつかない。ただ事実として解っているのは彼女は俺を案じてくれているという事だけで、何時までもこのままではいられない、という事だった。

「ああ……ありがとう、人修羅<sup>アレン</sup>」

「ん」

彼女は微笑まない。彼女は表に感情を見せられない。だがその仕事や言葉でしか判断できない。人間として、どこか大事な物を欠損している。そんな事を考えながら人修羅——アンという名前で呼んでいる彼女から少しだけ、温もりを貰って目覚め、起きる。

そこは見慣れない部屋。自分が借りていたアパートの一室と比べればはるかに豪華で、整っており、高級そうな調度品が飾られている部屋だった。ベッドから抜け出す様に起き上がりながら、ベッドの横に置いてある靴と靴下に手を出す。既に靴下は何日も洗濯していないもので、そろそろ臭くなってくる頃だが、未だに新品を調達できていないのも事実だ。そろそろ、下着や靴下に関してはどこかで調達しなくてはならないな、と思いながら何日も履いている靴下と靴を履いた。

上着代わりに呪殺無効化効果のあるポンチョを上から被り、ベッドサイドテーブルに置いておいたスマートフォンを確かめ、ポケットに入れる。Magバッテリーで動くようになったスマートフォンはもはや充電を気にする必要はなくなっていた。スマートフォンと一緒においてある片眼鏡を装着する。

「DDS起動」

Connecting To Network……Access  
Complete  
Welcome To Digital Devil System  
Currently Digital Devil Server  
Is Down  
Sorry For Inconvenience, Please  
Contact Steven

起動と同時に片眼鏡を利用した投影ディスプレイにはお決まりの文字が表示される。《百太郎》、《エネミーソナー》、《ギボ・アイズ》、《ハニー・ビー》、《ストレージ》、《アナライズ》《ヒロえもん》。奇襲を防

ぐアプリ、存在を感知するアプリ、悪魔の耐性を警告するアプリ、構造を把握してマップ化してくれるアプリ、物質を電子化して保存するアプリ、基本的な能力や強さを数値化してくれるアプリ、そして消滅する悪魔の概念を道具として残しやすくするアプリ。

この世界で生きる上では必須とも呼べるアプリの数々。その全てが問題なく稼働するのを確認し、DDS、つまりはデジタル・デビル・システムが問題なく稼働しているのを確認してからオフにした。昔は市販のどこにでもあるスマホではあったが、専門家の改造によってもはやそれはMagバッテリーによる永久稼働等を獲得しており、まるで別物となっていた。ただそれもMagがある間の話でもある。Mag、つまりはマグネタイトが尽きれば普通のスマートフォンに劣化するだけではなく、生命線を失う事にもなる。

悪魔を探し、殺している最中はいざ知らず、まだまだ《位階<sup>レベル</sup>》が低く、そしてMagもそれほど持っていない現在、無駄に消費できる余裕なんて当然ながら、存在しない。そうなるかと探索をするまでは必然的にDDSは切っておく必要がある。ちよつとした節約が明日の命へと繋がる世の中なのだ、今は。

もうそんな世は残っていないのだが。

「よし……朝ご飯にするか」  
「ん」

チェックを終わらせたところで寝室をアンと共に出る。木製の扉を抜けて出た所は人の影が全く見えないバーの存在だった。どこからともなく流れる静かで上品なクラシックの音色は聞く者の心を癒す効果を持つており、この世界における数少ないまともな娯楽となっている。ささくれ立った心がクラシックに少しだけ癒されながらバーのカウンターの方へと向かう。

無論、そこには誰もいない。だがその代わりにカウンターのの上には回収してきた保存の効きそうな缶詰が積み上げられている。とはいえ、まだまだそれは保存が利くので手を出さない。その代わりにカウンターの向こう側の冷蔵庫から入れておいた牛乳を取り出し、そしてシリアル<sup>シリアル</sup>の箱を取り出す。



それをボウルの中に入れて完成。後は適当にコンビニから調達してきたカロリーメイトを食べてお腹を満たす。

アンとカウンタ―席で、二人で肩を並べてそれを朝ご飯として食べる。

悪魔でありながら肉体を保有するアンは生きる為に食事が必要とする。排泄を行わず、全てを完全に吸収してしまうらしいが、その話題は口に出すと怒られるのもう口にしない。ただ、トイレに行かなくていいのは今の世の中便利で羨ましいとは思わなくもない。ただこういうのを知ると、彼女は人間でありながら、人間じゃないんだよなあ、と思わされてしまう。

「……………行く……………の？」

「んー…………そろそろメシアとガイアの様子も気になるし…………今日はその二つを回ろうか」

「ん」

人修羅・アンは無言でその判断を肯定してくれる。彼女は自分と契約してくれてはいるものの、レベルは此方よりも高い為、従う必要はない。故にこうやって従ってくれているのは、此方の意思を尊重して…………ではなく、彼女や自分よりも遥かに高位の存在が、そうやって契約したからだ。

果たして、本当は彼女は自分の事を…………どう思っているのだろうか。

それを考えたくは…………ない。

と、朝食を食べ終わった所で扉が開く音と、きい、きい、と鳴らす金属音が聞こえた。視線をバーから繋がる別の部屋の扉を見れば、その向こう側から車椅子に乗った老人が出てくるのが見えた。朝食の片付けを始めようとしたところで、動きを止めて軽く頭を下げる。

「あ、おはようござまつすステイブンさん。ども」

このバーの主、そして使用权を分け与えている同志である人物。それと同時にDDSの生みの親である人物は片手を持ち上げながら苦笑する。

「いや、私の事は気にせずがいいよ。それよりも朝食は終わった所かね」

「あ、はい。アンと一緒につすけど。時間が経てば経つほど拾えるもんが減りますし、早いうちに探索に出ようかなあ、って」

「うん、それが良いだろう。一応ここに来るだけの食料は持ち込んではあるが、それも有限だ。Magだけで生きられる悪魔と違い、我々は心を豊かにし続ける為に、そして生きる為に食事を必要とする。と、私の分の朝食はいいよ。自分で出来るからね」

そう言うのと勝手に動き出すステイブンの車椅子からロボットのアームが伸び、それが牛乳やらシリアルやらを掴んで、ステイブンの分の朝食を用意する。やっぱり、これじゃあ不健康だよなあ、と思うも、今はこの食事できえかなり豪華なものだ。やはりまともなものは略奪されているし、電気水道が通常の領域では停止している為、肉の類はすぐに腐ってしまっている。冷凍食品だつて冷凍保存できないのなら限界が来る。となると、やはりこういう食事しか今は手が付けられない。

悲しいが、これで耐えるしかない。

食べ終わった食器やらを洗って片付け終わった所で、再びステイブンに軽く頭を下げる。

「それじゃあ、アンと出てきますね」

「今日はどこへ行く予定かな」

「メシア教会とガイア寺院の方へ様子見に」

「ふむ……確かに今日で10日目か。となるとそろそろ大きな動きがあってもおかしくはないだろう。気を付けていきなさい。人修羅も、君の才能もこの世界では絶対に二人目を発見する事が出来ないものだ。私もサーバー復旧を急ぐとしよう」

ステイブンはDDSの生みの親である。現在、この街を——或いは世界を取り巻く環境の影響で、サーバーが物理的に消滅している。その為、ステイブンは息抜きと称して最新型のデビルサマナー用のアプリを開発しつつ、デジタルデビルサーバーの復旧作業、

と言うよりは再構築を0から行っていた。

「これが復旧すれば悪魔合体を悪魔を捕獲せず、悪魔全書からデータを流用して行う事が出来る様になるはずだ。そうすればこの状況を

打破するための力にもなるだろう……とはいえ、圧倒的に資源が足りない……Magも、マツカも」

「あの、スティーブンさん。割とバーに寝泊りさせて貰ってるだけで助かってるんで……」

「うむ、その気持ちは承知している。だがそれとは別に、私にしかできないのであればそれを成す義務が私にはあるのだよ、如月竜二君」

そう言われると、困る。とてもとても困る。何も言い返せなくなってしまう。スティーブンが言っている言葉の意味は凄く良く解り、だからこそその期待と、そして自分に発生している義務が肩に重くのしかかる。押し潰されそうなほどに。

だが肩に感じるアンの腕の温かさに、少しだけ、心を強める。

心臓をきゆう、と締め付ける感じを我慢する。

スティーブンに軽く頭を下げる。

「それじゃあ、行ってきます」

「うむ。幸運を祈っている、最後の悪魔召喚士。誰でもない、君が世界を修復し、そしてヒーローを見つけ出すのだ。その為にも見つけるのだ——扉を」

スティーブンの言葉に頷きを返してからバーの出口へと向かう。扉のノブに手をかけ、扉を開けてその向こう側へと抜ける。短い閃光に包まれてから扉を抜けた先、そこにはもはやあの落ち着くバーの姿は存在しなかった。その代わりにそこに広がっている光景は変わってくる。

廃墟だ。

見える限り廃墟が存在している。背後へと振り返ればアンが向こう側が存在しない家の扉を抜けて出てくるのが見えた。そして同じように振り返り、朽ちかけた扉がそのままだったり、と音を立てて倒れた。崩れかけた大量の民家、亀裂が走った道路。へし折れた標識。

戦争でもあったのかと思う様な光景が目の前には広がっている。誰がこれをトウキョウだと信じたのだろうか。誰がこれを見て10日前までは一般的な文化レベルを過ごせる場所だったと思えるのだろうか。俺でさえまだこうやって確認する度に、これが現実だとは認め

られずにはいられなかった。いや、違う。

「これが現実だと認めたくないだけだな……」

荒廃したこの様子はこの街全体を象徴するような光景だった。しばらく呆然とこの景色に見入ってから、

「DDS起動。サモンプログラムスタート」

Summon Program Standby……Ready

Summon∨妖獣チエフエイ

Summon∨神獣マツヤ

音声入力に合わせ、DDSによる最新の悪魔召喚プログラムにより悪魔が召喚される。Magが吸われる。とはいえ、自分のレベルに合わせてあるレベルの悪魔である為、消費されるMagは多くない。そうやって登場するのは狐の仮面を被り、同じように尻尾を二本生やした着物姿の童女と、そして直径2メートルほどの魚である。

登場した魚——マツヤは浮かび上がる事が出来ずに、びたんびたんと目の前、道路の上で跳ねている。その尻尾をアンが掴み、そして全力で鈍器代わりにスイングしている。

「妾、やっぱり思うんだけど神獣の使い方が間違ってると思う」

「いや、だってイケメンフォームって発動するのにMag食うし……節約の為だしこれでも戦えるならいいかなあ、って」

『世界救済の為であればこのマツヤ、どの様な事であっても問題はな  
いヤー』

「この神獣、無駄に爽やかであるな。あ、これ、魔人。独占するな。妾もそれでスイングしたい」

「玩具かよ」

アンが無表情でマツヤスイングを披露する中、二尾チエフエイがびよんぴよん跳ねながらアンからマツヤカリバーを奪おうとするが、それをアンが見事に半歩避けて回避しながらスイングしつつ移動している。地味に芸が細かいなお前、そして無駄に楽しそうにキラキラと光るマツヤを見て、むしろ楽しんでないか、と思わなくもない。

とりあえず、最終兵器である最後の仲魔はある意味一番消耗が激しいクレイジーな奴なので温存するとして、DDSの《ストレージ》ア

ブリから電子保存していた装備を取り出す。

無銘の刀、そしてヤクザから拝借させて貰ったベレッタを。《アナライズ》機能によればガンスリンガーとしての高い素質を持っているらしいが、悪魔と言う連中は非常に厄介なもので、攻撃手段を絞るとガチで詰みかねない。

特に現在この都市で一番目撃される外道系統の悪魔は全員揃って銃とかの射撃攻撃に強い。

それが影響で応戦に回ろうとした警察とかが一番最初に死んだ。だから過信してはならない。ステイブン謹製の《ギボ・アイズ》が悪魔を解析、或いは蓄積したデータベースから即座に悪魔の弱点や耐性を伝えてくれるが、それがあっても死ぬときは死ぬ。

それは既にこの地獄の様な10日間で目撃している。だから腰に刀を装着し、何時でも抜ける様にしつつ、腰のベルトに銃を装着する。これで探索を行う準備が出来た。何時だって最初に踏み出すこの瞬間は重く、苦しい。

『さあ、往こうサマナー！ 君に課せられた期待は確かに重いものかもしれない……だけど君はひとりじゃない！ 僕が、そして他の皆が支えているんだ！ 恐れずに一歩目を踏み出すんだ！』

「魚のままではイケメンするな」  
キラキラと光るマツヤカリバーがアンによって掲げられ、なんか変な力が抜ける様な空気になり始めた所で、程良く気が抜けた気分だった。溜息を軽く吐いてから——歩き出す。

この狭い世界を。  
狭くなってしまうた世界を。  
滅びてしまった世界を。

◆  
結末から話を始めよう。いや、違う。これは結末からしか語れないのだ。なぜならその前の部分は既に存在しないからだ。簡潔に言ってしまうえば物凄くシンプルな事だ。

世界は滅んだ。

冗談でも何でもなく、世界はある日唐突に滅んだのだ。冗談に聞こえるし、これが冗談であれば嬉しいのだが、ガチな話で世界は滅んだのだ。そう、星や人類ではなく、世界だ。つまり宇宙とかもがつり削れているらしい。それを確かめる方法はない。だがこの世界という概念は確かに滅んだのだ、とステイブンは説明していた。そしてそれに対して唯一生き残った場所がこの街、この都市、ナカノだった。何故無事だったのかは、解らない。だけど一つだけ現状で解っている事があった。それは世界と言う概念から情報が消失している事だった。世界を構築するデータそのものが足りていないのだ。つまりそれが世界破滅の原因であるのだ。この都市はまるで消し忘れのカスの様なものと表現されている。1TBのHDDを初期化したと思つて残されていた5KBのデータ。そんなもんだと言われている。

そうやって世界は滅びたのだった。原因だけ解つていて、手段も、誰がやったのか、どうやったのか、なぜか、と言う全てを残して。それを知る方法は存在しない。なぜならそれが情報として世界に残っていないからだ。故に修復不可能。回復不可能。絶対的な致命傷であった。世界はその原因さえも解らずに滅びる。

そう、滅びる。

ロウ・ヒーローもカオス・ヒーローもザ・ヒーローもこの物語には登場出来ないのだと、人修羅を連れた金髪の支配人は言っていた。なぜならヒーローと言う概念を構成する情報そのものが世界から欠落しているのだから、全ての状況を覆すようなシナリオを構築する事さえ不可能なのだと言っていた。だからザ・ヒーローが黒幕を殴り殺して解決するのは不可能だと言っていた。

故に救世主は出現しない。皆殺しの英雄も出現しない。万魔の絵札も道化師も罪と罰も改変者も侍も出現できない本当の終末であり、これは絶対なる滅びである。

——その筈だった。

◆  
「お、讚美歌が聞こえる」

メシア教会のある丘へと近づけば、風に乗って讚美歌が聞こえてくる。ここまで近づけばそろそろ安全圏内だし、悪魔を出しっぱなしにしているとメシア教の連中ににらまれる。その為、そそくさとチエフェイとマツヤをスマートフォンの中へと戻してしまい、一応武装はそのまま、メシア教会へとアンと共に向かう。メシア教会の前には門番をする白と青の服装に鎧を装着したテンプルナイトの姿が見えた。その姿は此方を確認すると片手を剣にかけつつ声を零した。やはりアンがいる手前、警戒は残されてしまう。

「フリーのサマナー殿、また貴殿か……メシア教への入信に来た、という訳ではなさそうだな」

「どうも、欲しそうなものを幾つか見繕ってきたので情報か物資と交換という事で」

「ふむ……やはり同じ要件か。あい、解った。前回同様聖書を持ってくれたのであれば助かるのだが」

「ああ、ありますよ。あと薬も少々。魔晶がちよい欲しいんで、回してくれるのなら此方から色を付けますけど？」

ストレージから酒を取り出し、チラチラとそれを見せる。安酒ではあるが、酒は酒だ。もはや酒が生産される事のないこの末世では非常に貴重なものであり、また同時に数少ない趣好品の類でもある。それにアルコールは消毒などにも使える。寧ろ、テンプルナイトのモラルを考えたら飲むよりも其方に使いそうだなあ、とは思わなくもない。

実際、バケツヘルムの下で少々悩むテンプルナイトの姿が見れた。片手を顎へと当て、むむむ、と軽く唸っている。だがその判断は早かった。

「解った。貴殿のレベルであればエンジェルの魔晶石が丁度良いという所だろう……目当ての装備は破魔刀の製作かね？」

「おっと、それは企業秘密で」

「む、確かにそれもそうか。しかし魔晶武器を作成できる環境と技術

者は我らも是非とも協力を仰ぎたいものだ……もし心変わりする様であれば、何時でもこの終末を超える同胞として受け入れる準備はある。覚えておいてくれたまえ」

うーむ、この聖職者の鑑め、と軽く笑い声を零しながら次々と交換する為に用意してある物資を取り出し、別のテンプルナイトがそれと交換する為のものを取りに去って行く。それを見届けながら、

「そのお言葉は騎士様のもんで？」

「私と、聖女様のだ。正直、力がある事は良いが……この環境、一人で生きて行くにはあまりにも心細すぎる。貴殿の心が砕けぬよう我々、人々の安寧を守る者としての当然の心配だ。特に貴殿の様にある程度力を持った人間はどこかで失敗すると……いや、失礼した。出過ぎた言葉だな」

「いえいえ、騎士様の言葉は覚えておきます。それでもこの崩壊の中で探らなきゃいけない事があるんで俺は」

「うむ。であるなら、私も必要以上の言葉は送らぬ。貴殿の道行きに我らが主の加護がある事を祈ろう」

本当に、良く出来た騎士様だった。立派な聖職者とは彼の様な人の事を言うのだろうか、と前少しだけ見た聖女様の姿を思い出し、さつさと物々交換と情報交換を終わらせて、メシア教会を去って行く事にする。

その足取りに迷いはない。



この世界の症状を表現するなら、情報欠落という言葉が一番正しいだろう。この病には一つだけ対症療法が存在する、とは支配人の言葉だった。彼は説明した。情報の欠落は情報で埋める事によつて補完する事が可能である。故に高密度の情報でその欠損を埋めれば、この世界は再生可能である。だが大前提として多くの悪魔はそこに介入することが出来ない。

なぜか？



簡単だ——悪魔もまた情報の塊だからだ。

この世界から抜け落ちたピースには悪魔と言う概念も存在する。それ故に世界に残された悪魔という存在は非常にレベルが低く、情報密度の小さい雑魚悪魔ばかりである。そのレベルも揃って8, 9以下。それに本当の高位悪魔、元々この世界に顕現していた守護者等の悪魔達はこの遺された世界を維持するための情報リソースへと自分自身を還元している。

それが理由で、一定以上の悪魔は存在できない状況になっている。単純、存在するのに必要な概念がないからだ。ある意味で、この世界は真っ白なキャンバスになっている。

◆

A t t e n t i o n , E n e m y O n A p p r o a c h

「5のガキ、4のゾンビ、7のゾンビドッグか……」

家の影から覗き見れば、悪魔が道路の中央を占拠しているのが見える。死臭の漂うそこでは数体の悪魔が死体に群がっている姿が見える。

そうやって悪魔の存在を視界に収めれば、アプリが即座に片眼鏡に目視する悪魔の情報を投影する。それで見えてくるのは相手の耐性、情報及び概念密度、そして数値化された能力。まるでゲームの様だが、それは違う。低級の悪魔にほとんど理性というものは存在せず、人を見つけたら食うか犯し、交渉しようとするれば大体襲い掛かってくる。見つけたらまず殺せ。

じやなきや自分が殺される。

心臓が掴まれる様な痛みに唾を飲み込んで堪えながら、無銘の刀を抜いた。ゾンビ、ゾンビドッグは射撃攻撃を完全に無効化する耐性を保有している。そしてガキは更に最悪で、反射までしてくる。民間で戦える人間が即座に死んでいった最大の理由だ。

警察が応戦しようと銃を撃って、反射して死ぬ。

その事情を知らぬ人が死体から銃を奪ってガキを撃とうとして反

射死する。

以下、地獄のループ。

とはいえ、ゾンビもゾンビドッグも斬撃が非常に良く通る他、ガキは弱点が非常に多い。耐性にさえ気を付け、手段を択ばずに戦えば……難しくはない。この程度だったらマツヤもチエフエイもいらねえな、とMagの節約を考えて判断し、アンへと視線を向ける。吐き気がするほどに悔しいが、身体能力に関しては人修羅であるアンが、此方を超越している。故に、頼った方が早いのだ。

「アン、頼む」

「ん」

言葉に頷きを返したアンが物陰から跳躍して近くの民家の上へと上がった。レベルが8や9の領域へと入れば、助走を付けない跳躍でも軽く10メートルぐらいは飛べる。それを自分もやろうとすれば出来てしまうのだから、つくづく世界は壊れてしまったのだな、と認識せざるを得なかった。だがそれで立ち止まっている暇はない。

アンが屋根の上から、悪魔達の反対側へと跳躍して着地しつつ、ガキを踏み潰す様に着地した。それに合わせガキが潰れて、あっさりとMagの霧となった。その瞬間、ゾンビとゾンビドッグの意識が反対側のアンへと向けられた。

そうやって注意が向こうへと向いたのを利用し、足の速いゾンビドッグへと後ろから飛び込んで切りかかった。

無銘の刀がゾンビドッグへと突き刺さる感触はリアルだ。肉にズブリ、と沈み込みながら肉を、内臓を、そして骨を強引に断つ感触が刃と柄を通して手元へと伝わり、同時に言いもしれない吐き気を生み出す。何より、臭い。体が腐っている。死臭で満ちている。それでも、手の動きは緩めない。この崩壊された世界で、唯一のルールは、絶対躊躇するな。

これに尽きるからだ。

故に刀を振り下ろし、そのままゾンビドッグを両断する。そのころにはアンが一気に接近し、ゾンビを蹴りの一撃で粉碎し、ミンチにする。そうやって死んだ悪魔は死ぬ前であれば血液の一つでも流すが、

完全に死亡した後は流した血液でさえMagとなって消える。それを取り込む事で悪魔、そして生物は強くなる。

「……………」

悪魔を殲滅したところで道路に貪られたばかりの死体が見える。何度見ても慣れる事のない人間の無残な死体姿に、視線を反らしたくても……できない。

「アン、頼む」

「解った」

そうやって頼みながら数歩、死体から離ればアンが口から火炎を吐き出した。女の口から炎が吐き出されるという光景にも見慣れたなあ、と思いつつながら軽く両手を合わせて供養し、死体が燃え尽きたのを見計らってから再び歩き出す。

市内には無数の悪魔が存在する。

その大半が10日前に発生した世界の崩壊によって生まれて来た存在だ。いや、正確に言えばそこに既に存在していたが、表に出る事はなかった存在。世界の崩壊に伴い、表と裏も存在しない状況となつてしまったが故に、こうやって無秩序に出てくるようになった。

その大半はレベルが15に達するテンプルナイトやガイア僧によつて殲滅されてはいるもの、悪魔とは概念存在。殲滅しても時間が経過すればMagを経て再び蘇る。

人類が存在し続ける限りは何度も、何度でも。

その為、数日前程ではなくとも、未だにナカノ市内には悪魔の姿が見える。だがルートを選んで移動さえすれば、そのエンカウントも減らせる。何よりも《エネミーソナー》と《ハニー・ビー》という2つのアプリを使えば、多少のMagは食うが、絶対にぶつかるという状況でもない限りは戦闘を回避できる。

とはいえ、悪魔はマツカと呼ばれる特殊な通貨を死亡時に落とす。これは現在貨幣が発行されなくなった崩壊世界における一番価値のある通貨だと言っても良い。そしてその入手のためには悪魔を狩る必要もあり、Magを獲得する為に悪魔を狩る必要もある。

戦いを避けてばかりであれば、最終的に詰むのは自分自身だ。

そう考えると逃げ続けるのも問題だ。

悩み事は尽きない。

そんな風に頭を悩ませながら歩けば、やがてメシア教会のある場所から街の反対側にガイア寺院がある。法と秩序を重んじるのがメシアであれば、自由と権利を重んじるのがガイアだ。力ある者を尊重し、そして同時に生きる事と死ぬ事の自由を重んじる。

世が世であれば反社会派であるし、実際、世界崩壊前はメシアとガイアは睨み合って殺し合っていたらしい。

だが今はそんな事実はない。

ぶつちやけ、手を取り合って生きていかないとこの狭い世界、あつさりと人類が全滅するからだ。怪しい計画？ 主の降臨？ 大悪魔の召喚？

無理に決まってるんだろ！ ……と、笑いながら言ったのはステイブンだった。

現状、何をするにしても世界と言う存在、リソースそのものが情報と共に欠落しているのだ。生きる事以外の全てが出来ない。そう表現するのが最も正しい状態なのだから、ガイアとメシアもお互いを無視しつつ、協調するしかない。

滅びの前には主義も主張もクソもなかった。

ガイア寺院へと続く百段石段を登って行く——最初来た頃はこれだけでせえせえ息を切らしていたし、ナカノを端から端まで歩くだけでも疲れていたものだが、レベルが上がれば体の調子もだいぶ変わってくる。この程度で息を切らす事はなくなつたな、と思いつつながら石段を頂上まで登り切れば、山門とその前に立つ僧兵の姿が見える。そして山門の向こう側から嬌声が聞こえてくる。

「む、これは如月殿ではないか。成程、その姿、いよいよ我らガイアの理に」

「ねえっすから」

「そうかあー……如月殿が仲間になってくれたら助かるのだがなあ」

「素直に俺じゃなくて人修羅とステイブンの謎技術が目当てだと言えよ」

「はっはっはっはっはっは——！」

笑って誤魔化そうとしているが、誤魔化しきれていない。まったく誤魔化せていないぞこの畜生め。崩壊世界だからこそ強かだなあ、と思いつながらメシア教会でもあったように、物資と情報の交換を持ちかける。そしてそれが快諾される。この人達、メシア連中程規律を重んじていないので、趣好品の方が馬鹿の様に人気があるんだよな、と思いつながら煙草や酒を取り出す。

「で、調子はどうつすかね」

「ん……そうだな、此方でも自発的にM a gの生産等を行っているが、余り結果は芳しくないな。メシアの方もそうだっただろう？」

ええ、まあ、と頷く。

M a gは感情や信仰から生み出される。その為、サバトを開催したりする事でM a gを高めて生み出す、という事は可能らしい。その為、メシア側では信仰心を高め、ガイア側では乱交大会を日夜開催している。手を出そうとは思えないが、セックスはM a gの供給や強化、そしてM a gそのものを生み出す為には有効な手段らしいが、「メシア側でも信仰心からまったくM a gが生まれなくて嘆いてましたっすな」

「だろうな。此方も予想外にM a gが生まれず困惑している。だがそれだけじゃない」

その言葉に首を傾げれば、僧兵から言葉が返ってくる。

「女が一人も孕めなくなっている」

「それは……」

「うむ。特殊受胎術式を利用した妊娠を行おうとしても、孕むという事自体が出来なくなっている。それを見て拙僧は感じたよ——正しく、我らの世界は滅んでいるのだ、と」

その言葉に、何も言い返せない。擦れたようで、全く、まだ、心は一般人のまま、覚悟は何も出来上がっていない。なのにこの状況を打破できるのは唯一、俺のみである、とステイブロンも支配人も言っていた。だからこそ自嘲するようなそんな僧兵の言葉が胸に突き刺さった。

「我々が死ねば人類も終焉を迎えるとなるとガイアもメシアもないな……と、そうだったな、実は仲間がショットガンを見つけた事に成功した。我々は異能者が多い故、必要とはしないが、貴殿は何やらナカノを探っている様子……ガキやゾンビ以外にも出会う悪魔はあるやもしれぬ。とすれば必要であろう?」

「あ、どうも、ありがとうございます」

◆

支配人は言った。

「お前には才能がある」

ステイブンは言った。

「扉を見つけれ」

人修羅はその為の力であり、そして道具であり、唯一生身で同じ旅路を歩める仲魔である、と告げてくれた。なぜならこれから求められる旅は、世界崩壊から世界を再生する為の旅路は、数多くの冒険よりも、更に奇妙な冒険となる。

「君には界を超える才能がある」

「お前が扉を見つけて潜るのだ」

「その先で世界の紡ぐ物語に関わるのだ」

「崩壊した世界でその才能を持ったのはお前だけなのだ」

「物語に関われ。そしてそれを通して世界の情報を取得するのだ」

「お前が持ち帰る情報が世界を修復する」

お前が世界を再生するのだ。

それが悪魔との契約だった。

10日前に——俺は死にかけて。世界崩壊の中で、悪魔に襲われ、死にかけて。だがそこを助けられ、生き残った。その対価は契約で会った、支配人との。全ての助けを得る代わりに世界を崩壊から再生するという契約。

別の世界へと渡り、その世界の情報を持ち帰る事で、欠損した情報を埋めて世界を少しずつ再生して広げるという契約。

世界を生身で渡れるという稀有な能力を持った最後の人類、最後の悪魔召喚士として。

これは世界を救う物語ではない。その役割はヒーローが行う。これはそのヒーローが蘇り、世界を救うための土台を生み出し、再生する為の物語。既に崩壊し、終焉を迎えた世界。そのまま放置すれば人類も悪魔も物質も全てが消え去る一つの世界。そこに残された僅かな人間と悪魔の悪あがき。

崩壊した世界をズルをして再生する物語。

俺と人修羅が駆け抜ける、世界再生の物語。

女神転生Genesis

## 崩壊した世界 II

世界の果て、と言う言葉を知っているだろうか。

無論、多くの物語や神話に出てくる言葉であり、世界一周が嵐の航海者によつて為された時に、この星は丸いのだと証明されてしまい、世界の果てなんて存在しない事が証明された。或いは宇宙に終わりがあるのかもしれないが、その先に人類が到達する日はない。それは物理的に不可能な事なのだ。故に世界の果てなんて言葉は戯言だった。

今、この瞬間までは。

この崩壊世界には果てが存在する。つまりはナカノと隣町の境目だ。ここが今存在する世界の果てになる。ここまで来れば見えるのだ、

その先に何も存在しないのが。

虚無。それを言葉で表現するのは難しい。この陸地の果てへと到達すると、その先にあるのは極彩色の様に見えて無彩色でありながら黒く塗り潰された白。本当に、そうとしか表現のしようがない色がその先には広がっており、その先には未定義空間とステイプが呼んでいる空間が広がっている。言葉として説明するにはそこまで複雑なものである。だが同時にそれが最も相応しい表現方法である。

この先は情報が欠落している。構成する情報が存在しない。即ち、なんにでもなれるが何でもない状態である。即ち未定義の状態。情報を与えれば本来の形を取り戻すだろうが、今はまだそうではない。故に未定義空間。この未定義空間は、問答無用で物質等を解体し、侵食し、未定義状態にする。情報が足りないが故に、情報を取り込もうとして未定義の領域を増やしているのだ。故にナカノの端で昨日つけたマークを確認すれば、昨日よりもナカノに対する未定義空間の侵食が1cmだけ近づいているのが見える。

「やっぱり、また浸食されてるか……」

確認しつつ未定義空間の中に手をつ突っ込んだ。運が良ければ何か漂着してたり、拾えたりするのだが、流石にそう上手く行かなかった。



成果はなく、手を未定義空間から引き抜く。無論、無事だ。普通の人間——他のデビルサマナーであつても無事に済まないらしいが、

これが俺の才能らしい。

即ち未定義空間を生身で耐えられる事。異世界、或いは平行世界へと干渉する為にはある種の資質や才能が必要であり、未定義の領域に触れながら情報分解されないのがその才能の証でもあるらしい。そして現在、これが出来る人類は俺一人で、それに生身について来れるのは人修羅であるアンのみらしい。俺が保有するという形であれば道具や悪魔は持ち込める為、結局のところ、俺が重要になってくる。

アンも、サマナーがいないと力を発揮し切れない制約を抱いているらしい為、やはり俺が必要になるとのこと。気が極限にまで重い。俺みたいなやつが世界の未来を……なんて考えると眩暈がしてくる。

「だけど世界が未定義に飲み込まれる前に、食料が尽きる方が先だな」

「駄目?」

「駄目。残されたりリソースはそんなに多くないからな。ナカノにいる人間自体は大きく減つただろうけど、それでも食えるもんは略奪された後だろうしな……やっぱり、浸食よりも先に飢えるよ。それで終わる」

怖いし、そんな風に死にたくはない。そうなると自分が動くしかないのだ。それがどうしようもなく、恐ろしい。だけどやらなきゃいけない。俺がやらなきゃ誰も出来ない。俺だけがこの状況を変えられる。俺だけがこの先に未来を見出せる。そう考えると心臓が再び締め付けられる。狭心症が再発する。片手で胸を抑えると、アンが軽く抱きしめてくれる。

「大、丈夫……サマナー……私が、いる……から」

「ああ、本当に、本当に情けない男でごめん、アン……本当にごめんな……」

「いい……大変……解る」

これに付き合うアンも大変だという事を忘れちゃならない。アンもまた、この責任を背負っているのだ、俺と一緒に戦う上では。なのに堂々としている彼女と比べ、自分と言う男のなんてちつぽけな事

だ。本当に、消えちやいたいくらいに小さい男だと思う、俺は。そう思いながらも、足を止められない。

探さなくてはならない。手遅れになる前に。扉を。  
別の世界へと通じる扉を。

今、未定義となつて世界と世界の境界が緩くなっているこの世界であれば、扉という形で世界へと繋がる道が出来ていると言われている。それを見つけれられるのは、未定義空間を進める者だけ。或いは悪魔。故に俺が自分の足で探して、見つけ出さなければならぬ。この世界を救うための扉を。

「コール、マツヤ、チエフエイ」

『ああ、探索だね？ 僕の光輝で君の道を照らそう！ 少しでも、君の心を守る為にも！』

「魚の癖して発言が格好良すぎると妾思うんだコーン」

お、キャラ付けかなこいつ？ マツヤに対抗し始めたなチエフエイめ。そう思いながら悪魔を増やし、アンにマツヤカリバーという鈍器を与えた状態でナカノを探索する事にする。公園方面や駅の中は既に探索してある。そうなると探索すべき場所は絞られてくる。

「……ナカノサンモールブロードウェイだな」

「む？ サマナーよ、汝はそこは狭く、その上でソナー反応が多いので近づけない場所だと言つてはおらんかったかコーン」

『だけど逆に言えばそれだけ悪魔が集まるという事は引き付けるものがあるという事だね、サマナー！ それはそれとしてチエフエイ君！』

その語尾はサマナーにトウモロコシが食べたいというアピールかな!?!』

「こやつ……!」

チエフエイに強奪された聖剣マツヤカリバーが今、道路に叩きつけられてがりがり体力を削られ始めている。止めてくれ、そいつは対悪魔に対する万能兵器なんだから、リソースは残しておいてくれ。そう思いながらも、この愉快的仲魔二匹は、出て来るだけで空気が大分温まる。空気を盛り上げ、陰鬱な空気を塗り替えてくれる、と言う意味では非常に頼りになっている。

ぶつちやけ、アンがいてもこいつらなしでは難しいだろう、明るい空気は。

元々は高位悪魔であったこの二体は、情報を大量にパージさせて超劣化状態にする事で、大幅に弱体化して生き延びる事に成功した悪魔である。そして運よく、劣化した状態の情報が世界に残されていた存在でもある。この世界再生のために協力し、一言で契約してくれた仲魔でもある。

ぶつちやけ、悪魔側からしてもかなり恐ろしい状況ではあるらしいのは伝わっている。

『ブラフマーストラは抜かないのかい?』

「スタマ先輩を神話兵器扱いするのは止める。……ほら、先輩は一発ぶちかますと周りの被害とか考えないから……」

「トレイン」

なんでアンちゃんはネットゲ用語なんて知ってるのかな? 人間の頃の君って実はゲーマー? なんてことを思いながら最後の仲魔を思い出す。片手で握れるサイズの悪魔、地霊スタマ。もつぱら、ステイブン等を含めた仲魔の間での奴の呼称は色々と変わってくる。

スタマ先輩。ICBMの悪魔。ケラウノス。ブラフマーストラ。スタマのやべーやつ。核兵器。全画面ボム。花火師。ファイナルウエポン。

大体これだけで伝わってくるだろう、最後の仲魔のヤバさが。行動の全てが自爆へと繋がり、それで爆発する事しか考えていない悪魔。それをDDSから召喚するというのはつまり、地形を消し飛ばす覚悟があるという事だ。支配人、消滅前の渾身の最終傑作であった。

時々、支配人のキャラが解らなくなる。

まあ、その支配人も未定義に飲まれて消えてしまったのだが。

「えーと、《ハニー・ビー》起動して《エネミーソナー》で安全なルートを割り出して……裏手から行く方がまだ安全っぽいな。とりあえず、後に回せば回すほど手詰まりになるのはこっちなんだ。何時崩壊が加速するか解ったもんじゃないしな。今のメンバーなら奇襲でも喰らわなきゃ大きく崩れないだろうしな」

《アナライズ》して確認するレベルは人修羅・アンが9、マツヤが7、チエフエイが7、スダマ先輩が6、そして自分が6になる。ダントツでアンがレベルでは上であり、弱点手段としての火炎属性を保有している。チエフエイも耐性が優秀なので、肉壁として使うと結構耐えてくれるし、自分の記憶が確かならブロードウェイがそもそも、大人数が一斉に襲って来れる様な広さではない。

このレベルと面子であれば探索は無謀ではない筈だ、と認識する。そもそも情報欠落で出現レベルは8, 9ラインで限界だ。それぐらいだったらもしも、本当にやばかった場合、

ナカノのオタク文化を犠牲にスダマ先輩を解放するだけだ。おそらく跡形もなくブロードウェイが消し飛んでしまうが、命には代えられない。なので準備は万全……とはいいたいが、ここらで乗り込んでおかないとやはり、何時まで経っても乗り込めない気がする。そうと決まれば早く、

この決心が揺らぐ前に進む。

「なあに、妾の経験値にしてくれようぞ。そして再び九尾に！ 九尾に！」

特にチエフエイはレベルの下がっている状態が不本意らしく、結構戦う事には積極的でもある。マツヤ、そしてチエフエイを同時に出した状態はそれなりにMagを消耗するが、それでもこの二匹を出している間は必要以上にゾンビの類を避ける必要がないのが強い。まずそもそもチエフエイ自身が元高位悪魔だっただけに能力が同レベルの悪魔と比べて高くなっている。見た目は幼女の癖に、爪だけでゾンビを真つ二つに出来る。

だがそれ以上に、

『行くよ、人修羅！ 僕らのコンビネーションを見せよう！』  
「ん」

そう言うアンはマツヤカリバーを構え、それを全力でスイングし、

『ハマー！』

マツヤが魔法を発動させた。ハマ、つまりは破魔属性の魔法。その

名の通り、ダーク系やアンデッド系に恐ろしい効果を発揮できる魔法である。本来であれば範囲が狭い魔法ではあるが、人修羅の謎のスイング打法によって、マツヤボデイから放たれるハマの光が全体へと降り注ぎ、マツヤカリバーによる破魔の光がゾンビたちを消し飛ばすのだ。これで消耗する魔力は破魔一回分なのだから、便利だ。

『流石人修羅、ナイススイング！ これなら甲子園のホームラン王すら狙えるとも！』

「グッ」

マツヤとアンのやり取りを見ていると、アレが本当に悪魔なのかどうか、疑わしくなってくる。

「いや、アレが特殊だからコーン」

「いい加減その語尾似合っていないから外せ」

「えっ」

軽くショックを受けたようなチエフエイの姿を引きずりながらナカノの街を駆け抜けて行く。単純に街中を歩くだけであればこの数日間で既に慣れているし、レベルの上がっている恩恵で躓く事もない。

そのまま、ブロードウェイの中のアプリで確認しつつ、1階のゲームセンター部分から中に侵入する。

かつては煌びやかな光と音によって出迎えたゲームセンターも、今では稼働が停止し、入り口だったガラス扉は完全に砕け散っている。その代わりに死臭と、そして溜め込まれたMagの気配がする。何時もとは違う悪魔の気配に、自然とガイア寺院で調達したショットガンを両手で握り、構えていた。

「……やっぱ、外とは気配が違うよな」

『サマナー、気を付けるんだ……ここは死霊達とはまた違う種類の悪魔のテリトリーみたいだ！』

マツヤの警告を耳にしつつ、ゲームセンターに踏み込み、周囲を見渡し、

アプリから警報が入る。

Surprise Attack!

百太郎 Warns You!

「奇襲だツ！」

言葉を口にするのと同時に、ゲームセンターの躯体の影から飛び出してくる姿が見える。反応よりも早く照準を合わせ、引き金を引こうとするのを止め、

「チエフエイ！」

「妾の扱い雑じゃなからうか!？」

チエフエイを呼び寄せて肉壁として、飛び出してきた姿を見た。チエフエイの姿が幼女である事を含めて中々に刺激的な光景だが、両手を交差させてガードに入ったチエフエイの腕は、長く伸びた爪を止めていた。

「インプじゃ、なっ！」

「ケケケケケ、人間ダ、人間ダ」

「家畜ガ増エタゾ」

「男ハ殺シテ女ハ上ノミタイニ飼ウゾ！」

『解りやすいセリフだね!』

「煩いぞイケメン魚。そう言葉にする前に《アナライズ》と《ギボ・アイズ》が即座に解析情報を取得し、表示させる。

「斬・打・雷耐性! 射・衝・疾・重・破魔弱点!」

「マツヤビーム」

「ギョアアアアアアア」

「あ、妾知ってるこれ。即落ち2コマであるな」

「その知識はどこから来てるんだお前ら」

狭いゲームセンター内に回避する場所なんてなく、必殺マツヤカリバーが光って放たれる。ゲームセンターの通路内に順番待ちしていたインプ共がマツヤビームで蒸発して行く中、力で勝利したチエフエイがインプを掴んでは床へと叩きつけ、そうやって動きの停止したインプの頭をショットガンでぶち抜いて殺害し、襲い掛かって来たインプを虐殺した。

残留マグを吸収し、そしてそこから魔石を取得し、ストレージへと送りながらうーん、と軽く唸った。

「インプの巣か……」

シヨットガンの弾丸を装填しつつ、チエフエイに周囲の警戒を任せ、軽く考える。結構派手に戦ったつもりだったが、《エネミーソナー》には近づいてくる悪魔の反応がない。いや、隠れている可能性も存在する。だがそれを加味しても、破魔が通る相手ならマツヤカリバーアタックでどうにかなる。だけど軽く疑問に思うが、それに、絶対にハマじやねえだろ。

「……よし、探索続行だ」

「お、今日のサマナーはイケイケじゃな」

「イケイケ」

『聞こえたかい、貪欲界の主。アレが本物だ』

「前々から思っていたんじやが、お前もしかして妾を目の敵にしている？」

そんな事ないよ、とかいうマツヤの怪しい発言を耳にしつつ、溜息をつく。だが今の戦闘で少しだけ判明したことがある。ここはインプ共の拠点になっている。そしてそれに囚われている人がいる。そしてインプのレベルは9だった。つまり、数字だけであれば、今のアインに匹敵するレベルを保有している。

……とはいえ、根本的なステータスの強さはまるで違うのだが。

ここら辺、数値化して見れるのはステイブンのおかげだ。感謝しなくてはならないだろう。このアプリのおかげで即座に数値を確認し、相手の得意、不得意を理解して行動することが出来る。まあ、レベル9だったら目くそ鼻くそレベルなのだが。それはそれとして、インプは単体ではそこまで恐ろしくはない。

ただ、保有魔法に睡眠魔法ドルミナーがあるのが恐ろしすぎる。

「そこは妾に任せると良いぞ、サマナー。なんといつたって妾は精神攻撃に対しては耐性を保有しておるからな。他の者たちが睡眠に落ちても妾が即座に叩き起こしてやろう」

「睡眠対策の道具が欲しい所だな……いや、駄目だ。この勢いを挫くべきじゃないな。進もう。まずは1階の探索だ」

この狭さならシヨットガンで纏めて薙ぎ払えるから、俺でも戦え

る、と呟きながらゲームセンター内を探索する様に歩き出す。ここにはもう、インプの気配はない——潜んでいなければ。一目で解ると言われる扉を探しながらも、心は少しだけ、怯えていた。

アンは、軽蔑しないのだろうか。

2階へ助けに行こうと言わなかった俺を。

自分でも少しだけ、その選択肢を迷う事無く選べた自分に驚き、失望している。でも、確かに合理的なのだ。上にはたぶん女がいる。インプたちの慰み者として。そしてそれを放置している間は、インプがそれに群がっている。となると此方はその分、被害に悩まされずに探索を行う事が出来るし、第一今助けに行つたところでどうせ手遅れなのだ。助かる訳がない。

だから……見捨てた方が良い。

そう考え、迷うことなく判断を下した自分が——どうしようもなく、気持ち悪い。けど同時に、アンに見捨てられるのがこれ以上なく心細く、彼女がどう思っているのか、何を考えているのかが全く知りたくなかった。

ただ、彼女の心を知るのが恐ろしかった。

だから頭から辛い事を追い出し、探索する為に必要な事だけで脳味噌を支配した。

もつと、割り切れる様にならなくてはならない。

「……まだ学生だった頃はちよくちよくこつちにも遊びに来てたんだがなあ」

あの頃のナカノの面影しか残っていない。荒れ果てたゲームセンターはまさに世紀末と言う言葉に相応しい。ただやはり日にちがそこまで経過していないこともあって、埃の類は少ない。だがその代わりに残留Magが道具へと変化している所もあった。ゲームの筐体の横を見てみれば、魔石なんかが転がっているのが見える他、

「これは……ムドストーン、か。えーと……小範囲に呪殺属性、と。あー……成程、ゾンビやインプとかがいるからこんなもんが出来るのか……」

「まあ、怨念見る限りここで200人は死んでるようじゃしの」



何気なくチエフエイが放った言葉に、握っていたムドストーンを落としそうになる。200人。それだけの怨念を詰め込んで、この道具がMagから構築された。その禍々しく黒く濁った石の輝きを見た。「とはいえサマナーよ、ムドは呪殺属性では一番弱い魔法じゃからな？」

「200人死んで、これ1個なのか……」

「いや、そういう訳ではない。純粹に恐怖と怨念が弱かっただけじゃろう。魔石を使えば怨念と瘴気を吸って後10個ぐらい作れるじやろうが……まあ、呪殺弱点のLightやLaw系統悪魔は現在、出現しておらんようじゃしの……」

『まあ、ほとんどメシア教会が独占している状態だよねっ！』

「輝くな、輝くな」

マツヤフラツシユ、と叫ぶとチエフエイが目を焼かれて転がる。ムスカ大佐じゃないんだから遊ぶのを止めろよ……とは思っても、なんだかんだ面白いし、警戒自体はしつかりやっているので注意が出来る。そういうえば元高位悪魔なのだから、そこらへんはお手の物なのかもしれないなあ、と思いつながらゲームセンターを探索する。

結局、見つけたのは魔石とムドストーン数個だけだった。

当然ながらデビルサマナーの道具は裏社会の物であり、通常の表のルートで販売されるものではない。その為、表の世界でそれを見つかる様な事はほぼない。今、こうやって魔石やムドストーンを発見できたのは、環境の変化、そしてMagが思念の影響を受けて変質しているという所にある。

とはいえ、違和感はある。

孕めない、Magが生み出されない。そんな状況で何故、魔石やムドストーンの様な道具がアプリの力もなしに生み出されているのだろうか？ 生殖概念が死んでいるこの崩壊世界では悪魔から道具情報形成はまずないと思っていたのだが。

「……まあ、探索を進めれば解るか」

『うん！ 解らない事を悩んでいてもしょうがないからね！ 進める時は前へと進むこともまた勇気さ！』

「相変わらずクツソ忌々しいほどに輝いておるの、こやつ」

『マツヤフラツシユ』

「ああああああ——!!」

こいつらまた身内で殺し合ってる……。溜息を吐くと肩にぽん、と  
旁う様にアンが手を置いてくれる。味方は君だけだよ、と呟きながら  
ショットガンを抱え直し、それを前方へと向けながら探索を再開す  
る。ナカノブロードウェイにはオタクカルチャー向けの店舗だけで  
はなく、不二家とかの店舗もあつたはずだ。

上手く行けば貴重で、そして価値の高い甘味が手に入る。お菓子の  
類はメシアやガイアも喜んで受け取ってくれるし、是非とも入手して  
おきたい。サンモールの方は比較的に悪魔が少なくて略奪済みであ  
る為、ブロードウェイで調達しておきたいものの一つだった。そう思  
いながら《エネミーソナー》と《百太郎》による反応を注意しつつ、1  
階の探索を進める。

◆

結局、1階のインプは殲滅するハメになった。

別に、ヘマをしたという訳でもないのだが、探索する上でこそこそ  
と隠れながら探すというのが単純に重労働だった、というだけの話  
だった。隠れているのなら話は別だが、相手を特定する為の道具は既  
に存在しているのだ。だったらこっちから背後を取って奇襲すれば、  
それで一方的にインプぐらいであれば狩れる。問題はマツヤの魔力  
の減りぐらいたろうが、それも相手を倒してアイテムゲットする魔石  
があれば何とか収支を±0で抑えることが出来る。

そういう事で探索、奇襲、回復。受けたダメージはアンのディアで  
回復しつつ1階の探索を終えた。どうやら早期からインプたちの巢  
になっていたらしく、略奪の気配は薄かった。ガイアかメシアが此方  
に乗り込んで既に探索したのかもしれない、と思っていたが、そんな  
気配もなく、純粹に手つかずの状態で多くの物が残されていた。なぜ  
だろうか、と思う反面、ラッキーだと思わなくもなかった。

何より保存の効く甘味の類を入手できるのが良かった。ケーキやプリン類は全滅だったが、これが飴玉とかになると長期保存可能なので、ちゃんとパッケージのまま残っていた。そういう意味では収穫はあった。こういう趣好品の類はある意味、戦闘用の道具よりも価値があつたりする。

どれだけ強く戦えても、心が死んでいては意味がない。

心に潤いがなければ人は生きていけないのだ。そういう意味で、こういう甘い物だったりする物の調達は重要だった。ただそういう成果が出た反面、1階での探索は別方面では失敗だった。

扉に関する手掛かりがなかった。

インプたちのレベルは9で、そして外と比べると明らかに多すぎる、と言う数のインプたちがここには溢れている。外の崩壊世界と比べれば明らかに異常な数、そして高いレベルを保っている。単純に人間牧場をやっているだけでは答えにならない。そういう、高いレベルを維持するだけのリソースがこの世界にはない筈なのだから。

……つまり、それを可能にさせる概念が、或いは何かがある筈なのだ。

そしてそれが1階にない以上、

2階に行くしかない。

「……仕方がない、上に行くしかないんだな」

電気の供給はとつくの前に停止している。故に動かなくなったエスカレーターの前で足を止めながら、見上げた。一番インプの気配が遠い場所を選んで上がれる場所だ。だが上階へと上がるという事は、先ほど見捨てると判断した人間の気配を探知できる範囲に入る、と言う事だ。

「……行こうか」

いや、悩む事じゃない。悩むような事じゃない。世界の為の方が遥かに重いから、くだらない主義主張は今捨て去って生きなきゃならないのだ。だから迷うことなく、軋む心臓を無視して判断をして、エスカレーターに乗った。とはいえ、電源は切れて久しい。動くわけもなく、歩いて登って行く。

そうやって上がって行くエスカレーター、上へと上がって行けば上がって行くほど強く感じ取れるのは性臭だった。明らかに異臭と呼べるレベルで精液の匂いが2階には詰まっていた。その事実には顔を顰める。片手で鼻を抑えていると、チエフエイがはあ、と息を吐く。

「どうやらインプ共め、中々にやんちゃをしておるようじやの」

『サマナー、ここはMagの気配も濃いから気を付けるんだ』

「ああ……いや、それはそうだが……何故？」

別に精液臭い事は辛いけどいい。だが何故こんなにもMagの気配が濃いのだろうか？　これがインプたちのレベルが高い事の原因であるのはまず間違いがない。だがおかしい……今、この崩壊世界にこれだけMagを集められるだけの力はない筈だ。セックスだけでMagを集められるのなら、ガイア寺院は今頃Magパラダイスになっているだろう。だがそうってはいない。

「アン、大丈夫か？」

「少し……臭い……」

僅かにだがアンが顔を顰めるのを見て、この子もそんな表情が出来たんだな、と笑ってしまえばそうになった。だがそれを堪えて2階へと上がった。それで《ハニー・ビー》によるマップ表示をすると、そこに見慣れない青い点が表示されるのが見えた。

直後、ステイブンから通信が入った。

『良くやった、サマナー君。その青い点は君の感覚視野を借りて探知した、扉の場所だ。そこへと向かってくれ。そして悪魔がいるのであれば確保するんだ』

「了解……旧ブロードウェイのマップと合わせると反応は管理事務所か。って事は丁度反対側だな」

「臭いの元もそっちからじゃな」

『Magの密度もそっちが大本かな！』

「うわあ……」

いや、まあ、そうなるよね？　そんな事を考えながら確実に発生する戦闘の気配に、ショットガンから武器をベレッタへと変更させ、弾丸の中身を通常弾から神経弾へと切り替える。無銘の刀を抜刀状態

にし、左手で握り、サムライ&ガンマンスタイルに切り替える。

切り替えた所で強くなる訳じゃないのだが。

ゲームじゃあるまいし。

でもステイブン、アナライズ結果をレベルやステータスで表記するしあの人、絶対に重度の廃ゲーマーだよな、とは思わなくもない。まあ、元ゲーマーとしては実際に解りやすい表記なので非常に助かるのだが。それはともかく、仲魔達にも今のうちに魔石を使って魔力を回復して貰い、

「マツヤ、場合によってはイケメンモードになって貰うから」

『まあ、感じる気配からするとそこまで心配は必要ないと思うけどね、僕の方は準備万端さ！ さあ、世界を取り戻す一步を踏み出そう……マツヤフラッシュ！』

「ぐあああああ——！！」

またチエフェイが焼かれてる。回復し直す必要が出てくるからほんと止める。アンからマツヤを奪って壁に五回ぐらい叩きつけてからフラッシュを止めさせ、今度こそ回復などを終わらせてから事務所の方へと向かう。

銃を何時でも打てるようにした状態でゆっくり、ゆっくりと接近して行く中、段々とだが音が聞こえてくる。

最初に聞こえてくるのはパンパン、と肉を打つ音であり、そして同時に女が漏らす嬌声だが——声が枯れている。もはや快樂なんて通り越して、痛みも通り越し、タダの穴として扱われている、半死人状態の肉穴とでも表現すべき声だった。そしてそれは見える範囲にまで近づけば見えてくる。

10数を超えるインプ達、《アナライズ》によって表示されるそれらのレベルは10や11、と他のよりもやや高くなっており、数匹が一人の女に群がる様に同時に犯しており、女は完全に虚ろな目を白く染め上げながら時折あ、あ、あ、と声を零すだけだった。もはやそこに一切の理性も正気も、人間らしきも見えない。

完全に、心が壊れた道具だった。

「……………」

見たくなかった現実には、歯を食いしばりながら耐えろ、と自分に言い聞かせる。こんな光景、今の崩壊世界では見かけるものだし、これからも増える光景なのだから。こんなことで一々怒っていても駄目だ。

心臓を締め付ける痛みには、頭が冷静になって行く。

「――遠慮せずに殺せ」

女を犯すのに夢中な悪魔の中に、連続で引き金を引きながら命令を下した。弾丸が一番近くのインプに刺さり、そして僅かに逸れた弾丸が犯される肉に当たった。だがそれでも引き金を引くの止めずに、連続で引き金を引き、弾丸をばら撒きながら仲魔を突っ込ませた。

「任せて」

「良い、それで良い」

「ウケケ――」

インプ達が反応するよりも早く奇襲が刺さった。入り口から部屋全体を満たす様にアンのファイアブレスが吐かれ、事務所全体を燃やし尽くしながらチェフエイがザンによるかまいたちを放った。インプたちは燃えながら切り刻まれ、そして床でびたんびたんと跳ねるマツヤがハマをその中へと投げ込んで行く。

沸き上がる悪魔の悲鳴を無視しながら弾丸を炎を突破してこようとす悪魔へと狙って打ち込み、神経弾の効果でスタンさせ、ザンで首を斬り飛ばして炎の中へと放り込んだ。

やがて、炎が消えるのと共に部屋の中を埋め尽くすインプ達の姿が消え去る。

残されたのは燃え尽きた事務所の姿、こびりついたような精液の匂いとMag、

そして黒焦げになった女の死体が幾つかだった。

「はあ、はあ、はあ……はあ……はあ……はあ……」

持ち上げる銃が、恐ろしいほどに重く感じる。震える腕を引き戻そうとするのに、手が動かない。息が苦しく、焦点が定まらない。ゆっくり、ゆっくりと息を吐き出し、銃を下ろす。

大丈夫だ。俺は、やれる。やらなくちゃいけない。やってのける。

大丈夫。きつと何とかなる。世界が再生すれば、きつと他にも出来る奴が増える。そうしたら俺は解放されるはずだ。それまでの我慢だ。だから大丈夫。これぐらい問題ない。そう、死体ぐらい何度も見ている。生きながら食われている人間だって見ている。助けを求めている。クラスメイトを見捨てたりもした。これが初めてじゃないんだ目の前で死を見るのは。落ち着け、他のインプが来る前に落ち着け。大丈夫、まだ、俺はやれる。落ち着いて、落ち着いて——。

「りゅーじ」

唐突に、暖かさを感じた。気が付けばアンに抱き寄せられていた。頭を胸の中に抱かれる様に寄せられ、そして頭を撫でられていた。いきなりの事に何かを言おうとして……だけど、あまりの情けなさに言葉も出なかった。すこしだけ、アンに胸を借りて息を吐き、

「……ごめん」

「ん」

そのまま、少しだけアンの好意に甘える事にした。彼女の胸の中は……凄く、落ち着く。だけど同時に、守られているという感じが死ぬほど情けなかった。強く、もつと強くなりたかった。カオスもニユーラルもロウなんか気にしなくてもいいぐらい、自分の意思を貫いてブレない強さが欲しかった。

それで落ち着いて体を剥がした所で再び探索再開しようとしたところで、

チェフエイと床の上でびたんびたん跳ねるマツヤの姿が見えた。

「見た？」

『見たとも！ 実に美しい愛だったね！』

「アレじゃな。妾知つとるぞ。これ、この後で睦み合うんじゃない。妾そういうのちよー詳しいから知ってる」

『本能だから仕方がないね！』

「ふんっ！」

「ああ!? 魚がインプの精液たっぷりの床を滑って行く——ざまあ……！」

マツヤを部屋に残った精液の中へと蹴り飛ばした後で、ついでに

チエフエイも精液の中へと蹴り飛ばしてやる。ぎゃああ、と叫んでマツヤのハマが乱射されてチエフエイが集中的にダメージを受けている光景を無視し、

今更ながら恥ずかしさが沸き上がってくる為、銃をベルトに戻しながらアンから視線を背けて室内の探索を行おうとするが、

「まあ、アレか」

事務所奥へと視線を向ければ、そこには木製の美しい装飾が施された扉があった。明らかに一つだけ、まるで異質な気配を放っている扉はこの世界よりも存在感がはつきりとしている……ような気がする。刀を仕舞いながらスマートフォンを取り出し、写真を撮ってステイブンのへと送信する。

「とりあえずこれで良いんだよな？」

近づきながら扉に軽く触れる。確かな感触が存在する扉は一見木で出来ている様に見えるが……その実、感・触・は・未・定・義・空・間に手を突っ込んだ時に近い様だった。成程、確かにこれは俺じゃなきや触れられないな。

「やーい、サマナーの童貞やーい」

「スタマ先輩投げつけるぞオメエ」

「ひいっ」

オラ、とつととDDSに戻れこいつ、とマツヤとチエフエイを帰還させた。とりあえず《エネミーソナー》に悪魔の気配はないため、Magの節約の為に戻しておく。何よりも、相手がインプオンリーだったおかげで割と戦闘は楽に終わった。

——手をかけたものから目を反らしつつ。

あまり、深く考えない事にする。ともあれ、

「ステイブンからの返事を待つと——」

「サマナー！」

アンがそう叫ぶと同時に素早く接近し、此方の腕を掴んだ。何事か、と思った瞬間には扉が光を放っていた。その一瞬で事務所の外へとアンが此方を掴んで飛び出したが、着地した足場は一瞬で未定義色に染まっており、場所も完全にナカノブロードウェイではなく、未定



義空間へと変質して、

残されていたのは扉だけだった。

「どうなってるんだ……!」

意味の解らない事態に、振り返りながら扉を見た。

そこには言葉が刻まれていた。

死と塔

もつと意味の解る言葉を刻めよ、と毒づき、行動を映す前に扉は開かれ、

そこから溢れ出す光に飲まれて、全てが塗り潰された。

## 一章 創世までの一歩 死神と塔

「痛い……」

光が消えた頃に気が付けば、顔の下に硬いアスファルトの感触を感じていた。痛え、と呟きながら片手で頭を押さえながら立ち上がる。どうやらどこかの路地裏に放り出されたらしい。狭い空間の中で転がっていた。起き上がって壁に背を預けた所で、焦点が漸く定まってくる。軽く頭を横に振って調子確かめつつ、

「人修羅ちゃん生きてる？」

「んー……」

返事がある。どうやら無事らしい。段々と焦点が定まって来た視界で外を見れば、明るい陽射しと、そして全くMagを感じない世界がそこには広がっていた。やべえ、と思いながら反射的にスマートフォン機能を最低のレベルまで下げる。何が起きているのかは解らないが、それはそれとして、Magは悪魔召喚士にとっては生命線だ。悪魔の召喚、維持、そして一部魔法等のコストに使う上に、スマートフォンバッテリーも今ではMagで代用している。こんなところで浪費する訳にはいかない。

それが終わった所でアンも立ち上がったが、軽く肩に埃がついているので、叩いてそれを掃った。

「ありが……と……サマナー」

「どうも」

アンのお礼を受け取ってから路地の明るい方へ——つまりは道路へと視線を向けた。路地の外には道路があり、そこには人や車が通っているのが見えた。しばし、しばらくの間見ていなかった風景に、異世界へと迷い込んでしまったような気分を味わっていた。そのまま、スーツ姿のサラリーマンや、制服姿の学生が歩き去って行くのを見て、固まっていた脳味噌が動き出す。

軽く頬を抓り、感触を確かめ——これが夢ではないのを確認す

る。

「マジで……別の世界へと渡ったのか……？」

呆然としたまま、足を前へと踏み出し、路地裏から進んで道路脇に出る。そうやって出て来た日の当たる場所で、歩いている人々は何を警戒する訳でもなく、自由に日にあたりながら歩いているのが見える。悪魔に怯える姿はなく、破壊されたビルや家もなく、人間の死体やそこらへんにある筈の Mag の気配もない。ない、ここにはそれがどれも無い。武装したメシアンやガイアーズの姿もない。

この世界は平和だった。

これは、崩壊していない世界だった。

「……」

呆然とその当たり前だった様子を眺める。誰もが気にせず普通に歩いている姿を。そこには悪魔に怯える人の姿はなかった。当たり前の様にそこに存在する日常を楽しんでいる人たちの姿があった。学生たちは同じ方向へと歩いているし……学校でもあるのだろうか？ きつと、明日は何をするか、今日はどんな勉強をするのか、そんな事を考えているのだろうか。

「サマナー……泣いてる」

「えっ？ あっ、わ、悪い」

いつの間にか頬を涙が流れていたらしい。それを手の甲で拭いながら、捨てる。どうやら、この平和な光景が余程ショッキングだったらしい。自分でも知らないうちに、あの平和だった日常が恋しかったのだろう。ああ、いや、でも、当然か、とは思わなくもない。だって辛いし。今すぐ逃げたいし。逃げられたら逃げるし……。そんな気持ちで、目の前の光景を目にして零れてしまったのだろうか。

ああ……なんて、無様なんだろう。

この光景を前にして———したい、と思ってしまうなんて。

「大丈夫？」

「ちよっと情緒不安定なだけだから……それよりもこのまま歩くのはヤバいな」

「……？」

いや、主に自分の話である。素早く路地裏の中へと戻って、無銘の刀とベレッタをアプリを使って収納する。ついでにポンチョの方も収納する。だが問題はそれだけではない。今自分が着ている服装はこの数日間、一回も取り換えていないものだ。だから普通の都会に出ればホームレスと変わりのない汚さになってしまう。流石にこのまま活動に出るのは控えたい。

それに比べ、アンの服装は大体常に綺麗である。服装も悪魔の概念の一部らしく、Magさえあれば修復したり綺麗にすることが出来るらしく、その影響でアンの服装はあの崩壊世界の生活の中でも清潔なままだ。つまり、此方と違って臭くはない。なら仕方がないな、と判断する。

アプリから札束を引き出す。あの崩壊世界ではチリ紙扱いのお金である。略奪すれば好きなほど手に入る物ではあるが正しく貨幣が機能していないので、全く価値のないものだ。ただ何かに使えるかもしれないのでストレージに入れていたものだが、それを引き出してアンの渡し、

「すまん……服をなんか頼む……」

「任された」

札束を受け取ったアンの表情は心なしか、普段よりキリつとしていた気がする。大丈夫かなあ？ と少しだけアンのセンスを不安に思いつながら、路地裏から彼女を送り出す事にした。

見ての通り、人修羅・アンは可愛い。

長く、艶やかな青髪。淫靡さを掻き立てる紋様。白い肌。だがその服装はかなり不思議な構造をしており、スカートと上が一体になった白いワンピーストリボンを装飾したワンピースであり、このスカートはスリットが何本も入っている他、前の方が開けっ放しになっており、その下に穿いているスパッツが丸見えなのだ。その上で殴るよりも蹴りの方が遥かに得意らしく、しばしば打撃属性で戦う場合は、尻のラインが物凄く目立つ。割と下半身の露出が凄く恰好をしている。立っている間はそこまで目立つわけじゃないが、動くときスカートがまるで仕事をしないのだ。

そんなフェティッシュな恰好をしているアンがまともなセンスをしているのだろうか……？

やはり早まったか。そう思わなくもないが、文明社会の人間として、このままの恰好で外に出る事は許せなかった。一応スティーブンのバーは水と電気が無制限で使える為、軽く体を水で拭いたりはしていたのだが、それでも服の臭いはどうにもならない。

染みついた血と死臭が誤魔化せない。

You Got Call From Steven

片眼鏡に直接コールが投影され、スマートフォンを耳に当てる。表示されている通り、スティーブンからの電話だった。

「はい、もしもし此方如月竜二」

『無事だったかサマナー君！ 此方から観測できる範囲から存在が消失したから焦ったが、その落ち着いた感じ……どうやら別の世界への移動には成功したようだね？』

「ええ、なんか扉が勝手に開いて驚いたんですけどね……なんか、到着したばかりですけど、滅茶苦茶平和そうに見えます」

うん、少し、イラつくぐらいには。だけどその暗い感情を胸の中で握り潰す。そんな事を考えている場合でもないんだし。今は、忘れておこう。そんな事よりも大事な事がある。扉を探せ、とは言われているが何をしろ、とは言われていない。ぶっちゃけ、世界を救うにはどうしたらいいのかが解らない。そういう訳で、

「これからどう動けば……？」

『好きにすると良い』

「……ん？」

なんか今、スティーブンの滅茶苦茶投げやりな言葉を此方へと投げて来たような、そんな気がした。その最中にスマートフォンへと通信が入り、確認すればスマートフォンに新しいアプリが追加されている。《ワールド・レコーダー》という名前のアプリだった。それを確認してから、スティーブンの言葉を返す。

「このアプリは……？」

『それを起動すれば、世界滞在中にその世界における濃密な概念情報

をコピーし、作成してくれる。それを持ち帰れば君の最初の任務は完了する。だがそれも少々、時間のかかる作業だ。だが必要な作業の類は全てそのアプリが代用してくれる。だから自由に歩き、そして自由を楽しめばよい。それが君に与えられた特権だ』

「いきなりそう言われても……」

非常に困る、というか世界を救おうという意気込みだったのに、やる事は異世界観光になりつつある。こんな風に梯子外しされると今までの意気込みと言うか、覚悟とか、そういう物が全部茶番に見えてくる。もしかして、俺の意気込みとか全部無駄だったのではないか？

とさえも思えてしまう。が、とステイブンは言葉を付け加える。

『扉に繋がる世界はどれも強烈な概念を保有する世界だ。即ち、我々の世界が滅びたように、何らかの壮大な物語や事件が発生している可能性がある。君はそこに介入できる非常にイレギュラーな存在だ……大悪魔ともなる規模であれば、君の有用性にも気付くだろう』  
「安心していいのかと思った直後脅迫された……」

電話の向こう側からステイブンの笑い声が聞こえてくる。

『ああ、だがそれは当然のリスクだ。言っただろう？ 君は異邦者なのだから。君は世界の異物なのだ。そして世界の一部を掠め取りに来た泥棒でもある。当然、それを理解できる存在には警戒されるさ……まあ、実害がある訳ではないがね』

そう言つてステイブンは言う。

『だから、好きにすると良い。君はリスクを冒してそこにいるし、そこで情報を集積している。その間に何をしようが君の自由だ。異世界で何をしようが、その罪は此方では問われないからね……物語を救うのも、破滅させるのも君の自由さ』

「それは」

どういう意味ですか、と言葉が続く前に通信が切れた。残されたのは《ワールド・レコーダー》のアプリだけであり、その達成率も1%の状態だった。どうやらまだまだ、と言うより1日で終わりそうにはない時間がかかりそうだった。

『サマナー、良いだろうか』

今度はDDSの方からマツヤが通信を繋げて来た。

「なんだよ」

『ステイーブンの言葉は少々解り難いだろうからね……神としての視点を持つ僕が多少解りやすくかみ砕いて説明してみよう！』

「流石魚はDHAあるな」

『それは関係あるのか……？』

『フラッシュュー！』

DDS内部でもお前ら殺し合ってるのか……知りたくもなかった新事実のまえに驚愕しつつ、マツヤの言葉に耳を傾ける。

『良いかな、サマナー。サマナーが向かう世界というのは詰まる所、僕たちの存在する世界と類似する世界でないとならない。じゃないと情報を埋める時に世界がエラーを吐くからだ。だから同じように悪魔が存在し、そして崩壊する可能性を持つ世界にサマナーは移動しているんだ。そしてそこには当然ながらも、僕たち悪魔も存在する』

『そして当然悪魔と人間が同時に存在する世界には数多くの策略が満ちているのじゃよ、サマナー。基本的にちよつかいをかけるのが好きじゃからなあ、悪魔は。妾も欲望を糧にするが故、人間に働きかけるのは基本的な事じゃ』

「……ああ、成程。つまり秘密裏に俺らの世界が崩壊したように、そういう出来事が向かう先の異世界でもありえる、と」

『つまりそういう事だね！　そして必然的に滅びた世界と類似するという事はそういう出来事が発生しうる世界への移動の可能性が高い！　死神と塔というキーワードにはご注意！』

『じゃが同時にここは異世界よ、サマナー。記録が終わり、元の世界へと戻れば何をやったのかを知る者は我ら以外には存在せぬさ。故に人を殺そうが、人を救おうが、それを知る人間は向こう側には誰もおらぬ』

だから、サマナー、とマツヤが言う。

『君には自由がある。人を殺すも、犯すも、救うも、導くも、関わらぬも、その全てが君の自由だ。僕もその駄狐も君の仲魔だ——主義主張はあっても、それを君の判断に持ち込むことはない。君が何を選

ほうとも、それは世界を救う代償だ。何であろうとも僕達はそれを認め許そう』

『ま、面白い方向性にしてくれるのを楽しむにしているがのお』

『マヨネーズとケチャップはやはりマウンテンバイクの従兄……宜しい、閣下は助走が好きだな？ やはりハロウインはたわしパイだな。良いとも！』

『あ、虐殺兵器が起きた、こら、妾に押し付けるな！ 妾にその危険物を押し付けるなああ——！』

最後のオチが無かつたら素直に感心してただけどなあ。スダマが会話に混ざった時点でダメになった。というか今もアプリからチエフエイの悲鳴が聞こえる。スダマ先輩は本当に強いなーもー。そんな気持ちで先ほどのステイブンの話を流す。まあ、好き勝手やれ、と言われても困る。

ああ、でもお金は略奪してきてそこそこあるのだ。こっちで服とか食べ物とか、保存の効きそうなものとか娯楽品を購入して、持ち帰ってそれで楽しむというのも手か、と考える。流石に大悪魔に目を付けられるかもしれないという異世界で暴れる気にはなれない。とりあえずは、

「サマナー」

振り返ればアンが服の入った紙袋を片手に帰還していた。それを見つつ、まあ、此方にいる間が自由時間であるのなら、と言う感じで、崩壊前の一般生活を最大限に楽しむ事にする。

ズズズ、と音を立てながら麺を啜った。久方ぶりに食べるラーメンの味は感動的なものだった。しばらくの間缶詰オンリーの超不衛生な生活なだけに、人の手で料理された食事とはこんなに美味しいものなのか、と思わず正気を失ってしまいそうな味だった。いや、きつと普通よりも美味しい料理なのだろうが、しばらくの間クソみたいな食生活を続けていた為、ストレスと合わせて舌が完全に馬鹿になってい



た。そこに注ぎ込まれるこの美味。麺と絡むスープ……おそらくはトンコツ、それがのどを降りてゆく感触、そして分厚いチャーシューの噛み応え。

もう、言葉に出来ない。ただただ、食べるしかない。

アンと二人で並んで食べるラーメンの丼が空っぽになった所でそれを既に空っぽになっているのに重ね、そして、

「おかわりオナシヤツス」

「……おかわり」

「おまちどうさま」

売りが既に用意されていたラーメンを運んで来ていた。既に四井目となるラーメンだったが、食べても食べても飽きない。と言うかいくらでも食べ続けられる。これが文明的な料理なんだね？ って感動しながら啜る様に喉の、胃の中へと押し込んで行きこの10日間最高の感動を味わっていた。

「ぶっはあー……あー……幸せー……」

「うん」

横で同じようにラーメンを食べるアンも幸せそうに頬を少しだけ、緩めていた。そんな俺らの食べっぷりを周囲の人間が啞然として眺めていた。無論、服装がおかしいからではない。というかアンのは悪くなかった。良く活動すると解っているのでジーンズが数着、そして汚れが目立ちにくい黒や赤のシャツを数枚、そしてその上から着ていて違和感のないチェック柄のシャツを数着、と言う実に悪くない、と言うか無難なセンスだった。おかげでこうやってラーメン屋に入って飯を食うことが出来る。このはがくれて場所、美味しいな、と感心する。

しかし、これで食欲は満たされた。今まで全く満たされていないかつたそれが10日ぶりに満たされる感覚は言葉にし辛かったが、それ以上に超人化してきた肉体に合わせてエネルギーをMagの代わりに摂取した、と言う感じの量でもあった。そういえば食事を通してMagを摂取する事も出来るな、なんて話はどこかで聞いた気もする。まあ、大体は悪魔をぶち殺して獲得したMagなのだが、それがここ

で出来ない場合、飯を大量に食う必要が出てくる。

デブらなきやいいんだが。

『サマナー幸せそうじゃな』

『幸せそうな食べっぷりは正直僕も混ざりたくなるね!』

『その場合は魚介スープベースじゃな』

共食いか。心の中でツツコミを入れつつ最後の井を空っぽにして、並べた。大きく膨らんだお腹をぼんぼん、と叩きながら支払いを済ませて店を出る事にした。今は降り注ぐ太陽の光は心地よく、そして最高の気分にくれてくれた。腹がいっぱい満たされる。たつたこれだけの事で、ここまで幸せになれるのだ、と良い事を思い出させてくれた。まあ、確かに腹が減って、良いもんが喰えない状態だとそりやあ気が滅入るよな! と元氣よく背筋を伸ばした。

「幸せ?」

「幸せ。超幸せ。もう世界とかどうでもいいんじゃないかな……」

『おい』

ステイブンから短文メールが来た。その一言が妙に面白かったので、軽く笑い声を零してしまった。まあ、ステイブン本人もこんなの、冗談だと思っっているだろう。まあ、俺も、自分の故郷を捨てて逃げるなんて器用なことは出来ない……この世界に逃げる事は不可能だろう。立ち向かうしかないのだ、あの地獄の崩壊世界に。俺の一步がそれを救うのだと信じて。

まあ、今はそれを忘れておこう。

「サマナー」

「うん?」

歩き出そうとしたところで、アンが呼び止めて来た。そこで足を止めていたアンは、

「りゅーじ、求める……なら……一緒に、諦め……る」

「……いや、そんなことしないさ。最後まで逃げないよ、俺は」

いや、逃げる根性さえない。そっちのが正しいだろう。どれだけ体が強くなっても、この心までは強くなれない。俺は心が弱い。それだけは強く自覚していた。だから逃げられる状態になっても、逃げるこ

とは出来ないだろう。だから今はそんな事よりもっと楽しい事をしよう。

この刹那を味わえるだけ味わって……今は少しだけ、あの地獄を忘れたい。

だからアンに手を伸ばし、掴んでくれたそれを引く。

「さ、行こう。この近くには大型モールがあって、ゲーセンとかカラオケとかあるからな」

「歌……苦手」

「なあに、口数が少ないんだから歌う時ぐらいいいじゃないか。折角綺麗な声をしているのに聞けないのは勿体ないし」

あ、痛い。凄く痛い。手を握りつぶそうとする力強さ凄く痛い痛い。照れ隠しが死ぬほど痛い。ディア、ディアをください、ディアを。

『ハマ』

「まだ死んでないから。ほら、アンも……そろそろ手が折れそうだから俺……」

「……うん」

そう告げるとアンの手の万力が緩まり、普通に手をつなぐ事が出来た。地味にこんなの、初めての経験だなあ、と思いながらアンと手を繋いでそのままモールへと向かった。軍資金はたつぷり存在するのだから、遠慮する必要はない。駅からもそう遠くはなく、迷う事もない。

メシアンやガイアーズには悪いが、地獄で頑張ったご褒美としてしばらく、楽しませて貰おう。

そう思つて迷うことなくまずはモールのゲームセンターにアンを連れ込んだ。崩壊世界で見たナカノのゲームセンターは完全に電源が落ちて停止していた。だがそんな事がない此方側の世界では、そんな事を気にしなくてもいい。ゲームセンターでは大量のゲームが稼働しており、サボっている学生たちが遊んでいたり、大きなお友達が大きなお友達向けのゲームを遊んでいた。特に音ゲー、何時も誰かいるよな……という感じで軽く眺めた。

「動いてる」

「見るのは初めてか？」

「うん」

「じゃあどうやって遊ぶのかは俺が教えよう。なんて言っても、俺はナカノTRFの世紀末リズムアクションゲーで遊んでいたモヒカンの一人だからな」

「……？」

うん、まあ、伝わらないよね、と苦笑しながらアンにゲームセンターと言う場所を紹介する。自分の事を喋らず従ってばかりの彼女だが、何故だか解らないが、こういう経験は恐らくなかったのではないかと思っている。だからこれもいい思い出になるだろう、ととりあえず色々連れ回してみる。

まずは定番中の定番、クレイゲーム。どれだけ運動神経や反射神経が良くても、技術と運が試されるゲーム。そこまで欲しい景品があった訳ではないが、それでも記念に一つ、大きな人形を持って帰るのも悪くはない、と言う事から1メートルサイズの巨大ひーほー君人形を狙う事にした。

「むむ……難しい」

「あーあーあー、そこは素直に掴むんじゃなくて引っ掛けるんだよ。そうそう、そこを引っ掛けて……ああ、惜しい」

やり出してみたら結構熱中するもので、そしてアン自身が結構負けず嫌いな性格であったこともあり、5回失敗した辺りからかなりのめり込む様にコインを投入する姿を見せていた。たぶん、ギャンブルで身を破滅させるタイプだな？ と思いつつも、自分でもわかるぐらいに熱中していた彼女を自分は邪魔する事が出来なかった。初めて彼女が被っている無表情が少しだけ、崩れている様にも感じたからだ。

「ビクトリー」

「おう、おめでどう……しばらく持ち歩く？」

「ん」  
巨大ひーほー君人形を3600円でゲットする事に成功したアンはその景品を大事そうに抱きしめて頷いた。なんか、もう、これだけでだいぶ満足しているなあ、と言う表情だったが、他にも見て回る場

所はいっぱいある。普通の女の子であれば忌避しがちだが、悪魔を蹴り殺すだけの胆力のあるアンであればシューティングゲームも行けるだろう。

……でもよく考えたらリアルゾンビの方でお腹いっぱいなので、ガシシューティングは今度にする。

本命は無論、世紀末リズムアクションゲームである。

「この、無駄に鍛えられた仮面の放火魔の实力を見せてやろう……」

「じょいんじょいん」

「あ、マジでやめろくださいあつあつあつあつ」

仮にもサマナー相手だというのに一切容赦のない無限コンボで殺害される。覚えるのが早いし、容赦のなさも悪くない。だが接待すらさせずにぶち殺して行くそのスタイルをサマナーに向けるのは止めてくれ。そう思いながらも笑い声が漏れ出す時間だった。何をどう足掻いても戻らない筈だった時間を今、ここで取り戻している気分だった。

実際、ここでなければ取り戻す事も出来ないだろう。

果たしてナカノブロードウェイが本来の姿を取り戻すのにどれだけ時間がかかるのだろうか？ 1年？ 或いは10年？ 世界の再生だってどれだけ時間がかかったものか解りやしない。そう考えるとやはり、遊べる時に遊ばなくてはならないのだろう。

……少なくとも、今の俺はそれが許される。

故に笑った。笑って頭から悪魔とか、悪魔召喚士とか、そういう事を忘れようとして頭の中から追い出した。なるべく、考えたくはなかった。思い出しもしたくなかった。既に人を殺している事実を。

だから遊んで頭の中を空っぽにして、ゲームセンターを回り終わった所で恥ずかしがっているアンを引っ張ってカラオケへと連れて行く。無表情ながら足を断固として動かそうとしないのが面白いので、そのまま持ち上げて運んでカラオケへと連れて行く。

気分は高校の時の馬鹿になった気分だった。

カラオケで適当に部屋を取り、曲をチェックする。意外な事実には、ラインナップはそれほど違いがなかった。その為、普通に歌いだせ

る。そしてついでにチエフエイも参加したそうにうずうずしている  
ので、マツヤ諸共召喚し、二人と2匹でのカラオケ大会を開催する。  
なお、ここでヒンドウー語で歌い出したマツヤは評価外だった。

そして無駄に芸達者なチエフエイが無駄にヘイト集めていた。

そんな様子を眺めていると触発されたのか、アンもマイクを手に  
取って最初は小声だったが、少しずつ恥ずかしそうに歌い出して、参  
加してくれるようになり、それで大いに盛り上がった。

げらげらとビールジョッキを片手に笑いながらおつまみから揚  
げを食べる。Magの消費がちよい重い、とか今だけは言わずに我慢  
する。

こんな風に心の底から爆笑するのは本当に久しぶりだった。そし  
てどれだけ、崩壊世界からそういう物が失われてしまったのか、とい  
うのを実感してしまった。世界の崩壊はこの当たり前の様な楽しさ  
さえも失わせてしまったのだ、と理解させた。だとしたら、自分の戦  
う理由とは、もう少し解りやすいのかもしれないな、とカラオケでマ  
イクを握りながら思った。

自分が戦うのは世界の為とかではなく、もつと解りやすく言えば  
……そう、こういう時間を、崩壊世界でも味わえるように、楽しめる  
様に頑張っているのだろう。そう思った。

だからその為にも、少しだけ頑張ろう。もうちよつと頑張ろう。だ  
から少しでもいいから長く、この時間に続いてほしい。

◆

「そう思った途端にこれかよ」

おそらくは0時を過ぎた所だった。

眩きながら目の前には棺桶が立っていた。わあい、なんか変な空間  
に突入したぜ。そんな言葉を頭の中での半濁しつつ、邪魔な棺桶をカ  
ラオケの通路のわきへと押しつけた。とりあえず邪魔で通れない。  
そんな事を考えながらカラオケのボックスへと戻れば、マツヤを装備  
したアンの姿と、マイクを置いて爪を出したチエフエイの姿が見え

た。

「ちゃんと厠に行つた後は手を洗つたかなサマナーよ？ 商売道具を汚したくなければな」

「あ、やっぱりそういう流れなんだ」

「ん……良くない気配感じる」

「ですよねー……なんでだろうなあ、楽しい時間が続かないのつて」

溜息を吐きながら頭を切り替える。学生マインドから世紀末マインドへと切り替え、DDSを本格稼働させる。ポンチョと武装を取り出して装備し、ここが狭いという事もあつて神経弾を装填したベレッタを握る。やっぱり、刀よりも銃の方が握っている時にしっくり来るのだ。《ガンスリンガー》の才能は伊達ではない、という事だろうか。まあ、それはともあれ、

「引きこもつてただけじゃ詰む可能性あるし、殴りやすい場所へと移動つて事で」

「ん」

「はてさて、異世界の悪魔とはどういう味をしているのか、見ものであるな」

チエフエイに至つてはジェノサイドする気満々である。やだなあ、もう。そう眩きながらも戦闘に対応する状態は完全に出来上がっている辺り、自分も殺し、殺される状況には完全に適応していた。悲しい話だが、そうできない奴は皆死んでしまった。

《エネミーソナー》を稼働させながらカラオケを出た所で先ほど見た棺桶が所々に見える。《エネミーソナー》から感じるその中身の気配は、

「人……が入っているのか？」

「と言うよりは気配的にこれが人その物じゃな」

『……』

「へえ……世界が変わればルールも変わるもんなんだな……」

それが一般的かどうかは別として、崩壊世界で生きて来た人間として、余り狭い場所に居続けたくはない。特にどうい悪魔が出現するかわかつていない状況では。そういう事もあり、カラオケを出て、

モールの外へと出た所で、同じように棺桶の様な物になった人たちの姿を見つけた。いったいどういう法則で人がこうなっているのだろうか？ もしかしてこれが自分たちの世界崩壊に通じる様な事件や異変なのだろうか？

そんな事を考えていると、虚空から出現する様に《エネミーソナー》に反応があった。映し出される赤点には寧ろ安堵さえ覚える。

「来るぞ……交渉出来るタイプだと良いんだけどな」

ベレッタを両手で握って正面へと向けて構えた所で、数秒間、そのまま動きを停止して構える。仲魔と共にソナーが示す敵の方角を睨み続ければ、やがて、月光に照らされる様に悪魔の姿が見えて来た。

うぞうぞと地面を這うように出現するのはヘッドロに仮面をくっ付けたような姿をした存在だった。《アナライズ》が即座に発動し、捉えるその名称は臆病のマーヤ。まったく聞いた事のない悪魔だった。

しかもレベルは2。

「耐性を持たないどころか火雷風弱点とかいうクソ雑魚生命体。安らかにお眠りー」

「おやすみー」

「ぐっない」

パンパンパン、と撃ち殺して出現した悪魔らしき存在を瞬殺するのに成功した。夜に響く銃声になんか、ここがまだ崩壊前だと考えると少しだけ、妙な気分になる。銃刀法は生きているのだし。まあ、しかし、と呟く。振り返りながら、アンとチエフエイとマツヤへと肩を揺らして手を広げた。

「もしかしてここ、クソ雑魚悪魔しかない世界では」

もしかしてこれ、竜二無双始まるのでは？ そう思った直後、凄まじい勢いで接近してくる赤点を《エネミーソナー》が示し、風を切る音が聞こえ、背後で大地を揺らすような轟音と共に、着地する音が聞こえた。

なんか、物凄い濃い気配を感じる。体の動きを完全に停止させながら、ゆっくりりと、ゆっくりりと、振り返る。

「……あ、どうも、こんばんわ。異世界から来たものですが夜の散歩で



すか？ いやあ、良い夜ですからねえ、気持ちも解りますよ」

跳躍と共に飛んできたのは、これまた大量の腕によつて作られている体を持った怪物だった。そこに仮面をくっ付けた、そんな感じの怪物。今まで見て来た悪魔の中で、最も強そうな悪魔だった——いや、流石に支配人クラスには程遠い。それでも恐ろしいほどの力を感じる姿であり、

Analyze……Complete

The Magician Lv28

「お、詰んだかな」

『冥府は僕が知り合いの所を紹介しよう！ 転生するよりマジだろうしね！』

逃げる事さえ諦めるレベル差の中、マジシャンと言う名前の悪魔は此方を確かめるかのように仮面を揺らしながら多腕の剣を軽くぶつけ合い、金属音を鳴らして行く。ああ、俺、ここで死ぬのだろうか……そんな事を考えていると、

「あ」

神経耐性：なし

それを見た瞬間、一瞬で希望を取り戻し、迷うことなく銃口をマジシャンに向けて引き金を引いた。世紀末マインドに迷いという概念は存在しない。即断実行のみである。そしてそれが功を奏したのか、銃弾はマジシャンに突き刺さり、

——マジシャンが痺れた。

「勝ったな」

## 死神と塔 Ⅱ

「どこの誰だよハメ殺せるつった馬鹿は!!」

「サマナーじやる!!」

至近距離で顔面にショットガンを外さないようにぶち込み、腕を千切ろうと爪で引き裂き、タル・カジヤを限界まで使った上で全力で通りの良い打撃攻撃を、マツヤカリバーを叩きつけて、このメンツで力最大のアンが全力でぶち込んでいる。実際、その衝撃でマジシヤンの巨体がワンバウンドしたり、吹き飛んでビルに衝突したりしているのだが、

死なない。

全く死なないのだ、こいつ。

もう既に10分間はノンストップで急所に攻撃を叩き込み続けているのに、まるで死ぬ気配を見せない。攻撃を叩き込んでも叩き込んでも、攻撃が通っている感触はあるし、《アナライズ》で弱点と耐性を見極めて攻撃しているのに、それでも全くダメージになっていない。そりやそうだ。レベルが違い過ぎて、体力が違い過ぎるのだから。ちよつとやそつとの攻撃じゃ削れないのだ、命を。

と、思っているうちにマジシヤンが痺れから復帰しそうになる。迷う事無くショットガンをベレッタに持ち替えて顔面に神経弾を三発、確実に効果を発揮させるために撃ち込み、弾倉が空になるのを確認し、リロードする。

「やべえ……もう神経弾30発しか残ってないんですけど……」

「そうか……再び死兆星が見えてきたようじゃな?」

「縁起でもないことほんと止めろ」

まさか王道のハメ戦法が全く通じないとかそんな話聞いていない。いや、レベルが圧倒的に違うのでもしかして……と思うべきだった筈なのだが、

「お前らなんでそこは注意しないの!? ハメてる間に逃げる提案とかしない!?!」

「いや、なんか妾もこの空気ならいけるかなあ、って思うたし」

『英雄や勇者ならこのぐらいの試練突破できるさ!』

「俺、どっちのジャンルにも当てはまらないんだよ糞が……!」

もしかして崩壊世界にいた頃よりも今、命かけていない? そう思いつながら痺れたマジシャンの姿を道路の外へとアンが叩き出した。華奢な姿でマツヤを振るい、そしてマジシャンを蹴り飛ばす姿はまさに物理法則を無視しているが、それでもダメージが少ない辺り、やはり根本的に勝てる様な相手ではない気がする。ならば、これはもう、しようがないだろう。ショットガンを仕舞い、ベレッタで新たに神経弾を撃ち込んで痺れさせるのを延長させつつ、断腸の思いでその言葉を口にする。

「……スダマ先輩を使うしかないのか……!」

「!?」

あ、チエフエイが迷うことなく逃げた。だが逃がすか、とその背中に神経弾を撃ち込み、無理やり足を止めて倒す。

「しまった、肉壁が一人減ってしまった……!」

『サマナー、実は追いつめられると酷くなる癖持っていない? ぶつちやけ始めるといとか取り繕わなくなるというか』

貴様らと違って凡人に余裕はないのだ、クソどもめ。それはそれとして、スダマ先輩を使うしかないな、と言うのは当然の判断かもしれない。スダマ先輩は超自爆特化型悪魔。何をしようとも絶対に自爆し、支配人の悪ふざけとしか思えない超凶悪スキル一切合切をスダマ諸共吹き飛ばすという極悪仕様になっている。文字通り、ICBMのような爆発を見せてくれるナイスガイなのだ。

だが同時に、周辺への被害がでかすぎるのだ。

こんな街中でぶっ放せば、棺桶の強度は解らないが、色々つぶっ飛んでしまう。流星に普通に平和に生きている人々を巻き込むような畜生にはなれない。となると……やはり、どこか、誰もいない場所、被害の出ない場所へと叩き出す必要がある。神経弾を撃ち込み、行動を阻止しながら指示を出す。幸い、ここは海が近い。

「アン!」

「ん」

道路から外す様に全力でマジシヤンを蹴り飛ばした。動けないマジシヤンはその衝撃に従って轟音を靡かせながら一回大地でバウンドしつつマツヤストライクによって殴り飛ばされた。それで飛距離を稼いだところで、復帰したチエフエイからスク・カジヤが飛んで来る。速力の強化によってマジシヤンに追いつき、

神経弾を撃ち込みながらも一発。フェンスを越えながらマジシヤンの運送を開始する。

「ここが海沿いで良かった……なっ！」

「ん」

「場所が無かったらもれなく市街地破壊じゃったの……」

ナカノの一角はそうやって消し飛んだので笑えない。そんな事を考えながら壁にたびたび衝突させながらも、マジシヤンを殴り、蹴り飛ばして運送する。その動きは澱みがなく、隙もない。レベルは低いが、アンは完全にその身体能力を制御し、少ない動きで怪物的な動きを完成させている。マジシヤンを吹き飛ばし、周辺にある物を足場に再び跳躍、空中で更に動けないマジシヤンを蹴り飛ばす。

その時、スパッツが浮き彫りにするケツのラインが素晴らしい。出来るならもうちょっと眺めていたい光景だが、そうも行かない。悪魔の全力の身体能力で蹴り飛ばせば、やがてマジシヤンの巨体が街を突き抜け、その外側、港へと到達し、そして港から弾き出されて海の上へと飛び出た。落ちる前にその姿にすかさず神経弾を4発撃ちこみ、最終兵器の解禁を行う。

「DDS起動、お願いしますスダマ先輩！」

Summon ICBMスダマ

『去年の誕生日にYHVHがラムネを仏陀に送ってた』

「メシアンに殺されそうな危険な発言は止めろください」

召喚と共に、銃を握っていない左手の上に丸く、そして青い悪魔が召喚される。紋様が刻まれた、顔のない手足のある青い玉。それがスダマだ。棲み、潜む魂という意味をするこの悪魔は山中に存在する悪魔であるが、なぜかこのスダマは異常に自爆する事に対する執着心を抱いている。そしてそれを支配人がデビルソースを惜しげもなく使

う事で、最強自爆兵器スダマ先輩へと昇華させてしまった。

そのせいで種族表記までなぜかICBM化している。手で投げる事の出来るその姿を握り締めつつ、海上に弾き飛ばされたマジシャンを見た。神経弾で麻痺してはいるものの、Magを使っているのか、沈むことなく浮かんでいる。その姿を更にアンがマツヤを叩きつけて吹き飛ばしつつ、海上の上で痺れるマジシャンの姿へと向かって、スダマを放り上げ、オーバーヘッドキックを決めて一気に蹴り飛ばした。

「お願いシャツス、スダマ先輩！」

凄まじい速度で海上を飛翔するスダマは何物にも遮られる事なく直進し、波を割りながらマジシャンへと到達した。コテン、と音を立てながらマジシャンの仮面の様な顔に衝突し、そしてスダマの片手がサムズアップを作った。

『来やがったぜ』

メギドラダイナ

「たーまやー」

凄まじい閃光と共に海が消し飛ぶ様に爆裂した。連続で発生する万能属性の光は連続で爆裂し続けながら海から水を蒸発させながら消し去って行き、先ほどまでマジシャンが存在した空間を連続爆破しながら今もお破壊の光で半径30メートル以内を食い散らかしている。それによって響く轟音は耳が痛いと呼べるようなレベルであり、到底レベルが10以下の悪魔が出していいような破壊力ではなかった。

「うーん、ICBMの名に恥じないこの破壊力」

「綺麗」

「破壊の色は綺麗だと良く言ったもんじゃのう」

あ、マツヤの状態がDyingになってる。きっちり巻き込まれてやがる。そう思いながら光に包まれる爆心地を眺める。大量のMagの気配が、悪魔の殺害成功を物語っており、それで一気に体に力が沸き上がってくるのを感じた。

スダマのコンセプトは簡単だ。自爆してぶち殺す。それだけらし

い。支配人が用意したこの悪魔は本当にどうしようもない格上と戦う時、周りや味方への被害を無視して使う為の最終抹殺兵器であり、どんなレベルの高い悪魔であろうが絶対にダメージを通すというコンセプトでスキルを構成した、と言われている。

《自爆ハイブースタ》、《自爆の心得》、《超逆境》、《自爆貫通》、《ソウルサクリファイズ》、《エボルヴIV》等々搭載されており、攻撃手段はメギドラダイン一つのみ、そのコストも自分の命。そして発動させれば自分を巻き込んで発動させる。まさに自爆野郎。うるせえ、俺も前も死ぬんだよ！ という鋼の意思しか感じない特攻野郎である。いや、スダマは無性なのだが。こんなものを作った支配人も協力したステイブンも頭おかしい。

威力は確かだし、格上も食える。

その代わりに根本的な秘匿という裏社会必須スキルを投げ捨てる上に、距離を空けないと自分も巻き込まれる。それでいてレベルが上がれば更に爆破範囲が広がるらしい。馬鹿じゃねーのお前。

「いやあ、マジシャンは強敵だったなあ……おっと、ウチはリカム使えるのがないし、今のうちにDDSにマツヤとスダマ先輩戻しておるか」

軽く距離はあるが、契約した悪魔であればある程度の距離は無視して戻すことが出来るアプリはやっぱり便利だなあ、と思いながら戻した所で、海上に浮かび上がる《エネミーソナー》の反応にうん？ と首を傾げながら《アナライズ》を発動させた。

光が消え去り、海に空いた穴から出現してくる、完全なマジシャンの姿。

「馬鹿な、お前は死んだはずじゃ——」

と、言葉を止めた所で、マジシャンが発動させていたスキルを見た。

▽《不屈の闘志》

マジシャンが発動させたスキルを見て、海の上で復活したその姿を見て、無言で残った最後の数発の神経弾をベレッタに装填し、海を蹴り飛ばして跳躍したマジシャンに弾丸を撃ち込んだ。潰れる様に落下し、港に倒れるマジシャンの姿に神経弾を持ち込んできた全てを撃

ち込み、そして背を向ける。

「逃げる。勝てるかこんなの!! あ、チエフエイは足止めをお願いしますね」

「サマナー! ええい! 本気か!? あ、妾契約だから逆らえない! 逆らえんぞ! うおつ! もう逃げ出してる!?! サマナー! サマナー!」

煩い。《食いしぱり》ならまだしも、《不屈の闘志》とか聞いてない。スダマ先輩のコストは魔力ではなく命だ。つまり自爆行為だ。一発放てば完全回復させるまで再び放つことは出来ないし、リカーム1回で回復しきれぬ量でもない。反魂香は貴重品な上に使用するのにやや時間がかかる。それを考えるとこれ以上戦うのはどう足掻いても無理だ。Magを奪ってレベルを上げられただけ御の字と考えよう。

ここからは迷う事無く逃亡する、犠牲にチエフエイを置いて。

この影の様な時間帯を抜けきってあのマジシャンから逃げ切るまでの逃亡が始まった。

◆

「もうやだ……帰りたい……なんでナカノのがまだ安全なんだよこの世界……」

朝、いつの間にか日が昇っている。モールの路地裏で死んだように壁に寄り掛かって座り込んでいた。あのマジシャンが《不屈の闘志》で復活してから、倒せる手段がないので迷うことなく逃亡したが、神経弾による拘束が外れたマジシャンはそれはもう暴れたらしく、港から街へと大ジャンプし、しばらく鬼ごっこをするハメになり、その後はどこか、別の興味が生まれたのか、其方へと向かった。

それであの棺桶タイムは終了したのだが、それでもなんとなくが安心できずに警戒し、隠れ回る様にここまで来てしまった。そのせいで嫌でもあたりの地形を覚えてしまった。というかいきなり30レベル近い悪魔が出現するとか話は聞いてない。

レベル1でスポーツ選手で、レベル8で戦場で人を何人も殺した傭

兵レベルだ。15を超えれば完全に一般的な認識で言えば超人と呼べるレベルで、20もあれば怪物的だ。そして30の領域はもはや英雄とかそういうレベルになってくる。

なお、40レベルになれば最低限の神話クラスであり、50から上は少しづつ神話英雄、或いは主神クラスが見えて来るらしい。まあ、つまり30近い数字とはそういうレベルの怪物だ。それがポン、といきなり出現してくるんだからほんと止めて欲しい。心臓に悪いというレベルじゃない。アレは単独で街を落とせるレベルなのだから。いや、それだけなら20レベルもあれば十分だ。そういう強さの相手が出てくる、という話だ。

問題はそんなのが出てくるとか一切想定していなかった事だ。

漸く落ち着いた事で地返しの手をストレージから引き抜いて、死んでいるDDS内のマツヤとスタマとチエフェイに使う。やっぱりリカムが使える仲魔は欲しいよなあ、とは思うものの、回復魔法はアンが覚えているし、回復用の悪魔を用意するとなるとアンと魔法棒が被りかねないから兼ね合いが難しいよなあ、と言うのもある。

チエフェイも魔法は使えるがやや物理偏重だし。マツヤに至っては鈍器だ。マジシャンを1回殺害したところである程度のMagを吸収し、それでレベルが上がったのは悪くはないが、根本的な悪魔のバランスを考えるべきかなあ、とは思わなくもない。

ともあれ、モールの外へと視線を向ければ太陽の日差しが見える。昨日とはまた別の意味で心が落ち着く。夜じゃなければ悪魔の気配はない。どうやらこの世界ではあの棺桶タイムのみ、悪魔の様な存在が出現するらしい。それが解っているなら簡単だ。あの時間だけ、適当に安全な場所で隠れていれば良いのだ。

「とりあえず朝飯にすっか」

「ん……ペンペン」

「そうだな……ふわふわのパンケーキとか超食べたい」

「ふわふわ……」

あ、アンの目がちよつと期待している。やっぱり女の子って甘いものが好きだよな。となると朝ごはんはそういうもので。そう考えて



モールの路地裏から出て、適当な喫茶店を探す。全体的にこのモール、外れがないように感じるのだ。というか幾つかの店舗からは魔力やMagの反応を感じる。時間があれば探ってみるか、そう考えながら珈琲の匂いのする店内に入った。

最近嗅いだ臭いが精液やら火薬やら死臭ばかりなので、心が落ち着く匂いだった。夜だけ気を付ければ天国、夜だけ気を付ければ天国。そう思いながら店内に入り、窓際の席に座る。初老のウェイター……いや、おそらくは店主がメニューを運んできてくれる。珈琲とパンケーキを二人分頼み、椅子の背もたれに寄り掛かりながら息を吐く。「サマナー……どう……する……？」

「まあ、無駄に戦う必要はないからな。適当に夜は過ごして、昼間は遊んでればいいさ。態々他所の事情に首を突っ込む必要もないしなあ」マジシャンと戦った感じ、《不屈の闘志》装備が基本の高位悪魔がうろろしているのは世紀末過ぎて笑えない。崩壊世界よりよっぽど世紀末している性能は本当に止めて欲しい。だけど、昨日の夜、マジシャンの反応がソナーから途絶えた辺り、アレを始末出来るだけのデビルサマナーかデビルバスターが存在するというのも事実。この世界、予想よりもやばいのでは？　と思わなくもない。

「じゃあ……遊ぼう」

「ああ、昨日みたいに遊ぼうか」

せっかく、崩壊世界から抜け出してまだ無事な世界にいるのだから、こんな状況で馬鹿正直に苦しむのは愚か者だよなあ、とは思わなくもない。とりあえずは魔石をチェフエイとマツヤに使って、回復させておかなきゃな、とスマートフォンを取り出しつつアプリの操作を始める。アプリ内部に悪魔が存在し、道具が電子化状態であれば、そのままスマートフォンを操作して回復が行えるのは便利なシステムだよなあ、とは思う。

ただ、《ワールド・レコーダー》で確認する記憶状態はまだ5%にも届いていない。そう考えると非常に憂鬱だ。このペースからすると、この世界に1か月近くは滞在するハメになりそうだ。一応、数百万はお金がある。これは略奪してきた分だが、ホテルで滞在し続ける事を

考えたら結構お金を浪費するだろうし、使い切った神経弾の補充とかを考えると更に金がかかるだろう。

「逃亡用の煙玉、神経弾、後はチャクラドロップとか欲しいんだよなあ……あと反魂香。スダマ先輩投げる時に一緒に投げつけければ時間差で二度爆破出来そうだし」

デクンダストーン、メギドストーン、トラエストストーン……こんな魔境だって知っていたらもっともっとガイアやメシアから巻き上げていた。ぶっちゃけ、アレレベルが基本だったら数日中に死ぬ自信がある。そしてまだ死にたくはないのだから、当然準備はしなくてはならない。

世界が変わってもやる事は一緒なんだなあ、とは思わなくもない。

「お客様、此方当店オリジナルブレンド珈琲とパンケーキのセットに御座います」

「お、待ってました」

テーブルに並べられるパンケーキは普通のパンケーキとはちよつと違う、まるで膨らんだパンのような外見をしている。だがそこから感じられる甘い匂いが食欲を誘ってくる。隣にハチミツとメープルシロップの入ったジャグも置いてくれるし、中々当たりのお店を引けたな、と評価する。珈琲の濃い香りも一気に意識を刺激させてくれる良さがある。

「お客様」

どちらから手を付けたもんか、と思ったところで、初老の店主が失礼、と軽く言葉を挟んでくる。

「どうやら、お客様は何やら不思議な品物をお求めとの事——（こ）、ポロニアンモールにある古美術店の《真宵堂》という所を訪ねるのが宜しいかと。お客様の様にどこか不思議な気配を感じさせる物品を売っているお店で御座います故」

「あ、これは丁寧にどうも」

「いえいえ、それではごゆるりと」

このいかにも仕事ができるという感じの店主のスタイルは嫌いじゃない。年を取るならこういう、バリスタのあのエプロンが似合

う、後ろで白髪を纏める様な老人になりたい。そこに到達する最大の問題はそこまで生き残れるか、と言う事にあるのだが。現状、強くないらなきやなれないのは確実だ。少なくとも今のままでは無理だ。

「と、今の戦力とかを確認しとくか……」

パンケーキにハチミツをたっぷりかけながらそれをナイフで割れば、凄まじい柔らかさがナイフを伝わってくる。あ、これ、絶対やばい奴だ。昨夜のアレコレが一口で蕩ける様に癒されるのを感じながら、自分のスマートフォンでDDSAアプリから、仲魔情報を閲覧する。

昨日、マジシャンの《不屈の闘志》を1回発動させてMagを吐き出させたこともあって、レベルはかなり上がっている。

人修羅・アンが16に、自分が15に、マツヤとチエフェイも同じく11、そしてスタマ先輩は14になっていた。

「アレ……俺とアンは良いとして、悪魔どものクソ雑魚っぷりが気になるなこれ」

『寝起きに雑魚扱いとは酷くないかや、サマナー』

『まあ、僕らはレベルキヤップがあるから正直仕方がないよ』

「その概念、ワシは初耳なんじゃが」

「もきゅもきゅ」

アンは目を輝かせながらパンケーキを食べていて、まるで此方の話を聞いていない。まあ、幸せそうならそれでいいんだが……と、思いながらDDS内部から語り掛けてくる悪魔の声に耳を傾ける。

『レベルとはつまり存在としての位階を示す数値だ。僕ら悪魔にはそれぞれ原典に通じる強さというものがあるんだ。魔界の本体であればそこら辺の制限は緩いんだけど……僕らみたいな分霊や劣化分霊の類はそこらへん、概念に強く縛られる』

『ピクシーがおるじゃろう？ あんなに小さく、そして概念的に弱いと認識されている存在が20や30程の力を付けられると思うかの？ かような小さな姿の悪魔が？』

まあ、無理だろうなあ、とは思う。あのピクシーの小さな姿がデコピンでゾンビをミンチにする姿とか絶対に想像できない。というかしたくはない。そしてその考えにうん、と言葉が聞こえた。

『つまり積もりに積もったその概念と認識、情報が僕らの限界という訳さ。僕も第一の化身の姿だ。そしてこの駄狐も二尾、つまりは最弱の状態になる。それが僕らの限界点になる。これ以上僕らのレベルを上げるには一つ上の段階の姿へと変異させる必要がある』

「ほー……流石に初耳だったな、これは」

同じ悪魔を鍛え続ければ強くして行けるのかなあ？　と思っていたが、そういやあ同じ悪魔の間でレベル差が少ないのは、そういうレベルキヤップ概念が原因だったのか、と認識する。

『ちなみにサマナーも人修羅もそこらへん、上限が撤廃されておるな。英雄や超人、勇者の類であれば元々外れているものではあるのじやが……サマナーの場合は人修羅との契約でそこら辺の制限が撤廃されている様じゃの。常人、凡人が人と言う枠組みを超えずに到達できる限界は10前後だと言われておるぞ』

となるとそこらへん、既に突破しているんだな、とチエフエイの言葉に理解させられる。しかし同時に、チエフエイとマツヤは貴重な保有戦力だ。ここでレベルキヤップがかかってしまうのは非常に痛い。故に、パンケーキを口の中に運んで、珈琲の香りを楽しみつつ、

「突破方法は？」

『悪魔合体』

『まあ、普通の悪魔合体ではなく、僕らの概念を進化させるやり方だけどね！　専門家じゃないとたぶん難しい……けどステイブーンがその準備をしていてくれたはずさ』

「悪魔合体はまだ準備中って言ってたなあ……」

という事は、チエフエイもマツヤも、しばらくはレベル11でストップ状態だ。となるとメインで使える戦力が自分、アン、そしてスダマだけに——いや、待て、なにかが可笑的い。

「なんでスダマ先輩のレベル普通に上がってんだよ」

『ルイ・サイファー謹製だからね！』

『アレが変に弄ったんじゃない？　なら何があっても不思議ではないわ』

「支配人に対するこの妙な信頼。何なんだろう」

まあ、でも、あの支配人凄くイケメンだったし、何かやらかした前歴ありそうだなあ、とか存在そのものが怪しいなあ、とは思わなくもなかった。まあ、疑い出したらキリがない。それにスダマ先輩はフアイナルウエポンなのだ、問題なく強化されるのならそれでいい、とは思わなくもない。それに悪魔は契約が存在する以上はそれに逆らう事はできない。そこはきつちりステイブンが手を加えている。

あの老人は根本的に悪魔を信じていない様子だった。最終的に人間でどうかしなくてはならない。そう思っている様な部分がある。まあ、今はそういう主義や主張はどうでもいい。問題なのはそう思っている男が悪魔と協力している事態である、と言う事実だ。正直、思いつくと胃が荒れるので今は忘れてパンケーキを食べる。

L—N—C問題。主張。考えるだけ無駄だ。どれだけ悩んだところで他の陣営を抹殺して皆殺しにしない限りは解決しないのだから。

正直、お前ら勝手にやっている、としか此方は言葉がない。

お前らのクソの様な主義主張よりも今はこのパンケーキが尊い。ああ、ふわっふわで、口の中で広がってくる甘みとハチミツのこの感じ……美味、実に美味である。そう、この美味しさと感じる幸せに比べれば信じる、信じられないとか非常にどうでもいい。

そういうのは勇者とかインテリとかキチガイの仕事だ。

俺の仕事は勇者が活躍できるゲームを作る事。それが終わったら適当にバックレればいいのだ。知らぬ存ぜぬを通せば良い。それはそれとして、こんな美味しいパンケーキがあるんだなあ、と軽く感動する。

普段、と言うよりは学生時代は基本的に節約生活でパンケーキなんて自分で作るもんだと思っていたが、流石700円もするパンケーキとなるまるで格が違うな、と認めざるを得ない。間違いなくそれ専門の店のレベルの味だよなあ、と思う。

「あー……幸せな朝ごはんだわー……」

「もぎゅもぎゅ」

アンも無言で、ひたすらパンケーキを静かに食べ続けている。少しずつ、少しずつ切っては軽くハチミツかメープルを混ぜない様にか

て、それを口の中へと運んで食べている。本当に幸せそうに食べるもんだから、その姿を見て思わず小さく笑い声が漏れてしまう。

「ただど確かにそうだなあ、と人修羅という特大に物騒な名前を持つアンの姿を見て、思う。」

戦闘しているよりも、こうやって甘いものを食べている姿の方が遥かに似合うよな、と。だけどそれを考えて同時に、この冒険が終わればアンはどうなるのだろうか？　と言う疑問が思い浮かぶ。

それを……アンは知っているのだろうか？

流石に、それを彼女に聞くだけの勇氣はなかった。まあ、そのうち聞きだせば良いな、と自分に言い聞かせながらパンケーキをまた一切れ、口の中へと運び、

「——失礼」

「あん？」

そんな声に横へと視線を向ければ、黒服の男がそこに居た。また同時に店舗の入り口を守る様に数人の男の姿があり、何やら、カタギの雰囲気がない。黒服の男の上着の下からは銃の気配もある。それを察知しつつ、次の言葉に耳を傾けた。

「昨晚の出来事に関して、主が是非とも話をしたいと。食事の後ご同行を願います」

男の言葉に果てしない面倒臭さしか感じなかった。チエフエイのプリンパで惑わしてここから逃亡するという手段もあるのだが、どーしたもんか、これ。

## 死神と塔 Ⅲ

結局、暴れた所で面倒な事になるのは目に見えているし、何より相手には誠意が見えた。頼み、そして此方の事を待つという姿勢に礼がある程度弁える姿が見えた。問答無用ではなく、理性的な部分がある辺り、交渉の余地はあると感じた。これが世紀末交渉ならまず殺す事から始まっている。それにここでぶち殺して逃げた所で、そこからどーしろ、という話でもあった。指名手配でもされたら面倒に決まっている。

まだまだ遊びたい場所、買いたい物は大量にある。その事を考えたら波風を立てない方が遥かに良いに決まっているだろう。まあ、逃げる時はチェフエイを壁に使ってスタダマを投げればいいという極悪式逃走術の構想がある前提ではあるのだが。

ちなみに《エネミーソナー》に反応はない。つまり害意、悪意を持っている訳ではないという証拠でもある。もし方針転換して殺しに来るのであれば即座に《百太郎》が警告してくれるだろうし、ある程度は大胆に動いても問題はない。

そういう事でふわふわパンケーキで半ばトリップしているアンを引きずるような形で運び、車に乗って連れられた場所はなにやら巨大なアパート、或いはマンションの様に見えた。結構金のかかっている感じのする建築にほお、と車から降りた状態で眺めつつ、これだけ立派な建築が崩壊せずにあるとは——と、考えてしまうのはやはり、世紀末脳だからだろうか。

だって大きな建物とか大体壊れてるし、崩壊世界は。「此方でお待ちです」

黒服の男は先導する様に此方を建物の中へと案内する。ボディチェックや装備の没収は行わないのは何故だろうか、と少しだけ疑いながら警戒を強めて中に入る。

だが魔法トラップの気配も、呪術制約の気配もない。無論、概念束縛も異界化もない。え、嘘、マジで素通しなの？ もしかして俺の方が性格がやや擦れているだけなの？ その考えに少しだけシヨック

を受けながらラウンジへと通されて行く。テーブルを囲む様にソファが置いてあるのが見える。

そこに座っていた姿が三つ、あった。二人は男。一人は青年で、もう一人は大人。そして最後の一人は女だった。青年と女の方はそこそこ出来る気配をしている。逆に男の方は全然駄目だ、ただの一般人だ、能力的には。だが妙だ。青年も女も、なんというか、能力がやや詰まっている様な、Magに不自然さを感じる。

「む、来てくれたか。まずはようこそ巖戸台分寮へ。私が君たちを連れてくるように言いつけた桐条美鶴だ。やや強引で気分を損ねる様なやり方になってしまった場合は、すまない。だが我々としてもペルソナ使いの仲間を見過ぎす事は出来ないのだ」

おっと、ここで予想外のキーワードが出て来た。とはいえ、話の腰を折るのも悪いだらう。幾月修司、真田明彦、と続けて自己紹介をされてソファに促される様に座りながら、美鶴の言葉に耳を傾ける事にする。

この世界の裏側に関わっている人間から、これがどういう世界なのかを聞く、丁度良いタイミングだった。



「成程な」

1時間に渡る話し合いで情報をすり合わせて、何とかこの世界を理解することが出来た。相手側——美鶴とかいう女が代表なのだろうが、彼女も此方がどちらかと言えば裏社会と懇意のタイプだと理解し、ある程度警戒しつつも隠さない様に話してくれたおかげで大体解ってくる事が出来た。とりあえず、この世界に関しては影時間と云うのが存在し、その時間帯を動ける人間は大体ペルソナ使いとしての適性を保有している。そしてその影時間にはシャドウと呼ばれる怪物が出現し、人を襲ったりする、と。

その為、桐条とかいう企業の人間として美鶴は保護、そしてその対価に影時間に関する調査などを手伝って貰っている、という形にな



る。

まあ、でも企業のバックアップと生活保護を受けているのだから、命を懸けるぐらいは当然の見返りかもしれないな、とは思わなくてもない。まあ、それはともかく、最初は誤解を解く事にした。そもそも自分がペルソナ使いではなく、デビルサマナーであるという事、そして保護される必要のないぐらいには自衛能力を保有し、その気になればここから離れた場所へと避難できるという事である。

「む……確かにそうか」

「まあ、その上で話を進めるなら……別に、面白そうだし手伝っても良い、とは思っている。此方も一応日が浅くてもデビルサマナーとして悪魔を殺して食ってる人間だからな。シャドウも昨夜物理的に殺せるって判明したし、なら俺に戦力としての価値も見いだせるだろう」

『口が回るのお』

うるせえ、とアプリからの秘匿通信に心の中で言葉を返す。ポーカーフェイスならそこそこ得意だ。というか驚くような事を我慢するのは崩壊世界の方で無理やり慣らされたのだ、人間相手の交渉ぐらいで一々躓いていられない。

「俺の滞在期間は1か月だ。その間、住む場所と武器と弾薬の面倒さえ見てくれれば雇われてもいいぞ。ぶっちゃけこつちに来たのは良いけどやる事がなくて困ってたしな」

「いいのか？ 此方の都合に合わせる事になるが」

「昨日、デカいのを1回殺すのに弾薬使い切って、ここらで補給する場所も解らないから……他にも色々と入用だけど武器調達できるコミュニティにコネがないし。企業ならそこらへん、融通が利くだろう？ 興味のない事だからこそお互いに利益が出る様に動くべきじゃないか、ここは。つつても俺がいるのは1か月だけだ。それで利益の天秤がどう傾くか、良く考えておくれ」

そう、美鶴に告げると、美鶴が少し相談する、と他の男二人を連れて一時的に離れる。その間に此方も片眼鏡の投影ディスプレイに、悪魔達からのメッセージを表示させ、相談をする。

『断られた場合はどうするんだい？』

「その時はその時。元々こんな展開予想していなかったしな。一か月間、適当にぐーたらやって野良シャドウ？ 相手にアプリでアイテムハントでもして魔石宝石稼ぎすりゃあいいさ。一か月ぐらいの宿代だったらあるしな」

『ちゃんと考えて行動しておる様じゃの。なら妾から言う言葉はない』

「まあ、考えずに動けば死ぬ環境に居たから。これぐらいはね？」

こっちのがレベルの高い悪魔……ではなくあれはシャドウと云うのか、アレが出現する世界であるとはいえ、殺意の高さに関しては思い出せば崩壊世界の方が上だろう。何せ、時間帯を選ばずに悪魔が出現する上に、基本的に集団で襲い掛かってきて、騒音を撒き散らせればそれに群がる様に一気に出現してくるのだから。その恐怖を考えれば、目に見える敵で時間帯が制限されていて入り組んだ地形に逃走手段と壊れない盾楯があるだけ有情だ。

アレ、マジで壊れないよな。

「まあ、ちよくちよくメシアンやガイアーズ相手に交渉スキルを鍛えた甲斐があつた、つてもんだ。それに金を使わずに生活できるならそれに越したことはない。マツカもあるにはあるけどなんか、こっちじゃ使えないっぽいし」

『まあ、悪い判断ではないと僕は思うよ！ 苦しみにある他人を救う事は1Lポイントだね！』

『次は1CポイントをためてNを保つ為に罪のない人間を殺すんじゃない？』

「おつとお、アライメント話は地獄だ。そこまでにしろよ……ところであんの方はなんか、意見はないのか？」

横の大人しい人修羅へと視線を向ければ、頭を横に振る。

「主義、主張……どうでも、いい。……サマナー……と、一緒……なら……なんでも……」

「……おう」

果たしてそれが本当にアンの意思なのか、それとも彼女が言わされているのか……完全に俺の契約で彼女を縛っている訳ではないので、

アンの本音を吐き出させる事は自分には出来ないのが、やはり恐ろしい。どこか、彼女に対する壁を……或いは、理解しきれない恐怖を感じている。だが彼女は味方なのだから、そこまで恐れる必要もないだろう、と自分に言っただけで聞かせた所で、

「すまない、待たせた」

美鶴が戻って来た。その手には一枚の紙きれが握られており、

「では傭兵契約の内容を進めよう」

「お、待ってたぜ」

どうやら、仮拠点は得られる事になりそうだった。

◆

「ここがサマナー？ の部屋になる。風呂はX階にある。お前が風呂を使えるのはX時X分からX時X分の間になるから、その間に済ませて欲しい。そしてあー……アン？ の方はX時からX時X分からだ。それを過ぎたら別の奴の時間になるからなるべく時間の間に終わらせて欲しい」

「ふむふむ、成程成程」

鍵を明彦から投げ渡され、それを受け取りながら扉を開けて中に入った。広くはないが、狭いという訳ではない。既に中には家具があり、部屋としては悪くはない様に思える。まあ、流石にステイブンのバーと比べればいくらか格落ちするが、学生向けの寮としては破格の良さだろうと思う。アンを引き連れて部屋の中に入りながら、軽く見渡しつつ、おう、悪いな、と明彦へと言葉を向けると、明彦が此方とアンを見比べた。

「で……本当に一緒の部屋でいいのか？」

やや遠慮する様に、探る様な言葉で明彦が話かけて来た。その言葉にニヤリ、と笑みを浮かべ、

「どうした青少年、男と女と一緒に寝るのがどういう関係か知りたいのか……？」

「ち、違うぞ！ ほら、プライバシーとか色々あるだろう！ うおっ

ほん！」

予想ど真ん中の擦れていない子供の反応に小さく笑い声を漏らしつつ、アンが頭を縦に振った。

「サマナー……一緒」

「ま、邪推するような関係じゃないさ。ただ単純にお互い、一緒にいないと不安だっただけの話だよ。今までずっと同じ部屋で一緒に行動してたしな」

まあ、出会ってからまだ10日目なのだが、まるで磁石の様にどこにでもアンはついてくる。悪魔だから、契約しているからと言えば当然なのかもしれない。だけど、それでもアンや悪魔達は常に一緒にある存在であると認識している。一緒の部屋にいない方が落ち着かないのだ。

何より、今はまだ一人で眠るのが怖い。

目覚めたら全てが消え去っていきそうで、眠って起きるのが恐ろしい。

だからアンが怖くても、一緒に居て貰わないとそもそも眠る事さえ出来ない。

「そうなのか……」

頬を少しだけ赤らめていた明彦はそう言うと、なあ、いいか、と語り掛けてくる。

「お前は……傭兵なんだよな？ サマナーとか言う物の」

「ああ、デビルサマナー、な。気軽にサマナーさんとも呼んでくれればいいさ。必要以上にお互い警戒していたところで疲れるし。それで何用かな」

「いや……俺達ペルソナ使いは影時間以外ではその能力を振るえないからな。日常的に超人的な力を振るえるのはどういう気持ちなのか少し気になっただけだ」

明彦のその言葉にあり、と声が漏れる。そんな制限があるのか、とちよつとだけ驚く。けどそうか、決められたときだけ強くなれるのは何というか、スーパーヒーローみたいで少し羨ましいな、と思いながらも、明彦の言葉に率直に答える。

「いや、まあ、別に」

「……要領を得ない答えだな」

そりやあまあ、そうだな、と言葉を贈る。

「お前、学生だろう？ その感じ。勉強はしてるか？ 後はなんか、こう、夢に向けてトレニングとか」

「ん？ ああ、ボクシングをしているが」

じゃあそれと一緒にだよ、と答える。

「お前に取っっちゃ勉強とボクシングは生きる手段だ。今を、そして将来的に成す為のな。俺にとっちゃこの能力を日中でも使える事が生活する為の道具で手段なんだよ。究極的な話、学生が勉強するのが当然であるように、俺にとってこいつを使うのは当然の事で、寧ろなくなったら困るもんだよ」

ストレージからベレッタを引き抜き、軽く指の中で回転させてガンプレイを披露し、それをそのままストレージの中へと電送する。現れでは消える銃の姿に明彦は一瞬驚いたような表情を浮かべたが、その言葉でどこか納得したように成程、と呟く。

「では俺はこれで行くが……おそらく、今夜の影時間、實力を見せて貰うためにタルタロスに向かうだろうから、それまで用事は終わらせておいてくれ。それではな」

「あいよ、じゃあな」

手をひらひらと明彦に向かって振りながら部屋の外へと見送り、去ったのを確認してから扉の鍵を閉める。その上で部屋へと視線を向け、軽く見渡してからポケットからスマートフォンを取り出す。無言で《ハニー・ビー》を起動させ、室内のマップを表示させたところ

で、  
「アン。ベッドの下に盗聴器、そのタップの中に盗聴器、あそこの壁の裏に盗聴器、んであそことあそこに監視カメラがあるから、ちよつと潰してー」

「ん」

迷うことなく命令を実行するアンが盗聴器やカメラを引き抜いて割り始める。

「いやあ、ごめんねー。お兄さんほら、プライバシー侵害されるの嫌いだから。日常生活の監視は契約に入っていないしね？」と言う訳で潰すけどごめんね、っと」

ぶち、と言う音と共にまた一つ、盗聴器が破壊され、《ハニー・ビー》によつて室内に設置された監視システムを全部破壊する事に成功した。これで収音マイクとか使つて別の部屋から盗聴し続けるのならもはやお手上げだ。その根性は認める。とはいえ、自分が異世界出身である事や、本名の類はこの世界に残して行くつもりはない為、無論黙っているし、喋るつもりもない。

今は美鶴と契約したフリーのデビルサマナーというポジションでいいのだ。そもそも1か月しかない世界なのだから、長居する訳でもないし。変に入れ込めばそれだけ困るのは此方なのだから当然と言えは当然でもある。

まあ、それはそれとして、契約内容は笑い声が漏れそうな良い条件だった。

どうやら真面目な話、ペルソナ能力使いと言うのは非常に希少らしく、影時間で戦闘の行える者は更に希少らしい。美鶴が話した所、戦える人間は彼女と明彦、そしてまだ会っていないこの寮にいるもう一人の女と、後は現在入院中の青年で合計四人だけらしい。その全員のレベルが自分以下らしく、戦闘に慣れている人間で影時間でも戦える者は本当に貴重らしい。

まあ、そこまで事情が分かっていたら、好条件を出す理由も見えてくる。

影時間に存在出来るという時点で拘束するだけ無駄だし、ペルソナ組からすれば通常時から戦える身体能力を発揮できるのは敵対させたくない条件で、それでいて金を出して解決できる問題ならなるべく金で解決させたい。それで情が移るか、或いは気に入つて長居してくれるのなら更にマーベラス、という所だろう。

解りやすいし、隠すような事でもない。だが口に出す事でもない。

まあ、それはそれとして、それなりの好条件だった。住む場所と武器や補充さえどうにかしてくれればそれで満足だったが、給金を出し

てくれるという事なので、崩壊世界では焚火代わりに使う万札の代わりにマツカが欲しかったところだが、この世界にはどうやらマツカは存在しないらしいので、その代わりに宝石を要求した。

純度の高い宝石は悪魔との交渉や触媒、様々な道具の作成に使用できる上に、ステイブーンも開発にちよくちよく使用しているとされている。なんでも宝石はMagとの相性が非常に良いらしい。その為、交渉の為に宝石を常に一定数持ち歩くのがデビルサマナーの常識でもある。だから報酬を宝石で頼み、快諾された。

その他にも崩壊世界では手に入らなかったSMGやライフルの類も用意してくれると美鶴は言ってくれた。後はこれで神経弾さえ補充できれば良かったのだが、流石にデビルサマナーがいない世界であるのが原因か、そういう特殊弾はどうやら存在しないらしい。

神経弾……まあ、神経耐性が存在しない世界だったら当然存在しないよな、とは思いつつ、徹甲弾や榴弾の類だったら腐るほど調達出来るらしい。此方の弾丸もまた全く手に入らない物であり、悪魔を殺し続ける崩壊世界ではそもそも弾薬の調達自体が難しいので、非常に助かる話でもある。

後はどこかで無銘の刀を魔晶と融合させる事の出来る施設でもあればいいのだが、流石にそこまでは贅沢は言えない。簡単な仕事で安全な拠点を得られただけでも喜ぶべきことなのだ。

あのマジシャンとかいうシャドウは初出現で、基本的にフリーエンカウントの様な怪物ではなかったらしいし。

それはそれとして、《不屈の闘志》は許されない。ほんと、アレだけは絶対に許さない。その内スタマ先輩はリレイズ殺しでも覚えてくれないだろうか。

「終わった」

「お、ご苦労。これで部屋のプライバシーは守られた訳だ」

見られたくない手札に、聞かれたくない会話とか色々である。特に世界移動関連に関しては、悪用が腐るほど通じるという事もあるの、割と真面目に監視の類は潰しておきたい。まあ、監視されていると解っていて、それをそのままにする馬鹿もいないという話だ。

というか監視されていると解る時点で安心できる。解るという事は対策をすればいいのだから。それはそれとして、スマートフォンからアプリを起動させ、レコーダーの進歩具合を確かめる。

「まあ、そう劇的に増えているわけもないか。しばらくはシャドウ狩りでお小遣い稼ぐとしますか」

「しゃーないしゃーない。まあ、しばらくは世界の崩壊とかを忘れて贅沢をしよう。そう決めた所でアプリからチエフエイを召喚し、ストレージから購入した着替えの下着とかを取り出し、後タオルとかも取り出す。そのまま、スマートフォンをチエフエイに投げ渡し、

「じゃ、風呂の時間だから俺は風呂つてくるわ。お留守番宜しく」

「え、妾も入りたい!」

「畜生がお風呂とか……はっ」

「なんじゃその態度は! 妾と一緒に入ってやろうかと思つたのに!

妾のぐらまらすばでー……で……あ……妾今二尾じゃった……」

勝手にチエフエイが床に倒れる姿を見た。アレで姐己や玉藻の前と同一視される欲望の獣だと言われているのだからお笑い種である。ただ二尾じゃほとんど力が発揮できないらしく、三尾や四尾になれば、姐己や玉藻の前が使っていたような妖術を使える様になる、とはいつか、必死に弁解してた。

良く考えるとこいつもマツヤも、大が付く有名どころだよなあ、と思いつながらそれじゃ、と片手をあげて時間を確認してから出る。

超、久しぶりのお風呂であった。

そう、お風呂だ、お風呂。

お水。自由に使えるお水。

浴びても良いお水である。

そんな事に使うお水がこの世界にはあるのだ。思わずお風呂に入れるというだけで泣きそう。10日間、水で濡らしたタオルでごしごし、と体の垢を落とす程度で、本格的に体を洗ったりすることはなかった生活である。血と腐臭と死臭が染みついた服装は捨てても、それでも肌や髪に臭いは染みつくものだ。ちよくちよくそれを気にしてデオドラントを使っているのだが、それでも限界はある。



風呂じゃなくてもいい、シャワーでもいいのだ。それで思いっきり体の垢を落としたい。

その願いがついに叶う。

若干心を躍らせながら自分のタオルを片手に教えられた階へと移動し、その中に誰もいないのを確認してから【使用中】のタグを脱衣所の前の扉にかけておく。これでキヤア！ えっちい！ な事にならないだろう——俺が。まあ、そもそもこの寮自体、風呂場を使える人間を時間で分けているので、そういう問題は発生しないだろうが。

まあ、それはともかく——風呂である。

服を脱ぎ捨てて籠の中にダンク。

籠を真つ二つに割る。

「うーん……うん、ちよつとテンション上がり過ぎてたね……うん」

反省しつつ、明日、新しいのを買って来ようと心に決める。それはそれとして、服を脱いだ所で徐々に晒す無防備な姿に、そこまで警戒する必要のない世界なんだなあ、と軽く息を吐き、そのまま風呂場に入る。

金が入っているんだから広いのかなあ、と思ったが、割とそんな事はなく一般的な家庭サイズの広さの風呂場だった。或いは贅沢しすぎないようにする配慮なのかもしれない。そんな事を考えながらシャワーの温度をボタンで調節しつつ、そのノズルから溢れ出すお湯を被った。

体を跳ねる水が風呂の中に入らない様に気を使いつつ、頭から被る熱いお湯の流れを体で感じ、声が喉の奥から零れる。

「あ——……」

そうだ、そうだった。これが湯を浴びるという感覚だったな、と熱い湯を被りながら思った。こんな当たり前の文化をすっかり忘れていた。馬鹿馬鹿しい事だが、本当にそういう状況にならないければ人間、自分の日常がどれだけありがたい物なのかを実感できないのだろう。それをこうやって、シャワーを浴びていると良く解る。

解り過ぎて辛い。

「あー……風呂に入ったら溶けちまいそうだな。さっさと洗って入るか。……すげえ！ シャンプーが汚え色に濁った！ どんだけ汚かったんだ俺！ 恥ずかしすぎる！ うおおお、俺から落ちろ世紀末の汚れよオ……！」

一人で何を言っただこいつ、と思わなくもないが、体を擦れば垢が落ち、髪を洗えば汚れが泥の様に落ちて行く。それが風呂場の床に落ちて、濁った水たまりになるのを湯が流して行く。そんなものを見てればビビるのもしようがない。というか10日間でこれだけ汚れるものか、と軽くビビってすらいる。

でもまあ、それも全部洗い流す。石鹸を使って全身を磨いて、余すことなく垢を引き剥がして洗い流す。そしてそれが終わった所で普段よりも艶の良い黒髪が鏡に映った所で満足し、

風呂の中へと入る。

「あああああああああー……ふろはよいぶんめー……」

そう言えばアツティラ大王って悪魔として出現するんだろうか？ 寧ろゲーム版の方で。悪魔の姿って信仰とかに凄まじく影響を受けるという話だが。でも、まあ、チエフエイの姿が欠片も有名な玉藻の前や姐己の姿にも似てないし、近年のゲームアニメ文化ではやっぱり概念弱いのかなあ、とは思わなくもない。夢の無い話だ。

まあ、それはともかく、

風呂はヤバイ。

足を伸ばすことが出来る長さを持った風呂は肩までつかれば、その熱で全身をマッサージされている様なもので、全身を温めながら凝り固まった筋肉がほぐれて行くのを感じた。この安らぎを感じていなかった。自分ではなく、他人によって安全が確保された時間。そのおかげで何にも恐れず、好きにこの一時を楽しめる。

ああ、生きていて良かった。

そしてステイブンのバーにも早いところ、風呂場を導入して欲しいところだ。崩壊世界にいる間はなくても行けるんじゃないか？ 的なノリだったが、こうやって入ると抜け出せなくなりそうだった。ああ、でもこれはヤバイ。語彙が消滅するレベルでヤバイ。ずっと

入っていたくなる。

いや、まあ、時間制限はあるので無理なのだが。

「あ、……………極楽極楽」

汚い声を漏らしながら湯にどつぷりと浸かりつつ、ああ、と自分の体を見た。ここ数日間で見ただ事のない傷が大量に増えている。銃がメインとはいえ、最初の頃はゾンビドッグに腕を食い千切られそうになった時もあった。ガキに爪で切り裂かれたり。その度にディアで死ぬ思いをしながら回復していたなあ、と体に刻まれた傷跡を見ながら思い出す。腹筋もいつの間にか割れている。まあ、アレだけ動けるようになれば、それもそうか、とは思わなくもない。

それでもまだアンには勝てない。

アンの方が肉体を理解している、というか急激に変動する肉体を完全制御している、というか……………インフレする身体能力を俺よりも遥かに上手く使いこなせているのが解る。マジシヤンの時もそうだった。マジシヤンを手慣れた様子で蹴り飛ばしていた。

「蹴り飛ばし……………」

夜中、月光に照らされて駆け抜けるアン。全力で蹴りを放ち、そして強調されるオープンスリットスカートの下のスパッツ、そのライン。形。

凄く良いケツをしたた。

「……………寝ている間に暴発されても堪らないし、今のうちにヌイておくか……………」

近くになあ、女がいると、そこらへん物凄く気まずいんだよなあ、と呟く。一人になるタイミングというのが今の今までなかったし、結構我慢しているのだが、夢すら見ない浅い眠りか、夢すら見る事のない深い眠り、もしくは性欲すら沸き上がってこないほどの重労働。それで今まで乗り切ってきたのだが、こんな状況になると流星に感じるものもある。

それが暴発する前に、何かをオカズに一発ヌイておく必要がある。

「でもなあ……………オカズに身近な知り合いを使うとその後が滅茶苦茶気まずいんだよなあ……………」

じゃあどうしろってんだよ、という話。どうしたもんか。

「やっぱアンかなあ……」

「サマナー……呼んだ？」

「呼んでません!!」

かなり軽い感じに浴室の扉を開けて入って来たアンの声を聞いた瞬間、体を隠す様に風呂の中で縮こまりながら、入り口の方へと視線を向けた。そこには体も隠さず、服も着ていない、ありのままの姿のアンの姿があった。普段はワンピース風の服の下に隠されている胸は完全に開放されていて、何時もよりも大きく見える。陰部も恥ずかしがる事無く晒されており、自分の裸が見られているというのにその表情は一切変化しておらず、そのまま迷うことなくシャワーのお湯を流し始めた。

「待て待て待てえ！ 何をしてるんだ！ 何をしてるんだお前!!」

「お風呂」

「違う、それは見れば解る……!」

そう言っている間に俺がそうしたように、アンが体を洗い始めていた。水が髪を濡らすその姿、そして肌を水が流れて行く姿、洗う度に垢が落ちて磨かれて行くその肌には艶めかしさがあった。思わず視線を逸らしながら、いや、そういう問題じゃないだろ!?

「時間が違うだろう!？」

「チエフエイ、が……次の時間……なら、一緒に入れば、それで、お得……って」

ふう、とアンが息を吐いた。珍しく長く喋ったが、その内容が最低過ぎた。というか主犯はお前か、駄狐。お前絶対に許さないからな、とは思いつつ、ここでアンに直ぐに出て行け、と言えば解決する問題だった。

「……」

言葉を放とうとして、しかし、このシチュエーションが美味しすぎて、言葉に出来ない自分の根性が恨めしい。いや、あの駄狐もおそらくはそれが解っていて送り込んできたに違いない。畜生、駄狐め。良くやった、とは言いたいけど絶対に許さねえからな、と思っている間

にシャワーで体や髪を何時の間にか洗い終わっていた。早い……の  
じやなくて、こつちが呆然としすぎなだけだ。

「って普通に入るのか！ あ、こつち向くな！ 絶対こつち見るなよ  
！ そう、背中な！ 背中を向けろよ!!」

「……？ サマナー……が、そう……言う……なら」

ほんと止めてください。そう思っている間にアンは背中を此方へ  
と向けるように風呂の中に入り、二人も風呂に入った事で湯が少しだ  
け溢れる。詰めてくるように背中を此方へと預けて風呂に浸かるア  
ンの存在に、気が気ではない。どうすりゃあいんだよ、と思いが  
ら現実逃避する為に視線を屋上へと向け、股間に感じるアンの柔らか  
い尻の感触を忘れようとしている、

「サマナー」

「お、おう！ 何でもないぞお！ 本当になんでもないからなあ！」

バレた？ もしかしてバレた？ バレてしまったのかこれ!? 胸  
の中に絶望感と不安が沸き上がってくる中で、アンが続けて声を放つ  
てきた。

「——サマナー……私……味方、だから……」

アンが正面を向いたまま、そんな声を此方へと向けていた。その声  
に思わず、思考が止まった。だがそれに気にする事無く、湯に髪を広  
げながら、アンは止まる事無く言葉を続けていた。

「サマナー……凄く、不安……そう。私、に、は……良く解らない……  
けど。サマナー、不安、私……心配？」

そこでうーん、とアンが唸る様に首を捻る。本当に珍しく言葉を  
放っている様子。そこに言葉を挟み込めずに、続くアンの言葉を待つ  
ていた。そこであつ、とアンが声を零した。

「サマナー……ううん、リ्यूジ、不安。私、悲しい」

「そう、か」

「ん」

そう言うとアンは言葉を止めた。それで喋りたい事は言い切つて  
しまったのだろう。

アンは——人修羅は、DDSアプリと契約している悪魔ではな

い。支配人ルイ・サイファーとの仲介契約によって使役されている、肉体のある生身の悪魔だ。そして彼女のレベルの方が高い為、彼女と契約する事は出来ていない。だから彼女が此方を殺そうとすれば止められないし、本音を命令して聞き出す事も出来ず、いわゆる、保険のかかっていない状態だった。

チエフェイやマツヤが元は高位悪魔だったとはいえ、安心して使役できるのはDDSによって完全に契約して使役している事であり、もし、此方が命令したとしたら、それに従って絶対に行動しなくてはならない。そういう制約が存在している。その縛りがないアンはつまり、自由になっている、自分よりも強い存在で、そんな存在を頼らなきゃいけないという事でもあった。

何時、裏切られたものか、解ったもんじゃない。

あるのは信用しろ、と言う言葉であり、そして今のアンの言葉だけ。だけなのだが——不思議と、今の言葉だけでなぜか、アンを信じられる様に感じた。魔法がかかっていたのか、それとも俺がチョロイのか。その判別はつかないが……なんとなくだが、アンは本気で此方を案じている、と言うのが言葉で伝わって来た。

だから、

「なにやってんだ」

「ん……う」

首を傾げながらアンが尻をもももぞと動かしていた。おかげで折角冷静になって落ち着いていた下半身が元気になって勃起していた。湯の中で勃起した逸物がなんか、柔らかい感触に触れて、擦られている。というかアンが密着する程に風呂の中で体を寄せているので、体勢から大体前を見なくても何が起きているのかが解る。

これ、バツクから素股になってないだろうか。心地よい刺激が竿を擦り、柔らかい尻の感触が押し付けられる。風呂という中で感じる暖かさと合わせてすさまじい気持ちよさを感じるが、違う、そうじゃない。

「なにやってんの!?!」

「ん……なんか……ぴりぴりする……?」

「いや、素股し始めればそらそうよ！」

腰を止める、と腰を掴んでアンの動きを強制停止させるが、アンが首を傾げながら肩越しに首を傾げる。

「すまた……？」

「ジーザス……いや、待って……アンちゃん？俺と一緒に風呂に入るの恥ずかしくないの？」

「……？」

何言っただこいつ、的な表情が返ってくる。なんというか、質問の意味が解らないというか、何を問題としているのかが解らない、と言う表情だ。その表情で大体察した。この子、生殖概念は理解しているけど、根本的な性知識とか、性に関する知恵がない。

つまり、完全な無知っ子だ。

無口でクーデレで無垢で悪魔で美少女とか一体どれだけクリティカルな属性を盛ってくるのだろうか、と両手で顔を覆うと、アンが再び竿を優しく刺激する腰の動きを再開し始めた。いや、ほんと待て、そんな覚悟は欠片も出来てないから。気まずいとかいう話じゃないので、本当に勘弁して欲しい。

その気持ちさが性欲を上回った。

「はい！お風呂……まで！ ゆっくりと浸かれよ！」

「あ、サマナー」

アンを押し飛ばしてお風呂から飛び出す。まだ性に目覚めていなかったとかどうしろってんだ！

駄狐エ！と、心の中で叫びながら脱衣所へと飛び込んだ。まだ、夜はこれから始まる所だった。

## 死神と塔 IV

「これがタルタロス、って奴か」

「ああ、普段は学園。だが、影時間の間だけ、その姿をこうやって塔へと変える」

「はあー……」

不思議がいつぱいだなあ、裏世界は。そう思いながら天高く聳える塔を見据えた。空を超えて月にさえ届きそうな高さを誇る塔は地上からはその全容が見えない。そして確かに、その内部からは大量の Mag と怪物の気配を感じる。今、《エネミーソナー》の範囲を拡大して確認したら後悔しそうな数を見そうなので、大人しく美鶴の先導に従ってタルタロス内部へと進んで行く。そこについてくるのは明彦、アン、そして何人かの黒服だった。

黒服の方は黒服の方で、鉄の塊を運んでいるが、どうやらペルソナ適性はないらしく、雑用のみらしい。

そんな少人数でタルタロスへと進む。

入った所で広がる階段などが見えるエントランスホールに、大型バイクを美鶴が止めた。その他にも黒服たちが運んできた巨大な鋼のケースをそこに設置し、準備らしきものが完了した。ペルソナ使いでここにいるのは明彦と美鶴のみ、幾月はタルタロスには近づかない様になっているらしく、此方には来ていない。あと一人、こっちに来る前に一人だけペルソナ使いを見たが、どうやら彼女はまだタルタロスへと来るつもりはない……というよりは怖がっているらしい。

「岳羽ゆかりと入院中の彼を除けば現在戦えるのは私と明彦とサマナーだけだ。我々の武器はペルソナ、そして原始的な武器になるのだが……それはある特殊な物を使わないとこの影時間では機械が動かないという点にあるのだが」

ポケットからスマートフォンを取り出し、ついでに銃を手元に電送させる。まあ、普通に動く。

「ま、俺の事はミステリアスなグッドルッキングガイ、って事で。使えるもんは使えるって事でいいのさ」



「そうだな……では我々の目的はこのタルタロスの調査にある。そしてそれには必然的にタルタロスに巢食うシャドウとの衝突になる。我々には戦力が求められる。そういう訳で、今夜はその實力を見せて貰うぞ」

「仰せのままに」

「なら早速、好きなものを選ぶと良い！」

そう言つて美鶴が言葉を発すと、それに従い黒服たちが運んできた鋼のケースの拘束を解いた。パチン、という音共にケースが何段にも解れながら開き、その中に格納されていた数々の兵装の姿を見せた。そう、それは何十という銃が詰め込まれたウエポンケースだったのだ。軽く見ただけでもハンドガン、ロケットランチャー、グレネードランチャー、ショットガン、ライフル、狙撃銃、サブマシンガン、と様々な銃が所狭しと格納され、飾られていた。それを見てヒュウー、と口笛を吹いてしまった。

「好きなものを好きなだけ持つて行け。ただしまるで使えない事が判明したら地の果てまで追つて代金を払わせるがな」

「おお、怖い怖い。まあ、報酬分は仕事をしますよ……つと」

ミリオタでもないのに、細かい銃の種類とかは良く解つたものではない。だがなんとなくだが、銃を握ればどれが自分に合うと言うのは伝わってくる。今使っているベレッタはそのファイリングが合っていないし、ショットガンもそうだ。とはいえ、他に使える銃器もないので使い続けている。本当ならデビルバスター用にカスタムされた専用銃が欲しいところだ。

何せ、本気で銃を連射しようとするれば、引き金を千切ってしまう。グリップを握り潰してしまう。その僅かな匙加減を《ガンスリンガー》という才能で補っている。正直、手に馴染む武器があればもうちよつと銃で戦えるんだけどなあ、とは思わなくもない。ともあれ、そんな《ガンスリンガー》の才能がある為、

大体握れば良し悪しが直感的に理解できる。野球選手が手に馴染むバットを探す感覚で。こんな世紀末でもなければ目覚める事のない才能だっただらうと思ひながら、銃を手にとって握つてみたりし、

確かめる。おもむろにラックからライフルを手取る。

「おーい、イケメン」

「僕を呼んだかなサマナー!」

DDSからマツヤを召喚しつつ、Magを与え、変身能力を解禁させる。アプリから召喚されたマツヤは魚の姿ではなく、白い布を体に巻いた褐色、長い白髪の青年の姿となり、その姿が出現した瞬間にライフルの銃弾をイケメンマツヤの顔面に叩き込んだ。そのいきなりの姿に美鶴と明彦が驚くが、

「サマナー! 流石にターゲットにするなら一言ぐらい言って欲しいかな!」

「お前銃撃無効属性ついてるんだからちよつと黙ってターゲットにされてろ」

「文化が違う……!」

黒服の誰かがそんな事を呟いているが、ガン無視してイケメンに銃弾を撃ち込む。ライフルの感触は悪くはないが、やや柔らかい。ダメだな、とラックに戻してショットガンを取り、手に取った瞬間の感触がダメなので塵だと判断し、次の手に取って確かめる。グレネードランチャーとロケットランチャーは根本的に重要な武器だ。炎弱点の悪魔を纏めて焼き殺すのに使えるのだから重要じゃない訳がない。

ガキの群れとかグレネードランチャー一発で蒸発させられるのだから、これはキープである。

「あんまり脆い構造だとあっさりと使い潰しちゃうからなあ……頑丈な奴がいいんだよなあ……うお、デザートイーグルじゃん! 俺でも知ってるやつがあるとは……あ、でもこれも脆い方だな。グリッパ握り潰しちゃうわ。あ、このライフルは悪くない。重いし頑丈だし……うん、威力も申し分ないな」

イケメンにライフルの弾丸をぶち込んだところでキープ決定。RPG等と合わせてストレージに電送させる。持ち運びが便利なのは本当にステイブン様様だよなあ、と思いつながら、ラックに飾られている大型自動拳銃に目が行く。自然と視線が吸い寄せられるそれは

片方が黒く、もう片方が白く、自然とそういう色をした銃であり、同時に濃密なMagと概念の気配を感じる。

「……なあ、この銃はどっから持ってきたんだ？」

「ん？ 誰か説明できるやつはいるか？」

「うっす、では自分が」

そうやって黒服の一人が美鶴の声に答えた。

「此方は影時間内でもなぜか稼働する大型自動拳銃です。その性質から影時間の間にお嬢達に渡せば戦力向上になるのでは？ という考えがあつたのですが……」

「ほう、初耳だ……で、何故私の耳に入らなかった？」

美鶴の言葉に黒服がそれがですね、と言葉を続けた。

「……性能検証をする為に影時間に持ち込んだ同僚がそれをシャドウへと向けて放った時、シャドウを射殺する事に成功しましたが……その、撃った反動で腕が複雑骨折しまして……今も入院中です」

ほう、そりやあ中々ご機嫌な奴ではないか、と迷う事なくウエポンラックからそれを外して手に取った。その瞬間、手にフィットするよな感触と凄まじい重量を感じ取り、また同時にその中に感じる対悪魔概念を感じ取った。元々そういう風に作られた、というよりは……後天的にそういう形に至った、という感じがする。

右手と左手にそれぞれ握ったそれを軽く回転させてから真っ直ぐ、イケメンへと構え——引き金を引いた。

ガツン、と腕に来る反動を感じながらも、その反動に心地よさを感じていた。放たれた弾丸はベレッタで放っていたそれよりも遙かに早く、そして力強く、一瞬でイケメンの頭に到達し、無効化する筈のイケメンを銃弾の衝撃で軽く仰け反らせた。

「……これ、根本的にデビルバスターとか悪魔人間とかが使う事を想定して作られている様な気がするな」

床に転がったイケメンを全力でプギヤるチエフエイの笑い声を無視しつつ、気に入ったので貰う事にする。握っていて解るのは恐ろしく硬い、と言う事。普通の人間なら引き金を引くのに指が千切れそうな程力を入れる必要があるだろう。そしてこれ自体で殴っても人の

頭を割れるぐらいの強度がある。

人間を超えた力を持つ者が、それでも銃で戦えるように……という感じで作成されたような気がする。まあ、素晴らしい逸品であるのには変わりはない。ベルトの中につつまみつ、ウエポンラックの中にあるミニミも頂く。こんなものを用意するとは中々のクレイジーさ、実に気に入った。

それはそれとして、

「今の二挺自動拳銃、いったいどうやってこんなところに回って来たんだ？」

「いえ……同僚の持ち込み品なんですが」

「持ち込み品」

「ええ、なんでも餓死しそうな赤いコートの男にピザとストロベリーサンデーを食わせてやったからお礼に貰ったとか」

「ストロベリーサンデー」

「ちなみに銘はルーチェ&オンブラらしいですよ。まさかこの世にそれをまともに扱える人間がいるとは思いませんでしたが……」

いや、まあ、確かに人類が使う事を想定してない拳銃だとは思いますが、身体能力が爆発的に上昇したデビルバスターやデビルサマナー、或いは異能者だとかはこういう、特別製の頑丈な銃じゃないと握り潰してしまうのだ。それを気にしていると銃を連射出来なくなるし。今までがそういう状態だった。これからはもうちよつとフリーダムに銃弾をばら撒けるだろう。

それはそれとして、イケメンの役目は終わったのでさっさとDDSSに戻してしまう。そしてその代わりに今度はチェフエイを召喚する。勢いよく召喚されたその姿を見て、とりあえず蹴りを入れて床に転がし、踏み潰す。

「お前、風呂の事は絶対に許さないからな」

「なんでじゃ！ 良い思いが出来たじゃろ！」

「それとこれとは話が別だ駄狐」

一回ぶち殺してやろうか、と思ったが、そろそろペルソナ組を仲間外れにし続けるのも悪いだろう。チェフエイを蹴り転がして、本日の

肉盾を決定する。

「えーと……とりあえず実力を発揮すればいいんだろう？」

「その……なんだ……本当に大丈夫か？」

「不安そうな表情を浮かべるなよ。茶番やつてる自覚はあるから」

まあでも、これぐらい遊んでおけばもうちよつと軽い感じで話しかけてくれるだろう、と思う。美鶴も、明彦も警戒するせいでどこか言葉が硬い、というか心の壁が存在していて完全に拒絶されている気がする。まあ、外様だからしようがないのかもしれないが。そんな事を考えつつチエフェイを階段のところまで転がし、L&Oの銃口を向ける。飛び上がったチエフェイが階段を走って上がって行く。

「うっし、肉盾が前に出たから進もうか」

「いいのか……これで……？」

「ああ、アレは肉体を持たない悪魔だし、ミンチになった所で地返し玉か反魂香でも用意すれば即座に生き返るよ。それに契約を結んで戦ってくれているんだしな、少なくとも同意はある……」

銃を肩に担ぐように階段へと向かって歩き出しながらそれとも、と明彦へと振り返りながら言葉を向ける。

「見た目が童女だから非道には耐えられないか？」

その言葉に明彦は少し迷ってから頷いた。成程、とそれで理解する。やはり明彦も、そして美鶴も、腹に何かを抱えているとしても、その根っこは善性の人間であるらしい。略奪とか殺人とかさえやらなければ、仲良く出来そうだなあ、と計算しつつ言葉を口にする。

「じゃあ今夜は悪魔に関する良い勉強になりそうだな」

「ん？ どういうことだ？」

「いや、見れば解るって」

そう告げて、アンを引き連れて階段を上って——タルタロスへと侵入した。

◆

「うーむ、不味い」

バリバリと音を立て頭からシャドウを食べながら、そんな事をチエフエイが呟いていた。余りにもグロテスクすぎる光景に、明彦が召喚機と呼ばれるペルソナ能力を発動させる媒体を片手に、動きを完全に停止させていた。それもそうだ、見た目幼女が異形の怪物に噛みついてそれを食っているのだから当然だ。

「だがゾンビやガキ等と比べればまだマシじゃな。そこはかたなく人の欲望の味を感じるのも悪くない。サマナー、妾ちよつとグルメっぽくない？ 評価の仕方グルメっぽくない？」

「俺が知るか」

更に近づいてくるシャドウの対処をチエフエイに任せ、いいか、とチエフエイを指さす。

「悪魔つてのは大体あんな感じですよ。見た目で騙されちゃいけません」

「言葉ではなく魂で理解した」

まあ、これを見てしまえば解るだろうが、所詮悪魔は悪魔なのだ。どう足掻いてもその概念に縛られるし、見た目がどんなに可憐であろうとも、結局は中身が悪魔だから、その外見で判断してはならないのだ。特にチエフエイは姐己や玉藻の前と同一視される狐の妖怪だ。つまりは傾国の女だ。今はまだ二尾の状態で力も姿もほとんどダメダメになっているが、これで力を取り戻せばつまりはそういう悪魔になるという事だ。

明らかに悪魔なのに初対面で明彦に警戒させなかったという時点で、既にチエフエイは概念通りの力を発揮している。

「まあ、この先他に悪魔と出会う事があるか解らないが、絶対見た目で判断するなよ、とは教えておく」

「授業料は中々に高くついたがな」

「うーん、中々ビターな味じゃのお」

「まだ食ってたのかよお前」

チエフエイかマツヤが戦闘に出るだけで、空気が緩みっぱなしになるよなあ、と思いながらチエフエイを壁にする様に出したまま、タルタロス内部を進んで行く。この塔はどうやら何百を超える階層

により構築されており、2階から3階へと上がった感じ、全くダンジョン構造に変化が見られなかった。ひたすら作業感の強い探索だった。そして薄々感じてはいたが、シャドウたちの巣でもある。

中に入り、《エネミーソナー》を使ってみればアホみたいな反応がある、まるでタルタロスそのものがシャドウを材料に構築してあるかのような気持ちの悪さだ。だが幸い、出現するシャドウの強さは制限されているようで、

レベルがどれも10以下の雑魚しか出現して来ない為、解りやすい虐殺になる。

チェフエイを前において壁にしつつ、見えてくるシャドウで射撃耐性を持たない者はクイツクドロウで射殺し、そうでないのはチェフエイが喰ったり、アンが蹴り潰したりして一瞬で始末する。ここら辺のコンビネーションは崩壊世界からやり続けているルーティーンワークでもある為、そこまで難しい事はなく、サクサクとタルタロスを進んで行く。

此方が出す素早い動きに美鶴からの通信も、そして現場で此方を見ている明彦も驚いている様だった。まあ、ペルソナ使いがどういうものかはまだ良く解っていないのが事実なのだが、基本的に、サマナーの戦いとは連携の戦いだと学んでいる。

攻撃、防御、支援。この全てを一人で用意する事が出来るのがサマナーの魅力だ。

「攻撃用の悪魔、防御用の悪魔、支援用の悪魔。そうやって役割を割り切らせて悪魔を用意する事がサマナーは出来る。そうなると自分で連携を構築できるからな。これぐらいは出来て当然だとも」

何より二尾チェフエイは斬撃と精神耐性を保有している。つまり比較的多い、爪などの攻撃からダメージを最小限に抑えることが出来るし、プリンパやマリソリンをはじめとした精神攻撃に対して惑う事もない為、即座に対応が取れる。今はデビルソウスなどが足りないが、ステイブーンが悪魔合体を解禁したら、状態異常を解除する系統の魔法を習得させたいと思っている。それと物理、後は呪殺。前衛防御と支援。それが今のところのチェフエイの役割だ。

実際、傾国の概念で無駄に攻撃はチエフエイへと向かう。その事を考えたら適役だろう。

それに比べ、アンは回復魔法を習得しているが、能力が攻撃に偏重している。ぶつちやけた話、ディアを使っているよりは攻撃に参加させていた方が遥かに効率が良くなる。まあ、ここら辺を考えなきゃいけないのもサマナーの仕事だ。

最終的にマツヤは攻撃、チエフエイを支援と妨害、アンを攻撃という形に成長、調整させたいとは考えているが、今はまだ無理な話だ。

それはともかく、このメンツで崩壊世界で毎日戦ってきたのだ。連携の一つや二つ、簡単なものだ。《エネミーソナー》と《ハニー・ビー》でどこにシャドウがいるのかは把握しているし、5戦も行えば大体、このエリアに居るシャドウがどんなものかはつかめてくる。

そしてここに出現するシャドウで、射撃に対して耐性を保有しているものはいない。その為、チエフエイを前に出してシャドウを誘引し、出てきたところをクイツクドロウで射撃し、シャドウの脳天にL&Oから弾丸をぶち込めば、大体それで戦闘が終了し、次へと進める。「強い、とは解っていたがまさか手を出す暇さえないとはいな……」

「戦闘は何時だって先手必勝、いや、先手必殺だ。先に動いて先に殺すのが一番効率的な戦い方だよ」

更に理想を言えば相手に反応すらさせないのが一番だと思う。明彦にタルタロスの中を進みながら伝える。

「根本的に俺は危ない環境で育てられたからな。……まあ、簡単にいえば都市規模でタルタロスの状態になってる場所だ。だから生きていくためにはより早く、そして確実に悪魔をぶち殺せるようにならなきゃならん」

「成程、自然と鍛えられる訳か」

明彦の納得する言葉に、自分が強くなった最大の理由は最近、マジシャンにスタマ先輩でメギドラ花火を打ち上げた事が原因である、とは絶対に言わない。少しでもプロフェッショナルさを演出し、良好な雇用関係を続けるためにも嘘は大事なのである。それはそれとして、明彦が止まれ、と声をかけてくる。



正面には階段が見える。

「この先の階段を上った層……5層には門番と呼べるシャドウが屯っている。そこにはターミナルもあり、それを使えば一瞬でエントランスまで戻れる。ただ、面倒な事にそいつは定期的に蘇るらしくてな」「それが試験相手だ、つて事だな」

「ああ、話が早いのは良い。俺も拳を振りたい所だが——」

『明彦が手を出してしまつては実力を見る事も出来ないからな。いや、おそろく現時点で我々よりも強い事は解るのだが』

「まあ、建前は必要だもんね。任せろ。一瞬でケリを付けるから」

そう告げて階段をゆっくりと昇つて行き、偵察を行う。階段を上がつた向こう側のフロア、そこには仮面を被った大きなハーピーの様なシャドウが道を塞ぐように存在していた。隠れながら近づく事もなく《アナライズ》を行い、データを取得しつつ、そそくさと離れる。「成程、ヴィーナスイーグル。5レベルとは中々あるし、疾風属性を持つてるのが厄介だな」

疾風属性は他の属性とは違い、威力がやや低い属性だ。ガルやマハガルを初めとする疾風属性は確かに威力が低いのだが……そのかわりに、満遍なく多くの悪魔に突き刺さる、というか弱点や耐性持ちの悪魔が少ない属性なのだ。その為、疾風系統は一つ仕込んでおけば、耐性による詰みがなくなるとかという話はステイブンから教えて貰った。それはともかく、

「食いしほりもない雑魚め……これでボスのつもりか」

「ん？ 倒す算段が出来たのか？ お手並み拝見とさせて貰おうか」

階段から降りてきて明彦と合流し、此方の言葉を聞いた明彦が期待する様に言葉を向けた。それに応えるように、サムズアップを向けてから、視線をアンへと向ける。それを受けたアンは此方の視線に気づき、頷いた。足を全力スイングし始めるのを確認してから、

スタマ先輩を召喚する。

『君は目玉焼きに何をかける？ 俺ニトロ派』

「!？」

『こ、個性的な仲間？ だな……？』

美鶴の通信にそうだろうか？ と答えながらそれをアンの方へと投げつけ、アンが見事な蹴りをスタマへと叩き込み——その姿が、階段の上の方へと一瞬で消えて行く。それを蹴り飛ばした瞬間、明彦の肩を掴んで横に引きずり倒す様に床に倒れ込み、自分の耳を両手で抑え込む。

「サマナー!?! 何を——」

言葉が続く前に、爆音と爆発の連続で轟音が上層から響く。シャドウの悲鳴が一瞬だけ聞こえたような気がしたが、それすらも連続で発生する閃光と爆発音によつて一瞬で掻き消え、続く爆発で音という音が喰われる。タルタロスすら揺れていると感じさせるような轟音がしばらくの間続き、Magが自分の中へと流れ込み、一段と上昇する自分の力にレベルが上がったのだと気づいてヤッホー、と心の中でガッツポーズを握りつつ、横で転がり、ドン引きの表情を浮かべている明彦にサムズアップを向ける。

「いいか、確殺できる手段があつて、それを使わない奴は馬鹿だ。動かない敵なんてただの的なんだ。戦う前に偵察して確殺手段を用意するか、カジャ系全部積んでから殴ればいい」

「意味は解るが納得はいかんぞ……!」

げらげらげら、と笑いながら試験を終わらせた。それにしてもスタマ先輩のメギドドライバーで破壊出来ないとは、もしかしてこのタルタロス凄まじく頑丈なのでは……?」

◆

そんな風に、タルタロス探索の夜は終わった。美鶴と明彦にスタマ先輩と言う恐怖の影を永遠に心に刻み、絶対にアレを使わせてはならないという誓いを勝手に刻まれながら。まあ、携帯し再利用できる破壊兵器と言う時点で確かに、みだりに使わせてはならない、と言う考えは正しい。俺もそんな簡単にスタマ先輩を解き放つつもりはなかった。だが確殺が見込める状況、相手が動かない、そして閉鎖された空間。そんな状況で確実に殺せる手段を扱ばない方が甘えなので

ある。

そんな訳で、タルタロスの夜は終わった。

近いうちに新たなペルソナ使いが加入するらしく、夜の後で寮は更に騒がしくなり始める。

増える学生、助けられない大人、要請しない限りは最低限の支援しか行わない美鶴の実家。果たして本当にあのタルタロスを攻略する気はあるのだろうか？ 子供に全てを任せた状態で。疑問に思う事は多く、同時に頼みさえすれば一瞬で兵器の類は揃えてくるその対応にも首を傾げたくなる所でもあった。

そんな風に一時的な拠点での生活が始まった。

昼間は寮でぐだぐだ成長計算を行ったり自分の旅の記録を書き残したりし、夜になったら明彦と美鶴とタルタロスへと攻略とトレーニングに向かう。

そんな、崩壊世界とはまるで違う日常が始まる。

平和でありながら混沌とし、そして同時にどこか不穏——否、不吉な気配が付きまとう。死神と塔の扉の世界。そう、未だに塔は見えないのに死神が見えない。その名を冠する扉で、塔というタルタロスを示すのなら、もう一つ、共にあるべき死神の存在がない。

それが致命的に物語に欠けていた。

そのピースが埋まる事になるのはその出会いから数日後、約一週間後の出来事になる。

それはとある人物の目覚めであり、或いはその物語に必要とされるキーパーソンの目覚め、そして復活だった。その死神が目覚めた事で漸く、

世界に記された物語が動きだす。

## 死神と塔 V

巖戸台分寮の台所事情。

必要な事に権力を使うのは良い。だけどそれをごり押しして使うのは駄目だ。桐条美鶴という女はめんどくさかった。でも解らなくもない理論だった。頼りすぎるとそれだけ墮落する。桐条美鶴という女はそれを理解していた。だからこそなるべく自分の力で、そして必要な時には桐条の力を使う、というタイプの女だった。現代では非常に珍しい女傑タイプ。力と金に溺れる人間が多いのに、しっかりとしている奴だった。ただ、まあ、やはりペルソナ使い。

普通に仮面を被って生きている人種なので、欠片も信用できないのが悲しいのだが。

まあ、それはともあれ。そういう事で寮の施設や維持というのはかなり自分の手でやろう、というスタイルになっている。お金もちよくちよく桐条から調査協力として支払われているらしいが、それも全てが使える訳ではなく、学生がお小遣いとして遊べる額までに抑えられている。まあ、なんとというか、人的配慮というか常識的な配慮とか。そういうのを感じるものだった。

掃除は流石に範囲が広いので専用の業者を呼んでやらせてはいるものの、炊事と洗濯に関してある程度自分でやらないといけない。そして寮に住んでいる者は料理に関してはある程度ローテーションを組んだ当番制にしよう、という事になった。そしてついに、訪れてしまったのだ。

俺の当番が。

朝、まだ学生たちが学校へと出る前の時間。

即ち、朝食を作る時間。

寮内のキッチン、様々な材料が広げられた中で、ふむ、と呟きながら腕を組んでその様子を眺める。食べる人間は岳羽ゆかり、桐条美鶴、真田明彦の三人に自分とアンを加えた合計五人分。それを作らなくてはならない。無論、そんな経験はない。少し前までは卒業間近の学生だったのだ。一人暮らしたからある程度の料理は出来る。

だけどそれは自分用のずぼら飯だ。他人に食わせるものじゃない。ここに至り、根本的にどうすりゃいいんだ、という問題が浮き上がってくる。困った、下手なもんは食わせられねえ……！

と、思ったところで、思いついた。

サマナーは出来る奴にやらせればいいんだ。無言でチエフエイを召喚する。そして召喚されたチエフエイに、食材へと指さす。

「じゃあ、飯を宜しく」

「飯炊きをさせるサマナーとか妾も数奇な者に使役されるもんじやの。いや、まあ、考えは間違つてないんじやが……なんか、こう、もやもやする」

「うるせえ、飯を作れ」

「あいあい、解つておる解つておる……はあー……妾も三尾になればもう少し待遇改善されるかのお……」

愚痴りながらも服装を割烹着に一瞬で切り替えて、慣れた手つきで飯の準備を始めるチエフエイの姿を見て、なんだか彼女の新しい側面を発掘したような、そんな気分だった。思えばあまり深く悪魔と交流する、というのは考えたこともなかった。今度、酒でも用意して本格的に悪魔と交流会でもするか、と考えながら、キッチン内、邪魔にならない様に端の方へと寄りながら、割烹着姿で朝食の準備を進めるチエフエイを見た。

「なあ、駄狐」

「なんじやサマナー。あ、いや、待て。今、妾駄狐つて呼ばれる事に自然に反応してなかった？ 妾普通にその呼び方を受け入れていなかった？」

「駄狐……」

涙が出そうになるが、それを堪える。なお、この場にアンがないのは当然ながらあの子、食べる状況だと戦闘のエネルギーを全部食欲で担おうとしているのか、片っ端から喰い続けてしまうからだ。その為、基本的にキッチンには出入り禁止にしている。気づけば倉庫が空っぽ、そんな事にさせないために。そんな訳でチエフエイを眺めているのだが、

「お前、料理とかできたんだな」

「妾か？ 妾自身はただの妖獣、そんな技能ある訳なからう」

「ええ……」

じゃがな、とチエフエイは言葉を置く。

「妾と同一視される姐己や玉藻の前であればこれぐらい簡単にやるであらうよ」

「つまりそっちの方から技術を借りている訳か」

然り、と包丁を動かしながらチエフエイが答えた。

「妾はそもそも概念としては恐ろしいほどに希薄なんじゃ。狐で傾国で悪魔、ともなれば十中八九玉藻の前か姐己、どちらかの化生が召喚されるであらうな。そんな中で妾が出現するのは普通はありえんのかなが……まあ、妾の場合世界崩壊で姐己と玉藻の前の情報が不完全であるという話から生み出されたんじゃないやろうな。いわばミツシングリンクの様な者じゃよ、妾は。なくなった情報を互いに共食いして補充し、生み出されたのが妾じゃ」

まあ、確かに調べてもチエフエイ、何て妖怪の名前は聞いた事がないし、そう言われればチエフエイの正体には納得できる。しかしそれはこのままチエフエイが霊格を取り戻せば、

「玉藻の前か、或いは姐己に派生するのか？」

「さて……それはどうなんじゃろうな？ 妾は自分が気づいた瞬間には九尾の狐という存在じゃった。だがそれは完全な状態の話。少しずつ霊格を取り戻す今の状況は……少々読めんのう。まあ、チエフエイ、という概念そのものを生み出して固定できるのであれば、妾も妾のままじゃろうて。そうじゃなければ姐己か、或いは玉藻の前を通していずれはアマテラスに……という所じゃろう」

「アマテラスは犬だし違うだろ」

「えっ？」

「えっ？」

いや、ほら、アマテラスって犬じゃん。そう説明してもチエフエイはまるで理解してくれない。あんなに可愛くてかつこいいのに何故解らないのだろうか……？ まあ、ゲーム文化だから当然だよな、と

納得しつつ、悪魔は概念によって揺らぐ存在であると、認識する。だがそこで考えてみる。

「寧ろ崩壊世界でタマモも姐己も消えた今チエフエイが一強では」

「妾の時代来た……？　もしや最メジャー狐妖怪クイーンの座を妾が奪った

……？　これは妾、サインの練習をせねばな」

話していてアレだが、こいつ脳味噌大丈夫？　とか途中で思っていたりする。

そんな馬鹿話を繰り広げている裏で、段々とキッチンには味噌汁の良い匂いが漂い始めていた。キッチンの入り口へと視線を向ければ、こつそりとアンがつまみ食いを求めて覗き込んでいるのが見えるので、静かにL&Oを引き抜いて脅迫し、逃がす。油断も隙もない奴め……そう思いながらも、たしかにこの美味しそうな匂いは誘惑されるなあ、と認めるしかなかった。

「こつこつこつこーん、妾の魅惑の朝餉に溺れると良いぞ……！」

「料理の腕前自体は認めるとして、そのキャラ付けは失敗してるから今すぐ止めろ」

「!？」

地味にシヨックを受けている駄狐の姿を見つめつつ、五人分の朝食を作る姿を見て、そして息を吐く。割と楽しそうに二尾を揺らしている姿を。今の彼女との会話で、なんとなくだが納得がいった。

チエフエイは自分と言う概念を固定させようとしているのだ。メジャーである姐己や玉藻の前と比べれば良い言葉ではマイナー、悪い言葉では概念が希薄なのだ。チエフエイがチエフエイと言う存在と意識を保ち続けるには、明確にその認識と概念を固定化させる必要がある。彼女は今の所、世界にはこの一つ……このDDSに存在するのが唯一で、本体だ。だからチエフエイはキャラ付けするような事をしていなのだ。

『まあ、僕みたいに最終到達点が明確な悪魔と、解釈が複雑な悪魔との違いだね。そういう意味では大変ではあるだろうね。彼女の場合、悪魔としての種族が変われば、人格そのものが変わってしまうかもしれない

ないし』

今まで黙っていたマツヤが口を開いた。

『ああ、ちなみに僕にそう言う心配をする必要ないよ。化身の姿を切り替えるのは基本だからね——インド的に考えて！ まあ、今は彼女の時間だ。悪魔と友好を深めるのはサマナーとしても悪くない事だし、じっくり話し相手をしてあげる事だ、サマナー』

魚の癖にイケメンだ。

「……ま、俺も話しているのは嫌いじゃないしな」

「どうしたんじやサマナー？」

「いや、お前っていつも迷走しているのクツソ笑えるなあって」

「サマナーよ、なんか妙に妾に対して辛辣ではないか!? ええい、待つておれ！ 三尾じゃ！ 三尾になった暁には妾のナイスバディを見せてやろう！ ん？ 三尾ってナイスバディじゃったっけ？ あれ、でも変化の術あれば行けるよな？」

「お前本当に大丈夫かよ……」

なんだか、やや不安になりつつある中で、寮への扉が開く音がした。キッチンの方から首を出して確かめてみれば、病院に行ってたはずの美鶴がもう一人、学生服姿の青年を連れて寮に入ってくるのが見えた。見た事のない青年の姿に一瞬だけ迷ったが、その体内からはMargの気配を感じる。となると彼が、入院していたペルソナ使いなのだろう、

あの巨大シャドウ・マジシャンを倒した、とかいう。

寮に入って来た美鶴と、そして青年が此方へと視線を向けた。

そこで青年と目が合った。

「――」

「ん？ ああ、いたのか。サマナー……いや、そういえば今日の食事当番はお前だったな。中々良い匂いが漂っているが」

「ああうん仲魔に朝飯の準備をさせてる。俺よりも上手いからな。それよりも、彼は……？」

「ああ、有里湊……新しく特別課外活動部に協力してくれる者だ」

「……どうも」



そう言つて湊は此方へと軽く視線を向けて挨拶をする。それに対して片手を持ち上げ、

「俺はサマナーってんだ。まあ、俺は一か月しかここにいないけどな。とりあえず仲魔に朝飯作らせてるから適当に用事終わらせて食いに来い」

その言葉にコクリ、と頷き、美鶴が湊を部屋へと連れて行く。入院してた手前、一人きりで送れないというアレだろう。アレから甘酸っぱい学生の青春に発展するかなあ、と思うと反吐が出る。リアルが充実しやがってこの野郎——とは口に出せない。周りに一応、見た目だけは整ってる女がいるし。まあ、それはそれとして、

「駄狐」。一人分朝食追加」

「大丈夫じゃ、人修羅が何時も3人前食っておるからその分を引けば良い」

ラウンジの方で気配を殺して朝食を待ち続けていたアンがついに気配を晒してガタ、と音を立てた。後で腹いっぱい、外で食わせてやるから今は落ち着けよ、と言っておきつつやれやれ、と片手で頭を掻く。

「どうしたサマナー。何やら憂鬱そうじゃのう」

「んー、死神を見つけたかもしれないってとこだな」

「……？」

訳が分からない、と首を傾げるチエフエイが朝食づくりに戻った所で、壁に背を預けつつふう、と再び息を吐き出す。

あの青年……有里湊。彼の目は見た事のある目だ。こういう一般的な社会では珍しいが、災禍を前に諦めてしまった人間が陥る状態に近い。いや、もつと言葉を変えれば崩壊世界のメシア教会で保護されている有象無象に近い瞳の持ち主だったと言える。アレよりは流石にマシだが、それでも目の中からは決定的なモノが欠けている。或いは生氣とでも呼べるそれが全くない。

デストロドーだ。

或いは死滅願望とも言う。

崩壊世界にいる有象無象のあの目は生きる事を諦めている目であ

り、正しく死滅へと無意識的に向かっている願望だ。だが……湊は少し違う。デストロドーと言うには生にも死にも無頓着である。そういう感じの目だった。虚ろ、中身があるにはあるが、最終的にその結末に対する過度な興味を持たない。ある意味全てに平等。悪い意味で無頓着。そういう感じの目だ。

何もかもを失って、どうでも良くなった様な人間が到達するような目だ。最も悟りに近く、そして最も遠い目。

「……気持ち悪い目だ」

あんまり、好きになれない目だった。寧ろ嫌いだった。

「サマナー？」

「ん？ ああ、いや……なんでもない。それよりも朝飯美味くなかったらお前、スダマを巻き付けて密室に監禁するからな」

「ルシファーを超える邪悪め!!」

そこまで言われるルシファーっていったい何をやらかしたんだ、とは思わなくもない。まあ、それでもなんとなくだがこの世界がガチリ、と音を立てて動き出したような、そんな気がした。余り良い予感ではない。溜息を吐きながら今の青年の事をいったん忘れ、頭から追い出す。まあ、会わなきゃいいのだ。会わなきゃ。他の連中と一緒にいる間は別として。

そんな事よりも、今は朝食だ。チエフエイの作っているものは基本的に日本の朝ごはん。味噌汁、ご飯、鮭、そしてお吸い物。基本的な和食。シンプルではあるが、だからこそ良い。ああ、そう言えば最近洋食ばかりだったから純粋な和食は久しぶりだったなあ、と匂いだけで食欲を刺激される。崩壊世界に戻ったらこんな風に食べる事は——いや、こっちで素材を大量購入して、ステーキブンの所で保存すればいいのだ。そうすれば問題はない。

そう考えるとこの食生活も向こうに戻っても維持できそうだ。それは少しだけ……夢がある。



なんて、朝には考えていた。

巖戸台分寮の裏手には小さいが、庭がある。フェンスがあつて周りから遮蔽してくれるので、周りからは見えづらい地形になっている。こだが、武器を取り出して軽く練習するには丁度良い場所になっている。常にタルタロスに居られる訳ではないし、何よりもL&Oというクソの様に腕力を要求してくる新しい愛銃を手にした以上、それを完全になじませる為の訓練は生きる為の投資である為、外せない。つまりタルタロス以外で銃刀法を無視して軽く体を動かせる場所である。チエフエイは低ランクの誤認術であれば使えるので、それで銃撃音を外へと漏れないようにすれば、それで射撃場は作れてしまう。

L&Oは軽いコスモガンだ。特殊弾を使わない限りは、リロードという概念を必要としない銃であり、使用者の魔力を食らつてそれで弾丸を自動生成するという無限に撃ち続けられる二挺自動拳銃になっている。その上で超連射に対応し、凄まじく強度が高く、そして頑丈である為に鈍器としても扱える、超脳筋銃でもある。

クソ重いので、今まで使つていたベレッタと同じ感覚で使おうとすると、全く銃弾が当たらない。その為、高いセンスと精密性、筋力が必要とされるのだ。

なら回数を重ねて打ち続けるしかない。強くなるのに近道はあるが、そのどれもロクなものではない。結局のところ、地道な努力を積んだ上で格上の悪魔をぶち殺す以外の手段はないのだ。故に寮の裏庭でL&Oを手に、用意した木製のターゲットに銃弾をぶち込む。

流石にゴム弾ではあるのだが。それでも費用は桐条持ちなのだから、一切遠慮せずに鍛錬が行える。動かない的の中心点に弾丸を叩き込むだけの練習。

動き回る悪魔と比べれば、欠伸が出るほどに簡単だ。少し距離があつた程度で、中央を外す理由がない。少なくとも、銃を使うなら最低限で百発百中クラスでもなければ悪魔相手には意味がない。それがあつても結局、銃撃耐性とかで無効化されてしまうし。だけど、それでも、

銃は数少ない、サマナーが戦闘参加できる攻撃手段だ。

最終的に、人間の生身では余程特殊な才能でもない限り、上位悪魔との戦いの動きについて来れないだろう。ついて行けるのは瞬間的な動きと思考と反応。そうなる後衛から銃弾を撃ち込むぐらいしかできなくなる。つまり、サマナーが本格的に使える武器は銃ぐらいのものになる。メギドとかが乱射される場所を、生身でサマナーが駆け抜けるなんて正気ではない。

だから鍛錬は積み重ね、タルタロスに行かず、毎日外で遊んでいても気が抜けすぎる為、二日に一回は鍛錬の日として裏庭で射撃訓練をしている。上半身裸の状態でL&Oを握り、ボックスをダース単位で横に並べ、そこからゴム弾を詰め込めるだけ弾倉に詰め込み、空っぽになるまでひたすら構えて的の中心を一発も外さずに射撃し続ける。

辛いし、汗がだくだくと流れるし、かなり集中力を使う。

だけど、これは生き残る為なのだ。当然の投資だ。最も崩壊世界では毎日の生活が鍛錬の様な物だったから必要なかったが、どうやらタルタロスは今所、格下の悪魔しか出現しない事もあり、あんまり鍛錬にならない。

正直、連中の危機意識はそれでいいのか？ とは思わなくもない。少なくとも明彦は強くなるためにトレーニングをしているが、ゆかりも美鶴もタルタロスの時間だけで強くなるうとしている。それ以外の時間を鍛錬に使う事を考えないのだろうか？

人生、準備不足と呪殺耐性不足で一瞬でパトラッシュ状態になる時だってあるのだ、どれだけ用心し、準備したところで万全ではない。つまり、俺は臆病なのだ。出来るだけ準備をしておかなきゃもしもの時、自分自身を殺したいほどに憎んで後悔するだろう。こうやってレベルが上がりもしない鍛錬はそんな自分を納得させる為の儀式だとも言える。

だからこの明彦も寄ってこない裏庭は俺の一種の聖域だった。

そのはずだった。

「うおおお……マジかっけえ……！」

食い入るような視線を感じる。

「こら馬鹿！ サマナーさんに失礼よ！ ほら、彼の事を見てみなさ

いよ、まるで動じてないじゃない」

「……」

合計で三つの視線を感じる。好奇の視線、どこか恐れる視線、そして虚ろな視線。一番煩わしいのは当然ながら最後の視線——有里湊という青年の視線だった。他の二人がまだ、中身を伴っている視線を向けている中、最後の視線だけはまだ中身がなかった。ただ見ているものを見ているだけ。そういう視線だったのだ、それは。

やっぱり、とL&Oを上へと回転させるように投げる。

「おおう！」

落ちてくるそれを指引つ掛ける様に掴んで回転させながら構え、ノータイムで的の中心を穿った。レベルアップによって強化された敏捷と筋力はこんな曲芸でさえあっさりと言許してくれる。

……湊が苦手だ。というか嫌い。

「す、すげえ——！　おいおい、ゆかりっち今のみたかよ！　すげえぞ今の人うひょー！　マジやべえって今の？　見たかよ！　見たかよ！」

「何時も以上に脳味噌がヤバくなってるのは解る……だけどうん、この人でこの寮にいるのは最後だから……えーと……邪魔、しちやいましたよね？」

ゆかりの言葉に目を閉じて、ふう、と息を吐く。しかし学生たちがここにいて、と言う事は既に3時過ぎか、と時間を思い出す。それを確認してからいや、と言葉を置く。

「もういい時間だしな。腹ペコ娘におやつを与えないと機嫌が悪くなるし、そろそろ切り上げようって考えてたところだ。で、えーと……ゆかりちゃん？　湊君の事は知ってるけどそっちの彼は？」

銃口で軽くちよんちよん、と帽子をかぶった青年を指し示すと、ピシリ、と背筋を伸ばして敬礼した。

「はい！　自分の名前は伊織、伊織順平で御座います！」

「そう怯える必要もねえから。今装填してるのゴム弾だし。で、えーと……新しい面子？」

「うん……その、私たちの中で一番強いのがサマナーさんですから。た

ぶん、私たちがタルタロスに潜る時、一番迷惑をかけるのはきつとサマナーさんになりますから」

そう言うゆかりの言葉は後半、段々と小さくなっている。しかし、それ以上にどこか、恐怖されている感じがある。いや、まあ、銃なんか平日から振り回しているからしょうがないのだが。

まあ、でも、それ以上にほぼ同年代の少女にビビられながらさん付けされるのは地味に堪える。

「俺……そんなに老けて見えるのか……？」

『サマナーはどちらかと言うと大人びている、というタイプだね。確かに年上ではあるけど、それ以上に周辺への環境に適応して生き抜いて来た事実がサマナーを人間として育てているんだよ。見た目じゃなくて雰囲気の方だと僕は思うよ』

『まあ、老けて見られているって事実には変わらんがの』

ちよつとだけ、心が痛む。

「いや……まあ、じゃあ俺も後で全員揃った時にするだろうけど、自己紹介しとくな。桐条のお嬢様に雇われてるサマナーってあー……傭兵だよ」

まあ、隠す理由もないし、ここはストレートに伝える事にする。

「ペルソナ能力はないけど、代わりに別の能力で戦うから。そこらへんは気にするな。寧ろ頼れ。ガンガン頼れ。最初は迷惑かけるぐらいで丁度良いから。ま、宜しくな順平」

「おっす！ 宜しくお願ひしまっす！ 先生！」

「先生！ いい響きだ……」

『あ、褒められ慣れてない奴が褒められておるぞ』

『こういうのって調子に乗る前兆だよね！』

お前らがそこで余計な茶々を入れなければな。我が仲魔はどうしてこうもツツコミ処が多いのだろうか、ほとほと悩んでしまう。そろそろ新しい戦力が欲しいところでもある。まあ、それはそれとして、「基本的に俺はここに居るか、外で何か飯食ってるか物色してるからな。悩み事が相談したい事でもあったら来い。後銃の使い方だったり多少は教えられる……ペルソナ使いは使わないだろうけど。桐条

とは一か月だけの契約だからその後はどうなったもんかは解らないけど、ギスギスやつてても楽しくないからな、一緒にいる間は楽しくやっつていこう……とここでそのタオルと水、取ってこないか」

「あ、どぞ」

「おお、サンキュウ」

タオルで汗を拭きとりながら、水の入ったペットボトルを開けて飲む。間違いなく充実感はこちらの世界の方が上なのに、人間関係はなんでも交通事故したかのように複雑そうな気配がするんだろう、という気持ちでしかなかった。

ゆかりはゆかりで美鶴への敵意を感じる。

明彦は究極的に力へ貪欲なだけだ。

湊は怖い。正直あまり話したくない。

この中で、裏も表もないこの順平という青年は最高だった。彼こそ巖戸台分寮に現れた救世主なのだろうと思う。その能天気なキャラでは是非とも俺の一か月の生活を明るく照らしてほしい。いや、冗談ではなく真面目に。

「ま、それはそれとして……あんまり、不安がる必要はないからな？」

いつも通り、自分らしくあればいいもんさ、タルタロスにいる間は。まあ、そのキタロー君ほどじゃねえけどな」

「……？」

「いや、おめーだよ」

首を傾げる湊キタローにつんつん、と額を叩く。その姿を見て、ゆかりと順平が軽く笑い声を漏らし、湊が額を軽く搔いた。

「お前のその希薄というか儂いというか今にも消えそうな感じ、女ウケは良さそうだよな。だけど俺、そういうの気味が悪いし気持ちが悪いかからあんま好きじゃねえわ。つか苦手だぜ」

正面から言い切った言葉に少しだけ、驚くような表情が湊から漏れる。なんだ、ちゃんとそんな顔も出来るんじゃないか、と呟く。まあ、完全なゼロというわけではなさそうだ……なら、まあ、大丈夫だろう。「だからお前、もうちつと笑え。なんか楽しそうにしてろ。その方が絶対に良いに決まってる」

後悔してからは遅い。その考えは崩壊世界での考え方だ。だけどきつと、それを最も必要としているのは目の前のこの青年なのかもしれない。なんとなくだが……見過ごせない。気持ち悪いし、気味が悪いし、どう考えても怪物的で、こいつの事は好きじゃない。ただどそれは逃げる理由にはならないのだ。向き合えない奴は死ぬ。

現実からは逃げられない。だから現実には向き合うしかない。だから、言いたい事は遅くなる前に、隠さず口にしなくちゃならない。言葉にして言わなきゃ伝わらない事もあるのだ。

——それを少し前に、アンから学んだばかりだった。

「ま、つーわけだ。相応の報酬は貰ってるから、その分頼りにしてくれ。じゃ、また後でな」

ぽんぽん、と湊、ゆかり、順平の肩を叩いて横を抜けて行く。まだ学生服姿だった三人姿を見て、少しだけ自分の高校時代を思い出す。

世界崩壊の日はまた、同時に高校の卒業式間近だった。後1か月で卒業、という所まで来ていた。それが世界の崩壊によっておじやんだ。もう、学歴を問うてくる社会すら残っていない。

学生姿の連中に優しくしてしまうのは、やはり……最後まで学校に通えなかった、ちゃんと卒業出来なかった後悔があるから……だろうか？ まあ、どちらにしろ、逃げられない。逃げてはならない。向き合うしかない。それが生きるという事だ。

「冷蔵庫のプリン食ったら着替えるか」

だから今日もほんの少し、小さな幸せを重ねて生きて行く。美味しいものを好きな時に食べて生きて行く。

そんな小さな幸せで、何とか生きて行ける。

そんな思いで冷蔵庫を開き、プリンが消えているのを見つけた。

「アアアアアア——ン！ お前勝手に喰ったなア——！」



## 死神と塔 VI

裏世界には戦う人間であってもいくつかジャンルに分ける事が出来る。一つ目はサマナー。直接的な身体能力が低いタイプの部類であり、その代わりに機械やアプリで武装し、悪魔を使役する事に特化した者だ。これがおそらく一番メジャーだとさえ言われている。何せ、悪魔を使役する方法はそれなりに多いからだ。一番多いと言われているのが最も理不尽な悪魔との口頭契約になる。つまりは口約束。これでもちやんと契約関係が発生するが、抜け穴が多すぎる為、大体は人間側が地獄を見る。

次に多いのが悪魔召喚プログラム。exeというプログラムによつて悪魔を使役するスタイル。つまり自分が今使っているDDSAプリの前身の様なプログラムだ。これも、ステイブンが作成したものであり、人類が悪魔に対して戦う手段をもっと手軽に得るために用意し、そして裏の世界へと配布したらしい。その結果、一時的に世界が凄い混乱したらしく、悪魔犯罪も急増したらしいが、ステイブン自身は一切反省していない。この悪魔召喚プログラムの凄いところは、今までの口頭契約とは違い、強制力が発生している為、悪魔の魂の位階レベがサマナーを上回っていない限りは、悪魔はサマナーに対して絶対服従させられる、と言う点にある。この発展版がDDSAプリであり、スマートフォン対応させたものである。此方は更にステイブンが発明するサポートアプリと連携する様に作られており、それによつて更に快適なサマナー生活を保障している。

最後に、一番珍しいのは古式の悪魔召喚術で、これは葛葉等の組織が使役している、昔ながらの悪魔を使役する手段だ。ぶっちゃけ、これを電子化させたのがステイブンだ。その為、これらの召喚術を使っていたサマナーからは独占技術を解体したという事から凄まじく恨まれている。

サマナーの次に見る裏世界の戦闘者は異能者だ。連中は純粹に異能を使える人間だと考えればいい。この場合の異能は悪魔由来の能力、つまりはディアやアギ等といった魔法や特技の事になる。これら

を使える人間の事を異能者と呼び、連中は基本的に悪魔に匹敵する身体能力を得る。悪魔と違って防具での弱点や耐性の調整が行える為、ある意味では悪魔以上に強くなるのがレベルの低い状態だと言える。そして、その一つに分類されるのがペルソナ使いだ。

ペルソナとは即ちもう一人の自分。自分の心。或いは仮面。

誰もが生きて行く為に仮面を被っている。誰かに見せる自分の姿、それをペルソナというのだ。そしてペルソナ使いとは深層にある自分の心の仮面を悪魔、或いはペルソナという手段として使役する能力でもある。つまり、自分の心で戦うのがペルソナ使いだ。心には無限の可能性が秘められていると言われている。ステイブンでさえ完全な解析は不可能だと言っていた。それだけペルソナとは複雑な存在らしい。

だからこそ、彼のやっている事は化け物だと評価するしかない。

「オルフェウス」

頭に銃の形をした、ペルソナの召喚デバイス、それを突きつけてまるで躊躇する事もなく引き金を引いた湊はペルソナ、オルフェウスを召喚した。それが本来湊が保有するペルソナであり、大きなハープを持ったマネキンの様な姿をしている。そうやって出現したオルフェウスは臆病のマーヤに炎の魔法、アギを叩き込んだ。

瞬間、弱点を突かれた臆病のマーヤは時間が凍る様に動きを停止させた。

「ピクシー」

そう言って湊はあっさりとペルソナを切り替えた。オルフェウスの次に出現するのはピクシー、妖精のペルソナ……いや、悪魔。崩壊世界を生き残っていたサマナーに見せて貰った事のある悪魔だ。出現したピクシーは戦闘慣れしていない順平とゆかりにそれぞれ、回復魔法のディアを臆病のマーヤが停止している時間内に発動させ、二人の傷を癒した。

「サンキュー！」

「ありがとう！」

「問題ない……オルフェウス」

淡白な返答と共に再び頭を撃ちぬいてオルフェウスを召喚した。マジックハンドに再びアギを叩きつけ、それを臆病のマーヤと巻き込む様に叩きつけ、巻き込んで時間を引き延ばし、その隙に一斉攻撃を畳みかけに行く。その戦闘姿に根本的な世界法則の違いを感じ取る。この世界の悪魔……ではなくシヤドウは、弱点攻撃を喰らうと動きが停止する、まるで時が止まったかのように。

……いや、ペルソナが心から生まれ、マツヤやチエフエイが言うようにシヤドウがペルソナが同じような起源を持つ存在であるとすれば、弱点を受けて動きが止まるのはまるでショックを受けて固まる人の反応のようだ。

「お守りのつもりで来たけど要らねえな、俺これ」

『ああ……彼は覚醒の暴走でマジシャンを倒した。だから潜在能力が高いとは思っていたが……』

タルタロスの低層、比較的雑魚と呼べるような悪魔が徘徊しているエリアを、新しく参加した順平、漸く戦う決心を見せたゆかり、そして病み上がりの湊の三人をタルタロスという場所へと慣らさせる為に2層から、ヴィーナスイーグルとターミナルのある5Fまでを駆け抜ける予定だった。

この範囲だったら三人が息切れしても、チエフエイとマツヤをイケメンモードで召喚すれば何とかなる。そういうつもりで一回、タルタロスの大変さを味わわせる為の探索だった。なにせ、一回きちんと苦労を味わった方が後から油断しなくなるからだ。苦労の経験がない奴は油断したり調子に乗ったりする。なぜか同時に4人以上潜れないという制限のあるこのタルタロス、美鶴と明彦を入り口に置いた状態で、こうやっていつでも動けるように銃を片手に戦いを見守っている。

そうするつもりだった。

だがその必要性が欠片もない。

有里湊という青年が見せる適応力、そして一切焦らない姿はもはや怪物的だと表現しても良い。割と真面目に、人間としてはどうなんだ、とは思わなくもない部分は見ていてある。自由にペルソナを付け

替えられる人間とはつまり、自由に仮面を切り替えられる存在。そんなのは自己が希薄なのか、或いは究極的に詐欺師であるか、そういう感じだ。だけどペルソナを自由に付け替えられるのはまた、ペルソナ使い最大の弱点である耐性の入れ替えが行えるという事だ。悪魔は防具を装備できず、悪魔合体を通したスキルや強化、或いはMagを使った直接的な改良によって強化、耐性を変化させることが出来る。だがどうやら、その技術はこの世界には存在しないらしい。

少なくとも、桐条のペルソナ関連技術にはそれがない。そして防具による耐性の付与もペルソナには影響が与えられない……つまり、耐性の変化は、湊の特権だった。それにペルソナを入れ替える事で能力や魔法までまるつきり入れ替わる。オルフェウスのアギ、そしてピクシーのディア。これが一人で出来るといっただけでもう有能だ。戦力としては申し分ない。

「順平、ちよつと耐えて」

「あいよ、この俺様にお任せあれ！　つと、おわっ!?　ゆかりっち、今矢が俺の頭の横を抜けたんですけど!?!」

「チツ……」

「おいしい!?!」

「……あ、指示間違えた」

「おおう……」

まあ、ちよくちよく慣れていないからか、ポカがあるのは間違いがない。だが全体として非常に優秀だ。妙に冷めているとでも表現すべきか、全体を常に俯瞰しているおかげで仲間と自分の動きを客観的に見ながら相手に対処している。ペルソナの使い方も妙に上手く、まるで自分の手足の様に動かしている。

おそらく、純粋なペルソナ使いとしては最強だ。現時点では明彦と美鶴が接近戦に持ち込んでそのまま倒せるだろうが——素質、才能と呼べるものが次元違いだ。怪物的だとも表現できる。チエフエイやマツヤが前、人や悪魔にはレベルキャップが存在すると説明していたが、こいつは最初からそれが外れているタイプだ。或いは既に外されている。そういう感覚がする。

「こいつは強くなる。たぶんあつさりと俺を超えて強くなるぞ」

後方から、一応銃を抜いた状態で、通信の繋がっているエントランスに居る美鶴へと言葉を向けた。

『お前にそれを言わせる程か？』

「後2か月もすればおそろく、このペルソナ使いの集団の中で一番力を付けるのは間違いなくキタローだろうな。断言する。探索や調査を続けるならこいつ無しじゃ無理だろうよ」

『む……』

その言葉に通信の向こう側で美鶴が軽く息を飲んだ。不満に思っただろうか？ それともその事実を噛みしめているのだろうか？

どちらにしろ、死神と塔の扉の先の世界だ。主役は間違いなく湊だと思う。というか自由にペルソナを付け替える資質とか化け物かよ、  
ヒ・ロ・ーだ。アレだ。

ステイブンや支配人は世の中に大きな問題が発生した時、世界抗  
体とでも表現すべきヒーローが出現すると言っていた。きつと、彼は  
そういう類の立場の人間なのだろう。だとすれば自分とは根本的に  
相性が悪い。だって俺は其方側の人間ではないからだ。根本的に誰  
かの為に、というのは理解できない。ああ、憶測でしかないのだが。  
それはともあれ、

「今夜は5Fまで行けそうだな」

『となるとそこまで進んで、ターミナルで戻って終了だな』

『俺の出番はないのか……』

明彦の残念そうな声が通信の向こう側から聞こえてくる。最近  
解ってきた事だが、あの青年、実は結構なバトルジャンキーというか、  
とにかく強くなる事以外あんまり脳味噌使っていないな？ 大企業のお嬢様、脳筋ボクサー、お嬢様を嫌っている女学生、お気楽青年、死  
滅願望。

報酬を先払いで貰っていないければ今すぐ逃げ出したい職場だった。  
シナリオを考えた奴は間違いなく頭が悪いと思う。それが支配人  
じゃない事を祈っておく。それはそれとして、今夜は本当に俺の助け

なしで乗り切れそんな事実には、溜息を吐くしかなかった。これで給料泥棒！ ……なんて、言われなければいいのだが。

◆

結局、タルタロスでの活動は湊がリーダーを務める事となった。その将来性、そしてタルタロスを蹂躪する様に効率的に踏破する腕前は、間違いなく後に成長する最強のペルソナ使いの姿の片鱗を見せていた。明彦と美鶴も5Fまで一気に上がっていった成果に納得し、戦闘や調査のリーダーは湊へと任せる事にした。

ある意味当然とも言える采配だった。そして同時にタルタロスの本格的な調査を行う、という事でもあった。今までは突入できるメンツが少なかつたが、今度は溢れるほどに補充された。タルタロスに侵入できるのは常に四人だけ。そして余るようであればローテーションを組んでタルタロスに挑戦できるという事でもある。今まではある程度の階層までしか挑戦できなかったが、その先へと進むことも、湊達のレベルアップを行いながら進むこともできる。

そんなこんなで更に騒がしくなる巖戸台分寮での生活。

俺はまたなぜか、有里湊と一緒にいた。ポロニアンモールに。

しかもアンは居ない。実に困った遭遇だった。とはいえ、このまま逃げたりどうにかするのも、正直人としてどうか、という部分もある為、ポロニアンモールで発見した湊を喫茶店に連れてコーヒーでも奢る事にする。

それに普通に対応するもんだから困る。

そんな訳で前に入った喫茶店に湊と入り、テーブルを挟む様に座る。宣言通り珈琲を頼む……が、さすがにそれだけでは口元が寂しいので、適当に一緒に食べられる物も頼む。流石にパンケーキ喰ってきたらアンに嫉妬されるので、そこまで重くないマフィンを二人分だけ楽しむ。珈琲だけを楽しむのもいいが、やはり適当に食べる物が一緒な方がお腹が落ち着くというものだ。

「ま、俺からの奢りだから感謝して飲めよ」

「解った」

「……冗談だから、本気で受け取らなくていいからな？」

それに首を傾げる湊の姿を見て、こいつ、どこかアンと似ているな……とは思わなくもなかった。反応が薄い辺りは実に彼女と似ている。後読めなさとかも。だからこうやって正面から珈琲を飲みながら見ている、薄気味悪さを感じている。なんというか……、

「仮面を被れていない？」

「……？」

「いや、お前の評価。なんつーか……他人に見せる仮面そのものがないというか？ 見せえる姿が足りてないというか。誰だつて恰好付けたり、誰かに見せる姿を持っているのに、お前だけそれが無いというか、存在しないというか……あるがまま？ そんな感じがするのが気持ち悪いんだよなあ」

珈琲を片手に、それを口元へと運びながら飲むと、ポロニアンモールへと差し込む夕日を受けながら湊は口を開いた。

「そんなに……僕は、そういう風に見える？」

「見える見える。つかちつとも笑ってないからな。ほら、笑ってみろよ。こんな風にさ、笑顔を浮かべるってのはこうやるんだ」

二カリ、と笑みを浮かべ、どうやって笑うのかを湊へと見せると、湊がそれを真似て笑みを浮かべるが、どこか軽薄というか……なんというか、薄っぺらい。その姿を見てうーん、と呟く。なんというか、そうだな、と呟く。今、率直に感じたのは、湊自身が原因ではない、という事だろうか。

「なんつーか……笑い方が解らない、ってタイプだな、その表情は」

「うん……なんで解る？」

「お前の様になんか、欠落してる奴を見るのは珍しくない場所だったからな……折角こんなに厚遇されていて、何でも揃ってる場所にいるってのに、不思議な奴だよな、お前は」

或いは何か、彼をそういう風にする原因があるのかもしれない。……それでもまあ、空虚な湊の事は苦手だと評価せざるを得ないが。根本的に虚ろな連中は接しているだけで精神衛生的に悪いのだ。そ

こらへん、普通の人間じゃこう、浮き世離れしている、とか。或いはクールだとか、そういう風に捉えているのかもしれない。どちらにしろ、

「もうちよつと笑え。というか物事を眺めてないで混ざって楽しめる様になれ。折角こんな楽しい場所にいるんだ。風呂があつて、美味しい飯があつて、話せる友人がいて、それでいて夜になったらスーパーマンモドキだ！ ジョン・ウエインだつてこれだけ良い環境を用意して貰えてないんだぜ……こう、もうちよつと自分から楽しむことが出来るかい？ お前は」

スコーンを割って食べる為のフォークを湊へと向けて、ちよんちよんと動かす。それを向けられ、言葉を受けた湊は不思議そうな表情を浮かべていた。

「君は……僕の事を気味が悪い、という割には……なんというか、構うよね」

湊のその言葉にあー……と声を零す。痛いところを突かれた。でも、まあ、説明して問題のある事ではない。なのでうーん、と軽く言葉を捻り出すのに苦労し、それじゃあ、まあ、と言葉を置く。

「そうだな。お前なんか凄く私の部分が薄くて無駄に才能有つて絶対に強くなるだろうし、無駄に世界の中心感ある奴はなんというか、主人公をしているようで妙に気に入らないというか……まあ、そう感じているのは割とマジだ」

「言葉、酷くなつてない？」

受け入れる。少し、人間性を見るのに慣れている奴が見ればお前の事なんてすぐに解るから、と言葉を置く。湊に気持ち悪さを感じないのはまだあの学生共が人生経験が少ないのと、人間という存在を見るのに慣れていないからだ。

俺は違う。俺はあの世界崩壊で見たくもない人間性を見せつけられた。略奪する奴。レイプする奴。殺す奴。救おうとする奴。それらの様々な人間性、形、表現、それを自分は崩壊世界で濃縮する様に見せつけられたのだ。そりゃあ多少は人を見る目も育つ、つてなもんだ。というかそういう目を養わないと悪魔となんて付き合えない。



結局、悪魔との契約とはお互い抜け穴を探すゲームだし、交渉相手はメシアやガイアだけではなく、理性のある野良悪魔とかもいたし。

「だけでも、嫌いだから逃げてどうするんだ」

「……？」

その言葉に首を傾げられた。そこまで難しい話ではない。

「嫌いだから逃げた。じゃあどうすんだよ？ 逃げ続けるのか？ 一生？ どこに？ お前から？ そりゃあダメだろう。格好悪いし、何より逃げてるだけじゃ成長しない。いや、寧ろ逆だ。逃げている間は現実が見えてない。それは迎えるべき次を見捨てる事だ。生きるのなら何事も、正面から向き合わなきゃいけないんだよ。たとえば、それがどれだけ恐ろしくても」

「どれだけ絶望的で恐ろしくても、それでも向き合わなくてはならない。それが俺の唯一の義務だ。その考えを誰かに押し付ける気は全くない。そこまで俺は傲慢になれない。そもそも俺はそこらへん、精神的な部分は割と凡人だと思ってる。世界の為、とか無理だし。人の為、とかも言えない。結局は自分の為にしか動く事の出来ない善人失格だ。そこは間違いない。断言して良い。俺はどちらかというところクサマナーに分類できる。」

どこかに属せず、法律を守らず、自由にやるサマナー。それこそ、悪行といわれる事を平気で行う。それがダークサマナー。どちらかといえば、俺は其方の部類に入る。その部類の中でも突き抜けれない、中途半端な奴だ。それでも決めている事はある。

自分の世界を取り戻すという事。  
そしてそれはつまり、逃げないという事でもある。

「お前と向き合うのは正直しんどい。ちゃんと話しているという気がしないしき」

「だけどそれ以上に、」

「それを理由に逃げてちゃ駄目だろう」

「駄目なの？」

「ああ、全然だめだ。逃げた先で後悔するのは何時だって逃げた奴自

身だよ。最終的に振り返って、そしてあの時——って思うもんさ。俺はそういう思いを十分にしたもんさ。もう二度と味わいたくないと思う程にな。だから、まあ、問題があったとして、それから目を反らす事だけはするのは止めているんだよ。だからお前がどれだけ俺にとつて気持ち悪かろうが、俺はそれを隠さないし、ストレートに言うし、そして向き合う。そして良ければそれを何とかする」

難しい話じゃないのだ、別に。テストに備えて勉強する。頭が悪いのなら必死になる。それと同じことをするだけだ。気持ち悪く感じるなら、それを何とかしよう、というだけの話である。

……元々決めていたことでもあるが、アンが風呂場で向き合って、言葉にして口に出してくれた事からそうしよう、と決めた事でもある。と、まあ、一種のポリシーでもある。そういう訳でどうだろうか、と言葉を贈る。

「大前提としてお前自身がどう思っているのか、改善したいのか、その意思があるかどうかって所なんだが。ちなみに、どうでもいいって返した日には泣くぞ」

その言葉を受け、湊はしばし、ぽかーん、とした表情を浮かべていた。しかしその表情は少しだけ変わった。唇の端を少し……ほんの少しだけ上へと持ち上げて、

「不思議な人だね、君は」

「不思議系に不思議系扱いされた……」

そんな風に扱ってきた青年はしかし、小さな、微笑とも呼べる笑みを浮かべていた。日ごろからアンの無表情を見慣れていないと見逃してしまいそうな程の小さな笑みだったが、それを浮かべた湊は、

「そうだね……じゃあ、頼もうかな」

「頭が高い」

「僕は別に受けなくても良かったんだけど」

「お前人の親切を無視するとか良い度胸だな。無論、ここを支払いは出来るんだろうな……?」

「地味にズルい」

それが社会人に許された禁断の手立てだからだよ、とくつくつと笑

い声を零しつつもなんだ、とは思わなくもない。それなりに普通の学生らしくはなれるんじゃないか、と。どうせの事だ、この一か月の間に出来る事は出来るだけやっておこう、と思っておく。また来ることはないのだろうし。この一か月を楽しく過ごす為にも。

それはそれとして、ちよくちよく課題は残る。それとどうやってここで向き合って行くかが結局の所、問題なのだろうが、

「とりあえずアレだな……湊、お前にはフアンキーさが足りん」

「フアンキーさ」

「後はハイカラさ」

「ハイカラ」

「今日、寮に戻る前にちよつと買い物して立ち寄ろうぜ——俺が見繕ってやるよ……！」

無論、この後でピンクのアフロを装着し、ハート型のサングラスをかけた湊が寮に飛来する事となり、それを見た寮が爆笑に包まれたのは言うまでもない結果であり、タルタロスの探索中にちよくちよく此方へと向けてアギの流れ弾が飛んで来るようになるのも些末な話である。

## 死神と塔 VII

タルタロスは実質的に16Fで攻略が停止する。それ以降に進むことが出来ない様になっているのだ。その為、そこに到達した時点でレベル上げや連携確認程度しかやる事がなくなり、夜ではなく昼間の方が充実し始める。まあ、実質的に調査の手詰まりというものだ。そしてそんな事が発生しながら、あっさりと4月は終わりを告げる。

そうなると5月が始まる。そして5月が始まれば、

「——だあー！　なんで今からテスト勉強なんかしなきゃならないんだよお!?　中間試験って18日からだろ!?　今からやっても無駄無駄、忘れるって絶対に!」

ゆかり、順平、そして湊の3人組がラウンジに集まり、勉強会を開いている。そう、美鶴と明彦を含め、全員学生だ。ここで学生をしていない奴といえれば自分とアンだけだ。ラウンジでテーブルの上に教材を広げて勉強に悪戦苦闘している学生共をアンと一緒に、ポロニアンモールの怪しげな店で購入してきたバツカスの酒を使って昼間から酒を飲んで盛り上がっていた。少し離れた場所から、勉強している連中を俯瞰できるように座りながら、アンと向かい合って大きな器からコップの中へと酒を注いで、それを飲んでいた。

ぶつちやけ、普通の人間なら喉が焼けるというレベルで強い。明らかに人間用の酒じゃない。だけどデビルサマナー、そして悪魔ともなればこれぐらい強くならないと酔いさえ感じなくなるぐらいには体が強い。これ、間違いなく悪魔の酒だから、デビルサマナーがこの世界のどこかに居そうなんだよなあ、と思いつつも、勉強に苦しむ学生共の姿を肴にする。

「この……馬鹿言っていないで集中しなさいよ！　見てよ湊君を……ちよつとドン引きするぐらい真面目にやってる姿を!」

「真面目に勉強してたら引かれたんだけど」

「いや、だって真面目に勉強する奴って変態じゃん。そこは俺もゆかりつちに同意よ」

学生共の会話はなんとというか……実に勢いがある。勢いがあった

まるで中身がない。学生特有のなんというか、楽しいだけの会話だ。聞いているだけでも割と騒がしく、そして楽しい。喉を焼くバツカスの酒精を楽しみつつ、器そのものを引っ張って行こうとするアンの手を軽く叩く。

「ケチ」

「お前一气飲みしたところで酔わないんだから少しは味を楽しめよ」

「美味しい」

「そういう話をしてるんじゃないやねえ……!」

これ、一つで50万はするんだぞ……? と、首を傾げそうになるが、ぶっちゃけた話50万ははした金のラインらしい。世界崩壊前におけるマツカと円の交換レートはマツカー1に対して円が500程。つまり1マツカは500円相当の価値があるのだ。そしてガキやゾンビを殺せば一匹辺りマツカを5〜6落としてくれる。

つまりこいつら一匹殺すだけで2500円から3000円相当の収入になる。

とはいえ、こいつらのレベルは4が最低ライン。それに勝てる人間は戦場で人を殺し、Magを意識せずに溜め込んだ元軍人や傭兵の類。或いは此方の業界の人間だ。ぶっちゃけ、こちら辺のレベルの相手は戦わずに普通にアルバイトでもしていた方が儲かるだろうと思う。とはいえ、自分の様なレベルになればゾンビやガキ相手の無傷の速攻勝利を収めることが出来る。集団が相手でも戦闘を行い、今相手にしているシャドウを基準に考えれば、一戦辺り80マツカぐらいは稼げるだろう。

つまり、1戦で4万円も稼げる。10戦繰り返せば40万。

ほら、バツカスの酒がもうすぐそこに。

それにデビルサマナー業界も、かなり金になるらしい。悪魔の討伐依頼は十数万で一番安い。レベル20を超えるサマナーには数百万の報酬を用意するような依頼が発生し、場合によっては数千万が一件の依頼で動く。30や40レベルを超えるサマナーともなればその金額を動かすのは当然となってくるらしい。

羨ましい話だ。とはいえ、俺も依頼で数百万を貰えるラインはすぐ

目の前にまで来ているのだ。もう少しレベルが上がって世界が再生されれば……まあ、貯金して、良い生活を送れるんじゃないだろうかなあ、とは思っている。今も今で、桐条から報酬を貰っているのもあってこういうものには苦勞していない。

やはり、働くのなら払いが良いところが一番だと思う。

それはそれとして、中々アンの食欲が増えている部分が見える。とうか崩壊世界から此方へと来てから、食事の量が爆発的に増えている気がする。戦っていないければ遊んでるか食べているか。それぐらいいしか目撃していない気がする。

『当然じゃろ』

「あん？」

酒精の混じった息を吐き出しながらDDSから聞こえてくるチエフエイの声に耳を傾けた。

『そもそもMagが足りておらんのだよ、人修羅は。魔人なんて悪魔があ程度のいやつを相手に養分が足りる訳ないじゃろうて。サマナーも人修羅もレベルが上がって強くなったのは良いじゃろうが、それはつまりそれだけの維持費が増えるという事でもある』

「その足りてない分を食事で満たしているのか」

『マジシャン戦で一気に位階を上げたのが原因じゃな』

『ついでに言えば塔の悪魔がちよつと弱すぎるのと、放出するMagの量が少ないのが原因かな。一応人修羅も悪魔だよ、サマナー。肉体を持っているから僕らよりは維持が楽だけど、それでも魔人という規格外の存在を保持し続けるには常にMagを消費しているんだよ。少しずつ、少しずつ』

……となるとどこからか、彼女を維持するのに必要なMagを調達する必要がある。Magは強い悪魔であればあるほど持つており、強い感情や信仰に合わせて多く出現する。だからレベルに見合った悪魔を狩るのが一番効率的だ。シャドウはどうも、空虚らしい。その為、獲得出来るMagが少ない。現状、チエフエイもマツヤも消費コストは少ないからいいのだが。

『まあ一発やれば解決するんだけどね』

「おい」

身も蓋もないマツヤの言葉におい、と返しつつアンの手を叩く。器ごと持って行かせねえから。そして思い出す。そういえばマツヤは倫理観ゼロな神話サイドの生物だったよな、とも。そんな此方の考えに割り込む様にいやいや、とチエフエイが言葉を挟み込む。

『糞魚の言葉は間違っておらんぞ、サマナー』  
『糞魚』

『サマナーよ。サマナーは異能者でも悪魔人間でもなく、ただのサマナーじゃぞ？　つまり溜め込んだMagを全く使っておらんんだ。ぶっちゃけ、それを人修羅に供給するのが一番じゃろう。サマナーが溜め込んでいる使っていない分のMagを渡せばそれで十分人修羅の事は賄えるじゃろうな』

食事も人並みに減るぞー、と言ってくるチエフエイの言葉に、軽く頭を抱えそうになる。いや、だが、と思いつつ酒を飲んでいるアンを見る。昼間から酒を飲むとか本当にダメ人間っぷりが板について来たなあ、お前。人のこと言えないけど。無表情で顔を赤くする事もなく、お酒をちびちびと飲んでいるその姿を見て、視線を下げた。  
「無理です」

そんな度胸あったら風呂場で襲ってるに決まってるだろ。出来ないから今こうやって困ってるに決まっている。というか、世紀末マインド化して他人のセックスを見てはしゃぐような思春期の状態は抜けたが、自分が手を出すとすると話はまるで違う。ほら、責任とかあるし。その後で気まづくなったり、下手とか言われたら自殺したくなるし。正直、変な関係になってそのまま一緒に戦い続けられる自信がない。

『これはもしや媚薬盛るべきでは』

『よし、妾がマリンカリンをおおう。それで問題解決じゃ』  
『どうやら死にたいらしいな貴様ら』

射撃無効のマツヤはともかく、普通に通じる駄狐辺りは鍛錬の的代わりに飾ってもいいかもしれない。いや、ディアさえ使えれば再利用できるからもう駄狐が的の良いのではないのだろうか？　そんな感

じに朝から酒を飲んでいると、

「だあ——！　因数分解とか何時使うんだよ！　卒業したら絶対に使わないだろ！　休み休み休み！　助けてセンサー！　俺も卒業したらデビルバスター伊織順平となるからー！」

「うーん、この……」

宙を舞う順平の腕にそれを睨むゆかり、そして溜息を吐いて二人を見る湊。なんだかんだでこのトリオで固定されているなあ、とは思わなくもなかった。そう言えば学年は同じだったはずだから、それが原因か。まあ、それはそれとして、順平が座っている椅子を乗り出しながら此方へと視線を向けてくる。

「な？　な？　サマナーセンサーも因数分解とか使っていないだろう！？」

「そらな」

正直、高校で覚えた事は思い出そうとして口に出せる者は少ない。とはいえ、必要な時になれば勝手に出てくるだろう。知識とはそういうものだ。個人的には何事も学んでみるべし、だとは思う。何せ、人生何が起きるのか解ったものではない。何時、どこでどんな知識が必要とされるか解らないのだ。だったら学校のカリキュラムに真面目にうち込んだ奴が最終的に得するのだ。

「ま、悪い事は言わない。素直に勉強しろ。順平はその感じ、大学に特に興味はないんだろう？　だったらその分ここで詰め込めるだけ詰め込んでいけ。解らない、で許してくれるのは学生の間だけだからな」

それに、

「俺は卒業出来なかったからなあ、高校。最終学歴が中学卒業でデビルサマナー以外の就職先が絶望的だよ」

「いや、でもセンサーめっちゃ稼いでるじゃないですか」

「なんか、この前宝石をたくさん貰ってましたよね？」

「お前ら学生。俺、プロ。俺が満額で受け取れるのは当然の対価だろう？　まあ、お前らも学生身分を卒業すれば桐条からちやんと命を懸けて戦った分の報酬は受け取れるんだから、それで満足しておけ。ほ



ら、大学だつてただじゃないしな」

「結構こだわるんですね、大学の事」

まあ、と呟く。席に深く腰を下ろしつつ、そうだな、と呟く。

「そもそもまともに高校を卒業出来ていれば大学に行く予定だったしな……社会学部で」

「え、嘘」

「ほんとほんと。社会における集団の役割とか、文化とか、どういう行動を通してコミュニティを形成するとか……そういうのを勉強してたんだよ」

まあ、全部無駄になってしまったが。観察対象である社会そのものが消えたので。世紀末で使えない知識ナンバーワンだった。ただ、まあ、人の行動原理について学ぶ事もあったので、そういう所では色々と役立った。世紀末になってからのメシアやガイア相手の交渉、或いは悪魔からカツアゲする時とか。まあ、だからほんと、人生何を学んで何が役立つか分かったもんじゃない。

「えーと……サマナーさんは高校卒業出来てないんですよね？」

「ああ」

「その……どうしてか聞いてもいいですか？」

「あー……」

微妙に言い辛い部分にゆかりが踏み込んできた。いや、別に個人的には口にしていいのだ。

始まりの1日目の話を。

世界が崩壊し、そして地獄の蓋が開けたあの日の事を。パパッと。余り詳細に話してもトラウマになるだけだ。だがその話をしたところで、それをタルタロスとの探索に結び付けられ、怯えられたら困る。なんというか、自分の話は割とショッキングだ。少なくとも自分は生きる為にそれを乗り越えはしたが、まだ生死を賭けている、という実感の薄い少年少女には辛い話ではないかと思う。

『まあ、良いんじゃないかと僕は思うよ？ 正直、この寮にいる人間で戒める者がいないからね。おそらく一番そういう事をするべきに当たる人物はここにいないし』

マツヤの言うのは幾月の事だろう。丸ごと持って行こうとするアンの手をもう一度叩いて払いながら考える。あの男、理事長というだけあって忙しそうにしており、必要な時以外は学生たちに関わっている姿を見ない。いや、間違いなくサポートにはなっているが、日常的なメンタルケアとか、そういう部分で助けているのを見ない。大人だからこそ、そういうのを面倒見なきゃならないのではないか、と思うのだが。

『その為のサマナーじゃないかの』

俺、本当なら高校卒業したばかりなのだが。だけどまあ、そういう事情があるのなら仕方がないだろう、と器の上にスタマを乗せてアンを牽制する。流星にスタマが乗ったバツカスの酒には中々手が伸びない。

『メ……メギ……メギドラ……メギドラ……メギドラゴン!!』

「さ、サマナあ……ひ、卑怯お……」

『鬼か』

メギドラゴンとはいったい何なのだろうか。永遠の謎を残しながらそうだな、とゆかりの言葉に答える。

「そうだな……月光館学園だっけ？ お前らが通っているの?」

その言葉に頷きが返ってくるので、じゃあ、と話を続けよう。

「そこが、昼間の間にタルタロスの様にシャドウの巣になったどうなる?」

「そりゃあ……」

と、言葉を放とうとしたところで順平が言葉を止めた。それに湊がペンを置きながら続けた。

「出たんだ、シャドウ……じゃなくて悪魔」

「おう、そうだ。タルタロスみたいな無限湧き状態だ。俺の場合は学校だけじゃなく街規模で発生したからな。おかげで卒業はなくなるわ、学生生活が終わるわ、大学にすらいけなくなったもんさ」

「……」

言葉が止まり、やや、顔を青くする二人の姿が見える。湊は——  
まあ、反応が薄い。そもそも死を恐れる様なタイプじゃないから当然

だろう。ただまあ、そうやって青い表情の学生共を見ていると思いでしてしまう。

最初の日の事を。

◆

「あつ、あつ、あつ、あつ」

一番最初に目撃したのはスライムに包まれたクラスメイトの姿だった。天井から落ちて来たスライムはクラスメイトの男を飲み込んだ。だけどそれではM a gが足りなかったのだろうか、その粘液を伸ばして近くにいた女子学生も飲み込んだ。そうやって飲み込まれた学生はスライムの中でくっついた。物理的に。肌と肌が接触したと思っただらくっついて、そして一つへと形を変えながら粘液と融合し、最終的には学生の姿も、スライムの姿もなかった。

そうやって悪魔は生まれた。

最初に生まれた悪魔はそうやってクラスメイトを食らい、別のスライムがその死の臭いで顕現し、新たな人間とM a gを取り込んで一気に増えた。何故、こんなことが、と考える暇さえなかった。気づいた時には吐きそうな口を押えながら全力で逃げ出すほか選択肢がなかった。

だが逃げ出した先は更なる地獄だった。この時点ですでに世界は崩壊し始めていた。この時点で、世界は日本以外が消滅していた。それに伴い裏と表を分け隔てる壁が消滅していた。

それ故に世界の裏側、表側に出てこない筈の存在達がロケットペンシルの様に、前へ、前へと押し出されていた。

それが全ての地獄の正体だと後にステイブンが語っていた。

だがこの時の俺はそんな事実も知らないし、銃もD D Sアプリも持っていないかった。持っていたのは人並みの理性と感性、そして脳味噌と健康な体だけだった。或いはそれがあるだけ、まだマシだったのだろう。病人や、或いは病気で入院していた人間は逃げる事さえ出来ずに食われたり悪魔に吸収されたりしたからだ。この時生み出され

た恐怖と絶望が大量の Mag となって崩壊世界を支えているのもまた皮肉だろう。

だけどその時、ガイアもメシアも共同してなかった時。

まだ誰も世界が既に滅んでいたと気付けなかった時。

既に神聖四文字が消滅していた故に神の助けなんて存在しないと理解していない時。

そこは正しく地獄だった。人間がまるで紙の様に千切れる。当然だ。出現し、人間と同化する事で生まれた悪魔は最低で10レベルはあったのだから。そんなのに勝てる一般人が存在する筈がない。そんなの、ヒーローぐらいにしか出来ない。そしてそのヒーローも世界から消滅していた。

助けなんてない。自分で自分を救うしかない。

友達を、先生を、その全てを捨て去って、見捨てて、助けを呼ぶ声を無視して、助けてと足を掴む手を踏み潰して逃げ出した。夜、眠るたびに未だに思い出す。絶叫しながら笑う人たちの姿を。神に祈りながら救済を待つ姿を。

その全てが救われない。

助けてくれ、助けてくれ——助けろよ。なんでお前逃げてるんだよ。友達だろう？ 助けてくれよ。死にたくない。付き合ってあげるから。好きだった。一緒に遊んだだろう？ この前の借りを返してくれよ。

好きな子もいたし、仲の良かった友人もいた。弟もそこにはいた。だけど全員見殺しにした。或いは勇気があれば、概念的な弱点を攻める事が出来たのかもしれない。清めの塩とか、そういう概念に合わせた攻撃手段でもレベル差を無視して悪魔は殺す事が出来る。だけどそんな冷静さは欠片もなく、誰かを救うという勇気もなかった。

あつたのは必死の懇願だけだった。死にたくない、死にたくない、死にたくない。

他の皆は死んでもいいから俺だけは死にたくはないという考えだけだった。

実際、特別な才能がある訳でもない俺は死んでいた。そして生きる

為であればこれぐらい、当然するだろう。それでも未だに思い出そうとしなくても、夜、眠るたびに思い出す。それが理由で一人では眠れない。恥ずかしいと思えば恥ずかしいのかもしれない。だけど、それでも俺は選んだのだ。他の全てを蹴落として、一人でも生き残るといふ選択肢を。

故にダークサマナーでないとならないのだ。こんな選択を選んで自分勝手に今も行動できている奴は、そうでならないとならない。理由は全て、自分自身の為でなきやならない。

学校を出ても悲鳴と怒号で溢れていた。テンプルナイトが活動しだしたのはメシア教会に結界を張って受け入れる状況を構築した2日目から。ガイア僧が動き出したのは初日でも、個人個人の動きで組織立った動きは皆無だった。まさにこの世の混沌。世紀末。まさしく地獄。

逃げ惑う人間を犯しながら食う悪魔がいれば、さらなる力を付ける為に人間を取り込んで肉体を得る悪魔がいた。高位悪魔になる事に失敗して生み出されたスライムは無差別に生物を食らって肥大化し、やがて耐えきれずに自爆した。

どこへ行っても死臭と血の臭いが消えない。逃げてても、隠れても、常にどこからか悲鳴と怒号と、銃声と、悪魔の息遣いが消えない。この世に神がいるとしたら——なんて言葉も意味はない。祈った所で意味はない。初日はそういう場所であり、そういう時だった。

純粹に運。それと見捨てるという判断を行えた人でなしだけが生き残れる一日目だった。誰かを見捨てて自分だけ生き残る生への執着。誰かを利用して絶対に生き延びるといふ傲慢なほどの貪欲さ。偶然誰かに助けられて生き延びるといふ運の良さ。もしくは最初からそんなものがなくても生き残れる強さ。それらのどれかがなければ生き残れない一日目だった。

故に生き残っているほとんどの人間はクスだ。

今、崩壊した世界で生きる人々は誰かを犠牲に殺して、生き延びている誰かしか存在しない。

純粹な善人は、全員死んだ。

友も、家族も、親戚も、先生も、有名な人も全部全部死んだ。

炎と悲鳴の中で全部燃え尽きた。恨み言さえも燃料として燃やされて消え去った。膝を抱えて自分の部屋の中、多重のカギとロックを掛けた状態で、脳味噌は全く動かなかった。頭の中では死んでゆく人たちの光景がリフレインし続けていた。隠れる様に体を震わせながら、死んでいった人たちの姿を見て、零れた言葉は、俺じゃなくて良かった

◆

「でもサマナーの所と僕らの学園は違うよ」

「いや、まあ、そう言われたらそうなんだけどな、ってしか答えられないんだけどね？」

湊の緊張感のない一言が一気に空気を割った。そういう意味では一種の才能とも呼べるな、と思いながら深呼吸をするゆかりと順平を見て思った。アレだけ空気に飲まれていたのにもう呼吸を取り戻していた。だからこそ、付け加える。

「ま、という訳だ。俺みたいなアウトローに憧れるのはいいが、学生で好きに学ぶ機会があるんだ。それをわざわざ棒に振る必要もないだろう？ 学生なんだからそれらしく、苦しくても勉強するってシチュエーションそれ自体を楽しめ。お前ら、絶対に卒業した後は後悔するタイプだろうしな」

「サマナーは後悔してる、そこ」

「お前のそのカミソリみたいな切り口にはある種尊敬するわ」

一切遠慮のない湊の言葉は本当に恐ろしい。場合によっては人のトラウマや地雷を踏み抜くから気を付けて欲しい。まあ、10日間の中で踏みつけられた程度では起爆しない程度のメンタリテイは身に付いた。だからそうだなあ、とスタマを必死に退けようとしながらもふわふわと戻ってくるスタマに悪戦苦闘するアンを横目で眺めつつ、答える。

「今になつてずっと後悔してるよ。あの時もっとやっておけば、1年

の時からもつとまじめにやっておけばって今になって何度も思うさ……そうならないように、しつかり勉強しろよ！」

そしてテーブルの上で高速回転を開始するスダマ。正直怖くなってきたのでDDSへと帰還させる。それを見たアンがほっとしてバックラスへと手を出そうとするので、それよりも早く奪って、ストレージへと電送する。それを見たアンが動きを硬直させる。あ、この表情は解り辛いけどショックを受けている表情だな？ となんとなくだが解る。

最近、アンの小さな表情の変化が読めるようになってきた。おかげでちよくちよくアンを虐めたり、リアクションを引き出すような行動が増えていていかんいかん、とは思わなくもない。だけど解って欲しい。

普通に可愛いのだ、こいつ。

『発想が小学生』

違う、ただ困る顔が可愛いのでそれがみたいだけなのだ。こいつの表情の変化が解ってくる中々見えていて楽しいのだ。他人がそれが解らないから、という部分もあるからなのだが。まあ、ちっぽけな独占欲だ。

まあ、そろそろ部屋に戻って飲むか、と考える。完全に空気を悪くしてしまっただし。ただやっぱ、学生生活は人生に一度のみだ。それを失った側からすると、勿体ないというか羨ましいというか、そういう気持ちに沸いてくる部分もある。

『ま、人は戒めを必要とする生物さ、サマナー。なければそのまま奔放に、楽な方を選んでしまう。そういう生き物だ。飲み、遊び、そして犯し、忘れる。そういう風に人間は作られているのさ。だから少し、脅かすぐらいが統治する上では重要になってくる……人間関係もね』マツヤからのまともな言葉に少し驚きつつそれじゃ、と椅子から立ち上がるうとしたところで、

「あ、そうだー！ そうだよ!!」

順平が椅子を蹴り飛ばしながら立ち上がり、キレたゆかりに腹パンを叩き込まれ、悶絶する。何やってんだお前、と酒の入ったコップを

片手に立ち尽くしていると、順平が腹を抱えながら、  
「センサー、一回学校行こうぜ!!」  
いったい何言ってるんだお前は。



## 死神と塔 VIII

私立月光館学園。

それは桐条が出資し、生み出したポートアイランドの上に立つ桐条が経営している学園の名称だ。小中高一貫校である月光館学園にS・E・E・Sの面々である湊達は通っている。寮が存在する巖戸台から駅でモノレールに乗って向かう形になる。S・E・E・Sの連中は毎日こんな贅沢をしているのか、とモノレールの窓の外の光景を眺めながら見ていた。そこからはポートアイランドが、港区が非常に良く見えていた。モノレールのガラスの向こう側で、流れゆく海の上の景色を眺めていた。

「そういやあ、まともはこの景色を眺めるのは初めてだったな」

月光館学園の学生用制服に袖を通した状態で、そんな事を呟いた。巖戸台駅からポートアイランド駅まではモノレールが走っており、それでポートアイランド全体を見たりする事が出来る。実はこれ、ポロニアンモールへと向かうのであれば橋を渡ればいいので、乗る必要がない。何よりも日中、暇な時間が多く、急ぐ理由もないので歩いて移動しているのが基本だ。桐条を通したバイクの購入も行ったが、これは崩壊世界へと戻ってからの移動手段だ。

まあ、そんな訳でモノレールにはあまり乗っていない。というかほぼ乗っていない。こうやってモノレールの上からポートアイランドをゆっくり眺めるのは初めてだ。それも学生に混じって、制服なんかで。基本的にタルタロスへと向かう時に乗って、戦闘前の予習と復習で大体時間を潰している。

そんな事を考えずに窓の外から、ポートアイランドを眺めるのは割と初めてかもしれない。呆然と、景色を眺めていると、そこに反射して、後ろに立つ人修羅の姿が見えた。振り返りながら扉に寄り掛かれれば、そこに月光館学園の女子制服に身を包んだアンの姿が見えた。普段はあのオープンスカートとスパッツ丸出しな恰好のアンだが、着替える事は普通に可能らしい。というか風呂場で脱いでたし。単純に服装は体の一部ではあるが、テクスチャーの一種らしくもある。

概念として構成される悪魔は、その気になればある程度は姿を変えられる。完全にMagで構築された悪魔ではない為、不自由はあるが、アンの場合は服装ぐらいはある程度自由らしい。そういう訳で、此方が順平の予備の制服を借りる中、デザインをコピーして自分用の服を一着、アンは用意していた。

月光館学園の制服のデザインは基本的に黒をベースとしている。男はブレザーにジッパーが付いており、かなりファツシヨナブルだと言える。正直、ここまでファツシヨナブルな制服も珍しい物だろうと思う。基本的にどの学校も制服って同じような物な中、ここまで個性的なものも珍しい。ぶっちゃけ、俺もこんなかつこいい制服は欲しかった。学生時代に。

「サマナー」

「ん？ ああ、そうだな。ちよつとした学生気分だよ。前は電車通学だったし、割と思い出すもんもあるさ」

頭を掻きつつ、アンを見て苦笑する。ラツシユアワーは少し外れ、学生たちは既に学園の方へと進んでいる。今はたぶん、ホームルーム中だろうか。見た目がアレなので、遅刻している様にさえ見えるが、無論、恰好だけである。即ちコスプレ。

そこには特に深い訳はなく、順平のバカみみたいな一言が始まりになる。

『センサーってアレ、学生時代が中途半端に終わったんすよね？ だったら一日だけ月光でぶらぶらしてみませんか？ ほら、悪い思い出を良い思い出で上書きする的なアレで！ 広いし見る所たくさんあるし、退屈しないと思いますよ。ほら、先輩って権力者がこつちにはいますし』

素っ頓狂な事を言った順平だったが、興が乗る部分があったのか、美鶴は二つ返事で許可を出してしまい、こうなるに至ってしまった。順平の何を馬鹿言ってるんだこいつ、とその発言を思わなくもないが、アレはアレで一種の才能かもしれない。空気の読めなさとか、行動力というか。たぶん、湊に欠けている人間らしさをあの青年は持ち合わせている気がする。

まあ、それはともかく、特に断る理由も見つからなかったため、半ば押しきられるような形で月光館学園の制服を渡され、こうやって着替えてモノレールに乗っている。いや、正直制服姿のアンを見られるのは眼福だが、学生のバイタリテイとは侮れないものだな、と戦慄している。とはいえ、

少しだけ、自分が楽しみにしているのも事実だった。

そこは素直に順平に感謝したいし……そのバイタリテイを見習いたい。なんというか、デビルサマナーになって以来自分の行動が無難、安全確認、確殺をメインに行動している気がする。いやそれが悪い訳ではないのだ。デビルサマナーとして命を懸けるのであれば、寧ろこれで良い。ただどここの安全志向が原因か、こういう学生のフリをして忍び込む、何て事をまるで考えつかなくなった。ぶっ壊して、殺して、奪ってどうにかする。だまして、穢して、欲しいものは手段を択ばずに手に入れる。

そういうカオス思想に若干染まっていた気がする。いやある意味仕方がない。そういう時代で、そういう場所だったからだ。寧ろメシアンは尊敬さえできる。あの絶望の中でモラルを保っているのだから。いや、ガイアもセックスという手段で現実逃避する事でモラルを維持している。どちらも凄いな事だ。

中途半端なのは俺だけ。どちらにも振り抜けないのに、やっている事は蝙蝠で、そして今も一人だけ安全地帯で楽しんでいる。この間にも崩壊世界は少しずつ、少しずつ消滅へと進んでいるのに、だ。

「サマナー……は……悪くない……よ」

「時代と場所が悪いって言いたいんだろ？ 解ってるさ、それぐらい。そうしなきゃ生きていけないってのは。そうする事でしか生きていけないのは。それでも……やっぱ辛いもんさ」

思い出すのは。いつそ、思い出さえも消滅してくれば楽だったのに。そう思わなくもない。だけどそれは、過去の出来事に対して不誠実だ。自分は一人、もう逃げられる場所にはいないのだ。

「サマナー。暗いの……めっ」

指先を突きつけられ、怒られてしまった。その姿に苦笑を零すと、

モノレール内を車掌のアナウンスが響く。どうやら、終点であるポートアイランド駅へと到着しつつあるらしい。背の側の扉が開く事から背中を退けつつアンの頬を指先で軽く突いた。無表情の頬がぷにぷにと形を変えるのを眺めつつ、どれだけ彼女の存在に心を救われているのかを感謝する。

そしてやはり、この子が好きなんだと、そう認識する。

だからこそ彼女に手を出す事は出来ないと思った。彼女の大食は慢性的なMag不足から来ている。魔人という強力な種族、人修羅という存在。それをまかなう為に必要とするMagが、シャドウ相手からでは足りなさすぎるのだ。崩壊世界に居た頃はまだレベルが低かった、だからこそどうにかなった。だけど此方に来て、レベルは15のラインを超えて、日常的なタルタロス探索で更にレベルは上がっている。今ではアンが18レベル、自分が17レベルになっている。

もう、業界で見習いを卒業して、自分ひとりで事務所を構えて良いレベルになる。地方の都市で、専任サマナーとして契約しても良いレベルだ。そしてそこまでくると悪魔のコストや維持にも気を使い始める。

まだ崩壊前であれば、生体Mag協会等というマグネタイトの販売組織があったらしい。それを使えば今の様な悩みも解消されただろう。だが生憎と解消されない。あるもので生きて行けなければいけない。俺の様な男で彼女を穢したくはない。何より食費さえ覚悟すれば、彼女の場合は何とかなる。

「ん？ 到着したか……じゃ、見学させて貰おうか」

「ん。学校……初めて」

「そうか」

眩きを返しながらまあ、楽しむか、と笑い声を零しながら開くモノレールの扉を出る。

◆

月光館学園は小中高が一貫した、いわゆるマンモス校になる。桐条

が作っただけあって非常に整っており、個性的な教師を揃えており、それでいて最新鋭の設備を導入している。これがタルタロスと同じ位置にある、という事を考えると何やら、邪推したくなる事実が浮き彫りになってくるが、そんな事情には欠片も興味ない。実は桐条が黒幕だとか言われてもええ、ふーん、そーなのか、で済ませる自信がある。

何度も言うが、自分はこの物語の外様。5月中には崩壊世界に帰るのだ。そうすればここに来ることもないだろう。だから事情とかを考えるだけ無駄になる。考える必要もない。そこらへんはきつと、湊が良い感じに決めてくれるだろう。アレは別格の気配がするし、自然とそうなると思う。

物語の主人公が一体誰なのか。会えば解ると支配人は言っていたが、まさにその通りだ。これは間違えようがない。まあ、そんな事で月光館学園とか、桐条とか、シャドウの関係とか、そういう事を詮索するつもりは一切ない。そんな事よりも制服を着て、既に授業が始まってであろう時間にこのマンモス校の敷地内を歩き回るといふ背徳的な行いが楽しかった。

気分は悪さをしている学生気分だった。

少しだけ、若返った気分だった。

しかし、バカみたいに広い。そりゃあ小中高と全て合体させているから仕方がないかもしれないが、タルタロスの探索の時だけでは気付けない、恐ろしいほどの設備の充実がここには見れる。何せ、基本的にメジャーなサッカーやバスケットを始めとしたスポーツに剣道があれば、マイナーと呼べるようなスポーツや文芸の部活動があり、そのための設備や施設まで置いてあるのだ。

充実……というには少々、行き過ぎた設備だった。それでいて月光館学園の入学金はとんでもない額！……という訳でもないのだ。ぶっちゃけ、良心的な部類らしい。少なくとも順平の様にそこまで賢くない学生が入学できるレベルの学園だし、その上でエスカレーター式で学年を上がって行く為、小学校から高校の卒業までずっとお世話になる事が出来るらしい。

まあ、十中八九ここまで充実しているのは学生を集める為、そしてその中からペルソナ適性者を探し出す為なのだろうと思っている。寧ろ、タルタロスのある場所に学園が立っていて、影時間になった巨大な塔にトランスフォームするのに桐条が何も関わっていないなかったら寧ろ謝る。まあ、金になる組織なのでどうぞどうぞ、という感じでもある。その契約も終わりが見えてきているが。

既に授業が始まっているのか、学園の外側は静かだった。どこを見ても学生の姿がないが、校舎に踏み込めば勉強をしている学生たちの姿が見える。《ハニー・ビー》にも大量の学生の姿がマップに確認出来、サボっている様な不良の姿は確認できない。結構、真面目な所だなあ、と思いながら歩く。

「新鮮」

「……そうか」

一緒に歩くアンはどこか、楽しそうに校舎内を歩いている。学生服姿で校舎内を歩く彼女は確かにその状況を楽しんでいた。まるで学生になったような気分なのだろう。そして俺も、その気持ち解る。別に授業に参加している訳でもないが、こうやって一緒に制服を着て、校内を歩き回っているだけでも十分だった。

……記念にこの制服、貰えないだろうか。一応桐条製であるらしく、防刃防弾式の制服らしいのは、タルタロス探索でも使える様に、と配慮されているものだからだ。これ、概念加工さえ施せば斬撃と射撃耐性が付けられそうだと思う。少なくともステイブンならそこら辺の作業が出来るだろうし、戻った時にお願したい。まあ、美鶴に頼めば二つ返事で貰えるだろうなあ、とは思う。

ふと、少しだけ気になった。

「アン」

「ん？」

「お前……俺と逢う前は どうして たんだ？」

学園のどこか、おそらくは中庭に出る。綺麗に整えられた中庭に設置されているベンチを見つけ、そこに腰を下ろす。気が付けばそんな事をアンに尋ねていた。ぶっちゃけ、気になっただけはいたが、怖くて聞

けなかった事の一つでもあった。ベンチに座った状態で聞けば、アンが中庭の中央でくるり、とターンしながら此方へと振り返った。ふわりと広がるスカートの様子に少しだけ目を奪われつつも、

「知らない」

と、ストレートな言葉がアンから返って来た。だがその言葉に首を傾げる。

「知らない?」

「うん」

頷きを返してくるアンはんと、と声を零しながら此方へと近づき、ストン、と横に座った。そして横に座ったアンはんー、と声を零した。「気づいたら……ルイ……いた。私に……大事な……モノを、くれる、って……言った。私は……なにも、知らない。なにも、覚えていない。断る理由も……ない……で、サマナーと……逢った」

「お前、記憶喪失だったのか」

「記憶喪失? んー……ちよつと、違う……? 始まった? 生まれただ?」

アンは首を傾げながら考える様な表情を浮かべていると、しかしこてん、と此方へと腕を組んだまま、倒れ込んできた。それを肩で受け止めつつ、うーん、と唸るアンを支えた。なんというか、

「記憶がない?」

「うん」

『造魔に近いのかもしれないね』

造魔、という言葉に少しだけ目を瞑り、思い出そうとする。そう言えばどつかで聞いた気がする。確か人造的に生み出された、ホムンクルスの様な存在……だったはずだ。ガイアーズの一人がああ崩壊世界で造魔を連れていたのをそうやって、思い出す。確かMagを消費しなくて済む便利な人間に近い悪魔だと言っていたような。

そう言えばアンも肉体を持っている。そういう意味では造魔に近いのだろうか? とはいえ、確かにアンの正体は気になる。しかし、記憶がないとは実に予想外だった。なんというか、

この為だけに用意したというか、そういう感じがある。それはとも

かく、先ほどまで此方の為か、黙っていたマツヤとチエフエイに声をかける。

「あるのか？ 記憶の無い悪魔って」

『ありえなくはないのお』

『まあ、僕や駄狐は元々魔界にある大本から来ている分霊的な扱いだからね。駄狐の方はそこらへん、やや曖昧だけど。だけどほら、僕は元となる存在があるから、保有する知識とかはそこらへんから来ているしね。だけど造魔はそこらへん、ベースとなる悪魔が存在しないのが基本だ。だから知識や記憶、経験の引継ぎが存在しない』

成程、そういえば悪魔は魔界に本体がある、という話だった。

『ちなみに造魔はドリー・カドモンをベースに作成されるからね……人修羅も同じような手順で作成されたのかもしれないね。人を核に

『……』  
「そこまでどう？」

流石にその先を聞くのは気分が悪い、とマツヤの言葉を止める。それを察してマツヤは言葉を止めてくれる。イケメンだし、頼りになるし、そしておそらくこの中で一番正しい悪魔はマツヤだ。何よりも神話で名が語られる、その本来の霊格ともなれば、実際に正しきや正義、そして救世を象徴していてもおかしくはない。だがこのイケメン魚類は根本的に神話の存在。

正しいし、頼りになるが、苛烈なのだ。根本的に抑えるという事をしていない。己の行動に迷いを持たない。躊躇しない。そういう特性を持っている。確かにイケメンだが、それは絶対的な正しきから発生するものだ。自分が正しいと信じ貫く事から来ている自信と結果だ。そして判断基準が人間のそれではない。

だからどっかでツツコミを入れないと、割とそのまま心を抉る言葉を時々、叩き込んでくる。というか容赦がない。ある意味チエフエイ以上に。

まあ、マツヤがC—Lな時点で察するべき。なおチエフエイのアライメントは当たり前のようにC—Dである。

「……大丈夫だよ、サマナー」



アンの出自に対してコメントに困っていると、そんな声をアンが零していた。

「私は、今、幸せ……だから。なにを……しても、楽しい……よ」

「それぐらい知ってるよ、毎日楽しそうにしてるのを見てるんだから」  
「ん」

そう言うとアンは寄り掛かったまま、言葉を止めた。気分は学生のまま、デートしている気分で、少しだけ、懐かしさを覚える。無論、こんな良い思いをしたことなんてなかったし、本当に、普通に遊んで勉強するだけの学生生活だった。それでも、どこか懐かしさを、そして胸に郷愁を感じていた。

もうすぐ一か月になる。この世界に来てから。アプリを確認し、《ワールド・レコーダー》を確認すれば、その進捗状況も95%へと到達している。そうすれば、あの腐った、崩壊した世界へと俺は帰還する。希望も未来も、明日さえもちゃんと存在するのか解っていない世界なのに。

なのに……なぜか、今、狂おしい程の郷愁を感じていた。

あのどうしようもなく救いのない世界。滅びを待っている、辛い事しかない世界なのに、こうやってアンと一緒にベンチに座り、学生服姿で座って、思い出しているだけなのに——妙に、帰りたくなっていた。

結局のところ、俺はあの世界を自分の居場所と決めているのだろう。だからこそこうやって、郷愁を感じているのだろうか。それとも……あそこで死ぬのが、俺という男には相応しいという考えなのだろうか。どちらにしろ、不思議と、俺は帰りたい気持ちになっていた。あの何も無い、廃墟だらけの世界に。

俺の居場所なんて存在しない世界に。きっと、支配人にも、ステイブンにも、便利に利用されているだけだと解っている……あの世界に。ステイブンも、支配人も、どちらも最終的には自分の思惑で動いているのだろうと思う。それでも協力しているのは、そうせざるを得ないから。だけどそれが終わったらどうなるのだろうか？

やはり、俺は消されるのだろうか……？

答えは出ない。だけど、ただ、

こうやって、学生の真似事をしてみて悪くはない、と思えた。順平が言い出した時は狂ったか、とは思った。だけど結果として、色々と考え、楽しめている自分がある。そう、なんだかんだでこれが終わって帰る事を楽しみにしているのだ、自分は。間違いなく崩壊し、未来も存在していない筈なのに……その世界への帰りを心待ちにしているのだ。こっちのが全部あって、そして生きようとすれば楽に生きられるはずなのに。

度し難い。実に度し難い。

「でもサマナー……笑ってる」

「なんでだろうな……うん。まあ、お前がいてくれるなら、それでいいんだろうな、俺は」

「んー？」

「……いや、なんでもないさ」

流石に、好きだなんてはつきりと口にするだけの勇氣はない。せめて、何時かは……アンよりもレベルが上になったら、そういう事を言える様になりたい。だけど今は勇氣が足りない。こういう風に、近く居られる距離を壊したくはなかった。我ながら、人や悪魔を殺す事に躊躇しなくせに何ともみみっちい話だった。世界を再生しようとする男とはまるで思えない。

そんな自分を変えたい。

だけど人生、そう簡単ではない。どうすれば変われるのだろうか。今でも割とキャラを作って他人に喋っている。能力はないが、仮面ペルソナを被っているのだ。だが結局はそれも作ったキャラクターだ。本当に自分が変われている訳ではない。根っこの部分は一切変わっていないのだから。

「あ」

と、座っている間にベルが鳴り響く。どうやら最初の休み時間にはいったらしい。はあ、と溜息を吐きながら空を見上げる。肩の上にはこてん、とアンの頭を乗せたまま。果たして彼女はいつたいどれだけ俺が彼女に救われているのかを理解しているのだろうか。いや、理解

していないからこそこんなに無防備なのだろう。

「お、センサーじゃん！ おーい！ センサー！」

「あ、じゅんぺー！ 馬鹿！ 本当に馬鹿！」

聞き覚えのある声に視線を向ければ、中庭に通じる扉から順平が手を振り、走り寄っている。それをゆかりが呆れた表情で叱り、その後ろから出て来た湊がはあ、と溜息を吐き、此方の姿を見て、もう一度溜息を吐いた。

「お、センサー、もしかしてデートっすか！ いやあ、それにしても制服にあってるっすね！ やっぱ似合うと思ったんすよねー。いや、イケメンってのは大体何を着ても似合うけど」

「じゅんぺー……逆に遠慮もなくそこまで言えると尊敬するわ……」

「さようなら順平。死は恐れる物じゃないよ……」

「アレ？ なんか二人とも俺から距離取ってない……？ なんか距離遠くない……？」

どうぞどうぞ、とゆかりと湊が示すので、迷うことなくベレッタに電磁スタン弾を装填し、順平の背中に打ち込む。対人訓練用の、STUNするがダメージ自体はほぼない、そういう弾丸だ。それが突き刺さった順平が奇声を上げながら痺れてその場に倒れる。よし、と撃破を確認しつつ、横からディアの声を聞いた。

それはそれとして、

「なにやっつてんだお前ら」

ゆかりと湊を見ると、

「いや、月光広いから案内必要な、って」

「お前……俺に怯えてる子を良く連れてこれるな……」

その言葉に湊が首を傾げ、ゆかりが気まずそうに視線を反らす。おお、もう……そう思いながらも苦笑が漏れる。アレだ、おそらく発端は順平だろうが、湊が考えた親切という物だろう。全く、仕方がない。

俺も頼りになるお兄さん傭兵の仮面ヘルツナを最後まで被り続けよう。

うっし、と声を出し、順平の足を掴む。

「案内は頼んだ」

「任せて。僕も日は浅いけど、コミュを求めて結構回ったから」

「あの、じゅんペーが」

「コミュ？」

「他者との繋がり証みたいなもの。君との間にもあるよ」

「へー。もしかしてお前、意外と社交的な方なのかもしれない」

「あの、顔を引きずって——いや、じゅんペーだしいいや。あ、学食が結構美味しいんですけど見てみます？ 購買部もありますけど」

「学食……！」

「お、腹ペコ娘もやる気出したな」

Mag関係なく普通に食べるのが好きになってんじゃないかこいつ？ そんな事を考えながら順平を引きずりつつ、校舎の中へと案内の為に連れて行かれる。その前に一度だけ、空を見上げ、思い出す。

そういえば、もうすぐ満月の夜だっけ——。

## 死神と塔 IX

真つすぐ正面に向かって明彦が踏み込んだ。両腕を前に出し、上半身を守る様にガードを固めつつ姿勢を低く、攻撃しづらいように踏み込む。対人経験から来る慣れは踏み込みとガードの動きを完全に融合させつつ、淀みのない動きで速度を乗せた。戦う事、そのものに慣れていない人間からすればおそらく視界から消えたと錯覚するだろう。だがそうではない。一瞬視線の下を掻い潜る事で消えたように錯覚させているだけだ。横からそれを見れば良く解る。

それに対する相対者が選んだ選択肢は実にシンプルだった。技巧の欠片もない。判断の余地もない。それを考慮する隙間さえもない。ただ前に出てくる姿に対して飛び込んで、蹴りを叩き込む。それだけだった。

なぜなら、人修羅・アンは悪魔だからだ。

「ぐっ——」

アンの放ったストレートな蹴りを明彦は正面から歯を食いしばりながら受け止め、耐えた。受け流す事は彼のスタイルではない。力を力で制する中でも技巧を見せる、ボクサーとしてのストロングスタイル。それはアンのスタイルに似ている。天性の肉体を最大限にまで活用する、本能的な怪物の動きに。とはいえ、明彦もまた、鍛えられたボクサー。単純な一撃であれば受けて止める、という基本的な対応手段でダメージを軽減する。そのまま足をガードの上から押す様にアンへと接近しようとする。

片足の状態のバランスを崩してそのまま拳を振るおうという動き、アンが浮いた。

なんてことはない、ガードされた腕に重心を乗せて体を引つ張り上げただけの動きだ。理論を口にすれば頭がおかしいと表現するが、そういう理屈や技術は一切介在していない。悪魔だから出来るというだけの理論だった。滅茶苦茶で、技術もクソもない、怪物の動きだからこそ可能なのだ。そしてその状態から体を完全に持ち上げてアンの逆足での蹴りが横から明彦を狙う。

それを明彦は素早くダッキングとスウェイを組み合わせて回避する。既に慣れたもので、この程度でなら驚く事もなく、悪魔特有の超身体能力に対しても即座に対応した。ダッキングとスウェイは回避と同時に、自分に乗ったアンを落とす為の行動であり、素早い動きは蹴りを放たれるよりも早く、動き出していた。故にアンの蹴りは空振り、そしてそれを抜けた明彦が蹴り終わり、無防備になったアンの横へと素早くステップで接近した。

小さく構えられた拳は素早く入る様にアンへと目がけて放たれ——アンの体が空中で回った。まるで空を蹴ったかのような理不尽な動きに拳を回避しながら回転し、そのまま上から足が落ちてくる。だが来るのが解っていた明彦が横へと体をズラし、それを回避し、着地しながら放たれる回転蹴りをダッキングで回避する。

そのまま、踏み込みながら連続で放たれる連脚を明彦は汗をかきながらも、冷静にダッキングとスウェイを駆使し、連続で回避し続ける。「良くやるな、明彦も」

寮の裏庭のスペースで、明彦とアンが戦っている。無論、昼間はペルソナ使いのスペックを發揮する事が出来ない為、仲魔に頼んでスク・カジャを二回程、明彦にかけている状態だ。これで漸く対応できる、というレベルまで身体能力を發揮できる。ペルソナ能力がなくても、素の能力が高いのと、ある程度上昇した身体能力が残っているのが原因だ。

それはともかく、基本的に明彦のタルタロスに対するモチベーションは戦闘を行い、強くなる事にある。その為、最近はタルタロスに進展がなく、シャドウも格下ばかり、そして探索しているのも湊達三人組。そこそこフラストレーションが4月頃から溜まっていたらしい。

その対策に始まったのがアンとのタイマンだった。元々ボクシング部ではエースで敵なしの明彦であり、殴る相手にシャドウを見出しで楽しんでいた。つまり、平均的な人間よりも遥かに強いのだ、こいつは。そうなってくると明彦の相手が出来る存在は限られてくる。

そこでアンが相手になった。最近では戦闘はゆかり・順平・湊の三人にレベル上げと経験の蓄積の為に任せていて出番がないため、食事の

取りすぎにも感じるし、太らない為に適度な運動として明彦の相手をする許可を出したのだ。

そういう事で見られるようになったのが裏庭でのアンと明彦の蹴り、殴り合いだった。明彦も明彦、単純に殴り合うだけではどうしようもない化け物身体能力を持っている相手に拳を交えるのは良い経験になる為、楽しむ様にボクシングで挑んでいる。うーん、このベルセルクめ。そう思いながらもアンの運動にもなるので何も言えない。とはいえ、

「今夜はタルタロスなんだ、あんまし派手にやって怪我するなよ」

「解って！ いる！ きー！」

そう言って回避に汗を流す明彦は楽しそうだった。ペルソナ能力が使えない時間帯にそうやって楽しむ理由が自分には良く解らなかった。ペルソナ能力が使えて、その力を楽しむのならまだ解る。だけど、流石にそれもなしに体を動かす事の楽しさは解らない。まあ、そういう性分なのだろう、と思っていると扉が開き、美鶴が出て来た。「ああ、やはりここにいたかサマナー。少しいだらうか？」

「ん？ ああ、問題ない。なんだ」

腕を組みながらアンと明彦を眺めているだけだったので、割と暇をしていた。なので普通に美鶴の言葉に答え、其方と顔を合わせる。近づいてくる美鶴は腕を組んだ状態で此方の前で止まった。

「いや、話があつてな……契約の更新に関してだ」

「あー……」

「貴方のおかげで此方は安全に、そして迅速にタルタロスの調査が進められている。今まで怪我らしい怪我がないのも貴方の様にシャドウに戦い慣れている人間がいるおかげだ。出来る事ならこのまま契約を更新してくれるか、或いはこのまま桐条専属のサマナーとして所属してくれると非常に嬉しいのだが」

そこに美鶴は無論、と言葉を付け加える。

「他に何か条件があるのであれば、聞き入れよう。父……桐条の総帥も貴方の活躍と働きは耳にしている。是非ともこれからも力を貸してほしいと言っている。何か要求するものがあるのなら、大体なんで

も揃える準備も出来ている」

「偉く買ってくれるなあ」

「その戦力にはそれだけの価値があると私達は見ている。実際、影時間に関係なく力を発揮できるその能力は私達からすれば恐れる物であり、同時に頼もしい力でもあるのだ。それが我々の味方となつてくれるのなら非常に頼もしい。そして同時に、階層を隔てれば徐々に強くなつて行くタルタロスのシャドウを見れば解る。我々には一人でも多くの強い仲間が必要だ」

だからこれからも助けてくれないか、と美鶴が契約更新の交渉を行つてくる。ぶつちやけ、その条件は悪くない。寧ろ最高に良いと言つてもいいだろう。何せ、言い値で買うと向こうは条件を提示しているのだから。高校すら卒業出来ない馬鹿な俺にとっては、これ以上もない条件だろう。とうか就職できるチャンスだ。これで俺がこの世界出身であれば、一も二も無く飛びついていただろう。

故に俺が返せたのは苦笑だった。それで美鶴は交渉の失敗を悟つたのだろう。

「やはり、駄目だったみたいだな。どうやら貴方が本当に欲しいのは、桐条では提供できないもの……みたいだな」

「まあな。ここに居る1か月つてのは元々制限みたいなもんさ。俺としてもこの快適な生活を手放すのは惜しいけど——」

帰らなくてはならないのだ、あの崩壊した世界に。誰でもない、俺自身がそう決めている。アレを見て見ぬふりして逃げる事は……俺には出来ない。果たさなくてはならないのだ、世界の再生を。誰でもない、俺自身がそうしなくてはならない。そして俺にしか出来ない。世界を再生し、そして明日を取り戻さなくちゃならないのだ。だからここで立ち止まっていることは出来ない。

俺は帰らなきゃならない。

「ああ、本当に惜しいわ。学生の面倒を見て昼間から酒飲んでるだけでお金がもらえるのになあ……」

「流石にそこにはそろそろ物申したかったが……まあ、貴方も貴方で何かを背負っている様だ。だとしたら事情も知らぬ私では口は挟め



ない。だけど桐条はそれに手を貸す準備は出来ている、とだけは覚えていて欲しい」

「ただし、俺の労働を対価に」

「無償労働は嫌いだろう？ 君も」

そらな、と苦笑する。まあ、悪い関係じゃなかった。桐条との契約は。寧ろ良かった。こんな良い労働条件で働けるのもあと数日か……と、思うと中々に寂しいものがある。とはいえ、既に覚悟している事だ。少しずつだが給金を使って、保存の利くものをストレージに格納し、日持ちしなさそうな物は寮の冷蔵庫に叩き込んである。まあ、全体的にかなりの量になっている。とはいえ、ストレージ内部は物質を電子化して保存している為、そこまで問題はない……腐ったりするかどうかはスティープンに聞いてないから冷蔵庫に入れているのだが。

一応、崩壊世界に帰るだけの準備は完了しているのだ。弾薬、銃、物資、あの崩壊世界では貴重になりそうな砂糖とか、植物の種とか。そういうものも色々と積み込んだ。土地は一応あるのだから、食料を自給自足で供給する為の準備だ。畑なんて建物壊してそこを耕せばいいのだし。まあ、崩壊世界に野菜が育つ、という概念が残っていればの話だが。

「ま、後数日だ。そこまではきっちり面倒を見るさ。お嬢の後輩も少しずつだけレベルが追いついて来たみたいだしな」

「ああ。これなら明彦と一緒にタルタロスを探索できる時も近いだろう……とはいえ、先に進めない事が気かりだが……いや、それは今夜また調査すればいいか。それでは頼んだ、サマナー」

「あいよ。お給料分はきっちり働くさ」

その言葉に美鶴が溜息を吐き出すが、そこには少し、楽しそうな色が混じっていた。この一か月は色々融通して貰って本当にお世話になったな、と思いつつ頭を抱え、そして明彦とアンへと視線を向けた。どうやらやっと決着がついたようで、アンに蹴り飛ばされた明彦が3メートルぐらい高く吹っ飛び、そして落下しながら受け身を取って即座に立ち上がった。

「アイツ、地味にペルソナ関係なく人間からはみ出し始めている気がするが」

「……やはりそう思うか？」

スク・カジャがあるとはいえ、なんで悪魔を相手に肉弾戦が出来るんだろうアイツ……。そんなことを考えつつ、昼間の時間は過ぎ去って行く。

◆

そして昼が終われば月が色を変える夜——否、影となる。影時間。それは存在しない、境目の時間。明日と昨日の間に存在する刹那であり、存在しないが存在するという矛盾を孕んだ時間帯。その時間は存在しない時間であるが故に、存在しないものが存在出来るという特性を保有していた。故にこそ、シャドウはこの時間帯にのみ出歩く事が出来ていた。

そんな影時間の夜空を寮の前から眺めていた。

綺麗な満月が浮かんでいる。そういえば、あの時マジシャンと戦ったのもこんな満月の夜だっけ、と思い出す。満月は不思議なもので、悪魔を活性化させる力がある。満月の夜ともなれば平時であれば悪魔が狂う程に暴れ出すもの……と、言われていた。すぐ横で月光を浴びながら立ち尽くすアンを見た。

「どうした？ お前も満月には感じるものがあるのか？」

「んー……調子……ちよつと良い？」

『まあ、悪魔だからね。満月の魔力は僕らを元気づけるさ』

『妾、満月はちよつと発情気味じゃぞ。何時にも無くテンション高めじゃの』

ほー、と呟いていると、《エネミーソナー》に反応がある。それを《ハニー・ビー》と連携させて発動させ、周辺地図を確認する。巖戸台周辺が表示されるマップには巖戸台駅の方に集中する、シャドウの気配を表示させていた。ここ一か月、あのマジシャンの一件以外でシャドウがタルタロスの外にいるという事はなかった。

あのマジシャンの出現時は満月。今夜もまた憎々しい程の満月。

満月は悪魔的に強い意味を持つ存在だ……となるとやはり、満月になるとタルタロスの外にもシャドウが出てくるのだろうか？

「サマナー！」

「ん？ ああ、シャドウの反応だったらこつちでも捉えている。巖戸台駅周辺……いや、場所的にはポートアイランド駅へと向かう海上モノレールの上って感じだな」

「やはりそうか……」

寮の扉を開けて美鶴、そして残りのS・E・E・Sが出てくる。制服姿に腕章を装備している状態で出てきたところで、美鶴が機材の乗ったバイクを引っ張ってくる。それで全員が寮から出た所で、

「サマナー、貴方の経験からして、どう思う？」

「十中八九大物だろうな。普段相手にしている雑魚よりも強い反応がソナーにあつたし。アレだ、満月ってのは悪魔を強くしたり、活性化させる魔力つてもんがあるからな」

「シャドウと同じ様な存在である悪魔がそうならシャドウもそうである、とか……いや、タルタロスの調査が行き詰っている今、逃がす手もないだろう。我々は今夜、モノレールのシャドウの確認と排除へと向かう……いいいな？」

他のS・E・E・Sに合わせて頷いて返答を返す。元々雇われている身分なのだから、仕事に関しては文句を言わない。行動が決まればサクサクと行動に移す。

影時間の中であれば、ペルソナを召喚できる学生たちは普段よりも遙かに高い身体能力を発揮できる為、普段以上の早さで現場へと向かう事が出来る。湊とかは非常に器用なもので、跳躍したらペルソナを召喚し、ペルソナに掴まって更に投げ飛ばされる様に大跳躍を決める。

それを真似て順平が自分のペルソナに衝突する姿は結構笑える。

そんな風に向かうのは巖戸台駅であり、普通であれば切符を購入しなくてはならない所、全ての人が象徴化しているので、そんな事に頭を悩ませる必要もなく、改札機を抜けて、そのままプラットホームに降りる。だがそこにはシャドウの姿も、モノレールの姿もない。

視線をプラットホームからポートアイランド側へと向ければ、レールの上で停止しているモノレール車両の姿が見える。《エネミーソナー》はシャドウの気配をその内側から訴えており、中ではシャドウが待ち構えているのを告げている。

ここでいったん足を止め、自分の持っているDDSスマートフォンを美鶴のバイク機材と連結させ、桐条の機械と連動させて、遠隔アナライズを発動させる。アプリと機材の力を、そして美鶴のペルソナ能力を使って車両の外側からシャドウの能力をアナライズしよう、という試みである。実際、若干精度が落ちるしラグもあるが、機材と美鶴のペルソナで解析は行えているのだ。

そこにオーパーツの塊であるステイブン製のDDSを繋げて《アナライズ》を行えば、間違いなく成果は出ると踏んでいる。今までのタルタロスと敵のデータをコンプしていた為に必要はなかったが、侵入前に敵の情報を調べるのは重要な事である為、解析を行う。そしてそれが成功する事で額の汗をぬぐう。

「シャドウ反応感知……データ解析完了。相手は……見たことのあるシャドウばかりだな。だがその中にひとときわ大きな未確認シャドウの気配がある。マジシャン程ではないがな。女教皇のアルカナを確認。対象をプリーステスを命名する。レベルは10、氷反射に光と闇を無効化する」

あと、と美鶴が此方を向きながら言葉を出す。

「どうやら神経耐性なる物を取得しているらしい」

「神経ハメ対策とは卑怯な」

答えながら手元にガトリングガンを電送する。それを片手で持ち上げながら、

「ならば電磁スタン弾を秒間数百ぶち込んでやるわ。一生痺れてろ」

「んー、このいつも通りまともに戦う気皆無のセンサー」

ガトリングをストレージの中に戻しつつ、まあ、

「まともに戦おうとする奴が馬鹿なんだよ。弱点と耐性が解るのならそれを遠慮なく狙ってボコればいい。特にお前らはプロでもないんでもないんだし、勇者でも英雄でもヒーローでもない。勝てればい

いんだ、勝てれば。蛮勇よりも生きて明日、美味しい飯を食べる方が遥かにいろんな意味で美味しい」

「まあ、サマナーの言葉は極論だがなるべくダメージを受けずにシャドウを倒すという考えとしては正しい。とはいえ、今回の予想される戦闘に明彦とサマナーには外れて貰おう」

「えっ」

明彦がこの世の終わりの様な表情を浮かべていた。はーん、実はかなり大型シャドウとの戦闘を楽しみにしていたな？ というのが一瞬で解る顔に浮かんだ絶望の表情。それを見て美鶴が少しだけ引いている。

「いや……相手はレベル10だぞ？ お前やサマナーがいれば一瞬で終わるのは確かだ。だけどそれでは他の三人が成長しない。それにサマナーが我々と一緒に戦えるのもおそらく今夜が最後だ。となると、なるべく戦闘経験を積ませたい」

「いや……うん！ 俺だって解っているぞ！ 後輩の育成が大事だという事は！ うむー！」

「真田先輩……」

「駅に来るまで半分スキップしてたのに……」

「あれはスキップではない。ただのロードワークだ」

中々お茶目な男である。湊が溜息を吐きながらどうでもいいとか言っているが、お前、レールの上から殴り落とされても知らねえぞ、と言っている間に話が進む。

「作戦は簡単だ。伊織、岳羽、有里の三人を攻略チームとしてモノレールに乗り込ませ、その後真田・サマナーチームを突入させる。攻略は三人に任せるとして、明彦とサマナーにはなるべく手出しをせず、三人が本当に困った時、或いは殲滅する時だけ手を出して貰うようにして欲しい。私はここからナビゲートを行う」

「タルタロスでやっている事とあまり変わりがないか」

「解った……聞こえたな？ 困ったら頼っていいからな？ 寧ろ今困ってないか？ 代わるぞ？」

「先輩、どれだけ戦いたいですか……」

「それじゃ、行こう」

召喚機を片手に湊がそう言つて、迷う事無く線路に飛び降りた。それを追うように線路から飛び降り、明彦やアンがついてくる。

「なんか……こうやつて線路に降りると悪い事をしているみたいでちよつと興奮しね？」

「変な事を言わないでよ！……気持ちは解るけどさ」

順平とゆかりの声を背後に聞きつつ、線路を歩いて行く。駅を出て海上の線路を歩けば、海風が軽く髪を揺らす。支えの薄い線路の上は歩くにはあまり適した場所ではなく、落ちたら痛い事になりそうだと思うせる……レベル16もあるこの肉体ではおそらく、即死なんて出来ないだろうが。というか普通に耐えるだろう。

飛行できる騎乗悪魔、欲しいなあ、とは思わなくもない。

いや、別にチエフェイを四つん這いにさせて走らせてもいいんだが。

『妾の人権は？』

悪魔にそんなものはない。

そんなクツソくだらない事を考えている間に、モノレールにまで到達する。最後部の扉が既に開いており、中に入る事が出来る様になっている。そこに湊、順平、ゆかり、と乗り込んで行く。

そして三人が乗り込んだところで、モノレールの扉が閉まった。それと同時に動き出すモノレールに対して、素早く、迷う事無く動いた。「ポリデュークスー！」

「アン！」

素早くペルソナを召喚し、ポリデュークスでモノレール後部のガラスを割って砕き、その中へと明彦と俺をアンが投げ入れた。若干服がガラスに引っかけたりもするが、それでも体のどこかが切れるという事はなく、モノレール後部から内部へと侵入する事に成功する。

アンを置いて。もう既にモノレールは速度を乗せて動き出していた。追いつこうと思えば追いつけるだろうが、この状況で美鶴が襲われても困る。素早くハンドサインで美鶴の所へと戻る様に指示を出せば、アンがコクリ、と頷いて駅の方へと戻って行く。その代わりに

チエフエイを召喚する。仲魔を置いても即座に補充できる。これがサマナーの強みだ。

「いきなり最大戦力を失っちゃったな」

「誘い込まれたか？ まあ、どちらにしる俺とお前が揃っているなら多少の罨を張られたとしても問題はないだろう」

射撃援護用に少し取り回しづらいが射程のあるライフルを取り出し、そこに電磁スタン弾を装填する。その間に明彦がモノレールの扉に全力の蹴りを叩き込み、ぶち抜いた。その向こう側から跳びかかって来たシャドウ、偽りの聖典にチエフエイが爪で真つ二つに引き裂くように応戦した。

『明彦！ 修理するのは桐条になるんだから少しは手心を加えてくれ！ 攻略チーム！ シャドウの反応4、影から来ているぞ！ 援護チームは素早く攻略チームの後方安全を確保しつつ前進してくれ！』

先頭車両からシャドウ反応増大！ 援軍を生み出しているぞ！ 攻略チームは全てのシャドウを相手せず、リーステスの討伐を優先しろ！』

「俺が撃って怯ませて」

「俺とチエフエイで殴り倒せばいいな。シンプルで悪くない」

「妾の活躍に刮目せよ！」

『できればいいね』

「なんか妾に恨みでもある？」

ダーク悪魔とライト悪魔の違いじゃないですかねえ、と思いながら素早くライフルを連射する。桐条製の耐久力を上げたライフルは少しずつ損耗しながらも手ごたえを腕に返し、弾丸を連続で吐き出しながら前方、4体のシャドウに電磁スタン弾を叩き込み、前、順平に叩き込んだものとはまるで違う電撃を流し込んでその体を痺れさせる。神経弾が残っていればもつと楽なだけだな、と結果、痺れたのが2体だけなのに舌打ちする。

「十分だ……ポリデュークス！」

痺れているシャドウをポリデュークスがその右腕で串刺しにし、そのまま狭い車内を鈍器代わりにシャドウを殴り飛ばし、巻き込みなが

ら一気に殲滅する。先頭に行くシャドウが動きを止めれば、それだけ後続が詰まる。狭い車内だからこそ出来る戦い方だ。

「スク・カジャ、ラク・カジャ完了じゃのう。レベル差を考えてほぼダメージは通らんじやろう」

「よしこのまま後輩達に良い所を奪われる前に進むぞ！」

「努力の方向性を直せよお前」

行き先を邪魔する様にシャドウが椅子などの影から湧いて出てくる。一つ一つは雑魚ではあるが、数がとにかく多い。まるで先に進むのを邪魔するかのような姿に、軽く苛立ちを覚える。どれだけ雑魚であろうが、倒すのには精神力と弾薬を消耗する。

「スタマヴィクトリーしてやろうか」

『殺害犯俺。被害者俺』

「サマナー！ 妾まだ死にたくない！ 既に何度か死んでるけどまたは嫌じゃ！」

うるせえ、肉盾になればとチェフエイを敵の中へと蹴り込んだ。幼女が異形の群れの中に放り込まれるという放送事故必至の光景の中、明彦は一切気にする事無くポリデュークスでシャドウを薙ぎ払っていた。その合間にスタン弾を撃ち込んで動きを拘束しながら、車両を一つ、一つ進んで行く。

『急げ！ モノレールが更に加速したぞ！ 攻略チームは雑魚どもを無視するんだ！ プリーステスだけを集中攻撃しろ！ 明彦、サマナー！ どうかしてモノレールを止められないか!?』

「無茶を言ってくれるな美鶴……俺に物理的にモノレールを止めろというのか！」

「頭大丈夫か明彦」

「アレじゃろ、尽きぬシャドウを相手にしてテンション上がってるんじゃないかな。いとあわれ」

現状、お前の扱いの方が憐れなんだけど……とは口にしない。ともあれ、頼まれたのであればやってやろう。音声入力でDDSを即座に反応させる。

「イケメン！ Magをくれてやるからしばらく支えろ！」



「その言葉を待っていたよ、サマナー！　この僕の光で君の道を照らそう！　マハグライツ！」

人の姿に変性したマツヤが一瞬で広範囲に重力魔法を放った。それによって車両内のシャドウが一気に押し潰される様に上から圧され、潰されて行く。レベルはもう5以上の開きが出来ているが、それでも人型変性した時の消費Magは重い。だが同時に、これなら戦線と掃討を任せられる。それを見届けずに、ライフルの底でモノレールの窓ガラスを叩き割って、そのまま窓から外へと体を縁を掴みながら一気に上へと投げ上げる。

速度の乗ったモノレールの強風を体で受け止めるも、人外とも表現できる身体能力に達している今、この程度で吹き飛ぶようなことはなく、ライフルを電送し、代わりにルーチエ&オンブラを抜いた。炎と氷のバランサー、笑うテーパーの姿が見えた。どちらもモノレールを止めようとする此方を止めに来たのだろうが、根本的に能力に差があり過ぎる。

「アディオス！」

前へと向かってダイブする様に転がりながら連射する。素早く吐き出された弾丸が2体のシャドウを蜂の巣にしながらその脇を抜けて、転がる様に立ち上がりながら次の車両へと乗り移った。その行動を阻止する様に、シャドウが天井をすり抜けて出現し始めるが、強風に動きが止められて、全く動けていない。

「というか炎と氷のバランサーに関しては勝手にワンモア！　と言いたくなりそうな状態になっている。」

『……炎と氷のバランサーは疾風属性が弱点だから……なんだ、その……強風で自滅、しているんじゃないか？』

「存在が悲しすぎるシャドウだったな」

動けない所を蹴り飛ばして、他のシャドウに衝突させたらL&Oの剛弾で諸共貫通して破壊しながら、再び次の車両へと飛び移って行く。ふと、前方へと視線を向ければ段々とだが見えてくるポートアイランド駅が目飛び込んでくる。到着まであと3分弱、という所だろうか。結構やばい状況だな、と判断しながらも、足は一気に前へと向

かつて進んで行く。

そしてそのまま、先頭車両へと到達する。

「いやあ、これを修復するのにどれだけ金がかかるのか考えたくないなあ」

『なら手心を加えてもいいんだぞ?』

「仕事はきつちりやるタイプなんで」

『そうか……ならシステムを壊せ。コントロールを奪取された状態でも破壊を感知すれば即座にシステムとは切り離された緊急ブレーキが落とされる。それでモノレールが停止する筈だ』

「了解」

行き先に背を向けるように、先頭車両からモノレールのフロントへと向かって飛び降り、二挺自動拳銃を連射する。即座に飛び降りた動きに追いついてモノレールに弾丸が衝突し、ガラスを割りながら穴を開け、強風と共に穴の中に体を吸い込んだ。

そうやって一気に内部を無視して、先頭車両に到達したところで、L&Oを電送しながらライフルを抜きながらそれを迷う事無くモノレールのシステムへと打ち込んだ。背中を大きく見せるプリーステスは当然の如くこれに反応出来る訳もなく、ライフルから吐き出された電磁スタン弾がモノレールのシステムを一瞬でショートさせ、緊急機能として組まれたブレーキが自動的に起動する。

システムの死んだモノレールは自発的に動くのを停止させ、その慣性もブレーキに食われて停止し始める。それで仕事を完了させたのを確認し、プリーステスの隙間からサムズアップを戦っている三人へと向けた。

そこに湊がそつと、召喚機を握っていない手でサムズアップを返した。

「いやー！ お互いに仲良くしないで助けてくださいよー！」

ゆかりの悲鳴の様な声が響く。それにプリーステスが反応し、此方へと視線を向ける瞬間、プリーステスの顔面を順平のヘルメスが放ったアギが捉え、湊が動いた。

「世界——マタドールツ！」

湊のペルソナが変転した。骸骨の闘士へと入れ替えられた世界のアルカナのペルソナは此方に意識を割かれ、そして目を潰された瞬間に出現した伏兵の刃に、

一瞬で、その首を両断された。切り飛ばされたプリーステスの首を見て、《アナライズ》を行う必要なんてない。その状態は誰がどう見ても解る。

DEAD  
即死だ。

首を切り落とされたプリーステスはゆっくり、ゆっくりと碎け、溶け、そして散って行く。

『モノレールの停止とプリーステスの撃破を確認！ 勝利だ！ 良くやった……が、これにかかる隠蔽と修復の手間を考えると頭が痛くなるな……』

と、そこで先頭車両へと明彦と仲魔達が飛び込んできた。欠片も残っていないシャドウの気配に、明彦が露骨に残念そうな表情を浮かべ、溜息を吐いた。お前、そんなに戦いたかったのか、と軽く引いてる中、湊達は勝利の余韻に浸っていた。まあ、中々派手なアトラクションだった。

結構、派手にモノレール破壊しちゃったなあ、と思いつつも、

窓の外から満月を見上げた。この世界でこの満月を見るのもこれで最後——そう思うと、中々寂しいものがあつた。

『何をやっている！ もうそろそろ影時間が終わるぞ！ そのままでいたら見つかる、早く戻って来い！』

「こんな状況で見つかったら言い訳できないぞ！」

「え、やば、逃げなきゃ！」

「どうでも……良くない？」

「どうでもいい訳がないだろ！ 逃げ！ ペルソナを使つても逃げろ！」

チエフェイとマツヤをDDSへと戻しながらペルソナを召喚し、それを使って素早く逃亡する学生たちの姿に苦笑を零しつつ、モノレールの扉を蹴破り、他のペルソナ使い達と一緒に脱出する。人外化されている身体能力で一気に線路の上を駆け抜けながら、小さく笑い声を

零した。  
こんな、ドタバタしたヒーローごっこも、もう終わりの時だった。

## 二章 東京アポカリプス 再生し始める世界

「……本当に行ってしまっんだな。ここまで好条件を出しているのに止まらないとは、本当に大事な用事があるのだな」

「ま、俺もその為にここに来たしな。悪く思わないでくれ。その代わりに折を見てまた来るからな」

「マジっすか、センサーが来てくれるならタルタロスの攻略もマジで百人力っすからね？」

巖戸台分寮の前に、幾月以外の寮に住んでいる人間が揃っている。あの男だけは理事長だから、と何かと顔を合わせていないが……なにやら、意図的に避けられているような、そんな気がしてならなかった。実際、1か月前に盗聴器やカメラの類を潰した直後からあの男は必要最低限の回数しか顔を合わせていない。或いはやはり、此方を嫌がっていたのかもしれない。

そんな事を考えながらも、寮の学生たちにさようならを告げていた。

プリーステス討伐の翌日、ついに《ワールド・レコーダー》による記録が100%に到達したのだ。それはつまり、世界再生に必要なとされるだけの情報概念が蓄積されたという証でもあり、これ以上この地球に居る必要がない、という事でもあった。それを理解した時にはや、寂しささえ感じてしまった。だが仕方のない事だ。元々、あの崩壊する世界をどうにかする、というつもりで此方へと来たのだ。現実からは逃げられないのだ。だから向き合うしかない。だから、ここで楽に逃げる事は自分には……出来ない。

まあ、言葉は色々とごまますが、結局の所、この安寧を捨てるというだけの話だった。どんな地獄であろうと、あの崩壊世界こそが俺の居場所だった。だから帰る。それだけの話だった。だからこの1か月がどれだけ楽しく、そして離れづらい場所であっても……いや、だからこそここから離れなくてはならないのだろう。

桐条から購入した大型バイクの後部に既にアンが座っている。アンはあつさりしたもんで、一回さよならを言えば、それで十分らしい。まあ、そんな訳でおそらくは最後の挨拶をしていた。後ろの方に居たゆかりなんかは花束を抱えており、

「その……色々と助けてくれていたのに、怯えていてごめんなさい。そしてこの一か月ありがとうございました。こうやって終わってから解りましたけど、サマナーさんって普通に良い人でしたね。だから勝手に怖がっていてごめんなさい」

「許す！ 第一銃を持ち歩いているんだから怯える方が普通なんですよ。君は何も悪くないさ」

ゆかりから花束を受け取りつつ、言葉を返した。そう、彼女は何も悪くない。社会的に問題児なのは俺の方だ。だから苦笑しながら花束を受け取り、それを肩に乗せた所で、最後に湊が前に出た。その手の中には少し大きさのある、包みが握られており、それを此方へと渡して来る。受け取りながら、

「これは——」

「君のサイズの月光の制服と、S・E・E・Sの腕章とセットで召喚機。つまりは僕らと同じ格好をする為のセット。君には必要のないものかもしれないけど、この1か月を一緒に暮らした友達への僕らからのプレゼント」

呆然と受け取ったそれを見て、そして湊へと視線を向け、それから美鶴へと視線を向けた。それを受け、美鶴が、

「安くはしたが、基本的な資金は皆で出したものだ」

「ま、センサー一人だけ仲間外れだったもんな」

「その、ちよつとした負い目あるし」

「防刃、防弾、防火作用があつて優秀だぞ！」

「いや、あの、真田先輩、アピールポイントズレてます……」

不覚にも、少しだけウルつと来た。だがそれを笑みで抑え込み、ありがとうと言葉を返す。今の自分にはそれしか出来なかった。たった1か月、1か月だけだったのに……こんなにも離れるのが惜しくなってしまう。だからそれを紛らわせるように受け取ったものを

電送してストレージに格納し、バイクに飛び乗った。

「あ——」

「ハ！　ありがとうよ！　また忘れた頃にやってくるから、それまで怪我するんじゃないぞ！　……じゃあな」

言葉を重ねても辛くなるだけだ。さっさとバイクのエンジンを入れ、飛び出す様に巖戸台分寮に背を向けて、飛び出した。轟音を響かせるバイクのエンジンにはガソリンが満タンにまで注ぎ込まれているし、必要なガソリンも既にストレージにしまい込んである。しばらくは燃料切れなんてことを気にする必要もない。免許なんて当然ない、無免許運転で公道へと飛び出し、最初にこの世界へと来ることとなった場所へ、

扉へと向かって移動する。

背後から、アンが腰に手を回して抱き着いてくる。背中に密着する彼女の体の感触を感じるが——不思議と、邪な気持ちにはなれなかった。後ろから抱きしめてくれる感触がありがたかった。そしてそれ以上の言葉も必要なかった。寂しい、我ながら女々しい。自分から戻ると決めていたのに、いざ、こうなったら名残惜しさを感じているのだから。だけどこんな感情を感じられる俺はまだ、きっと、人間なのだろう。

デビルサマナーになっても、心まではまだ、悪魔になっていない。

「さようなら死神と塔の世界……もう二度と来る事もないだろうよ……」

情報の取得が終わったのだ。だったらまた来る必要はない。何よりも……俺のような存在がいるのは、この世界そのものを穢している様な気がした。

俺は見捨てた。多くの人を。混乱の中で、自発的に助ける様な事さえもしなかった。見捨てて、逃げて、隠れて、そして今でも自分が生き残る事ばかりを考えている。そんな俺にプレゼントを贈れるような良い人たちがいるこの世界に、

俺は、一秒でも長くは居られない。

バイクのスピードを上げて更に爆走して行く——世界の果てま

で。

◆  
「つしやおらあああああ——！」  
「うえーい」

世界扉をバイクで突き抜けてナカノブロードウェイへと帰還した。死神と塔の扉をぶち抜くように飛び込み、ドリフトをする様にバイクを停止させながら事務所の壁をバイクの後輪でぶち抜いて完全に停止する。そうやって停止したところで、振り返った死神と塔の扉は半透明になってはいるものの、壊れてはいない——どうやら、干渉できなくても、そこに残るらしい。今は使えなくなっている。

「久しぶりの故郷に帰って来たぜ……ホーム！ ファツキン！ ホームー！」

「ふあつきーん」  
『サマナーなんかキメた？』

『寂しさを紛らわせるためにテンション上げてるだけだと思っ』  
「煩い、黙れ。俺が法だ。つまりジャスティス」

ここからは世紀末タイムだ。遠慮する理由なんて欠片もない。法律も、巖戸台分寮も存在しない世界だ。確認しておいてなんだけどやっぱり泣きそう。もうあのふわふわパンケーキを食べられないし、スタン弾で気絶させた順平を引きずる事も出来ないし、段々と人間を卒業し始めていた明彦が蹴り飛ばされる光景を見る事も出来ないのだ。

あんな環境にゆかりを放置して大丈夫だろうか。いや、湊は間違いなくどうでもいい……とか言っただし、そもそも美鶴はメンタル強度違うし。あの中にいるので一番メンタルが豆腐並みに柔らかいの、明らかにゆかりだし。まあ、戻れない以上は心配しててもしょうがない。

エンジンを響かせれば、それに応えるように悪魔の気配と声が聞こえてくる。そういえばここはインプ達の巣だったな、と思ひ出す。問



答無用でDDSSからマツヤを召喚し、それをアンに装備させた。

「レベル8程度の雑魚め……」

「雑魚め……」

「真の暴力という言葉を覚えてくれるわ!!」

「くれるわ!」

『仲が良いね』

呆れる様なマツヤの声を聞きつつ、前輪を一気に持ち上げながらバイクを走らせ、何かと見に来たインプを潰して殺す。今、俺の生体マグネタイトを纏ったこのバイクは、俺の能力に準じた破壊力を持つ対悪魔バイクへと進化したのだ。

無論、そんな事実はないけど、無性にヒヤッハーしたい気分だった。

「今生からグツドナイト……!」

「おやすみ」

バイクを一気に発進させる。飛び込んでくるインプを轢き殺し、マツヤカリバーでハマを放ちながら一気に道を確保したら、そのまま壁をぶち抜いて空へと飛び上がる。ヒヤッハー、と叫んだ先、見えるのは道路ではなく屋根の姿だった。

「おっと、どうしよう」

『うーん、流石のテンションじゃな』

まあ、いいや。屋根の上を走れば。そんな考えでバランスを取り、一気に屋根の上へと着地し、そこから走りながら再びバイクが跳躍し、崩壊した道路の上へと出た。その騒音と轟音にわらわらと悪魔の気配が集まってくるのを感じる。バイクのエンジンを付けたまま、道路の中央で左右へと視線を向け、迫ってくるゾンビやガキの姿を確認し、サムズアップを持ち上げた。

「ん」

サムズアップがアンから帰ってくる。

「俺が! どれだけ強くなったか! お前らの死をもって教えてくれるわ……!」

『妾、死体だから既に死んでいるという名推理をしたのじゃが』

「謎さえ残らない末世だ、推理なんざねえよ!」

「なーい」

『ダメだ、このテンションでごり押す気満々だ……いいぞお！ もつとやるんだサマナー！ その調子だ！ 時には馬鹿みたいに暴れるのも大事さー！』

『随一の良心枠が逝った』

マツヤの許可が出たのでゾンビの大群へと向かってフルアクセル。ラク・カジャを保険用に使わせつつ、そのまま一切の遠慮なく、ぶつかって行く。それでこちらが衝撃を受ける？ バイクが歪む？ そんな事はない。レベルとは、魂の位階。概念強度とでも呼べるべき存在。レベルが高い事は存在として概念が強固であり、絶対的であるという事の証拠。だからこそレベルの高い者の前に立った時、下の者は息苦しく感じるのだ。

つまり、レベル差が最早10以上ある時点で本気でぶつかった場合、純粋な差と能力の違いから——風船のように弾ける。

あれほど隠れて警戒していたゾンビやガキが、今では耐性も糞もなく、バイクの体当たりで面白いように空を飛んでゆく。笑いながら轢き殺してやりたい気持ちを抑え込みながらゾンビやガキの集団を轢き殺しながら突き抜けたところで、背後には轢き殺された悪魔で生み出されたMagの道が出来ていた。

「ふうー……そろそろ正気に戻るか」

「いいの？」

「うん、無双するのはいいけど、それで油断や慢心すると死ぬし」

慢心や油断をし始める前に身を引き締めて行こう。自分にそう言い聞かせ、アンの問いに答え、バイクを走らせる。これでエストマでも使うことが出来ればゾンビやガキに会う事もなく帰れただろうなあ、とバイクのスピードを上げて悪魔の群れから逃げて行く。ただずっとバイクに乗ったままだと音で野良悪魔を刺激し続ける事になる。その為、ある程度目的地近くまで来て悪魔を引き離したら、アプリを使って悪魔の反応を確かめつつ、バイクを降りてストレージに電送する。

バイクさえも余裕で格納するのだから、流石ステイブンのアップ

りだと言わなくてはならない。

とはいえ、そもそも悪魔を入れられる様な電子空間を形成できるのだ、道具の電子化もそこまで問題ではないのだろう。偶にスマートフォンをチエックすると圧迫容量でビビるが。そうやって最終的には上げたテンションを押しさえつけながら、

この末世。世紀末。カリ・ユガ。ラグナロク跡地。或いはアポカリプス後の世界。

どんな神話でも良い。終焉を示す言葉で良い。その言葉通りの世界へと帰って来たのだ。儚くも虚しく、何も残っていないこの世界に。このどうしようもなさが逆に心を落ち着かせるのは不思議な事だった。

ああ、何たる情緒不安定——解っていても、どうしようもないのが人間の心だ。

落ち着きを取り戻し始めた所で姿を軽く隠す様に動く。染みついた、最近はしていなかった動きをしながら、向かうのはナカノの住宅街にある、個人経営の酒屋である。その裏手へと回れば、地下へと通じる階段がある。そこを降りて行けば、向こう側が崩壊している地下倉庫への扉がある。

必要な条件は開く扉である、という事だけだ。

ストレージから一本の、白銀のカギを取り出す。それを扉へと向けて、突き刺す。まるで初めからそれが正しいかのように鍵は扉の中へと沈んで行き、先端部分が埋まると抵抗と共に動きを停止する。そこでカギを回せば、ガチャリ、と鳴る筈のない音がする。

そのまま、扉を押し開けばありえない光景が広がる。

そこに見えてくるのはクラシックが流れる穏やかなバーの姿であり、

これが、ステイブンのバーへの侵入方法になる。場所はどこでもいいのだが、悪魔のいない場所を選んで入ってこないと出る時に、悪魔とうっかりエンカウントしてしまう場合がある為入る場所だけは選ばされる、この崩壊世界であればどこからでも行ける一種の異界だ。

そうやって戻ってこれた久々の拠点、

その帰還を歓迎する様に、久々に見るステイブンがクラッカーを片手に歓迎してくれた。帰ってくるのと同時に紐を引いてパン、と音を鳴らしつつ、

「ああ、良くぞ帰って来てくれた、サマナー君。本当に……本当に良く帰って来てくれた」

「どうも、ステイブンさん。まさかこんな風に歓迎されるとは思わなかったすけどね！」

「私だって人間さ。いや、人間だからこそユーモアの二つや三つ、忘れない様になっているのさ。それよりも君が無事に帰って来てくれたおかげで私は興奮しっぱなしだよ。成果報告を良いかな？」

まるで子供の様に車いすの上ではしゃぐステイブンの姿を見て思わず苦笑を漏らしてしまうが、此方もどれだけの時間が流れてしまったのかが把握できていない。ステイブンも結局、彼方側にいる間は情報を求める様な事はしてこなかった。彼なりの配慮だったのかもしれないし、ただ単純に不可能だったのかもしれない。

ともあれ、ステイブンの技術で今、生きているのだからまずはそれに報いる。

成果報告としてとりあえずストレージから大量の食糧を取り出し、傷みそうなものは冷蔵庫に叩き込んで行き、別のテーブルに購入してきた銃を乗せて、その近くに弾薬のケースを設置する。そしてこれはたぶんステイブンが作業用とかに欲しがるかなあ、と思って調達してきた新品のPCパーツや機械の部品を乱雑に、そして最新のノートパソコンを持ち込んだ。

まあ、これは必需品と必須品。だけどステイブンが一番欲しいものは恐らく違うだろう。スマートフォンを取り出し、保存フォルダを開きながら、そこに記録されたデータを展開しつつスマートフォンそのものをステイブンへと渡した。それを受け取ったステイブンは大きく頷いた。

「よしよし、私の思った通りだ。純情報概念の集積……健全な世界であれば記録やログが残るから、多少は摘出したところで世界を揺るが

す事はない。故に世界からの反動も排除運動もなし。後はこれを情報として世界に打ち込む形へと変換する必要がある……。うむ、あらかじめある程度の準備はしてある。サマナー君、君は少し休んでいなさい……。と言っても、先ほどまでいた世界の方が寛げたと思うけどね」

「それは言わないでください」

はっはっは、と笑いながらステイブンが奥の部屋へと進んで行く……。新しいノートパソコンと共に。アレ、地味に気に入ったんだなあ、とすかさず持つて行く動作に感じた。

「つて、あ、駄狐と駄魚……」

スマートフォンを預ける前に召喚しておくのを忘れてた。いや、まあ、これで別れる訳ではないのだが。しゃーない、そう思いながら息を吐き、アンへと視線を向ける。

「……ステイブンがはしやぎ終わるまでゆっくりするか」  
「ん」

短い言葉でアンが了承した。ひとつき前と比べ、表情が解る様になったな。その事が嬉しかった。ふう、と息を吐きながら店内のソファに腰を下ろし、沈み込む様に座り込んだ。やっぱり質の良いソファだなあ、と思いながら店内を流れる静かなクラシックの音に聞きほれる。横に座ったアンが身を寄せる様に体を預けてくるので、それを受け止めながら目を閉じた。

……クラシックが流れているが、静かだ。

巖戸台分寮であれば常に騒いでいる順平とゆかりがいて、拳で音を切る明彦がスパアの相手をしつこく頼んできたものだ。おかげで、あそこでは常に騒がしさが絶えなかった。

「寂しい……?」

「うん、やっぱりね……」

そう言うのと横から腰に手を回し、ぎゅつと抱きしめられた。なんだかんだで、別れという事そのものに対して一種のトラウマを感じているのかもしれないな、と思った。ただやはり、別れるのは辛い。もう二度と会えない、という訳じゃないのだろう。それでも長い別れにな

る。あそこまで仲良くなれたのに……そう思うと胸が苦しい。  
狭心症。

彼方の世界に居る間はほぼ来なかった胸を締め付ける様な痛み。それが此方へと戻って来て、復活していた。最初はストレス性のものかと思っていたが……どうやら、根本的にこの世界にある何かが原因なのかもしれない。そう考えながら片手で胸を押さえ、深く息を吸い、吐き出した。

恰好のつかない、無様な男だ。

「……早く世界をどうにかして、楽になりたいもんだ」

「サマナー……終わったら……決めてる？」

アンの言葉にそうだなあ、と呟く。

「とりあえず今のレベルでも1件百数万つてお金は稼げるだろうし、どっかの田舎の、レベルの低い異界の管理者になりたいかな。それだけでも十分にお金になるだろうし……後はそれで適当に、穏やかに暮らそう」

都会の喧騒を忘れて。戦う義務とか全部忘れて。

「それとも山奥にひっそりと住むのもいいかもしれない……なんか、人と関わって生きるのは辛いよ」

根本的に、出会いと別れを繰り返すのが辛い。また誰かと出会い、仲良くなつて、そして別れてしまうというのが。堪らなく苦しかった。あの死神と塔の扉の世界。あの向こう側にいる連中とも、適当にやっているつもりだった。だけど結局は入れ込んでいて、そして別れを苦しんでいる。

やっぱり、普通の人間なのだ、俺は。こういう出会いと別れの一つ一つが辛いだけの。情けない男なのだ。だから誰かと関わらず、ひっそりと生きて行くのが一番だろう。幸い、金と宝石はある。桐条からの報酬で。それを使えば楽な生活も出来るだろう。これが終わったらそうやってひっそりと生きたい。

だけど、その時。

アンは一緒に居てくれるだろうか……？

全てが終わった後で、一緒に居てくれるのだろうか？ それを聞き

出す勇氣はまだ、自分にはなかった。不甲斐ないが、俺はそういう男だった。格好つけるのは表面ばかり。その中身はまだまだ、子供で、未熟で、そして情けなかった。だからこそ自分を変えたい。強くなりたい……だけど、届かない。上には上がいる、というのを理解しているから。

「……」

「サマナー？」

「なんでも、ないよ……ああ、なんでもない」

やっぱり、言葉に出来ない。情けないなあ、俺は……そんなことを考えている間に、車椅子に乗ったステイブンが奥の部屋から出て来た。スマートフォンを此方へと投げ渡してくるのをキャッチし確認して見れば、そこには新しくアプリが幾つか増えていた。

「君が持ち帰った品は、死んでいない世界の新鮮な、或いは健全な概念を孕んだ品々だ。おかげで崩壊したフラグメントデータを変換して新しいものを生み出すなんて変換効率が悪い事をせずに済んだよ。とりあえずは《邪教の館》と《悪魔全書》を登録した。とはいえ、それが稼働できるのはまずは今ある概念情報を世界に追加してからだ」

受け取ったスマートフォンを確認し、新しいアプリを確認してからそれをポケットの中へと突っ込む。どうやらこれで一日が終わりそうにはなかった。立ち上がり、L&Oをすぐに抜けるホルスター付きのベルトに装着させつつ、出かける準備を進める。同じようにアンも立ち上がった。

「で、何をすればいいんっすかね」

「ナカノサンプラザを知ってるかな？ ああ、あの一際大きな建物だ。あそこには大型音楽ホールがある。あそこでなら場所と広さとしては丁度良いだろう。そこで世界再生を行う。君にはそこに向かって貰いたい」

「了解です」

じゃ、日付が変わる前に終わらせてしまおう、と思ったところでステイブンに止められる。

「待ちたまえ。期待させるようだが、これはまだ1回目だ。1回で世

界は完全に修復されない。私が計測したこの情報量ならおそらく……東京23区が復活する程度だろう。だからこれでまだ君の使命は終わった訳ではないというのを理解して欲しい」

「……うす」

まあ、流石にこれだけで終わるとは思えなかったが、1か月で東京23区か、と思うと少し辛い。とはいえ、アレだけの平和でこれだけ世界を再生できるんだな、とは思わなくもない。それはともかく、世界の再生への一歩ではある。

「そしてこの儀式にはメシアとガイアの協力が今回に限り、不可欠だ。既にメシアとガイアには私の方から連絡を入れてある。メシア教会、ガイア寺院に向かって協力者と合流したらサンプラザへと向かうと良い。現地に到着したら何をすればいいか、次の連絡を入れよう」

「待つて……待つて」

ステイブンが投げた爆弾発言に、片手を震わせながらステイブンへとちよつと待つように伸ばした。車椅子の天才はなにかな、と言葉を返してくる。

「いや、ガイアとメシアが一緒に行動するのって不味いっすよ。連中水に油だから」

「そこは問題ない。ここに残っているガイアもメシアも穏健派で、どちらも理性的だ。流石にこの状況で争って人類を絶滅させようとする事はしないさ。もし、そんな事を考えているなら既に絶滅しているとも」

「いや……まあ、ステイブンさんがそう言うなら……」

「さ、そういう訳だ。世界が君を待っている。終わればこの異界も軽く拡張し、機能も増やせる。そうしたら君が持ち込んだものでパーティーを開こう。悪魔合体も解禁し、戦力の強化も行えるだろうしね。それを楽しみに世界を直してしまおうと良い」

「世界、軽いなあー」

まあ、何も残っていない世界なので軽いのは当然なのだが。ともあれ、中々めんどくさそうだなあ、と思いながらそうだ、と言葉を置き、ストレージから別れのプレゼント、つまりは月光館学園の制服を取り



出した。

「これ、外に出ている間に概念加工できません？　一応防弾防刃耐火性ですけど」

「そこまで出来ているのならさほど苦勞はない。任せたまえ」

「じゃ、お願いしますわ」

軽くステイブロンに頭を下げてから再びこのバーを離れる事にする。貧乏、暇なしとは言うがこの場合、本当に何も持たざるモノなのは世界そのものだ。じゃ、行こうぜ、と、アンに伝えながら早速、外へと出る。

……メシアとガイアと共に動く、という事に恐怖を感じながら。

◆

メシア教会とガイア寺院。つまりはメシアとガイア。二つの思想は大きく異なる、というよりは正反対だ。メシアは秩序と法を尊ぶ。だがガイアは自由と力を尊ぶ。相当、メシアとガイアは崩壊前はテロを行うレベルでぶつかっていた。というか殺し合っていたらしい。というのも、天使たちは千年王国を築こうとし、天使による支配と絶対秩序の王国を生み出そうとする中、ガイアは悪魔と人間が力をベースに共存する社会を構築しようとする。

そしてExニュートラルと呼ばれるアライメントの極N—N連中がその双方を殴り殺す。世界はそんな感じでバランスを保っていた。というかこのN—Nを超えたExニュートラルとでも呼べる連中が一番やばいらしい。主義主張とか興味もクソもねえから早く死ね、それでいいからとか言っている連中だ。

正直、LやC主義者より地獄だ。

ExNな連中がいけないだけ、今の崩壊世界は平和なのかもしれない……連中がいたらこの状況でもとりあえずという感覚でメシアやガイアを皆殺しにする選択もあるらしいし、やはり、

アライメント関連は面倒だ。

◆  
「これは——サマナー殿。一週間ほど見ない間に様変わりなされましたな。今の實力ならば下位のテンプルナイトとも渡り合える實力になって来ましたね。やはり、今からでもテンプルナイトを目指しませんか？ え、無理ですか？ 仕方がありませんね……」

メシア教会にまずは訪れた。道中に悪魔は皆殺しにして、多少の魔石を回収しながら到着した所、何時もの感じの良いテンプルナイトが門番をしていた。どうやらメシア教会の様子はあまり変わったようではなく、そのままだった。テンプルナイトはアナライザーの様な道具を使っている気配がないが、

その代わりに、鍛え上げられた経験と知識、そして戦闘勘による、推理が行える。おおよその實力をMagなどから把握できるのだ。だからアナライザーがなくても、大まかなレベルなら見れる。それでレベルの上昇を確認できているのだ。

心底、戦いたいとは思えない。こういう歴戦の勇士が何人も存在するのだ。自分の様な付け焼刃ではない。何年も修行し、戦場を経験した戦士だ。テンプルナイトは馬鹿に出来ない。

此方がスタマを投げる以外に恐らく勝機はない。

悪魔に比べて貧弱な人間は呪殺や破魔対策に遠慮なくテトラジャマー等の耐性防具を着込み、その上で神経や精神対策を施し、自分が妨害されずに立ち回れるように対応するのだから。悪魔なんかよりもこっちのが怖い。それはそれとして、

「お久しぶりです。実はステイブンからこっちでメシアの人と合流しろって指示を受けているんですけど」

「む、ステイブン殿が……か。なら私の頭を超えているだろう。少し、確認してこよう」

どうも、と言葉を返そうとした時に、清らかなMagの気配を感じた。テンプルナイトも動きを止め、迷う事無く騎士の礼を取った。自然とその気配に背筋を伸ばしているのを感じ、少しだけ、苦手な感じを覚えた。正面、教会へと通じる道の方から一人の法衣に身を包んだ

女性の姿が見えた。年齢は恐らく俺よりも少しだけ上という程度の女性は金髪を揺らしながらゆつくりと歩いてくる。自然と無意識的に《アナライズ》が発動し、視界にとらえた女性のレベルと能力を映した。

聖女 クラリツサ Level 138

レベル38、人類における超人と呼べるカテゴリに突入した人間だ。もはや人間というカテゴリから完全に外れ、悪魔の様に自前で耐性を取得できるだけの強さを誇った存在。そして聖女、それはメシアにおける特別な能力を授かっている存在でもある。異能者の中でも更にとりわけ特殊、Lへの信仰が高く、同時に奇跡や祝福を行使できる存在。メシア教会の現在の統括者でもある。

他の統括者が全員死滅している、というのもあるが。

「サマナー・キサラギ、お久しぶりです。どうやら元気なようですね。また、こうやって無事な姿を見れた事を喜ばしく思います。我らが主が無きこの世の中で、貴方の様に自分の足で立てる存在は非常に稀有です……ですからこそ、無理をせずにご自愛ください。この狭い世界で、また一人、私の知る人がいなくなるのは悲しい事ですから」  
「お久しぶりです、クラリツサ様。自分の事はお気になさらずに。こう見えて結構嬉しいですから」

頭を軽く下げて挨拶すると、クラリツサから上品な笑みが返って来た。貴人、という言葉が似合う女性だ。なんというか、穢してはならない、そういう風に本質的な物を感じる。それはそれとして、軽く頭を下げてから、

「ステイブンに頼まれたのですが……」

「了承しております。私が此度の協力者です。エストマとトラポートを使用出来ますので道中、悪魔に遭遇する事もないでしょう……では行ってまいります、タカナシ」

「いや、行ってまいりますではありません、クラリツサ様。私、なにも、話、聞いてません」

「……？ ええ、今はじめて言いましたからね」

「……いや、あの、クラリツサ様？ そういう話ではないのです。あ

の、一応の話ですが……クラリツサ様はお立場を理解していますか？  
理解……していますよね？」

「特技は常世の祈りとアギダインです」

「クラリツサ様、そういう事ではありません。上級火炎魔法が使えるならここら辺の悪魔は問題ないでしょうが、そういう事ではありません。クラリツサ様？ あの、クラリツサ様？」

「トラポート」

「クラリツサ様あああああ——！」

此方へと素早く近づいた聖女は此方とアンの腕を掴むと、そのまま一気に移動用の魔法、トラポートを発動させた。一種のテレポート魔法であるそれが発動すると、一気に視界が変化し、切り替わった。場所は切り替わったガイア寺院前の百段階の前だった。聖女クラリツサの方へと視線を向ければ、両手の人差し指を頬に当て、

「てへっ、長そうなので逃げちゃいました」

「いや、アレ絶対に後で数倍になって怒られる奴ですよ……！」

「あ、やっぱりそう思います？ でもですね、一応は大義があるので問題はありません。この行いは何をどう取り繕うと、必要な事ですし、であれば、早くやる事に問題はありません。第一、あそこで話を聞いていれば間違いなく護衛を付けられました……無駄にガイアを刺激してしまいますし、それでは困りますから」

「いや、うん、怒られるのはクラリツサ様なので、俺に言い訳しても……」

「えっ、庇つてくれないんですか……？」

絶対にしないよ。する訳がない。気持ちよく見捨てさせて貰う。

「主が悲しみますよ！」

「そのお方、既に消滅しているんですよ……」

「でしたね……」

悲しむもクソもねえな、という話をしながら階段を上がって行く。百段階、ここを登るのも1か月ぶりの事だと思いつながら登り切る手前、最後の階段に座り込む半裸の男の姿が見える。僧衣の上半身部分だけを脱いで、逞しく鍛え上げられた肉体を晒す初老に入る男だっ

た。片手に瓢箪を握り、そこから酒を呷っている様子だった。白髪交じりの黒髪をオールバックで流す男が《アナライズ》される。

破戒僧 ダンLevel42

「おう、来たな坊主と聖女ちゃん。糞爺の言った通りか」

よつこらしよ、と声を零しながら立ち上がる破戒僧のレベルは42、つまりは超英雄級に到達した、真正正銘の人外だ。ここまで来ると個人で国家と戦えるレベルの戦闘力だ。その気になれば特技か魔法の一つで街を破壊し、そのまま国を破壊し続けながら横断できる。それだけの能力を得たレベルだ。これ以上となると神話の英雄や神々クラスになってくる。

いや、そもそもこんなレベルでも十分頭がおかしいのだが。

「よし、お前らが揃ってるなら俺も行かねえ訳にはいかねえな。つーわけで宜しくな、坊主、聖女ちゃん」

「よろしくお願いします驃様。しかし今日もまた飲んでますね?」

「おう、もう残りが少なくなってきた飲む量に制限喰らい始めてるけどな! けど、こうやって顔を合わせるのは2週間ぶり近くか……。とりあえず坊主、俺は出る準備が出来てる。お前の方もいいか?」

「え? あ? あ、はい。こっちは現地到着後に何をやればいいかってステイブンが教えてくれるはずなんで」

「おう、解った。そんじゃ行くとすつか……。なんだよ、その表情」

此方が微妙な表情を浮かべていると、それを驃が突いてくる。とうかかなり気安い。近づいてくると頭を掴んで撫でてくる。なんとというか、気安いおっさんという感じだ、完全に。というか頭をそう簡単に撫でないで欲しい。若干もじゃってしてるけどこのもじゃ具合のセットに朝の時間を使ってるのだから。

「なんとというか、ガイアとメシアの現状のトップが凄く仲が良さそうなんで……」

その言葉に驃とクラリツサが表情を見合わせた。

「まあ、トップが敵対的だと空気が下に通じるからな。上が適当にニコニコ仲良くやってりゃあ無駄な諍いはそれだけ減るんだよ。それに強い奴は認める。それがガイアの主義だからな、睨む必要は何もな

「いだろう？」

「滅びそうな状況で足を引っ張り合う愚行はただの自殺ですし、教義に従わないからと排斥していたら、それはただのカオス思想では？と私は思っていますし」

『驚くほどのド正論！』

『世界が滅びなきやこうならないと言うんじやから、CとLの争いも救いが無いの』

まあ、この二人……というより、この残された僅かな世界は基本的なCL闘争とは別枠の扱いだよな、と握手を交わす二人を見て思う。世の中、滅べばどうにかなるもんだな、と。

「それでは目的地は解りますか？」

「あ、サンプラザです」

「流石に行った事がないのでトラポートでは移動できませんわね」

「つつーことは歩いて行くか。まあ、ナカノ市内だしそう遠くもないだろう……たまにやあまともな運動も悪くはないわな」

「ですね。エストマは——まあ、一応使っておきましょう」

「なんか、もう、エストマなしでもオーラだけで野良悪魔弾け飛びそうなパーティーが出来上がったんですけどこれ」

「……試してみるか」

ええ、と声を零しながら困惑しつつ、ここに恐らくは崩壊世界で用意できる最高レベルの超人が揃った。その向かう先はナカノサンプラザ——この世界を再生する為の最初の場所だった。

これ以上ない安心感の中で、崩壊世界最強パーティーによる移動が始まった。

## 再生し始める世界 II

「アギダイン、ガルダイン」

空に、50メートルぐらいにまで届く火柱が発生した。ゾンビ？

そんなものMagさえ残らない。火柱はそのままガルダインと融合した火災竜巻となってナカノに出現するゾンビたちを吸い上げて飲み込んで行く。

「墳ツ！」

破戒僧がマッスルポーズを決めた。上腕二頭筋から放たれる波動がそのままガキとゾンビを飲み込んで浄化して殺した。そうか、本当に悪魔ってポーズを決めるだけで死ねるんだな、というどこともない、傍観と共にポーズを決めながら歩くガイアの現トップを見た。どうしよう、何か突っ込めばいいのか解らないけど、本人が凄く楽しそうだ。

ガイアとメシア、お前らこれでいいのか。とか思っている間に二人が合体技を見せていたガルダインと破魔ポーズが合体して、輝く台風が光の雨を生み出して無差別に悪魔を昇天させている。もう、なんでもいいや、という気持ちでレベル35を超えた正真正銘の超人たちの無双光景を見ていた。もはやその領域に入ると動きが違う。歩いたと思ったら瞬間移動している。攻撃したと思ったら既に攻撃が終わっている。何時からリアルでドラゴンボールは始まったんだっけ？ そうか、ドラゴンボールって実話だったんだな……という諦めが心に芽生える。

超人凄い。ほんと凄い。振り返ってアピールするの止めろ。

「これは俺もスタマ先輩投げてアピールするしかねえな」

『やめろー！ やめるんじやサマナー！ 相手がロケットランチャーを取り出したからと核兵器を持ち出す必要はないんじや！』

『今日も駄狐は楽しそうだなあ』

『CNLは殺せ』

『おーっと、極Nすら殺せという発言！』

『それただのカオスじやろ』

本日も我が仲魔は愉快であり、天候はMag。空から死んだ悪魔のMagが降り注ぐ。人間、レベルアップして行けばここまで理不尽に成れるんだなあ、というのを思わせる光景だった。もうここまで来るとエストマいるとか要らないとか、そういう領域を超えている。というか、

「さつきからアピール地味にうざいですよ驥さん」

「えっ、俺のキレてる筋肉を見てガイアに憧れない？」

「それで憧れるのはホモっすよ」

「流星にそれは俺もつれーわ」

流星のガイアトップでもホモはNGだったらしい。まあ、昔の人間はそういうのも嗜みとか言っていたらしいが、正直考えたくもない話だよな。そんな事を考えている間にナカノ中の野良悪魔始末したのではないか？ というジエノサイドフェスティバルでナカノサンブラザ前まで到着する。ナカノでもひとときわ目立つこの建物はどうやら、世界がこうなる前は崩される予定だったらしいが……今では悪魔が巣くう施設の一つだ。色々と残されているものがあるが、狭い空間に詰まっている悪魔は奇襲や不意打ちを生む危険な場所だ。

「エストマ、と。これで襲われる心配ありませんね」

「とういかめんどくせえから1フロア丸ごと破魔系ぶっぱなさねえ？」

その方が安全だろう？」

「あ、そうしちゃいますか。手加減したマハンマオンで良いですよね」

もうこのレベルになると嫉妬するとかそういう次元を超えてくる。サッカーで遊ぶ少年が空を飛ぶ戦闘機を見てすげえ！ 俺、将来戦闘機になるわ！ と、思うだろうか？ そんな事はない。すげえ、とは思うがなんだこいつら、という理不尽すぎる強さにビビるばかりだ。たぶんこの人達ならワンパンでマジシャン始末したんじゃないだろうか。ついて行けねえわ、と頭を抱えていると、アンが横から肩を叩いた。

サムズアップを向けてきた。いや、助けてくれよ。そう言いたいのが、世界を再生するにはこれ乗り越えなくてはならないのだ、と自分に言い聞かせる。



「大僧正フラッシュユ！」

ただあんな光景見ると世界とかどうでも良くなつてくるのが非常に困る。もうこのまま世界とかどうでもいいから、ナカノの片隅でひっそりとアンと生きてちゃ駄目だろうか？ いや、駄目なんだろうなあ、と簡単な結論に行き着いたところでサンプラザ周辺から悪魔が蒸発し、ナカノ悪魔も蒸発し始めているので、中へと進んで行く超人の後を追って進んで行く。

……世が世なら、億単位に届く護衛だろう、これは。いや、そもそもガイアとメシアが並んで一緒に戦うなんて見る事さえできないのだ。この発狂しそうな光景、実にプライスレス。

そんなくだらない事を考えつつ、大型ホールへと向かって足を進めれば、ステイブンから連絡が入ってくる。通話モードに切り替えつつ、

「はい、此方リユージっす。とりあえずサンプラザ……と、今大型ホールに到着って所で」

「ほほう、中々広いな——トウ！」

大型ホールへと入った所でステージへと跳躍し、その上で年甲斐もなくはしゃいでいる初老のおっさんを冷めた視線で眺めながら、ステイブンの声に従って動く。

『到着したかね？ ならステージの上へと移動するんだ。その中央に陣を描き、そして陣の中央にこのスマートフォンを設置すると良い。その後で出てくる視覚化された概念情報を君が掴んだ状態で、陣に魔力を注ぐと良い。そこに居る二人はその為の人材だ』

超人レベルの魔力でないと起動できない魔法陣となるとかなり高等なものだ。まあ、それをどういふものか判断する前に、ステイブンに言われた通り、行動を開始する。スマートフォンを見ればメールと共に魔法陣のデータが送られてくるので、ステージの上へと移動してから突っ込んでいたマーカーを使ってステージに直接書き込んで行く。

「こういうの、血液とか使わなきゃ効果が出ないもんだと思ってたんですけど」

「基本的にはそうですね。血液とかが意味を持つ場合は、ですが。ですが、近年は電子プログラムで特別な触媒が働く効果や意味を代用したり、計算や現象のシミュレーションを代理してくれます。ですので複雑な儀式を形だけ揃えたら、後はプログラムで代理させて……というのが現代では主流ですね」

「ま、その流れを作ったのがステイブンだけだな」

「あ、そこちよつと線が歪んでますよ」

「え、マジ？ あ、ほんとだ。ちよつと線濃くすればバレねえバレねえ」

それでいいのか……。もう何度目だろう、こう思うのは。そう思いながらもステイブンの少し埃を被っている床にマーカーで魔法陣を描いて行くが……。どうにも、こういう作業は不器用だった。銃で精確に撃ち抜くのは問題ないのに、これで絵を描こうとすると全くダメだった。仕方がないのでアンへとバトンタッチすると、凄く滑らかさで線を描き始める。一瞬で心を敗北感が満たす。

俺、役立たず……。そんなことを考えていると、何時の間にか驂がすぐ横に居て、肩を叩きながらサムズアップを向けてくる。

「邪魔だって言われたわ」

「それでいいんですか暫定トップ」

「まあな！」

元気の良い返事だった。いよいよをもつて、ツツコミ専用の仲魔を調達すべきだなこれ？ と、頭を悩ませる。だがそこでそれはそれとして、と言葉を付け加えられた。

「お前、ガイアに興味ない？ 今なら幹部待遇で迎えるぜ」

「遠慮しておきます。なんか、どこかにまともにも所属するにはしがらみというかぶら下がってるもんが重すぎるんで……」

と、答えながらスマートフォンを覗き込んで魔法陣を修正するアンの姿を見た。アンとクラリッサ、女性二人を働かせながら男が一人、眺めているだけで手伝いもしていない。もしかしてこれ、屑案件なのでは？ とは思わなくもない。いや、間違いなく外観が悪い。何かしらの作業をしたいが、おそらく手伝った方が逆に邪魔になる。

「ま、気が変わったらいつでも言えよ。組織に所属する事はしがらみが増えるつつーことでもあるが、逆に言えばそれで仲間や友達つても増やせるからな。寂しくなったらいつでも来ても良いんだぜ」

「まあ、覚えておきます」

「おう……良し」

ばんばんばん、と音を立てて背中を叩かれつつ、しばらくアンとクラリツサの作業を眺めているとそれが程無く終了する。終わった所で指示された通りに魔法陣の中央にスマートフォンを設置すれば、それを監視しているステイブンがスマートフォンを遠隔操作し始める。ステイブンと敵対したら悪魔を召喚する事が出来なくなると考えるとゾツとする。そう思いながら眺める魔法陣は、

どこか、太極図を思わせる形をしていた。

『ああ、聞こえるかね？ 大僧正は東側へ……ああ、そこだよ。そして聖女は……そう、そこだ。ではサマナー君、これを受け取りたまえ。そして人修羅は陣の外側で待機しておくんだ』

サクサクと飛んで来る指示をこなし、ステイブンがスマートフォンの上に半電子化されたオブジェクトを生み出した。それを言われた通りに手にしてみれば、カードキーの様な形をしている様にも見える。持ち上げ、掲げながら確認するカードキーにはうつすらと何か、見た事のない紋様が見られた。それが何か具体的なイメージを作っている様な事はないが、

生と死。心。影。世界。宇宙。月。

見ているだけでそんなキーワードが脳裏に浮かんで来る。まるでWIKIを急いで見ている時の様な感覚だった。サー、と文字が流れて行く感じ。これが情報概念、という物なのだろうか？

「うっし、準備出来たぜ」

「それで、何をすればいいのでしょうか？」

左側から驛の声が、右側からクラリツサの声が出た。そういえば並びが丁度C—N—Lという感じでアライメントに別れたな、と思った。そう考え、足元の魔法陣を見て、

『そうだ。そこは今、世界の縮図を現している。世界が完全であれば

多くの問題があるだろうが、今の世界は本来の規模と比べれば爪の間に挟まった垢程度の規模でしかない。この程度の陣でも十分に表現できる。つまりはカオス、ニュートラル、ロウ、陰と陽。男と女。人と悪魔』

ステイブーンが言葉を終えるのと同時に、スマートフォン स्कリーンを何かが走った。それに合わせマーカーで描かれた魔法陣はその塗装が剥がれ、代わりに虹色の光がマーカーによって描かれた線を上書きしていた。

『さ、両側から遠慮する事無く全力で魔力を注ぐんだ』

両側から唐突に感じ始める超莫大な魔力量に、一瞬、窒息するかと思った。だがその魔力を陣は一瞬で吸い上げた。まるで空っぽのバケツに水を注ぐように魔力を魔法陣は貪欲に吸収して行く。その勢いは凄まじく、次元違いという言葉を理解させられる。だがそれ以降のステイブーンの指示はない。

これからどうすればいいのだろうか？ そう思った直後、なんとなく、視線を手元の物質化された情報の塊へと向けた。

手の中で軽く浮かぶそれを眺めてから——軽く握り潰した。直感的にこうするべきだ。そう感じた衝動のまま、行動した。

そうやって砕け散った情報は破片となって、魔力と混ざって魔法陣に飲み込まれ、魔法陣が消失する。それを見届けた両組織のトップが少しだけ汗を浮かべた表情で魔力の放出を止めた。数秒ほど、魔法陣が消えてから言葉を止め、全員が動きを停止させていた中、

「……………失敗？」

首を傾げてアンがそんな事を呟いた。いや、流星にそれは——と、言葉が続ける前に変化が来た。

一番最初に感じた事は揺れだった。地震の様な小さな揺れ。それが突如、世界そのものを揺るがすような巨大な衝撃となる。思わず倒れそうになるのを堪えようとした瞬間、

「外かっ！」

言葉が聞こえた瞬間には衝撃波だけが発生し、残像すら残さず二人の姿が消えた。これが超人の脚力か、とドン引きしながら陣の中央に

あったスマートフォンを回収しながら外へと飛び出した二人を追って、サンプラザの外へと飛び出した。

そこでは世界に一つの変化が発生していた。

世界そのものを揺らすような大地震で建造物が幾つか破損して行く中で、無彩色が割れて行く。

未定義を象徴する、言語化が不可能な無彩色、無が定義される未定義の領域が割れていた。無彩色は空の青みを取り戻し、そこに世界という形を取り戻していた。空を見上げればそこには世界の果てが存在していた。だがそれも徐々に、徐々に地平の向こう側へと空の色によって塗り潰され、世界の情報を獲得した事で崩壊していた世界が再生を始めていたのだ。

崩壊する前の状態へ、少しずつ。少しずつ、再生を行っていた。やがて地平の果てへと無彩色が消え去り、地震が収まった所で、僅かに崩壊したサンプラザの前で四人揃って立ち尽くした。

……本当に、世界が再生されてしまったのだ。

「マジかー……あ、坊主、本当にガイア来る気ない？ 美味しい飯食わせられるよ？ 何？ 女が良い？ じゃあ女出すよー、出すよー」

「いえいえ、世界を修正するその高潔さはメシア教でこそ輝けます。貴方という存在がいれば人々が心の拠り所を得ます……誰でもない、自分自身の為に他人を救ってみませんか？」

「ハイ、ズルいわー。メシアズルいわー」

「ええ、善意の救済ですもの。ええ」

「あの、胃が痛くなるんでほんとやめてください……どこに所属する予定もないんで……ほんと……」

げっそり、とした表情で二人の冗談めいた勧誘に答えると、笑いを返された。そしてそのまま、頭をぽんぽん、と破戒僧に撫でられた。

「んじや、俺は馬鹿共を率いて広がった部分の調査に乗り出すか。救助者はこっちで探すか——」

「ええ、受け入れは此方でやった方が良いでしょう。聞いた話では23区のみでしょうし、ガイアとメシアの休戦協定は継続という事で」  
「おう、宜しく。そんじや坊主、何時でもウチに来ていいからな？」

しつかり生きろよ？　じゃあな」

言葉と共に残像を残さず男が消えた。ガイア寺院の方へと視線を向ければ、陥没して破壊される屋根の姿が幾つか見えた。どうやら跳躍しながら来た道に戻っているらしいが、その力が強すぎて道を破壊しているらしい。やっぱり超人は怖い。そう思っていると、クラリツサからも声が来る。

「では私もこれから指揮しなくてはならないので帰りますが……無茶をしないでくださいね？　ええ、本当なら我々でも支援を出来るだけしたい所ですが立場や状況がありますから……それでは、お元気で」言葉を残してクラリツサはトラポットで消えていった。その姿を見送り、再びアンと二人きりになってしまった。だけど何かを喋る気にもなれず、二人が去って行ったあと、無彩色が消えて、取り戻された青空を見上げた。

……あの空は、俺が取り戻したのだ。

その実感を受け入れようとして、しかし受け入れられずにいた。俺がああ空を取り戻した筈なのに、本当にそれが出来たという感触がなかった。何故だろう。

いや、理由は解っている。

結局は全部、他人におんぶに抱っこされているからだ。最初はステイブンやアンに。次はあの超人の二人に。俺がやった事とさえ、他人に頼って安全な場所から眺めているだけだ。言われた通りに守られながら動く。

結局のところ、その程度の事しかしていない。あの滅茶苦茶な超人の能力を見たからこそわかかってしまう。自分の実力なんてまだまだ、クソの様なものだ。

何一つ、自分で出来ていない。

……素人の学生たちよりも強かったという事で、調子に乗っていたのかもしれない。改めてこの世界のトップの強さを感じ、自分の至らなさにイラつく。

「サマナーは……頑張ってる、よ」

「解ってるさ、頑張ってるのは」

ただ、頑張るだけじゃダメなのだ。頑張るだけなら誰だって出来る。いや、違う。頑張る事が基本なのだ。だから頑張った程度で褒められる事はない。重要なのは頑張った上で結果と成果を出す事だ。そしてその成果を出す事が出来ても……こんなものだと、やはり、自信を失う。

「……もつと強くならなきゃ駄目だな」

呟く。レベルアップしなくてはならない。そして自分もまた、超人の領域に入らなくてはならない。超人となれば破戒僧がそうであったように、悪魔が使う様な技術や特技を生身で繰り出す事が出来る。装備に頼らず、自分の力で道を切り開ける。何がなんであれ、力は必要なのだ。生きて行き、世界を直す為に。

だからどうするんだ、と思った。

『やあ、ご苦労様。君はこれで世界の再生に一步目を踏み出した』

頭がこんがらがってきたところで、ステイブンから通信が入って来た。とりあえず思考を中断し、注意を其方の方へと向けた。

「あ、はい。ガイアとメシアの二人と別れたつすけど」

『彼らの事は心配しなくて良い。そもそもあの二人は魔力バッテリー替わりだからね。それはそれとして、此方でも観測できる範囲で東京23区が復活しているのを確認した。戻ってくると良い、君に仕事と力を与えよう』

ぶつり、とそれで通信が切れる。考えている事が見透かされているのだろうか？ それとも解りやすいのだろうか？ 或いは……そういう人間だと理解されているのだろうか？ どちらにしろ、

俺に選択肢はない。

ふう、と息を吐いて、蒼く染まった空を見上げた。溜息を吐き出しながらも、そこには取り戻された空の姿があり——その向こう側には宇宙が広がっている。或いは宇宙はまだ再生していないのかもしれない。どちらにしろ、それは自分が行動したから生まれた成果だ。それだけは事実だ。

自分がそれをやったんだ、と思わないとやってられない。

どれだけ他人が優しくしても裏が見える。

どれだけ力を貸してくれても何が目的なのかが見えている。

結局、俺なんか……道具でしかないのだ。

「サマナー……」

心配そうにするアンの声が聞こえる。だけどそれに応えるだけの余裕も、言葉も自分にはなかった。だから少しの間、自分が取り戻した蒼穹を眺め続けた。それを欠片でも取り戻せたという事実だけが俺の虚栄心を支えていた。そう、

俺の全てが虚栄心で積み上げられていた。

◆

「お帰りなさい。さ、余計な言葉も必要ないだろう。悪魔合体をデジタルに再現した私の《邪教の館》アプリと《悪魔全書》の力を君に授けよう。東京23区が復活した今、レベルが30までの悪魔であれば合体、召喚が行える。これは次の世界へと挑む君の力にもなる筈だ」

ステイブンのバーへと戻って来て、最初に感じたのは広さの違いだった。今まではこじんまりとした小さなバーだったが、今では更に広がっている。店内を流れるクラシックもまた変化しており、隅がやや影に覆われている様な気がする。間違いなく、悪魔の気配を店内に感じる。だがストレスを感じる様な気配ではない。店内が広くなった分、圧迫感も感じない。

その中でステイブンの様子は変わらなかった。スマートフォンを求めて来るので、それを渡す。それを受け取ったステイブンはデータを確認しながら、それをバーの隅にある大きな端末に繋ぎ、ホロウインドウを表示させた。

もう、この時点でオーバーテクノロジーだろう。

それはそれとして、

「駄狐とカリバーが成長限界にあるんで、ワンランク上へと変異合体させたいんですけど」

「それ自体は難しくはないぞ。足りない情報を別の悪魔をイケニエ合体させる事で補完させれば良い。どちらも上位の姿が存在する悪魔



だ。欠損を補えば人格や記憶に影響なく次の姿になるだろう……とはいえ、継承させるスキルや魔法は決めているのかね？」

「あー……実はそこらへん、初めてで……」  
「だろうね」

チエフエイもマツヤもゲットした悪魔であり、スタマはプレゼント品だ。ぶっちゃけた話、デビルサマナーが基本としている合体の知識やプランというのにはそこまで詳しくはないのだ。役割とかの分担とかならまだわかるのだが。

「流石に合体ルートとか、合体による種族の変化とかそういうのは……」

「まあ、そうだろう。だからこそ悪魔に恐らくは最も詳しい者を用意してある」

ステイブーンがそう言うと、暗がりの一角に居た悪魔の気配が出てくる。優雅な所作で進み出てくる金髪の男の姿は礼服姿で、見る者すべてを魅了するような美しさを持った存在であり、前に出てくると同時にアンに腹に蹴りを入れられてそのまま床に倒れた。

「流れる様な動きで始末されたんすけど」

「人修羅よ……私が、何を……した……」

腹を抑えて床に倒れる男に向けて《アナライズ》を行う。

悪魔王 ルシファー Level 4

「さ、最低限の情報だけで肉体を構成してきたらこの扱いとは……」  
「えい」

アンが支配人をソフトに蹴ってる。いったいアンの何がそこまで支配人に対してセメントにさせるのだろうか。しかし出会った時は何というか、世界そのものを滅ぼしてしまいそうなプレッシャーや神々しさがあったのに、それが欠片も残っていないのだから本当に最低限の触覚しか生み出さなかつたんだな、と床に転がる憐れな姿を見て泣きそうになる。

それはそれとして、

「アン。その人は悪魔のプロフェッショナルだから、そこらへんにしてしまわないと仲魔の強化がね？」

「……ん」

少しだけ名残惜しむ様に支配人にキックを叩き込んでから満足そうにうなずき、アンは離れた。虐められ終わった床に転がる悪魔王はなんというか……憐れだった。大丈夫？ と手を伸ばすと、少しだけぼろぼろになった姿で立ち上がった。髪の毛を手でかき分けると先ほどまでぼろぼろだった姿が一瞬で元に戻った。

「安心したまえ——ダメージは残ってるからまたぼろぼろにしようとしなくてくれたまえ」

『声が震えておる……これが悪魔王かあ……』

これで大丈夫かよ、とは思ったが、即座に仲魔の合体の話に持ち込むと、ルイ・サイファアは成程、と頷く。

「私は魔界に存在する全ての悪魔を覚えている。私の権限で動かせる範囲で便利な技能を持っている者を継承と降格を繰り返してある程度そうさせよう。見た所マツヤを魔法メインの攻撃役に、チェフエイを妨害支援に……そして私の与えたスダマはそのまま良さそうだな。となると理想的なのはランダマイザ等の継承だが魔力やMagを考えるに難しい話になるし——」

こうか、と言いながらルイ・サイファアが合体プランを用意した。チェフエイの方はシンプルでカジャ系魔法に加えて《雄たけび》と呼ばれる攻撃能力を削ぐ特技、そしてシバブーとドルミナーを追加するプランだった。今まで使ってきた疾風系統の魔法が消えるが、その代わりに状態異常のコントロールに優れている。後デ・カジャを継承する事で相手の強化を打ち消す事も出来る。此方はパッシブ系統なし。それに比べてマツヤの方は重力魔法を更に強化する為のブースターを搭載し、マハグライバとグラダイン、と強力な重力魔法を習得する方向性になっている。また破魔も広範囲に攻撃出来るマハンマとなつて、ダーク悪魔相手に必殺を決められるようにするプランを提示してきた。

「というかこんな風に自由に付け加えられるんすな、魔法つて」

「普通は出来ない。悪魔にも概念の相性があるし、全ての悪魔が望んだ能力を引っ張ってこれる訳ではない。だからこそ合体を行う時、ど

の悪魔がどういう概念を継承できるかを把握し、それでプランを形成する。悪魔王として私はその全てを把握している。強い悪魔を生み出す為の継承と習得ルート、そして最終的な合体までの道筋を提示できるといふ訳だ」

「流石悪魔王……」

「これぐらい当然うっ」

アンの蹴りが悪魔王の腹に叩き込まれてその姿が床に転がった。アンの方を見たら、アイツ調子に乗りそうだったから……とかいう感じの表情が返って来た。当初、プレゼントされた時と比べて物凄い感情的、というか表現方法が豊かになってきたな、お前は。そんな感想を抱きつつ、再び悪魔王の支配人を立ち上がらせた。

「解った、私根本的に人修羅と相性良くない」

「今更気づいたのか……それはそれとして、その構成なら1枠、回復特化の悪魔が欲しいな」

「となると優秀なのは女神か地母神辺りだな……まだ情報が万全ならイシユタルの分霊でも用意してやったのだが、流石にこの状況では無理だな。私のこの体も別の側面や分霊の情報をかき集めて作ったものだ。そこまでの余裕はない。……やはりアメノウズメか、キクリヒメ辺りが候補か？」

「ふむ……どちらもレベル範囲内ではあるね」

「成程。となるとディアラマとメ・ディア、ペンパトラに……トラポートとエストマは欲しいか。となると元となる弱小悪魔から継承を繰り返すのが良いな。長期戦になる事を考えて《魔脈》も欲しいか」

「やべえ、何を言っているのかまるで解らない」

支配人がプランを提示するが、合体ルートとかまるで異次元の言語の様で、頭の中に入っていない。今度、悪魔全書を見ながら勉強すべきだなあ、と思いつつGOサインを出す。というかそれしかなかった。それに支配人の提示するプランは此方が求めている役割をこなしているし、必要な所をカバーしている。

「とりあえず、素体のエンジェルから作成してしまおう」

「そうだな、全書から素材となる悪魔を召喚し……」

アプリ内部に女神と地母神が《悪魔全書》を通して魔界より召喚される。なんでも悪魔のプロフェッショナル二人組によれば、女神×地母神で狙った回復魔法を作ったらウンディーネを使って作成した天使のレベルを下げるつもりらしい。その説明を聞いているだけで悪魔合体のめんどくささが理解できる。これ、理解するのに時間がかかるだろうなあ、と思っていると、アプリから端末へと電子化された悪魔が送られ、そこで《邪教の館》アプリを通して悪魔合体が行われる。そしてそこで思いっきり表示される【合体事故】の文字。

「はっはっはっは」

「しよっぱなから合体事故だよ」

「何笑ってんだこの糞爺共」

L&Oを引き抜いてぶち殺してやろうか、と思っていると合体事故による、合体後の悪魔が変質し、端末から吐き出される様にその悪魔が出現し始める。

それは美しい輝きをしていた。

後光を受け、白き雄大な翼をもっていた。

あらゆる悪魔を引き裂く鋭い爪を持ち。

その鋭い眼光は万物を見通す。

無限大の愛を秘める度量を持つ。

その悪魔は、

神霊 YHVH Level 4

「我が名を称え——うわなにをすべし」

端末から排出された、完成されたばかりの悪魔の足を掴んで、逆さまに持ち上げた。ふわふわ、ふかふかした感触の体を保有する悪魔は翼をバサバサとはばたかせて必死に逃れようとするが、レベル差もあって不可能だった。そうやって捕獲した神霊の姿は、鳩の姿をしていた。

その姿を良く見てから、アンへと振り返った。

「……メシアンに見つかる前に今夜は鳩の丸焼きにして食っちゃまう

か」

「ん」

「止めるのだ……止めるのです人の子よ……人修羅よ、貴女もサムズアップ等していないので止めるのです……止めてください……」

今夜は神聖四文字の丸焼きでフイーバーできそうな予感だった。現実逃避する為にも、とりあえず厨房へと鳩を連れて行く事で脳味噌を空っぽにした。

## 再生し始める世界 Ⅲ

カオスとロウ。それを象徴するトップが睨み合いながら動きを作る。戦いとは、同じレベルでしか発生しない、と人は言う。今、ここに同じレベルの不倶戴天の敵が揃ってしまった。神聖四文字、そして悪魔王。この二つが揃った時、果たして何が起きるのか？ それを考える必要はない。

そう、戦いとは同じレベルでしか発生しない。

悪魔王 ルシファー Level 4

鳩 YHVH Level 1

「あー！ あー！ あーあーあー！」

「……」

神聖四文字と呼ばれていた鳩は足を紐で結ばれ、火がついているコンロの上に吊るされていた。上から塩と胡椒を支配人がふりかけ、フォークでツンツン、と軽く突きながら軽く回して焼いていた。ステータスもレベルも限りなく死亡しているくせに、無駄に存在する《火・無効》耐性が四文字鳩を生かしていた。というか《アナライズ》をすればハックするこいつの耐性、万能を含めた全属性に対して完全無効耐性を保有している、完全耐性持ちの怪物だった。

ただしレベルは1。肉質は柔らかい。盾にすらならない。虚しい勝利を得た支配人は虚無を孕んだ目でツンツン、と鳩を突きながらローストを続けていた。完全に虚無っている悪魔王の表情、それを見るとなんとというか、心の底から哀れみが生まれてくる。かつてここまですしい勝利を得てしまった悪魔王も存在しないだろう。今は支配人なのだが。なおすぐ近くではナイフを研いでいるアンの姿が見える。

それはそれとして、

「あの鳩強くなるどころかレベル下がってるんだけど」

「我が力はサマナーの信仰より生まれ——あー、塩が！ 塩が肉に摺りこまれて行くあー！」

支配人が手袋を装着して鳩に塩を摺り込ませていた。あんなのを

信仰してるのかよメシアって……すげえ憐れだな……と思ってる  
と、レベルの変化に《アナライズ》が自動発動された。

鳩 YHVH Level 1

ついにマイナスに突入し始める鳩のレベル。振り返りながらステイブンの方へと振り向けば、ロボットアームのサムズアップが返ってくる。やっぱり遊んでたなこの爺さん。なんというか、さっきのノリで完全に敬語を外してしまったが、ステイブン自身はそこまで気にした様子はなく、支配人が用意した合体プランに合わせてマツヤとチエフェイの合体を繰り返している。

本来、レベルを超える悪魔を使役することは出来ないが、ステイブン特製のアプリを利用する事で、それを無理やり抑制している。とはいえ、長時間は無理らしいので、さっさと合体を繰り返して高レベルの悪魔を低レベルに合体し直し、それを材料化させていた。まあ、ここら辺の合体ルートはまだ理屈が解らない。素直に任せるとする。それはそれとして、

「この四文字鳩をどうすればいいんだ……」

「殺そう」

「潰そう」

「まあ、待て。その言葉はまずは我をアナライズしてからでも遅くないのではないか？ チラツ？ チラツチラツ？」

器用に翼を使って顔を隠してチラチラと自分で言いながらアピールしてくる。この四文字、果てしなくうぜえ……とは思ったが、それに凄いとつき易さを感じる。

「当然だろう。愛の象徴たる鳩の姿、そして四文字の中でも汝の隣人である、という概念から生み出された悪魔としての側面だ。召喚された人物に対して最も親しみが取れる性格、形で出現してきているのだから……まあ、本来はもつと別の姿があったのだろうが、おそらく信仰心と概念が足らず、ギリギリ顕現できる姿になったんだろうな」

ほー、と声を零す。流星は不倶戴天の宿敵。良く理解しているじゃないか、と思いつつ鳩を《アナライズ》し、その能力を確かめた。《メ・ディアラハン》に《サマリカーム》、《常世の祈り》に《メシアラ

イザー』と《ラストキャンディ》。ついでの様に存在する《テトラジャ》や《テトラカーン》と《マカラカーン》。攻撃手段を保有しない代わりに、限りのない補助と回復魔法、それも最上級の物を持ち込んできていた。ああ、確かにこれは最強の回復サポーターだ。しかも完全耐性を保有するから先に回復を潰すということが出来ない。

「支払えるコストがあればな」

「サマナー！ 入信しよう！」

「ハープ……詰めよう」

「良いアイデアだ人修羅。この都合の良い事しか話さない口も少しは清められるだろう」

「あー！ あー！ あー！」

スダマを取り出してついでに手渡しておく。口にハープを詰め込まれ、その上でスダマを口に咥えて縛られる四文字鳩。これ、メシア教会の連中に見られたら聖戦が始まるだろうなあ、と確信しながら憐れな鳩を見捨てた。日本人的に考えてめんどくさそうな宗教はノーサンキューである。この世紀末、信じられるのは自分と、契約した悪魔と、そしてアンの可愛さだけである。まあ、それはともかく、この産廃をどうしようかという話になってくる。

割と真面目に困る。

メシアにバレたら間違いなく聖戦になる。

「合体事故を起こしたのは此方の不手際だ。此方で何か、あの鳩を運用できるようにする方法を用意しよう。それはそれとして、仲魔の合体が終わったぞ。さ、受け取ると良い」

端末との接続を解除して、ステイブンが此方にスマートフォンを返してきた。それを受け取りつつ、スマートフォンのDDSアプリから仲魔の状態を確認し、迷う事無く召喚する。

まずは神獣マツヤ——いや、変異したのもうマツヤではない。

召喚光と共に新たな姿の悪魔が出現する。出現するのはカメの姿だ。白く輝く亀。神々しさすら感じる美しい姿はあらゆる災禍を跳ねのける様な力強さを感じる。召喚されたカメの悪魔は、マツヤの頃と変わらない声で言葉を出した。



『我が名はヴィシユヌ第二の化身！<sup>アヴァターラ</sup> 我は世界の誕生を支える者！

我が名はクールマ！ サマナー！ コンゴトモヨロシク！』

「ヴィシユヌ第二の化身のクールマは神話において世界を生む為に山を支え続けたと言われているな。まさに世界再生を行う君に相応しい悪魔だ。そしてその支えるというのに相応しいだけの耐性を保有しているようだ」

クールマのステータスを確認すれば、耐の能力が最も突き抜けている。そして同時に打撃、斬撃、射撃と氷に対する耐性を保有しており、覚えている重力魔法と合わせた要塞の言葉に相応しい性能をしている。問題は電撃弱点というのがマツヤと続いて残っている事だろうか。ジオによる弱点攻めでSTUNハメされる可能性のある悪魔だ。とはいえ、物理型が相手であればほとんど無敵に近い力を発揮できるのは実に魅力的だ。

『サマナー、化身変性でマツヤへと姿を変えられる他、マツヤの権能《予知》を使う事が出来る！ クールマの権能は《ダメージの引き受け》だ、変性と人型化共々良く考えて僕を運用して欲しい』

「おう、任せたぞクールマの盾」

『剣の次は盾扱いか……』

どうやらクールマ、サイズ変更が自由らしいので、片手で持ち上げられるサイズの変形をしてくれればそれを片手に、最強の盾として使う事が出来そうだ。しかも盾として受け止めたら重力魔法が飛んで来る。投げて使う事も出来るし、これはスダマとセット運用で投擲枠に入るかな、という期待が入る。ともあれ、クールマは慣らす為にも何度か召喚して戦闘を繰り返す必要があるな、と思いつつ戻し、今度は次の悪魔を召喚する。

即ちチエフェイだ。DDSから召喚プログラムを起動し、チエフェイを呼び出す。召喚光と共に人の輪郭が浮かび上がり、三つの尾のシルエットが見えて来た。だがその姿に大きな変化はなく、光が収まった頃には尾が一本増えただけのロリなチエフェイの姿がそのままだった。

「……妾は三尾チエフェイ。コンゴトモヨロシク……ヨロシク……ヨ

ロシク……」

「泣けよ」

「貴様それでも人間かサマナー!? 妾は! 三尾になれば! ナイスバディになると信じておったんじゃぞ!? ファイナルヌードだって意地で持ち込んだんじゃぞ!」

「気合と根性でそんなもん持ち込むなよお前。便利だけどき」

魅了系最上系のファイナルヌードだけではないが、様々な精神、神経阻害の手段は持つだけでもかなりの意味がある。とはいえ、ドルミナー、シバブー、マリンカリンと揃っているのでセクシーダンスは要らなかった。

「嫌じゃ嫌じゃ! サマナーを悩殺して誘惑したいんじゃ!」

「うるせえ、仮面剥ぎ取るぞてめー」

こいつに関しては前よりもデバフをメインに運用すればいいから、練習も糞もねえな、と思いつながら無理やりDDSの中に戻す。新しくなった仲魔のステータスやスキルをもう一度、データ的に確認する。チエフェイもクールマも、これでレベルは17に上がった。俺と同じレベルに並ぶ様になってしまった。そこは少し残念に感じるが、それでも頼もしい仲魔の存在は心強い。間違いなく強くなった仲魔と共に、これまで以上に楽に戦えるだろう。

とりあえず、これで仲魔の強化は終わった。

「数日ぐらい休ませて欲しいけど……次は何をすればいいんだ、ステイブーン」

「そうだな……アプリの開発、装備の改良と発明、そして折角なんだ、その食用鳩を運用する為のアプリ開発だな」

「可能なのか……」

「アナライズジャマーと、後はコストを自分ではなくサマナーのMagや魔力で代替させるアプリを開発すれば良いだけだ。やる事が解っているが、流石にそれには材料が足りない」

「お使いクエストね、了解解」

「うむ。まあ、まずは少し休むと良い。その間に私が君に集めて欲しいものをリストにして渡すから。それをもってシンジユクへと向か

いたまえ。今のシンジユクであれば復活した霊的国防組織によって守護されている状態になつているだろうからね。ああ、そうか……23区には皇居もあったね？ となると一部のヤタガラスかクスノハは復活しているかもしれないね……まあ、まだ関わらないことをおすすめておくがね」

知らない組織の名前が出て来た。しかしそういえば国家レベルで悪魔とかが存在するのだから、国防組織とか当たり前として存在するよな、とは思つた。ちよつとだけ気になるが、関わるなどステイブンが言っているのだ、素直にその話を聞こう。それはそれとして、と言葉を置かれた。

「なにか要求はあるかね？ 君が世界を再生する上で必要なものはなるべく揃えてみせよう。欲しいものがあるのなら、我慢せずに言うといい、作れる範囲であれば作つて見せよう」

「平和な日常」

「悪魔の存在しない世界に生まれ直したまえ」

「そうきたか……」

それだけ平和な日常とはレアらしい、というか絶望的らしい。いや、まあ、解つていた事ではあるのだが。それはそれとして、この老人に合体事故をさせた腹いせに嫌がらせをしたので、何を言えば実行できそうだけど滅茶苦茶困るだろうか、というのを考える。

と、そこで腰に装着したルーチェ&オンブラが視界の端に映つた。そうだ、

無茶ブリしよう。

「ガンナーズブルームが欲しいです」

聞きなれない単語なのか、ステイブンが首を傾げた。後ろで支配人がぶふつ、と軽く笑い声を零すのが聞こえた。あ、お前知ってるんだ。そんな事を考えつつも、ステイブンに説明する。サイズはこうで、こういう形で、メタリックで、対戦車ライフルみたいなもんで、

「浮かびます」

「浮かぶ」

「箒なので乗れます」

「乗れる」

「そして飛ばます」

「成程、無茶ブリをしているね？」

ステイブンの言葉に無言のサムズアップで答えると、ステイブンに笑われた。小さく、くつくつと笑い声を零すとまあいいだろう、と声を零した。

「私の領分はハードではなくソフトウェアだが……まあ、合間の暇つぶしにもなるだろう。それでは長旅の疲れを癒すと良い。リソースを得た事で君の寝室に風呂場を追加しておいた、おそらくはこの世界の他の場所では中々堪能できない贅沢だ。ゆっくりと温まって休まると良い」

「わあーい」

じゃ、頼みましたわ、と片手をステイブンへと上げれば、小さな笑い声と共にステイブンが作業室の中へと消えて行く。あの老人、実はこの状況そのものを楽しんでいるのではないか、というフシがある。そうだったとしても特に言える事は何もないのだが。まあ、世界再生のために協力してくれているだけ感謝しよう。

そもそも、支配人とステイブンのコンビが組んで助けてくれたなかつたら開始前に俺は死亡している。

だからこれは義務なのだ。

逃げる事はないし、出来ないし、するつもりもない。

まあ、今はそんな葛藤は捨て去る。それよりもこっちの世界でも風呂が解禁されたというのは非常に大事な事だった。こっちの世界でも体の垢を落とす事が出来るのだ。いや、確かに巖戸台分寮の風呂を心行くまで使っていたが、それはそれ、これはこれ。此方の世界でも汚れを落とせるというのは非常に重要な事だった。

とりあえず、

「支配人ー、鳩を風呂に沈めようぜー」

「良いセンスだ」

「!？」

風呂場を確かめるついでに鳩を沈めよう。たぶんこの世で最も清

らかな聖水が作れそうな気がしていた。

◆

風呂に一回四文字を沈めたら本当に聖水風呂がマジで出来た。肌が何歳か、若返った気がする。これ、続ければアンチエイジングになるのではないか？ とは思わなくもなかったが、世界再生などの諸々の疲れで風呂が終わった後、そのままベッドに倒れ込んで眠ってしまった。朝起きたら腹を枕代わりになっているアンを何とか押して枕の上へと頭を動かし、脱出したところで、朝の諸々を終わらせる。

歯を磨き、顔を洗い、それだけでだいぶ文明的な生活を送れると思うと涙が出てくる。ついでに巖戸台分寮との生活水準の落差でもう一度涙が出そうになる。それを堪えながら部屋を出た所で、

昨日に増して、バーに気配を感じていた。

一番最初に見たのはカウンターの向こう側でマスターの真似事をしている悪魔王の姿と、ウェイターっぽい服装に身を包んだ鳩の姿だった。元部下と上司の関係が完全に入れ替わっていて下克上が完了しているのは長年のカオス悪魔としての悲願の達成ではないのか？ これは長き魔界の歴史におけるルシファーと神聖四文字の代理戦争の終焉なのではないか？ とその奇妙な光景を眺めながら思った。

「ノーカン」

ノーカンらしい。まあ、当然だよな、とは思わなくもなかった。とりあえず、カウンターに座る。一応買い込んだできた食料の類は全部一旦、バーの食糧庫や冷蔵庫に叩き込んでいた。なので営業できると言えは出来る状態ではあるのだ。とりあえずカウンターに座り、

「モーニングセット」

「代金は本日、一回だけ善行する事で良しとしよう！」

「無料にするからそのサンドバッグを苦しめながら待っていると良い」

やっぱり元上司と元部下の関係とはいえ、冷戦状態だったらしい。出

汗に使う、とか言つて悪魔王が鳩を掴んでいった。鳩も鳩で翼を曲げて敬礼しながら頑張ってくる、とか言つてるけどお前、それでいいの……？ 早くも隣人という概念が怪しすぎた。それはそれとして、アンが食事の話に釣られて起きて来たので、無言でチエフエイを召喚し、世話をさせる。明らかに顔を洗つてない表情だった。

それが終わった所でカウンターに肩肘をつきながら、軽くバー内を見渡す。

やはりバーの所々、支配人と比べれば本当に微小ではあるが、悪魔や人の気配を感じる。暗がりの中には人影が、まだ完全な形を取り戻せずに揺蕩っている。他にも半透明なシルエツトがカウンター席の一つを占拠し続けている。コートを着着した剣士？ の様な男の姿だ……彼は一体、どんな悪魔なのだろうか。

「——彼らは再構築作業中の者たちだ」

その声に振り返れば、ステイブンの姿が見えた。楽しそうに、テンションが高そうに見える。どこことなく新しいおもちゃを手に入れた子供の様な感じがする。お互いにおはよう、と朝の挨拶を済ませていると、まだ眠そうなアンがチエフエイに引き連れられ、戻つて来た。

「妾は仲魔ではあるが、侍女ではないんじゃぞ……」

「お疲れ駄フオックス」

「妾、そろそろ待遇改善のストライキ始めたい所存」

うるせえ、DDSに戻れ駄狐。召喚解除しながらアンを横に座らせる。髪の毛とか大丈夫か？ とは思ったが、なんだかんだで良く手入れがされている……そこらへんの技術は流石チエフエイという所だろう。

それはともかく、

「再構築？」

「情報はやや足りていないが、自分の情報をかき集めて、時間をかけて強固な概念や情報を構築しているのだろう。悪魔王ルシファーや神聖四文字が妙に弱いのはその時間を全てカットした、行動の為に必要最低限の機能だけを優先させた結果。他の者たちは時間をかけてもいいから、戦う能力や技能を備えようとしているのだろう」

そう言うとステーキブンはふむ、と呟く。

「近いうちにこの店をもう少し広げるか……いや、それには世界の広さが足りないか。とりあえずはこのままにしておくでしょう。住人もそう多く増えるようではないしな」

「ほー……」

まだまだこのバーに住人が増えるというのはちよつとだけわくわくする事だった。何せ、悪魔王の支配人と鳩が増えただけでこの始末。ステーキブンのバーには強力だがどう足掻いても色物しか出現しない法則が存在するらしく、仲間が増えたら更に状況が馬鹿と笑いで満ちるのだと思う。

まあ、悪い事じゃない。

そう思う。少なくとも笑える方が笑えないのよりは百倍良い。それはそれとして、目の前にモーニングセットが置かれた。出汁巻き卵、味噌汁、鮭、ご飯、そしてスープ。

「出汁は当然元上司から取った」

「なんでうちの悪魔はハンドサイズの場合色物になる呪いでもあるのか。手榴弾の続きは食材かよ」

食べるけど。

そして普通に美味しい。食用四文字、普通に良い味が出るから困る。厨房の方へと視線を向ければ、煮込まれている鍋から翼でサムズアップを向けてくるのが見える。信じられるか、メシアの天使ってアレを崇めてるんだぜって全力で煽りたい。

やーい、お前の四文字食用ー！

殺される。間違いなく殺される。一度はやってみたいけど絶対に殺される。

この遊びは心の中にしまっておこう。アンと並んで朝食をゆつくりと突いていると、さて、とステーキブンが言葉を置いた。

「四文字を運用する為と、望んだ武器を作成するのに幾つか必要なものがある」

「用意できるんだ……」

「無論だとも。この私だからね」

自信満々に言つてのけるその心は一体。口に出さずにそう思いながら、ステイブンから改めて、リストを受け取る。そこに書かれてある物の名前に、少々困った表情を浮かべる。

「ピクシー、ライジユウは君の望んだものを作るのに必要だ。ピクシーなら今、スギナミに出没している。君が交渉するか、或いは殺せば手に入れる事も出来るだろう。ライジユウの魔晶はそこまで珍しいものではない。おそらくガイアのサマナーであれば持っているだろう。だけどその鳩を運用する為の道具が本題だ」

リストに確認できる、最後のアイテムは聖杯だった。

「こんな絶対無理でしょ」

その言葉にステイブンは本物であれば、と言葉を付け加える。

「聖杯に性質の近い器を用意すれば、それを聖杯であると概念をある程度操作して、その意味を持たせられる。だから究極的には本物でなくても良い。劣化レプリカや偽物であればね。そういうレベルの品であれば。儀式用などでそこそこ数がある。なんといつたつてマザーハーロットの召喚にも穢した聖杯が必要だからだ。需要はあるのさ」

「ほー……で、どこに行けばいいんで？」

「シンジユクだ」

これまた聞いた事のある地名だった。

「シンジユクには中立地帯とデビルサマナー用の大型コミュニティが存在する。そこではデビルサマナーがそれぞれの品を売り出すマーケットやオークションも存在する。偽聖杯であればマーケット品だろうな。今の時代、マツカと宝石には大きな価値がある。他にも何か欲しいものがないか、見てくるのも良いだろう……まあ、魔晶も其方で探すのが楽で良いだろう」

「うっし、じゃあ決まったな」

食べ終わった所で立ち上がり、軽く体を伸ばして体を解した。一晩休んだところで体は十分に休息を取れていた。

シンジユクのサマナーコミュニティ、そしてそこにある中立マーケット、次の目的地はそこだ。どうしてもひたすら休んでいるだけ、



というのは性根に合わなかった。どこかで体を動かし続けられないとない、そんな感じがある。だから仕事がある、というのはかなり嬉しい事だった。

まだ動ける、まだ出来る事がある、まだ先がある。

それにこの業界……それをさらに深く知るのも、また楽しかった。

仲魔を強化してからの新たな仕事だ——存分に、励もう。

## 再生し始める世界 IV

出る前にバイクをMagバッテリー稼働へと変えて貰い、桐条バイクの改造は完了した。これでMagが存在する限りは無限起動するモンスターマシンの完成、そもそもペルソナやシャドウ技術から生み出されたスーパースーパーバイクである為、性能自体はいいのだ。悪魔を格下相手だったら轢き殺せるぐらいには。

ナカノからシンジユクを繋ぐ道路を一直線に走って行く。道路は崩壊してひびが入っていたり、ビルが倒れていたりして時折道を変えなくてはならない。無論、悪魔も存在している。だがレベルの上がつたアンがタンデムから魔法を使って迎撃する。その為、こちらのレベル以下の悪魔に対して困る事もなく、シンジユクへの道を進んでいく。出現する悪魔は未だにゾンビやガキといったアンデッド系統の悪魔が多い。やはり、世界の消滅で大量に死人が生まれた影響が少なからずあるらしい。

そんな中、

『サマナー、良いだろうか』

「どうしたクールマ」

運転中、DDS内部からクールマが話しかけて来た。魚から亀になった仲魔の発言に耳を傾けつつ、バイクを運転する。Magバッテリーで動くようになったことで、バイク自体へのダメージ以外特に気にする事無く運転できるのは良い事だ。しかも、無免許でも捕まらないう世の中なのだ、悪くはない。

『いや、サマナーも神聖四文字に対する態度を決めあぐねている様に感じているからね。僕も元をただせば全王神ヴァイシユスのアヴァターラだ。僕という存在は最後の化身がベースとなっているけど……それでも解る事もあるからね、サマナーには先に話しておく方が円滑にコミュニケーション取れるんじゃないかと思うんだ』

まあ、クールマの正体に関しては神話を調べれば一瞬で解るので、本体とは何なのかは理解している。それはともかく、四文字の事を知っているのは意外だったが。

『そうかな？ まあ、予め言っておくなら神聖四文字のあのキャラと姿は狙って出現したものだって考えて貰えばいいよ』

「あのクソ雑魚食材鳩が」

『うん』

食材鳩である事が否定されない唯一無二の主神。それはそれとして、

「なんで？」

『そもそも四文字は本来召喚が不可能な悪魔なんだよ。そんな彼が召喚されるのは彼自身がそう望むか、そういうシステムが地上全体を通して出来るか、の場合のみなんだよ。そして今の地上に四文字を此方側から呼び出すシステムはない。つまりアレは自分で望んで降りて来たんだよ、この世界に。それもあの弱さでね』

ならばこそ、質問は何故、という事に帰結する。

『君がそれを求めたからだよ』

「……は？ と、とととー」

思わずハンドルがブレそうになった。それを握りなおしながらは？ と言葉をクールマに返す。だけどクールマは遠慮も躊躇もせず言葉を使った。

『君は自分の弱さと才能のなさ、そして心の弱さを嘆いた。そして君は必要な人間で、助けを求めている。その声に四文字は応えた。愛の象徴である鳩の姿。信仰というものを力にするから永遠にレベルが上がる事のない弱者のまま。そして君を笑わせ、鬱を吹き飛ばす快活さと面白さを備えて』

「あれが全部演技……なのか？」

『違うさ。人間、誰もペルソナを被っている様に、そういう慈愛と笑いで満ちた、そういう汝の親しき隣人という側面、或いは化身として現れただけだよ——君の為に疑ったりする前に言っておいた方が良いと思っただけ、伝えておいたよ』

「……おう、ありがとうな」

『君に力を貸す者すべてがそうであるように、僕も君の仲魔で味方だからね。出来るだけ力にはなるさ。それだけでは君の為にはならな

いから多少厳しくさせてもらう部分もあるけどね』

そう言葉を残してクールマからの言葉が途絶える。本当に、厳しい仲魔だと苦笑する。そして情けない奴だなあ、俺は、と思う。そうすると後ろから体に抱き着く感触がもつと強く、そして近くなった。体に抱き着くアンの感触を何時もよりも強く感じている。それを受けながら、小さく笑い声を零した。

「解っているよ、アン。折れないよ俺は。もう既に一回折れているんだ。どれだけ絶望、失望しても、これ以上折れる事はないさ」

痛いほどにアンを感じながらも、断言できる。

折れた心は折れないのだ、と。ただ——狭心症が、苦しい。



やがてバイクを走らせ続けていると、ちよくちよく一般人と、悪魔に襲われる人間の姿を目撃する。流石にこれを見過ごすのも寝覚めが悪いので、見かけた以上は軽くL&Oで銃殺し、始末している。出現するのはレベルが少し高くなったゾンビとガキばかりだが、その中にも新しい悪魔を見つける様になってきた。ゾンビとガキはレベルが大体10前後になる様に強化されていた。恐らくは概念的なレベルキヤップが外された影響だろう、とは自前の知識で理解できた。

問題はそれに対処できる人間が少なすぎる、という事だった。その為、通りすがりのバイクガンマンという形でL&Oで射殺しながらシンジユクへと向かうハメになった。本来であれば街道を一本道すれば良いだけの道のりも、悪魔討伐を絡めながら進んで行くと面倒に時間を食われる。

ポルターガイスト、グール、モウリヨウ等の外道・幽鬼系統悪魔が大量に出現する。L&Oの弾丸を鳩の聖水で祝福した弾丸を装填して射撃している為、戦闘はほとんど一瞬で終了する。レベルもそこそこ高くなってきた悪魔でもある為、経験値的には美味しい獲物でもあった。

「こういうダーク悪魔は基本的に破魔系統に弱い。問題は倒した後だった。」

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます！」

「おう、それじゃあな」

「えっ、いや、待ってください——」

悪魔を殺し、襲われていた人間を助けた。ここまでは良い。ここまでは良く見るお話だ。ヒーローが颯爽と助けに来て、めでたし、めでたし……にはならない。

「待ってくれ！ あんな化け物が出て来たら！」

「見捨てるのか！」

「なんで助けたんだ！」

「その力をなんで！」

助けた人間が最初に向けてくるのは感謝の言葉だった。そしてその次は当然の様に助けられるという思いだった。無論、そんな事をするはずがない。する義理も義務もない。俺は最初に他人を見捨てて生きるという選択肢を選んだのだ。だから態々最後まで面倒を見る様な事をしない。目の前で襲われていたら、そこに手を貸すという程度。

金を出して報酬をくれるなら最後までやるかもしれない。

だけど善意で最初から最後まで助けてはならないのだ。どれだけ心苦しく、気持ち悪く、そしてそれが邪悪であろうとも。俺は最初に自分本位で生きる事を決めたのだから。それを貫き通さなかったのなら、

最初に見捨てた友達や家族の価値はどこに行くのだろうか。こんな有象無象が、もつと大事だとは思いたくない。そう、命に価値はあるのだ。命は平等、命に色はない、そんな言葉は糞喰らえだ。そんなの、百回死にそうになる経験を繰り返した上で地獄を彷徨って彷徨い続ける様になってから吐いてみる。

それでも同じことを吐く奴は舌を引き抜く。

これはルールだった。自分で自分に課した制限。だからこそ守らなくてはならない。どれだけ心臓が苦しくなろうとも、同じ態度を一

貫して、人を助けて、そしてその後を見捨てる。助かって、この先も助けられたと思う人間の傲慢さと、それをあつさりとする俺の傲慢さ。

俺も、有象無象もどうしようもなく救いがない。

シンジユクへのツーリングは苦しいだけだった。だがそのツーリングもいよいよ道路標識にシンジユクまでの距離が出てくる所で終わりが見えてくる。そしてその終わりの果て、シンジユクへと入れる道の一つ、

そこにはバリケードを構築しつつ応戦する姿と、バリケードにぶつかる悪魔の姿が見えた。バリケードの向こう側には警官の姿が見える。制服に身を包みながら迷う事無く銃を撃ち、防衛に参加する使役悪魔の姿も見える。だがどれもレベルは8前後、襲撃している悪魔は15前後のスライム系悪魔、ブロボが混じっている。

このままでは押し負けるだろう。

迷う事無くバリケードの前へと向かって、バイクをドリフトさせるように滑り込ませ、近くに居たゾンビを跳ね飛ばしながらバイクの上から動かずL&Oを左右へと向けて引き抜いて弾丸を放った。祝福された弾丸が連続で放たれ、横に展開している悪魔を撃ち殺し、昇天させながらホイールが潰した悪魔を削り殺す。

「アン」

「任せ……て」

両脇の悪魔を射撃で始末している間にアンが背中を合わせるように寄り掛かり、息を吐いた。放たれた炎の吐息が一瞬で外道悪魔達を飲み込んで焼き払う。基本的にアンデッド系統が炎に弱い事もあって、一瞬で焼き払われ、耐性のある者を祝福の弾丸で射殺して行く。

空っぽになった弾倉をL&Oから外し、新しく祝福弾の入った弾倉を装填する。これが通常弾であれば、無限弾数なので一切リロードする必要なんてないのだが。だが特殊弾を使用する場合はこうやってリロードする必要が出てくるのがやや面倒だ。

その内、Magを利用した属性付与するアプリとか生まれてこないだろうか。

……ステイブンに依頼すればやってくれそうだな。

そんな事を考えていると、悪魔の射殺が完了する。出現していた悪魔も20少々、と数は多くても頭が悪い外道悪魔ばかりだ。これが天使だとか、もうちょい脳味噌のある悪魔だったらカジャ系やンダ系を集団で連打してくるのだろう。だけどこの集団にはそういう知識はなく、ただ突進してくるだけだった。連射して、範囲攻撃を叩き出せばそれだけで十分だった。L&Oをベルトに戻しながらバイクの上から視線をバリケードの向こう側へと向ける。

「無事か？　　というか助けに入って大丈夫だったか？」

「ああ、助かった！　　此方も悪魔の数がキャパを超えてて困っていたんだ」

バリケードの向こう側から答えて来たのは制服に身を包んだ警官の姿だった。その横には小さな悪魔が、ピクシーが浮遊している。初めて目撃する悪魔はなんというか、ティンカーベルの様な姿をしている。へえ、これがピクシーか、と少しだけ感心しつつ、バイクをストレージの中へと送り込んで、バリケードを飛び越える。それを見ていた周囲がおお、と声を零す。

「君は……フリーのデビルバスターかな？」

「サマナーだよ、所属はなしの」

「ライセンスはあるか？」

「これでいいか？」

ステイブンが用意してくれた、偽造ライセンスをスマートフォンで表示させ、それを見た警官の男が失礼した、とアサルトライフルを下ろす。ちなみにサマナー活動にライセンスは必須ではない。だがライセンスを持っている方が様々なサービス等を受けられるらしく、話や仕事を受けやすいとの事でもある。そんなじゃ、シンジユクへ向かうか、と思ったところで、

「此方から即金で200万円出せる。これで本部が雇ったバスターやサマナーの援軍が来るまで護衛を頼めないか？」

「……マツカ支払いか、或いはピクシーの魔晶があるならそれで手を打つよ」

「なら魔晶で支払おう、助力感謝する」

握手をして契約を完了させる。一方的ではない、双方に利益のある関係、これが一番健全だと思う。大いなる力には責任が問われる。

それは、タダの雑魚の理論だ。

「チエフエイ、クールマ出る。相手のレベルと耐性を考えればラク・ンダとマハグライバだけで封殺できる筈だ」

「慢心せず、油断せず、じゃろう?」

『新たな姿での初陣を見事に飾るとも!』

小型化したクールマをチエフエイの頭に乗せて、二匹がバリケードを飛び越えた。向こう側へと回りながら、迎撃態勢を敷いた。アンは流石に近くに置いておきたい……:…:…というか近くに来てくれた方が俺が安心する。そうやって即座に行動を開始すると、警官が敬礼してくる。

「助力、感謝します」

「いや、契約は守る人間なので。丁度魔晶を探していたところだし」

「いえ、それでも外道悪魔には普通の銃弾が通じ辛いですからね……:…:…どうしても属性弾や魔弾技術に頼り切りになるんですけど、魔力の回復と比べて悪魔の沸きが早くて……:…:…」

「魔弾?」

言葉を繰り返すとバリケードの向こう側からめきよ、と潰れる音が聞こえた。マハグライバによって悪魔がすり潰される音だ。重力属性の魔法は非常にレアで、ある意味万能属性よりもバリエーションが少ない。その為、耐性や弱点を保有する悪魔がほぼ存在しないのだ。その為、ほぼどんな相手だろうと安定したダメージを繰り出せる便利な魔法になる。ブースタによって威力の増強が入り、その上でチエフエイによる足止めと妨害があるのだから、同レベルの悪魔でこの布陣を超えるには相当苦労するだろう。少なくとも神経・精神耐性のある悪魔が出ているのだから、シバブーやマリンカリン、ドルミナーによる搦め手が通じないのは強みだ。

「魔弾とはデビルバスターやサマナー向けの射撃戦闘術ですよ。正式には《魔弾の射手》という人間向けの戦闘スキルなのですが。不動明



王や愛染明王等の神仏の力をお借りし、それを弾丸に込めて放つスキルです。他にも《援弾の射手》という生体マグネタイトを弾丸に込め、射出する事で活性化させて仲魔や自分自身を強化するという技術もあります。其方は中々扱いが難しく、自分たちはどうも魔弾の方が得意で……」

「ほうほう、成程成程。これは良い事を教えて貰ったな。そっち方面はあまり詳しくなくなてな、俺」

「そうでしたか……」

少し首を傾げ、悩むような姿を見せるが、話をそこで切り上げる。あまり話し過ぎて無免許サマナーのボロが出るのも困るからだ。まあ、こんな状況、進んで追及して藪を突くような事を連中がするのは思えない。

そんな事を考えながら、《エネミーソナー》を眺めつつしばらくの間、出現する外道悪魔を討伐し続けるだけの作業が続いた。

◆

「お疲れ様でした。これが報酬のピクシーの魔晶です」

「ん、お疲れ様。確かに受け取った」

「現在シンジユクは野良悪魔に対する反撃拠点として急速に構築中です。地上はまだ悪魔が散逸しているので、基本的な都市機能は地下や建築物内がメインになっています。シンジユク駅内部が避難場所にもなっていますが、悪魔関係者も其方の方に入りますので、用事があるのなら其方へ」

「あ、どうも」

そうやって軽く挨拶をした所で援軍のデビルバスターやサマナーと交代し、再びバイクを出してシンジユクへと侵入する。レベルが15前後である事を考えると、自分のレベルはどうやら、まだまだ珍しいものではないらしい。チェフエイやクールマをDDSへ戻し、バイクに乗ってシンジユクを進んで行く。

やはりというか、今までの道と比べれば多少数が減ってはいるもの

の、まだまだ、シンジユク内部にも悪魔の気配がソナーに映っている。『どうやらまだヤタガラスの力が完全には蘇っていないようだね』

バイクに乗りながらシンジユク駅を目指していると、そんな通信がバーから入ってくる。ステイブンの声だけが届く通信の中で、ヤタガラス、という名前を呟く。

『ヤタガラスはこの国におけるもつとも大きな霊的国防組織だ。この国の表側に悪魔が出現できない様にクズノハと力を合わせて結果を張ったのがヤタガラスであり、同時に多くの超人や中位サマナーを従えて、日本の平和や表と裏の住み分けを行っている組織だよ。おそろく目に見える形での国防を担っている……メシアやガイアが大きな顔を出来ない理由の一つだね』

「あ、やっぱりそういうのがあるんだ」

『無論だとも。そうでなければ世界の表側に悪魔が出現するからね。……まあ、中堅どころを抑えたのがヤタガラスに対して、本当に恐ろしいのはクズノハだがね』

「クズノハ」

『メギドラオンを前転で回避し、戦艦を刀で両断し、平均的なレベルが70を超えるのがクズノハという集団だ。おそらく日本最強であり、世界的にも有数の強者で構成される組織だよ』

「会いたくねえ……」

平均70オーバーとは何事だろうか。というか、そういう連中がいとも世界が滅んだという事は、世界終焉の原因とは何だったのだろうか？ 地味にだがそれが気にならなくもない。とはいえ、世界の崩壊の原因を探るのは俺の仕事ではない。ピクシーの魔晶は手に入ったのだ、次はライジユウの魔晶と聖杯探しだ。

シンジユク駅の入り口を見つければ、此方もバリケードが構築されていた。バイクをストレージに戻して近づけば、入り口を見張る様に剣と銃を持ったデビルバスターの姿が見えた。駅入り口を守るデビルバスターは此方へと視線を向け、

「サマナーか！ いや、戦える人間は今、大歓迎だ。さ、中に入ってくれ。安心してくれ、シンジユク駅は異界化されてないから」

「元から異界の様な形してるけどな」

その言葉にガードのデビルバスターが笑い声を零し、奥へと通してくれた。それに従い中に進む。

階段を下りてシンジユク地下、新宿の各所を繋ぐそのアホみたいに広い地下通路の入り口、その一つに降り立った。

その中は人で溢れかえっていた。新しく降りて来た、銃を装備した此方、として明らかにカタギではない紋様が彫られたアンを見て、視線が集中している。ただ遠巻きに見つめているだけで、此方に話しかけたり寄ってくるような気配はない。

……気持ちが悪い視線だった。嘗め回すような、期待するような、待望するような、そんな気持ちの悪い視線だった。

『うーむ、ビンビン欲望を感じるのお。この気持ち悪いほどに傲慢な気配、妾には美味しすぎるのお。ま、サマナーには気分の良い物じやなからうて。さっさと離れるのが良いと思うぞ』

「ま、それもそうだな」

こういう光景はナカノでは見かけなかっただけに、少しだけ……新鮮で、そして気持ち悪かった。地下通路内部には新しい看板が設置されており、スプレーで《サマナー・バスター此方へ》と矢印が置いてあった。どうやらこれに従って移動すれば良いみたいだった。さっさとこの場を離れる為にも、移動する。

どうやら向かう方はケイオウ線の方のシンジユク駅の様だった。

しかし、周辺を見ればどこもかしこも、絶望して無気力な人の表情ばかりだ。ナカノでもそういう人々は見えていたが、少なくともガイアとメシアによる炊き出しや訓練、娯楽が供給されていた。その為、こういう絶望的な表情を見せている人間はそこまで多くはなかった……或いは、そもそもそれだけ人間がいなかったのかもしれない。どちらにせよ、本当に世紀末であるのを自覚させるような景色だった。『まあ、正真正銘のカリ・ユガだからね、これぐらいの景色は珍しくないと思うよ、サマナー』

『今は東京23区だけじゃが、その内日本全土、そして世界全土がこういう景色になるんじゃないかな』

そして世は人と悪魔が混在する世界へ——果たして、そうなった時、この星はどうなってしまうのだろうか？　そもそも、ヤタガラスやクズノハが復活したところでこの世界を再生、或いは表と裏を分断するだけの力は残されているのだろうか？　だって、レベル70オーバーの組織でさえ世界を守れなかったのだ。

どうすれば世界を守れるのだ。

「当然ながら電車は運行停止中、か」

ケイオウ線シンジユク駅に到着すると、思っていたよりも多くのデビルサマナーやデビルバスターの姿が見えた。その服装も本当に色々ごちゃごちゃという様子で、一切の統一感が見えない。レベルもバラバラ、上は30、下は4レベルとか存在している。本当に、サマナーやバスターを集められるだけ集めた、という感じがしていた。しかし空気が先ほどのホームレス集団とは違い、ややピリピリしているのを感じる。どこことなく、探ったり警戒したりしているのが解る。

「ん？　よお、見た事ない顔だな……新入りか？」

どうしたもんか、と思っていると近くにいた白い大型の魔獣のサマナーが話しかけて来た。此方はどこことなく余裕を保っているのを感じさせる雰囲気を持っていた。声を掛けられて、少しだけ肩から力を抜く。

「あ、どうもナカノの方から来たんだが……」

「ナカノって言うが一番最初に復活してた所か！」

その言葉に驚いた。まだ世界が再生を始めてから一日しか経過していないのに、良くそんな情報を持ってこれたな、と驚く。その言葉にうん？　と男が首を傾げた。

「やっぱり見た事のないサマナーだと思っただが新入りだったか」

男は髭を掻きながらちよつとレクチャーしてやる、と言葉を吐く。「サマナーやデビルバスターには専用の連絡網やウェブサイトがあつてだな、普通の回線は死んでいても、サマナーやデビルバスター用の通信網は一時的に復旧させているんだよ。これには特殊なアプリが必要なんだが……スマホ、持つてるか？　これ、持つてるやつから

送って貰わない限りインストール出来ねえんだよ」

「あ、おう」

スマートフォンを取り出して、アプリをコピーして送ってもらい、それをインストールする。追加されたアプリは《Summoner's Community》、略して《SC》と呼べるアプリであり、起動すると某有名BBSみたいな掲示板サイトが開いた。

「使い方は解りやすいだろう？　今は崩壊後の情報収集中って事で色々とお祭り状態だ。ここであつくりより先にも先にそれを使って情報収集したほうがいいぜ」

「これは良いもんをどうもありがとうございます」

「あー、気にするな。敬語もいらねえからさつきみたいにフランクに話しかけてくれ。この業界、死ぬのが早いからなるべく同業者には生きていてもらいたいだけなんだよ。特にこんな状況、俺達の様には戦える奴が長く生き残らなきゃすぐに崩壊しちゃうからな、社会なんて」  
もう一度感謝を告げてから、駅の端の方へと移動し、壁に背を向けて寄り掛かりながら《SC》を起動させ、スレを確認した。カオスなものから、色々と有益そうなものまで、色々スレが並んでいるのが見える。

「《合体材料交渉スレ》……《情報集積スレ》、《目撃情報スレ》……お、この《マーケット宣伝スレ》ってのはいいな。というか検索で欲しいものをこっから探せばいいのか……」

「ん？　このアプリ、僕達でもアクセスできそうだね。サマナーが僕たちを召喚していない間は、アプリの方で巡回や検索することが出来るだね」

『丁度良い暇つぶしじゃな。どれ、暇つぶしに妾はAAスレでも始めるかの』

いきなり全く関係のない遊びを始めているチエフエイは大丈夫だろうか……？　そんなことを考えながらも、マーケットに出品されている商品を検索し、確認して行く。その中にあっさりとライジウウの魔晶と、聖杯のレプリカを見つける。

なんとというか……本当に簡単に見つかるなあ、という感じだった。

値段はどちらも現地に行かなきゃ確認できないが、どちらもケイオウ線のプラットホーム、1番と2番で売られているのが解った。

というか、こんな状況でも商売をしているのだから、商魂逞しい。「というか電波塔とか間違いない動いてないんだけど、電波とかどうなってるんだろうな……」

ステイブンからの通信もそうだったが、一体どうやって連絡とか入れてるのか、地味に謎技術なので気になる。まあ、それはともあれ、何時までもこんな辛気臭い場所に居たくはない。

さっさと用事を済ませてナカノに帰ろう。いや、シンジユクからステイブンのバーへと繋げて入れればいいのだから、さっさと用事を終わらせてしまえば良い。

お小遣いはかなりあるので、少しぐらい、遊んでも問題はない。そう思いながら改札機の方へと向かった。

## 再生し始める世界 V

かつては出勤姿を見送ったシンジユク駅のプラットホームも、今では完全に封鎖され、そしてサマナーやデビルバスター達の商売場所として完全に占拠されていた。ブルーシートやいろんな屋台が持ち込まれており、それによってマーケットが形成されていた。なんというか、東アジアで見かける様なあの雑なマーケット、ああいう感じの光景がプラットホームを舞台に広げられていた。そこから感じる悪魔の気配はサマナーの召喚している仲魔の気配で、中には店番している悪魔さえ見かける。

「良いものがおいているホー！」

「こつちのが良いよー！」

「ドワーフ製の装備置いてあるよー！」

ピクシーやジャックフロスト、或いはジャックランタン。ビジネス的にコミカルで親しみやすい悪魔でレベルが低い者が店番をしているのが見える。そしてそれと一緒に様々な道具や武器、防具と呼べるものが並べられており、それで盛んにマツカを使った売買が行われているのが見える。正直、ここまでサマナー用市場が活性化しているとは思ってもいなかった。

『いや、崩壊して悪魔が出現しているからこそその活性化だろうね。そもそもサマナー活動はアンダーグラウンドなもので、取引も隠れて行うものだ。それが人目を気にせずに長時間、そして大規模に集まれるようになったんだ……こんなに活性化するのも当然だろうね』

「あー……成程」

細い供給の所が、一気に太くなってしまったのがこの活気の原因か、というのを理解した。大つぴらに動けるといふ事はそれだけ物資を動かしやすいという事だ。そしてそれだけ、ものを動かせば興味を持った人間が嗅ぎ付けてくる。税もクソもない、完全なフリーダム状態。そりゃあ人も集まるといふ訳だ。それにライジユウの魔晶とかを探するのは良いとして、正直並んでいる物は色々と気になる。

「ヒーホー！ いらっしやいホー！ ここには消耗品を置いてるホー

！」

「気に……なる……？」

「まあ、結構」

何せ、サマナーとして外のコミュニティにまともに触れるのは初めてだ。今の所、ナカノのガイアとメシアはお互いに生き残る為の協力だったのに、それがまともな立場での交流になっていくのだ。やっぱり、普通の値段とか販売されているアイテムとか、そういうのは凄いい気になる。なので近くにあるジャックフロストがやっている屋台を見た。その上には様々なアイテムが並んでいるが、

「なんだこのアメ？」

「ホー！ それはチャクラドロップだホー！ 魔石よりも遥かに効率よく魔力を回復させる為に作られている回復用のお菓子だホー。口の中に入れるとあらゆる不思議、あつという間にほのかな甘さを残して消えるホー。魔石と比べて口の中に放り込むだけでお手軽回復だから愛好家は多いホー！ 最近はアプリ型召喚システムでMP回復アイテムとか呼ばれているホー」

「へえー」

魔石はあれはあれで便利だが、面倒なのだ。魔石は使う時使用する対象へと向かって魔石を向けて、そしてその中にある魔力を与えなくてはならないのだ。少し、そこに手間がかかるのだ。だから口の中に入れて即座に回復出来るというのは嬉しい。

「無論、回復量も魔石の軽く2,3倍はあるホー。でもそれで満足できないサマナーにはチャクラポットを置いてあるホー。こっちは魔力を限界まで回復する道具ホー！ ただしちよつと手間がかかるホー。回復の時間と時間を考えるのはサマナーの仕事だからこれ以上は何も言わないホー！」

「中々商売上手だなこいつ……チャクラドロップの値段は？」

「一袋20個入りで800マツカだホー」

ジャックフロストの言葉に顔を顰めた。800マツカという事はつまり、40万という事だ。しかも20個入りで40万、とは1回フル戦闘の後の回復で使い切る可能性がある。そう考えるとかなり高



い買い物になってくる。

「当然ながらチャクラポットは1回で使い切りホー。こっちは単品で1500マツカだホー！」

「高いなあ……」

「使いやすい、優秀な消耗品だからこれぐらいの値段は当然だホー」

ジャックフロストの当然の言葉だった。だけど食べて一瞬で回復出来るチャクラドロップの存在は割と真面目に恐ろしい、というか欲しい。これ、事前に仲魔に持たせておけば一々此方が仲間にも魔石を使わずに回復させる事が出来るのだ。しかも新しく悪魔合体で進化させたチエフエイもクールマも、能力は上昇した代わりに魔法のコストとかが増えている。それを考えたなら回復手段は欲しい。

ぶつちやけ、5袋ぐらいは買いたい。だがそうなるとチャクラドロップだけで200万にはなる。

「お客さんもしかして新人サマナーホー？　すぐに使える消耗品を持ってるのは生死を分けるホー。悪い事は言わないから1袋だけでも買っておくべきだホー。時間がある時は魔石で、ない時はドロップで回復するのがお勧めだホー」

「商売上手だなあ、お前……よし、3袋くれ」

「毎度ありだホー」

悔しいが、誘惑には勝てなかった。2400マツカを取り出してジャックフロストに支払い、チャクラドロップを買い取った。これが何時か、窮地を救うと信じてストレージの中へと送り込む。とはいえ、まともなサマナー業界でのお買い物を経て、少しだが満足していた。なんだかんだ言っただけ、この未知を開拓するような楽しさは何時だったって忘れられない。今まではステイブンや支配人に支給される形で用意されていたものを使っただけに、自分の目で見て探すのは格別の楽しさがあった。

「あ……サマナー……アレ……」

アンに袖を引っ張られながら振り返れば、アクセサリーの屋台があった。ただし、ただのアクセサリーではないのは伝わってくる。振り返った先のアクセサリーを販売しているのは人間だった。

「お、俺の所に来るとは良い目をしているじゃねえか。ここにあるのは全部、魔装済みのアクセサリーだぜ。どれも一級の職人によって作成された魔晶装備だ、損はさせねえぜ」

魔晶装備。悪魔は死亡時に時折、魔晶という結晶体へと姿を変える事がある。それをステイブンは悪魔の結晶化された情報であると言っていた。一番簡単な状態の情報であり、だからこそ装備と融合させる事が出来る。この魔晶を融合させた装備を、魔晶装備と呼ぶ。

それらの装備は様々な効力を発揮する。

最も簡単なのが無銘の刀と融合させたものだ。

この場合、刀に融合させた悪魔の特性が色濃く表れる。例えばエンジエルの魔晶石を無銘の刀と融合させれば、大体的場合で破魔属性の刀か、或いはChaos特攻の刀になる。こういう風に、魂合術とは魔晶石の情報を装備品に融合させる行いだ。

「ここにある奴は基本的にセットで効果を表す奴とかはないからな。その代わりに一律で一つ1000マツカだ。ゆっくりと見て行けよ」  
屋台にはそれぞれ何の魔晶を使用しており、どういう効果を発揮しているのかが書いてある。例えばここに置いてあるピクシーの魔晶を使用した指輪は装備者の体力を少しだけ強化してくれるものだ、とか、ケルピーのベルトバックルは凍結率を補佐する効果がある、とか。そういう風に短く説明が出ている。それを眺めていると、  
「ん……これ」

アンがその中の一つを指さした。それは見た目は普通のスカーフの様に思える。だがアンはこれが良い、と示していた。

「これ、違う」

アンの指摘した言葉に、屋台の男が軽く口笛を吹いた。

「いやあ、お目が高い。そいつは魔装品じゃなくて魂合品なんだよ。知ってるか？ 魔装と魂合の違い？ 同じ魔晶石を使っても魔装と魂合、技術が変わると装備に与えられる効果ってのもまるで変わるってもんさ」

そう言うと言ったフレイアのスカーフ、と書かれていた札の裏側を向ければ、説明が火炎と精神耐性の上昇から、封魔状態の無効化へと変わっ

ていた。それを見せながらも、店主はニヤリ、と此方へと視線を向けてくる。

「カノジヨに良い顔を見せるのも色男の仕事だと思うぜ。ちなみに一律1000マツカだ。そこは曲げるつもりはないぜ」

「お前ら良い商売してるよなあ……」

苦笑しながら1000マツカを取り出し、それを叩きつけてやった。受け取った店主は毎度、と笑みを浮かべてそれを回収した。そうやって購入したフレイアの赤いスカーフ、それを引つ張ってそのまま、アンの首に巻く。まあ、女の子だもんな。おしゃれの一つぐらいして貰った方が良くに決まっている。

「んー……首じゃないな……」

「ん、こつち」

スカーフを取ると、それを腕に巻いた、確かに、其方の方が見栄えは良いな、と思える。やつぱり、俺ではそういう根本的なセンスが欠落しているな、と思っていると、アンが両手を掴んで、握って来た。

「ありがとう、サマナー」

「おう……まあ、ほら、封魔対策はしなきゃいけないからなあ！」

「Sigh……」

後ろからアクセリ屋の大きなため息が聞こえてくる。ああ、どうせハタレ童貞だよ！ と心の中で叫びながら、俺にしか解らないアンの僅かな頬の動きから目を反らし、マーケット内の散策を再開する。本当に滅茶苦茶、無秩序に商品が並べられているようで、明らかに法律で許可が必要そうな銃器まで販売されていた。

その一つを手にとって構えてみるが——駄目だ。

「ルーチェ&オンブラを超える逸品には程遠いな」

カスタムの入った自動拳銃やライフルを握ってみるが、どうにもL&Oでいいや、という感じがしてしまう。なんというか、L&O以外の銃は全て、消耗品という感じが強いのだ。使いこなす事を要求してくるL&Oの様な暴れ馬が中々ここには並んでいた。《死神コルト》と呼ばれる様な呪われた銃も一応握ってみたが、L&Oの方がまだ手に馴染む。迷う事無く捨てて、次の店へと移った。

その間、上機嫌らしいアンはずっと腕を組んで一緒にいる。正直、周りから視線をたびたび向けられていて恥ずかしい。

と、そんな風に店を巡っていると、ライジユウの魔晶を売っている店を見つけた。魔晶を色々集めて販売している店だが、今の所魔装や魂合術に関してはそこまで興味がない———というか、基本的にレベルが30とかに到達した連中向けの装備品なのだ、ああいうのは。そうじゃないとあまりにもバリエーションが少ない。

まあ、そもそも大きな装備を買う程の予算はない。一応宝石の類は桐条からドン引きするレベルで貰っている。それをマツカに換金する事が出来れば、即座に問題は解決できるのだが、今はまだ、そこまでする必要もない。

この世界がそう簡単に再生しないのは誰よりも俺が解っているのだから。少しぐらい後回しにした程度で、何かが変わる訳じゃない。

とりあえず、ライジユウの魔晶は2000マツカ程した。流石にアホみたいなレベルなので、迷う事無く値下げ交渉の為に話しかける。だが店番をしている悪魔・ジャックランタンは、

「駄目だなー！　びた一文負けないぜ！　ケケケケ」

「どうしてもダメか？」

「おいおいおい、俺はサマナーからこの値段で出せって言われているんだぜ？　交渉なんて無理無理！」

「仲魔のおっぱい揉ませたる」

「500マツカで売るわ」

ジャックランタンのガチトーンが返ってくる。DDSへとアクセスし、そこからチェフエイを召喚する。そのロリボディで胸を張るが、ジャックランタンが露骨に溜息を吐く。そして視線をアンへと向けた。それから再びチェフエイの薄い胸を見て、そして普段は服によつてある程度抑え込まれている、アンの胸を見た。

「あつちがいい!!」

そうだよな、そう思うよな。俺だってそう思う。だけどダメなんだ。両手でバツ印を作つて、ジャックランタンに返答する。

「あつちは駄目なんすよ……こつちで我慢して……1000マツカで

いいからさ……」

その言葉にジャックランタンが一瞬、怒る様な仕草を見せるが、その前にチエフエイの怒りの拳が屋台を叩いた。軽く屋台を震わせながら、チエフエイが心の底から叫んだ。

「なんで!?! なんで妾こんな扱いなの!?! 傾国じゃぞ?! 妾は傾国の悪魔じゃぞ?! この扱いおかしくない!?! 妾四尾になればグラマーじゃから! トランジスタグラマーになるからあ! 妾あ! 扱いに不満あるぞお!!」

そのチエフエイの必死な叫びをジャックランタンと共に眺め、ジャックランタンの目から涙が流れる。

「ライジユウの魔晶持っていつていいぞ……なんというか……憐れな悪魔には施さなきゃな……」

「ありがとう、ジャック……」

「貴様ら死にたいのか」

「お疲れー」

文句を言い続けるチエフエイをコンプの中に戻して、交渉成立に心でガッツポーズを決めながら魔晶石をストレージへと送った。これでガンナーズブルームの材料は揃った。なんかストレージを見ると、さっそく送ったアイテムの他に大量の銃とパーツと、そしてバイクまでが消えている。ストレージからステイブンが必要な材料を引っこ抜いて、そのまま作業を開始したのだろう。まあ、バイクはシンジユクに居る間は必要ないし、そこまで惜しくはない。

それはそれとして、

「次は聖杯か」

此方は流石にアプリ使って場所を特定しないと見つからないだろう。そういう事でマーケットの情報を調べ、どこに問題の場所があるのかを確かめ、それが4番線の一番奥にあるというのを把握する。それが終わった所でアンと腕を組んだ状態で向かい、そして到着した。そこまで広い場所ではないし、目立つ一角だったので見つけるのは難しくなかった。その4番線一番奥、その一角は異彩を放つ物がブルーシートの上に広げられる露店だったからだ。

その前で足を止める。露店の主は、セミロングの銀髪を短いポニーテールで後ろに纏め上げた、アンダーフレイムのサングラスを装着した女だった。黒いストラップスにへそと胸元が見える風に軽く開けてあるネクタイの無いスーツ姿に煙草を口に啣えている。

とりあえず、露店に並んでいる物を適当に指さした。

「あの、これは」

「輝くトラペゾヘドロン」

「これ」

「如意金綱棒」

「……これ」

「黄泉帰りの箱。最初のはニャルラトホテプを召喚するのに必要な道具よ。次のがセイテンタイセイの召喚に必要なやつね。で、これがイシユタル召喚の触媒になるわ」

無言で店員を眺めた。乱雑に置かれた超級と呼べるランクの品々の中に埋もれる様に聖杯が置いてあった。黄金に輝く美しい器は間違はなくイメージ通りの聖杯のだが、雑に置かれている感じ、店主自身はかなりどうでも良さそうな感じに売りに出していた。これ、どう反応すればいいんだろうか……そんなことになやんでいると、

「ベル、ゼブブ……ちー……っす」

「久しぶりね、人修羅。或いは初めまして、かしら。ま、どちらにしろ元気そうな姿を見て良かったわ。魔界、世界崩壊に合わせて喰われたから急いで宝物殿から持ち出せる物を持ち出してきたけど……貴女がいる所を見た感じ、閣下に後れを取ったみたいね」

「ん」

コクコク、とアンが頷いている間に《アナライズ》を行う。確か、アンは彼女をベルゼブブと呼んでいた筈だ。

魔王 ベルゼブブ Level 112

本当に魔王級悪魔だった。ただ支配人と比べるとレベルが高く感じられる。というかあの支配人はどうも、レベルを一切上げるつもりがないように感じる。まあ、合体で助けられたのだから別に良いのだが、えーと、と声を零す。

「それでー……ベルゼブブ様はこんな場所で何用で？」

「路銀と情報収集よ。ここ、おそらく現在の崩壊世界で最も情報と人が集まる場所だから。適当に餌をぶら下げていけば良い感じに見つけられるでしょう？ 実際こうやって見つけられた訳だし」

で、とベルゼブブがサングラスの隙間から赤い瞳を此方へと向けて来た。

「閣下、連絡取れるのよね」

その言葉に答えて、スマートフォンを取り出し、バーへと繋げる。

『おかけになった電話番号は』

「あ、繋がりました」

「ありがとう、ちよつと借りるわね……」

スマートフォンを受け取ったベルゼブブがそのまま、露店の向こう側でキレ始めていた。何か、話が長くなりそうなのでベルゼブブの方から視線を外し、アンの方へと視線を向けた。

「しかし、大物悪魔と顔見知りだったんだな、お前」

「知っている？ ……すこ、し……違う？ 顔見知り……うーん、友達？ 仲魔……？」

「いや、言葉に出来ないなら別に良いんだよ。責めてる訳じゃないし」  
ただ純粹に、アンは何者なのだろう、というだけの話だ。そもそも人修羅なんて悪魔、聞いた事もないし、全書にも存在していなかった。そもそも人修羅とはどういう意味なのだろうか？ 人であり修羅である？ だがアンはただ強いだけで、血に酔う様な修羅でもない。明らかに人修羅、なんて言葉は似あわないビジュアルでもある。そう考えるとやつぱり、色々この子の背景が気になってくる。

「うーん、不思議ちゃんだなあ、お前は」

「私、も……気に、なる」

じゃあ、今度支配人をスタマで脅そう、と相談するとアンから領き返って来た。最近自分たちの中で、支配人のカーストがガンガン下がっているという事実があった。やはり原因はカオスとロウ因縁の対決Inバーとかいう見たくもない最終決戦が原因なのだろうと思う。そして現在進行形で威厳を失っている事もある。

ちらり、とベルゼブブの方へと視線を向ければ、キレてるベルゼブブの姿が見える。

「少しくらいこっちに連絡入れても良いでしょ!? えっ? なに? ロウと因縁の決着をつけてた? ぶち殺すぞ悪魔王。寝言は来世で言え」

地味に今生で一度も寝るんじゃねえぞテメエ、と臣下に宣告された悪魔王の明日はどっちだ。こうやって超高位悪魔連中の会話や話を聞いていると、実は君たち本当は愉快な生態をしているのではないか……? と思い始めちゃいそうなので困る。実際、そんな事は欠片もなくありえないのだが、なんでこいつら、こんなにも見えている範囲だと愉快なのだろうか。親近感が沸いてくるから本当に止めて欲しい。

そんな風に悪魔の魔界事情を考えていると、電話が終わってスマートフォンを投げ返されてきた。それを受け取りつつ、ベルゼブブから言葉が来た。

「バ閣下に一発叩き込みに行くから連れて行きなさい」

その顔にはこれから殴る、という一貫した覚悟しか感じさせない表情で満ちていた。余りにも悪魔にしては清々しい、迷いのない表情。まるで悪としての側面その物が削がれた様な清々しさを持つその姿は、

「了解しました姐御」

なんか、もう、姐御と呼びたくなるような感じだった。アンも横でベルゼブブを姐御ー、と呼び始めるので、たぶんこれで定着する。店を畳み始めるベルゼブブの姿を見てあっ、と声を零す。

「聖杯が必要だったんだ」

「ん? ああ、そんなものだったら閣下に会わせてくれればあげるわよ。そもそも世界の情報概念不足で高位触媒があった所で現状、召喚もデビルソースとしても使用できないから塵の山だし。今はもっと使いやすく、即座に戦力強化に使えるものが人気みたいなのよねー……おかげで全く売れなかったわ」

「はあ……」



需要に乗らなきゃ売れないというのは悲しい事実だった。

◆  
「ベルゼブブ、漸く——へぶっ」

シンジユク、人気のない所からバーへとアクセスしてみれば、一番最初に見たのは飛び膝蹴りを支配人の顔面に叩き込むベルゼブブの姿だった。それを受けた支配人は一瞬でダウンし、マウントを奪ったベルゼブブがそのまま顔面にマウントパンチを繰り出している。それを見たアンが静かにガッツポーズを決めている。

「すげえ、本日二度目の下克上だ」

『見たくもない下克上パート2』

『魔界の上司部下の関係も複雑じやのお』

というか、出会う高位悪魔連中が基本的に皆、フランクというか、ユークというか……全員、世界が崩壊した原因で頭の螺子が一本外れていない？ とは思わなくもない。まあ、個人的にこつちのがやりやすいんだけどさ、と思いつつベルゼブブからもらった聖杯を、ちやつかりロボットアームを伸ばしてお土産を求めているステイブンへと渡す。それを受け取った本人は楽しそうに作業部屋へと戻って行く。

間違いない。

この末世、一番楽しんでいるのはステイブンだ。

肉を殴り続ける音が響く店内、バーカウンターの方へと向ければ前は影の様なシルエツトが、前よりも少しだけ濃くなっているのが見える。既にその状態で自分を超えるだけの強さを感じられる。完全に復活した場合は、どれだけ強くなるのだろうか？ そんな事を考えてると、白い姿が肩の上に乗った。

「良くぞ戻ったサマナーよ。外は寒かっただろう？ さあ、私の羽毛で温めてあげよう……いー」

「なんで無駄に壮大なんだよてめえー」

くるっぽー、と鳴いた鳩がわしやわしやと羽を振りながら首元に身

を寄せてくる。暖かいから困る。もう鳩はこれでいいや、と思つていると血祭りに上げられた支配人がポイ捨てされ、満足そうにベルゼブブが立ち上がり、頬に付いた血を拭った。

「ふう……とりあえず事情は解ったわ」

「今ので」

「ツーカー」

アンよ、今はツーカーとかそういうのじゃないと思う。一方的に殴ってただけだし。けどなんか、アンの視線にはベルゼブブに対する気安さを感じる。なんというか……アンとベルゼブブの間には縁らしきものを感じる。

「まあ、閣下と私は付き合いが長いしね、余り言葉は必要としないのよ。まあ、個人的に人を蠅の王とかいう括りに墮としてくれた四文字には言いたい事ややりたい事が色々あるけど、それとは別に魔界をあのままにしておく訳にもいかないしね。いいわ、私も手伝ってあげる」

「えっ、マジっすか」

驚いているとDDSにベルゼブブが仲魔として登録されたのを確認した。レベルは大幅に弱体化しているが、それでも習得しているスキルや魔法に関しては魔王の名に相応しい数々だ。というかレベルに不釣り合いな、と表現できる強さをしている。普通にレベルだけで判断して勝負を挑んだらそのまま全滅できそうだ。

こっちの懐疑的な視線を受け、ベルゼブブは口を開く。

「閣下が四文字の前で大人しく味方しているんだから、私が好き勝手やる訳にもいかないでしょ？ 人修羅に良くしてくれているサマナーなら私自身文句はないわ。ただ、私を仲魔にしている上でちよつとしたお願ひみたいなのはあるけど」

契約が完了した以上、それを守る必要はない。だがそれはそれとして、悪魔と良好な関係を構築するのは大事な事だ。その為、迷う事無く領きを返せば、

「出来るだけでいいから、私をバアルにして欲しいのよ。ま、レベルが80を超えた後での話だからだいたいぶ先の話になるけどね。頭の片隅

で覚えていてね?」

「うっす」

「……あとそんなに畏まる必要はないわ。気軽にベルとでも呼んで。それじゃ、コンゴトモヨロシクね、サマナー」

そう言うとは色々アイテムの入った風呂敷をソファの上へと捨ててベルがDDSに登録された。スマートフォンを取り出して確認するが、そこにはやはり、ベルゼブブという悪魔の名前が登録されている。

氷結、電撃、衝撃、神経、精神に耐性があつて破魔・呪殺を反射する上に弱点を持たない優秀な耐性、デフォルトで電撃ブースターを保有し、固有の呪殺ブースターを保有する。体力魔力の両方のコストをカットする事まで出来る為、レベルが下がっている状態でも高位魔法の燃費を改善できる。

正直、今持っている仲魔で一番頼りになりそうだった。

『ここでは妾達が先輩じゃからな』

『あら、序列とか気にするタチだったのね』

『とある事情でね! とりあえずこのアプリ内のトップに挨拶をして貰おうか!』

『トップ……?』

『お前、ゴムタイヤにキャッチをかけるタイプだな……?』

『早速DDS内が更に混沌としてる……』

『楽しそう……』

「サマナーよ、私はなるべく外に居たいのだが」

迷う事無く鳩をDDSに戻した。DDS内部から更に悲鳴がホロウインドウとして片眼鏡のディスプレイに表示されるが、正直煩いので一時的に表示をカットする。これで所持する仲魔はアンを抜けば全部で5体になった。

Lawの四文字、Chaosのベル、Lightのクールマ、Darkのチェフエイ、そしてアライメントとか存在しないというかそういうカテゴリーに当てはまらないスタマ先輩。後はNeutral

か、或いはE×Nな仲魔が増えれば、悪魔におけるアライメントの縮  
図が完成するなあ、なんてことを考える。

まあ、仲魔が増えるのは良い事だ。

俺の実力で指示を出せる悪魔は同時に2体が限度だ。それ以上は  
頭が回らない。サブで指示を出せるようなやつが必要になってくる。  
まあ、その事は後回しにするとして、少しだけ、疲れた。

扉探しをする前に、ステイブーンがアプリを完成させるのを待と  
う、としばらく、バーで休んで行く事を決めた。

## 再生し始める世界 VI

結局、渡した道具で何かを作るまでにはそれなりに時間がかかるらしい。流石のヒヤツハー世界の万能メカニックプログラマー龔爺ステイブンでも、一晩で何かを作るといのは難しすぎたらしい。いや、これは純粹に期待値が高すぎた問題なので一切失望とかはない。そう、ステイブンは何も悪くないのだ。

「覚えてろ……」

そんな声を背中に受けながら、鳩をバーの天井に吊るして明日天気になあれって祈りながら再びシンジユクに戻った。

無論、目的は扉探しとレベルアップだ。ステイブンによれば今の東京は野良の悪魔のレベルキャップが30前後まで上がっているらしい。今の自分とアンのレベルは18、19。出現したモウリヨウ等を狩ってレベルが1だけ上がったが、正直、レベル30の悪魔にでも出現されれば一瞬で困る事となる。ベルゼブブの加入などで戦力は潤っているが、根本的にレベルが足りない状態になっている。

それに30付近までレベルが上がれば、今度はチェフエイとクールマをもう一段階上へと合体させて変異させられる。そうすれば更に戦力強化が捗る。その事を考えればやはり、どんな扉を抜けるにしろ、探すにしろ、レベルという絶対的な基準が必要になってくる。ぶつちやけた話、俺のレベルアップ速度は業界的に異常の一言に尽きる。これは支配人がまだへたれ支配人になる前の時に、その力を使ってレベルキャップや限界を全部排除してくれた為に発生している事であり、

普通のサマナーもデビルバスターも、そう簡単にレベルは上がらない。もつと何年もかけてゆっくりとレベルは上がる物らしい。

だけどそんな異常なペースと同じ様な速度で巖戸台のペルソナ組はレベルが上がっていた。つまり、この先に向かう場所、世界、扉の向こう側はそういう連中がいる可能性が高く、それに匹敵するような相手と戦う可能性もある。

それを考慮するとやはり、20以下のレベルではかなり心細いの

だ。そうなることややはり、レベルアップは必要になってくる。少なくともステイブンが生み出してくれた《アナライズ》によってレベルや身体能力を具体的な数値として表示させることが出来るおかげで、強くなったのか、なっていないのか、それを判断する事は難しくはない。だから戦闘訓練するのもそこまで苦ではないのだ。寧ろ、楽しいとさえ思っている。大僧正や聖女を見れば上には上がいるというのを理解させられるが、

それとは別に、強くなって行くことは自分が出来なかった事に手を伸ばせるようになる事で、それだけでもかなりの楽しさがあるのだ。少なくとも世界が崩壊している今、悪魔が人間を当たり前の様に襲う状況で強くあることは重要な事だ。それと合わせ、レベルアップは優先事項であった。

マーケットで新しく購入したテトラジヤマーと呼ばれるインナーを装着する。これは呪殺と破魔の耐性を着用者に与えるサマナー・バスター用の防具であり、一着五千万近い値段をする。桐条からもらった宝石を悪魔とマツカに交換してこれを購入着用し、その上からS・E・E・Sの改造制服を腕章共々装着する。此方はステイブンによって概念加工を施され、見事に斬撃射撃火炎耐性を取得している。

これでひとまず、最もメジャーな属性に対する防御を得られたため、相当レベルの差が存在しない限りは即死しない様に整えられた。問題は防具が制服である為、見た目やや舐められそうになるという事だが、そこはそこ、

アナライズも出来ず、実力すら把握できないサマナーやバスターは直ぐに死ぬので気にしない。そこは業界の共通認識でもあった。そういう事もあり、本物のサマナーやバスターは見た目ではなく能力や結果などで判断する。強い奴が偉いのは人間も悪魔も変わらない。

新しく神経弾を補充した事で準備が完全に完了する。桐条からもらった1か月分の給料もこれでかなり減ってしまったと嘆きつつも、サマナーは金の出入りがかなり激しい職業だ。投資で使った分は稼ぎ直せばよい。

レベルアップをすることも目的に、シンジユク駅に再び戻った。基

本的にケイオウ線付近は完全に悪魔関係者の縄張りになっているらしく、アライメントも中立寄りの地域になっている。

ロウ系統、メシア教徒はシナガワへ。

カオス系統、ガイア僧達はウエノ方面へと向かったらしい。

今のシンジユクは中立地帯。カオスやロウ派の様な突き抜けた依頼は来ないが、その分安定している、というのが掲示板で拾える情報だった。それを加味しつつ、シンジユク駅の一角、デスク等を利用して作った臨時事務所の様な場所へと向かった。アンを引き連れて近づけば、此方を値踏みするような視線を感じる。向こう側に座っている男はどこか血の気が薄く、そしてモノクルを装着しているのが見える。なんとというか……人間らしくない、人間だった。

「ようこそ、悪魔協会へと。仕事の斡旋をお求めかな。そして説明はいるかな?」

その言葉に頷いた。

「頼む」

「では説明して進ぜよう」

モノクルの男が演劇めいた動きと言葉遣いで説明を始める。この業界、こういう変人が多いという事を最近、漸く理解し始めていた。

「まず、悪魔協会とはこの崩壊世界でサマナーやバスターが生き抜く為に生み出された互助会の様なものだ。前身となる組織はあったが、どれも世界崩壊に巻き込まれて半壊か壊滅状態だ。今は生き残った各組織の幹部やらが殴り合いながらネーミングを考えている為、今の所名称は悪魔協会（仮）だ」

カッココカリカッコトシ  
「（仮）」

やっぱ面白い奴しかいないんだなあ、この業界。そう呟くと横でアンがうんうん頷いていた。それを無視してモノクルの事務員は話を続ける。

「ライセンスを提示する必要はない。そもそもそんなもの確認している手間が勿体ない上に、ライセンスのあるなし関係なく働いてもらいたい所であるからね。故に出自、立場、背景は現状況にしない。そもそも世界が崩壊しているので関係ない。こんな状況でも暴れられる

奴はただの自殺志願者だ。そういう奴も歓迎する——勝手に死んで割くりソースが減るからね」

「わあ、やさしい」

まあ、でもどうせそういうのは地雷依頼を掴ませるんだろうなあ、というのは予測できた。そしてそれを言い切ったモノクルは、手を組みながらニヤリ、と笑みを浮かべた。

「それで、東京の明日を守る為にも仕事を受けるつもりはあるかね？

レベル帯を自己申告するのであればそれを考慮した仕事をピックしよう。特技、資格、仲魔、より詳細に伝えればそれも考慮しよう。ただし必須ではない。無論、手札を隠すのはサマナーの常、必要以上に詮索はしない」

ただし、

「この世界に保険はない。申告しなかった結果、或いは見栄を張った結果不釣り合いな依頼を掴んでしまっても自己責任だ。そうでなくても唐突に現れた魔人に殺される時きだってある。その事を考えるといい。思慮は人間に与えられた最大の武器なのだから」

「ふむ」

腕を組みながらモノクルの言葉を頭の中で転がす。実際、言っている事に間違いはないのだ。その上でどこまで話してもいいのか……というのを判断するとなると、少し難しい。

『サマナー、基本的に貴方の仲魔ならレベルが5差あっても普通に戦えるだけの戦力は整っているわ。軽くデータを見せて貰った感じ、クールマの重力魔法の通りが万能なのと、チエフエイのデバフで格上相手でも雑魚ならガンガン潰していけるわ。私も20ぐらいになれば電撃ガードキルを習得するし』

『重力、精神、神経各種が揃っているからね、慢心さえしなければ問題はないだろうね』

ベルとマツヤからのアドバイスを聞きつつ判断する。

「……腕には多少覚えがある。レベルは20近く、重力、精神、神経が使える仲魔がいるのと、呪殺と破魔手段もある。まあ、多少は格上が相手でも戦えるかな、って感じ……かな」



「ふむ、成程。ではこういう依頼はどうだろうか」

そう言うとモノクルが指をパッチン、とスナップさせる。それに従い、背後から血色の悪いメイドが数枚の紙を持ってくる。受け取ったその内容を確認する。

依頼書

【異界調査依頼】

報酬：3000マツカ 出現悪魔：妖精グループ レベル平均：1

8

内容：スギナミに出現した異界の調査依頼、出現する悪魔は妖精メイン。レベルの下がったテイターニアが目撃されたとの噂、真偽を確かめる為にも調査を要請する。

【シンジユク東掃討作戦】

報酬：1500マツカ 出現悪魔：外道・幽鬼 レベル平均：16

内容：シンジユク東地区における悪魔の掃討作戦を行う。ヤタガラスより人員の同行があり、地上に結界を張る事で安全を確保する意味もある。激しい悪魔の抵抗が予測される上、おそらくは東側全体の悪魔も集まるであろうから敵の数は多し。

【トーキューハンズ解放】

報酬：4000マツカ＋香 出現悪魔：妖鬼 レベル平均：22

内容：トーキューハンズには生活に使えるような道具が置いてあるのだが、その中をオニ率いる鬼族が占領している。他にも一般人を攫っている模様。トーキューハンズに巣食うオニとその眷属達を皆殺しにし、可能であれば救助せよ。

「この三つだけ？」

「他にも回す相手がいるというのものもあるが、こちら辺に居る悪魔関係者のレベルは今の所、似たり寄ったりとね。更にレベルが上がってくれば回せる依頼も増えるが、一番供給の多いレベル帯なのだよ」

『基本的に凡人、と呼べる才能の持ち主、普通のサマナーやデビルバスターのレベル限界は18から22ぐらいだと言われているわ。覚醒して上限突破を行う凡人というのも稀にいるらしいけれど……基本的にはこの社会で一番多いレベルと被ってるのよ、サマナーは』

『一足レベルを抜ければ注目はされるだろうね。それが良い事か悪い事はサマナーの方針次第だけど』

『たくあんにちくわシロップ』

『ま、サマナーは強くなりたくないんじゃから積極的にやっても良いのじゃ……待て、ちくわシロップってなんじゃ』

まともに会話終わらねえなお前ら！ と心の中でツツコミを入れつつ、どの依頼を取るかを考える。【異界調査依頼】は相手のレベルが18前後らしい。そうなってくると基本的に自分たちのレベルと被り、安定して倒すことは出来るだろう。レベルが低めのベルゼブブのレベルを上げる事も出来る。場合によっては妖精と交渉する事も出来るかもしれない。

二つ目の【シンジユク東掃討作戦】はとにかく出現する悪魔の数が多いだろう。クールマがいる関係上、破魔で即死させながら戦うことが出来るし、数が多いならレベルが少し下がっても一つ目よりも得られる経験値は多いだろう。これなら全体の強化、そして連戦に対する訓練にもなるかもしれないし、他に参加するサマナーやバスターとコネが作れるかもしれない。ただ、ほとんどがダーク悪魔だから交渉の機会なんてないだろう。

三つ目、【トーキューハンズ解放】。マツカがたくさん、経験値もたくさん、リスクも高い。ただ、この中で強くなる事を考えるだけなら間違いなくこれが一番だろう。その代わり交渉なんて不可能だし、誰かと出会う事もない。纯粹に殺して強くなるためのチョイスだ。格上と戦う為の良い機会でもあるかもしれない。それに一番必要としているのは力だ。纯粹に強くなる、という意味ではこれが良いのかもしれない。

しばし、腕を組んで考えるが、余り悩み過ぎてもダメだろう。三番目の依頼を選び、それを指し示す。それを見たモノクルはふむ、と声を漏らす。

「私はそれで良いが、良いのかね？ 基本的に20を超えるぞ？ その眷属共はそれよりも弱いだろうが……それでも辛い相手になるぞ？」

「今の世の中、この程度で辛いと言ってる暇ないんで」

「成程、それもまた真理だ。ならば己の選択に後悔せず進むと良い。トーキューハンスの行き方は知っているな？ 道は常に開かれている。行くと良い」

依頼書を受け取りながらそれでは、と手を振って背を向ける。なんというか、動きの一つ一つが怪しいのだが、場所が普通にみすぼらしいので、動きや言動と場所がミスマッチしているのだ。なんというか、どこか虚しい演技だった。それはそれとして、《悪魔全書》からオニの情報を取得する。

レベルは個体で変動し基本的に20〜25の間、精神・神経・氷結が非常に良く通り、代わりに物理系統に強く、火炎を無効化、破魔と呪殺にも強い。メジャーどころでは疾風に弱い事を除けばこれ、前衛用の仲魔としては恐ろしいほどに優秀な耐性を保有しているのが解る。正直、欲しいぐらいだ。まあ、此方はパーティーの役割がかなり固まってきているので、これ以上能動的に悪魔を増やす予定はないのだが。

そもそも、これ以上仲魔を増やすと俺の指示キャパを超えてしまう。

「うっし、とりあえずハンスに行くか。……確か地下鉄の方の出口の近くから出る事が出来たよな？」

その言葉にアンが頷く。そしてその返答に少しだけ、疑問を覚えた。

羞恥心とか知らないのに、なんでシンジユクのダンジョン染みた地下の事を知っているのだろうか……？ まあ、あの支配人の事を考えたら別に変な知識を埋め込んでいても不思議ではないか、と済ませる。

まあ、なんかあったとしてもその時はバーの支配人をつるし上げれば良い。

もしくは支配人を動けない様に神経弾でSTUNさせてから鳩を縛り付ける。最終手段は支配人と四文字で無理やり悪魔合体させるぞ、と脅す。たぶんこれで何とかなる。

「んー、こっち側に来るのも久しぶりだなあ」

シンジユクはキノクニヤがあるからちよくちよく来ていた。というのもルールブックとかを確実に手に入れようとしたら、本店の方まで足を延ばさないと中々見つからないのだ。場合によっては注文しないとならないし。だからそういうのを探してちよくちよくシンジユクに遊びに来ていた。ハンズの方も昔は家族で来てたなあ、というのを思い出しながら、

ハンズ前の大橋でその姿を眺めていた。窓が所々割れている以外は大分平気そうに見えるのは、流石日本の建築というべきか。大橋の方も割と無事そうで、普通に渡れる様子だった。元クリスピードーナツの店舗の影から眺めつつ、《エネミーソナー》と《ハニー・ビー》の何時もの探索アプリセットを確認する。

「んー、中にはそれなりに気配が詰まってるな。目視しないことには相手を確かめられない、か」

「ど……する……?」

「うーん……まあ、近づいて確かめるしかないんだよな、これが」  
「ん」

此方の言葉にコクリ、とアンが頷いた。アプリを起動したまま、視界の端に《ハニー・ビー》によるマップ表記を残したまま、ソナーで敵の位置を確認し、敵がないのを確認しつつ姿勢を低くし、一気に大橋を駆け抜けて行く。

どうやら警戒されているとかそういう事はないらしく、素早く身体能力で橋を越えて、ハンズ前の柱の裏に身を隠す。一緒に隠れるアンと共に、ハンズ内部を確認しながらルーチエ&オンブラを抜いた。ハンズ店内の入り口付近を周回する、ソナーに赤く映る存在が見えた。牛の頭を持った、巨体を持つ人みたいな鬼の悪魔だった。

「……牛頭鬼、チェック……斬打核耐性、火反射、氷脆弱点でレベル1  
9か……」

ゴズキの屈強な肉体を見て、その姿が握っている斧を見る。アレを食らったら痛いだろうなあ、と思いつつも、召喚する仲魔を選択する。アンはそのまま、というより《竜巻》を習得したので弱点を攻められるのでそれメインとして、神経耐性がない相手なのでチェフエイのシバブーで動きを封じて、ベルの経験値を稼ぐ為に初陣、という所だろうか。

もう一度確認し、1階のゴズキの広がり方を見た。場合によってはオニが乱入する可能性もあるが、全書で確認するオニに電撃、神経、精神耐性は存在しない。しかも疾風がゴズキとオニで一貫して通る。

STUN、SLEEPでハメながら抹殺出来るな、と認識する。

ここまでわかれば十分だ。L&Oに新しい弾丸を装填する。疾風属性が詰まった弾丸の疾風弾だ。

「ゴォール！ チェフエイ！ ベル！ 飛び込めアン！」  
「了、解」

略奪済みか、或いは悪魔が暴れたのか。既にハンズの1階は粉々に破壊された商品が転がっていたり、店舗の内装は崩壊済みだった。故に遠慮する必要なく、扉を抜けて飛び込んだアンが竜巻を放つ。発生する風の回転が一瞬だけ、アンを中心に発生してゴズキを刻んだ。その体の表面をゴツゴツと抉る様に竜巻はゴズキを食らって殺した。

その破壊を聞いてゴズキの視線が向けられ、飛び込んでくる。

「ははは！ サマナーだ！ 殺せ！ 殺せ！」

「男は飯にして女はMagの為に犯すぞ！」

「やあーね、低能は発想も言動も変わらなくて」

「今こそ妾の美しさを示す時——ファイナルヌード！ ……あれ、サマナー？ なぜこつちを見ないんじゃ？ サマナー？ サマナー！」

興味ねえからだよ言わせるな。布を脱ぎ捨てる様な音が聞こえるが、欠片も興味が沸かないので、真顔で疾風弾を一瞬で飛び込んで魅了され、床に倒れるゴズキへと向かって叩き込む。その姿に追撃する様にマハジオンガが降り注ぎ、一瞬でゴズキをハメ殺して行く。その合間を駆け抜けるアンが竜巻を連続で発生させ、ゴズキをバラバラに

引き裂きながら解体して行き、

一方的に魅了とSTUNハメを繰り返し、1階のゴズキを掃討した。裸のまま戻ってくるチェフエイの顔面に蹴りを叩き込みながら、アプリで上の階の様子を確認する……隣の建築物に悪魔の反応アリ。霊基パターンは先ほどのゴズキと一切変わりが無い。となると苦勞する相手ではない。寄ってこないという事は此方に気付いていないという事でもあるのだろう。

「うっし、今度はもうちょい静かに処理しよう。駄狐は次はドルミナーな。ベルは眠ったのを確認したら直接電流を流し込んでくれ。アンはちよいお休み。竜巻が想像以上に煩かった」

「うん」

流石に全力戦闘だと予想以上に煩かった。戦闘を行う以上、そこで騒音が発生するのは仕方がない。けど必要以上に音を立てる必要もない。今の一戦でゴズキの大体の体力などは把握できた。次からは最低限の労力で殺す事も出来るだろう。というかそうじゃないとベル以外の消耗できついものがある。

「んじゃ、次は抑えつつやろうか」

「えー……」

「お手並み拝見よ、サマナー」

それぞれの言い草を聞きつつ、エスカレーターを登って、2階へと上がる。此方も1階同様に破壊し尽くされている。あまり、ハンズに物を期待できない時になってしまったな、と自嘲しつつ、下から上へと向かって悪魔を処理する為にゴズキのいる方角へと向かう。

身を低くして隠れつつ、ゆっくりとゴズキの居る方へと進んで行き、物陰からゴズキの姿を窺う。そこには五匹ほどのゴズキの姿が見える。股間に突き刺さっているのは女の姿であり、人間の体では受け止めきれない逸物を受け止めた女の股は裂けている。裂けたまま、それをオナホの様に使いながら、頭を齧って食べている。その姿をゲラゲラと笑いながら見て、内臓をパスタの様に啜っているゴズキがいる。

他のゴズキ達もそれを見ており、笑ったりしている。

気持ち悪い。

「サマナー……」

「解ってる。流石にあの時みたいには飛び出したりはしないさ」

ナカノの事務所で、インプが犯していた女たちの事を思い出す。悪魔はどいつもこいつもこんなものだよな、と自分に言い聞かせ、軽く息を整えて落ち着く。冷静に、心臓が痛むのを無視しながら隠れたまま、動かずに待つ。俺もいい加減、慣れるべきなのだ……この、人でなしの世界。そうしなければ生きていけないのだ。

甘さはどこかで捨てなきゃならない。

だからチェフエイがドルミナーを放つ瞬間を冷静に、落ち着いて、ゴズキ達を隠れて眺めながら待った。嗤いながら死体を犯し、犯しながら食う冒瀆的な様を。そしてその姿がドルミナーによって奇襲され、倒れてからゆつくりと隠れていた場所から起き上がり、

頭の裏に銃を突き付けて疾風弾を撃ち込む。三発撃ち込めば死亡する。残った睡眠中のゴズキをベルが脳を焼くように電撃を流し込んで静かに殺すのを確認して、少しだけ満足な吐息を吐き出す。今は良かった。

「これで2階はクリア、と。次は3階だな」

同じことを油断せずに繰り返せば、先ほどの様に問題なくゴズキを殺す事が出来るだろう。油断せず、慢心せず、作業的に殺す。そうして生き残り、

強くなる。もっと、体や技術、スキルだけではない。

誰でもない、俺自身の心が非道を見ても心が痛まないほどに、見ても一瞬も動揺せずに頭をぶち抜けるぐらいに、心が強くなるなんてはならない。

弱い奴に明日は来ない——崩壊世界はそういう場所なのだから。

「油断せずに確殺して行くぞ」

仲魔達にそう告げ、疾風弾の残弾を確かめながらエスカレーターを登る。

## 再生し始める世界 VII

ゴズキの動きに合わせて一気に踏み込んだ。振るわれる斧を飛び越えるように蹴り、その頭上へと飛び越えながら逆さまになって、頭上に弾丸を降らせながら飛び越え、着地した。反対側へと足を下ろす頃には頭上から疾風弾の雨を受けたゴズキが穴だらけになって消え去る瞬間だった。L&Oの弾倉を外し、同時にストレージから新しい疾風弾の詰まったマガジンを取り出し、突き刺すような手の動きで一気に装填する。その間に襲い掛かろうとしたゴズキは踏み出した一歩で体を停止させていた。

シバブーだ。神経系魔法による拘束で動きを停止させられていた。神経弾を使わずに相手の足を止める事が出来る、非常に優秀な魔法だった。やつぱり、悪魔合体を行ってスキルの継承をするとまるで使いやすさが変わってくるな、とここばかりは支配人を認めなくてはならなかった。

「結構派手に動くわね、サマナー。アクロバット好きだとは知らなかったわ」

「いや、L&O握ってるとなんか不思議とそういう気分になるんだよ……こう使うんだよー、って教えられている感じに近いとか。こういう風に使われていた感じがするとか。それに派手さならべルの方が……」

「え？」

ゴズキの心臓に腕を突っ込んで、内部から電撃を流し込んで黒焦げにしているスーツ姿のベルはある種、ホラー染みていた。ただ上着を脱ぎ捨てた、シャツだけの状態はかっこいい姐御という感じがして、実に心強いビジュアルだった。

思えば亀、ロリ、手榴弾。そんな仲魔ばかりだったのだ。

ここで大人な仲魔が増えるのは歓迎すべきことだったのかもしれない。だってどう見ても悪魔を連れている風には見えないし。というかデビルサマナーにすら見えない。今までで、コスプレロリと魚を装備した痴女とかいう集団だったのだ。漸く、なんかまとも――



じゃないな、と正気に戻る。

仲間になったのただのOLじゃねえか。ただのかつこいいOLじゃねえか。

まあ、それはそれとして、頼りになる仲魔であるのは間違いがない。なんといつても種族：魔王だ。他の悪魔とはまるで次元違いの格だ。同じレベルが相手であれば圧勝出来るだけの能力とスキルを兼ね備えているのだから、頼りになる。ぶっちゃけ、戦力的な意味ではエース級でもある。まあ、レベルが下がっているだけであの合体チャートが上がったり下がったりしたのを既に終えたような状態なのだから当然と言えば当然だ。

「ふむ……サマナーの才能はそういうモノなのかもしれないわね。《ガンスリンガー》なんでしょう？ 下手に他の武器に手を出さず、銃だけ使い続けてた方が良さそうね」

「男としちゃ後ろに居て守られている、ってのには不服を感じなくもないけど、サマナーの死は敗北でもあるしなあ……」

まあ、後ろからちまちま銃を撃っているのが正しいのだろう、というのは解る。L&Oを軽く回転させてから握り直しながら、この銃の前の持ち主の事を考える。果たして、これを使っていた人物はこの銃をどういう風に使っていたのだろうか？ なんとなくだが使っていて解るのは、相当破天荒な使い方だ、それこそ悪魔や異能者が使う様なスキル、特技に近いものがあるのを感じていた。練習すれば自分も使えるかもしれない。そんな邪な考えを抱きつつ、

ゴズキの殲滅を終わらせる。

2階、3階と殲滅すると、4階に上がってくる。ここまで来ると流石の上に居る悪魔どももそれを把握しているのか、警戒態勢を敷いてくる——というより、上の層に居る悪魔が集まっている。ゴズキを一方的に殺す相手だから集まって袋にしよう、という判断なのだろう。間違っではないない。

相手が先手を取れるのなら。

《ハニー・ビー》と《エネミーソナー》に《百太郎》の組み合わせはこういう場合、鬼畜だ。容赦なく相手の居場所をマップに表示し、そ

の上で奇襲を防ぐ事も出来る。つまり相手が慌てて此方に対して対策を取ろうとしているのが丸わかりなのだ。これほど恐ろしいアプリアもないだろう。これが俺の力だ！ と、言いたい所だが、ぶっちゃけ、ステイブーンが作ってくれなきや無力だからそんな事は絶対に言えない。

与えられた力だと自覚し、その上でそれを飼い馴らすのが重要だ。調子に乗ってはならない。戒めるのだ。自分は本当は無力である、という事実を。それはともかく、4階の更に上、5階に悪魔が固まっているのをソナーが感知していた。

「スダマ先輩の定番か。ここは一発、手加減した花火を」

『我慢できぬウー！』

「駄目そうじゃな」

「というか会話が今成立した事実には驚いたんだけど。もしかしてそこからへんに死兆石落ちてないかしら？」

「我慢できぬうー」

「ふえんな」

まあ、そうだよね。スダマ先輩に我慢とかいう概念は存在しないよな。知ってた。めんどくさいから一気に爆破処理してしまうのが一番楽だったが、これはどうもそう行かないようだった。ソナーを確認する限り、確認できる悪魔は31体、その内26体がゴズキ。となると残りがオニだろう。数はかなり多い。しかもオニがラク・ンダを習得する事実と、ゴズキがシバブーを使える事を考えたら、この数は流石に面倒だ。

シバブーからのラク・ンダラッシュで即昇天する。まあ、やっぱり、一方的に集めてぶち殺すのが一番だろうな、とは思う。まともに戦う必要はない。

ソナーで敵の固まっている場所を確認し、クールマを召喚する。これで完全に戦闘中、同時に指示できるキャパを超過するが、それはそれとして、簡単な指示を事前に出せば問題は解決する。

「重力魔法で上の階を落として落ちてきたところを纏めてドルミナーしつつ永眠させようぜ」

「ドン引きなんじゃが」

「異界化させて無い奴が悪い」

「一理あるわね」

クールマは一瞬で姿を亀形から人型へと変え、片手を腰に、もう片手を掲げる様にかっこいいポーズを決めていた。最近では登場シーンにでも凝り始めたのだろうか、こいつ。

「魔王も人間も、趣向を凝らすという意味では同類さ！ 僕としては大いに結構！ ただ戦争でこういうセメントルールを持ち出すと泥沼の殺し合いに発展して終わりが見えなくなるから気を付けよう！

僕との約束だ！」

中身は割とガチの警告だった。

召喚されたイケメンモードのクールマはグラダインを発動するとそれを放たず、素手で掴み取って圧縮させ、それを剣の形へと変形させた、重力剣を二本生み出して二刀流で掴んだ。お前、そんな事が出来たのかよ、と軽く戦慄しつつも、しっかりと仲魔達はスタンバイを完了させていた。

「スタンバイ……スタンバイ……あ、こつちこつち……そそ、そこが真下。バレてない？ バレてねえなこれ」

ここまで準備してバレないかー。まあ、異界化させて無い方が悪い。異界化させていけば簡単に壁を越えるとか階層を無視するとかできなくなるらしい。まあ俺の前にはそういう異界の惑わす効果は意味がないらしいのだけれども。

ともあれ、

やる事は簡単だ。ジェノサイドである。

ゴーサインをクールマへと出せば、悪魔達が集まっている足元、つまりは此方から見て天井を十字に重力剣で斬撃を刻み、十字架の形に圧壊させて、一瞬でフロアを破壊した。そうやって穿たれたフロアの穴に足場を失った悪魔の姿が落ちて来た。その姿をチェフエイが、クールマのポーズをパクリながらドルミナーを放つ。

精神耐性の無い連中であり、避ける場所も逃げる場所もなく、30を超える悪魔が一瞬で無力化させる。

「うわあ、チョロい」

眩きながら眠っている悪魔の姿に弾丸による攻撃を開始する。マジオンガと竜巻も同時に発生し、眠って無力化されている悪魔達を一瞬で虐殺し、Magに分解して滅ぼして行く。数秒後には折り重なるように山を築いていたゴズキとオニの姿が完全に全滅していた。その景色を眺め、軽く頭の裏を搔いた。

「……予想以上に平和に終わったんだが」

「毎度毎度ハプニングに会っても困るでしょ？　　というかそうそうハプニングなんてないわよ」

ベルの言う通りだった。だけど基本的にハプニングばかりなサマナー生活を続けていたので、こうやって何事もなく戦闘が終了するとなんというか、若干物足りない感じがある。いや、最近の生活が非常にアレだったのかもしれないが。まあ、それは今は忘れようと眩き、ハンズの復興はお金がかかりそうだなあ、と考え、レベルも上がったしうはうはだー、と言って、

「帰るか」

裏社会人生活の一步目を終わらせた。



生存者は無し。大体は犯されて死んでいるか食われて死んでいるか。そのどちらかのみだった。証拠として写真を撮って、それをそのまま見せて提出、悪魔の討伐が完了出来た所で依頼は完了だった。報酬としてマツカ、そして香と呼ばれるアイテムを一つ受け取った。香というアイテムは凄まじいもので、これを使用する事でレベルアップをせずに能力を上げる事が出来るという代物だった。個人的にはそれよりも反魂香の方が欲しかったが、それでも貴重な能力の増強手段だ。

自分よりも、アンの方が前に出るから彼女に後で使おうと思いがながら依頼を終わらせたところで、

「さて、どうやら君は中々優秀なサマナーであるらしい。その傷のな

い体が何よりも戦歴を雄弁に語っている。この悪魔の出没する業界で隠れて戦って無傷でいられる、というのはマハ系統の広範囲魔法を考えると難しい。つまりはそういうのを放たせる前に倒せるだけの實力がある事を証明する——その實力を見こみ、新たな依頼を提供したいが、どうかね？」

オニとゴズキの集団を始末した事でレベルは21にまで上がっていた。格上を数で殺しているのだから、当然と言えば当然のレベルアップだった。だがこれでレベルはオニに近くなった。更にレベルアップを加速させるなら、もっとレベルの高い悪魔を倒す必要も出てくるだろう。生き残る事には必至だし、強くなることは必須。そうなってくると当然、断る理由なんてない。

「よろしくお願いします」

その言葉を待っていた、と言わんばかりにモノクルが依頼書を引っぱって来た。それを受け取り、内容を確認する。

【シブヤ奪還作戦】

「シブヤの奪還作戦」

「然り。現在のシブヤは悪魔の巣窟となっている。特に困るのはハーピーをはじめとした妖鳥共が厄介だ。問題はレベル30の悪魔、ケライノーがシブヤ駅近辺に大量に確認されている事だ。あそこはシブヤ奪還のための拠点として利用する計画がある。ヤタガラスから結界を張れる人員を借り、シブヤ奪還のための動きを作る。その為に腕に覚えのあるサマナーやバスターを募集しているのだが……どうだね？ 興味はないかね？」

「ケライノーか……」

アプリの全書を使って情報を確認する。ケライノーのレベルは30、つまり自分たちよりも10レベル近い差のある悪魔であり、破魔と呪殺に耐性を持っている。だが射撃、衝撃、神経に対して弱点を保有している為、距離を開けて撃ち殺せば比較的安全に戦えるだろう。まあ、今回もアンの竜巻が突き刺さる相手だな、という認識だ。

魔力は高め、だが運と耐が低い悪魔だ。速さが驚異の高さを誇っているが……スク・ンダを使えばそこまで問題はないだろう。それに神

経弱点ならシバブーが良く刺さる。後は保険にクールマを出してダメージを肩代わりさせる準備をさせておけばいいだろう。

「あー……でもケライノーってジオとムド持ちかー……」

クールマはジオが効く、というか電撃弱点がある。その為、STU Nハメが通じてしまうのだ。ただ衝撃弱点である事を考えると、アンの竜巻で無双できるので結構美味しい相手なんだよなあ、と思える。まあ、クールマのダメージ肩代わりはあくまでも保険だ。既にムド等の呪殺対策はしてあるし、相手に弱点を攻められる事を考えたら結構美味しい相手だと思う。

まあ、問題はレベル差だ。レベル差の影響で苦勞するかもしれないって所だ。だけどその場合は味方の支援と敵の妨害に回れば良いし、そこまで悩む事でもないか、と思う。まあ、つまり、

「いや、行けるな……よろしく頼む」

「解った。作戦は明日になる。9時に再びここに来ると良い。それまでは別れを惜しむか、或いは準備をすると良い」

「了解」

明日の仕事を予約したところで離れて、軽く背を伸ばす。最終的な判断は電撃と呪殺耐性を持つベルがいる事が決定打だった。ケライノーは個体によって電撃無効化を持っているのとそうではないのがあるらしいが、ベルにはオニを狩った事でレベルが上がり、電撃ガードキルが備わった。これで吸収ではない限り、誰が相手でもマハジオンガとジオダインで応戦する事が出来る。何より、ムドとジオ、或いはジオンガを持つケライノーを相手に最小限のダメージで立ち回れるというのが良かった。

やはり、魔王という種族は恐ろしいほどに優秀だ。何せ、耐性と無効化はあっても、弱点が一つもないのだから。ベルの様にガードキルスキルか、或いは万能魔法でもなければ戦うのは難しいだろう。

そしてそういうのが敵として現れた場合、現状だと即殺されるといふ事実が実に恐ろしい。

やはり強くならなくてはならない。

もつとだ、もつと力が必要だ。更に強くなる必要がある。心も、体

も。技も磨かなくてはならない。L&Oを握っていると、そういう技術が使えてくるような、銃そのものに染みついた業を振るえるような気がしてくる。だからもつと、もつと使い込まなくてはならない。俺には油断も慢心も、安心もしている時間もない。

もつと悪魔を殺して、強くなり続けなくては――。

「リユージ」

仮事務所から少し離れた場所で呆けていたのを、アンの声で正気に戻る。両手で顔を抑え込まれ、視線を合わせられている。

「そつちはダメ」

真剣に、普段はつつかえる様な言葉も、はつきりとした声で言った。真剣に、そして想う気持ちがあんから伝わってくる。

「ソレは駄目」

言い聞かせるように、教える様に、心配する様に、叱る様に、そういう風にアンは言葉を放った。しっかりと、迷う事無く。目と目を合わせ、言葉が届くようにそう言われ、少しだけ呆然としたが、ふう、と軽く息を吐いた。

「……そうだな、戦闘で脳味噌使って、ちよつと疲れたんだ。今日は何もせず、戻って休もう」

「ん……それが……一番」

満足そうに呟いた。しかし今、どきくさで名前を呼ばれた気がする。頬が少し緩むのを感じつつ、視線を反らし、背筋を伸ばした。

……ちよつとだけ、自分を追い込みすぎたかもしれない。世界は崩壊しているけど、ゆつくり世界は消えているのだが……それでも1年や2年で世界は完全崩壊しない。その前に次の扉を見つけてしまう方が早いだろう。そして本来、レベルはもつと時間をかけて上がるものなのだ……急いだ所で、本当の強さは変わらない。

「よし！ 変な事を考えるのは甘いもんが足りないからだ！ 帰ってパフェでも支配人に作らせようぜ！」

「楽しみ」

『閣下の作るパフェ……ね。流石にちよつと興味あるわね』

悪魔王が作るパフェとか絶対オークションで売れる気がする。と

いかビジュアルを想像するだけで笑えて来る。ああ、そうだ、暗い事を考える必要はない。もっと楽しい事を考えて、生きている方が百倍心に健全だ。少なくとも、アンがいる限りはそう簡単にどっか、溺れる様な事はないだろうと思う。

振り返り、アンの顔を見て、彼女の存在に感謝しつつステイブンのバーへと戻る事にする。

◆

軽くマーケットを見て回ってからステイブンのバーに帰還すると、そこにははつきりとした人の姿がカウンター席に増えていた。前までは半透明と言える希薄さだったが、今では明確に存在している、と呼べる人の姿がある。赤いコートを着た、イケオジという言葉が似合いそうな中年男性は白と銀の間とも呼べる髪色をしており、その背には巨大な剣を背負っている他、銃を装備している気配がする。

凄まじいまでの魔力をその体内に隠し持っているのを感じつつ、ストロベリーサンデーをカウンター席で食っているのを目撃してしまった。

「帰って来て早々これかよ……」

「安心……安定……」

「Hum?」

アンと肩から力を抜いて並んで店内に戻ってくると、サンデーを食べていた男が此方へと振り返った。少しだけ髭のはやしたイケオジはH m m、とどこことなくアメリカンな英語を発音しながら此方とアンを観察し、両手でカメラのフレームを作っていた。その間に恒例の《アナライズ》を反射的に使う。

デビルバスター ダンテ Level 99

「お、バグかな」

声を震わせながらそんな言葉を何とか吐き出した。いや、だって、レベル99ってなんだよ。超人があれとかこれとか、そういう次元を超えている。明らかにカウントストップとかかかるとか綺麗な数字で



はないか。へえ、人類って頑張ればそんなに強くなれるんだね、とか  
言いたかったけどまるで笑えない。いや、この数字絶対におかしいだ  
ろう、と思っていると、

「お、ひ……きゃ」

片手を上げてアンが挨拶していた。それを見てダンテという男は  
Hey、と声を零した。

「なんか違うなあ、と思っていたが新手のイメージチェンジか？ そ  
れとも兄妹かなにかか？ ま、悪魔なんてそんなもんか。Hey！

Waiter！ その坊主の奢りでこの……Ah……魔界スト  
ロベリーサンデーってのを頼むぜ」

「ごめん、ツツコミどころが多すぎるから作戦会議して良い？」

「良いぜ、10分待つてやる」

「ゴミ箱……か、棺桶……？」

アンの続くような言葉に、ダンテがウイंकを送ってくる。それに  
無言でアンがサムズアップを返した。魔王ベルゼブブとのコネク  
ションを持つていたり、レベル99のデビルバスターとコネクション  
があったり、本当にこの子、一体どこ出身なのが非常に気になっ  
てくるが、そこが問題ではない。

隅っこの方へと逃亡し、アプリ内部の悪魔と緊急会議を開く。

「どうしよう。ツツコミどころ多すぎてどう接すれば良いか解らな  
い」

『明らかに人類の上限を突破しているタイプだよね！ 残念！ 僕ら  
の旅はここで終わる！』

「そこ、勝手に終わらせるな。終わりません。まだ終わらせません。  
俺の旅は続くのだからここで死にたくないよお……ってことで！ はい

！ 次！ 頼りになる姐御どうぞ！」

『最強の悪魔狩人デビルバスターって言われるダンテ、ね。生身で魔界に乗り込んで  
ターゲットを殺しに来るぐらいにはアクティブよ、アレ。業界ではか  
なりの有名人よ。悪魔でさえ泣き出すって。悪魔にとっての死神と  
か。良い年してくせに完全にDQNだとか』

評価がばろくそである。というか聞けば聞くほど絶望的なお方な

のですが。大丈夫ですかね、俺の命とか。そんな事を考えていると、チエフエイの言葉が続き、

『まあ、アレ大丈夫じゃろ。なんか馬鹿っぽさとイケメンっぽさが亀に近い気がするし』

『我が真名はメガフライゴン』

スダマ先輩の一言でタイムは終了した。そうか、イケメン系なら大丈夫かなあ、なんてことを考え、タイムを終わらせてから振り返り、とりあえずサムズアップをイケオジダンテに向けてみた。返ってくるのはチャーミングなスマイルだった。

「駄目だ、男という生物として絶対に勝てる気がしない……もう死ぬしかねえなこれ……」

『サマナー！ サマナー！』

DDSから仲魔のコールが聞こえる。

「いや、だってアレを見るよ」

スマイルの破壊力に胸を押さえて俯いていた視線を持ち上げて、再びダンテへと向かって視線を向ければ、いつの間にか口元に一凜の薔薇を啜っていた。どこからどう見ても馬鹿な光景なのに、ただしイケメンに限る、の如くの似合いよう。

「アレは俺がやったら絶対に滑る」

『そうね』

『そうじゃな』

『そうだね！』

仲魔からの追撃で心が折れそう。思わず膝を折りそうな所で、ダンテがとんとんとん、とテーブルの横を叩いた。

「まあ、こっちにこいよ坊主。お前の事を待っていたんだしな」

「うっす……」

ふらふらと体を揺らしながらダンテの隣の席に座った。そうやって腰を下ろすと、がしり、と肩を掴まれた。あ、死んだな……と心の中で確信していると、目の前にストロベリーサンデーが運ばれてきた。それを見てから、横のダンテを見た。

「坊主、それはお前の金で頼んだもんだ——喰え」

「寧ろ俺が食べられなかったら驚きだよ」

「その意気だ坊主」

意味が解らない。だけどストロベリーサンデーは美味しく、厨房から隠れながら覗き込んでくる支配人の表情は満足げだった。あの悪魔王、どんどん自分の方向性見失ってない？ そんな事を考えながらストロベリーサンデーを食べ進めた。なんとなくだがこの横のイケオジ、なんというか……C―L寄りの人物だな、というのを感じ取った。

そもそもこのバーに居る時点で危険人物ではないのだろう。その考えに至った所で少しだけ、肩から力を抜ける。はあ、もう甘いものだけ食べて脳味噌空っぽにしようとしたところで、

「で、お前後ろのかわいい子ちゃんの事絶対好きだよな？ どこまで行った？ もうベッドまで行った？ え、もしかして童貞？ マジかよ……よし、俺が女を口説く方法を教えてやるよ」

その発言にストロベリーサンデーを思いつきり嘔き出した。

どうやら、バーにまた傍迷惑な奴が増えたようです。

安息の場所さえ奪われて行くような胃の痛さを感じ始めていた。

## 再生し始める世界 VIII

「正直へこむわー……」

自室のベッドに倒れ込んだ。新しい無敵に近い実力の持ち主の住人、ダンテ。なんと表現すべきか——そう、善人だ。C—Lで分類できる善人。なんか普通に良い人なのだ。言動が破天荒で一切遠慮がないけど。だからこそへこむ、というか負けた感じが凄く強い。切り口が滅茶苦茶フランクで常識つてなに？ つて言いたくなるやり方だった。だけど確かに、印象付けるのどずかずか踏み込んでくるやり口としては正しかった。そうでもなければ寄ろうとも思わないし。ダンテは自分が超越者で、そして恐れられる存在だと理解しているのだ。

そして一度話してみれば普通に面白い人だった。悪魔に対する殺意は人一倍だったが、それでも話してくる内容は面白かった。何が気に入られたのかはわからないが、女の口説きとか勝手に教えられるのだ。

ちよくちよくベルト……というよりはルーチエ&オンブラへと視線が向かっていたが、欲しいのだろうか？ メインウエポンなのでちよつと困る。

そんな事を考えながら、自室のベッドに倒れ込んでいた。かつこよくて強くて、それでいて精神的にもイケメン。勝てる要素が欠片もないのだ。いや、そりゃあ比べるのが馬鹿々々しいというのは解るが、好きな子の前で格好良いままでもいい男の子としては、こう、中々に複雑なものがあるのだ。だって身近にいるイケメンとかアレ、絶対に比較対象じゃないか。

言葉にせざとも頭の裏でどうしても比較してしまうのだ、人間という生き物は。もう、出て来た時点で勝てない。勝てるわけがないのだ。だからベッドに倒れ込んで、枕に顔を押し付けて、そして無言で何とか心を持ち直している。まあ、しばらくは適当にうだうだしている。無論、アンにこんな姿は見せたくはないので、部屋の外で鳩と遊んでもらっている。アンも鳩には恨みがあるらしく、つつい荒々し

く遊んでしまう。

まあ、遊び相手がいるのは良い事だ。しばらくは顔を見せられそうにない。

割と真面目に落ち込んでいる。

「はあー……いいや、少し寝て起きたらメンタルリセットして頑張るかー……」

落ち込んでもまた立ち上がればいいのだから。だからはあ、と溜息を吐いて脳味噌を空っぽにする。自分が底辺であるという事を脳味噌に刻んで、そして落ち着かせる。そう、自分は底辺の人間だ。人を殺して、見捨てて、そして一人だけ生き延びようとした。だから何も変わっていない。勝手に自分に自信を無くしているだけだ。そう思うと少しだけ落ち着く。

『のう、サマナー。少し、話を良いじやろうか？』

チエフェイのそんな言葉に眠ろうとしていた顔を持ち上げていた。いいぞ、と呟き返すが、

『いや、真面目な話じゃから召喚して話したいんじや』

「ん……？」

なんと言うべきか、珍しくチエフェイのトーンが真面目な物だった。基本的にオチとかギャグを担当しているチエフェイのその態度に、倒していた体を持ち上げながら、DDSからチエフェイを召喚する。召喚されたチエフェイはそのまま、

「……あまり聞かれたくない話じゃし、一時的にロックしてくれても良いかのう？ オフレコという奴じや」

「お前その見た目でオフレコとか横文字を結構使うよな……まあ、いいけどさ……」

『えー』

クールマの声が聞こえたが、それを無視してDDSから一時的に観測を遮断する。問題はない。反逆は悪魔との契約で縛られているし、聞こえていない状態でも悪魔を召喚することは出来る。何より、チエフェイから感じるのは真面目な気配で、そして反逆とかそういうモノは感じなかった。だから起き上がり、ベッドに座り直しながら、チエ

フエイへと視線を向けた。

「んで、どうしたんだ。改まって。契約の解除は正直、めちやくちや困るから説得させて貰うけど」

「いや、妾としてもこんな楽しい居場所を捨てる予定はない。細かい不満はそれは色々とありもするんじゃないが、それはそれとして、サマナーと今の待遇に妾は十二分満足しておるんじゃないやからな。だけど問題はそういう所じゃないんじゃないよ」

チエフエイはそう言うと言い、と言葉を置いて、間を置く。

「妾、サマナーの人修羅への想い知つとるぞ」

「よし、死のうか」

「サマナー！ 待て待て待て！」

ストレージからミニガンを引き抜こうとしたら全力でチエフエイに止められた。だがこの恥ずかしさは誰にも知られたくなかった。こうなったらやはりチエフエイを殺すべきではないか？ と即座にデストロイ思考が浮かび上がってくる。やはり、世紀末マインド化している自分を感じた。だがチエフエイは此方の動きを制すると、

「妾は欲望を糧とする悪魔じゃから！ だから人間の欲望は特に良く解るんじゃないよ。アレが欲しい、これが欲しい。アレが要る。アレが――……という感じじゃない。まあ、だから他人へと向ける感情とかも妾には良く伝わるんじゃないよ。サマナー、結構な頻度でラブラブ光線を送ってるし」

「ラブラブ光線止めろ。ほんと死にたくなるから止めろ」

ミニガンを捨てて頭を抱えて蹲る。そんなに解りやすい思いだったのだろうか？ 自分では結構うまく隠していたつもりだったのだが。ああ、でも、考えればアンには優しい所ばかりを見せていたなあ、と思う。明らかに他の連中とは対応が丸つきり違うし、これは見る奴がみれば一瞬で解るよな、と思えた。ああ、やだ、死にたい。自分は本当に大した人間じゃないのだ。そも、この懸想ですら分不相応だ。

「それじゃ、それ」

「ん？」

「いや、口には出しておらぬが、サマナーの感情の変動とかは妾はよー

く伝わってくるんじゃないよ。契約してるから。というかおやつ代わりにちよくちよく食べてるから」

「お前……」

驚愕の新事実に慄いている中で、チエフエイが言ってきた。

「サマナー、貴様は自己評価が低すぎる。というか欲が無さ過ぎ。今も膨れそうだった欲望が一瞬で霧散したし」

自己評価が低い、とはチエフエイが言う。だがそれは違うと断言でききる。

「いや、俺はそういうもんだらう」

「いや、だからそれは過小評価し過ぎじゃよ。というかそれがいかん。その考え方はサマナーを殺しておる。いや、過小評価ではないな、これは卑屈になり過ぎてるとでも言うべきじゃらうな」

チエフエイの言いたい事は解る。だがそれはそれ、これはこれ、だ。俺が事実として多くの人間を見捨てたのは本当の事だ。そんな奴を普通だとは認めてはならない。それを認めてしまったら、自分の中で何か、大切なものが、ラインを超えてしまいそうな気がするのだ。

「別に妾は自分の過小評価はある点では悪くはないと思っている。そういう心の守り方だってある。じゃがサマナーのそれは度が過ぎるんじゃないよ。毒となって自分自身を苦しめているのに、気付いておるじやらう?」

チエフエイに言われて、自分の胸を押さえた。突発的に感じる狭心症を患っていた——世界が崩壊したその日から。だけどその痛みを肯定していた。これは俺が背負うべき痛みなのだから。俺が、俺だと自覚する為に必要な痛みだった。痛みを忘れては獣になってしまふ。悪魔と同じ存在になってしまふ。だから、痛みで俺が屑であるという事実を忘れない様にしないでほしいのだ。だから俺はこれを肯定していた。だがチエフエイは近づきながら、頭を横に振った。「サマナーのそれは必要のない罪悪感じゃ。妾しかたぶん、これ、言わんじやらうから断言させてもらうぞ? サマナーのその感情も考えも罪悪感も、全部余分じゃ」

「そうだと解っていても、俺が誰かを犠牲にして生き残ったという事

実を忘れちゃならないんだよ……」

「違う、そうじゃないんじゃないよ、サマナー。サマナーはそれを重く受け止め過ぎているんじゃないよ。思い詰めていると言える状態で。じゃからダメなんじゃないよ。それを受け止められるのも自覚するのも良い。だがそれが心身に影響を与える度合いで思い詰める必要はないんじゃないよ」

そう言われても困る、とチエフェイの姿を見ながら苦笑した。珍しく、本当に珍しくチエフェイは真面目だった。いや、そもそもあの普段のコミカルな姿はキャラづくりの一環だ。だとしたらこうやって真面目に話せるほうが素なのかもしれない。そう思うと真面目に心配されているんだな、と解る。だがそこはどうしようもない。忘れてはならないし、戒めなくてはならない。

「あー……だからそういう所がダメなんじゃないよ……」

呆れながら言うチエフェイは良いか、と言葉を置きながらビシ、と指を此方へと向けて突きつけた。

「サマナーよ、汝の心は弱い」

「……おう」

「だから他人と比較し、勝手に落ち込む。好いた女にアピールする事も出来ぬし、戒めると考えながら心を痛めている。サマナーは器用な男ではないのは解っている。だからこそ愚直に行動してしまうのだろう。これでは妾のサマナーが壊れてしまうではないか……」

そう言うときエフェイは此方に近づき、そしてベッドに腰掛ける此方の前に立つと、両手を腰に当て、そして胸を張った。

「じゃからこの妾が情けないサマナーに自信を付けさせてやろう。サマナーがそこまで卑屈になれるのはサマナーが男として劣っていると感じているからじゃ。つまり、サマナーは自分が雄として魅力に欠けていると感じているのじゃろ！」

「うん……うん？」

なんか変な方向に今、流れてない？ そう思うと、チエフェイが股の間に座り込んできた。体をジャストフィットさせるような背の小さはすっぽりと体に包まれる様に収まる。その中で、狐面を軽くズ



ラした和服の少女はその状態から見上げて来た。

「妾を抱け、サマナー。度胸を付けてやろう」

「何言ってるんだお前」

両手で拳を作って、それをチエフェイの頭に当てて両側からぐりぐりと抑え込むと、チエフェイが軽く悲鳴を零すが、逃げる様子は見せずに三尾の尻尾をぐるり、と此方の体に回して押さえつけて来た。本格的に逃げる気はなく、ある程度本気であるのが伝わってくる。

「痛い！ サマナー痛い！ めっちゃ痛い！ 妾本気じゃから！ だから解放して！ マジ解放プリーズじゃの!!」

謝りもせずに言い続けている手前、本気なのだろう。ゆっくりと手を下ろし、チエフェイを見下ろした。チエフェイはその視線を受け、溜息を吐いた。

「良いか、サマナー。こんな状況でそういう行動を取るから童貞臭いんじゃない」

「心へのダイレクトアタックは止めて」

「いや、止めぬわ。サマナーは無駄に卑屈になっておる。それはサマナーが自分に自信がないからじゃ。そういうのはちよつとした遊びや余裕を覚えればすぐに生えて来るものよ。無駄に無駄を装っていないで、少しは遊びを覚えた方が良いで、サマナーは。だから仲魔の中で一番抵抗がなく、この手に詳しい妾が教えよう」

「俺、別に無欲でも何でもないだろう!？」

「いや、サマナーは無欲じゃぞ。結局のところ、何を求めるにしても必要だから欲しいという最低限の欲しか見せておらん。僧侶でもなんでもないんじゃないから、そこまで我慢すると逆に毒じゃよ、毒」

断言される、良く見られている言葉に黙るしかなかった。チエフェイはそのまま、

「安心せい、サマナー。妾も別に悪い事をする、というわけではない。ただ単純にサマナーの事を思ってる事よ」

そう言うのとチエフェイの服装から羽織が消える。薄手の和服だけの状態になり、軽く肩を見せる様に露出させた。

「……第一、初めて相手をするとき、下手だと言われたくはないじゃろ

う？ そこら辺の知識を妾が座学を含め教えるつもりじゃが」

「うぐつ……」

そう言われると弱い。確かに性知識なんて全くない童貞であるのは事実だし、初めての時にやーい、へたくそー、って言われでもしたら滅茶苦茶死ぬる。というか世界とかどうでもいいから首を吊る自信が自分にはあった。果たして、それをチエフエイが理解しているかどうかは別として、チエフエイは此方が迷っている間に和服を更にはだけさせていた。

腰の帯を完全に解き、和服を完全にはだけさせて胸と下半身が露出していた。服を着ている、というよりは袖だけを通しているという状態だった。上から覗き込めば起伏の少ないチエフエイの体が見えた。それを見て、恥ずかしくなり、軽く視線を反らすが、

「ほれ、サマナーよ。それでは勉強にならないじゃろうが。猿の様に食い入るように見ろとは言わんが、自分から脱いだ女から目を反らすのは女に恥をかかせることじゃぞ？ そんな風に目をそらさずに、妾が見せているのだから、もつと良く見ると良い。そして見るという事そのものに慣れるんじゃぞ？」

「無理を言わないでくれよ……」

これでも結構限界なんだけどなあ、と呟いていると、チエフエイが此方の手を取り、それを彼女の体へと寄せて来た。

「女を自らの手で喘がせ、屈服させるといふのは征服感を生み出す行いじゃよ、サマナー。少なくともそれは間違いなくサマナーのガス抜きにも自信にもつながらるからちゃんと言っておくんじゃよ？ 良し、まずは愛撫の仕方からじゃ。前戯は大事じゃからちゃんと恥ずかしがらずに見て、聞くんじゃよ？」

「お、おう」

「大丈夫かのお、これで……」

そう言いながらも重ねた手をチエフエイは自分の体に触れさせた。僅かに熱を持った未成熟な体の、ぷにぷにとした肌の感触が指に伝わってくる。生まれて初めて、女の裸の体に触れているが、まさか最初に触れる事になるのが悪魔になろうとは思ひもしなかった。何故

か、順調に道を踏み外しているという実感があつた。

この状態でチエフエイは軽く腰を間にズラし、背中を胸に寄り掛からせるようにしながら、胸から股を、そして秘所が見える様に体を少しだけ動かした。重ねられた手は胸から腹、そして秘所へと滑る様に移されて行く。

「基本的に解りやすい性感帯は胸や陰核、膣などになるが、最初はいきなり膣に指を入れようとしたりしてはならんからの？ 濡れていない状態で膣に触れた所で傷をつけるだけじゃからな。それにいきなり胸に触れても刺激は薄いんじゃないぞ？」

ツツコミを入れたかつたが、話の内容は真面目だった為、そして同時にチエフエイの艶のある雰囲気に対し気圧され、何も言い返す事が出来ずに軽く頷いてしまった。ただやはり、

「これ、本当に自信に繋がるのか？ 悪い遊びを覚えてるようにな……」

「何が悪い遊びじゃ。そりゃあ世界の再生に一切関係のないものではないが、だからこそそれが必要なんじゃないよ」

「どういう事だよ」

「楽しいじゃろう？ そういう事じゃよ」

何を言っているんだこいつ、とは思いつつも、チエフエイの体を伝うように流す指の動きは、まるで磁石で吸いつけられたように彼女の肌から離れない。決して、チエフエイが強く手を押さえつけている訳ではない。チエフエイの手は此方の手の甲に添える様に重ねられているだけだ。押し飛ばせばいいのか、受け入れればいいのか、その狭間でチエフエイに抗えず、判断がつかず、流されるままに触れているだけだった。

「……まあ、いいか」

「そうそう、深く考えんで良いんじゃないよ。そこまで意味のある事じゃないからの」

腰に絡みついて尻尾が体を登って行き、ふんわりと体を包むのを感じる。後ろからチエフエイを抱えている筈なのに、尻尾の柔らか

さに包まれ、抱かれている様な気分だった。両手を持ち上げたチエフエイはそれを首にぶら下げる様に回し、隠す事無く体を晒した。

「前戯は大事じゃぞ？ 入念にやっておかんと痛いだけじゃからな。妾の体が少しずつ火照ってきているのが解るかの？ 性感帯を刺激しなくても、その気があればこういう風に撫でる様に触るだけでも興奮できるように女の体は出来ておるからな。ん……男の体よりも遥かに感じやすく出来ておるのじゃからな」

チエフエイの言う通り、指先から感じる熱は少しずつ、指を伝わって手に伝わってくる。それを感じる為にも指先だけではなく、掌全体をチエフエイへと押し付けながら体の表面を撫でる。戦闘した場合、は恐ろしいほどに耐える肉体が、手の中では柔らかく感じられた。

「ん、良いぞサマナー……焦ってはならんぞ？ ゆっくり丁寧に高めて行くのじゃ。妾は感じるのが早いから良いが……他の女にはもつと時間をかけるのじゃぞ？ さ、今度は淫芽を刺激する方法を教えてやろう」

そう言つて、楽しそうにチエフエイは声を零した。首にかけていた片手を下ろすと此方の手を掴み、チエフエイの下腹部へと伸ばされる。隠されていない、毛もない子供の様な秘部を恥ずかしがるどころか興奮する様に露出しながら、幼い割れ目の頂点、その付近の肉を押し、撫で、少しだけ力を籠める様にマッサージしながら、その下に隠れているクリトリスを勃起させる。

実際にこうやって見るのは初めてだが、不思議と焦る事がないのは、目の前の姿に不釣り合いな言葉を話す悪魔のおかげだろうか？

「見えるかの？ 非常に刺激が強く、勃起していない状態でも快楽を感じられるのが女の陰核じゃ。だから直接接触せず、その周りを刺激するだけでも十分興奮するんじゃ」

耳元に囁くようにチエフエイが首を引っ張り、教えてくる。何時もとはまるで違う雰囲気になしただけドキリとしながらも、

それから一時間、じつくりとチエフエイの体に触れ、女の体に触れる、という事に慣らされた。

曰く、

一日、二日程度で女の扱い方は学べるものではないらしい。最初はゆっくり前戯を覚え、それから交わりを覚える、との事。即ち本番はなし。ここまでやって。

脱童貞の道は険しかった。

◆

一夜が明けた。

「それ、君が求めていた物だ。受け取りたまえ」

そう言つてステイブンがストレージに新しく追加した装備を確認する。ごっそりとミニミ、SMG、ライフルとか幾つかの銃、バイク、それに召喚機まで消えていた。どうやらそれらをパーツとして使用したらしい。だがその結果、一つの兵器が生み出された。ストレージに登録されている名称は《ガンナーズブルーム》だった。そう、無茶ブリとネタで請求した道具が、本当に作成されてしまったのだ。

「嘘だろお前……」

「いいや、現実だとも。何より良い息抜きになってくれた。おかげで今夜には《アンチアナライザー》を完成させられそうだとも。すまないが四文字を連れて歩くのはまた次回になりそうだ」

「いや、まあ、作つて貰えただけでも感激もんだし」

ストレージから引き抜いたブツは2メートルを超える巨体をしていた。凄まじいまでの重量を誇るが、手放せば自動的に浮かび上がり、横に待機する様に待っている。無骨だが洗練されたフォルムに、足を乗せられるだけの横幅が存在する、まるで鈍器のような分厚さ。まさに、銃と表現できる領域を超えたモンスターマシンだった。片手でぎりぎりを持ち上げられる重量のそれを掴み、軽く振り回す。その動きに答える様に強風がブルームによって殴り飛ばされた。

「フレームには余ったトラペゾヘドロンを使っているから、既存の物質で破壊出来るものはないと思うね。そのまま、鈍器としても扱える。反重力ドライブを投入したおかげでおよそ20メートル程浮かび上がって飛行する機能を追加出来た。やはりデモニカスーツは参

照すべき技術の塊だったな……」

また意味の解らない事を言っているが、それを無視して《箒》を振り回す。鉄の塊は反重力ドライブの影響で、Magを食わせれば羽の様な軽さで振り回せ、それを起点に倒立して反対側へと乗り越え、回転させながらハンマーの様に振るえ、そして指が吸い付くようにグリップとトリガーへと惹かれる。

ルーチェ&オンブラと同じだ。手に握れば自然と馴染み、使い方が解ってくる。手に馴染む逸品だ。これは良い品だ。迷う事無く断言できる。それに空を飛べるといふのはかなりアドバンテージが取れる。飛行する悪魔に対して此方も空から射撃攻撃を行えるという事になる。実際の運用には戦闘を経験する必要があるが――。

「Hey! 面白そうな玩具を持つてるじゃん」

「シツシツ! 俺の玩具だから!」

「おいおい、女の口説き方を伝授してやっただろ? 昨日。な、だからちよつと遊ばせてくれよそれで」

新しく手に入れた《箒》で心をわくわくとさせていると、馴れ馴れしくダンテが肩に手を回し、目をキラキラさせながら《箒》に視線を向けていた。めっちゃやくちや目をキラキラさせている。なんというか、新作のゲームの発売を目撃した中学生みたいな目だ。だがダメだ、《箒》を抱いて逃げ出しながら、ステイブンの裏へと回り込み、アンが振り回して遊んでいた鳩を回収し、

「鳩で遊んでいいから!」

「ホワイトスターをやるからよ、遊ばせてくれない? 1時間だけ!」  
「ダンテさん顔がジヤイアンみたいだもん! 絶対遊んでる途中でぶっ壊すつて!」

「ああ、常習犯だぜ!」

だから信用出来ねえつつてんだよ。

無言で鳩をダンテの方へと投げ捨てれば、それをキャッチしたダンテが神聖四文字ヌンチャクなる新しい奥義に開眼する。ほんと、イケメンは何でもかっこよく決めてくれる……そんな事を考えながらも少しは前よりも嫉妬せずにいられるのは、なぜだろうか。

認めてくれる、心配してくれる、解ってくれる仲間がいるからだろうか。

## 再生し始める世界 IX

「ほうー！ もう来たかね！ 時間前に来るとは中々の日本人的社畜精神を持っているようだ。そのスペースに大体の参加者が揃っている。面通しを行っておくとよい。それと、そこでは何やら怪しげな商人が怪しげな商品を買っている……マツカに余裕があるのであれば、戦いの前に消耗品を購入しておくのも良いだろう」

朝、時間前に集合場所に集まればそんな事をあのモノクルの受付に言われた。非常に遺憾である。日本人として、或いは社会人として時間前行動は非常に重要なのだと思うのだが。まあ、それはともかく、ダンテがホーリー・ゴッド・ヌンチャクで遊んでいる間に逃亡し、こうやってシブヤ解放に向けた集合に来た。

示されたスペースには既に30人を超えるサマナーやバスターの姿が見える。今回はまだステイブンが《アナライズジャマー》を完成させていない為、無論、四文字は連れてきていない。まあ、シブヤが終わる頃には完成させているだろう、との言葉を信じる事にする。実際、回復に特化した仲魔は鳩が使用不可能なら即座に準備したい所だったからだ。テトラカーン、マカラカーンを使える仲魔が一人いるだけでだいぶ状況は変わってくる。

それがいない間は何とか道具や他の仲魔で乗り越える。それはそれとして、さっそく集団に接近し、軽く見渡す様にアナライズしつつ、責任者を探すと、防弾チョッキにゴーグル、そしてアサルトライフルを装備した25レベルの男が前に出て来た。その下に来ている服装は……テレビで見た、自衛官の服装の様に見える。

「や、君も作戦に参加してくれるサマナーかな？ 私はハギオ軍曹だ。今回はシブヤ解放作戦に協力していただき、誠に感謝する」

「あ、どうも。俺が如月竜二で、こっちは仲魔のアン」

最近、サマナーは舐められたら終わりだ、というのが解って来た。本当に尊敬する人間以外には特に敬語を向ける必要はないというのもしが解って来た。なんというか、サマナーやデビルバスターは力を持っている。だから下手に出ていると、舐められて利用されると



「どうか、使いつぶされるといふか、そういうケースがあるらしい。なのでもうちよいダンテを見習って、言葉遣いを最近、変える事を意識している部分はある。なので、まずはその一歩。」

「もうちよい、自分に自信を持てるように。」

「よろ……しく……」

敬礼を取った自衛官？ が手を前に出し、握手をしてくれる。それに応えながらも、少しだけ、あつさりとした対応にちよつと、困惑していた。なんとというか、と、言葉を零しながら握手したまま、

「もうちよつと下に見られるとかそういうのがあるかと思っただけど」

「うん？ ああ、確かに若いと舐められる場合もあるね。だけど位階が上がってくるとそこらへん、デリケートな問題だし、見た目では性能とかを測れなくなってくるからね……。ほら、あそこを見てごらん」

ハギオ軍曹が集団の中で異彩を放つ姿をしている一人を指さした。モヒカンヘルム、禪、そして天使の翼を背中に装備している上で乳首にシールという恰好だった。正直、視界にすら入れたくないレベルの変態なのだが、

「モヒカンは物理高揚、禪は不屈の闘志に呪殺無効、翼は破魔吸収に自己継続回復効果、そして乳首シールは電撃無効化が」

「クツソ優秀なんですけど」

見た目はどこからどう見ても不思議の国のキチガイといふか、精神病院から脱走してきたの君？ とか言いたくなる恰好をしている。ちなみに丸太を肩の上に担いでいるので、たぶんあれが武器らしい。「うん……ほら、我々が装備する防具って概念基準じゃないか？ だから見た目だけじゃどう足掻いても強さは測れないんだ。若返りの薬や加齢の薬、性転換の薬とか、そういうのは割と簡単に手に入る世の中だしね……」

自分の月光館学園制服もステイブンの手によって概念加工が施されている。そのおかげで斬撃と射撃と火炎に対する耐性を付与されている。概念によって姿には関係なく力を発揮するのが悪魔世界

の装備品だ。とはいえ……流石にそんな薬があるのは初めて聞いた。  
「ええ……そんな薬があるのか……」

「うーん、その物言いはやっぱり業界の新人かな？ 最近は急速にレベル上がる子もいるし……君もこの崩壊でレベルが上がったクチだろう？ 少し組織や基本的な悪魔業界の話、しておこうかい？ まだ時間があるし」

「頼みます」

素直に聞く事にする。自分が悪魔の世界へと踏み入ってからまだそんなに時間が経過していない。ルールや常識に関してはほとんど知らないと言っても良いのだから。自分が知っているのは基本的な情報と戦う為の部分だけで、認識とかは全く知らない為、ありがたい申し出だった。それを受け、ハギオ軍曹は良し来た、と言った。

「知つての通り、悪魔関係の裏世界は死亡率が滅茶苦茶高い。踏み込んだ人間の内7割がレベル10になる前に死亡する程の死亡率の高さだ。まあ、一番弱い悪魔を探したところで2か3レベルだからな。普通の人間でも1、アスリートレベルで鍛えていてもまだ1だ。軍人にでもならなきや2レベルに到達する事はないしな、だから普通に死ぬのが当たり前だ……これはいいよな？」

その言葉に頷く。

「だから大体10レベルになる頃には大体見た目で判断せず、能力や気配で判断するってのが基本になってくる。ここに来るまでは普通の環境では3年ぐらいはかかる……まあ、なんか知らないけど今の状況、どうにも異常にレベルが上がりやすくなっているらしく、数年に1回レベルが上がれば良い方だったんだけどね……この上がりが早いのと、上限が高いのを才能って風に呼んでいたりもした」

「それが今はない、と」

「うん。まるでそんなルールがなくなってしまったかの様にね。まあ、世界が崩壊しているんだから何があっても不思議じゃないんだけど。けどそんな事で基本的にレベルが20に届く人ってのは見た目で判断しない、まず最初にアナライズする、もしくはアナライズ以外に実力を測る手段を用意しているものだ」

ああ、そう言えばある程度の実力があれば潜在魔力かなんかで大体の実力が測れる、とは聞いていた気がする。

そもそも見ただけで《アナライズ》が出来るのもステイブンのアプリがあるおかげと、それを即座に確認できる片眼鏡型ARディスプレイがあるおかげだ。ただ、これを保有しているのは自分だけだ。他の人たちはもっと旧式のアナライズ方法を使用する必要がある。そう考えるとやはり、何か鍛えてるのだろう、調べる方法を。そう考えると……まあ、常識なのだろうか？ 普通に見られるのは。

「まあ、この業界、必要以上に派閥とか主義とかあるからね。そこらへん、藪を突くと無駄に抗争とかに発展する可能性もあるから、必要以上で喧嘩を売ったりする事には慎重だったりするつても事実だけどね……ラノベみたいなの初心者歓迎！ みたいなのはないよ……？」

「あ、そうなのか」

「うん。リアルはもっとハードだからね。なるべくミスや汚点になる様な事はしたくない」

そう言ってから二人で丸太を装備した禪モヒカンの乳首シールを見た。その視線を受けたモヒカンが背中の中の羽をパタパタして数センチ浮かび上がりながら見事なホバー移動で周りから避けられ始める。

「……まあ、偶にフィクションを超えたフィクションに出会う事もあるけど……そういうわけだ。纏まりのない連中ばかりの世界だから無理に指揮をしようとはしないし、必要以上に詮索をすることもない。君も、基本的なノルマは与えるけど、それ以外は大体自由だと認識しておけばいいよ。この業界、そんなもんさ」

「はー……あ、どうもありがとうございました」

「いや、此方も良い清涼剤になったさ。それじゃ、お互いに生き残れる事を祈ろう」

そう言つてハギオと別れた。その姿を見送りながら腕を組んだ。なんとというか……この業界、

「……予想外にガチガチというか」

「ん」

アンがコクコクと頷いた。

「悪魔との戦いは……命懸け、だから、油断……できないし、だから……遊びが……少ない？」

アンのその言葉に頷いて同意する。まあ、所詮はフィクションのお約束という奴だった、というわけだ。リアル規模になると、生きる為に全力を尽くすし、そもそも現代は法治国家なのだ。しかも教育のある。そして馬鹿は最初に死んでゆくのがこの崩壊世界の現実だ。だとしたらやっぱり、ある程度賢い奴しか生き残っていないのだろうと思う。それはそれとして、消耗品のチェックの為に、怪しい店へと近づく。

スペースの端の方に風呂敷の上に荷物を広げるのはアフロ姿にサングラスを装着した怪しい褐色の男だった。そのサングラスも形が星型で、アフロも虹色になっている。もう見た目からして怪しいのだが、露店に並んでいる一部の物は自分でもわかる。

「これ……反魂香……」

「オー、サマナーさん慧眼ネー。凄く良い物ヨー。今ならたったの10万マツカネー」

「クツソたっかい!!」

「Oh? でも命の値段ヨー。サマリカーム並みの回復力を道具で補えるのは重要ヨー」

アンが横から覗き込み、反魂香が本物であることを一瞬で看破し、マジか、と呟く。とはいえ10万マツカというのは5000万円の価値はあるという事だ。それだけの値段は流石に出せない———とか持つてない。地返しの手玉は常にストックしてあるんだけどなあ、と呟く。

「Oh……でもサマナーさん反魂香は一個あるといいヨー。地返しの手玉じゃ欠損40%が蘇生リミットネー。だけど反魂香ならサマリカーム同様欠損70%までなら蘇生圏内ヨー。頭が吹き飛んでも蘇生できるのが魅力ネー」

「あー……」

頭が消し飛んでも蘇れるという言葉が実に魅力的だった。とはいえ、流石に10万マツカも持っていない。今の全財産合わせて3万

マツカちよつとだ。これでも既に現代の価値で言えば1500万円だ。相当金銭感覚ぶつ壊れているレベルだなあ、と苦笑しつつ、流石に購入するだけの金がないと伝える。

「オーウ、それじゃあ仕方がないネー。じゃあこっちの惚れ薬はどうネー？ そのまま飲ませるのもかけるのもオツケーヨー！ マリンカリンと同じ効力をしつかりと発揮してくれるネー！ 精神耐性の無い悪魔にも、手籠めにしたいあの子にも、或いは一般人を騙すには十分な品ヨー」

「おー……こんなもんまであるのか」

『表に出てくる幻想、ファンタジーグッズの大半は実在するものよ、サマナー』

なんとというか、本当にすごいな裏世界は、という感じだった。真面目にこんなものが存在するのかと驚き、同時にこんな道具が無くてもマリンカリンなどの魔法が使えるれば、必要ないのだという事も理解させられた。並べられた道具を眺めつつ、

「この大半の道具は悪魔が居ればどうにでもなるんだな……」

「そうだネー。結局は悪魔のやっっている事を人間の技術で再現している事だからネー。例えばこれヨー」

アフロが二つの薬を持ち上げた。

「こっちは若返りで、こっちは加齢の薬ヨー。だけど基本的に高濃度のMagを浴びているサマナーやデビルバスターは老化そのものが遅いからアンチエイジング要らずの長生きヨー。そうじゃなくても高位の術に通じた悪魔であれば不老の法程度ちよちよいで出来ちゃうネー。だから適度に弱いサマナーや、偶然こういう世界を知った政治家とかが良く欲しがるネー」

「政治家？」

「若返りや人を操る力は何時の時代だって人気なんだヨー。……まあ、そういう連中は即座に居なかつた事にされるけどな……」

アフロがぼそつと呟いた言葉に限りない業界の闇を感じた。ここら辺、あまり突かない方が良いなあ、と思いながらアフロにお勧めの品を聞いてみる。

「うん？ もちろん反魂香ヨー。だけど見た所そんな金はないけどそこそこ手持ちの仲魔が優秀そうなサマナーネー。となると小道具とかの方が欲しいんじゃないかなー？ んん？ まあ、アフロ・エディにお任せよ」

「フアンキー」

「せやな」

アンの発言に再び同意し、アフロ・エディが並べる商品に視線を向ける。何故だか解らないけど、このアフロマンとはどことなく長い付き合いになりそうな気がしてならないのだ……。それはそれとして、面白いものを並べ始めている。マーケットでは中々見なかったものが非常に多く、ちよつと興味が沸いてくる。

先ほどの若返り、加齢薬とかも結構使い方を考えれば楽しい事が出来るだろう。人間に敵対した時に使ってみれば、これで一時的に相手を年齢デバフで追い込むことが出来るのではないのだろうか？ とは思わなくもない。

「お、サマナーさん良い考えヨー。実際、そういう使い方もあるネー。弾丸加工して使うのが主流ヨー。強制老化は中々恐ろしいヨー。後は性転換薬から作った性転換弾とか、一部の悪魔の対策に重宝されるヨー」

「えつ、マジ？」

「マジだヨー。メイヴとかサキュバスとか、性別強制魅了がある相手に対して自分に打ち込んだり、味方に打ち込んで性別を変えて無理やり無効化する方法とかあるからネー。後は概念的に男女で識別されている装備などを無効化する為にとかネー」

「ひえー……あ、どれもください」

「まいどネー。おまけで気つけ薬もつけておくネー」

「どうもどうも」

3000マツカ程散財する。怪しい薬からちよつとした消耗品を補充し、それを全部ストレージに送り込む。この業界、まだまだ注意しなきゃいけない事が多いなあ、と思っていると、強い気配を感じる。振り返れば、

集合スペースに近づいてくる一団が見えた。自衛官とはまた違う、統一された制服にタクティカルベストを装着した集団に、おそらくは彼らが《ヤタガラス》なのだろうと判断する。その中で一人、より濃い気配を持つ、刀を装備した男を反射的にアナライズした。

転生者 イイダ Level 41

アナライズを終わらせて情報を目撃した瞬間、イイダの視線が此方へと一瞬だけ向けられたのを感じ、背筋に悪寒が走るのを感じた。ただやっぱり、一度レベル99とかいう人類の限界点に到達しているっぽい悪魔狩人を見ている為、それで怯える様な事はない。そう、

どんな相手であろうと、大体ダンテよりはマシだ。

あの腰にある刀だって引き抜いたら鳩が出てくる訳じゃない。

そう考えるといろんな意味で怖くない。

「よし、時間となったため、これより作戦行動に移る！ 移動用に大型テクニカルを数台自衛隊の方で用意してきた！ 道中は我々ヤタガラスがエストマを使いつつ移動する！ デビルバスターであれば今のうちにチームを組んでおけ！ 超大型悪魔持ちのデビルサマナーは事前申請しておけ！ それではこれより移動する、先導に従ってくれ！」

超大型悪魔、そんなものもいるんだな、何て事を考える。

『そりゃあいるさ。僕の次の化身、ヴァラーハもある程度サイズ可変だけど、基本的に20メートルを超える巨大な猪だからね。僕が次の化身になれば、僕の背中に乗って長距離移動するという選択肢も出て来るよ』

「はあ、すげえなあ……」

根本的に常識を捨てなきゃならぬそうだなあ、なんてことを考えながらイケメンの話を聞いて、とりあえずは置いて行かれる前にヤタガラスの先導に従ってシンジユク駅の中を抜けて行く。ケイオウ線から、余り利用した事のないバスのロータリーへと出た。そこにはヤタガラスの用意した数台のテクニカルが設置されており、どんどんバスターやサマナーが荷台の方へと乗り込んで行く。淀みのない、迷いのない動きに置いて行かれない様に、軽く小走りで追いついて乗り込ん

だ。みんなはこういう事、慣れてきているのだろうか？ そんな事を考えながら乗り込み、アンが横に座って並ぶ。

先頭の方は何やら忙しそうで、真ん中のテクニカルを選んで乗り込んだ自分の周りは、様々な装備で身を包んだバスターやサマナーが同席しているの見える。

全体的に重苦しい雰囲気周囲を支配している。ちよつと、辛い。これ、どうしたもんか。そんな事を考えていると、

「おう、お前」

反対側から声がかかった。視線を反対側に座っている男へと向ければ、首にスカーフを巻いた、まるでガンマンの様な男がそこに座っていた。酒で潰れた声で此方に語り掛けてくる男は、

「お前、大丈夫か？ レベル結構開きがあるけどよ。ぶつちやけあぶねえぜ」

普通に心配された……。やっぱ、創作のテンプレ通りに物語は進まねえんだなあ、とどこか感心しつつ、大丈夫です、と言葉を贈った。

「仲魔が高位悪魔の劣化分霊なんで」

「ああ……成程な。レベル以上に優秀なタイプを揃えている奴か。ならそのレベルでも十分か」

「と言つてもお前、油断するなよ？ 悪魔連中も脳味噌がねえって訳じゃねえからな。殺す犯すつて事ばかり考えている連中は単純だが、レベル30にもなれば戦術や奇襲とかを駆使してくる奴が出てくるからな。シブヤの規模を考えれば、間違いなくレベルの低い奴から狙ってくるからな」

同じテクニカルに乗り込んだ別のバスターらしき男が言葉を付け加えてくる。それに合わせ、別のサマナーが口を開く。

「まあ、乗り込んで来たって事はきつと自信があるって事なんだろうけどな、万が一があるかもしれないねえから、最初は俺達の後ろに居ろ。それでレベル差が5以内になったら戦闘に参加したらどうだ？」

「……それ、給料泥棒にならないの？」

「命の方が大切だし」

「この状況で戦える奴減る方が問題だし」



「戦える奴が育つだろ？ 戦うだろう？ 作業が分担できるだろ？ 生存率が上がる」

「命を無駄にしている暇なんてねえんだよ。特に戦える奴を無駄にするだけの余裕はねえんだよ」

「なんか思ってた裏社会と全然違う……」

「飴、食うか？」

「もら……う」

しかもアンは餌付けされてた。いや、確かに連中の言っている事は正しいのだ。だって協力しなきゃ死んでしまうというのは今のこの世の中での真理だ。特に重要なのは、戦えない無力な人々ではなく、戦える力を持った裏社会関係の人間だ。戦える人間が減れば減るほど、それだけ全体として押される。だからこの状況、確かに不安のある奴を少しだけ下げて、戦えるレベルまで上げてから戦闘に参加させるのが効率が良い。

「良いのかそれ……」

「ンダ系魔法は？」

「仲魔がマハンド系を揃えてる。あと精神系もある」

「それを後ろから連打してりゃあ問題ねえ。十分仕事している範囲だよ、そりゃ。バフデバフはマジで重要だからな、この世の中」

横から肩を突かれてバンバンと叩かれる。意外と話して見ると性格の良い人ばかりだった。となると先ほどまでの緊張感は、お互いになんとか風か解らないから牽制、探りを入れていたのだろうか？ なんとなくだが、会話をする為のダシに使われてしまったような気がするも、話せている方が遥かに命の為にもなるから問題ねえな、と結論付ける。

「じゃあ、最初の方はちよつと世話になるって事で」

「おう、任せろ。ついでに現場まで暇だし、俺がちよつと武勇伝を語つてやろう」

「いやいやいや、そこはマテ。俺がサキユバスと1週間戦い続けた話をしよう。年頃の青年ならこの話が絶対に受けるから」

「馬鹿じゃねえの。俺がインスマス村で盛大にドンパチした時の話を

聞けよ」

一度言葉が滑り出せば、段々とテクニカルの荷台がにぎやかになってくる。或いはもともと、そういう連中ばかりだったのかもしれない。盛り上がる様に、これから死地へと向かうのかもしれないという恐怖をかき消す様に、或いはそんなもの、最初から存在していないんだと主張するかのように馬鹿な話を広げ、それで笑い始める。

おそらくはこのデビルサマナーやデビルバスターは、一般人以上に今、死亡率が高いのかもしれない。最大でレベル30の悪魔が出現する現在、それは単独で街を消し去る事が出来るというだけの実力を持っているのであり、それが集団で襲い掛かっていないから維持されているコミユニティなのだ。

それを駆逐しなくては、未来がない。だから俺達はそこへと飛び込んで行かなくてはならない。そしてそれが絶対的な成功で終わる保証は——ない。だから今笑っていても、この先死ぬ可能性がある。

いや、だからこそ笑っているのかもしれない。

特別なアプリにバックアップと仲魔に装備を抱えているのに、今は自分よりも周りにいる人たちのこの笑えるだけの強さが、自分よりも遥かに頼りに見えた。そう思いながらテクニカルはシンジユクを出て、進んで行く。

シブヤを奪還する為に。

## 再生し始める世界 X

流石国防組織というべきか、あの転生者以外にもレベルが30を超える者が複数存在した。そしてその手によりエストマが発動し、交代で魔力を節約しながら渋谷への道中を向かっていた。道路は所々破壊されているが、悪路を走破する様にチューンされているテクニカルはそんな事を気にせず悪魔を寄せ付けずに進んでいた。その道中で目撃される一般人の類を全て見捨ててシブヤへと向かう、という辺りも実に流石と表現すべきだったかもしれない。

完全に何をすべきか、何を掬うべきか、どこから救うべきか。その取得選択に一切の迷いが存在していなかった。もしこれが自分であれば、悪魔を殺す程度の助けぐらいであれば入れていたであろうだけに、迷いのない行軍は正直、驚いていた。国防組織というのだから通りすがりの人がだれであつても助けるのかと思っていたが、そんな事はなかった。

こんな時、状況だからこそ助ける相手を選別していた。良し悪しで判断するのではなく、その状況と場所で判断して救っている。シブヤの解放までシンジユクに一切戻る予定のないこの討伐チームでは、道中で人を拾つても邪魔にしかならないし、物資の消耗にも繋がる。それが許せないので完全に無視して進む。

善悪を基準にせず、状況で判断する、ニュートラルらしい理論だった。そこにややもやもやが残るも、この世紀末で全ての人間を救える訳ではないというのはとても当たり前の事であつた。人を無視する度に走る胸の痛みを無視しながら、アンに手を握って貰って乗り越えて行く。一つ一つ、自分が知らない世界に踏み込み、知っていたはずなのに知らなくなつた世界を知り、少しずつ前進して行く。

そうやって、シブヤへと向かつていた。

道中が静かになるといふ事はなく、一度喋り出せばサマナーやバスター連中は普通にそのまま、喋り続けていた。マツカが使え、悪魔の力を借りられる彼らは食料や補給物資を悪魔の力を使う事で比較的に楽に調達できる為、喋って喉が乾いたら水を飲み、そして携帯食料

を齧りつつ話し続ける。

割と馬鹿な話ばかりを。

「んで、その悪魔はチョコレートが喰いたい！　って言ったのな？　交渉の基本ってまずは最初に欲しいモンを与えてから少しづつ威圧してイニシアチブを取る事だ。だからチョコレートをくれてやったんだ——そうしたらどうなったと思う？」

「ニコポした？」

「いや、バーのチョコレートをめえめえ言いながらそのまま昇天した。そいつはイヌガミだったからなあ!!」

「はっはっはっは！　犬にチョコレートは死ぬるからなあ!!」

「共通認識が生む伝承とかでも殺せるから妙な弱点とかあるよなあ、悪魔って」

「俺もまさかチョコで殺せるとは思わなかったぜ」

そんな馬鹿な話をして、荷台は盛り上がった。ぶっちゃけ、そこまで話せる内容が自分にはないので、大半は聞き役に徹していた。とはいえ、聞いている内容は失敗やら教訓に関する事が多く、割と聞いているだけで勉強になるのも事実だった。例えば今の話の様に、悪魔はデータとして表示される能力だけではない。《アナライズ》で発覚するのは基本的な能力、スキルや魔法、そして数値化された体力や魔力だ。これによつて悪魔の能力を知る事が出来る。

だがそれとは別に、悪魔は伝承やおとぎ話、概念から来る能力を保有している。クールマは化身としての権能を保有しているし、チェフェイは欲望に関する能力を保有している。魔法やスキルとは別に、属している伝承から来る個人個人の概念という物が存在し、その結果数値や習得している魔法スキル以外でも出来る事等が存在する。そして先ほどのイヌガミの唐突な死もそういう概念から来ているものだ。

犬はチョコレートを食べると中毒症状を起こし、死亡する可能性を持っている。それで即死する訳ではないが、代謝機能の関係で犬はチョコレートを食べてはならないのだ。だがその細かい話を知らずに、大体の人間は犬はチョコを食べたら死ぬという部分しか知らない

だろう。

それが犬という概念を持つ悪魔に対しても適応されている、という話だ。悪魔は情報、或いは概念の塊だ。だから概念に対して有効的な概念を使えば、非常に効率的に処理や運用をする事が出来るという話だった。

そしてそういう概念に関する話が存在する為、面白い話が生まれてくるのだ。数値やデータを睨んでいるだけでは決して理解する事のない、悪魔個人と種族全体での能力や逸話に関する話だ。そういうのは聞いていてやはり、楽しかった。何より自分の仲魔を知るのに使える事でもあった。

データだけが悪魔ではない。それはある意味、サマナーをする上では最重要な事でもあった。他のサマナーの話を聞けば、仲魔とコミュニケーションを取る為、信頼を勝ち取る為に色々やっっている様子だった。宴会とか、プレゼントとかをするのが割と良くある手口らしく、契約しても素直に従わない悪魔はそうやって懐柔して行くのが良くある事でもあるとか。

『宴会！ 宴会！』

『イア、イア』

『素敵な響きじゃなあ、宴会。無論、妾は何時でも貢物にオープンじゃぞ』

『ああ、私は特にそういうのはいいわ。バアルにする事を目指してくれさえすれば。でもそうね、慰労の為に酒をふるまうのは悪くないわね。魂胆が見え透いていてもそういう催しで喜ばない悪魔はいないわ』

約一体やっぱり発狂していない？ とは思ったが、概ね好評だった。という事は今度、暇なときに仲魔を召喚した状態で宴会でもする事にする。片手を握るアンもそれなりに楽しみらしく、手をぎゅつと握りしめる。そしてそれを眺めている周りの連中がほっこりとした表情を浮かべている。

「守らねば……」

「高校の冬。進路相談。皆でクリスマス。屋上で食べるランチ」

「やめろ、やめろ……俺だけ夏休みの海に誘われなかった事を思い出させるのはやめろ……」

「ああ、俺のマツカビーム特化ガキがCOMPの中で昇天してる……！」

「大丈夫かこの連中」

「たぶ……ん？」

一応、全員自分よりもレベルが上だから心配する必要はないのだと思うが、それでも言動がここまでカオスだと不安になってくるものがある。タルタロスのあったあの世界では俺の方が自信満々だったのに、自分の世界へと戻ってくるとこんなもんかー、とは思わなくもなかった。まあ、彼方の世界は強さの上限が感じられる範囲では狭かったし、滅びを前にしないから精神的な余裕があったのかもしれない。その余裕を此方でもどうかして継続できないものか、とは常々思う。

そんな事を頭の中で考えながらもテクニカルは進んで行き、やがてシブヤ圏内に入ってくる。

かつては大量の人がいたシブヤの姿も、世紀末に飲み込まれて見るも無残な姿に成り果てていた。シブヤの象徴たる109もその先端が破壊され、瓦礫となって道路に転がっている姿が見える。どこへ行っても世界は崩壊している。当たり前ではあるが、どこまで行っても変わらない崩壊の姿を見ていると、嫌になってくる。

だがそれと同時に、空を見上げればエストマの範囲外から此方をじつと窺ってくるハーピーやオキュペターの姿が見える。エストマの範囲外から攻撃する訳でもなく、常に100メートルほどの距離を開けて此方へと視線を向けてくるその存在感は少々不気味であり、シブヤに入ってから感じる肌を撫でる様な悪寒と嫌な視線に、静かにL&Oを抜いていた。

どうやらそう感じていたのは自分だけではなく、他のバスター達も武器を抜き、サマナー達は仲魔を召喚する為にCOMPを召喚待機状態に移行させていた。

「あんまり良くねえな、この雰囲気」

「高位悪魔が支配する異界に突っ込んだときに感じる統率された悪魔って感じがするぜ。……ひよっとすると、高位悪魔がいるのかもしれねえな」

「ま、そういう面倒なのはヤタガラスに任せようぜ。その為に高位異能者を連れてきてんだろうしな。お前も、妙な事は考えるなよ？ 種族英雄なんて連中も存在するが、俺達は英雄でも何でもないからな」  
「おう」

一々此方を心配してくるの、恥ずかしいのでそろそろ止めて欲しいと思いつつ、真理だった。とりあえずはバフデバフを中心として、支援に回って動き回る事をメインにしようと思われ、テクニカルが停止する。場所はシブヤのスクランブル交差点前。制圧目標はシブヤ駅になるが、シブヤ駅内部を何時ものマップと索敵アプリのコンボで確認すれば、内部が悪魔の反応で真っ赤になっている。それを見ていると、前から横から覗き込んでくる同業者たちがうわあ、と声を漏らす。  
「モンスターハウスかよ」

「これ、半異界化してないか？ シンジुक駅に続いてシブヤ駅までダンジョン化かよ」

「いや、シンジुकは元からだろアレ」

本職から見てもシンジुकは異界らしい。まあ、確かに初めて行くと確実に迷うよな、と思いつつテクニカルから降りる。まだエストマが効果を効かせている間にDDSアプリから高速召喚でチエフエイを召喚する。そうやって召喚されたチエフエイは普段の和装のロリ姿ではなく、複数の尾が生える子狐の姿で召喚され、そのまま頭の上に乗った。視線を上へと向ければ、お腹を頭の上に乗せ、両足をだらしと下げる様な姿勢、尾の一本で軽く肩を掴んで落ちない様になっているチエフエイが、

『まあ、妾の姿や情報を必要以上に周りに見せる必要もあるまいて。多少運動能力は制限されるが、これでも問題なく戦えるから安心しておくと良い』

なんとというか、普通に召喚しようとした俺よりも遥かに良く考えている狐だった。いや、俺が簡単に信用しようとして不用心だっただけ

か、と判断する。そうやってチエフエイが頭の上を陣取った所で、アプリを起動する。DDS内部の仲魔にも均等に経験値が配分され、レベルアップが行えるというアプリだが、こちら辺、本当にゲームっぽいな、とステイブンの謎技術を思い出しながら判断し、L&Oを軽くガンプレイで回転させて握りなおす。

「さて、お仕事の時間だな……頼んだぞ、アン、駄狐」

「まか……せ、て」

『妾の扱い相変わらず酷いんじゃが』

「様式美という奴だから安心して」

額をぺしぺしと叩いてくるのを無視しながら、周囲にも様々な悪魔が召喚されて行くのを確認する。その度にアナライズによるデータ登録と確認が行われ、一瞬で視界がホロウインドウによって埋め尽くされるので、一度の表示数を制限し、それを整列する事で視界を確保する。そしてその間にもエストマの効果が薄れ始め、虎視眈々と此方の命を狙ってくる妖鳥達の視線に殺意と敵意が混じり始める。

「マカラカーン用意したかー?」

「テトラカーンも忘れずになー」

「突撃の狼煙使える奴いるかー?」

「お、ウチは出来るぞー。デ・カジャ持ちがいなければいいんだがなあ」

「そこはボヤいてたってしょうがねえだろ、上に行くとは必ず持つてるもんだし。とりあえず安全な区域を確保するのが最初らしいからな。シバヤダンジョンに突入する前に挑めるための陣地作りだ」

「109とか近くの店見ると結構物資ありそうだからなあ、駅前を拠点にする予定か? まあ、悪魔を殺せばとりあえずどうとでもなるか」

「んだんだ」

言葉は滅茶苦茶軽い連中ではあったが、その準備は的確かつ迅速で、慣れているものだった。チエフエイだけを出して準備を完了させた此方に対して、声を掛け合いながら素早く魔法や隙を潰す様に展開し、そしてエストマが切れる瞬間に備えていた。サクサクと行動を纏



めて行くその姿に軽く驚きながら、ふむふむ、と頭の上でチエフエイが呟くのを聞いた。

『どうやらある程度、業界的に知名度の高い魔法や効力の高い魔法はそのまま晒しているようじゃの。即席で連携しやすいようにする為の配慮じゃろうか』

『結構考えてるわね、人間も』

『信頼は出来なくてもお互いに戦力を信用する事が出来るからね、人間は！ まあ、それ以上にこの状況で隠す事への無意味さを理解しているから、切り札だけは伏せて、それ以外にはスムーズに動く為に明かしているんだらうね……連携している方が生存率上がるし』

良く、考えられている。そういう素早い対応なんてもんを見ていると、改めて自分が此方の世界に踏み込んだばかりの初心者である事が良く解る。まだまだ、勉強しなくてはならない事が多くあるんだらうな、とその考えに不覚ながら楽しみを覚えていた。強くなり、そしてこの裏世界を知る事は恐ろしくも、楽しいのだ。

「うーし、こんなもんか！ ざつと見て数百体以上いるからこりやあ入れ喰い状態だな！ あ、坊主、お前はレベルが揃ってくるまでは俺らの後ろに居ろよ？ 大体テトマカでどうにかなるしな」

「まあ、テトラカーンもマカラカーンも無駄にコスト高いから張り直すのがめんどくせえんだけどな」

「アレ、異能者が触媒込みで使おうとすると1回1000マツカとかかかるらしいな……いや、それでもまだ物反鏡とか使うよりは遥かに安いんだけどよ」

展開と言葉が早い。慣れている連中に対して一步遅れながらも心を落ち着かせ、そして防衛迎撃撃滅体制が整うのに加担した。そしてそうやって集められたサマナーが準備を完了させてから、特に合図もなく、

誰もが解る様に、エストマが解除された。

いや、合図もなくではない。そもそも集まっている大半がレベル的には何年も業界で戦ってきたベテランや準ベテランとも呼べるような連中ばかり。合図そのものが必要ない。そうやってエストマが解

かれた瞬間、周囲から視線を送るだけだった悪魔が——ハーピーやオキユペター、そしてケライノー等の妖鳥悪魔が弾丸の様に一気に飛び出した。だがその動きに先んじて、

メギドドラ

万能属性の光がスクランブル交差点を中心に四方へと向けられて1・2発同時に放たれた。超高位悪魔でもない限りは耐性を保有せず、尚且つ高威力で圧倒的殲滅力を誇る最強魔法の系列が一気に交差点を駆け抜けて悪魔の姿を飲み込み、反撃する事すら許さずに消し飛ばした。その光に巻き込まれて交差点周辺から一時的に悪魔の姿が消滅し、大量のMagが霧となって漂う。それが急速に力へと還元されて行くのを感じ取る。当然ながらこの規模が一瞬で蒸発する、何て事は初めて見た。その為、放たれたメギドドラの暴力を前に、一瞬思考を停止させてしまったが、

「なにやってんだ！ 本番はここからだぞ！ さっさと飛び込んできそうなところに魔法と弾丸を放て！」

「あ、は、はい！」

向けられてくる怒声に背筋を伸ばす。呆けている場合ではなかった。似たような光景であれば既に何度か見ているじゃないか、と自分の頬を軽く叩いて気合を入れる。そうだ、ここは既に戦場なのだ。呆けている場合じゃない。自分から踏み出さないと食われる場所だし、助けてはくれるが、見捨ててもする連中でもあるのだ。

『準備は出来たかの？ なら指示じゃ、サマナー。自信をもって言葉を声に出すと良いぞ。それに従うのが悪魔じゃ』

「攻撃の合間を埋めるように近づけさせるな！」

チエフエイが鳴き声を零せば、雨の様に放たれる魔法の弾幕の合間にドルミナーが隙間を埋めるように放たれ、僅かな隙間から飛び込もうとする妖鳥の動きを一瞬で眠らせ、停止させ、失速させて地に向かって落とす。それによって落下する悪魔が魔法に巻き込まれて一瞬で蒸発する。成程、こうやって動けばいいのか、とアンに竜巻を何時でも放てるように準備させながら、隙間を埋めるようにチエフエイに精神と神経魔法を連打させる。

飛行する悪魔はそうやって行動が封じられれば、勝手に落ちて魔法に巻き込まれる。この場に居て一緒に戦っているというだけで、ガンガン体がMagを吸い込んで、スポンジの如く吸い上げて一気に強化して行く——一種の促進培養状態だった。普段であればこういうレベルの上げ方は嫌われる。

当然、経験や知識がついてこないからだ。だが今は仕方がない。というかレベルを上げてからではないとあっさり死ねる世の中なのだから、今は優先順位が違う。だからMagを命を啜る様に吸収し、支配人の手によって解除された生物としての限界と、成長のキャップ。その作用によって、急速的に肉体と魂は追い付くようにレベルを、位階を駆け上がっていた。

自分の体の内側から生まれてくる熱を感じながらも、爆撃の様に魔法が連射され、マシンガンの様に連続で放たれる戦場の中に、自分も動きを作る。チェフエイの連続で妨害用の魔法を放たせながら、新しくクールマを追加で召喚し、重力による壁を空に生み出させる。

それによって飛行する悪魔が勝手に行動制限されて落ちてくる。

「っしやあ!! ここは戦術核の出番だツツ! 見ろ! これがアメリカからこっさり盗んできた携帯型ミニニューク……!」

「誰かあの馬鹿を殴って止めろ」

「つかフレイラで満足しておけよ。アレ放射能反応の出ない核熱魔法なんだし」

「フイーヒヒヒイ——!」

「会話している間に核をぶっぱなしたぞお——!!」

「嘘だろお前……」

道玄坂の方へと叩き込まれたミニニュークの姿に一瞬、うん? と首を傾げたが、必死に放射能を消せ、と叫んで来る声が聞こえてくる辺り、どうやら環境汚染をどうにかする方法はあるらしい。しかし流石裏社会だ。当たり前前の様に小型核を戦闘にぶち込んでくるなんて、考えもしなかった。これがサマナー世界の当たり前となると、自分がどれだけ矮小か思い知らされる。

『……いや、あれ普通じゃないから』

『一応核兵器でなら40レベルの悪魔なら問題なく消し飛ばせるもの  
なんだけどね』

あ、じゃあ、この連中が特別にクレイジーなのか、と、ミニニユー  
クを放った男が二発目を取り出そうとするのを、他の連中の仲魔が無  
理やり取り押さええながら止めているのが見える。その間にもチエ  
フェイトとクールマへと指示を出しつつチャクラドロップを与え、妨害  
をし続けるだけの機械となりつつ周りの光景を見て、戦いながらも聞  
こえてくる話に耳を傾ける。周辺はまさにカオスとでも表現すべき  
光景だった。

四方八方から飛行して襲い掛かってくる悪魔の物量に対して、サマ  
ナーも物量で仲魔を召喚してぶつかりながら広範囲に効果を及ぼせ  
るマハ系統の魔法で弾幕を張りつつ、テトラカーンとマカラカーンを  
張り詰めながら相手の攻撃を吹き飛ばし、暴風のように攻撃を叩き込ん  
で一齐に蒸発させて行く。まるで死を恐れない様に突撃してくる悪  
魔の姿は一見、恐ろしく映る。

だが、

「なんでシブヤ奪還作戦で核をぶつ放す馬鹿が居たんだよ!!!」

「見ろよあそこのヤタガラス、絶対イエローカードだってあの視線は  
さあー!」

「じゃあレッドカードが出たらモヒ子とベッドインで」

「鬼畜かよ」

まるで緊張感の無い会話がそれでも続いていった。恐るべき事にそ  
んな会話を続けながらも戦闘に集中し、合間にハンドサイン等で仲魔  
に対する指示を的確に行っていたのだ。正直、驚いた。というか一緒  
に仕事してから驚き続きだった。

「そういえばダンテさんも結構軽口をするタイプだったなあ……やつ  
ぱり、軽口を浮かべながら戦うのがこの業界の流儀なのか」

『いや……貴方がそれでいいのなら私もそれでいいけど、本当にそれ  
で正しいと思うの?』

ベルの言葉にしかし、小さな疑問を覚える。だが楽しそうにヒヤッ  
ハー叫びながら悪魔を殲滅する同業者の姿を見ると、こんな状況

でもなんと逞しく、そして恐れる姿を見せずに戦えているのが見える——そういう部分では純粹に羨ましく、あやかりたくもあつた。

俺ももう少し、外面から恰好付ける事を考えよう。

そんな事を思いつつも、出現してくるケライノアの集団の対処に入る。もはや集団ではなく群れや軍団とも表現できる膨大な数が視界を覆う黒い波となって迫ってくる。

それが魔法に触れると一瞬で消し飛ぶ。決して悪魔側が弱いという訳ではない。

ただ、ただただ単純に、此方の火力がアホの様に高いだけだった。

《突撃の狼煙》と呼ばれる魔法は全てのカジャ系魔法を二段階発動させるという究極の補助魔法だ。それによって最大限まで強化されたところで乱発されるンダ系魔法。それによって下げられる魔法や攻撃に対する抵抗。そしてそこに放たれるマハの付く広範囲効果のある魔法。

そして元々、ここに居るサマナーやバスターの大半のレベルは30を超えている。レベルが大きく下回っているのは自分ぐらいで、それでさえ大量に蒸発する悪魔を前に一気に追いつき始めていた。良いのかなあ、と思いつつも迫り来る悪魔に対して対処する為、必死に此方からも魔法を叩き込む指示を出す。銃を振るうなんて余裕はなく、必死に仲魔に攻撃の指示を連続で繰り返しながら、

ひたすら、ただひたすら迫りくる悪魔の津波に対処して行く。

何時まで続くのだろうか、これは。頭を空っぽにして半ば自動的に迎撃を行いながら戦い続ける事1時間、

スクランブル交差点からは完全に、敵性悪魔の姿が消失していた。

## 再生し始める世界 XI

「お、終わった……のか？」

眩きながら悪魔の気配が消えたスクランブル交差点を見渡した。見渡す限り、敵悪魔の姿は見えない。少なくとも見える範囲での悪魔は殺しきつたらしい。凄まじい疲労感と共に、やり切ったという感覚と、大量のMagから生み出された経験値が体を満たし、体の奥底から力が沸き上がってくるのを感じていた。これは数段飛ばしにレベルが上がったな、と感じつつも、しつかりと息を吐いた。

と、そこで背中を叩く感触を感じた。

振り返れば、先輩サマナーが背中を叩いていた

「良く生き残った！ 英雄ごっこなんざせずにしつかりと生き残る事を選べたサマナーは良いサマナーだ！ お前もこれで良いサマナーにまた一歩！ 近づいた！」

「レベル上がったかー？」

「あのドルミナー良かったぜ……」

ばんばんと背中を叩かれながらサマナーやバスターが集まってくる。なんかもつと、駄目出しとか叱られたり、難癖付けられるとずっと思っていたのに、この受け入れられ具合に物凄い違和感を感じる。というかドルミナーに関してはそこまで持ち上げるもんでもないだろう。なんというか……ややめんどくささすら感じる。

「で、どうだ？ レベル30に上がったか？ アナライズできるよな？」

「馴れ馴れしいんだよ馬鹿野郎！ 少しは見守れねえのか！」

あ、一人殴り飛ばされている。それを見ている他所に、スマートフォンを取り出してDDSアプリを起動させ、そこに表示されている仲魔達のレベルや状態を確認して行く。今の戦いだけでも百を超える悪魔を余裕で屠ったが、初めてすぎる経験に少しだけ困惑していた。少しだけ、頭がぐわんぐわんと酔う様な感覚をしてそれを振り払いつつ、アプリにはレベルが30に到達する様になった仲魔達に姿が見える。そして同時に、アプリを起動すればぎりぎり30レベルに

なった自分の姿も確認できた。

「良しッ！」

「おめ……で……と」

アンが片手を持ち上げて此方へと向けて来るのでハイタッチを決める。パン、という音が響くかと思ったが発砲したかのような音に少しびっくりとする。ああ、そういえば普通の身体能力じゃなくなったんだよな、とハイタッチをした自分の手を見つめていると、なんか、此方へと向けられる視線が生暖かいような気がする。

『そうね……。でも気にするほどの事でもないでしょう？ 寧ろ優しくしてくれている分、学べる事を今のうちに学ぶべきよ。世界が大陸規模で再生し始めればこういう平和な状態が続くかどうかすら怪しくなるからね。間違いなくメシアとガイアのトップが蘇れば世紀末戦国時代の到来ね』

「筆れる内に筆れ、と。段々この業界の事が解って来た気がする」  
「ど……ん、まい？」

アンだけが本当に頼りだ。そう思っていると清浄な波動が駆け抜けて行き、シブヤ交差点を中心に境界が張られた。契約状態にはない、野良の悪魔は強制的に排出されるのと同時に、入る事の出来ない安全地帯が一時的に構築された。これはつまり、シブヤ交差点という拠点を入手したという事でもあった。つまりシブヤ奪還に対するファーストステップだった。これで一息つける、と思ったところで、  
「うっし、次は駅か？」

「近くの店舗を制圧して物資を確保するってのもありだよな」

「あ、坊主。お前は自分の能力を確かめるよ？ 超人になった奴は大なり小なり、覚醒した上での能力を獲得するからな。それはそれとしてクライアントは駅の方を確保するっぽいな」

「シンジユクからシブヤまでの線路を確保して高速で移動できる手段を確保するつもりかねえ……。まあ、報酬分の仕事はすると思いますか」

言葉を投げられながらも、すかさず次の活動に入っていた。この程度で休むなんてことはなく、そのまま次の悪魔を殺す為の準備に入っ

ていた。正直、少し引くほどの殺意と労働意欲の高さだった。というよりは慣れているというのが正しいのかもしれない。アナライズで自分のレベルを確認し、能力を確認する。だがそこには新しく取得された、魔法や異能の類は載っていないかった。となると覚醒しなかったのだろうか？ まあ、どちらにせよ、ゆつくり確かめるのは後でも出来る事だ。今はもっとベルにやる事がある。そう判断し、一旦仲魔をDDSへと帰還させ、入れ替える様にベルを召喚した。

「狭い空間での戦闘になれば魔法は危険だし、頭上から落とせるジオ系が使える私は悪くない選択よ」

「電撃ガードキルを覚えたんだ、ガンガンSTUNハメを頼むぞベル」

どうやらこのまま、シブヤ駅に突入する様に見えた。その前に今は最低限の補給と補充を行っている。おそらくは悪魔の大群を潰して、それでまだ数を戻せない内に一気に叩こうという魂胆なのだろうと思う。だから此方も狭い空間での戦闘に備え、広範囲に放つ魔法を制限する。というのもベルが使うジオ系の魔法なら上から下への移動の攻撃なので、他の味方に当たる事を考えずに使える。

流石にドルミナーやシバブーは直線的な動きで放つ魔法だ。それを考えるとチェフエイは出せない。それにクールマの重力魔法も一定時間空間に停滞し、そして狭い空間で使うと向こう側が見辛いという弱点がある。流石に他の人と一緒にレイドする時にそんな魔法は使えない。となると今回、戦えるのは便利なジオ系を使えるベルと、肉弾戦が出来るアングくらいだ。後は自分が銃撃、という所だ。

「こんなところか」

がシャリ、と音を立ててL&Oを握り直す。軽く回転させながら握り直して気合を入れた所で、声が聞こえて来た。

「ではレベルが38を超す者についてこい！ これよりシブヤ駅を解放する！ それ以外の人員はシブヤ駅の入り口を封鎖し、外に逃げ出す悪魔を討伐せよ！ 往くぞー！」

その言葉に従って半数ほどのサマナーやバスターがシブヤ駅の中へと突入して行く。その姿を見て、ええ……という声が思わず漏れてしまった。折角気合を入れて突入する所だったのに、流石にこれは酷



い。いや、まあ、

『合理的なんじゃがな』

『態々良い勝負にする必要はないからね！ 圧倒的暴力で蹂躪制圧。何時の時代であつても集団戦に対する最適解だよ、サマナー！』

『コロッケの中には銀の立川ブラザーズ』

銀の立川ブラザーズとはいったい何なのだろうか。体からすつかりやる気が抜かれ、両手を下にぶらーんと吊り下げる。それを見ていた一部の同業者が笑い声を零し、背中を叩きながらどんどん先へと進み、攻略隊として悪魔の討伐に向かう。いや、解っているのだ。こうしている方が遥かに効率的であるというのは。判断としては正しい。

「この意気込みはどこへ……」

「……つち？」

そう言ったアンへと視線を向ければ、腕を広げている姿が見えた。どうしろというのか。その腕の中に飛び込めとでもいうのだろうか？ この俺に？ チェフエイの密かなレッスンで少しだけ度胸がついて来たとはいえ、それでも一般メンタルの俺にそのフカフカしたものがついていっている胸の中に飛び込めとでもいうのだろうか？ この、俺にそんな事をしろと……？

「……つち？」

「繰り返した……！」

「ああ、聞こえなかったとか思ってるんだろな、アレ」

「俺知ってる。アレ超テンパってる奴の顔だ」

「サマナー、男を見せる所よ」

いつの間にかベルが同業者側に混じって野次っていた。ははーん、実はお前本当はもう少し愉快的な性格をしているな？ 助けを求めるときに視線をベルへと向けるが、サングラスをポケットから取り出して装着したベルは完全に此方の視線を遮断している。ならば、と周辺のサマナーに視線を向けると、拳を握ってそれを押し込んでいた。その横のデビルバスターはその隣のデビルバスターと組んで、腰に手を回して抱き寄せる方法を教えてきてくれている。ありがとう、だけど

クツソ余計なんだよ。

「サマナー……う？」

「行け！ そこだ！ 行け！ 勇気を出すんだ！ そこだ！ そこだよ!!」

「顔を赤くしているぞ！ 初々しいのいいぞお！」

「お前らうるせえんだよ!! やってやろうじゃねえの！」

うおおお、と声を口にしながらL&Oを電送し、スマートフォンへと収納させながら腕を勢いよく広げ、そのまま飛び込む様にアンへと向かって抱き着いた。

——つしゃああー！ やったあー！ 頑張ったあー！ 俺頑張ったあ……！

腕を何とか捻じ曲げてアンの背中へと回す様に、アンは普通に此方へと腕を回し、抱き返してくれた。よつしゃあ、と心の中で叫びつつ、何が起きているの？ 今俺には何が起きているんだ!? という物凄い焦りが心の中で生まれていた。滅茶苦茶焦りながらなんでこんなことを戦場で行っているのだろうか、そう思いつつ視線を横へ、同業者集団へと向ければ、

なんか、スマートフォンとかを向けられていた。

「1回100マツカで撮影許可出すわ」

「助けて……」

物凄く嬉しく恥ずかしくそして辱められている気がする。ああ、ベルが撮影許可を出してお金を稼いでいる。流石悪魔王の部下、この世紀末を生き抜く為の活力で溢れてらっしゃるとかそう言っている場合じゃない。そうではないのだ、何故こんな事になって、ここから何をすればいいのかが全く解らないのだ。お願いだから助けてくれ。

『これはもう押し倒すしかないね』

「インド出身は黙っていなさい」

良い逸話も悪い逸話も全部斜め上の方向にインフレしている神話出身の奴はこういう時は黙っている。心の中で切実にそう告げると、周りの連中が解っている、解っているという表情を浮かべ、手をパンパン、と叩きながら去って行く。いや、違う、そうじゃない。一時間

？ それとも二時間？ とか生々しい話を聞かなくていいから。無理だから、そんな事。絶対に無理なのでほんと止めて助けて。

「助けて……」

「たす……け……る」

応えたのは周りではなくアン。言葉と共に更にぎゅつと抱き締められる。そうやって更に密着して感じるのは胸板に押し付けられる服越しのアンの柔らかな物の感触で、というか全体的に鍛えられている筈なのに、まるでそうじゃない女の子の様な柔らかい体の感触を服越しにとはいえ、感じてしまつて色々アレだった。チエフエイとはまるで違う。

『おい』

どすの利いた声が聞こえた気がするが、助けてくれないしきつと気のせいだろう。どうしたらいいのだろうか。そんな事を考えている間にもどんどん時間が経過していった。

◆

「俺一生あの子に勝てない気がする……」

アンに抱き着かれる事しばらく、漸く解放されたところでげっそりと、ハチ公前の近くにあるベンチに座つて休んでいた。何かするべきかなあ、なんてことを考えていたのだが、それは他の連中に止められてしまった。理由は実にシンプルで、レベルはあつてもイロハを知らない初心者に監視とかを任せるのは危険だから、らしい。能力とレベルはあるのだから、護衛用に悪魔を出し、戦闘の準備だけは常に用意しておいて、油断しない程度に休んでいれば良いというのが周りから押し付けられた言葉だった。

そして実際、間違つていない。俺みたいに中途半端な知識のサマナーが協力しようとしたところで、邪魔にしかならないだろう。なら逆に少し離れて戦闘の準備だけしておく方が向こうとしてもありがたいだろうから、お言葉に甘えてベンチで休ませて貰っていた。周りで働いている他の同業者がいる中、こうやって一人だけ休ませて貰う

事には抵抗感を覚えるが、基本的にあの愉快な連中の言葉はアレ、まともなのである。悔しいがまともなのだ。態度は完全にアレなのに。

要は邪魔なので戦闘以外では出て来るな、という話だった。

やはり、断言されると悔しい。自分が所謂即席サマナーであるのは事実だから何も言い返せない。本当のサマナーはもつと時間をかけて、少しずつ業界のアレコレや動きなどを学ぶところなのだが、自分はそれを全てすっ飛ばして一気にレベルを上げて来た。多少格好つけている部分はあっても、それもメツキだ。本職の人たちが突けば容易く剥がれる。

なんとか、何とかしてもつと強くなるだけではなく、サマナーという職業に関する知識を付けないとならない。現状、この業界に関する知識が欠けている。酒場にはダンテがいるけど、アレは基本的に参考にならないって魂で理解した。どこか、手本にでもなるサマナーがいてくれないものだろうか。

『まあ、実際師弟関係を結んで学ぶというのはこの業界の基本らしいよね』

「え、そうなの？」

『僕が知る限り、サマナーみたいに力も特別な背景もない子がいきなり力を渡されるケースの方がレアだよ。まあ、そういうのは大抵ヒーローだったりして、常に騒動の中心を駆け巡る運命にあるんだけど、異界に突入する許可を貰えなかった辺り、全くヒーローじゃないよね』

「というかヒーローだったらあのダンジョンに突入していたのか……」

それは少し違う、とクールマが言葉を口にする。

『正しくは何らかの理由で突入する羽目になるという方が正しいかな。物語の主役、それがヒーローの立ち位置なんだよ、サマナー。だから自分で選んだ様に見えて実は一つの道を進んでいるというのがヒーローの足跡だよ。彼らは基本的に運命の奴隷だ。寧ろ主役じゃない方が自由があるくらいさ』

「凡人として生まれて良かったのか、複雑の様な……」

『でもイロハを教われる相手が必要なのは事実じゃな』

ベンチに座った状態で、どうしたものか、と考える。レベルが上がったら悪魔と戦える力を得られる。そうすればもっと楽になるし、それで先へと進める様になる。そんなことを考えていたが、それほどシンプルな事でもなかった。

こうやって他のサマナーと一緒に動いて、周りを見て考える様になって気づかされるのが今回は多かった。力を多少得て、色々と弄れるものが増えてちよつと調子に乗っていたかなあ、と思う部分が見えた。まあ、なんというか、自分が踏み込んだこの世界、この社会に關してはまだ自分はその表層の浅い部分にしか足を突っ込んでいなかったなあ、というか、当たり前だがルールや認識、共有しているものがあるからそれを知らなきゃ初心者から脱出できないんだなあ、というのを理解させられる。

認識、甘かったなあ、というアレだった。

「どうしたもんかなあ……」

扉を探さなきゃいけないのは最優先だし、それとは別に強くならなくてはならないし、後ついでに世界がこのまま再生しても、自分のやった事が消える訳じゃないのだから、その場合は自分がどうやって再生した世界で生きるべきなのか、それを考えなくてはならないという点もあるのだ。やるべきこと、成すべき事が一切尽きない状態が続いている。それらを考えていると、

「流石に、頭が痛くなってくるな……」

はあ、と溜息を吐いていると、周辺で警備をしていたヤタガラスらしき男が近づいてくる。出る前にこちらに声をかけて来た彼とは別のサマナーの様で、横にピクシーを浮かべながら近づいて来た。

「や、お疲れ様。調子はどうか」

友達に話しかける様な気安さで、そのヤタガラスのサマナーは話かけて来た。どう答えたもんか、と考えるが、普通に話す事にした。

「いや、なんというか見る事やる事新しい事ばかりで疲れるというか……。あと皆、妙に優しくかったりするからどうやってリアクションを取ればいいのか困っているというか」

「ああ、成程ね。横、いいかい？」

どうぞ、といいながら軽く横にずれて座る場所を作る。ここにアンが居なくて良かった。今はベルと一緒に周辺警戒に出ているのだが、なんかさっきのハグから妙にスキンシップを求めるといふか、気が付けばにじり寄って抱き着いて来ようとするフシがあつた。今まではそんな事なかったのになあ、と思い、ちよつと心臓に悪い。彼女がここに居たら横に座っていただろうし、そのままなんか抱き着いて来そう。

前々からそうだけど、あの子は妙に俺になつているのが未だに疑問なのだ。

まあ、それはそれとして、横にヤタガラスのサマナーが座った。

「まあ、彼らをあんまり無下にしないで欲しいんだ、気持ちも解らなくもないしね」

「えーと……他のサマナーとかの事？」

「うん」

ヤタガラスのサマナーは苦笑した。

「国家機関に所属していない、フリーランスのサマナーやバスターというのはね、基本的に楽しい過去をしている人達じゃないんだ。僕らがどれだけ頑張った所で、結界にも穴があるし、それを抜けて襲われる人も多い。だからその復讐を目当てで悪魔業界に殴りこんでくる人だって珍しくはないんだ。基本的に子供のサマナーやバスターはメシアやガイアに所属している、そういう風に育てられた子だからね。ニュートラルの、それもフリーランスのサマナーともなれば、相当珍しいし、それなりに理由があるんだろうというのには察せるんだ」

「……」

此方が言葉を返していないでいると、サマナーは話を続けた。

「結局のところね、彼らは君と君のあの可愛いパートナーを通して、失われた過去を想起しているんだよ」

「失われた過去……」

「そう。この業界、踏み込んでくるのは大体二十台を過ぎてからだ。それよりも前に君の様なまだ、未成年とも呼べる年頃の子が踏み込ん

でくるのは珍しい。顔を見れば大体の年頃は解るしね。家族、友人、社会、或いは環境。それを失って、それでも頼れなくてフリーランスの悪魔関係者は生まれるんだ。だけどそんな彼らでも、そうなる前は普通の人間で、学生だったんだ」

まあ、ヤタガラスとかはスカウトとかして就職できるけど、と、男は言葉を付け加えた。そしてそれでなんで周りが優しいのかを理解した。本当に連中は失った時代を俺を通してみているのだ。そして此方を子供として認識しているのだ。

『ま、善性の人間しかままだいまいというのも事実だし、そういう意味では運が良いよね、サマナーは』

まあ、確かに絶対に倒せない相手、というのには今の所マジシャン以外ではエンカウントしていかないし、酒場に来る規格外の連中は基本、自分に好意的だ。考えれば考える程、自分を取り巻く状況が恐ろしくなってくる。言われるがままに従い、力を付けて世界の再生を行っている自分。守られ、教えられ、そして導かれる様にこの道を進んでいる。

だけど本当は何か、致命的な見落としをしているのではないだろうか？

実は何かを忘れていないだろうか？

そんな漠然とした不安と申し訳なきが自分の胸の中には常にあつた。そしてそれを深く考えようとすると、再び狭心症が胸を襲う。考えるべきではない……という訳ではないが、深く考えすぎているのかもしれない。それでもこの業界で優しくされると、無性に不安になる。

「まあ、悪い人たちじゃないってのは解る」

「だろう？ ただの構いたがりなんだよ……まあ、中央の東京という場所のサマナーだからそうである、とも言えるけど」

「地方は違うんで？」

「うーん……ほら、東京って情報と人の集まる場所だからそれなりに弁えている、理解している、能力のある人間が集まって、それが理由で基本的に心の余裕があるベテランか、飛躍を求めるルーキーかとい

う形で分かれているんだけど、後者に関しては基本ガイアかメシアに所属しているのがほとんどだからね」

「ああ、俺も弟子が欲しいというか、推しを遠くから支援したいとか……」

「うん、まあ、そんな感じなんだよ。そう、悪魔業界もネット汚染されている」

酷い話だった。でも、まあ、この業界で戦っている人たちは普通に娯楽を楽しむ人間なのだから、動画サイトやツイッターで遊んでいたりするんだし、そりやそうだよな、と思う。だけど悪魔関係者がコミケに同人誌買いに行く姿を想像するのはなんとというか、面白すぎる。そういう時も乳首シルモヒカン姿なのだろうか、とレベル38を超えていたらしいモヒカンがシブヤ駅へと入って行く姿を思い出した。と、そこで、

警戒に出ていた筈のアンとベルが戻ってくるのが見えた。何かがあったのだろうか？ 少し不安に思いながら迎える様に立ち上がる

と、

「サマ……ナー。扉……みつけた」

「ええー……見つけるのかよここで……」

「探す手間が省けていいじゃない。シブヤが確保されたら直ぐに乗り込めるわよ？」

ベルとアンの言葉に横のサマナーが首を傾げる。が、普通の人に説明したところで理解される様な事ではない。だから態々説明する必要もない。ただ問題は上手く行っているようで、なんかちぐはぐしている自分と周囲の状況だ。

どうにかならないもんか。そう思いながら偶に襲い掛かってくる悪魔を倒しつつ、シブヤ確保のために作戦を終わらせた。



## 再生し始める世界 XII

お仕事は何の問題もなく終わった。

拍子抜けとは思いますが、毎度毎度なんか大きなイベントが発生したのでは正直、心も体も持たない為、これで良かったという感じはある。それで発生した悪魔を討伐した分のマツカの回収やドロップ品の回収で懐が大量に潤い、レベルも十分に上がり、ついに超人と呼ばれるレベル30の領域に到達した。

レベル30からは完全に才能と素質による突破を行うレベルになってくる。これが悪魔人間、デビルシフター、或いは異能者であればこの壁を乗り越えるのは比較的難しくはなく、純粋なサマナーや純人バスターにとつては一つの大きな壁であると言われている。超人とは特別な異能等を所持しない純粋な人間が人の壁を超えた存在である事を示す言葉であり、前世等の関係で覚醒者、仙人なんて呼ばれ方もする。自分の場合、純粋な人間であり、異能もなかったので超人へと覚醒した。

人間を凌駕した人間である為、純粋に寿命が増え、呆れるほどに老化し辛くなり、病や毒に対する抵抗を肉体が取得し、場合によっては属性に対する耐性さえも取得する者も出てくる。そう、超人に踏み込んだ領域はあの聖女や破戒僧と同じ領域なのだ。少し前まではドン引きして眺めていたあの領域に自分も踏み込んだと思うと、少しは困惑する部分もある。とはいえ、あの二人はあの領域に踏み込んでそれなりに期間がある為、此方とは全然練度や経験が違い、出来る事も多い。

とはいえ、超人になったという事は一つ、人間の限界を超えて更なる限界を目指せるという事でもある。ここを何らかの方法で突破した存在は、もはや自力で才能限界を突破出来ている状態であり、相手さえ存在するなら更に強くなって行けるだけの力を持っている。ここから悪魔も人間も、強さが段々と天井知らずになってくる。この領域に踏み込んだ悪魔関係者は漸く一流と呼べる実力を保持していると業界では呼ばれているらしい。

「——あ、質問です」

「では答えよう。なにかな?」

そう言って此方の言葉に答えてくれるのは眼鏡とベスト姿のデビルバスターだった。場所はシンジユクの一角。ヤタガラスの活躍により地上にも結界が張られた事で、シンジユク内部だけであれば今は比較的 안전한状態となっていた。流石にシンジユクから出たら命の保証は出来なくても、地上が結界によってクリアリングされたことよって今では様々な店舗から食料やら物資やらを運び出せるようになっていた。おかげでシンジユクは復興が始まっていた。悪魔に対する攻撃拠点としての防衛構築、そして食料や物資の生産を本格的に行う為の改造でもあった。

そんな中、自分は解放されたシンジユクの中、無人の喫茶店に、デビルバスターとマンツーマンで授業を受けていた。

なんてことはない、マツカを支払って雇ったのだ。

今回のお仕事で、自分がどれだけこの悪魔業界に関して知らないのか、というのを理解した。そういう事を聞ける仲間がいないというのが致命的だった。何せ、力を付けて殴るといふスタンスしか今まで見えなかった所、社会行動が最低限でも取れる様になってきたのだから。ダンテは一応デビルバスターだが、あの人、銃の撃ち方しか教えてくれないのだ。正直、論外というか話にもならない。あの人、というかアイツ飛び込んで派手に決めてやれとしか言えない。

シブヤ解放依頼から数日が経過している。クールマ、チェフエイの変異合体前に色々話を聞いて、サマナーとしてステップアップするべきだ、と判断したのだ。その間に支配人がクールマとチェフエイの合体用の悪魔を確保しているという話でもあったので、合体を一旦待つ事にして、

こうやって、マツカを支払って勉強している。

少しだけ恥ずかしかったが、意外と反応は好意的な物だった。実際、駆け出しサマナーがベテランを雇って教習して貰うのはそれほど珍しいものではないらしい。死亡してもどうにかなるものの、完全死亡したくないのがこの業界だ。その為のセーフティーをかけるのは

当然でもあり、知恵こそが悪魔に対する最大の武器でもあるからして、推奨される行いでもあった。

そういう訳で、この業界に関する話を聞いていた。自分のレベルが30に到達したという事もあって、今の話の中心はそこだった。

「レベル30でなんで一流なんですか？ 悪魔の事とかを見れば正直、まだまだ上がいるし、良くても中堅レベルにしか思えないんですけど」

「うん、いい質問だね」

《先生》は持ち込んでいたホワイトボードでレベル帯を書き込んで行く。駆け出し、見習い、半人前、一人前、そして一流、と。

「基本的にね、30レベルに到達するにはどんな才能があっても最低で10年かかるんだ。今のこの状況と環境が異常で、それを感じないけど昔……まだ世界が崩壊する前はヤタガラスやクスノハの手によって魔界との繋がり是最小限にまで抑え込められ、悪魔達は僅かな異界の中しか存在できなかった。必然、高レベルの悪魔が出現する異界なんて管理されているものだったよ」

「制限されているから自由に戦えず、レベルも上がらない……」

「うん、そして高位異界はそれだけで使用料を取られるものだからね、一回の挑戦で数千万とか場合によっては億。だけどそこに潜らないと強くなることも、強さを維持する事も難しかった。だけどそうやってレベルが30に上がると長い年月を経て、様々な経験から格上でさえある程度どうにかなってしまうサマナーやバスターが出来上がるんだ。そういう経験の持ち主を一流と呼んでいるんだ」

「成程……」

「ちなみに確かに、この業界、クスノハ四天王とかは最低ラインでレベルが70とか80だし、ヤタガラスも上の方を見れば70代がゴロゴロといるさ。でもそれはこの業界全体を見ても少数だからね。というかトップ級をカウントするのは流石に例外なのさ。崩壊前は強い悪魔が出現できても高くて40レベルが良い所で、30レベル環境であれば一流と名乗るには十分すぎるものだったのさ」

まあ、今と昔では環境が違い過ぎるけど、と言葉が付く。そしてお

そらく、この壊れている世界では今まで通りに進むこともないだろう。おそらくはガンガン平均的なレベルも、数も上がって行くだろうというのには簡単に想像できる事だった。昔は出現しなかった高位悪魔が大量に出現する様になっているのだから当然と言えば当然の事だった。

「超人というのは一種のステータスでもあったものだ。そして今、力が必要である状況でそれは何よりも求められる。君の背景がなんであれ、君が未熟である事も関係なく、他の同業者たちは君を戦力としてみるだろう。君が既に特別になりつつあることをしつかり覚えておかなきゃ駄目だよ？」

「はい」

「よつし、良い返事だ。じゃあ次はこの業界の他のサマナーやバスターに関する基本的な共通意識や、それぞれの組織に対する扱いとかも教えて行くのか。たぶん一番君に必要な知識になるからね」

「よろしくお願いします」

◆  
金を出しているものの、学んでいる側である上に必要な知識を与えてくれる教師だ。マツカを支払って学んでいるのだからしつかりと覚える為にも頭を下げて頼み、そして必死に頭の中に授業の内容を叩き込んで行く——学校が終わっても、消え去っても、それでもまだ勉強は終わらないらしい。

「ただいまー」

「おか……え、り……」

もはや見慣れたバーへと帰還してきた。アンが戻って来た此方の姿を迎えてきてくれる。近寄ると両手を取って、それを握ってくれる。嬉しいのだが、最近こういうスキンシップが増えている気がする。なんというか、シブヤ以来遠慮？という物が薄れて来た、というか。嬉しいけどその変化がちょっと怖い。誰かが親密になれば成程、恐れが心の中に芽生える。その正体は解っていた。猜疑心ではない

のだから。

「とりあえず、出来るだけの勉強はしてきた。後数日勉強あるけど」

「ん……合体……準備、できたー……」

「お、マジか。確か合体素材が色々と面倒で調達が大変だったって話だけど」

「ん」

あっち、とアンが店内のターミナルの方に居る支配人を指さした。詳しい話は彼方に、という事なのだろう。そこは素直に従う事にして、肩の上に飛び乗ってくる鳩を受け入れつつ、そのままターミナルの前へと移動する。支配人は既に悪魔合体する準備を整えているように、待機している。

「お待たせ。合体用の素材悪魔が見つかったって話だけど」

その言葉に支配人ルイ・サイファーは何時も通りの煌びやかな美貌で頷いた。

「チエフエイ、そしてクールマは共に珍しい悪魔だ。その最終的な到達点に関しても、かなりの高位悪魔に繋がっている。本体の分霊が欠損したという形で降臨している以上その概念を埋めれば本来の姿と力へと近づいて行くのだが——問題はその欠損情報だ。全く同じものでなくても、埋める様に形と属性を整えればそれでも良いのだろうが、その準備に手間取った」

悪魔合体、概念弱体化、退化させたのを素材に使うて更に上の悪魔を作り、それを別の悪魔と合体させて退化。概念と概念を継ぎ合わせて混ぜる事で疑似的に概念を生み出しているのだという。だが出来るのは悪魔の概念補完ぐらいであり、世界規模となるとリソース不足でどう足掻いても無理との事。

だがこの作業、そして相性の良い悪魔を探すために魔界に一旦突入してきたらしい。なんでも悪魔全書も今は所々破損していて、その修復の為に魔界でヒヤッハーする必要があったのだとか。本当に大丈夫なのかよ？　と思いつつも、頼りになる仲魔を強化するにはこれしかない訳で、思惑がなんであれ、乗っかる以外の選択肢がない。何より、軽くだが普通の悪魔合体施設というのも見て来た。

なんと、普通の合体施設は種族制限が付くらしい。

神霊とかの高クラスカテゴリーの合体不可、特殊合体や変異合体なんて無理だし、大天使みたいなクラスでさえ合体して作り出す事が出来ないらしい。悪魔合体の施設一つをとってもピンキリらしく、ステイブンがここで使える様に作ったものは業界最高クラスの施設だったらしい。

強くなるにはここしかないのだ。

「ところでさつきからあーあー歌ってるの誰だ」

酒場内を見たら、いつの間にかピアノを演奏している目を隠した男と、どこか、人から外れた気配のする女がスタンドマイクを前に、息継ぎをせずに歌い続けている。彼女は此方へと視線を向けると、軽く頭を下げた。それに返す様に此方も頭を下げ、それでバーのカウンターの方に一人、客が増えているのが見えた。

「えーと……？」

「彼らは選択した者の味方——とはいえ、イゴールが足りないがな。ファイルモンも集合無意識内で滅ぼされたまま、ニヤルラトホテプも深淵で微睡む事さえも出来ぬ。そして白痴の王は消え去った夢の中で眠り続ける……」

「支配人？」

「今はまだ、気にする事ではない。君がペルソナ能力に関連する世界へと渡った時にサポートを得られる様にする為の下準備の様なものだ。それよりも悪魔合体を始めよう。悪魔を此方に出すと良い」

最後に一度、ピアノマンと歌姫を見て、空白のキャンバスを横に置いた、おそらくは画家の姿を見た。なんとなくだが、彼らでは自分の力になれないような気がした。彼らが助けられる領域、その根本に関連する力が自分には存在しないような、そんな感覚だった。とはいえ、それは今は良い。スマートフォンのDDSアプリから、ターミナルへとクールマとチエフェイを転送する。それを確認した支配人が頷く。

「では悪魔合体を執り行う」

ターミナルの上にホロウインドウが出現した。先に合体が行われ

るのはクールマの方であった。ホロウインドウの中央にはクールマの存在が表示され、その周りには30を超える悪魔の姿があった。それがクールマを中心に、その欠損情報を埋めて行く様に溶けて混ぜ込まれて行き、クールマという悪魔の存在を一つ上の次元へと昇華させる。それによってクールマの表示されていたホロウインドウが消え去り、そしてターミナルから光が溢れ出す。

数歩、後ろへと下がって距離を開ければ、そこに光が集まり、悪魔の姿を生み出して行く。

今度出現する悪魔は——四足歩行だった。丸い体軀をしており、しかし立派に生える二本の牙が何よりもその存在を主張する。光が消えて行き見えるのは青色の毛皮をした、猪の姿だった。神性なる獣の気配を従え、悪魔合体が完了した。

『我が名は神獣ヴァラーハ！ 1000年世界を支え、そして再誕を司る第三の化身！ 僕の権能はその逸話通り、再誕。一度の絶望、敗北で諦める必要はない。たった一度の滅び、敗北であれば僕の権能でそれをなかった事として再誕させよう。サマナー！ コンゴトモヨロシク……』

「ああ、コンゴトモヨロシク、な、ヴァラーハ」

近づきながら良いか？ と聞いてから許可を貰い、毛皮に触れた。ヴァラーハの体を覆う毛皮はその予想に反して、非常に柔らかく、そして手触りの良いものだった。ああ、これはそのまま枕にして眠りたいレベル。横では同じようにアンがヴァラーハの毛皮に触れ、そしてそのまま体を毛皮の中に埋めていた。

『ふっ、僕の魅力にどうやら参ってしまったようだねサマナー……！ ちなみに今回の化身、ヴァラーハはクールマ同様にサイズがある程度可変自由だ。無論サマナーと人修羅ぐらいであれば二人纏めて乗せられるだけの大きさになる事も出来る。それ以外にも枕サイズになる事にもね！』

「よし、今からヴァラーハ枕にして寝ようぜ」

「さん……せー……」

「ならば本日の悪魔合体はここまでだな」

『まてえええ——!!!』

全員でターミナル前から去ろうとした所で、道を塞ぐようにターミナルからホロウインドウが放たれ、遮った。そこに表示されたチェフエイが半ギレの表情を浮かべていた。

『妾の！ 合体が！ まだ！ じゃろ!?』

『必死ねアレ……』

『蠅王！ 聞こえとるぞ!!』

『嫌ね、余裕のない奴は』

『連中明らかに本気じゃろこれ!?』

『そんな事ないよー』

『ないよー』

『じゃあその猪から手を放して喋れ』

『ちなみに僕の毛並みもある程度可変可能で、戦闘時は鋼鉄を超える強度を出す事が出来るよ』

地味に便利だな、ヴァラーハ。乗り物としても枕としても使えるとは、流石インド神話だ。インド神話関係あるのだろうかこれ？

まあ、あるのだろうきつと、たぶん。とりあえず悪ノリのし過ぎでチェフエイが半泣き状態なので、皆でターミナル前に戻る。気のせいかな、あーあー歌っている人までやや半笑いな気がする。そうやってターミナル前に戻った所で、

『ではさっさと終わらせよう』

『これで二尾だな』

『それ妾弱体化してるあ——!』

ぼちつと、支配人が合体スタートのボタンを押して、チェフエイの電子音声を響かせながら合体を開始した。バーの方ではバンバンバんとカウンターを叩く、中身が子供のイケオジの姿が見える。やっぱりこいつをネタにするのは楽しいよな、と思いつつ悪魔合体が強制執行されているウインドウの様子を眺める。

クールマ——今ではヴァラーハと同じように欠損情報を補うように悪魔合体を行い、変異して一つ上の段階へと存在の次元を上げて行く。



やがて、ヴァラーハの時の様にターミナルから光が放たれる。それが集まり、そして悪魔の形を構成して行く。集まって行く光は人の形を形成する。だが今までの様な小柄な姿ではない。成人した女の体躯になって行く。姿はゆったりとした和と中が入り混じったドレスで、長髪で片目を隠すような黒髪をしており、服の裾からは四本の尻尾が伸びるのが見える。手を袖の中に隠したまま、両手を合わせて恭しくその姿が頭を下げた。

「妾は四尾チエフエイ。騙し、乱し、そして誘惑する悪魔。コンゴトモヨロシク……」

「演出変わってないじゃん……」

「はあー……」

「この態度酷くないかや!? 妾変わったぞ!? 姿変わったぞ? 凄く変わったぞ? 見よ、この尻尾の毛並みを! 触れたら墮落に溺れるこの毛並みを! を!」

「必死過ぎて引くわー」

「妾に! どうしろって! 言うんじゃ!! どうじゃ!? これでどうじゃ!」

ぼふん、と音を立てて煙に包まれたチエフエイがその姿を変身させた。桃色の髪の毛を狐耳を生やした、青い巫女服の様な恰好の獣人に。滅茶苦茶どこかで見えた事のある恰好の姿に、みこーん、と口で言いながらどこかで見えた事のあるポーズを決める。それを見ていたダンテが笑い過ぎてカウンターに突っ伏していた。此方もその姿を見て、静かに視線を他の皆に合わせ、そしてゆっくりとその場から去ろうとした。

「駄目!? 駄目なの!? 何がダメなんじゃ!? これでどうじゃ? 元の小さい姿にもなれるんじゃぞ!?」

「中身に進歩なし、と」

後ろで喚いているチエフエイを放置してカウンターの方へと向かう。ダンテのおっさんは何時も人生が楽しそうで羨ましいなあ、とカウンターに倒れ込んでいる姿を見て、スマートフォンを取り出してD Sアプリを確認する。表示される四尾チエフエイとヴァラーハの

レベルはジャスト30になっている。

チエフエイの耐性は更に優秀になっている。精神、神経系統への耐性を増やしながら体のステータスが大きく向上されている。どうやらロリから卒業した事で、体力的に大きく改善されたらしい。それだけではなく、どうやら専用概念、ブースタの様なスキルを習得しているらしく、チエフエイが行うあらゆる神経・精神系統の魔法はその効果量が上昇するらしい。

SLEEPやSTUN状態であれば効果時間の延長、CHARMであれば傀儡の様に完全に操られる、等とデバフが更に凶悪化された。それ以外にもンダ系統魔法による能力の低下幅が更に上昇したらしい。デバフ、搦め手をメインとするチエフエイの役割をスタンダードに維持しつつ、その効果を大きく上昇させたスタイルは自分よりも格上の悪魔に対して此方側がアドバンテージを得る手段として、非常に重宝する進化だった。それ以外にもどうやら、変身能力によって自分に関連する姿であればある程度自由に姿を変えられる様にもなったらしい。先ほどのみこーん、な玉藻の前もそういう事なのだろう。

『ほれほれ、妾の進化に刮目し、感謝すると良いぞ?』

狐の姿になったチエフエイは一気に背中から駆け上がると、そのまま肩の上の鳩を叩き落してから着地し、四本に増えた尾を体に絡めて来る。挑発するようなその姿を無視して、一瞬でアプリの中へとチエフエイを叩き返してやる。文句の声が聞こえてくるがそれを無視し、次にヴァラーハを確認する。

ヴァラーハはゲーム的に説明するなら、全滅をリセットするという権能を保持している神獣だった。そのステータスは30台に入った事で、今までを超える大きな上昇を経て、クールマとは比べ物にならない能力値を獲得した。おそらく、チエフエイとは違って前に出て殴り合う事を前提とした悪魔であるからこそ、そういう能力の伸び方をしているのだろう。特に体と力の伸び具合がおかしいと表現したくなるレベルで上がっている。

斬撃、打撃、水、氷、地、と保有している耐性が凄まじいほどに優秀となっている。その代わりに新しく核熱属性弱点を得る様になり、

フレイ系統の魔法が弱点となっている。とはいえ、核熱属性の魔法はかなりレアな魔法であり、小型携帯核を保有している人も多いとは思いたくない。というかシブヤでの事はアレ、超例外だと思いたい。

それはそれとして、クールマとは比べ物にならない速ステータスがヴァラーハの魅力でもあった。力・体・速。その三つと比べると魔運知がやや低く感じるが、ヴァラーハはどうやら肉弾特化の化身の様であった。ステータスに関しては完全にサマナーである俺をぶっちぎっていた。頼りになる仲魔の進化だった。

『サマナー、僕も君も、まだまだ旅路は始まったばかりだ。これで満足せずに邁進し続ける事を祈るよ』

そう告げるとヴァラーハもアプリ内部へと戻っていった。

ベルは電撃ガードキルをレベルアップで取得し、ジオダインやマハジオダインが誰が相手でも突き刺さる様になったのが非常に強力だった。ベルには電撃高揚とSTUN確率上昇のスキルがある為、相手がそういう事に対する耐性の無い悪魔であれば、一方的にジオでハメ殺せる恐ろしさがある。

スダマ先輩は大人しく座ってください——使った覚えがないのに何でこいつだけレベル35なんだろうか？俺よりもレベルが高い。お前本当になんなの？もしかして放たれた小型核に対して対抗心燃やしてレベル上げた？どうなのだろうか、そこらへん。

『核の冬を見ながら流し素麺』

『風流……なのか、な……？』

『そんな風流あつてたまるか』

『でも魔界の連中ならやりかねない』

今夜もDDS事情は複雑怪奇であった。それにしても三尾とクルマ時代は比較的短かったなあ、とぼやく。まあ、とんとん拍子でレベルが上がったのが原因なのだろうが。これ以上にレベルを上げるのは流石に難しいし、しばらくはこいつらと顔合わせだ。大事にしておかなきゃならない。そう考えつつカウンターに肘を乗せて息を吐き、

「次の扉の準備しなきゃなあ……」

「くるっぽー。確か次の扉の名は——」

叩き落されていた鳩が肩の上に再び着地しつつ、言葉を作り、それにアンが続いた。

「大正……20……年」

《大正二十年》と扉には彫られていた。即ちそこに関連する世界への移動を次回は行う事になっている。とはいえ今回は距離を開けて確認した。前回の様にいきなり飲み込まれたくはないので。そのおかげで今回は色々と情報収集と事前準備が出来ている。こうやって勉強したり、悪魔合体が出来ているのはそうした結果の一つだ。

とはいえ、

「大正二十年なんて存在しない筈なんだよなあ。俺の記憶が正しければ大正15年までしか存在しなかつたはずだし」

「つまりそういう歴史を進んだ世界、という事なのだろう。最強の守護者が存在する時代、時空だ。間違いなく記録に成功すれば、この日本という大陸を復活させるだけの情報概念を取得する事が出来るだろう」

「あの時代にはライドウがいるしな」

クズノハライドウ。人類最強議論の話になるとダンテと並んで名前が出てくる存在だった。その中でも14代目ライドウは、永世ライドウと呼ばれるほどに次元違いの実力と功績を打ち立てた存在である、と支配人が説明する。大正20年の存在する世界では、そのライドウが事件の中心を駆け抜け、解決しまくっているとの事だった。

ダンテ級の超人がいる世界とか恐ろしすぎる。

というか戦艦斬りつてなんだ。本当に人類かそれ。

「まあ——そこまで不安になる必要はないだろう」

支配人がカウンターに戻り、目の前にコーラフロートの入ったグラスを出してくれながら言う。何時も思うが、悪魔王の癖に妙にウェイター姿が似合う。これが本当に魔界を支配している悪魔達の王様だとか未だに信じられない部分がある。とはいえ、コーラフロートには罪がない。横に座ってきたアンが欲しそうに見ているので、スプーンを受け取ったらアイス部分とコーラを軽く掬って、それをアンの口元

へと運んで餌付けする。

俺もここら辺は慣れたなあ、と思いつつ、支配人の言葉に耳を傾ける。

「主役でも主人公でもないのだ。放っておけば勝手に解決する。別の世界はそのように出来ている。最も、その主役に干渉して殺せば話は変わってくるが———今の實力ではライドウに真つ二つにされるのがオチだろう。敵対する必要も、味方をする必要もない。真の異邦者として、星と宙と世界の外側からの来訪者として、物語には最初から関係のない存在だ」

ま、と横で、突っ伏していたダンテが体を起き上がらせながら呟く。「お前の心がそれを許せるなら、つて前提だがな。断言するけど、お前は絶対に見過ごせないタイプだからな。必要のない時でも手を出さだろうよ。Hey! 俺にもストロベリーサンデーをくれよ!」

それは、どうなのだろうか、とアンにコーラフロートを餌付けしながら思う。友達を、家族を、知り合いを全て捨てて逃げ出した俺にそんな善性はあるのだろうか？ 俺がそこまで動けるかどうかは解らない。

「それを悩む必要はないのだ、サマナー。汝、心のままに生きよ。我はそれを慈しみ、許そう。その心の奥底には見捨てられない善の支柱が存在する。そしてその天秤は必ずサマナー自身を救うであろう。なあに、次回は私も一緒だから心配する必要はない」

鳩がぱたぱたしながら自信満々に胸を叩いているが、不安になる。ステイブンから《アナライズジャマー》を渡された事で、此方の悪魔に対するアナライズ行為は無効化できるようになった。流石に大天使たちや超高位の悪魔等、直接面識や気配を知っている連中に対しては無意味だが、それでもアナライズされなくなるという事はそれだけで便利だし、アドバンテージになる。

それにメシアやガイアの前で使ってもバレないというのは便利だ。何せ、バツファアと回復を兼ね備えている仲魔なのだから、居ないと困る。存在そのものが爆弾なのに編制必須メンバーという酷い縛りプレイはどうかして欲しい所だが、今はその事に頭を悩ませるこ

とを止める。

とりあえず、前を向こう。

扉の向こう側への旅路に備えて準備を進め、そして近いうちに――突入する。

### 三章 覚悟と友情

大正二十年

場所はシブヤに戻る。

シンジユクのヤタガラスチームの手によってシンジユクからシブヤまでの線路が結界によって確保された。これによってシンジユクからシブヤへの移動の安全は確保され、線路そのもの上に商店街の様な空間を形成しつつ、シブヤへの安全なルートが開通された。この恩恵に預かるのは新しい場所への略奪や物資回収を行う組織や悪魔業界チームだけではない。線路の横を悪魔を避ける様に移動する人達も線路へと飛び込めば、悪魔の襲撃から逃げ切れるのだ。人間にとっての安全地帯が増えた事で、人間という存在の力が増して行き、社会が回復し始める。

自分も普通、シブヤへと向かうには悪魔と何度も遭遇し、警戒しながら進む必要があるのだが、これからはその心配をする必要もない。ヴァラーハをシンジユクで召喚し、直径6メートルほどの大きさにまで巨大化して貰えば、その背中にアンと共に乗り、線路の上をヴァラーハに疾走させる。速ステータスが大幅に上昇した事もあって電車なんかよりも遥かに早い速度で疾走する巨大な猪の姿は爽快であり、ちよくちよく現れるガラの悪い、絡んで来ようとする連中を跳ね飛ばしながら進んだ。

そうやって最初は少し困ったシブヤにもあっさりと到着出来た。

ヴァラーハの背から飛び降りて軽く頭を撫で、アプリ内部へと戻す。ブルームの方が基本的に一人乗り仕様なので、こうやって複数人乗せて移動できる仲魔の存在は戦略とは別の所で非常に助かった。ともあれ、そうやって到着するシブヤ駅内部は割と人気が無いが、

外に出ると違う。

シブヤのハチ公前からスクランブル交差点付近は完全に露店や屋台で溢れる、復興中の街の姿を見せる様になっていた。

シブヤに來ているメインはサマナーやバスターといった悪魔関係

者であり、まだまだ結界によって確保されていない区間の多いシブヤは、今では確保されているシンジユクとは違って拠点が近く、尚且つ即座に物資を売る事の出来る便利な狩場だった。その為、どんどん人が集まって復興が始まっている。そこには何人も、同じシブヤ解放作戦に参加していた姿が見えて、ヴァラーハに乗って来たのを見てこつちに手を振る姿が見えた。返す様に手を振り返し、向かうのはシブヤ駅近くのガード下だった。

上を走る建造物の影響で暗くなっている空間の中、本来であれば闇に覆われている場所には光源があった。あのナカノで目撃したのと同じ色、形をした扉であり、そこには《大正二十年》と彫られてあった。それを確認してから、視線をアンへと向けた。此方の視線を見たアンは頷きを返し、手を握って来た。その柔らかい感触を感じながら唾を飲み込んだ。

「此方リユージ、目的地に到着……これより世界移動を開始する」

『此方ステイブン、君の幸運を祈っている。恐れる事無く進むと良い』

『おい、土産忘れるなよ』

「ダンテエ……」

気楽だなあ、あのおっさん。そう思いながらもなぜか苦笑出来てしまふ。そのおかげで肩から力が抜けるというのも事実だった。ああいう余裕の持ち方はやはり、羨ましいかもしれない。真似したくはないが。まあ、それはともあれ、少しは力が抜けたので前へと踏み出しやすくなった。

「よし——行こう」

「ん」

頷いたアンの手を引きながら前に進み、世界を渡る扉のノブに触れた。抵抗もなくそれはあっさりと開き、そしてその隙間から目が眩むような光が溢れ出し、一瞬で姿を飲み込んだ。目が開けられない光と浮遊感の中、見えないが自分がどこかへと進んでいる、という感覚だけはあった。一回目とは違い、意識した移動、そして覚悟が出来ていたこともあって、しっかりと意識が保たれていた。



ぐにやり、と世界が歪んで、そして未定義領域を一気に突き抜けた感覚があった。周囲から感じる光もそうやって消え去り、そして漸く、前へと踏み出す事が出来る。

そうやって見えたのはぼろぼろになった廃屋の姿だった。

床や壁、天井は崩れており、人の気配のない廃屋、そのエントランスホールとでもいうべき場所に世界を繋ぐ扉が繋がっていた。世界扉を抜けた所でルーチェ&オンブラを抜き、静かに警戒しつつ辺りを見回し、悪魔の気配や、危なそうなシステムが存在しないのを確認してから、ゆつくりと銃を仕舞い、警戒をアンにバトンタッチさせながらアプリを開く。《ワールド・レコーダー》を起動させ、そのまま世界の記録を開始させる。

『アプリを起動しました。世界の情報概念取得に入ります——』

「よし、成功した。確かに異世界だ」

スマートフォンをポケットの中に押し込んで、《大正二十年》にちやんと来れた事を確認した。これが元の世界であれば、普通にアプリは稼働しないので解りやすい判別方法だった。そうやって終わった所で、ふう、吐息を吐きながら周囲を見渡す。

「ここは……どこだろう？」

「んー……？」

その言葉にアンも首を傾げていた。

大正二十年がどういう世界かは知らないが、現代における大正時代は和洋が融合し、日本が現代化を進める真ただ中の時代であった筈だ。大正浪漫——とは良く大正を題材として扱う作品やゲームで聞き慣れたフレーズ。和装と洋装が融合したようなユニークな街並みと服装、外観、それらが見られる時代でもあり、他の時代にはない積極的な交流と文化の進化が見れる時代でもあった筈だ。

もうちよい、歴史を勉強しておけば良かったと思う。

「ここは洋風の屋敷だよな？　なんで焼けてるんだ？」

見やる屋敷は所々崩壊し、そして焦げている。それを確認しながらとりあえずは外を目指す事にする。実際、出口は目の前にあるので出るのは難しくなかった。焼けた廃屋を玄関口から抜けて、

外へと出た。

そこに広がっているのはまるで異世界の様な風景だった。  
土だ。

見慣れたアスファルトではなく、土が整備された道路となっていた。その中央には色が変わっておそらくはアスファルト？　なのだろうか？　そこまでは解らないが、それに近い色をした整えられた道路、その中に埋め込まれた線路が見える。ちんちん、と音を鳴らしながらその上を路面電車が走り、人々が道路を歩いているのが見える。そこには現代の様な車の姿は全くなく、轆かれる事を考えずに歩いている。現代ではおそらく考えられない光景だ。うわあ、とレトロな風景を見ているのに軽く驚愕し、声を漏らす。

歩いている人々も服装はまるで違う。映画や小説で見る様な古い和装をしており、和装と洋装の中間の様な、時代の変わり目の恰好をしているのが見える。正直、滅茶苦茶かつこいい、というか惹かれる。すっげえ、と声を漏らす。

「これが大正浪漫……！」

『心なしか楽しそうね』

『前の世界でもこんな感じじゃったぞ』

『崩壊世界と比べれば物資に余裕がある時点で大体天国だよね！』

それな、とヴァラーハの言葉に同意する。とはいえ、まさかタイムスリップ染みた事を経験する事になるとは思わなかった。流石にこの未知の経験には心が躍る。道路はまだ完全に整備されていないのか所々ボコボコになっている様な気がする……まだ道路整備している最中なのだろうか？

「つと、ステイブンからメールだ」

スマートフォンを取り出し、確認する。これより記録が完了するまでは自由時間ではあるが、いくつか気を付けなくてはならない事が存在する、との事。

まずここは大正二十年——つまりは1931年

第二次世界大戦まであと数年というカウントダウンが始まっている時期である。此方の世界には海外が存在する為、そのつもりであれ

ば今からドイツに乗り込んで軽く第二次世界大戦を誘発するのも終わらせるのも自由であろう、との事。だが日本国内での活動は常にクズノハの存在がある為に留意されたし。

クズノハ。それは日本における最強の退魔集団、退魔組織を意味する名前であり、一族出身のサマナーはその名を継いでいる。所属する戦闘員は最低で超人レベルはあるとされている変態戦闘集団でもある。日本国内にはどこにでも目を持っており、そしてクズノハ四天王と呼ばれる超エリート戦力を保有しているという事もある。国家を守護する事が第一であり、それ以外の事に関しては極端に興味を持たない。とはいえ、ダークサマナーと呼ばれる裏の法を守らない存在に関しては積極的に粛清する方向性を持っている。敵対する事は即死を意味する。

「なるべくクズノハとは会わない方向に行くとするとして……えーと」

アンの方を見ると、髪の毛の端で遊んでいた。アレは何だろうか……モミアゲ？ をなんか、角ばらせて遊んでいる。偶に妙に子供っぽくなる姿を見てから、メールの続きを見る。

また大正二十年にはヤタガラスも存在する。仕事を受けて生活するならクズノハではなくヤタガラスを探すが平和的である。それに勝手な行動はクズノハのマーキングにも繋がる為、先にヤタガラスに接触し、サマナーとして登録したほうが安全である、

「……か。とりあえず換金できそうな宝石は結構あるし、ヤタガラスを探してそこでお金を作る、寝る場所を確保する、そして適度に事件に巻き込まれない様に生活する？」

「ん」

アンはそれに異論を持たなかった。と、周辺へと視線を向ければやや視線が集まるのを感じていた。余り往来の中で喋るもんじやないな、とスマートフォンをポケットの中に押し込んで歩き出す。その動きに直ぐに追いついたアンが腕を絡めてくる。視線をアンの方へと向ければ、此方を見て首を傾げて来る。余り深く考えずに動いているのだろう、と自分に言い聞かせて変に期待を持たない様にしつつ、歩

き出す。

とりあえずヤタガラスを、そしてサマナーの働き場所を探すのが目的だ。

……だがこの場合、どうすればいいのだろうか？

現代ならまだいい。ある程度組織の居場所が解っている。だが大正二十年なんて生まれる前の話だ。流石にどこに行けばいいとか、そういう事に対する一切の知識がなかった。このまま大正の街を歩きまわっていてもぶつちやけ、答えは出ないのでは？　と思わなくもない。とりあえずどこへ行くべきか、と考えだした所で、

『とりあえずしばらくは純粹に大正の街を楽しみなさい』  
「ベル？」

『サマナーの事は後から簡単に接触出来るわ。だから今は軽く街を散策しなさい。しばらく居る場所を知っておくのも大事でしょう？　仕事仕事って考えていても疲れるだけよ。そこは仕事のプロフェッショナルとして断言するわ。そればかりだと最終的に部下も逃げ出すし』

実感の籠っているベルの声にうつす、と答える。とりあえず視線を集めているので移動しつつ、まずは大正というこの時代を把握し、ここがどの場所かを理解する為にも——この街を散策する事にした。



この街を帝都と呼ぶらしい。

東京ではなく、帝都。根本的に世界が違うというのを理解させられた。とはいえ、創作では良く聞くような名前だし、あっさりと受け入れられる事が出来た。何よりも聞いた事のない街の名前ばかりではあるが、知っている言語、日本という国、そして文化はある程度馴染みのあるものだったというのが幸いした。これなら普通に歩き回っても話を通じる。そのおかげで間違えたり迷ったりすることはなかった。

大正時代、洋装を纏い始めるこの時代は洋風のお店が木造建築等と共にみられる様になり、道路も国道整備が始まるらしく、所々土の道

路、そして石畳の道路とあべこべな場所が出来上がっている。整備が進んでいる区画は大きな屋敷などが存在する所であり、どうやら金のある所から整備が進められているのはどの時代も変わらないらしい。

そんな帝都の街並みをアンと歩きながら、少し買い物を楽しんだ。

なんと言ってもまず売っているものが違う。セブンイレブンやローソン、ファミリーマートなんてものはこの時代には存在しない。何か欲しければコンビニに飛び込んで全部揃えるということが出来ないのだ。コンビニの様な便利な場所がない故に別々に買い揃えずなくてはならない時代、いろんな店舗が並んでいる。此方に居る間はそういう消耗品も別々の店舗で購入しなきゃならないんだな、というのに歩いて気づかされる。これが割と楽しい。今の生活では見る様な事がない煙管のお店なんてものも見かけた。まだ煙草を吸うつもりはないが、思わず中に入ってしまい、言われるがままに一つ購入してしまった。

そこから更に歩いて、今度は洋風の喫茶店を見つけた。中に入ってみればちゃんと洋風の内装に、洋食を販売できる場所だった。第一次世界大戦が終わってからある程度年月が経過しているが、それでもまだ日本がこういう所には敏感なのでは？　と思いつつもあったが、そこまでという訳ではなさそうだった。というより積極的にここから洋風を取り込む事で発展しようという気概さえ感じられる。

ここから教科書で学ぶような、あんな恐ろしい状態になるとは思いもできない。

とはいえ、第二次世界大戦に巻き込まれる様な事は自分にはない。何よりもレベル30もあれば核兵器——つまりはフレイダイン級の魔法に集中して防御を固めればなんとか耐えられるレベルでもあるらしい。核兵器と言えば人類抹殺の兵器類の中で極限まで恐れられる兵器だ。一般人からすれば身近に潜み続ける恐怖の象徴でもあるだろう。超人レベルともなればそれに耐えられる、と聞かされると色々自分の強さが解らなくなってくる。

超人、覚醒者、仙人、どれも人を超えた存在。ルールが通じないの

には少し、不安を覚える。

まあ、そもそも核兵器に巻き込まれるのってなんだよ、という話なのだが。日常生活で突然核が落ちてくるって理解できない。発狂したアメリカ大統領がうっかりボタンを押してしまったのだろうか。そんな本当にくだらない、中身の無い事を考えながら外に出ている喫茶店のメニューを眺めた。

そう、カレーがあったのだ。

急いで適当な宝石店に入り込み、宝石を一つだけ売り飛ばして資金源にしてから再び喫茶店に飛び込んだ。

大盛のカレーを注文できるのでM a g補給の代わりに兼ねて注文し、それを食べてみるのだが、現代で食べるカレーとは全く味が違う。現代で食べるカレーは研究されているのか、或いは味覚に違いが出てきたのが影響か、非常に味が濃く、そして同時に味が辛い物が大人のメインとなっている。だがここで食べるカレーは辛さが控えめで、やや味が薄く感じられる、今まで食べて来たカレーとはちよつと趣が異なつたタイプのカレーだった。

そこは少しだけ残念だと思いつつ、この時代には珈琲も出回っていた。それを口にしつつ、此方は時代が変わつてもあまり味の変わらないものだな、と思わされた。

だが良く考えれば大正という時代は明治維新以降の時代であり、超急速に近代化と西洋文化を取り入れた時代でもあつた事を思い出せる。何よりここは大正二十年、つまり自分の世界で言えば昭和五年相当の時代でもある。

大正という時代に対する馴染みは正直な所、割と薄い。だが昭和という時代であれば寧ろ聞き覚えがあるし、良くネタにされたり、現代でも昭和生まれの人が見えるのだから、そこまで遠くは感じない者だ。何より昭和は1989年、64年までである。その事を考えると比較的近代的にも感じられる。第二次世界大戦、昭和三種の神器、そしてレトロ感の感じられる街並み……昭和はある程度は既知の範囲内だった。大正二十年ではなく、昭和五年と考えれば少しだけ、解りやすくなるのかもしれない。

そうやって喫茶店で食事を終わらせてもまだまだお金には余裕がある。お腹がいっぱいになって満足し始めると適度に散財したくなる。正直、サマナー関連の施設の支払いはマツカで統一され、それで行えるらしいので、ある程度普通のお金を使い果たしてもマツカさえあればなんとかなるのだ。故に散財してもいいよな、と言いつつ完了させて、今度は服屋に突入した。

無論、アンに何か、服装を新しく与える為である。

月光館学園のレプリカ制服姿の此方は、まだいい訳が通用するが、歩いている間にアンへと向けられたオープンスカートワンピースとスパッツ姿はどうやら刺激が強いらしく、物凄く視線を集めていた。なのでここはひとつ、アンの為になんか大正っぽい服装を探すべきではないかと思った。

そんな所で、ちよつと高そうな店内に入る事にした。そこで今までは沈黙を保ってきた《エネミーソナー》が僅かな反応を示すのが解った。店内に入った所で軽く足を止め、店員が此方へと視線を向けてくるが、片手を上げつつ笑みを浮かべる。

「ああ、どうも。ちよつと大陸の方から来たんですけど場所に合った服が欲しくて。値段は気にしないので彼女に似合いそうなものを見繕うの、お願いします」

「成程、それでは此方へどうぞ」

アンが一度此方へと振り返るが、大丈夫だと軽く手を振りながら店内へと進んで行く姿を見送ってから眼鏡に表示される《ハニー・ビー》と《エネミーソナー》で軽く、今居る店が囲まれている事を察知した。赤い点が幾つか見える。これに遠隔でアナライズが行えれば楽なんだけどなあ、と思いつつも、アプリ内部の悪魔へと語り掛ける。

「ベル、これを狙ってたな……」

『人修羅が普通に出歩けばちゃんとした国家であれば直ぐにバレて目を付けられるものよ。探すよりも呼び出したほうが遥かに楽でしょう？』

「魔界にはどうやらほうれんそうの概念がなかったらしいなあ、おい」  
もしかして魔界とは面白芸人枠の集まりなのでは？ と最近では

思い始めている。何よりもトップがアレなのだから、その下もだいたい面白いのではないかと思いつ始めている。何せ、トップがシェフでウェイターやっついていて、その右腕が今、人修羅とかいう生物に似合う和服をアプリーの中から選んでいる。お前ら少々フリーダム過ぎない？というかアンに対する好感度高くない？ その欠片でもいいから此方へと向けてくれない？

と思うとアンがアピールしてきて心臓に悪いので、止めておく。

と、そんな事を考えているうちに赤い点が囲む様に配置されているのを確認した。そして店の外、正面に眼鏡を装着したスーツ姿の男が見えた。髪形も七三分けで、現代にも通じそうなサラリーマン姿だった。サラリーマンなのだろうか？ そんな概念、この時代にあったのか？ いや、ないだろう。という事はなんか別の存在なのだろう。心の中で警戒心を上げつつ、何時でもルーチェ&オンブラを出せる様に意識している

「――」

ばさりとスーツの裾をたなびかせながらスーツの男は入店した。異様な気迫とでも言うべきものを背負い、光が反射する眼鏡はどこか、怪しさとも言える雰囲気纏っていた。この男、ただものじゃない、と軽く息を飲みながら構えそうになった瞬間、スーツの男が一気に前に出た。

滑る様な動きで足を揃え、背筋を伸ばし、そして――飛んだ。

その瞬間、店内の時間が停止した。

男はまるで鳳凰の様な華麗さで空へと飛びあがり、大きく羽ばたきながら空中で回転を加え、そしてそれを圧縮する様に膝を、腰を、肘を曲げて行く。体を曲げる様な姿勢に見えて違う。目の前まで飛び上がったスーツの男はその両手に小さな何かを持ったまま、そのまま落下し始める。その姿に驚愕している間に、

音もなく、すつ、と見事に着地を決めていた。

膝を曲げ、体を縮めている様に見えて――違う。そのポーズはどこか、訴える様なものを感じる雄大きさを秘めていた。それを見てしまった者は眼が離せなくなり、視界の暴力とでも表現すべき力を感じ



て視線を向けてしまう。

そう、それは訴えるべき姿勢。見ていられるだけでどうしても日本人であれば、理解してしまう。それは卑屈になる為の動きではなく、どんな業界であれ、日本人が最後の最後で取り出すべき最終手段、最終兵器、それを初手で抜いて来たのだ。

それは、

——どうしようもなく、土下座だった。

『なんじゃこれ』

『見事な形をしているね……！』

「……！」

思わず、目の前で飛び上がりからの垂直落下土下座という見た事も想像したこともない動きを達成したスーツの姿に、今までのやばいとは別方面でのやばい、という物を感じていた。命の危機とか、そういう領域とは別のヤバさ。俺の正気は大丈夫かな？ とかいうサニティの方を疑いたくなるような意味でのヤバさだった。これならまだ悪魔と戦っている方がマシだった。

「初めまして、私はヤタガラスに所属する者です。平和的な交渉を担当させて貰っている他、スカウトマンを兼任している西田と申します」

「ヤタガラス」

「これは名刺です」

どうしよう、足元で土下座している生き物が何時の間にか名刺を手にとそれを突き出す形で土下座していた。脳味噌が理解を拒否していた。なんか、こう、彗星がばあ、っと出ては消えるのが見えてくる気がする。

「おかしいなあ……俺の知ってるヤタガラスはもつと、こう、秘密組織っぽくて、かつこよくて……うん……」

現代で見た命を懸けて結界を構築して人類の生存圏を確保していた姿が一瞬で崩れた。

どうしよう、この状況。そんな考えに顔を両手で覆う事しか出来なかった。

## 大正二十年 Ⅱ

「えー、あのー、あー、はい！ そのー、ですねえー、私はー、そのお……はい！ 西田、と申しまして……」

「お、おおう……」

場所は変わり、ヤタガラスのスカウトマンと名乗る男が連れて来た別の喫茶店へと変わっていた。アンの服を買うだけの時間が有ったので軽く買い物済ませてからではあったが、服屋を出て喫茶店に入り、テーブルを挟んでスカウトマンの西田と相對していた。未だに《エネミーソナー》には外部から此方を追跡する赤点の存在を示しているし、マークは外されている訳ではなかった。ただなんというか、スカウトマンの滅茶苦茶腰の低い態度には驚かされている。喫茶店に入って新しく珈琲を注文しつつ、どうしたもんかこれ、と西田を眺めつつ考えていると、

『あまり油断しない方が良いよサマナー』

と、ヴァラーハがDDSから警告してきた。

『うむ、この者はどうやら完全に演技をしている様子じゃからの。道化を演じる事である程度喋りやすくしている様じゃからな』

うわあ、怖い。心の中でガードを開けつつ、うだつの上がないサラーマンの様な喋り方をする西田の言葉に耳を傾けつつ、

「それで、えーと……スカウトマン、だっけ？」

「ええ、そうです。実は唐突に帝都に超人と中々力のある魔人の気配が増えたもので。しかもそれも隠さずに歩き、買い物を楽しんでいるとなると、こう、目的が解らない、と言いますかあ……その、判断に困りましたが、どうやら悪性ではなく善性の存在に見えますし、帝都に害にはならなそうだなあ、という判断から接触してみた次第ですてえ」

「ああ、成程。それなら心配はない。此方はなんというか、観光半分でちよつと遠くから帝都に遊びに来ているだけだから。一カ月か二カ月もすれば帝都を出て、元の場所に戻るよ。まあ、それまでは観光したり、遊んだり、こつちで仕事を探して住める場所を探さなきゃいけ

ないんだけど。帝都やヤタガラスに対する害意はないよ」

「ほうほう、成程、そーでしたか。いやあ、そう言つて貰えると安心ですねぇ」

『真偽の呪符辺りでも使っているのかのお？ 言質を取れたから露骨に安心しておるわ。まあ、いきなり超人が暴れ出せばクズノハがおるとはいえ、到着までに街の一つや二つは消し飛ばせるだけの力はあるうから当然と言えば当然であるか』

『まあ、サマナーにそんな事は絶対に出来ないでしょうけど』

そこ、煩い。DDS内部の悪魔どもを一喝しつつ、それで、と西田へと向き直る。隠す必要のない事を口に出して、安心させてしまおう。

「ぶつちやけ、しばらく帝都に滞在させてくれればそれで他に求めるものはなにもないんで。いや、まあ、お仕事の仲介か紹介でもしてくれたら嬉しいんだけど。どこへ行けばいいとか解らないから」

それを聞いた西田が成程成程、と呟きながら頷き、そしてそうですね、と口を開く。

「なら此方で仕事を斡旋しましょう。ついでに住む場所も」

それに即座に返答してきた西田の言葉にふむ、と考える様なふりをする。いや、割と真面目に直ぐに食いつきたいのだが、そうやって食いつくと安く見られるものだ、と教わっているので直ぐに食いつくようなことはしない。その間にDDSからアドバイスしてくる仲魔達の声に耳を傾ける。

『まあ、十中八九超人級の実力者に首輪をかけておきたいのでしょうね。貴方と人修羅だけでも十分に破壊を巻き起こせるし、発生してから対処するよりは事前に対処方法を用意しておく方が楽だし。何よりも満足できるものを用意して満足させられるのなら、それで十分よ』

『下手な敵対よりも飼い殺し。基本じゃな』

「無論、ヤタガラスの紐付きになれと言っている訳じゃありません。どうやら転移で日本国内へと飛んでこれる技術のサマナー、我々としても下手な敵対はしたくない所です……」

「いや、此方も長く滞在するつもりはないからな。家賃代わりに依頼を2、3程回してくればそれで文句はない」

「おお、そうですか！ では細かい話に移りたいと思いますが――」

「あー……そういう話は仲魔の方が得意だから」

「……って、ちよつと、サマナー！」

面倒だから後は任せた、とベルを召喚する事にした。一瞬、身構えられるも、スーツにサングラスの姐御ルックのベルが出現し、入れ替わる様に座りながら足を組むと、一瞬で西田の気配が変化し、戦闘態勢とも言える交渉モードに突入するのが見えた。なんとなくだがこのまま俺が喋っていると徹底的に筆られそうな気配がしていたしバトンタッチさせたが、これで正解だった。

「俺とアンの平和な帝都生活の為に頑張れ、頑張れ」

「後でジオハメするわよ、サマナー」

「やめろ、俺に電撃耐性はないから、マジでやめろ」

「だ……め」

「……仕方がないわねえ」

アンの言葉が決定打になり、制裁を諦めたベルは魔界での手腕を発揮する様に――或いは日々、悪魔王に投げつけられている案件を処理するかのようになり、一気に仕事に乗り出した。或いはアンという存在の為であるからこそやる気を出しているのかもしれない。そんな事を考えながら、交渉人西田がベルと戦う為に、

横にスライドしてお互いに土下座とその妨害合戦を繰り広げ始める非現実的な姿を見た。

◆

そして、ベルのおかげで何とか交渉が纏まった。ヤタガラスの目的は国家の守護であり、見慣れないサマナーが歩き回っているのが非常に不安であるから接触したというとても良く解る話だっただけだった。ベルが言うにはフリーのサマナーであればそのままヤタガラスに取り込む事も考えていたが、そもそも帝都を出て行くつもりである

ならば其方方面で交渉するのも難しいので、帝都での一時的な滞在場所と、そして給料を提供する代わりに、帝都で発生する幾つかの悪魔関連の仕事をこなしてくれれば良いという運びになった。

ちなみにこの話、最初は穴だらけであり、キチンと話を詰めない限りは無限に仕事をやらされたり、ヤタガラスの監視員と生活させられたりで、ベルに話を任せていなければ面倒な事になっていたという話なので、判断は間違っていないかった。細かい話は頭の隅の方に押し込んでおくとして、

ベルと西田の交渉の果てに、念願のマイホームを手に入れる事が出来た。

しかもなんと帝都の一等地、という事で手に入れた家は昔ながらの武家屋敷風の建造物で、トイレや風呂とかは現代風にカスタムされているタイプの家だった。ヤタガラスが保有しているセーフハウスとか、要人を囲ったりするための場所だろう、とベルは言っていた。

全体的に広く、自分の実家や住んでいたアパートとはまるで違う上に、あのステイブンの酒場の様に狭さもない。いよいよ、自分だけの城を手に入れたような気分になって、非常に気分が良かった。そしてマイホーム獲得記念という事もあり、所持している悪魔を全員、一時的に開放する事にした。というのも敷地内であれば、悪魔を自由に召喚していても問題なし、というのをヤタガラスから教えられた為、今までの様にDDS内に押し込みっぱなしにする必要もなくなったのだ。

そういう訳で庭付きの武家屋敷の縁側でヴァラーハ、チエフエイ、ベル、鳩、そしてスダマを召喚する。縁側から座った状態で召喚しつつ、

「それじゃあ敷地内で暴れない限りは自由行動。午後からはなんでもここ、冷蔵庫が置いてあるらしいのでその中に食べ物をぶち込む為に買い物って事で。それまでは解散！俺はここをちよつと探検する！」

『悪魔王シエフ』

「人の王をシエフ扱いしてるんじゃないわよ邪神。いや、呼べたら料

理させればいいし便利だつてのは解るけど」

そう言うのとベルはスダマでリフティングし始めていた。蹴り上げる度にスダマが爆発しないか滅茶苦茶不安になるのだが、どうやらベルはスダマとパーフェクトなコミュニケーションが取れているらしい。スダマが両手を広げながらわああい、と楽しそうに蹴り上げられ、それにベルがしばし付き合っていると、アンに呼ばれて奥の方へと去っていった。スダマも蹴り飛ばされて庭の池の中に突入、そのまま池の中でぶかぶかと浮かんでいる。

「じゃ、妾はここで日に当たってしよう」

「僕もしばらくはここでのんびりさせて貰うよ。中々DDSの外でゆっくりする機会はないしね、今のうちに太陽スーリヤの暖かさを堪能させて貰う事にするよ」

「くるっぽー」

そう言うのとチエフェイは四尾の狐の姿になって縁側でまるまって日向ぼっこを始め、そしてヴァラーハもイケメンの姿に変態し、そのまま庭の中央で半裸になって太陽の光を浴びる様に目を閉じた。どうやら陽の光で沐浴しているらしい、ヴァラーハは。なんというか、実にインドチックな物を感じる。鳩？ 奴は池でばしゃばしゃし始めている。完全に鳥類だった。

「つて、俺一人かよ……」

自由時間を与えた俺が言うべきではないかもしれないが、それはそれとしてお前ら自由過ぎない？ ベルはアンの事好きすぎない？ いや、アレはなんというかお姉ちゃん的構いつぶりだよなあ、と思いつつ呟く。とりあえずウチの仲間たちはまるで探検に楽しさを見いだせないらしい。悲しく思いつつも、基本的に戦う時以外は連中はDDS内で待機状態なのだから、こんな時ぐらいは自由に出してやるか、と納得しておく。

ともあれ、探検タイム。現代式のトイレがあるとは聞いているが、まずは本当かチェックせねばならない。靴を脱いで中に入りながら、まずは畳張りの居間を見つけた。畳——そう、畳だ。実家でさえ見なかった畳がなんと、あるのだ。靴下を脱いでちよつと素足になっ

て、そのままそれでちよつと畳の感触を足の裏で感じる。

ちよつとだけつるつとした、言葉にも出来ないこの感触、実に畳である。

無駄にテンションが上がる。ひよつほい、と声を出しながら廊下に出て、歩き回ってみる。適当に入ってみる部屋はどうやら台所だった。サイズはかなり大きく、自分が知っているのとは違う形状をしているが、冷蔵庫が置いてあるが……キッチンが当然ながら自分の知っているシステムキッチンとはまるで違う環境なのは困った。洗い場は解るが、他の火の事とか、米とかどうすりゃあいんだ、と軽く思えた。

「ああ、飯炊きなら妾に任せると良い。現代の物よりは此方の方が妾には馴染み深い」

「ん？ あ、駄狐」

「駄狐ではないわー！」

振り返れば先ほどゴロゴロしていた筈のチエフエイがそこに居た……と思つたが、何か妙に小さいし、気配が弱い。サイズも掌に乗るレベルのサイズであり、妖精さんとも言いいたくなるサイズなので、それを片手で掴んで、掌の上に乗せる。ピクシーが確かこんなサイズだったよなあ、と崩壊世界で見た姿を思い出す。

「どうしたお前」

「式じゃよ、式。四尾ともなればある程度の呪術も使える様になるしの。寂しそうにしているサマナーを放置するのもあれじゃし。妾の分身を連れて行けば少しはリアクションも楽しめるじゃろ」

「お前、なんだかんだで面倒見が良いよな」

「そうかや？」

そうだよ、と答えながら頭の上に投げて置いておき、そのままキッチンを確認める。どうやらここに滞在している間はチエフエイが料理を担当してくれるらしい。そのクオリティに関しては既に巖戸台分寮で保証されているので、何も心配する必要はない。となるとちゃんと材料とかの諸々を買い込んでおく必要があるな、と脳内でチエツクリストを入れておく。それはそれとして、次だ。

台所を出て再び廊下を経由する。どうやら廊下で離れへと移動する事が出来る他、其方にも寝室があるらしい。とはいえ、寝室も離れを入れて全部六つぐらい存在するみたいで、スタマを含めて全員別々の部屋で寝るぐらいの事は出来そうな程には広がった。

更にちやんと風呂場もあった。とはいえ、ここに置いてある風呂は何と薪を入れて温めるタイプらしく、事前に薪を用意しておかないと風呂に入れないという事実が発揮する。まあ、今更薪割りで疲れる様な存在ではないのだから、パパッと用意して割っちゃえば問題もないだろう。

そしてそこからついにトイレを発見する。驚く事にあの駅とかで見かける和式の現代に近いタイプのトイレが設置してあった。かなり清潔であるし、正直、これなら普通に使えるので安心した。

この屋敷全体が何時でも使える様に手入れをされているらしく、清潔なのと使いやすい状態でキープされていたのが悪くない。所々監視用の道具が仕込まれているのは蔵戸台の時と変わらないが、どうやらチエフエイはそこら辺の呪術にもある程度詳しいらしく、歩きながら指摘するのでサクサクとプライバシーの為にそれを回収して潰して行く事にした。そうやって歩き回っている間にも他にも地下室があるのと、裏には蔵があるのも確認できた。

どうやら予想していたよりもベルがぶん捕って来たこの場所は本格的な物件だったようだ。

「蔵の中に掘り出し物とかサービスでないかな？」

「流石にそこまではないじゃろ……とはいえ、気にはなるの」

ノリの良い駄狐め、と笑いながら蔵の方へと向かった。まあ、中身が空っぽだったとしてもぶっちゃけ、探索する事そのものが楽しいので一切問題はない。と、縁側で靴下と靴を履きなおしながら、こつちでの生活用にサンダルでも買った方が良いなあ、と思いつつ蔵の方を確かめる為に扉へと近づき、

「ん？」

「サマナー？」



びたり、と蔵の前で動きを止めた。

……歌声が聞こえる。

聞いた事のある、静かな歌声だった。軽く首を傾げながら蔵の扉を確認すれば、鍵なんてものはかかっておらず、押せばそのまま普通に扉が開いた。その向こう側に広がっていたのは広い、蔵の内部だった。当然の様にそこには何も置かれていなかった。

一つの青い扉を除いて。

まるでこの世の物ではない青い輝きを放つ扉は一つ、完全に別世界へと繋がる物であるのを、即座に察知した。そういう感知系のセンスに関しては天賦さえも超えるものがあると評価されるだけはあった。だからそれを以て、即座にその先がなんであるのかを理解する事が出来る。その向こう側には見知った人物が三人ほど居て、安心感を覚えた。

「サマナー？ 妙な扉があるんじゃないか……ふむ、気配はあの酒場に似ておるのう」

「うん。向こう側から酒場に居た人たちの気配を感じる」

「ふむ……そう言えば世界を渡った先で力になる方法を用意していた、と言っておった気がするの？ となるとこれがそうやもしれぬぞ、サマナー」

「なら躊躇する必要はないな」

言葉を零しながら青い扉を開く様にノブを握り、一気に開けた。まばゆい光が一瞬だけ視界を包み込み、そして足は前へと進んだ。それと共に感じたのは吹き抜ける様な風と、さわやかな花の匂いだった。意識を覚醒させるような香りの中、光が消えて目をゆつくりと開く。

その先に広がっていたのは空だった。

足元には鮮やかな青色の花が咲いており、それが見える範囲に咲き誇っている。吹き抜ける風は花卉を舞い上げ、そして世界の端からそれが散って落ちて行く。見えるのは一面の雲海。ただただ果てしない雲の海が見えている。そう、ここは大地。雲の上に揺蕩う空中の大地。或いは空中庭園。そう呼べる空間だった。

その中央にはお茶会を開けそうな瀟洒なテーブルが存在し、その横

には大きなグランドピアノが、真っ白なキャンバスが、そして幾つかの人影が見える。目を封じたピアノリスト、耳を封じた歌姫、そして名前の無い絵師がああ酒場で見たように存在していた。だがそれに追加される様に、新たに二つの姿があった。

一人は青いドレスに身を包んだ金髪の少女。前髪を横分けにしつつ、片手には本を抱いている。此方に視線を受けると優雅に礼を取った。そしてもう一人は中央、テーブルの向こう側に座っている老人だった。鼻が異様に長く、多くの皺を刻まれている顔をしている老人は、気配のそれが人間ではなかった。

……だが不思議と、酒場に居る連中よりは遥かに信用できると直感的に思えた。少なくとも、ステイブンと悪魔王よりは信用できる。

ダンテおじさんはアレ、勝手に住み着いている様なもんだから除外。あのおっさん、ストロベリーサンデーさえ奢れば銃でのトリックとかほいほい教えてくれるのはありがたいんだけど、なんか善性も悪性もまるで感じさせないN-N的な恐怖があるのはどうしてだろう。

「——ようこそお客人、我がベルベットルームへ」

老人が枯れた声で歓迎の言葉を送って来た。足を組む様に座り、両手を組んで合わせており、背中は丸まっている。此方を睨む様に視線を送っている様に見えるが——そういう意図はない。それが解るのは自分もまた、成長したからだろうか？

「私の名はイゴールと申します。この部屋……夢と現実、或いは精神と物質の狭間の場所に存在するこのベルベットルームの主を致しております」

「初めましてリユージ様、我が名はラヴェンツァ。主共々宜しくお願い致します……」

「ああ、どうも」

ラヴェンツァとイゴールの二人へと向けて軽く頭を下げると、イゴールが口を再び開いた。

「ベルベットルームは何らかの選択を行った者を助ける為に存在する為の場所……本来であればペルソナ使いを導く為の場所ですが……事情は我らの造物主より聞いております」

「世界を回り、欠片を拾い集める旅路。世界を創造、再生するという偉業に是非とも手伝いをさせていたただきたいと思い、こうやって参りました」

「えーと……つまり、俺の旅について来れる……という事？」

もしこの人達がそうならば、俺がこうやって世界を回る必要は出なくなるんじゃないかな!? と、ちよつとした期待を込めた言葉ではあったが、いいえ、とラヴェンツァが否定した。

「我々はリ्यूジ様より持ち込まれた記憶より引き継いで生み出された存在です。リ्यूジ様のように、直接世界を渡るだけの力はありません」

「ですので、我々は直接その旅路について行くことは出来ないという事です——とはいえ、お客人が巡り合う次の我々が前の我々と同じ者であるのは確証致しましょう」

「……チエフエイ？ 俺が馬鹿なのかどうかは解らないけど、ちよつと話が掴めない」

「良い、あまり気にするではない。見た感じ、心の深淵に近い者たちじゃ。真剣に考える必要はないじゃろ。それがそうであるモノと受け入れよ。それがサマナーの為になるじゃろう」

「あー……解った」

理屈は解らないが、とりあえず異世界へと飛んだ時、このベルベツトルームと住人たちが助けてくれるのだという事はとりあえず、理解しておいた。じゃあ、何が出来るんだ、という質問をこの部屋の主らしいイゴールへと向けると、

「ここでは悪魔の合体、スキルの付け替えなどを行えますな。それこそお客人が知るあの隠れ家と同じレベルでの合体が行えます」

「やべえ、神施設来た」

「スキルカードの作成、悪魔の合体、武器と悪魔との融合、或いはスキルカードと装備品の融合なども行えますな」

スキルカードの話をはじめた所で、絵師が白いキャンバスに色を素早く塗りつけて行き一瞬で絵を完成させた。そうするとキャンバスは光り輝き、それが一枚のカードへと変化した。再び白に戻ったキャン

バスに張り付いたカードを剥がし、絵師が笑みを浮かべながらそれを投擲するのを、指で掴んだ。

それは《テトラジャ》のスキルカードだった。テトラジャと言えばムドやハマをお手軽に防ごうことが出来る魔法としてそれなりに有用だ。特にメシアやガイア辺りは呪殺破魔対策に必ずと言っていい程覚えさせている。成程、確かにこうやってスキルカードを作成して貰えるなら、装備と融合させた耐性装備を作成する事も出来るだろう。「やはり神施設ではこれ？」

「それと、ここではリユージ様の力の手伝いをさせて頂きます」「……力？」

ラヴェンツァが頭を下げ、言葉を続けた。

「貴方は超人へと足を踏み入れた事で、紡いだ絆を力として呼び出す事が出来る力に覚醒しました。ペルソナに近いようで違うそれは、時を超え、世界すらも超えて絆を引き寄せる力ですが……今はどうやら、まだその自覚に至っていない様子。その管理を是非ともお任せください」

そう言えば超人になれば、何らかの特殊な能力に覚醒する、と言われていた気がする。今の所、そういうのを一切感じたことがないので滅茶苦茶忘れていたが、それをラヴェンツァは管理してくれるらしい。

という所で、ラヴェンツァが握っている本から二枚のカードを抜き取った。

「では此方を。今、貴方が繋いだ絆とその形です」

そう言つてラヴェンツァが抜き取ったカードを此方へと渡してくる。受け取り、確認するのは死神の恰好をした湊が描かれたカードと、塔を踏み砕いているダンテの絵が描かれている、二枚のタロットカードだった。なんとというか、実にらしいとでも表現すべきカードであり、手にしていると力を感じる気がする。湊の方はなんか、使い方が今一解らないが、

ダンテのカードに意識を集中させれば、銃技の冴えが磨かれる様な気がした。

「我ら一同、お客人を何時でもお待ちしております」

「貴方が自分の選択に責任を持ち前へと進み続ける限り、ベルベットルームは貴方の味方です」

「どうか、ご留意くださいませ……世界は優しくはなく、そしてお客人には覚悟を求めるでしょう。ですが貴方は決して一人ではない、という事を」

「それではリユージ様、またお会いしましょう。貴方の次の来訪を心よりお待ちしております」

ラヴェンツァとイゴールの言葉が終わり、後ろから光が溢れ出す。あの青い扉から漏れ出す光に飲み込まれ、一瞬視界から全てが消え去り、眩しさに目を閉じ——開けたその瞬間には再び蔵の中、ベルベットルームへと通じる扉の前に居た。その青い扉を見てから、背を向けた。

「なんか、不思議な場所だったな」

「とはいえ味方じゃ。力になってくれるというのじゃから、素直に感謝すれば良からう」

「そうする」

結構いい感じに探検したし、そろそろ晩飯の材料を購入する時間かな？ とスマートフォンを取り出して時間を確認し、再びポケットの中に突っ込む。蔵を出て軽く背中を伸ばすと、頭の上に居たチエフェイがぼん、と音を立てて消えた。まあ探検も丁度終わりだしナイスタイミング、という所だろう。そう思いつつ再び縁側の方へと戻ると、池の中でクールマに戻った亀姿が池の中でぶかぶかと浮かんでおり、その背中で鳩が日光浴を続け、スダマがその周辺を漂っていた。うーむ、このアニマルズ。

「とりあえず、晩飯の買い物に出るけど誰か来るかー？」

『パス』

「くるっぽー」

「パスじゃ」

『戦国乱世のアトミックあんど』

「解ったよ、俺一人行くからお前らの好きなものが出ると思ふなよ」

まったく、と声を零して財布を確かめようとしたところで、

「私……一緒……に、いく……よ」

と、アンの声が聞こえた。振り返り、縁側の向こう側、室内へと視線を向ければ、何時もとは違う姿のアンが出て来た。そう、先ほどの服屋で購入した濃紺の袴に上は柄のある桜に近い赤色の服装で、確か、女学生がこの時代、こんな服装をしていたような気がする。その後ろではベルが腕を組んでうんうんうん、と頷き、アンの姿を緩く一回転させた。

「サマ、ナー……どう……？」

「似合う。凄く似合うよ。うん、どういう風にか、つてのは語彙力が足りないから勘弁して欲しいけど、似合ってるよ」

「ん」

素直に言葉を返すと、無表情なまま、嬉しそうにしていた。少しだけ動きが早くなったアンが編み上げブーツを履いて、縁側から降りて来る間に、ベルとチェフェイへと視線を向ければ、サムズアツプが返って来た。ありがとう、コミュニケーション悪魔。会話レッスン、本当にお世話になっています。

と、言う事で、

ブーツを履いたアンが横に並ぶので、二人だけで再び帝都へと買い物のに繰り出す。ちよつとしたデート気分だった。

そうして、大正二十年での生活が始まる。

大正二十年に到着してから数日が経過すれば、新しい家での生活にも慣れる。ぶつちやけた話、あんまり崩壊世界と生活に違いを感じないのだ、こつちの世界は。寧ろ崩壊していない分、こつちの方が生活しやすいという所さえもある。どこでも水や電気が通っている事に關してはやはり、こつちの方が遥かに便利だと感じられる。そういう事もあり、割とここの生活に馴染むのは早かった。敷地内に居る事限定だが、省エネモードで仲魔を召喚し、出しばなしにするという事が出来るのも割と新しく、悪くない経験だった。

悪魔との生活。崩壊世界とはまた違う、契約では縛っているが敷地内では自由に野放しにして生活するのは、崩壊世界でもやった事のない事だった。ただヤタガラス側の依頼待ちという事もあり、日常的には暇で、平和的な物だった。

ちよくちよく目を盗んでチエフエイの授業が続いたりするものだが、ぶつちやけ、その内容はエロい事ばかりではなかった。もつと良い男となる為に、好きな子に対して胸を張って好きだって言えるようになるためには度胸が必要で、それは自信から来るものだ。つまりは自分という存在に対して自信を持てるようにならなきゃいけないかった。だけどそれも簡単な物ではなく、

まずは出来る事を増やして、他人から頼られる様な人間になろう、という事から始めた。

「良いか、自信を持てる人間とは他者に己の価値を認めさせる事で、自分の価値を認める事が出来るものである。故にじゃ、サマナーに必要なのはどうやって周囲からみられるか、その印象の作り方じゃ。という訳で本日は特別ゲストを連れて来たぞ」

「魔界で魔王の側近をしている者よ」

「マイ・仲魔」

そう言う訳で、教育に本格的にベルゼブブが加わった。と言っても別に詰め込み教育とかやるのではなく、他人との会話の仕方、どうすればかっこよくみられるか、どういう風に意識されるのかとか、そう

いう話術をメインにする話をベルは教えてくれた。人は喋り方一つで大きく印象を変える事が出来る。そしてそれを覚えれば他人に自分を認めさせる事なんて簡単だ、と。

それとは別に、チエフエイが料理を教え始めてくれる。自分で何か出来る様になることもまたステツプアップの一つになるという事になる。劇的に何かが変わるものではないが、それでも古めかしい料理を覚える事は新鮮だったし、こうやって人生で数奇な流れを通して出会った仲魔から習い事をするというのは、ちよつと楽しくなってきた分があつた。なので二日目からは自分も台所に混じって、チエフエイから学びながら一緒に料理をする様になった。

そしてそれを知ると、

「水臭いじゃないかサマナー！ その学び、成長しようとする姿勢実に素晴らしい！ 前々からサマナーの動きには無駄が多いと思つていたんだ、これからの戦いを生き残る為にも戦士としての特訓を行おう！ なあに、僕もパラシユラーマ師からは化身の中でも最も優秀で才能があるって言われていたんだ、教える事ぐらい訳ないさ！ さあ、ブラフマーストラの習得を頑張つて鍛錬しよう！」

ヴアララーハが混ざつた。なんかイベントの趣旨がこちら辺から変わつて来たような気がしたが、それでも普段は頼りにしている仲魔と、身近にこんな風交流するという機会は今までではなかった。ヤタガラスが用意してくれたこんな場所でなければ不可能だっただろう。そんな事を考えてか、文句を言つてやろうかと思つたのを諦め、苦笑しながらヴアララーハとの組手や戦技指導が日常生活に交じり、

「じゃあ唯一神の素晴らしさを教えよう」

とかのたまう鳩はスダマ先輩に括り付け、日課のベルベツトルーム、空中庭園の外側へと向けて全力投球して爆破させるといふ事で処分しておいた。

なんだかんだで、騒がしい日常が始まつた。

朝起きて井戸で顔を洗つたら調理場へと向かつて朝食づくりを手伝つて、それが終わつたらベルと喋り方や人の見方の勉強、その後はヴアララーハと組手や鍛錬を続けるような日常が始まつていた。



なんだかんだで賑やかな日常が始まって数日、  
ヤタガラスが来た。

「異界攻略か」

「はい、真に超人であるなら、これぐらいは問題はないでしょう、と」  
ヤタガラスの使者は先日の交渉人とは別の、表情が一切解らない、  
黒い布を全身に巻いた男とも女とも取れない存在だった。居間に通  
して、チエフエイがお茶を出したが、警戒しているのかどうかは解ら  
ないがそれに手を付ける事はなかった。ただ居間のちゃぶ台を挟ん  
で、向こう側に座っている。そんな此方は、横にはアンが座って、

頭の上には鳩が座っている。

「契約を履行できるかどうかの実力を確認したい、って所」

「ええ。で、それだけの能力がなければ打ち切りという事で」

「解りやすい」

とはいえ、事前の契約通りなので、文句は一切なかった。まあ、そ  
れなりに警戒する必要はあるのだろうが、それでもそこまで怖がる事  
もないだろう。何せ、ヤタガラスは国家守護の機関なのだから、そこ  
まで執拗に恐れる必要はない。あるとすれば、それは国に対して害意  
を抱いている場合だ。そうじゃなければ協力できる隣人として一緒  
に居れば良い。それが処世術という奴だ。

「しかし……召喚能力を見ていれば、只者ではないことは理解できる  
故、此方はそれほど心配はしておりませんが」

「召喚能力？」

「ええ、其方の召喚師殿が居た場所ではどうだったかは知りませんが、  
此方では基本的に一度に一体の悪魔しか召喚できません。そのよう  
に複数の悪魔を同時に召喚し、維持する事は出来ません。正直、その  
Magをどうやって賄っているのかは聞き出した所ですが」

『無論、言っちゃ駄目よマスター』

そもそも悪魔の召喚はサバトマでもない、《DDS》アプリ任せの行  
いなだから、教えるもクソもない。この時代にはMagバッテリー  
なんて存在しないだろうし、アプリを動かす為のスマートフォンもな  
いだろうから、説明した所で無駄になるし、没収されたところでユー

ザー以外は使えない様になっているのだから奪われた所でも無意味だ。説明するだけ無駄だし、説明する義理もない。というかどうやっているのかはあまり良く解っていない。

『愛し子よ、この時代の悪魔召喚は完全にデジタルイズされていない。故に悪魔の召喚、そして維持に常にM a gを消費し続けるのが基本だ。その為、悪魔を複数召喚するのは難しいし、悪魔の召喚を長時間維持するのも難しい』

鳩がなんか頭の上からまともな事を言っているのに戦慄しながら、「まあ、こつちも商売なんで」

「でしょうね。余り期待してはいませんでした。では明日、此方から迎えの監視員を送りますので、その人物と共に異界へと向かい、力を証明してください」

「了解」

と、それで会話は終わった。結局出されたお茶に手を出す事もなく帰ってしまったヤタガラスの使者の姿を見送ると、横の部屋からイケメンが紙を握り潰しながら出て来た。どうやらこつそり式神を放っていたらしい。ほんと油断も隙もないなあ、と肩肘をつきながら溜息を吐いていると、後ろから横に座っていたアンのしかかって来た。重い、と文句を口にするのと更に力を入れて押し潰される。

「重い」

「おも……く……ない」

問題なのは重い事ではなく胸のそれがダイレクトに背中にヒットしている事であって、そつちの方が重要だから早く退いて欲しいのだが、口にしたって絶対に動かないだろうからもう諦めて、溜息を吐いてアンの好きにさせる。ともあれ、

「ずつと家に引きこもりたい……拙者、外とか嫌でやんす……」

「試練のない人生なんて彩がないのも同然だよサマナー！　ここは一発ガツン、とやって自分の価値を示すのがいいさー！」

「何よりサマナーが舐められるのは妾達が舐められているという事でもあるからのお。サマナーは良くとも妾達が良くない。妾達が手を貸すサマナーなのだから」

「……おう」

「そうだな、と仲魔達の声に応える。ここで一発、どでかい花火を上げるのも悪くない。自分に自信を付ける為にも、少しは実績を作ろうではないか、と決める。」

「……そうだ、目標を作ろう。」

この大正二十年に居る間、少しだけ、前よりも自分に誇れるような行いをしよう。或いは自分を誇れるようになろう。そもそも、周りの思惑がどうであれ、俺つてば世界を救っているではないか？ 良く考えれば世界の再生つて今の所俺にしか出来ない偉業ではないか？ だとしたら少しぐらいいは調子に乗つてもいいんじゃないだろうか？

「そうだそうだ、俺が居なきや世界が滅んでるんだから、少しぐらい調子に乗つてもいいんじゃないか？ 俺とか超頑張つてるだろ？ 滅茶苦茶頑張つてるだろ？」

「その調子だサマナー！」

「まあ、少なくとも認めている者はいるから少しぐらいいいかもしれないわね」

「サマナー、頑張つて……るっ」

何時になくアンの語尾が強い。これは俺の時代が来ているのではないだろうか？ 俺も今ではレベルが30を超えて超人だ。ジャンプで100メートルぐらいいは軽々飛べるし、その気になれば家を引っこ抜くことぐらいいはできる。半分人類を卒業しているって言われているレベルだし、数日何を食わなくてもお腹とか減らないし、強くなっているのだ。だったらそれらしく振る舞う事も重要なのではないだろうか？

「そうと決まれば、と気合を入れて立ち上がる。」

「俺……やるよ！ 明日来る監視員にガツンと胸を張った態度で挑むよ！」

◆ 「うむ、それでこそ妾のサマナーよ。授業の成果が出てきたの」

「生まれてきてごめんなさい」

「ぎ、サマナー——！」

玄関でそのまま倒れた。監視員と呼ばれて派遣された人物はなんか、モミアゲが特徴的な書生風の男だった。黒猫を連れてあるし、なんか昨日の使者よりも信頼できそうだなあ、とか思ってた咄嗟にアナライズした結果がこれであった。心臓発作を起こしそうな衝撃にそのまま横に倒れて、玄関のフローリングで頬を冷やす。近寄って来た鳩がツンツン、頬を嘴で突いている。そして後ろから来たチエフエイが尻尾でペしペしと体を叩いているが、立ち上がる気力が湧かない。

そんな様子を前に、書生風の男——いや、それにしても若く感じる。たぶん、青年……は帽子の鍔を掴んだまま、此方を見て困惑する様に動きを止めていた。そしてその足元の猫が、溜息を吐いた。

「なんだこいつは……」

嫌に渋い声で黒猫がそんな事を言うてくるもんで、一瞬だけ正気に戻り、立ち上がろうとして、再びフローリングにへばりつく。

「もう駄目だあ、おしまいだあ、頑張ろうと踏み出した所からケチがつくなんて……はい……どうも、ゴミムシです……」

「おい、こいつが本当に例の超人なのか？」

呆れたような視線と声の猫に、視線を向け、じいーつと猫を見つめる。

ゴウト Level 15

「良し」

「貴様、今此方を見て気力を取り戻さなかったか」

「面倒なサマナーですまんのお……」

尻尾でそのまま掴まれると、無理やり持ち上げられる。そして再びライドウを見て、レベルを確認して、そして頭をぐったり、と下に下げた。

「いや、俺いらんないじゃん……」

「そういう問題ではなからうて。あ、すまん。こっちで今ちよつとシヤキつとさせるから」

「……」

コクリと青年・ライドウは頷き、その間に尻尾に引きずられ、玄関の角へと引きずり込まれ、家に放し飼いにしている仲魔達との緊急会議が開催される。ぐったりと、体から力を抜いた状態で、尻尾に体を持ち上げられたまま、まず口にする。

「とりあえず日本から出て行かない?」

無言でベルからのビンタが飛んできた。

「なんとなく昨日の時点でフラグが見えてたけどまさか24時間も持たないなんて」

「いや、まあ、ライドウが監視役に来るなんておそろく誰も思わないだろうけどね? だけどね、サマナー。僕達のサマナーなんだからちよつとは、こう、胸を張ってね?」

「みーんみーんみーん」

「蟬になってる……!」

「おい、大丈夫か……?」

「大丈夫! 大丈夫じゃぞ?! ほんと大丈夫じゃからな!? だからタシマ! ちよいタンマジヤから——サマナー! 正気に! 正気に戻るのじゃ! はよ! はよお!」

がくがくと揺さぶられながら、少しずつ正気を取り戻して行く。そう、ここで引きこもる為には、ライドウとこれ以上関わらない為にはさっさと仕事を終わらせるのがベストであるのに違いはない。そう、監視員なのだからさっさと仕事を終わらせればそれで関係は終わりだ。とりあえずもう一発ベルからビンタを叩き込まれ、大丈夫だ、と告げて、

ライドウとゴウトの前へと戻る。

「大丈夫、俺は正気に戻った」

「頬が腫れているが……」

ライドウの言葉に無言でサムズアップを向け、やっぱり痛いので鳩を掴んで回復魔法を使わせる。そしてそれが終わった所で出かけるので、仲魔達をDDSへと送還する。そしていやあ、と声を零す。

「少し錯乱してごめんね? ぶっちゃけライドウなんて大物とエンカウトするなんて思ってなかったから思わず発狂しちゃったよ」

「ほう、見てライドウの実力を見抜くとは流石だな。成程、なら確かに錯乱しても仕方あるまい」

黒猫のゴウトが尻尾を揺らしながら、どこか誇らしげにそう言う。ライドウをどうやら誇りに思っているらしく、しかしその仕草が完全に猫なので心が癒される。ああ、でもジャンルのにはウチの鳩と一緒なのではないのだろうか、これは？ そう思うとライドウの事を少しでもだけ同情してしまう。なので軽くライドウの肩を叩き、

「お前もきつと苦労してるんだらうな……」

「……？」

『今日のサマナーはぶっ飛んでいるね！』

『状況が状況じゃからな』

『見える分には面白いからいいんじゃないかしら。どこまで醜態を晒すのか楽しみよ、個人的には』

DDSでの邪悪な会話を止める、と心の中で言い返しつつ、とりあえず、困惑するライドウと握手を交わす。

「とりあえず、今日は宜しくライドウ。俺はリユージ、如月リユージな」

「葛葉ライドウ、宜しく頼む」

握手を交わしつつ、これが最後になるといいなあ、と心の中で密かに思い続けていた。



そして異界へと向かう。

なんでも、この帝都という場所そのものが異界の発生しやすい環境になっているらしい。帝都という日本の中心が異界だらけなのはおかしくはないのか？ と思われるが、どうやら帝都とは元々不安定な環境の上に建てられた場所なのだとか。その上、今は大量の人、建設ラッシュ、発展によって様々な感情が入り混じり、それが龍脈と反応してMagを生み出し、空間を不安定にする。

そうやって都心の中にぽっかりと異界を生み出したり、帝都の横の

空間に異界を生み出したりと、悪魔達が入り込む為の隙間を生み出してしまおうらしい。一部のケースを除き、どれだけ暴れようと現実への影響が一切ないのが異界という場所だ。だがこれを放置すると、段々と異界が現実を侵食し始める。つまりは異界での出来事が現実に対して力を持つようになる、という事だ。

更にこれが進めば異界そのものが現実と融合し、現実そのものが異界と同化する。こうなるともはや現実世界での被害を逃れることは出来ない。その為、サマナーやバスターは基本的にこの異界を潰す方向で働いている。異界を潰せばそれだけの金が悪魔協会から支払われるし、これはガイアでもメシアでも一緒だ。

そう言う事で、異界探索、異界攻略はサマナーとしての実力を発揮する場所であり、力を測る場所としては最適な環境でもあった。

そういう事で、ライドウとゴウトに連れてこられたのは、帝都の端の一角だった。もうもうと煙突から噴き出る黒煙、そして広がっているのは木造ではなく金属質の壁によって建築されている建造物——つまりは工場だった。ぴぴぴ、と到着した所で反応を示す様に音を鳴らすスマートフォンを取り出してみれば、新しいアプリがインストールされていた。《ブレインウォーカー》と呼ばれるそのアプリは、工場の直ぐ傍に異界が発生、存在している事を示していた。

「到着したな……ここが貴様を測る為の場所だ。全く、ライドウを便利屋とでも思っているのかヤタガラスめ」

にやーにやーとゴウトがライドウの足元で文句を言っているが、ライドウはそれを無視して歩いているので、その姿を追って工場付近、つまりは異界の入り口がある場所へと案内してくれる。背筋がしっかりと伸び、そして迷いのないその眼差しは、少し羨ましいかっこよさを持った青年だった。

と、追いかけるとあっさりと追いついて異界の入り口に到着する。見て解る様に空間が歪んでいるという事は、それだけ強い異界である事の証明でもある。異界の前でライドウは動きを止めると、振り返って此方へと視線を向けた。

「ではこの異界の攻略を行ってください。もし一般人がいるようであ

れば最優先で救助、主を倒してこの異界の消滅を確認できれば合格だ  
そうです」

「了解……それじゃ早速、挑戦してみますか」

何時も通り横にいるアンに視線を向けて、頷きを返してもらってか  
らL&Oを抜き、入った直後に奇襲を食らわない様に警戒してから歪  
みに飛び込んで、

工場異界へと突入した。

外は青空が広がる晴れであった。

だが異界の中は違い、空が血の様な赤色をしていた。地面もまるで  
血を吸ったかのような鈍い色をしており、所々、木々は醜悪な形に歪  
んでいるのが見えた。炎の臭いを感じる……どうやら、炎がどこかで  
燃えているようだった。攻略して主の所へと向かうとなると、相当苦  
労しそうだな、と考えながらアプリから何時ものマップピングを行う。

とりあえず、と表示されたのは工場異界全体の姿。どうやら2階や  
地下は存在しないようで、このフラットな異界の全体図を即座に入手  
する事が出来た。《エネミーソナー》には大量の赤点で存在する悪魔  
の姿が表示されており、異界内で迎撃態勢の完了を見せている。統率  
されたかのような悪魔の配置は、警戒されている……或いは1回、異  
界攻略に失敗したかのような気配を見せている。

「どう、する……？」

「うーん、どうやら人命救助は必要ないらしいし、まともに戦う必要も  
ないからね……最近思いついた外道コンボを試そうか」

「……？」

大丈夫大丈夫、とアンの背中を押しながら、入ったばかりの異界か  
ら脱出する。出た所でふむ、とゴウトが声を零しながらライドウの足  
元から此方を見上げた。

「もう音を上げた……という訳ではなさそうだな？ お手並み拝見と  
行こうか、異国の悪魔召喚士」

「まあ、見てなって。本当の異界攻略って奴を見せてやりませよ……  
！」

この状況なら一切遠慮せずにやれる、という事からアプリから召喚



する仲魔は二体。召喚光と共に出現するのは丸いフォルムの地霊、I  
CBM先輩ことスダマ。そしてもう一体は完全耐性を保有する事によつて、現状殺す手段が存在しないという驚異の耐性を保有しておきながら殺傷力ゼロのクソ雑魚唯一神、鳩。

二体を召喚する。その召喚を見て、ふむ、と声をライドウが声を零した。

「二体同時召喚や使役が出来るんだな」

「ああ、一応6体ぐらいまでは同時に出せる。……と、いいか、先輩。おまえがついに輝く時代が来た」

「……!!!」

スダマ先輩を掴んでその顔？らしきものへと向かって言えば、その姿が今にも破裂しそうな輝きを見せた。よーしよし、と軽く撫でてからいいか、と声を零す。

「いいか、今日は普段ベルベットルームでやっているテイリー自爆みたいに芸術点を極める自爆じゃなくていいんだ。遠慮なく、全てを更地に変える様な冒流的で暴力的な自爆を見せてやる時が来たんだ。ああ、しかも相手が死ぬまで何度もな……」

「――！――！――！」

「ハハ、こやつめ。フライングは俺の生死に関わるぞ？」

「あ、こら、放せ人修羅。くるっぽー！くるっぽー！アイ・アム人畜無害な鳩……！」

逃亡しようとしている鳩をアンが片手で掴んで捕獲していた。それを感謝しつつ受け取りながら鳩の足にスダマを近づければ、自動的にスダマが鳩の足を掴んだ。そしてそのまま、鳩の首を掴んでそれをこっちへと向けた。

「いいか、お前は今から爆撃だ。しかも無限再生する爆撃だ」

『仮にも主神にやる事じゃないよね、これ』

『だがそこが良いわ。もっとやれ』

『ああ、Chaos側からの好感度上がっている……』

「サマナー、話せば解る」

「ごめん、俺人間だから鳩の言葉解らないんだ。だけど鳩からでも通

じる言葉はあるよ」

「それは」

「サマリカーム」

鳩 With スダマを異界の中へと投げ込んだ。ライドウとゴウトが数秒間、何をしているのか全く解っていないのか、疑う様な視線を向けてくるが、数秒後、その答えが異界の中から聞こえてくる。

メギドラダイン

サマリカーム

「悪魔しか存在しないのを確認したら、馬鹿正直に攻略する必要ないんだよなあ……」

異界の内側から自爆するスダマ先輩の気配と、それを甦らせる為のサマリカーム代の Mag が体から吸い上げられるのを感じるが、溜め込むばかりで全く消費していないので、サマリカームを何発か連発しても余裕のレベルは蓄えてある。なのでサムズアップをライドウとゴウトへと向けるが、あぐり、とした表情を一人と一匹に向けられていた。

「なんて奴だ……」

その言葉に再びサムズアップを向けた。必殺、ネットゲ式ゾンビアタック。サマリカームと自爆を繰り返すだけの戦い。今までは崩壊世界の建築物を破壊する事や、蘇生魔法を使える仲魔がないという縛りがあったから無理だが、運び屋として鳩を使えるなら延々とこれを繰り返すだけ異界を更地に変えられる。

悪夢の外道戦術だった。

しかもこれ、何が凄いつて自爆しているスダマ先輩が一番喜んでる。

「いやあ、辛い試験でしたねえ……」

「こんな方法で突破する奴がいるか！」

ゴウトのにやーん、と響く声に笑い声を返しながら、ヤタガラスのお仕事を終わらせた。

## 大正二十年 IV

「異界攻略以外では絶対に呼ばねえからな!! って全力で言われちゃった……解せない」

「率直に言つて当たり前前の対応ですかと」

ベルベツトルーム、今日もベラドンナが美声を震わせている。一度、ここに6時間近く籠つてヴァラーハと一緒に何時間ノンストップで歌い続けられるかな? チェックを行ったが、それでもベラドンナは疲れる事無く、寧ろ客がいるのを楽しむかのように歌い続けていたので、あつ、これエンドレスに歌い続ける奴だと確信して諦めた、そんなベラドンナの歌が聞こえ続けるベルベツトルーム、

ラヴェンツアにダメ出しされていた。

「おかしい……一切の情け容赦なく異界を駆逐出来たから結果としてこれが正しい筈なのに……。ヴァラーハとベルとチェフエイにも二重丸を貰つた戦術なのに……」

「ChaosとDarkとLightとは言え、焦土戦術が基本のインド神話出身の化身を参考に作戦を構築したのがダメですね……全滅です……ね……」

そつかあ、と声を零しながら、ベルベツトルームに新しく追加されたテーブルにぐったりと倒れる。そこはベルベツトルームでイゴールが使っているテーブルとは別に用意されたテーブルで、ちよつとした話し合いをしたり、或いはちよつとしたティータイムを楽しむ為のテーブルだった。そこではベルベツトルームの案内人、ラヴェンツアが反対側に座つて話し相手をしてくれていた。

見た目は子供に見えるラヴェンツアではあるが、その知性の深さには驚かされる。というか確実に自分よりも賢い娘だった。話していると色々と驚かされる。何よりも、

その気質は完全なるN—N、ニュートラルだった。噂の皆殺しのニュートラルではないが、それでも中立的視点から物事を眺められる人物でもあつた。仲間のうち、ブレインとなる連中がChaosだったりDarkだったり、そしてインド出身の信頼感溢れる化身に関し

ては先ほどラヴェンツァが口にした通り、

まともな戦術を考える事の出来る奴がいなかった。

なお鳩は違う方向性でやばいので話題にすら上げられる事がない。

先日、ライドウとゴウト、おまけでヤタガラスにさえドン引きされたことが議題だった。

「だって攻略が試験内容だったんだぞ？　これで良くない？」

「いえ、ヤタガラスの目的を考えると、サマナーとしての総合的な能力を判断したかったのでしょう。そしてライドウを出したのは帝都で暴れば誰が粛清に来るのかを意識させる為……その中でサマリカームと自爆を使える半自立型特攻兵器を運用したんですから、当然の反応だと思われます」

「ああ、成程——見事にやらかしてる……？」

これ、言外にヤタガラスに俺が死んでも自爆は止まらねえぞ……！  
と宣言している様なものではないか？　これ、もしかしてテロ宣言しているだけでは？　もしかなくてもヤタガラスのめんどくさい奴リストに登録されたのではないのか……？

「ん？　自分の首を絞めた……？」

「いえ、一概にはそうとも言えませんが、破天荒なリユージ様の仲魔達好みの印象を残されてしまったと言いまししょうか。そもそも背後関係が皆無の地にいるのですから、疑われようともヤタガラスでは何も見つけられません。リユージ様をどうしようという事はないでしょう」

「本当に？」

「藪を突こうとしないのが日本人ですから」

物凄く納得できる言葉だった。日本人て根本的に藪を突かない性質あるよね、と。だけど同時に護国機関だから必要であれば、即座に始末には来るだろうというのは解る。まあ、その場で切って捨てられなかった分まだセーフという事なんだろうが。少なくとも、悪い事は何もやっていないし、戦闘力があるだけで思想的にはホワイトゾーンなのでセーフなはず。

「……セーフ？」

「セーフです。能力があつて危険だから処理する——と、判断してしまうと国が動かなくなつてしまいます。清濁を併せて呑むからこそヤタガラスやクスノハの様な組織は運営できますので」

「あー……心臓に悪い。でもこういう場合、どうすりゃ良かったんだろ」

「普通に攻略です。どれだけの知識があるか、どれだけ仲魔を制御出来ているのか、どれだけ異界という存在に対して対処できるか。その行動の端から人物像を測る予定だったんでしよう……」

過去形。つまり終わっている。いや、まあ、仕方がないのだ。世紀末環境だと滅ぼさなきゃ滅ぶつて感じで、殺したほうが正義だし。ダントテだつて言っていた、俺がルールだぜ！ と。だから崩壊世界スタイルで遠慮なくぶち込んでいったのがダメだった。でもそう言えばそうだ。この世界、崩壊してないから焦土戦術ダメだよ、と。まあ、でもやらかしてしまった事は既に終わってしまったている。ここら辺はもうしようがない。

「顔色は良くなつたように思えますが、どうしました？」

「うーん、開き直つた？」

「開き直つた、ですか」

ラヴェンツアの言葉に頷きを返した。

「ライドウとゴウトにやんの目の前でゾンビアタックしてたらなんか、二人揃つてぽかーん、とした表情を浮かべていてさ、それを見たらレベルはヤバいし強さはやばいしネームバリューも凄いし俺の様な木端とは別次元の存在なんだろうけど——」

まあ、なんというか、呆けている姿を見たら、そこまで恐れる程じゃないというか、

「……普通に驚いたりドン引きしたり、同じ人間なんだなあ、つて」

まあ、当然の事とはいえ、当然だ。レベルという色眼鏡で見えてしまひ、自分のレベルと比較し、それでどれだけ動けるのか、それを知つてしまうどうしても、人間とか悪魔とか、そういうのを関係なく考えてしまう。だけど本当に普通な人間らしいリアクションを見てしまうと、それをふと思ひ出させられる。ダンテはそこらへん、凄い人

間臭かったからあまり、へこむのは長くなかった。

なんというか、あの人は間違いないく怪物で強いのだが……それ以上に凄惨な人間らしいのだ。私生活が壊滅していたり甘党だったり直ぐにたかろうとしてくる所とか、物凄くダメ人間だが、それが凄く人間っぽいのだ。だからまあ、人間らしい所を見て、ふと正氣に戻ったというか、

まあ、同じ人間なんだよなあ……としみじみ思わされた。

「と、ここで話し相手をするのは私としては宜しいのですが、そろそろお時間では？」

「うおっ、もうそんなに時間が経ってたのか。ありがと、じゃあまたね」

おつとと、と声を零しながら椅子から立ち上がって、ラヴエンツアへと手を振る。イゴールの座っている方へと視線を向ければ、まだ仕事の無いイゴールが暇そうに足を組んで座っているのが見えた。前回の異界爆撃でレベルは上がったのが、それでも今の面子を合体させる程ではなかったのだ。なのでイゴールの仕事はない。ベルベートルームの主なのに仕事なしなのだ。

すまん、と心の中でなんとなく謝りつつ、ベルベートルームの外へと出た。一番まともに会話できそうなラヴエンツアを相手に話してみたが、割と正解だったかもしれないというか、我が脳内力オスの仲魔達よりはよっぽど信頼できそうだった。

それはそれとしてベルベートルームから出て、蔵から出た所で縁側へと向かうと、そこには大正浪漫ルックのアンがいた。既にブーツを履いて出かける準備万端の彼女と合流すると、シレつと肩の上に着地しようとした鳩を掴んで、家の中に投げ込む。

そして、縁側に座って此方を眺めている仲魔達へと視線を向けた。

「じゃ、行ってきます。暴れるなよ？ 壊すなよ？ 絶対だかな？」

「フリはいいから、お出かけを楽しんでらっしゃい」

「轢かれるじゃないんじゃぞー」

「千里眼がないのが悔やまれるなー」

『トラウイスカルパンクテトリー』

今日はスダマ先輩が機嫌良さそうだなあ、と思いつながらアンと並ぶ。そしてそのまま、自然と腕を絡めて来た。何時もの様な唐突なスキんシップにどきまぎしつつ、なんとか平静を保ってそのまま、家の外を目指す。

ちよつとした、デートだった。

何故今更こんな真似を？ とは思いかもしれないが、元々はチエフエイとベルの発案だった。

ぶつちやけ、女と二人きりで歩く事に慣れる、という試みだった。

俺は童貞である。

彼女なんていなかった。

付き合った経験はない。

恋をしたことすらない。

立派な童貞である。

つまりはそういう経験そのものがない。自分に自信を作る。女性に対して恋愛面での免疫を作る。普通にコミュ力を育てる。そういう意味でもデートをする事は結構難易度が高いが、同時にいい練習にもなる。難易度が高いからと逃げていると、それに一生慣れないからだ。実際、体に触れるだけだったらチエフエイの授業で段々と慣れてきている部分もある。未だにこうやってアン相手に腕を組むと少し緊張するのも事実だが、

それ以上に楽しそうに一緒に歩くアンが無表情なのに、それが楽しそうで解るのが好きだった。

そう、好きだ。

今は大正浪漫風袴姿のアンと一緒に街に出た所だった。腕を組みながら一緒に歩くだけで、心の中が満たされて行くのを感じる。たつたそれだけで自分はこの無表情だけど自己主張の激しい娘の事が好きなんだな、というのが解つてしまう。歩いているだけでも満足しちゃうし、一緒に居られるだけで気合が入る。落ち込んでくれた時に励まされると凄い元気になるし、このまま、一緒に居られたら……と思う事も一度じゃない。

だけど同時に、契約で縛れていない自分よりも強い彼女の事が怖

かった。

彼女が支配人より紹介されたという事実には、恐怖を感じている部分もあった。

もしかして彼女に惚れる様に彼女は出来ているのではないか、という恐怖だった。悪魔ならそんな事が出来ても不思議ではない。支配人やステイブンを知れば知るほど、あの連中は勝つ為には本当に手段を択ばないというのが解ってくるのだ。だから俺の精神を安定させるために女を——守りたくなるような、一緒に居たくなるような、そんな女を、ヒロインを用意する。

悪魔ならやりそうな事だった。

そしてそれが事実だったら——アンは、俺の為に生まれてきてしまったなんて話にもなる。俺の為に生まれ、俺の為に戦い、俺の為に傷つき、俺の為に好きになって——そして死んでゆく。

そんな事実、心が耐えられない。

どれだけレベルが上がっても——心が強くなる訳じゃない。チエフエイが心配し、ヴァラーハはややスパルタ。ベルはちよくちよくちよつかいをかけながら面白がり、スタマはアレ、狂っているように微妙に懐いている気がする。鳩は煩いが、たぶん一番親身になろうとしてくれているのは解っている。契約だけの関係を超えて、絆と呼べそうなものを仲魔達との間に構築しつつあるというのは理解している。そのおかげで少しずつ、自分という存在を認められそうになっている。

だけど駄目だ。

まだ駄目だ。

どうしても思い出してしまう。逃げた事への罪悪感。見捨てた人たちの苦しそうな表情を。そして今でも力はあるのに、贖罪に使おうとしない事への苦しみを。理由に理由を重ねて俺はまた、目を反らしている。

逃げ続けている。

「リ्यूジ……顔、怖い」

「……ごめん」



「ん。許……す。私は……寛大」

「ベルの真似？」

「うん」

アンのベルの真似に苦笑しながら大正の日本を歩いて行く——まさか、タイムスリップを経験する日が来るなんて、思いもしなかった。これで既にファンタジーを経験して、殺生を経験して、並行世界や異世界を経験しているんだ。もう既に本が一冊書けそうな程冒険している様な気がする。

アンと歩きながら思う。

「俺……どこに向かってんだろう」

「甘いものー」

「あー、はいはい。そうだな……近くに大学芋の美味しい総菜屋があるしそこでおやつにしよっか」

「ん」

そう言っただけ歩き出すとすると、腕を組むのをアンがするりと解除し、それに安堵するのも一瞬で、今度は手を掴まれた。しかも指を絡めるように。そのままがっちりホルドされ、所謂恋人繋ぎ的なハンドホルドが発生してしまった。こ、これはどういう事なのだろうか！

助けて、チエフエイ先生！

心の中で叫び、ついでにDDSに向かって全力で念話を送る。

『ピー、現在妻は留守にしておるのじゃ』

いるんじゃないか。反射的にツツコミを入れるが、それ以降の返答はない。歩く足運びがガチガチになり、通り過ぎて行く人々の姿が此方へと視線を向けては、どこか微笑ましいものを見る様な、そんな視線になっている。止めてくれ、俺の心が折れる。そう思いながら逃げたい気持ちを何とか抑え込んでいると、

「私……は……人修羅」

「……？」

「悪魔でも……人でも……ない？ たぶん」

「たぶんって……」

「支配人は……私を……人の新鮮な軀から作った……て、言つて……いた」

その言葉に、心臓が止まりそうな気持ちだった。アンに握られる手に、汗が少し乗る。それでもアンは話すのを止めない。

「私は……混沌王？　の悪魔？　みたいなの？　分霊？　コピー？　たぶん」

「たぶんって……」

「人修羅、は、人が……マガタマによつて……魔人に転じて、生ま……れる」

「だけど、とアンは言葉を続ける。」

「私にはマガタマ、ない。人をベースに……生み出した、混沌王のコピー」

だから経験、技能、記録はある。だが記憶は存在しない。アンはそう言っている。それで合点が行った。だからベルはまるで知っている様にアンに接したのだ。混沌王と呼ばれる存在だ、魔王であるベルゼブブとは知り合っていたのだろう。魔界で知り合っている悪魔は分霊であつても知り合っているらしいし。だけどそれは、

それはなんとというか、

あまりにも、

「だから、私も……昔は、なにも、ない……の。一緒……」

「ああ……そうだな」

欠片も笑えない。欠片も泣けない。何を言えればいいのか——それすらも解らなかつた。デートする筈だったのに、少しいい日になる筈だったのに……それが一瞬でおじやんになった、という訳じやない。それでもどうしようもなく、自分を殺したい気分だった。いや、一回殺せばいいんだと思う。

「いもー、いもー……」

此方の心を知らずに、アンは無邪気に大学芋を求めていた。どうすればいいのか、どう声をかければいいのか、それにつまり、混乱し、そして口を閉ざす。言葉が見つからなかつた。お前の方が酷いじやねえか！　……と笑えるように言えればいいのだろうか？　それとも

ありがとう、と言えば良かったのだろうか？ 何がああ、そうだな、だ。まるで気の利かない返事だった。

「……」

「リ्यूジー？」

「ん……？ あ、ああ……ごめんごめん。大学芋ね、大学芋」

本当に食べるのが好きな子だなあ、と呟くと軽いジャブをわき腹に叩き込まれる。その一撃で軽い衝撃波が生まれるから超人レベルはツツコミが鋭い。これが神レベルになるとどうなるのだろうか？

くしゃみで街が吹っ飛ぶ？ 冗談じゃねえという話になりそうだな。まあ、それはともあれ、

横でアンが芋芋煩いので、大学芋を購入する事にする。ポケットから財布を取り出し、小銭を用意しつつ、

「すみません、大学芋二人分お願いします」

「あいよー！」

数秒ほど待てば容器に詰め込まれた大学芋が箸と共に此方へと渡されてくる。それを受け取るが、容器を持つのに片手が塞がれている。どうしたもんか、と思っている間にアンが箸を奪って、片手で割り、そのまま大学芋を箸で掴み、それを此方へと向けて来た。

「あーん」

「いや」

「あーん」

「あの」

「あーん」

「えつと」

「あーん」

「その」

「あーんあーん」

「それ以上いけない」

これ以上喋らせたなら何を言い出すのか解ったもんじゃなく、素早く大学芋に噛みついて食べた。口の中に広がるその独特の甘さと硬さは長い間食べていなかったものだ。最後に食べたのは……中学の頃

になるだろうか？ 酷く懐かしい味で、中学校の頃を思い出しそうになるのを、ぐつと堪える。そしてそのまま、大学芋を同じ箸で食べるアンを見て、手を繋がれたまま、何とか視線を逸らす。

アレ、所謂間接キスではないだろうか……？

意識している俺の方がおかしいのか？ それともアンが無頓着なのだろうか？ 解つててやっているのであれば、アンが魔性の娘過ぎて俺がヤバいのだが。いや、これが魔性とかねえわ。どちらかという と天然系だ。魔性からは程遠い。となると、

「ベルかチエフエイになんか言われた？」

「うん……こうしたら……絶対、落ちる？ って。落ちるって、なん、 だろう……？」

「そのままの君でいて」

解つてないのかよ、と、溜息を吐きながら再び大学芋を此方へと向けられる。周りの視線がほんと微笑ましそうなので止めて欲しいのだが、そんな此方を無視してアンは満足げにあーんを強要して来る。それに折れる様に口を開いて、大学芋を放り込まれる。うん、普通に美味しい。美味しいのだが周囲から向けられる視線が居心地悪すぎて、どうにもならないのだ。

「……そろそろ次に行こうぜ。ほら、次はお団子とか」

「お団子……！」

お団子という言葉に目を輝かせているのが見える。本当にこいつ、食いしん坊になってきたなあ、と思いつつもたたくさん食べる君が好きという気持ちに偽りはなかった。ただ先ほどの重い話の後だと、ややレバーブローを叩き込まれている気分だった。中々この気分も晴れないし、どうしたもんか。そう思っていると、

「大学芋10人前ください」

「はいよー！」

歩き出そうとした所でなんか、非現実的な量を頼んでいる声があった。というかその声、どこかで聞いた事がある気がする。ゆっくり、 ゆっくりと嫌な予感を募らせつつ振り返れば、

モミアゲが特徴的な書生が両手いっぱい大学芋の入った容器を

持っていた。

「む、先日のサマナーではないか」

その足元には人語を解する黒猫が存在していた。というかゴウトだった。つまり、この非現実的な量の大学芋を幸せに購入している存在は、

「お久しぶりです」

ライドオ——！！

アンとデートに出かけるつもりが衝撃の事実が続いてライドウとのエンカウントが続き、とてもじゃないが心が持ちそうにない。泣きそう。というかここで倒れて死にそう。とてもじゃないがもはや、デートとかいう気分ではなかった。しかもそんな此方の内心を一切理解する事無く、アンとライドウは大学芋を食べていた。

能天気そうに、此方がどう思っているのかも知らずに。

いや、この劣等感は全て、自分自身が悪いのだ。それは解っている。それを他人に向けようとする方が悪いのだ。それぐらい、良く解っている。第一俺の方が強い、って思ってたマウントを取らないとまともに他人とコミュニケーションも取れないとか、頭が悪いにもほどがある。悪魔業界に突っ込んだのは事実だが、それでも人間性を捨てたつもりはまだない。だから深呼吸をして、心を軽くして、そして息を吐いた。

「ライドウたちはここへどんなご用事で」

「見て解るだろう。ライドウは好物を買いあさりに来ただけだ」

溜息を吐きながらライドウの足元に居る黒猫、ゴウトが言葉に応えた。そのまま視線をライドウとアンへと向ければ、並んで容器から箸を使って大学芋を食べる魔人と超人の姿が見えた。人の形をした死とか言われる連中なのになぜこうも平和なのだろうか、と思ってしまう光景だった。余計に溜息が漏れる。

「なんかウチの魔人がすみませんね」

「いや、此方も謝らなくてはならんだろうな」

ゴウトと揃ってライドウへと視線を向ければ、もつきゅもつきゅと大学芋を幸せそうに食べる書生の姿が見える。そう言えば、身分は学生……だったか？ 少なくとも見た目通りならそうなのだろう。自分はそのら辺の青春を永遠に失ってしまったので羨ましいと言えば羨ましいのだが、

そうか、と思う。

彼は年下なのか。

「それで、貴様らは」

「初めての逢引の途中でした……」

その言葉にゴウトがアンを見て、此方を見て、大学芋の美味しい店を教えているライドウを見て、そしてもう一度此方を見た。

「なんかすまん……」

「いや、まあ……」

アンを見ながら、溜息を吐いた。コーティングされてある芋を口の中へと運び、その一つ一つを美味しそうに食べる姿は見ていて、実に楽しそうだと思う。楽しそう、というか幸せそうなのだろう。きっと、Magが必要だから食べるのとは別に、彼女自身が食べるという娯楽を気に入っている事に理由があるのだろうから。だからそれを見て、思うのだ。惚れてしまった方が負けなのだ、と。

「たくさん食べる彼女の姿が好きなんで」

「成程。惚れた方が負け、と言う奴か」

「本人には伝えてないんでそこら辺はご内密に」

食べるのに夢中でまるで此方の話を聞いていないアンを見ながらゴウトに告げれば、ゴウトは面白い物を見る様な視線を此方へと向ける。

「人と悪魔の恋、か。また身の程を知らぬとでも言うべきか……」

「そう大げさなもんでもないよ」

ほんと、そんな大層なもんじゃない。自分が一方的にアンの事に惚れて、そして同時に恐れているだけだ。こんなもの、恋愛とも呼べない。少なくとも自分が彼女よりも強くなるまでは、恋愛なんて安心できないし。そして彼女よりも強くなれば契約によつて強制力が出来てしまうから、恋愛には発展しない。

どう足掻いても無理だと今更ながら、思う。だからこれは恋でも何でもないと思う。そう思っていると、アンが箸で大学芋を掴み、もう片手で此方を手招きしていた。再び必殺のあーんをしよう、という形だった。直ぐ近くにライドウとゴウトがいるから滅茶苦茶やりたくはないのだが、物凄い手をくいくい動かして呼んでいる。

それに俺は、逆らえない。

半分諦めながらアンへと近づけば、再び箸で口の中に大学芋を運ばれ、食べさせられる事になる。それを横で見ているライドウがぴつしりとしたサムズアップを向けて来るので、滅茶苦茶恥ずかしく、両手で顔を覆う。

もうやだあ……。そう思いながらさつさと大学芋を飲み込んでしまい、食べ終わる。もうやだ、ライドウとは関わりたくない。素早くここから抜け出そうと心を決めながらアンの腕を掴む様に組み、逃げ出す様に引つ張り上げる。

「それじゃ！ 俺達！ 忙しいので！」

「いえ、此方も邪魔しました。そう言えば近いうちにヤタガラスが仕事を回すつもりと言っていましたので」

「ありがとう、さようなら、さようなら！」

アンを引つ張つて、そのままライドウの傍から逃げ出して。逃げ出しながらもアンはまだ芋を食べていた。そんなに大学芋が気に入ったのかお前……。と思いつつも、ある程度ライドウから離れた所で早歩きだったのを止めて、普通に歩き出す。勢いのままアンと腕を組んでしまった。

組んでいた腕を外そうとするが、それを否定する様にアンが腕を絡めたまま、身を寄せて来た。腕を絡め、身を寄せて来るアンの胸の感触が服の上からでも解る。滅茶苦茶困るのだが、それでも振り払う程の力が自分にはない……。というか、振り払えない。

「ふふ」

嬉しそうに腕を組み、楽しそうに笑い、幸せそうに食べる彼女に俺は勝てない。何がどう足掻いても勝てない。振り払おうと思つた力も体から抜けて行き、まあ、いいや、と考える。

深く考えすぎると毒だ。何時も何時も、自分を苦しめているのは誰でもない、自分自身の劣等感であるという事ぐらいは、良く理解しているのだから。

だから今は、このデートの間だけはそれを一旦忘れる事にする。いや、完全に忘れる事は難しいし、そこまで器用な男じゃない。

だけど幸せそうに食べる彼女を見るのは、好きだった。



「この時代って戦後の影響が強いんだっけ？ だから味付けとか薄いらしいんだよなあ……美味しい料亭とかは紹介して貰う事が前提らしいし。うーん、次はどこに行こうか」

「サマナー……といっしょ、なら……どこでも、楽しい……よ」  
「……おう。それじゃあ適当に回ろうか」

特に詳しく街を知っている訳でもないし、大掛かりなプランがある訳でもない。それでもただ、彼女と戦う必要がないと解る場所で一緒に歩くだけでも十分に幸せだというのは解った。安い男だと思いつつも、

平和な時間は永遠に続いてくれないという事ぐらいは。良く解っていた。

◆

デートから満足げに帰って来て、なんでそこで押し倒さねえんだよとベルにキレられて腹パンを喰らってから数日が経過した。与えられた屋敷で平和にトレーニングしたりコミュニケーションを取ったりして、死神と塔の扉の世界を思い出させるような平和な時間を過ごしていた。

根本的に自分から依頼を取りに行く必要はなく、完全にヤタガラス側から斡旋される為、待つだけで済むのは凄く楽だった。まあ、間違いなく警戒されているというのは事実なのだが、それを入れても生活費には余裕があるし、自分から危ない場所に飛び込んで生活費を稼ぐ必要がないのは、崩壊世界と比べれば警戒されている事実を込みにしても天国の様な場所だった。

何時か、自分の世界もこれぐらい復興するのだろうか？ そんな事を考えながら勉強、そして練習を続ける日常だった。

デビルサマナーとして必要なのは戦闘技能だけではないのだから。既にレベルと経験は完全に不釣り合いと言えるレベルになっている。だからこそ、必要な知識を蓄えて、自分を鍛える必要がある。だから開いている時間は相変わらず交渉術やら神話知識を調べては暗記す

る様に努力し、そして仲魔たちとのコミュニケーションを取る事も忘れない。

崩壊世界のサマナーから学んだ事だ。

悪魔は合体しても、前の出来事を忘れるわけではない。そして従う事を契約としてCOMPに縛られても、完全に縛られている訳ではない。場合によっては契約の穴を突いてきたりする奴も存在する。世界を取り戻すために一緒に旅をしている仲魔たちがそんな事をするとは思いたくはないが、

それでも主従でのコミュニケーションを取る事は非常に大事な事らしい。

特に悪魔は概念的な存在である事を考えると、モチベーションや感情でコンディションが激変する存在でもあるらしい。だからこそコミュニケーションを取るべきらしい。酒を使つて宴会をしたり、一緒に運動したり、勉強したり。日常的に接しながら主従だけではなく、一緒に戦うパートナーとして築く事が大事らしい。

そんな訳で日常的に家の中では悪魔を放し飼いにしている。

そしてそれを見てヤタガラスの使者が滅茶苦茶ビビる。どうやら、悪魔を一体以上同時に召喚させられるのはかなりの高等技能らしい。そしてそれを常に召喚し続けているとなると、もはや膨大なMagが必要となつてくる為、そういう意味でも信じられない光景らしい。

軽くヤタガラスの使者がショック症状を引き起こしていたが、

持ち込まれたのは仕事の話だった。いよいよか、という感じがその時にはしていた。迷う事無く異界を爆撃する事でクリアするとかいう問題児を相手にヤタガラスがどんな仕事を持ち込んでくるのか、実の所ちよつと楽しみに、というか待っていた。何もせずに食う飯は美味いのだが、心地の悪さがあった。早い所仕事なんかで成果を出せば、心おきなくだらける事も出来る。

そういう事で、漸く仕事の時が来た。その内容を確認すると、どうやら要人護衛らしかった。異界爆撃テロを行ったサマナーにそんな仕事を与えていいのか？ と思ったりもしたが、どうやら戦闘力の問われる仕事であるだけに、自分をヤタガラスは指定したらしい。

ともあれ、仕事は拒否する権利もない。  
ヤタガラスのおかげでこうやって平和な日常を過ごしているのだから。

故に——それは雨の日となった。

◆  
雨が降っている。

昔は面倒だった雨だが、今ではそこまで嫌いじゃない。あの崩壊世界では雨が降らないのだから。そう、海が存在しない。水が不足している。だから雨が降らない。だから雨が降ると、少しだけ楽しくなってくる。降り注ぐ雨の中、少しだけ濡れるのは嫌いじゃなかった。少しだけ心が躍る感触に、どうやらアンも同じらしく、足運びが軽く踊りながら、降り注ぐ雨に体を濡らしていた。

お互い、超人であり、魔人だ。雨で風邪を引くような事はない。仕事用の装備姿でヤタガラスに指定された場所は、軍事基地の前だった。そこには何台もの車が止められている。確か、この時代は車は結構な高級品じゃなかったっけ？　と思い出し、それが何台も並んでいる姿に圧巻を覚える。

そして同時に、此方よりも先に到着していた姿を見つけた。

書生風の服装をしているサマナーの姿、つまりはライドウだった。だがそこにはライドウではなく、白いスーツの軟派そうな男の姿もあり、顔を隠すような恰好をした女の姿も見られた。ライドウの肩の上に居るゴウトはどうやら、女に対して文句を言っていたらしい。だが此方が来るのを見ると、強引に話を切って此方へと言葉を向けて来た。

「こうやってお会いするのは初めてですね、如月リユージ。私はヤタガラスの者になります」

「どうも」

「貴方の奇抜な発想と戦闘力は今回、妨害が想定される護衛任務にて最適だと判断されました。ライドウと協力して任務の完遂をお願い

します」

「奇抜……」

『そらそうよ』

『どの世界に四文字を自爆テロの燃料に使い続ける事を発想するサマナーがいるって話よ』

ここにいます。いや、だってアレ、最大の被害を巻き込みながら虐殺する為の最適解だもん……と、心の中で祈っておく。まあ、生き残るために手段を選ぶのは悪い事だとは思わないし。それでも一応、時と場合というのは考えておく。ともあれ、ヤタガラスの女は去ってしまっただので、代わりにライドウへと向かって軽く敬礼の様なポーズを取った。

「じゃ、今回は宜しくお願いします」

「此方も宜しくお願いします」

「貴様か……ライドウの足を引つ張るなよ」

「なんだ、お前の知り合いなのかライドウ。あ、俺は鳴海な」

「どうも、如月リユージュです」

完全に状況がアウェイだからか、口調がどうしても敬語寄りになってしまう。この業界では舐められないようにもうちよつと粗暴な口調でやってくつもりだったのに、ちよくちよく素というか、日本人気質が浮かび上がってくる。根本的にこっちの世界、俺向いてないんだよなあ……と理解させられる。

ともあれ、仕事をする以上は私情を挟み込まない。劣等感や嫉妬は全部捨てて、仕事モードのスイッチを入れる。ライドウもそれに気づいてか、背筋を伸ばして此方の言葉に耳を傾けてくれる。本当に真面目で善人なんだよなあ……。

「仕事をする前にとりあえずお互い、隠している手札は隠すとして、話せる範囲で話しません？」

「デビルサマナーにとって悪魔の情報は命綱になりますが、それでいいんですか？」

「仕事はきっちり片付けたいタイプなので。先輩方も仕事をするならちゃんと仕事相手とコミュニケーションを取って、事前にハメ殺され

ない様に互いにカバーできるような程度情報共有しつつ立ち回る事が優秀なサマナーだつて言われてますんで」

「何故その常識力をこの前発揮できなかった」

ライドウを前にテンパってはしゃいでしまったのだ。許してください。というか忘れて欲しい、永遠に。アレは悪い記憶なのだ。それはともあれ、ライドウと軽く情報交換を行う事にする。やっぱり根本的にいい奴だ、と話しながら思う。仕事に対して真面目だし、此方の言い分が正しければそれを素直に聞く。

「此方でのサマナーは基本的に悪魔合体で習得させる魔法とかを厳選させたり、耐性を事前に調べて欲しい悪魔とかを調べられるので、それを通して仲魔それぞれに役割を与えて運用していたりするので、こいつが強い、アイツが強いとかじゃなくて状況や相手によって運用を切り替える、それぞれが特化された仲魔という形になっていて」

「成程、どうやら其方の悪魔合体技術はどうやら此方よりもかなり発展しているようですね。此方だとそこまで悪魔の合体で自在に変化させられる訳ではないので——」

特化運用がメインである二十世紀のデビルサマナーに対して、大正二十年のデビルサマナーはどうやらサマナーとの相性面を考慮した悪魔を選出する事の方が重要に思われており、使役される悪魔も基本的にサマナー一人に対して一体、そして召喚できる数も一度に一体まで、というのがスタンダードらしい。

「無論、ライドウにそのような制限は存在しないがな」

ゴウトの自慢げな言葉が、やはりライドウはこの時代のサマナーとは別格である事を証明する。

此方の時代だと悪魔との契約、召喚、その負荷や負担は極限までプログラムによって削減、軽減、肩代わりされている。だがこの時代のサマナーは悪魔の使役や契約を才能と脳の領域でどうにかする必要があった。DDSはその演算を機械に代替させる事によって、個人の才能に関係なく悪魔を使役させる事を可能とする、奇跡のプログラムになっている。

才能でしか出来なかった特権を誰にでも出来る様にしたのだ、恐る

べきはステイブンだろう。悪魔の複数召喚もその為、大正二十年ではレア技能。それが出来るというだけで非常に貴重な戦力として認識されるらしい。

それも当然だろう。デビルサマナーが根本的に一人で一体しか制御できない所、複数の悪魔を入れ替えながら同時に使役できるのなら、一人で数人分の働きをする事が出来るという事でもある。

そりゃあ異界爆破テロなサマナーでも働かせるわ、と思う。

ライドウ級の人材でもなければ複数使役が出来ないのであれば、複数の同時使役が出来るといっただけで管理し、運用すべき戦力になってくる。

ライドウとの話は、結構というかこの時代における常識を理解する上で非常に有意義な会話となった。

ただ、もう一つ驚かされたのはこの時代にはレベルの概念が薄いという事実でもあった。どうやらアナライズの魔法やそういうプログラムが存在しない事に原因があるようだが、悪魔の強さをレベルの様な数値で測る事はなく、同時に実際に攻撃しない限りはその耐性を知る様な事も出来ないらしい。

現代、というか科学によるサポートの存在する時代から来た身としてはなんとも恐ろしい環境だった。事前にレベルも調べられず、耐性も調べられないのなら比較的に通じやすい衝撃や疾風属性、或いはガードキルを取得している仲魔以外は全く安心して攻撃出来ない魔境環境だった。

「良く……生きていますね……」

「……？」

相手のレベルも耐性も事前に取得できない環境で、それでも業界最強格を維持しているライドウという存在、環境の恐ろしさを知れば知るほど、その強さが際立ってくる。レベルや耐性も解らないのにぶつた切って殺せるだけの実力。一人一体保有するのが通常な所に保有する複数の仲魔。そしてこの時代ではありえないとも表現できるほどの大量使役可能な才能。

まさしく、葛葉ライドウという名に相応しいだけの怪物的実力者

だった。

「じゃあ戦闘に入ったら支援と妨害をメインで此方でやるので、ライドウは自由に動くという事で宜しくお願いします」

「良いんですか？」

「ええ、純粋な強さはライドウのが上でしようし。見栄を張って失敗する方が恐ろしいですから。素直に強い人のサポートに回った方が結果が良くなりますからね、こういうの」

渋谷での大規模レイドを思い出す。アレとか実に良い例だった。ただ戦うのではなく、数人で戦う場合は魔法などによるサポートを専門とする仲魔がいると、それだけで選択できる行動の幅が広がる。自分よりも強い人間がいるのなら、突撃の狼煙は無理でも、スク・カジャやタル・カジャで支援したり。スク・ンダで相手を妨害して自由にライドウを動けるようにした方が遥かに達成率が上がるもんだらうと思う。

「というかどう足掻いても今の自分ではライドウ並みの戦果を叩き出す事は出来ない。」

それは自分が誰よりも理解している。

だから、これでいいのだ。分は弁えている。自分は脇役どころか、舞台の上には本当は存在しない人物なのだから。自分にそう言い聞かせながらライドウとの話を終えた所で、鉄を引きずる音と共に基地の入り口が開いた。ちりん、と澄み渡る様な音と共に基地の内側から大量の武装された軍人と共に姿を現す女の姿が見えた。

その姿を車に夢中な鳴海以外の全員が捉えていた。

「サマナーを加えた上でこれだけの物々しい警護を必要とするだど？」

「一体何者だ……？」

異様な数の軍人の姿に気おされながらも、即座にアプリがレベルを解析し、その大半がレベル的に10にも届かない連中である事を確認した。いや、それでも一般人、軍人であってもレベルが5に届くような人間は少ない。プロフェッショナルでももっとレベルは低い、どこかで聞いた覚えがある。となると精鋭部隊とも呼べる連中を集めたのだろうか？

良く解らない。

「媛、此方へどうぞ」

そう言って車に乗り込む護衛対象を見た。その姿を見送りつつ、  
「さーて、お仕事お仕事！ さっさと終わらせて車を貰って帰ろうか  
！」

なんて、陽気な鳴海の声が聞こえてきて、肩から力が抜ける。

「はあ……それでは行くぞライドウ」

ゴウトが先導する様に鳴海の乗り込んだ車へと向かうと、ライドウは足を止め、それでは宜しくお願いします、と軽く敬礼してから車へと乗り込んだ。その姿を見てから自分も、ドライバーが待っている車へと向かって。

車へと乗り込めば、直ぐ横にアンが乗り込んでくる。流石の超人や魔人でも、濡れているのを即座に乾かすような力はないので、車内が濡れる。申し訳ないと思いつつも、車は終われば報酬として貰えるらしいし、まあ、後で自分の物になるなら別にいいかなあ、と判断する。  
とりあえず、

「それじゃ発進お願いします」

「了解です」

「さーさー」

アンの発信の言葉と共に車が動きだした。雨模様の空を窓の内側から眺めつつ、ライドウがいる時点で絶対に普通には終わらない予感を感じ、

とりあえず、何時でもDDSから仲魔を召喚できるように準備だけはしておく。



軍事基地から帝都内、別の場所へと向けて要人を護衛移送している。

それに用意された護衛の数は両手の指では足りず、凄まじい数の軍人が車に乗りながら列を作って進んでいる。正直、一種のパレードではないかと思う程に派手だ。護衛するのはいいとして、少々派手過ぎではないだろうか？ とは思わなくもない。これでは誰かを守っているぞ！ と宣伝している様なものだ。

『実際、私はこれを囮だと思っわよ』

「マジで」

スマートフォン内部からベルの声がした。

『ライドウを呼び寄せたのもおそらくは護衛という行動に対して真実味を出させる為でしょうね。私だったら本当に大事な物をこんな風に露出させるわけがないもの。おそらくはこれがフェイクで、そして本命は別ルートを使って移動中……という所でしようね。実際、あの護衛されていた女はレベルは5程度しかなかったし、他に特別な十二力を持ち合わせていた訳でもないし……。まあ、解りやすいわよこれは』

ベルの分析に流石魔王、という素直に称賛を送る。だけどその場合、此方の護衛行動そのものが無意味なのでは？ と考えてしまう。ベルがそう簡単に解る事であると言うのであれば、それは敵にも理解される事なのではないだろうか？

『それでいいのさ、サマナー！』

ヴァラーハが言葉を引き継いだ。

『いいかい、サマナー。フェイクや囮というのは相手からすればどれが本命か解らないという所に厄介さがあるんだ。特にこの時代にはどうやら、アナライズ系統の魔法も存在していない。つまり囮に見せかけた本命、という手段を取ったとしても見抜けないんだよ。つまり最低限それが本当に囮であるかどうかを把握しなくてはならないのさ！』

「つまり」

『アナライズ出来ないなら殴って調べるしかないね!』

「お、原始的ー」

約束された襲撃。主人公ヒーローが存在している状況で何も起きない筈がないんだよなあ、と確信する。今度からライドウと一緒にのお仕事はどうにか回避できないかを考えよう。

たぶん無駄だが。

だがとりあえず、仲魔たちはまず間違いなく襲撃されると確信している。故にまずは出来る事を先にやっておく。D D Sから鳩を召喚し、それを肩の上に乗せておきながら更に装備を召喚する。ルーチェ&オンブラを取り出し、それで両手を占領しながら、鳩にD D S経由でM a gを供給する。契約というパスを通じて此方のM a gを消費し、鳩が魔法を使えるようになる。

「えーと、弾丸は神経弾でいいよな、大体の相手に突き刺さるし」

「ラストキャンディ! 今の我はラストキャンディの化身! ラスタキャンディ! 再びラストキャンディ! 輝ける信仰のラストキャンディ! 溢れる信仰のラストキャンディ!」

『ラストキャンディに清き一票』

スダマ先輩がついに選挙に乗り出したらしい。突撃の狼煙には遅れるが、それでも全種強化魔法を統合させたラストキャンディの効力は絶大だ。使用する度に力が漲ってくるのを感じる。ただ、高位魔法なのでM a gがガンガン消費される軽い倦怠感を感じる。カロリーバーを口の中に放り込んでもぐもぐしながら消費されたM a gを何とか補充しつつ鳩にラストキャンディを使い終わらせ、アンも指の骨をぼきぼきと鳴らす。

そんなアンが此方を見た。

「準備……完了?」

「完了」

「ぐっど、たいみん」

どこか砕けた英語の発音でアンがそう言った直後、背後から加速して飛び込んでくる姿が車の両脇へと上がって来た。それはバイクで

あり、それを運転するのは白い装束に身を包んだ、いかにも妖しい姿の連中であり、

その手には銃が握られていた。

挟み込む様に、発砲音が響く。

「おそ……い、よ」

その弾丸をアンが片手で両方共掴んだ。そしてそのまま、指で弾丸を弾いてガラス窓を貫通して射撃してきたバイカーの姿に叩き込んだ。銃弾を顔面に叩き込まれたバイカーの頭が破裂し、バイク共々吹き飛んで後ろへと消えて行く。超人や魔人が運用する事を前提として作られたL&Oならともかく、通常の銃の速度程度、魔人であれば容易く見切れる。

『レッツパーリイ！ なのじゃ』

チエフエイの言葉が終わる頃には連続の爆発音が響き、車が炎上しながら吹き飛び、破壊されて行く光景が窓の外に移る。ドライバーは必死にそれらを回避しながら、護衛対象のいる車へと向かって運転して行く。

「運転手さんは離脱して貰っても結構です。一応ラストキヤンデイの範囲内に居たから銃弾の数発ぐらいは無事だろうし」

「いいんですか？」

運転手がミラー越しに此方を見るのを確認し、コクリと頷いた。

「受領する車が廃車になっても困るので——ヴァラーハ！」

SUMMON

言葉と共にDDSから車外にヴァラーハが召喚された。巨大な猪の姿が道路に出現し、バイカーをそのまま踏みつぶして粉碎し、目の前のバイクを牙で振り上げて投げ飛ばした。アンが走行中の車の扉を蹴り飛ばして破壊し、そのまま飛び降りて道路を蹴り、ヴァラーハの背に飛び移る。

「まあ、こういう事なので」

「成程、それでは武運を！」

車から飛び降りて同じように大地を蹴れば、車が素早く護衛団から外れる様にハンドルを切って逃亡した。それを追いかけてようとする

姿に向けて引き金を素早き引き、牽制しつつも二発目の弾丸で撃ち殺す。

……これで人殺し、か。

射殺しておきながら、不思議と気持ち悪さも何も感じなかった。俺もいよいよ此方側の世界に慣れて来たのかもしれない。そう思いながらヴァラーハの背の上からヴァラーハに指示を出す。

「ライドウと合流しよう。たぶん俺が居なくてもどうにでもなるだろうけど」

「了解だよサマナー。逆に考えればいいんだ——出番を奪つてもいいのだ、ってね！」

ヴァラーハの言葉に笑い声を零しながらライドウの車両へと向かって走らせる。爆破炎上する車両が多い中で、ライドウの車両はその天井を破壊されながらも、ライドウもドライバーをしていた鳴海も無事な姿を見せていた。まあ、ライドウがいるなら無傷なのも当然の話だろう。

「鳩」

「ラストキャンデー！」

ごりつとMagが減って行くが、気にする事無くライドウに強化魔法を重ねて行く。ライドウが驚きながらも普段よりも調子が良さそうのを見て、

その姿が霞んできた。

音だけが動きに遅れて残響として発生し、ライドウの乗っていた車に接近していたバイクが全て、バラバラに解体されながらライドウの姿が車の中へと戻って来た。何時の間にか抜かれていた刀は鞘の中へと戻っており、笑みさえ浮かべる事はなく、敵の接近を警戒していた。

末恐ろしい。これでいてまだ仲魔を召喚していないのだから本当に怖い。敵対だけは絶対にしない様に気を付けようと心の中で誓いつつ、

バイクから転がり落ちたライダーが体を突き破る様に悪魔へと変貌する姿を見た。

「デビルシフターだったかあ……」

体を突き破る様に変身した悪魔変身者たちは全員相談したかのように同じ色、姿の悪魔へと変貌した。見覚えのない悪魔に即座に《アライズ》プログラムが稼働し、その正体を看破する。

「アンズー……レベルは38の電撃吸収、疾風弱点！ げえ、格上」

しかも出現するアンズーの数は軽く10を超え、その上で更に数を増やしている。空一面がアンズーの群れによって埋まって行く。レベルと数を揃えた暴力で殴りかかってくるのは確かに戦術としては何も間違つてはいない。

リアル無双しそうなライドウさえいなければ。

「鳩は戻して……チエフエイ！ ヴアラーハも重力の壁を張れ！」

「妾にお任せじゃ、そおーれ」

チエフエイと鳩を入れ替え、チエフエイがスク・ンダを放つ。回避不能な魔法にアンズー達の動きが鈍り、突撃して来ようとする姿をヴアラーハの重力魔法で壁を作り、牽制する。アンズーの姿が近寄れない様にしつつ、フルバフライドウが動けるように時間を与え、

元から超人的身体能力を有していたライドウが、強化魔法を受けて極限まで強化された状態、音さえ置いて再び加速した。

一瞬のうちにアンズーに接近すれば刀を抜刀して殺し、それを足場に次のアンズーへと向かつて連続で移動する。一瞬で五体のアンズーを斬り殺しながら悪魔を召喚し、そのまま鳴海の運転する車に戻ってくる。だがライドウが着地すると同時に不調を訴え始めた車が止まり出す。

そこから飛び降りたライドウがオルトロスを召喚し、ゴウトと共にオルトロスの背へと飛び移った。

鳴海しか乗っていない車にはどうやらアンズー達は一切の興味はないらしく、その殺意と自分とライドウへと向けてきているのが解る。

「おお、怖い怖い」

ヴアラーハの背の上、弾幕を張る様にトリガーを連射しながら神経弾をばら撒いていく。レベルではアンズーの方が圧倒的に上である

も、それでもデバフにデバフを重ねれば足は出てくる。攻撃する必要が無ければ此方も安心して妨害作業に集中が出来る。多重にスク・ンダを受けたアンズー達の動きはもはや最初の軽快さは存在せず、のろのろと飛行し、車よりも遅くなり始めていた。

「思ったよりはまともにもやるではないか。貴様の事だから市街爆撃でもするかと思っただが」

「流石に場所を選ぶ」

オルトロスに乗ったライドウたちが近くまで寄ってきた時に、ゴウトが声をかけて来た。ライドウもオルトロスの背に乗ったまま、サムズアップを向けて来る。それに応え、アンの方がサムズアップを返してくれた。

視線をアンズーから剥がして先頭集団へと向ければ、段々とその姿が目的地へと近づきつつあるのが見えた。車はトップスピードまで加速しており、もはや法定速度を守ろうとせずに目的地へと一直線に向かっていた。あの様子であればアンズー達が追いつく事はないだろう。

だがアンズーの方へと視線を向ければ、まだまだ元気なアンズー達が口を開き、ブレスの様な攻撃を吐き出そうとしているのが見える他、追加でバイカー達が道路を走ってくるのが見える。

「アンズーの方は此方で引き受けるので護衛をお願いします」

いいのか？ という視線をライドウが向けて来る。なのでそれに頷く。

「デクンダストーンを持ち込んでない時点でハメ殺し確定なんだから……」

「うむ……何故最初の時にそういう手段を取らなかった？」

うるせえぞにやんこ。三味線にすつぞ。早くどうぞ、と視線で促せば、ライドウが感謝する様に頷き、アンズーの下を抜けて護衛対象へと接近しようとする集団を追いかけて行った。ラストキャンデイがかかったままだし、デ・カジャかデカジャストーンでも使われない限りはライドウ無双で終わるだろうと予測する。

まあ、確実に勝利してしまうであろう主人公は放っておいて、

問題は此方の方だ。

空に浮かんでいるアンズーの数は既に30に届く。電撃吸収を保有するからガードキルでは意味がないため、ベルが現在無能化している。空に飛んでいても、十分に市街地を吹っ飛ばす範囲内だからスタマは使用禁止。

となるとそれ以外の手段でこの集団を殲滅する必要がある。

とはいえ、既に速度はこれ以上下がらない程スク・ンダが多重にかけられている。その後には暇をしているチエフエイがついでにラク・ンダもかけていて。アンズーがもはや虫の息と呼べる状態になっている。衝撃ならアンの竜巻が通じるのだが、疾風じゃないので弱点は突けない。

となるとごり押しするしかないだろう。

「まあ、この状況に突入した時点で勝ちの目は出させないけどな」

SUMMON

「鳩はひたすらテトマカが切れ次第補充で。チエフエイはタル・ンダとマカ・ンダはいいから神経精神系でひたすら妨害し続ける。ヴァラーハはマハグライバでアンズーを薙ぎ払え！落ちて来たのを潰していいぞアン！」

ヴァラーハが戦いやすい様にその背から飛び降りつつ指示を出した。現状、油断も慢心もせずにつつちり確殺を狙うのであればこれが一番良い筈だ、と判断しつつ仲魔に命令した。それに従い、動きの遅くなって、脆くなったアンズーへと向かって、一切逆転を許す事もない仲魔たちによる集中砲火と連続攻撃が叩き込まれて行く。

SLEEP、CHARM、STUN等で動きを停止したアンズーがマハグライバによって空から地上へと一気に叩き落され、道路へと陥没する様に姿が潰されて行く。それに追撃する様に飛び込んだアンがアンズーを上から蹴り潰して殺して行く。

デビルシフターたちの姿が潰れて死んで行く。

人を今、虐殺している。初めての事態、経験だったが不思議と、それに思う様な事はなかった。先ほど人を殺した時と同じで、悪魔を始末する時と同じように簡単に引き金を引き、アンズーを打ち落として

処理していく。

空を飛んでいたアンズーはレベルが上で、間違いなく格上だった。だが本能のままに吠えて、攻撃しようとする姿は自分が崩壊世界で学んだ、対悪魔やサマナーに関する基本戦術が欠片も存在しておらず、言い換えればレベルが高いだけの力モだった。デ・カジヤもなければデ・クンダもない。神経や精神魔法に対する耐性もつけてこない。こいつら、もしかして死ににきているのではないだろうか……？

そう思ってしまう程に、強さの差はレベルだけだった。その他の要素は全て仲魔による多重のデバフによって一気に押し込んで封殺できると範囲だった。

数分もすればアンズーが抵抗しようとするのを纏めて殺し終わる。残されたアンズー達の死体は完全死亡が完了するとMagとなって消滅して行く。その後に残されるものは——なにもない。

経験値となって、吸収されるだけだ。自分よりもレベルが結構高いアンズーの集団を討伐した事で、自分も仲魔もレベルがそこそこ上がったのを確認しつつ、スマートフォンをポケットの中に押し戻す。スダマ先輩さえぶつ放せばもっと楽に終わったのだろうか、先にそんな破壊を巻き起こすと処刑不可避だから残念に思いつつ、後続の悪魔が来ないのを見る。

どうやら本当にこれだけで終わったらしい。

「俺抜きでもこの程度ならライドウが負けるわけないよなあ……？」  
『或いはライドウの偵察が目的だったのかもしれないわね』

DDS内部から声をかけて来るベルに成程、と呟く。そういえばアナライズが存在しないから一回ぶつからないと実力を調べる事も出来ない筈だ。だったら適当な悪魔をぶつけてライドウの実力を調べるのもありと言えはありなのかもしれない。

それに巻き込まれる身としてはたまったもんじゃないけど。

「ふうー……：良し、後続が居ないのならこのままライドウに合流だな」  
その必要は恐らくはないけど、仕事をするなら最後までスマートに、というのがプロフェッショナルだ。過信しない、慢心しない、悪魔の存在する業界での基本的な心構えだ。これを守れないサマナー



もバスターも、近いうちに死ぬ。

故にヴァラーハ以外の仲魔をDDSへと戻した所で、合流すべくヴァラーハに騎乗し直し、護衛団が向かった方へと進んで行く。

◆

そしてその先で当然の様に、少しぼろぼろになっているが無事なライドウト、そして車のハンドルだけを握っている鳴海の姿があった。当然の様に勝利しているライドウトの姿はともかく、どこか心が通じ合ったような姿を見せる鳴海とライドウトの姿はまるでスポットライトを浴びている様な景色をしており、

少しだけ、その景色に嫉妬した。

ライドウと共に護衛の仕事をしてから数日後、頼りになるというか、戦力になると理解されたのか、ちよくちよくライドウが此方に顔出しをする様になった。ライドウが善良な人間であり、別に監視に来たわけではなく、彼がいる筑土町パトロールの帰りに此方に寄っているという事だけは解ったが、それでもまるでコミユが解禁されたかの如く、顔を出すようになってきた。

大学芋を片手に。

もしかしてパトロール帰りに大学芋をゆつくり食べられる場所を求めていただけなのでは……？ という疑惑が持ち上がる。ともあれ、そんな風にライドウ共々ゴウトが寄り付く様になった。やつてくると大抵居間で大学芋のパツケを開けてアンと箸か爪楊枝でそれを突きながら食べ、チエフエイがお茶を出している。

完全に馴染んでいる景色だった。

その間に自分が何をしているのか？ となるとトレーニングだった。

悔しいが、自分が弱い事は自覚しているし、引き出しだつてそう多くはない。出来る事と言えば銃を撃つか、或いは悪魔に戦いを任せたり、道具を使うばかりだ。異能者サマナーと比べれば、余りにも引き出しが少ないと評価するしかない。だからそこを埋める為にも、

ライドウの人外ぶりを見てからも、更に自分を鍛えるようにした。というか鍛えないと生きて行けない様な気がするので、必然的に鍛える必要はあった。

この前のアンズーの群れは正直、雑魚だった。あの集団が一体一体スク・ンダを一回でもいいから唱えていけば、それだけで此方を封殺できたかもしれない。なのにそれを相手はしてこなかった。殺意的には温いとさえ表現できるが、もし、相手がこういう戦術を取り入れて戦う様になれば、

その時は果たして、俺には戦えるだけの力があるのだろうか？ ラヴェンツァは俺には俺だけの力があると言っていた。絆と繋がりを

力にする様な能力があると云っていた。だけどそれは上手く、使い処も使い方も解らない。そんな不確かな物に頼る事も出来ない。だもしたら自分の手札を増やす為にも鍛えるしかないのだ、  
自分自身を。

そういう事でヴァラーハに頼んで、武芸を教えて貰っている。ヤタガラスに連絡を入れればサマナー用の武器の購入は出来るので、それを通して訓練用の武器を購入してヴァラーハから学んでいる。

「まあ、サマナーにここまで辺の才能はまるでないけどね！」  
「知ってた」

どうやら戦闘能力としての才能は全部ガンスリンガーにガン振りされているらしく、銃以外の才能はほぼ並程度しか存在しないらしい。だから戦闘する時はいつそ、それ以外での戦闘手段は諦めた方が早いとか言われてしまった。

「まあ、どこまで頑張っても一流程度が限度だよね、サマナーだと。とりあえず、一流程度には辿り着けるから心配しないでいいよ、サマナー。それに一流程度あれば大抵の相手には通じるからね！ 本番はそれを超えた所にあるけど、まあ、とりあえず銃以外の技能を一流レベルにまで引き上げようか！」

インド基準で考えるの止めろ。そう突っ込みを入れても一流程度の武芸があつて基本、入り口だとかいうヴァラーハのスパルタ訓練は続く。うっかり大けがをしても回復魔法万全の鳩が存在する以上、まるで問題にならない。とはいえ、何時も怪我をする訳ではなく、怪我をするのはヴァラーハとの組手の時ぐらいであり、それ以外は至極真つ当に素振りや動きに対するアドバイスを行われ、ひたすら反復練習を繰り返すという形だった。

「剣、槍、弓、斧、そしてそれらを支える体術！ 僕もかつては師からそれを学んだ身、なあに、少し死ぬほど苦しめば簡単に一流程度にはなれるさ！ 基本だからね！」

「お前のそのインド基準止めろ」  
「大丈夫！ サマナーはクソ雑魚だし、才能はないし！ どれだけ鍛えても絶対に武芸者としては大成する事はないけど、僕は一流の指導

者としての経験があるから短期間で才能限界までは武芸を育て上げれるよ！」

「ほんと泣くから止めろ」

「だけど僕はサマナーがこの苦難を乗り越える事を信じてる……！」  
「ぶっ殺すぞこいつ」

無論、スダマ先輩で。まあ、脅した所で寧ろ喜ぶのでこいつはダメだ。なので仕方がなく……でもなく、強くなる為に日々、ヴァラーハに古代文明仕込みの武芸を叩き込まれて行く。だがそれを見ていて大人しく出来る程ライドウも良い子ではなかった。

「解りました……苦勞を分かち合いましょう」

「何が解ったのかこつちを見て言つて」

「乱入だつて？ 良い度胸だ—— 歓迎しよう！」

「助けて」

しかもそれをヴァラーハは止めない。そういう事で、大学芋を食べた食後の運動にライドウが混ざる様になった。庭でヴァラーハの指導を一緒に受ける様になりつつ、時折葛葉流最終奥義前転を見せて不思議な軌道でヴァラーハの攻撃を完全回避したりする姿は、もはや異次元としか表現が出来なかった。

葛葉ライドウともなると前転で次元を超えるのかもしれない。

そんな事もあり、ちよつと予想外……というよりはちよつと気後れしてしまつたが、いつの間にかライドウがちよくちよく出入りする様になった。その本当の理由は恐らくは監視か何かなのだろうと思つたりしている。あの護衛依頼の時に、複数悪魔の同時使役を始めとした、この時代では見慣れない戦術やハメ技を見せた事で警戒されてしまったのかなあ、と個人的には思っている。

ただ、まあ、

大学芋を食べるアンの表情は、何時も通り幸せそうだった。その幸せそうな表情はほとんど無表情と呼べるもので、自分の様に毎日付き合つた人物でもなければ解らない様な小さな変化なのだが、それを見ているだけでも結構幸せだったので、この際、ライドウが大学芋を持ち込んでくる限りは文句を言わずにしようという事を決めていた。

そうやってライドウがちよくちよく入り浸る事が増える様になって、生活もそれに合わせてちよつと変化する。来客用のお茶請けを買ってくるようにチェフエイに指示されてなぜかサマナーである自分が買い出しにパシラされる事が増える。なんだかんだで日常的に家事を分担しているチェフエイなので、そういう事に段々と真剣になり始めている部分があった。

お前、人間を墮落させる側じゃなかったっけ……？

そんな事を考えながらも、毎回作ってくれる夕飯が美味しいので逆らえない。朝も早いうちに叩き起こされて健康的な生活を送ってしまう。そしてそのままヴァラーハとの鍛錬コース。

恐ろしい程に健康的な日常になっている。

そしてここにライドウがちよくちよく出没する事で、ライドウと合わせて鍛錬したり、ライドウ本人から技術を学び始める様になった。ライドウ自身は悔しいがやや年下でも雲の上の様な実力者だった。悪魔、戦闘、魔術や神話形態に関する知識はずば抜けており、此方よりも遥かに上だった。

一緒に鍛錬に混じってくれただけで割と、勉強になるのだ。悔しいが。

ライドウのクズノハ式とでも呼ぶべき体術はヴァラーハの教えるそれとは違っていた。ヴァラーハの武術は人間が人間を殺す為の技術であり、ライドウのそれは人間が悪魔と戦う為の体術だった。根本から目指すものが違う二種類だった。ただそれがそうである、という事を知るだけでも割と力になる。そういう訳で豪華なゲストを加えつつ、鍛錬は続く。

それでも短時間で成長できる程、世の中は甘くない。

◆  
「それじゃ、音頭取るわよ……」

「二！」

「三なのじゃ」

「溢れ出す信仰が抑えられず人類が愛と平和に包まれてしまう四」

『その時魔王はたわしを手にとった。そしてそれを勇者へと突きつけながら叫んだ。おお、これがオムレツに入れる最後の隠し味だ！ セラエノに引きこもった教授マジ許さねえ……！ ミニニユーク！

ミニニユーク！ ン・ガイの森を放火だ！』

「よし、全員揃ってるわね」

「正気じゃないのも含めて揃っておるの」

「それがデフォだから……」

深夜、居間にはアンとリユージを除いた家の住人たちが集まっていた。話しながら摘まむ為にチェフエイの出した抹茶と栗羊羹の組み合わせは、時間帯を考えれば殺人的とも呼べる組み合わせだった。或いは、悪魔的な組み合わせとも。だが悪魔である彼らは眠気とは無縁であり、虫歯とも無縁である。つまりこの乙女が体重を気にしそうな組み合わせも、眠気が吹っ飛びそうな組み合わせも、まるで関係ない。食欲の化身、全王神の化身、魔界の宰相、神聖四文字の分霊、そして爆弾。バリエーション豊かすぎると表現できるその組み合わせはサマナー・リユージが現在使役する仲魔たちの姿であり、アンを除いた全ての仲魔が家の居間に揃っていた。示し合わせたように揃った悪魔たちはお互いを見やり、そして確認する。

「サマナーは？」

「部屋で眠っているね。軽く予知してみたけど朝までぐっすり眠ってるよ」

「あの子は？」

「サマナーを抱き枕にして添い寝しておるのお」

その言葉に人の、女性の姿を取っているベルゼブブはそう、と呟きながら頷き、そして腕を組みながらそれでは、と言葉を置いた。

それは悪魔たちの集まりだった。

主にさえ秘密にして開かれる悪魔たちの会合。

仲魔たちだけで開かれる、主には絶対に知られてはならない裏切りの集い。

その内容は、

「——さあ、今夜もどうやったらサマナーのヘタレ具合を矯正してあの子を抱かせるか考えるわよ」

「どうやったらサマナーが童貞卒業するか、それを物凄く真剣に考える集まりだった。」

その達成難易度の高さに、揃った悪魔たちは珍しく腕を組み、首を傾げ、そして低い声で唸っていた——スダマ以外は。スダマだけは栗羊羹をバーの状態のまま口に咥えながら高速でちやぶ台の上でスピンしていた。その全身で甘味の喜びを表現しているだけだった。

「この前の突撃！　一緒のお風呂！　濡れた君の髪が艶めかしくて……」作戦は失敗したわね……」

「少なくとも不能じゃないって判明しただけでも良い方じやろ、アレ」

「トラウマが原因でEDになる事はそこまで珍しくないけどね！」

「EDになられたら困るのよ。マジで」

悪魔たちの繰り広げている会話はかなり下世話な内容だった。その議題はどうやったらサマナーの童貞を女魔人を相手に喪失させられるか、という点に尽きる。サマナーの仲魔たちは毎晩こうやって集まってお茶をしながら、真剣にその事を考えていた。その絵面はまさに馬鹿々々しいという言葉に尽きるが、その内容は割と真面目だった。

「あの子の食欲が増えているのよね……」

ベルゼブブが溜息を吐く様にそう呟いた。徐々に、徐々にだがアンという女魔人・人修羅の食欲が増えて、食べる量が増えてきていると。

「まあ、もうしばらくは妾が飯を多めに炊くが故、保つじやろうが」「それでもその内、限界は来るだろうね。恐らくこの世界を出て行く辺りから苦しくなるかな？」

ヴァラーハも人間の姿で少し、考える様に計算してから言葉を口に、そして他の悪魔たちから同意を貰った。何も、この悪魔たちの会話内容は決してふざけているものではなかった。

「レベルが上がれば上がるほど体を維持する為のMagは増えてくる」

「僕らの様にアプリの機能でコストカットできる悪魔とは違って、彼女は肉体を保有しているからね。節約モードになる事が出来ないからどうしてもMagが必要だ。今の所、この時代には色々感情が渦巻いているから空気中のMagがそこそこ豊富で悪くはない。けどレベルも上がって来て大分苦しくなってきたね」

悪魔を維持するためにはMagが必要となる。

ステイブンが生み出したDDSプログラム、アプリは本来それを使役するのに必要とする演算の為に才能や資質をプログラムという形で負担する事によって、個人の才能に関係なく召喚、契約プロセスを可能にする道具だ。そしてそれに際し、様々な機能を付随する事が出来る様になる。

悪魔の召喚、維持にはMagが必要となる。

だがDDSで召喚する悪魔はMagで肉体を作られている。そしてその維持は同じMagを循環して利用している為、常にMagを消費し続ける必要はなく、一度召喚に使ったMagだけで継続的に召喚し続ける事が出来る。これが前時代のオールド・サマナーとは全く違う。オールド・サマナーは個人の才能に召喚や維持が任される他、召喚し続ける事にもMagを消費する必要があるのだ。

その為、サマナーが倒れたり、Magが切れた場合はそのまま、召喚が解除されてしまう。

だがステイブンが生み出したDDSで悪魔を召喚すれば、話は別だ。ステイブンのプログラムの画期的な所は誰でも、そして一度のMagで悪魔を召喚し続けられる点にある。その他にも専用のアプリやプログラムを導入する事で戦闘力を制限する事によって悪魔を生活用に力とMagを抑えた状態等で召喚する事も出来る。これが今のヴァラーハやチェフェイ達の状態になる。つまりは省エネモードになる。

だがそれが出来るのは現代のCOMPベース、DDSプログラムの恩恵を受ける事の出来る悪魔だけになる。

肉体を持たないからこそ、情報量を削減する事でMagの節約を行っているから当然の事になる。



だが、肉体のある悪魔、魔人などは違う。肉体とは即ち高密度の情報である。つまり物質として存在している情報の塊になる。それは肉体を得ている悪魔、高レベル存在というものだ。そしてそういう肉体を維持するにはもはやMagの存在は必要不可欠になってくる。

Magの調達方法は複数ある。食事する事、信仰を集める事、感情から摂取する事、そして他人から譲渡される事。この内一番手軽なのが食事をする事。これは食べる量を増やせばそれだけで済ませられるので、まだレベルが低い内はどうかなる。

だがレベルが上がってくると話は変わってくる。

英雄級とも呼ばれるレベル40に近づけば近づく程、肉体を維持する為のMagが要求される様になってくる。超人等の人間ベースの高レベル存在はまだよい。なぜなら人間は自分自身の力でMagを生み出す事が可能だからだ。少なくとも自分を維持するだけのMagであれば、何らかの手段に頼らなくても普通に生きて行こうとすればMagの余りが出来る程度には余裕がある。

だが悪魔はMagを自発的に生み出す事は出来ない。

何らかの手段で摂取する必要がある。それは肉体を保有し、元は人間だった悪魔でもそうなる。

つまり人修羅・アンは自分の力でMagを生み出せない体質となっている。彼女の大食は彼女自身の趣味もあるが、同時に足りていないMagを補充するという意味合いも込められている。彼女が取るスキんシップもサマナーに対する親愛の情が含まれているが、そのリアクションから生まれてくるサマナーの感情Magを摂取する為に半ば、本能的に動いているという部分もある。

「まあ、サマナーが童貞らしいリアクションを見せてくれている間はまだ安泰だと思うけど……いい加減、サマナーの方から手を出してくれないと困るのよね」

「じゃないと二人の初体験が逆レになってしまうのじゃ」

「うん……」

アンのMagが足りなくなってきた場合、食事とスキんシップで足りなくなってしまった場合はどうなるのか？ それをリ्यूージの仲

魔たちは良く理解していた。サマナー自身はまだ、好意そのものを疑っている部分はあるが、それでもアンがサマナーに対して好き好きオーラを向けているのは事実だし、誘えば一瞬でベッドインできるぐらいには好感度が高いのも理解していた。

だったらMagが足りなくなったらどうなるのか？

そう、逆レイプである。

単純にアンのMagへの飢えとサマナーへの好感度が我慢の限界に来て二人の初体験が逆レイプになるだけだった。というより、このまま放置していればまず間違いなくそのコースが強い。何もかも悪いのはヘタレているサマナーのだが、その境遇には同情出来る部分もある為、一概には完全に悪いとも言え切れなかった。

そんな考えから始まったのがこの仲魔たちの集いだった。

どうにかしてリユージにアンに手を出させよう。

それを会議する為の場だった。

ただ、問題は予想外にチキンでグラスハートなサマナーの存在であり、もう半ば諦めている形で逆レイプでいいんじゃないかなあ、と大半が思いつつあることだった。それでも逆レイプENDに到達してしまつたら恐らく、空気が最悪になる。

——それはめんどくさい……！

という共通する考えから、所謂ラッキースケベやイベントを企画し、それで何とかサマナーに押し倒させようと後押しをしていた。

死ぬほどくだらない内容だが死活問題だった。

「というか鳩もなんか口を出しなさいよ」

「いや、我は婚前交渉は悪いと思うから……」

「人の神殿を便所に改造した畜生が何か言ってる」

「原典の話を持ち出すのは止めないか」

ベルゼブブが憎しみたつぷりの視線を鳩へと送り、それを受けた鳩が目を反らしながら嘴で口笛を吹こうとして失敗している。

「というかサマナーはちゃんと女体に対して興味あるんだよね？」

「妾が閨の尿管を教えている間はちゃんと勃起しているのを確認しておるから問題ない筈じゃぞ。それでも妾襲われないんじゃないが……」

「やっぱりヘタレじゃない」

ベルゼブブの言葉にうん……とヴァラーハとチエフエイが呟きながら頷いた。栗羊羹を口に啜えたままのスタマが高速回転しながら浮かび上がり始めるのをベルゼブブが片手で掴んでテーブルの上に叩き落した。

「僕が彼の年齢の頃は分身して100人同時に相手をしたんだけどなあ……」

「参考にならないケースの話は止めなさい」

「妾思うんじやが、やっぱり一発経験した方が度胸がつくんじやないじやろうか」

「駄目よ。あの子が悲しむじやない。アレで結構乙女なんだから」

「人修羅にだけクソ甘い……」

当然よ、とベルゼブブがスタマを指先で転がしながら応え、溜息が居間に広がる。悪魔たちの最大の敵は他の悪魔でも世界でもない——主のヘタレさ加減だった。いい加減、女の一人でも押し倒せるぐらいのメンタリテイでもつけて貰わないと自分の番もないし、Mag補充や他の面で見ても辛い話だった。

「我、思ったのだが」

鳩がくるつくー、と声を鳴かせながら嘴を開いた。

「そも押し倒すとか考えるのが間違いなのでは？ 普通に告白させる事を目標として、その後でステップアップする事を考えるべきなのは？ 我、童貞にいきなり性交渉しろというのはちよつと早いと思うの。だから先に告白、キスとステップを重ねるべきでは？」

「何故じゃ？ セックスなんて挨拶の様なもんじやろ」

「どんな男だつて結局のところ女を組み敷きたいって思ってるんだから、サマナーのその気持ち刺激したほうが早いわよ」

「駄目だ、倫理観が違う」

鳩の言葉にカオス勢力が当然の様に首を傾げた。倫理観が死んでいる奴らに意見を求めたのが間違いだった、とライト勢力のヴァラーハへと鳩がつぶらな瞳を向ければ、

「……？ 練習も必要だしセックスするのに段階って必要なのかい

？」

「王族」

まるで頼りにならなかった。そこで鳩は気が付いてしまった。人間という種族全体の扱い方は恐らくカオス勢力が理解しているだろう。

人の動かし方を理解しているのは統治者としての経験を持つライト勢力だろう。

だけど、普通の人間、それを等身大で理解出来ているのは人々の生活に寄り添い、そしてそれを見続ける事が出来たライト・ロウ勢力の鳩のみだった。最後のアライメント超不明のスタマに関しては何話さえ出来ない。

「四面楚歌……！」

そう、人という種の面ばかりを理解している超越者の悪魔ばかりである為、等身大の普通の人間というものを知る悪魔が極端に少ない構成だったのだ。世界の危機、崩壊した世界の再生を目的とするパーティーである事を考えれば、納得の面子ではある。

だが普通のメンタリテイしか持たない人間のカウンセリングをする面子としては落第だった。

まさに四面楚歌。鳩から見て色んな意味で味方が居ない状態だった。

「じゃあ、そろそろ次回に行く作戦をそろそろ募集するわ。そろそろもうちよつと派手目のスキンシップを狙っていいんじゃないかと思うのよ」

「丁度一緒に寝ている所じゃし、人修羅の服を脱がして朝起きたら全裸だった！ 作戦はどうじゃろう」

「採用」

「ついでにサマナーも全裸に剥いておこう」

「追加採用」

「おお、神よ——あ、我が神だ」

そうやって、帝都の夜は平和に更けて行く……。

地下へと通じる梯子、その手すりを滑る様に緩めて下へと向かって落下し——着地する。映画でちよくちよく見る素早い梯子の降り方だが、これを普通の人間がやったら摩擦で手がヤバい事になりそうだよなあ、と思いつつももう超人なのでそう言う心配はない。第一、50メートルぐらいの高さから飛び降りても無傷でいられるのが超人と言う生物だ。単独で街を滅ぼす事の出来る強さというのは伊達じゃない。落下程度で死ぬような脆さを持つレベルではないのだから、こうやって梯子を下りる必要も別にないのだが、

まあ、なんとというか、気分の問題だった。

「くっ……くっ……」

既に降りていたアンがこの水の流れる地下空間の電気が消えており、光が差し込んでこない事を指摘する。唯一の光源は今入って来た入り口だけだ。それ以外は通っていた筈の電気も破壊され、完全な暗闇が支配する空間になっていた。

「おお、本当に電気が切れてる。……しかし臭いなあ」

軽く手を鼻の周りにはためかせるが、それで下水道特有の臭さが消える訳でもなかった。

そう、ここは下水道だ。

帝都の下水道。帝都という巨大な街を支えるアンダーグラウンドの世界だ。生活排水を流し込む場所であり、浄水所へと繋がる道筋でもある。こんな臭い場所、依頼でもなければ来る事もなかっただろう。まあ、臭いに関しては事前にヤタガラスから対策となる道具を貰っているんで、それを装備してきている。悪臭が衣服にこれで付着せず、そして稼働中は悪臭を避ける事が出来る。

ピンポイント過ぎる道具じゃない？ と思いかもしれないが、異界というのは時に毒で満ちていたり、Mag不足でスライムが大量発生した異界とかが時々発生するらしく、悪臭異臭対策は割と必須項目らしい。そういう訳で自分とアンの分の悪臭対策の道具は用意してある。

到着した所で M a g を消費して稼働させれば、即座に悪臭が気にならなくなる。ついでにベルベットルームで入手してきたライトマのスキルカードをカンテラと融合させて来たので、ライトマのカンテラも作成してきた。

「ライトマ」

装備している間は誰であつてもライトマを使用する事が出来る、と言う魔晶品だ。このポイントは異能者でなくても扱える、という事だろう。そういう訳でライトマが発動した影響で、闇に包まれていた下水道の様子が良く見える様になる。

そして着地点から数メートル先に、空間が歪んでいるのが見える。異界だ。

『帝都地下での連続失踪事件と下水道の異界化調査……ね？』

『まあ、外様でそこそこ戦力があるサマナーには任せやすい依頼だね！』

『妾、下水道は嫌じゃ』

「勝手をおっしやる」

お前ら、アンに全裸で布団に潜り込んでくるように進言した事を絶対に忘れないからな。許さないからな。絶対に一番臭い所に叩き込んでやるから今の内から覚悟しておけよ、と思いつつ依頼の内容を思いつく。

最近、帝都から人が急に消えるケースが増えている。その一部に関しては今、ライドウが遊郭の方に向かって調べている。自分が派遣されているのはライドウとは別方面のケースであり、ホームレスとか、失業者達が巣にしていた下水道や地下水道からその姿が唐突に消え、目撃証言で下水道へと運び込まれる人影が存在したらしい。

その先を調査すれば見つかるのは異界化された下水道だった。その奥におそらくは失踪の理由があるのだから、調べて、可能であれば解決して来いという内容だった。凄い雑というか、それだけ？　と言いたくなるような内容だった。

まあ、外様だからしょうがないよね……と思いつつ、下水道までやって来た。あからさまに警戒もされていない様子で異界が存在し

ていた。必要がないのか、或いは単純に馬鹿だからなのか、どちらにしろ、突入しない限りは確認する事も出来ないだろう。中に入るに限る。

だが入った直後でトラップが設置されていても困る。

「よし、逝け鳩！」

「いつもの」

DDSから召喚した鳩を異界の中へと投げ込んで、その様子を確認める。数分後、ぱたぱたと翼を羽ばたかせながら鳩が異界から出て来た。

「罫の類は存在せぬぞ。ただ悪臭がより一層強くなり、そして空気中に毒が混じっていた——まあ、我が神聖さの前に浄化されてしまったがな！」

「芳香剤になる神様」

まあ、便利ならそれでいいや。そう思いながら両手にルーチエ&オンブラを装備し、肩に芳香剤代わりの神を装備する。中の広さはそこそこあるぞ、と鳩が言ってくるが、具体的な広さは目視しない限りはどうもわからない。残りの仲魔は実際に入ってから召喚したほうがいいだろう。

そう思いつつアンと視線を合わせ、

異界へと続く空間の揺らぎに踏み込んだ。波紋を破る様に揺らぎの向こう側へと突き進めば、下水道の空間は一変する。悪臭が満ちていた狭い空間は広がり、近くには濁った汚水が流れる水道が見え、足元は気持ち悪くぬめっている。

ゴツドパワー

きらりーん、と肩の上の鳩が神聖なオーラを放った。空間に満ちていた悪臭と毒をその存在だけで浄化してしまい、半径20メートル範囲であれば余りにもあっさりと不浄が祓われてしまった。流石最大宗教の主神だけにはある。特に魔法とかを使ったわけでもなく、神としての性質だけでこのような奇跡を起こせるのだ。

冗談の样だけどガチなのだ、これ。

やっぱ頭おかしいわこの鳩。心の中で再確認しながら頷き、そして

空間を安全に活動できるのを確認した。

「環境的にバステに強いのが居そうだな……この場所じゃ重力系魔法も危険か。ベル」

「ま、他のが居なくても何とかするわ。任せなさい。この空間だったらこの人数だけでも十分圧殺出来るでしょうし」

「スダメ先輩禁止令」

『そんなあ』

実際、下水道は異界化で広がっていても、自分とアンとベルがフルに戦闘を行えば一瞬でカバーできる広さだ。寧ろこれ以上戦闘要員を出したほうが危ないかもしれない。狭い空間で戦闘する場合は常に出しておく人数を制限しておけ、と先輩サマナーが教えてくれたことを思い出す。

とりあえず、耐性に引つかからない限りはこの面子で行こう。吸収さえされなければどうにでもなる。ガードキルスキルがかなりの上位系統に入ってくるのは吸収と反射以外であれば対応可能だからだ。アンズーは正直、電撃吸収で相性が悪かったが、そうでなければ問題はない。

最近、全裸で布団の中にアンが突撃して来るからフラストレーションがたまっているのだ。フラストレーションというかチンコがイライラしている。

こういう時は悪魔をぶっ殺してすつきりしよう。

「うっし、行こうか」

何時も通り《エネミーソナー》と《ハニー・ビー》でマップ表示しつつそこに悪魔の反応をキャッチし、《百太郎》が稼働している事をチェックして奇襲警戒を行う。アプリが稼働し、その情報がちゃんと片眼鏡に表示されているのを見つつ、まずはこの異界内に居る悪魔がどんなものかを確認するために足音を殺してゆっくりと接近する。

《エネミーソナー》では敵が存在する、とまでしか解らないのだ。その内容は把握できない。となると実際にエンカウトする以外に知る方法がないのだ。そして突然の奇襲で知らない相手に襲われるのが一番恐ろしい。



だから異界に入ったら手頃な、襲いやすい位置の悪魔を探す。アップの力で簡単に索敵が行える自分にとっては、それは簡単な事だ。あっさりと裏を取ったり、奇襲する事が出来る。だからそうやって先に先手を取り、《アナライズ》を行う事で安全に情報を取得する事が出来る。

下水道は異界化の影響によって拡大、そして同時に迷路の様に複雑になっているのがマップに表示されており、行き止まりが多く存在し、そこに悪魔が待ち構える様にうろついている。マップを見る限りあまり、規則性の様な物は動きに見えない。だが奥の方をマップで確認すれば、悪魔の数が増えるのは解った。

ともあれ、まずは先手を取る。

ステルスする様に移動しながら角から悪魔の群れを見つける。5体ほどのグループで固まっている悪魔は異形化した人の様な姿をしていた。口が大きく開き、下顎から股間まで体がバツクリと開いて内臓が全て吐き出され、肋骨が牙の様に剥き出しのままになっている。皮膚は黒く変色し、目の色も黄色に輝いている。特徴的なのは……鼻が象の鼻になっていることだろうか。

『ああ、これはヴェータラだね』

「インド系の悪魔か……インフレしそう」

ブラフマーストラとか連射しない？ 大丈夫？ そう思いながらさっくりとアナライズする。

餓鬼 ヴェータラ Level 44

「つつよ」

『一応悪霊としては最上位の部類に入るからね。ただの雑魚だと思うと危ないよサマナー』

「40レベル超えてるって英雄級はあるのに油断も慢心もする訳もないだろ……」

レベル44の悪魔が帝都の地下で大量発生している恐ろしさは中々筆舌に尽くしがたい。だがヴェータラの耐性をチェックすれば電撃、衝撃、破魔が弱点となっており、銃には耐性を、そして打撃は無効化しようだった。神経と精神も無効化しようなので、チエ

フエイによるドルミナーやマリンカリンなどのデバフもかなり通りが悪そうだ。

神経弾との相性も悪い。ルーチエ&オンブラの弾丸を電撃弾へと換装する。相手が電撃弱点であればベルでジオハメしながら封殺する事が可能だ。後はアンは竜巻で壁になって貰い、敵の接近を弱点属性で押しつぶす。戦闘開始直後に鳩にラスタキャンディを使わせてバフを重ねながらひたすら弱点を責めれば多少のレベル差はあっても、ハメ殺せる筈だ。

「オーケイ？ 今の此方のレベルがアンズー狩りの影響で333ある、つまり合計で111レベル差はある。だがそれを考慮しても電撃でハメればほぼ問題ないと思う。最悪、鳩で直接殴って物理的なハマを叩き込む」

「強引すぎる力業だけど嫌いじゃないわよそういうの」  
「ん……頑張る」

レベルの高い悪魔は強敵であるのと同時に、豊富なMagの宝庫でもある。つまり殺せばそれだけ、此方を強化する為のチャンスでもある。あのアンズー殺しのおかげで一気に3レベルも上げられたので、あのペースでこのヴェータラも虐殺し、レベルを一気に上げたい所だった。ヴェータラのレベルがアンズーよりも上である事を考えると、十分レベルを上げる事の出来るラインだと思っている。

ヴェータラがうろうろと歩いている通路を角から覗き込む。その背が此方へと向けられるのを待ちながら、静かにカウントを進める。

そしてその姿が完全に距離を開けて背を向けられた瞬間、角から飛び出した。

「ラスタキャンディ」

鳩のバフの一回目が乗る。発動する魔法の気配にヴェータラが反応し、此方へと振り返る。だがその時にはベルが魔法を発動させる準備を整え終わり、そして此方も二丁拳銃の銃口をヴェータラへと向けていた。何時でもカットに入れるようにアンは待機しながらも、

「ダンテ直伝、トゥーサムタイム……！」

「現世になんてしがみついてないでとつとと逝きなさい」

電撃弾とマハジオンガが同時に放たれた。面を一気に制圧する様に放たれた電撃の嵐は一瞬でヴェータラを飲み込み、その全身を感電させながら停止させる。STUNしたヴェータラが反撃できずに、追撃で電撃を味わうが、1体だけ、別のヴェータラを盾にしたからかSTUNせずにいたのが居た。

それがレベル44という圧倒的レベル差による速度から飛び込んでくるが、事前に待機していたアンが竜巻を纏って突撃してきたヴェータラを集団の中へと弾き返す様に叩き込んだ。これが他の技であればまだ無事だったろうが、事前に準備されていた弱点属性でのカウンターであれば、無理だ。

叩き込まれたヴェータラを他のヴェータラとひとまとめにする様にトウーサムタイムとマハジオンガでヴェータラを始末する。レベル差から多少ヴェータラに対する攻撃回数が必要としたが、一方的にSTUNさせてしまえば後は此方のもの。

ヴェータラの集団を始末するにはそこまで時間を要する事はなかった。最後のヴェータラが苦しみながらMagを失って行くと、ヴェータラの姿が変わって行く。

悪魔の姿からまるで脱色して行くように色素を失って行き、そして見る見るうちにやせ細り、

「……ミイラ?」

「人の、ね。これは」

ヴェータラが居た場所にはその数と同じ人間のミイラが残されていた。

「デビルシフター……って訳じゃないよな?」

「無理矢理変身していたのが死亡したから元に戻った、って感じね、これは」

「ぼおー」

死体が蘇らない様にそれをアンがファイアブレスで焼却処理するのを確認しつつ、確認したミイラの服装はどことなく統一感を感じないものだったな、と思えた。貧相だったり、和服だったり、洋服だったり。



「解ってる解ってる。油断せず、慢心せず、臆病に確実に安全確保しつつ始末して行こう」

《ハニー・ビー》でおそらくは異界深部へと繋がるルートを表示させながら、そこに出現するヴェータラと、そしてそれを奇襲できそうな場所をマークしておく。真正面から戦う必要はない。相手の方がレベルが上である以上、一方的に奇襲からジオハメで動かさずに始末するのがベストだ。チャクラポットも魔石もストックしてある。ベルのマハジオンガが今回の生命線である為、惜しまず使って行く事を忘れない。

戦うのは死ぬほど怖いが、戦わなきゃ生き残れない。強くないと生き残れないのだ。

この業界に至っては、弱さとはつまり罪になるのだ。

だから生き残る為には強くならなくてはならない。そしてその為にはより多くの悪魔を殺さなければならない。たとえその元が人間であつたとしても、それをためらう事はもうできない。既に殺している以上、ストップは存在しない。

「サクサク始末して行こう」

「レベルが上がる度にバアルへと近づくと思えば少しはやる気が出るものね」

「その殺意の眼光は我ではなく本体へと頼む」

「れっつ、ごー」

奇襲を警戒し、相手を確実に殺せるパターンを引き寄せるために動き出す。奥へ、更に下水道の奥へと向かつて。

◆

「……段々と下水の色がケミカルになって来たな」

下水道の奥へと進んでくると、下水の色が通常の腐った、濁った色からもっと薬品が混じったようなケミカルな色をし始めていた。排水の中に混ざっていた色が色濃く出てくるようになった、と言う方が正しいのかもしれない。奥へと進むと段々この色が濃くなり、空气中

に気持ちの悪い霧が出現し始めていた。

鳩が存在する限り、一瞬で浄化されてしまうので活動に際してはまるで関係ないのだが。それでも、一体下水に何を流し込まれているのかは気になる所だった。道中でヴェータラを一方的に虐殺して行く度にレベルは上昇して行き、今ではレベルがアンズーと同じ、38まで上がっていた。英雄級と呼ばれるレベル40の領域は目前まで迫っていた。

それでもライドウの数字を知っていると霞む。この程度で満足してはいられない。

故にヴェータラを始末しつつ奥へ、奥へと進んで行く。

「しかし魔界産じゃなくて死体を利用した悪魔の生成でこんなにも同じ悪魔を大量生産って出来るものなのか？」

「可能か不可能で言えば可能よ。ただし恐ろしく難しいし面倒という前置きがあるわ」

ベルが言葉を口にする。

「だけどそうね……この時代なら、難しくないのかもしれないわね」

ソナーに付近に悪魔の反応がない事を確認しつつベルに何故、と言葉を返す。

「そりゃあ《アナライズ》がこの時代には存在しないからよ」

ベルの言葉に首を傾げる。アンもそれを真似て首を傾げる。くそお、可愛いぞ。

「レベルという概念はそもそも近年、悪魔召喚プログラムの発達と管理が機械的に、数值的に表現できる時代に入った影響の賜物よ。数値で確認出来る強さはね、サマナーや悪魔に共通としての能力的な指針を与える事が出来たわ。だけど同時にそれはお互いに、格上格下等の明確な区分けをする意味でもあるの」

ベルが言葉を続ける。

「いい？ アナライズが存在しないこの大正二十年ならレベルの概念も存在しないわ。そして悪魔は非常に概念的な情報が強い存在よ。レベルが存在する事によって召喚のしやすさ、し辛さがサマナーには解るわ」

「……だけどレベルが存在しない時代なら、その基準があやふやなのか」

その言葉にベルが頷いた。

「そういう事。悪霊なんて生物、上位の存在であれ、恨みなどの負の感情があればいかにも出現させやすいじゃない？ だから量産可能なのよ、この時代なら」

成程、と認識する。逆に数値的管理と情報化社会の現代ではレベルによって共通認識が概念に影響し、召喚のしやすさやし辛さに影響する。

レベルが確認できる事によって安全性を確保出来る様になった裏で、召喚し辛くなった悪魔もいるんだなあ、と認識させられる。

まあ、自分はおもはや今の仲魔でいっぱいだから、これ以上能動的に仲魔を増やそうとは思わないが。一人一人どうやって運用するのか、それを考えたりするのが地味に大変だし、同時に指示を出すのに結構頭を使うので、使い方を考えなくてはならない仲魔をこれ以上増やしたくない。

ただでさえヴァラーハが権能たくさん持ってて面倒なのに。

こちら辺はサマナーの永遠の命題なのかもしれない。

「——と、この先40メートルにヴェータラの集団がいるな。合計で15程いるわ」

「流石に一度に相手するにはちよつと危険な数ね」

「迂回しよう」

現状の戦力差を加味した上で、8体以上同時に相手するのは危険だと判断する。素直に迂回路を通して更に奥へと進んで行く。

そして進めば進むほど、段々と下水道は気持ちの悪い色に包まれて行き、ゴッドパワーで空間を常に浄化し続けなければ、まともに進めない程になってくる。毒霧だった筈の霧は、段々と赤い色を帯びてきていた。

『臭い……臭いのお。鼻がひん曲がりそうな程濃い欲望を感じさせる臭いじゃ』

「濃縮された悪魔の血ね、これは」

「体に悪そうだな……」

下水に流れているのも悪魔の血液の様だった。濃密になって来たその気配を、もはや探索するまでもなく仲魔たちは察知出来る様になっていた。これがどうやら、下水の中に垂れ流しにされていたらしい。そして同時に、この下水道の異界を満たしている様だった。

悪魔の体、パーツであつてもそれは概念的な情報の塊だ。それを人間が摂取してしまえば、変異するなんて事は当然の話だ。割とこれ、滅茶苦茶恐ろしい話なのではないだろうか？ 下水に悪魔の血を流したら概念情報だから浄水施設でも浄化されないし。

飲み水が気が付いたら汚染されていた、と。

テロでしかない。

……まあ、対処とかはヤタガラスに任せればいい。自分の仕事は情報収集と異界を潰す事だ。《ハニー・ビー》を確認すれば異界の奥にルーティーン染みた動きを繰り返すマーカーが確認できた。ヴェータラの理性のない動きとは違う、何らかの作業をしている動きだ。恐らくここにこの異界の主がいる。

それを確認するためにヴェータラの大群を迂回して奥へと進み——そして異界の一番奥を確認できる場所までやって来た。

姿を隠す様に物陰から観察し、異界の奥へと視線を向けた。

そこには檻に入れられた大量の人間と、手術台の様な物が設置されており、周辺には大量の血液と臓腑と人の残骸が撒き散らされている。別の檻には様々な悪魔が収められており、その近くには赤黒く濁った血液の溜め込まれたタンクが見える。

その中、真つ赤に染まった白衣の男が何かをぶつぶつと呟きながら檻を開けて、そこから人間を引っ張り出した。全裸の、汚い男はホームレスの様に見える。白衣はホームレスを手術台の上へと乗せると、それを逃げられない様に鎖で縛り、そして檻から悪魔を引き出した。

悪魔をホームレスに叩きつけると、悪魔と男を殺さない様に刻み始め、そして刻んだ部分をくっ付けながらタンクからホースを伸ばし、それを貫通する様につなげ、血液を流し込み始める。悪魔と人間がどろどろに溶ける様に融合し始めながら、それが別の姿へと変貌し始め



る。

即ち、ヴェータラの姿へと。

吐き気のするグロテスクな光景だった。

「理論は邪教の館で行う悪魔人の作成に近いな……それでいて魂を穢せるだけ意識的に穢している。サマナーよ、これは邪悪の類だ」

肩の上から鳩の真面目な声がする。そしてそんな事を言われなくても、解っている。アレはここでぶち殺すべき敵だ。いや、抜ける情報の記事を考えたら生きて確保する方が重要だろう。人間の姿をしているが、恐らくまともな人間ではないだろう。あのアンズーの様なデビルシフターだろう、とは予想がつく。

まずは戦略を考える為に《アナライズ》を行う。

作業中で此方に気付いていない姿を一方的に調べる。

妖鬼 ヤクシヤ Level 51

「弱点無効反射吸収なし、火炎破魔呪殺魔力耐性」

『勝ち申した』

「そつかぁー、神経精神耐性ないかぁー」

ちらり、と作業中で此方に気付かない姿を確認し、いったん後ろへと下がる。

召喚中の悪魔をベルからチエフエイへと入れ替える。武器をルーチエ&オンブラから威力と貫通力、そして狙撃力に優れているブルームへと交代させる。装填する弾丸は当然神経弾。

魔法が察知されない距離まで下がった所で、ラストキャンディを連打する。保険用に追加でテトラカーン、マカラカーン、テトラジャを発動させる。これは発動してから途切れるまでが早い魔法なので、かけ終わった時点でステルスしながらも小走りで異界の主が居る付近まで戻ってくる。

これにて準備完了。

作業中で気付かない背中に神経弾を打ち込む。

「うっ、侵入——」

「ドルミナー！ ドルミナー！ シバブー！ シバブー！ 落ちるんじゃ！ 落ちろ……落ちろ！」

「追加の神経弾！ 追加の神経弾！ そして追加の神経弾を喰らえ！  
後追加の神経弾だ！ 恨め！ 神経も精神も耐性のない自分自身  
を恨め！」

『ヒューー！ 流石サマナーだ！ 絶対にまともに戦おうとしないね  
！』

「デビルサマナーの基本知識！ ボスを見かけたら調べつつ撤退して  
徹底的にメタれ！」

相手を選んで徹底的にメタによってハメ殺せる万能性。それがデ  
ビルサマナーという存在が業界において猛威を振るっている理由な  
のだから。態々正面からぶつかって、自分の不利になる様な事をする  
必要はない。

白衣がヤクシヤに変身する前に神経弾とシバブーをしこたま叩き  
込んで行動を封じつつ、ドルミナーで意識を落とす様に連打させ、そ  
して仕上げるにサブリミナルリンクリンでまともに思考出来ない様  
に頭を揺らし続ける。

まあ、多少頭が馬鹿になってもヤタガラスなら脳味噌から情報吸い  
出せるよね！ という事で。

そうやって下水道実験場の重要参考人を確保した。勝てば官軍。  
それがデビルサマナーの世界である。

仕事が終わればまた仕事。休まる暇もなく次の仕事がやってくる。

どうやら、最近では《秘密結社コドクノマレビト》等という輩が暴れているらしく、その影響で帝都の治安が乱れているらしい。前に下水道の異界で研究を行っていた研究者もその一員らしく、人間を悪魔に変える研究をしていた。まあ、つまりはそんな事をテロ的に行っている連中が多く、今の帝都は当然安全から程遠い環境になってしまっている。ちなみに浄水施設に流れ込んだ水はサービスで鳩を Dank して浄化しておいた。これで帝都の水は浄化されただろう。ついでに鳩に対する信仰心も目覚めてしまうかもしれないが、コラテラルダメージだ。

そうやって、ヤタガラスから有能だと評価されたので、再び仕事を押し付けられた。完璧にスニーキングしてピンポイントで相手を生かして捕らえてこれたんだから、異界爆破だけが特技じゃないと解ってしまったのだらう。それが発覚したからか、仕事が終わってから仕事を叩き込まれた。もしや使いやすい人材だと思われてしまったのかもしれない。

とはいえ、レベルアップするのは当然ながら好ましい事だ。ここ、帝都ではどうやらハメ対策のされていない高レベル悪魔が出現する傾向にある。正直、ただのカモに等しい部分が連中にはある。その為、レベリング対象としては最適な相手ばかりであるのもまた事実だ。その事を考えると、ヤタガラスの持ち込んでくる依頼の誘惑は抗いがたかった。平和な時間は徐々に終わりつつあることを感じさせつつ。

ともあれ、仕事なのだ。断る事は出来ない。

素直に受けた。服装は何時も通り改造された月光館学園の制服姿で今回は襲撃が予想されるという情報から大量のアイテムをヤタガラスの方からマツカで購入し、それをベルベツトルームでラヴェンツァに頼んで加工して貰った。これによって少ない数ではあるものの、チャクラポットなどを作成する事が出来た。

割と真面目に助かる。金の節約になるし、MPコストの激しいパーティーでもあるので、その消費をカバーできるのは助かる。特に帝都での戦いはタルタロスよりも消費が多い事が解ってきた。帝都に感情が渦巻いている分、それに影響された上位悪魔が出現しやすいのが問題だ。

しかし下水道である程度のレベルアップも果たし、今ではレベル38だ。かなりレベルが上がったので、この仕事が終わればそろそろ、ベルベットルームで仲間たちをワンランク上の姿へと合体させる頃合いかもしれない。というか合体しなければこの先、ライドウクラスの敵が出現するインフレについて行けそうにない気がする。

そう、何よりこの物語の主人公はライドウなのだ。という事は物語的に絶対に彼が追いつめられる筈だ。だったらそのレベルの敵が出てくる。そう言う奴が出現する前に、最低限自衛出来るレベルの能力を備えておかないとならない。

故に仕事は受ける。レベルアップの為に必要だからだ。

そうやってやって来たのは刑務所だった——このまえ、要人を運び込んだあの場所だった。その警備レベルも引き上げられており、ヤタガラスの者と思わしき異能者の姿が大量に配置されているのが見える。

「警戒……嚴重？」

「まあ、ライドウが仕事で一時的に帝都から離れるらしいからね」

その隙を狙って襲撃して来る可能性を考慮して、実力のある人間をそこそこ配置している様子だった。刑務所の前に到着すると、自分も軽くヤタガラスからチェックを受けて中に入る事が出来た。既に中には異能者が大量に配備され、警戒している様子が見える。そのレベルの大半はアナライズする限り、20代や30代のものが多い様に見える。相手が召喚していたアンズーやら量産していたヴェータラを見る限り、不安になるレベルではある。

とはいえ、それでもどうにかするのが仕事だ。

「ピリピリ、して……る……」

「帝都からライドウが離れるって話だからな。帝都最強戦力が一時的

に離れるって状況でここには要人を收容してらるって把握されてるんだ……そりゃあこどもなるか」

『あら、段々と解る様になつてきた様ね？ その調子よサマナー』  
家に居る間は暇さえあれば指導を受けているのだ、多少は物事が解る様にならないと恥ずかしくて顔も見せられない。とはいえ、流石にこれだけ露骨だと自分の様な馬鹿でも解りやすいとは思ふ。明らかに刑務所の状況が襲撃に備えた状態にシフトしている。何らかの襲撃を予想した布陣とも言える。やはり、相手が解つたからそれを誘い込むつもり……なのだろうか？

ライドウが居ないという状況が余りにも不穏すぎる。まるで悲劇の下準備をしているかのような、そんな感じだった。とはいえ、自分たちももうレベル38、40が目前に迫るラインだ。ここまで来て、怖いからと日和る事も出来る様なレベルじゃない。やるつたらやるしかないのだ。

「貴様が流れのサマナーか……中は此方で守る。貴様は外を頼むぞ」  
「了解」

山伏の様な恰好をしたいかつい異能者にそう言われ、刑務所の前のグラウンドで待機する事となった。刑務所の入り口横の壁に寄り掛かる様に背を預けながらルーチェ&オンブラを抜きつつ、動かしやすい鳩を先に召喚しておく。本当なら事前に悪魔も召喚させておきたい所だったが、悪魔を出しておくのはどうやら、余りメジャーではないらしく、睨まれそうな気配があった。

地元ルールという奴だろう。  
実にめんどくさい。

仲魔は事前に召喚しておくのがベストなのだが、環境と時代を考えるとまあ、しょうがない事なのかもしれない。鳩を召喚しているだけでも変な視線を向けられるのだから。面倒な時代だと思う。

早く、崩壊世界に帰りたい。

此方の世界は確かに崩壊してないし、インフラも整備されていて整っている。けどそれ以上に社会のルールやらなにやらでがんじがらめになつていて、非常に面倒な事になっている。もうちよつと頭

を空っぽにして無双できる世界に行きたかった。単騎で街を吹っ飛ばせるレベルの強さはもうある筈なのに、それでも全然足りない世界とかちよつと、インフレがおかしいだろうと思う。

まあ、今はどうでもいい話かもしれない。

「サマナー。サマナー」

「ん？ どうした？」

服の裾を掴んだアンがそれをちよくちよく引っ張り、此方の視線を寄せると、

「お腹……すいた」

「仕方がないなあ……」

ストレージの中に保存しておいた干し芋を取り出して、それをアンへと向ければ、端の方から軽く噛みついてもきゅもきゅとアンが食べる始める。釣り針に釣られる魚の様な感じがするが、可愛いのでなんでもオツケーだと思う。美味しそうに食べる君の姿がやっぱり好き。幸せそうな表情を見ているだけで割と癒される。ただし、周りから向けられる視線は考慮しない。

「いいなあ……あれ……」

「微笑ましいなあ……」

「俺も早く仕事終わらせて娘に会いに行きてえよなあ」

とはいえ、やつかみの様なものは飛んでこない。こつちの世界は崩壊していないから、もっとクソみたいな連中が多いかと思っただが、そうでもなかったらしい。やっぱりテンプレは所詮、創作のテンプレートであって現実ではないんだなあ、と次の干し芋をアンの口の中に少しずつ食わせながら思う。

「もきゅ……もきゅ……ぶおー。もきゅもきゅ」

「そうだよなあ、干し芋って焼いた方が美味しいもんな」

一度噛み千切ってから弱めのファイアブレスで軽く干し芋を炙ってからアンが再び、食べるのを続ける。ずっと警戒していてもどうせ、疲れるだけだし、それまではアンでも餌付けして待つ事にする。

まあ、襲撃されるとは決まった訳じゃないし。

このまま何事もなく、平和に時間が過ぎる事を祈るばかりであつ

た。

「やっぱ平和に終わらないかあ……」

刑務所が騒がしくなり始めていた。どうやら内部で何らかの問題が発生したらしく、騒ぎに発展している。だがそれは自分の担当ではないので、無視しておく。それよりも問題なのは《ハニー・ビー》を起動し、《エネミーソナー》で刑務付近をサーチすれば、刑務所の正面から大量の悪魔が此方へと向かって接近してきているのが解ることだ。既に登録されているそのパターンは、相手がアンズーである事を示している他、見知らぬ敵が一体、そこに混ざっているのを示す。

「ヴァラーハ、チェフェイ、ベル。激戦の予感がするから皆、頼むぞ」  
残りの悪魔全てを召喚する。アンズー相手にはベルは比較的に無能化してしまうが、それを反省してベルにはベルベツトルーム経由でスキルカードを使つて《メギド》を習得して貰った。他の悪魔と違ってレベル限界が遥かに高いベルは合体させずに強力な魔法を覚えさせる事が出来るのが利点だ。万能属性はコストが重い、魔王としてのパッシブスキルでコストは大幅にカット出来ている。なんだかんだでレベルがほぼ40なのだから、ベルも魔王として少しづつ格を取り戻している。メギドぐらいはそこまで問題のある魔法ではない。

L&Oを両手で握りつつ、仲魔たちを配置につかせる。此方の動きを見なくても、刑務所の外から来る異様な気配に既に他の異能者やサマナーたちも迎撃態勢に入っている。マジでこれ、囿にされたなあ、と《ハニー・ビー》に表示されている敵の数を見て理解する。やっぱりこの業界ブラックだわ、と。

「ベルはメギドだけ、チェフェイはンダ系を優先してデバフ。ヴァラーハはMagくれてやるから変身して戦ってくれ。アンは頭上を越えて行くこうとするアンズーを竜巻で落として。鳩は《ラストキヤンデイ》連射して終わったらテトマカ維持で。生き残ったら赤字分全部ヤタガラスに請求だ……!」

「だいぶ凶太くなってきたのう」

「そうじゃなきややってられない」

死体とか見慣れてしまったし。もう、動揺した所でもどうしようもない。殺さなきや殺されるのだったら、此方から動かなきやならないのだ。Magをヴァラーハに供給し、ヴァラーハが褐色のイケメンへと変態するのを見て、鳩が更にMagを消費してラストキャンディを発動させた。自分だけではなく一緒に戦闘に参加する異能者たちも魔法の効果に巻き込んで、全体の能力を強化する。なんか、ちよつと驚くような声が聞こえる。

カジャ系、やつぱりこの時代だとマイナーなのだろうか。ライドウも使っていないかったが。

ともあれ、そうやって迎撃の準備を整え、唾を飲み込みながら視線を刑務所のグラウンドの向こう側、入り口へと向ければ、目玉模様のマスクを被った男が刑務所の入り口の前に立つのが見えた。ヤタガラスの術者によって結界が張られており、許可のないものは通れない様になっているらしい。

らしいが、

「ベルー」

「メギドツー」

当然の様に先頭に立っていた男がサーベルを抜き、その抜刀で結界を両断していた。それを直感的に出来る、と判断したために先行してベルに指示を飛ばす。万能属性の光が爆裂となって門に居た男と突っ込んできたアンズーを巻き込まんと破裂するも、男が素早く回避しながら敷地内に入り込む、それにアンズーが続くのが見えた。

「行け、媛を引っ張り出せ」

「ヴァラーハ、チェフエイ！」

「了解ッ！」

「今回の妾に過労死の気配がするぞお！」

アンズーが飛び出してくると同時に重力障壁とスク・ンダがアンズーに衝突し、その動きを一瞬で鈍らせ、封じ込める。レベルが40近くなつてヴァラーハもチェフエイもレベル限界に到達しそうでも、



まだ、並の悪魔を超えるだけのスペックが上位悪魔の基本的なスペックとして備わっている。その為、アンズーよりも早く、そして強力に攻撃を突き刺す事が可能となる。

アンズーの動きが一気に緩くなり、そこを他の異能者やアンとベルが狙い撃ちする様に地面に叩き落して行く。竜巻とメギドの光がアンズーの集団を薙ぎ払う。

その間に、《アナライズ》しつつ引き金を連続で引く。弾丸の軌道を讀んだマスクの男がそれを斬り払い、踏み込もうとするがその時には設置された次の弾丸によって足を止められる。相手のレベルが上の様に感じられるが、ラストキャンディの影響で銃撃だけなら張り合える程度の速度は出せている。

悪魔人 オウハン Level 68

「悪魔人、オウハン……?」

呟く様に引き金を引き、オウハンを牽制する。踏み出す方向へと向かって弾丸を叩き込みながら次の動きを連動的に止める様に射撃し、弾丸の弾幕でオウハンが動けない様に封じ込めながらチェフエイの放つデバフの連打を持続させ、抑え込むたびに能力を削減して行く。それをサーベルで斬り払いつつも、ほう、とオウハンが声を零すのを聞いた。

「話に聞いた異国のサマナーか。面倒なのはライドウだけかと思つたが違ったようだな」

そう言うとオウハンが指をスナップした。それに反応し、飛び込んでこなかったアンズーがオウハンの背後で魔法を発動させていた。

「デクンダ」

「げっ」

「妾、見事に過労死決定」

「文句を言う暇あるならさっさと眼光系統でも習得しなさいよ」

「ご、五尾でなら……」

「使えねえ駄狐だなあ!」

どうやら前回のアンズー大虐殺でデクンダの重要性を理解したらしい。これでバフデバフのいたちごっこが始まると思いつつ、チェ

フエイをデバフし続ける機械として放置する。現状、敵の数が圧倒的なのでスク・ンダでひたすら速度デバフをかけ続けてくれないと相手に突破されてしまう。

「アン！ ヴアラーハ！ 足止めだけに集中しろ！ 絶対に通すな！」

「了解だサマナー！」  
「まか……せて……い！」

干し芋を噛みながらアンがサムズアップを向け、竜巻と共に重力の障壁を超えてきたアンズーを蹴り飛ばし、刻みながら別のアンズーへと蹴りつける事で効率的にアンズーを処理する。此方は放置していても問題はないだろう。

問題はオウハンの方だ。

ひたすら先手を取る様に距離を開けて射撃し、踏み込もうとする瞬間に連続で引き金を引いて牽制、縫いつけながらベルがジオンガを流してくれる為、それでオウハンの前進を停止させ、追撃の射撃でそのまま後ろへと押し戻す。全神経を其方へと傾け、ラストキヤンデイによって上限強化された状態でなんとか、オウハンの動きを抑え込む。

接近させたら殺されるという事ぐらい、自分でもよく理解している。流石にこれだけレベルが違うとどうにもならない。いや、隙があれば殺せるだろう。

「ふむ……」

だが相手も此方を観察する様に、無理をせずに様子を伺いながら戦い、アンズーをまだ投入している。正面は自分たちで抑えているものの、側面や裏手は他のサマナーや異能者任せだ。オニが大量召喚されるのを《ハニー・ビー》で目撃したが、それがアンズーの群れの中に飲み込まれるのが見えた。レベル差で負けている。

と、オウハンがアンズーを掴んだ。

それを盾に弾丸を受け止め、そのままアンズーを壁に使う様に前へと飛び込んできた。アンズー自体が電撃に対して強い為、ベルがメガドで諸共吹き飛ばそうとする。だがそれをオウハンがぼろぼろになりながら素耐えして突破してくる。

「ヴァラーハ！」

「任されたッ！」

神経弾とメガド、ジオンガの牽制を一瞬で乗り越えたオウハンに対して唯一抵抗できるのは、前衛としての恵まれたステータスを保有するヴァラーハだけだった。故にアンズーに対する防壁をベルと切り替えさせて、消費が重くなるのを解つていても、メガドを連打させてアンズーを撃退させ、ヴァラーハには重力刀二刀でオウハンを相手にして貰わなくてはならない。

そしてオウハンとヴァラーハが切り結んだ。レベルで勝るオウハンの斬撃がヴァラーハへと抜けようとするが、それを複数の権能と技巧でヴァラーハが受け流しつつオウハンとのレベル差を技量で埋めた。その間にL&Oをストレージに戻し、武器をブルームへと入れ替える。《ハニー・ビー》を確認すれば刑務所内部へとアンズーに侵入されているのが目撃出来る。自分の居る正面以外が突破されたようだった。

ここで何とかオウハンを一回殺して勢いを削ぎたい。或いはこのアンズーを吹っ飛ばして、戦っているサマナーたちを応援に行かせたい。自分がオウハンを抑えているからいいが、全体的に敵の数が多すぎて押され気味の状態だ。

——ならば、仕方がない。

都合の良い事にここは帝都の外だから被害は出ないだろう。それを自覚し、ヴァラーハが抑え込み、徐々に押され始める中でブルームの先端を大地に叩きつけ、レバーを引いて弾倉のハッチを解放した。そして、

「コール、スタマ先輩」

『来やがったぜ』

ステイブーンが搭載してしまった禁断の機能を解放する事にした。DDSから召喚されたスタマ先輩を掴み、その姿をブルームの弾倉に組み込んだ。ハッチを閉ざし、そしてコッキングレバーを引いた。

スタマ先輩が弾丸として装填されたのだ。

「セット……！」

言葉を口にし、ブルームの先端をヴァラーハと戦うオウハンへと向ける。それに反応してオウハンが離脱しようとするが、ヴァラーハが足を踏み、切り付けられながらその動きを一瞬だけ遅らせた。それだけで十分だった。

引き金を引けば、弾丸とは当たるものなのだから。

「必殺のスタマドラオン発射……！」

両腕で抱える様に握るブルームの引き金を引き、戦艦の主砲を放つような轟音と共に5メートル後ろへと体が押し込まれ、大地を引きずりながらスタマを弾丸として放った。閃光となって放たれたスタマは歓喜の色を爆発で表現しながら射線全てを飲み込み、極太の爆裂レーザーとなって射線上のオウハン、アンズー、刑務所のゲート、グラウンド、その背後からやってきていたアンズーの大群の全てを、

あとついでにヴァラーハを飲み込んで全てを消し飛ばしていた。

連続で爆発し続ける弾丸の粉砕が射線上に爆発を起こしながら十数メートルを超える爆裂の列となって外へと向かって突き進んで行き、触れたアンズーや、掠るアンズーを飲み込んで殺して行く。大量のMagがそれによって巻き上げられ、戦場から一時的に音が消える。

だがそれで相手が死ぬとは思えなかった。

当然の様に爆裂の中からオウハンが服装をぼろぼろにしながらも、登場してきた。その瞬間にはサバトマでアンがヴァラーハとスタマの姿を呼び戻している。それを鳩がサマリカームで蘇生させている間に、オウハンが肉薄し、

ベルが邪魔に入った。サーベルがベルを切り裂き、刃が貫通する。だがそれでも即座に死亡する事はないのは、魔王としてのスペックのゴリ押しと、彼女が食いしぼりを習得しているからにすぎない。

刃が貫通する前にテトラカーンで刃がベルの内部から弾き出され、スタマを再び装填する事に完了した。その銃口をオウハンへと向けて。

気のせいか、ひきつった笑みを浮かべている様な気がする。

「さあー！ 二発目逝こうか！」

『おめでとうございませす、元気なテロリズムですよ！』

引き金を引く瞬間、ベルがオウハンの腕を掴んだ。そして次の瞬間にはベルとオウハンがスタマ弾の爆裂に飲み込まれ、刑務所のグラウンドが跡形もなく消し飛びながら壁を粉碎し、遙か遠くへと向かって大地を消し飛ばし、連続爆破を生み出しながら射線上の全ての物質を消し飛ばしている。今度こそオウハンをもとに捉えたか、ベルがヴァラーハ同様DYING状態に直行するも、20メートル程吹き飛ばされ、マスクが半分千切れているのを片手で止めようとしているオウハンの姿が見える。

「わんもあ」

「サマリカーム」

「本日は何時もよりも爆発しています……！」

「……っ」

ヤタガラスに絶対に怒られるからやりたくなかった。けどどうでもしなければ絶対に死ぬと直感的に理解してしまった為、しようがない。サバトマとサマリカームによって蘇ったスタマを再びブルームに装填しながら、それをオウハンへと向ければ、オウハンが下がるのが見えた。

「逃げるかー！」

「では撃つのやめるのかの？」

「ううん、やっぱ撃つー！」

「そうこなくてはのー！」

オウハンへと向けて引き金を引いた。スタマ先輩、本日3度目の命の輝きを見せる。普通の悪魔にこんな事をすれば即座に契約破棄を言い渡されるレベルの暴拳だが、逆にスタマ先輩は輝いていた。これ以上なく輝いていた。楽しそうに。

そして再び、刑務所正面の空間が地形を変えた。空間を消し飛ばしながら刑務所の正面から襲い掛かっていたアンズーの群れを最後の一匹まで食らいつくして消し飛ばし、Magの欠片に分解して殺し尽くす。

だがそこにはまだ、ぼろぼろになる程度で済んでいるオウハンの姿

が見えた。徐々に回復している辺り、何らかの自動回復スキルを積んでいるのかもしれない。どちらにしろ、スダマ弾でも殺しきれないとなると手持ちの火力で殺し切るのは少々難しい話になる。神経ハメをしようにも、弾丸を回避、斬り払えるレベルの敵だ。少々ハメに持ち込むには難しいレベル差だと表現できる。

サマリカームでベルとヴァラーハを復活させつつ、テトラカーンとマカラカーンを張り直させる。アンズーは綺麗に消し飛んだが、肝心のオウハンがそのままだった。アレが本気を出して襲い掛かってくるようなものなら全力で逃げ出す事を考えなくてはならないが、

「……ふっ、どうやら求めていた媛ではなかったようだし……ここで引かせて貰おう」

そう言つてオウハンが刑務所から逃亡する様に姿を刑務所脇の森林の中へと飛び込んで消した。《ハニー・ビー》でその存在をしばらくマップ上で追い続けるも、しばらくすると完全に範囲から離脱し、消える。刑務所内部も大分静かになってきた。此方も確認すれば、どうやらアンズーは全て討ち取られたらしい。

はあ、と息を吐きながらブルームを抱え、地面に座り込む。

「なんとか生き残れた……」

レベル60を超える相手を前に、なんとか生き残れた。相手が手加減していたのと、本気を出さなかった事が最大の幸運だっただろうか。あのレベルになるとデバフを重ねて漸く反応出来るレベルになる、というのを今の戦いでしっかりと頭に叩き込んでおく。根本的なレベル差はレベルをあげなきゃどうにもならない、と。

現状、スダマ先輩で殺し切れなかった場合は完全に詰むという状況を改善しなくてはならない。

そう思いながら座り込み、溜息を吐いて空を見た。

「ヤタガラスにどう言い訳しよう」

変わり果てた刑務所の地形は、どう足掻いても言い訳が出来ない状態だった。

なんか褒められた。

ヤタガラスの人にじゃあスタマドラオン連射していいんですか!?

と聞いたらドン引きされつつ怒られた。

真面目な話をするとかドクノマレビトという結社連中の表向きの職業などは発覚しておらず、オウハンという名前からヤタガラスは相手の所在地を特定する事に成功し、それを通してどうやら、表向きの活動のある程度抑え込む事が出来る様になったらしい。その為、現在ヤタガラスはコドクノマレビトの息のかかった企業や活動を何とか表の世界から排除する事に躍起になっている。ともあれ、今まで一切正体不明だったコドクノマレビトの幹部、或いはトップの名前が割れたのだ。

ヤタガラスから臨時ボーナスを貰えた。刑務所の事はそれで許して貰った。

それが結構な功績だったので、ヤタガラスが今度は休みをくれた———とかやる事が調査ばかりだったりするので、此方の様なジエノサイドウエポンを仕事に出すわけにもいかず、待機以外の選択肢がなかった。そういう訳で休みになった。そしてアンズーの大量討伐の結果、レベルがついに40の大台に乗る事を達成していた。

レベル40。それは悪魔業界でも大きな意味を持つレベルだ。

レベル40と言えば力のある神や、英雄と呼ばれる様なクラスの悪魔が出現し始めるレベルになってくる。単独で国家を滅ぼすだけの力があると言われ、国からマークされる様になるレベルになるらしい。それだけではなくレベル40ともなれば最上位の魔法を使えるようになる存在がちらほらと目撃出来る様になり、段々と悪魔という名前に相応しいだけの実力を発揮する姿が目撃出来る様になる。

レベル上限が存在しない自分とアンやベルはそのままレベルアップするだけなので合体の必要はないが、ヴァラーハとチェフェイは合体して上位の姿へと変えないとレベル上限に引っかけり、これ以上強くなる事が出来ない。

だとしたら、やる事は決まっている。

「——ようこそ、ベルベツトルームへ。そろそろご利用になるかと思ひ、お待ちしておりました」

ベルベツトルームへと悪魔たちを引き連れてやって来れば、悪魔合体の準備を既にイゴールが整えて待つていてくれた。庭園にはベラドンナの歌声が響き、テーブルの横には悪魔全書を広げているラヴェンツアの姿が見える。レベル限界を迎えたヴァラーハとチェフエイは悪魔合体をしなければこれ以上強くなる事は出来ない。

その合体に関しては今まで、悪魔王ルシファーが担当していたが、「ヴァラーハとチェフエイの合体をしたいんだけど」

「ええ、そろそろかと思っております。素材、プラン共に既に悪魔王から提供されております」

「ですのでリユージ様に関しては、どうぞご心配なく。貴方が存在していた崩壊世界での合体と同じように悪魔合体を執行させて頂きます。問題なくヴァラーハは上の化身の姿へと進み、チェフエイは尾を増やすでしょう」

「あー、良かった。地味にあつちと同じように合体が出来るかどうか不安だったんだよね……」

そこはご心配なく、とイゴールが言葉を挟む。

「元々悪魔合体の秘儀は我々や邪教の館の者が得意とする技術です。悪魔王のそれは魔界の支配者としての知識から来るものであって、技術者としての能力ではありません。純粋な技術力で言えば我らの方が上でしょうな」

「我々であれば其方で発生した四文字の分霊の合体事故の様な事は発生しないでしょう。元々ペルソナ合体用の施設として運用していましたし」

「強い」

こうなれば安心して仲魔を合体させることが出来る。元々合体させるつもりではあったが。そういう事でDDSプログラムを起動させた状態でスマートフォンを渡せば、ラヴェンツアがそれをイゴールへと渡し、イゴールが悪魔合体の準備と合体プランに合わせて合体の



準備と調整をし始めてくれる。その様子を眺める。

やはり、悪魔が合体する場面というのは自分の様な人間からすれば、不思議極まりない光景だった。

生物として融合する事で新しい形に変わる儀式……悪魔たちはこれを普通に受け入れるのだから、まるで別世界の存在の様に感じられる。とはいえ、ウチの悪魔は姿が変わるだけだからまだマシな方なのかもしれない。

「それでは合体を始めますが良いですか？」

「お願いします」

イゴールの言葉に頷きと共にGOサインを出す。それを受け取ってイゴールがDDSからまずはヴァラーハを抜き取った。カードの形で抜き取られたヴァラーハはイゴールが浮かべた他のカード化された悪魔たちと共に浮かび上がり、それがヴァラーハに吸収されていくように合体していき、閃光と共に全てのカードがヴァラーハと融合した。

やがてそれはイゴールの座っているテーブルの前に浮かび上がり、光に包まれながら悪魔の形をとる。人の形をしているが、しかし獣人としても表現すべき、獅子の頭を持った獣の男の姿だった。

「我は第四の化身！ 死を極限まで遠ざけし魔人を打ち滅ぼす獣人ナラシンハ！ サマナー、コンゴトモヨロシク！」

「姿変わったなあー」

半分が獅子の獣人の姿は、今までは完全に獣の姿をしているヴァラーハまでの姿とは、大きな違いだった。ナラシンハもその手の中にはカティを握っており、どうやら剣術で戦う事もナラシンハの姿からは出来るらしい。そういえば全王神の化身は最初が動物、段々と化身が進むにつれて進化を表す様に人の姿へと変わっていくという事を思い出す。ともあれ、ナラシンハの姿をこれで獲得した。

「ナラシンハの権能は隠密の権能だよ、サマナー。物質の中に潜み隠れることが出来る上に気配も完全に空間と同化する事も出来るとも！ 奇襲、暗殺、不意打ちとかはお任せな姿さー！」

「またなんか便利な力を身に付けてきたな……よし、これからも頼り

にしているぞ」

「任せてくれ」

手が獣のそれと近いナラシンハとハイタッチを決めて、新しくなったナラシンハをパーティーに追加する。ナラシンハの強化が終われば、次はチエフエイになる。イゴールがGOサインを待っていてくれるので、領きで許可を出せば、ナラシンハの時の様に、チエフエイの合体が始まる。カードに対してカードが融合し、チエフエイの霊基情報が増強され、ワンランク上の存在へと進化する。

やがてナラシンハの時の様に、合体が完了してチエフエイの姿が出現する。何時も通りのちっこい少女姿だが、その背後に伸びる尻尾は全部で5本にまで増えている。

「うむ、妾は五尾チエフエイ！ 良いぞ、漸く本来の力の一端を使えそうじゃな！ コンゴトモヨロシク」

「お前の仕事はデバフし続ける事だけだな」

「知ってた」

合体が終わったのでスマートフォンを返してもらいつつ、DDSにアクセスして早速変化した二体の仲魔の様子を確認する。

まずはナラシンハ。レベルが上がった事でMPも上昇した為、マハグライダインやマハフレイダイン等の上位魔法を使った所で魔法のコストに心配がいらぬレベルになって来た。その為、習得している魔法が上位魔法に置き換わってきた他、ついに物理系統の攻撃技も習得し、《デスバウンド》を習得する。圧倒的に恵まれた前衛としてのステータスに加え、四属性の耐性に物理系統は一部無効化や反射まで備えている。それと引き換えに呪殺弱点が増えてしまっているが、そこはマカラカーンで対処できるだろう。今まで以上に前衛でゴリゴリ殴りながら魔法と物理両方で戦えるアタッカーになった。

次にチエフエイ。相当早い段階ではあるものの、どうやらランダマイザを習得したらしい。ランダマイザ——つまり敵にたいして全種ンダ系魔法を同時にかける事の出来る最上位デバフ魔法だ。そのまま覚えたのではなく、悪魔絵師がスキルカードとして作成したのを合体で使用する事で習得させたことになる。それ以外にも神経・精神

高揚を獲得し、更に状態異常の発生率と持続率を強化し、ランダムイザと合わせて更に相手に対する拘束力が上昇した。

ナラシンハとチェフエイの運用に関して変化はない。そこはシンブルに何時も通り、役割別に特化した仲魔として運用すれば問題は無い。ただし二体とも、上位悪魔に相応しいだけのステータスや能力を誇る様になってきた。

「クソ雑魚で鈍器扱いされていた時代が懐かしい……」

「ああ、うん。そう言えば僕は初期は道具運用だったよね」

「妾も最初は狐だったから振り回されていたな……」

それが今では立派な悪魔に進化した。なんという感動的な話だろうか……いや、別に感動的でもなんでもないが。それでもここまですぐ強くなったのは個人的に驚く事でもあった。なにせ、これでレベルだけを見るならあの破戒僧や聖女と同格になったのだから。あの人外な領域まで届くのは何年もかかるものだと思っていたのに、もう既にその領域に到達している。

しかもまだ、帝都の治安が悪化しそうな事を考えるとまだまだ、戦う悪魔と経験値の予定は尽きない。その事を考慮するとまだまだレベルは上がりそうだった。上手くいけばこの世界の間にレベル50に到達する事が出来るかもしれない。相手の主力がアンズーで、それが雑魚の最高レベルだったとしたらそろそろレベルが伸び悩むかもしれないが。それでも、崩壊世界でも一般サマナーとしては最高クラスレベルに自分は到達しつつある。

……それでもまだまだ強さが足りないというのが恐ろしい話だ。

「うっし……これで戦力の増強完了だな」

DDSにナラシンハとチェフエイを戻し、二体のレベルを確認しておく。ジャスト40レベルだ。これで崩壊世界でも上位のサマナー扱いになるだろう。ダンテとかがアレ、超例外なだけだし。

「出来るなら40レベル以上の悪魔が出没する異界なんか探索出来ればいいんだけどなあ……」

「そのレベルの悪魔が出没する異界となりますと、流石に国家に管理されて封印されるレベルの異界でしょうから、少々難しいと思いま

す」

「やつぱさそうかー……」

ラヴェンツァの話の聞き、肩をがくりと落とす。当然だがレベル40を超える異界なんてものは中々存在しない。大半は即座に破壊されるか、或いは国家が大きな組織で管理する事によって外に被害が出ない様にする為だ。そして管理されている場合はそれを使って戦力を増強する意味もある。レベル40以上の異界は実にレアなのだ。

あのヴェータラの居る下水道、今思えば丁度良い狩場だったんだなあ、と思う。今もあそこを利用してできればよかったのだが、あそこはボスは自分がハマて捕縛してしまった為、普通に解消してしまった。あそこで頑張ればレベル45までは目指せたんじゃないかなあ、とは思わなくもない。

まあ、悩んでもしようがないところだ。

「どうせどれだけ悩んでも格上の悪魔が出るんだろうし、メタ手段を先読みして用意しておけばいいよな」

「すっかり荒んでしまわれましたね……」

帝都がこんな地獄だと知らなかったのだ。だってスタマドラオンだぞ、アレを三発も耐えられる存在が居るとは思いたくもなかった。アレが通じないとすると、根本的に戦力不足という事になる。どうにかして強くならないと駄目だ。

それを焦った所でいい結果が出る訳でもないし、とりあえずはベルベットルームの住人達に感謝を告げてから、ベルベットルームを出た。

本日も空は蒼く晴れている。しかしどこことなく、不吉な気配を感じるのには超人としてレベルが上がって来た影響で、様々な事に対して敏感になって来たからだろうか？ まあ、帝都が不穏な事に関しては今更な話でもある。何せ、堂々とテロをぶちかます秘密結社なんてものが存在するのだ。さっさとライドウにはそれをぶつ飛ばして貰ってほしい所だ。

「あーあ、なんで平和な世界に繋がらないんだろうなあ……」

『人徳かな！』

『運命じやろ』

「私はそれが面白いからだと思うわよ」

「運……悪い？」

「祈り、祈っても救われない……！」

「俺、泣いてもいい？」

相変わらず仲魔どものサマナーに対する当りが強い。こいつら、もうちょっとサマナーを敬う様になってくれないかなあ、と思いがながら、溜息を吐いた。結局のところ、自分からどうにかしようとしないう限りは、何も変わりはないのだから。

だから何か、自分が少しでも楽になる為に、生きるために、変わる為に、

なにか、しなくてはならない。とはいえ、そう都合よく常に何かある訳でもない。家の庭に戻って来たので合体したばかりのナラシンハとチエフエイをDDSから召喚して解放しつつ、息を吐きながら縁側へと移動し、そこに座り込む。

ナラシンハは新しい体を習熟する為にトレーニングで、チエフエイは家の掃除へと戻っていった。ベルはどうやらアンと一緒に居間でカードゲームで遊んでいる様で、鳩はスタマを転がして遊んでいる。

この、高位悪魔が日常生活の中で普通に遊んだり暮らしている光景を見て、自分もかなり遠い世界へとやって来てしまったなあ、と胸の中で溜息を吐く。

だけど嫌いじゃない。

怖いし、辛いし、苦しい事もある。

だけどこの日常を、嫌いになる事は出来なかった。困った事に、このどうしようもない馬鹿みたいにリアリティの足りない日常を、自分はそのこそ楽しく思っているのだ。どうしてだろうか、レベルが上がって人間卒業してしまった影響だろうか？ これからもまだまだ人類を卒業して行くことを考えると、まだこの先も自分は変わって行くんだよなあ、と黙ってしまふ。

その果てには、どこへと辿り着くのだろうか？ 先行きの見えない未来は色々と恐ろしい。それでも、好き勝手生きている悪魔の姿を見

ているとどこことなく、ほっこりとしてしまう。

なんだかんだで、彼らと一緒に風景に既に日常を感じている辺り、自分はもう手遅れなのかもしれない。

「サマナー」

空を眺めながら黄昏ていると、横から重みと柔らかい感触が張り付いて来た。視線を横へと向ければ背中に乗りかかる様にアンの姿が見える。相変わらずスキップ過剰で股間への影響が悪いから止めて欲しいのになあ……と思いつつながら、なるべく普通にアンの方へと視線を向けた。

「どうした」

「あーそーぼー……」

「カモつてあげるからサマナーも参加しなさいよ」

「君たち俺の運ステ壊滅してるの知ってて言ってる？　だが良いだろ

う！　男は挑まれた勝負から逃げない……！」

「わぁーい」

アンを背中に乗せたまま、引きずる様に立ち上がって居間へと向かい、遊んでいるベルとアンの輪に加えさせて貰う。悪魔が強くなったり、帝都では世界を揺るがす事件が始まりつつあるのは空気を通してなんとなく、感じられる。

「ただどそれはそれ、これはこれ。」

「我が家と悪魔たちは平常運転だった。」

「少しの間、俺の代わりに護衛を頼めないでしょうか」

ある日、そんな事をライドウがウチに来て頼んできた。そのすぐそばには眼鏡を装着した優男……と表現できるような学生の姿が見えた。ライドウと同じ服装を見ると、たぶんヤタガラスの人間なのだろうが。ともあれ、そんな風にライドウが此方に頼みに来た。玄関で話すのもちよつと酷いと思うので、話の続きは居間に通してからにする。

「ここが噂の伏魔殿かあ……」

「ウチの評判悪いなあ……」

眼鏡が案内されながらそんな事を呟くので苦笑すれば、眼鏡の青年が少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべる。だが、まあ、日常的な此方の風景を見ればそう言いたくなるのも解る。居間から見える縁側ではベルがタンクトップにホットパンツ姿で暑そうに団扇を仰ぎながら寝転がっている。その先、庭ではナラシンハがカティの素振りをしている。その近くではスタマを大玉代わりに上に乗った鳩がバランスポールとしてダイエツト中だし。アンはアンでおやつを楽しみにして既にちやぶ台に着席している。

すつかり食欲の凄い子になってしまつて……。

最近、食費が嵩んでるつてチェフエイが嘆いていたのを思い出す。

そんなチェフエイは割烹着姿でお盆の上に人数分の緑茶とお茶請けの栗羊羹を乗せて居間にやつて来た。それを配膳するとそのまま、邪魔にならない様に下がって行く。その姿を眼鏡の青年がしばし、無言で見ていた。

「……？ どうした、星命」

「いや、余りにも非常識な光景に少し呆れていたただけだよ……よくもこれだけの数と時間を召喚させ続けられるね……」

「ああ、星命はこれを見るのは初めてか」

星命、と呼ばれた青年はライドウの言葉に頷いた。どうやら初見だったらしい。まあ、この時代のデビルサマナーとはかけ離れたスタ

イルだから驚くのもしょうがないだろう。

「ウチは君たちの様に召喚する為の才能みたいなもんは皆無だからね。封魔管とか使って悪魔を使役できる訳じゃないんだよ」

ライドウや星命たち《オールド・サマナー》とでも呼ぶべき存在は封魔管を使って悪魔を使役する。これは自分が使っているプログラム化されたDDS等とは違い、契約はサマナー個人の實力に依存する。その為、サマナーが才能のある異能者や超人であれば、自分のレベルを超える悪魔を常に保有し続ける事も出来るのだ。所謂超人サマナーカテゴリーの中で一番強いのはこの連中だと言われている。自分のレベルを超える悪魔を使役できるからだ。

「だけど俺の場合、契約は全てDigital Devil Systemで代替している。これで悪魔を使役できるのは個人の才能じゃなくて機械的なスペックの問題——つまりは道具の性能に依存している。だから一種の安全装置として術者の實力を超える悪魔を使役する事が出来ない様になってるんだよ」

だがその代わり、アプリやプログラムによる拡張性が非常に高い。そして契約で縛る必要がない程に心を通わせた悪魔であれば、オールド・サマナーの様に自分のレベルを超える悪魔を使役する事も出来る。

ただし、その場合はDDSからの支援はなくなる。

「俺達DDS利用者はスペック的には元々、悪魔を使役する能力なんてないからね。自分のレベルを超える悪魔を使役しようとすれば自然と無理や無茶の分が体に返ってくるらしいぞ」

それさえ破らなければ比較的安全に悪魔を使役する事が出来る。

「まあ、悪魔使役の裏技みたいなもんだよ、此方は。完全に道具頼りだし。實力を超えた悪魔を契約で縛ったり使役出来たりする分そっちのが羨ましいよ」

「隣の芝生は青く見える……って奴かな」

オールド・サマナーにはその利点がある。DDSにも別の利点がある。一概にどちらのが良いとは言えないだろう。まあ、それでも自分はDDSユーザーである事を止める事は出来ないだろうが、一回だけライ



ドウに悪魔と個人で契約する為に必要な知識を教えて貰ったが、まるで意味が解らなかった。自分が此方方面に手を出す事はまずないだろう。

そう思いながら爪楊枝で芋羊羹を切って口に運ぼうとし、既に食べ終わっているアンが此方の方を見ているのが解った。だから自分のを食わずに、それをアンの方へと運べば、嬉しそうに餌付けされてしまった。あー、可愛い。小鳥を餌付けしている様な気分だった。

「……………？　ぴよ……………ぴよ？」

「うっ」

「サマナー！　死ぬなサマナー！　まだ死ぬには早すぎるぞ!？」

心臓を抑えながらなんとか可愛死を回避しつつ、ふう、と瀕死になつて乗り越える。その様子をライドウは何時もあり楽しそうだなあ、という感じの表情で見ている、星命の方は変人を見るような目で眺めながら頷いた。

「伏魔殿……………」

「本当の魔境つてのはあっち側だからな」

庭へと指させば、そこではナラシンハの頭の上でバランススダマボールしている鳩の姿が見える。スダマ先輩の報告を受けているだけあつて、星命の表情から色が一瞬で消える。バランスを取りながら周辺ではナラシンハが武芸の練習でカティを振り回しているだけあつて、何時スダマが爆裂したもんか解らない状態だった。

「ヤタガラスの連絡員が絶対に近寄りたくないって言う意味を魂で理解したよ……………」

「何故かライドウは気に入ったみたいだがな……………」

ゴウトの言葉にライドウがサムズアップを向けてきた。何気にきつちりと羊羹と茶を頂きつつ。ライドウ君、ただの成長期疑惑。いや、でもこれ以上成長されても困る様な気がする。主に心の平穩の為に。

まあ、それはそれとして、アンを餌付けしながらそれで、とライドウに言葉を向ける。

「護衛を引き受けて欲しいんだっけ」

「はい。個人で頼めそうで実力のある知人となると貴方ぐらいしか居ないので」

「そこまでかしこまられても困るんだけどなあ……」

言いながら《アナライズ》を起動させ、星命のレベルの確認する。

陰陽師 セイメイ Level154

「それに星命君の方が俺よりもレベルが高いし」

流石ヤタガラスのエリート、ライドウと共に行動するだけのレベルはあった。だがこのレベルでもライドウと比べると見劣りするという事実が存在する当り、やはり日本最強の守護者は根本的に格が違うというのを理解させられる。というかライドウ、軽くアナライズしてみればレベルまた上がってる……。

「レベル？」

「数値化された個人の強さの位階らしいぞ。こいつは個人の強さを数値化して確認する事が出来るらしい」

星命の疑問にゴウトが答えた。レベル概念も希薄とか、この時代は相手の格上格下を確認する方法が少なくて大変だなあ、と思わなくもない。なお、その話を聞いた星命がライドウのレベルを気にし始めたので、教える事だけは絶対に止める事にした。教えた結果、友情ブレイクしそうな気配があまりにも強すぎるのだ。

何せ、レベルが上がった今でも軽く二倍以上のレベル差がライドウとの間には存在しているのだ。星命も、自分の倍近くライドウが強いと知ったら寝込むだろう。俺は寝込む自信がある。だって何をどう見ても人間のレベルじゃないもんアレ。

「まあ、俺の事なんてどうでもいいんだよ。それよりも護衛を頼みたい、んだっけ？」

「はい、帝都から一時的に離れるので、代わりに頼みたいと思いましたが」

「確かに実力はそれなりにあるが、こいつは破壊魔だぞライドウ」  
「破壊しているのは俺じゃなくてスダマ先輩だから」

庭の方を見ればナラシンハの刃の先端でスダマが転がされ、その上で鳩がバランスを取っている。その光景をたっぷり数秒間全員で見

つめてから視線を室内に戻す。

「ライドウ、やっぱり考え直すべきではないかな、これ」

「いや、今の所ヤタガラスからの依頼を全て成功達成しているサマナーに頼むのが一番安全だと思う」

ライドウに予想以上に買われているなあ、と思った。ライドウが自分の何をそこまで気に入っているのかは自分にはよくわからないけど、

「まあ、鳴海探偵社で帰ってくるまでお茶をすればいいんだよね？」

「ええ、それで十分です。夜には戻る予定ですので」

ライドウがそう言うのならきつと、帰って来てくれるだろう。それにヤタガラスはペイがかなり良い。此方で入手する金銭自体に価値はないが、それを宝石とかにして貰えれば悪魔との交渉とかで使えるのだ。合体素材とかはベルベットルームや支配人が用意してくれるから問題ないが、アイテムの類はぶっちゃけ、悪魔と交渉したほうがレアな物を入手しやすい場合もあるのだ。

崩壊トウキョウへと戻った時、野生の悪魔や他のサマナーとの交渉材料として、此方であるべく手に入るアイテムを用意しておきたい気持ちがある。だからちゃんと報酬さえ出してくれるのなら、此方としては何も問題はない。

その事を告げると、ライドウが頷く。

「では先払いで支払わせて貰います」

そう言ってライドウが懐から布袋を取り出した。確認してみればその中には宝石が詰め込まれている。確認する限り、かなり質の良さそうな宝石だ。これなら報酬としても十分すぎる。そしてこの気前の良さが、ライドウの本気を教えてくれる。

「ずいぶんと支払いがいいなあ……」

「今はこっちで本物の供俱璃の媛を預かっているからな。影武者を目当てに刑務所が襲撃されたばかりだ。警戒するのは間違っていないだろう」

「おっしやる通りで」

供俱璃の媛——名前や意味は知らないが、影武者が刑務所に居た

事は先日の襲撃の時のオウハンの最後の言葉を思い出せば解る。やっぱり、アレが囿で本命はライドウが護衛していたらしい。だけどそのガードが一時的にとはいえ落とされるとなると、代わりの護衛が必要となる。

まあ、確かに、そうなると悪魔を多重に展開できる自分が最適かもしれない。報酬を前払いで受け取り、良し、と呟く。

「報酬を受け取った以上は日本社畜サマナーとして仕事は絶対に果たす。ライドウが帰ってくるまでは傷一つなくお返しするからな」

「宜しく願います」

「それじゃライドウ、僕達は調査の方に出かけようか」

ライドウが一礼してから家を出て行き、それを星命がけん引する。その姿を玄関から見送って行くと、ふよふよとスダマが浮かび上がりながら近づき、去って行く二人を眺めていた。スダマ先輩が見せる、珍しい姿だった。

『弁えられない外宇宙の敗北者め。新しいおもちゃ箱を探しに来たか』

「何を言ってるんだお前は……」

発言は何時も通りの正気度ゼロだった。寧ろスダマのその発言に安心感を覚えながら、頭を仕事モードに切り替える。スダマを掴んでDDS内に放り込んだら、残りの仲魔たちにも手をぱんぱん、と叩いて出立の準備を始める様に伝える。めんどくさそうに動き出す仲魔たちを統率し、片っ端からDDSに叩き込んだら軽く外行き用に身嗜みを整える。

玄関に再び集まった所で、アンを見る。

「お土産、何がいいかな」

「……ケーキ？」

『氷室に妻が作ったシフォンケーキがあるからそれで良からう』

想像以上にチエフエイが現代に馴染んでいるというか、家庭的になってしまっている。お前の傾国設定とかどこに行ったの？ と思いつつ、チエフエイ印の料理なら外れはないので、問題はないだろうと氷室まで戻り、シフォンケーキを回収したらそれをストレージの中

に入れる。

「ん」

歩き出そうとすればアンが腕を絡めてくるので、それに応えつつ、お出かけする。

◆

「あ、どうもー。ライドウの代わりに護衛に来たものでーす。はい、此方手土産のシフォンケーキの方になつてるので冷やして保存するか今食べちゃってください。あ、どうもどうも、ライドウが帰ってくるまでお邪魔しますねー」

「めっちゃ軽いのが来たな……」

片手を持ち上げて所長の鳴海に挨拶しつつ、持ってきたシフォンケーキを渡す。所内には鳴海の姿の他に、和装姿の少女の姿が見えた——おそらく、彼女がライドウが守っていた供俱璃の媛という奴なのだろう。

「あー、ライドウ君が帝都を出るからその代わりに護衛を交代してくれて言われたので、一時的にこんな冴えない男が彼の代わりでごめんね」

「ほんとやな」

「そこは否定して欲しかったかなあ！」

供俱璃の少女はどうやら、ややご立腹という様子。しかし、シフォンケーキに対してはどうやら興味津々。流石に街中なのでチエフェイを召喚して給仕させる事も出来ないの、まあまあ、と少女をなだめながら鳴海の方にウィンクする。それで意図を察してくれたのか、皿はこっちだぞ、と教えてくれる。

「これはウチの仲魔が作った異国の菓子でな、サマナー轟頂かもしれないけどかなり美味しく出来てるんだ。とりあえず夜には帰ってくるだろうし、それまでお兄さんと一緒にお茶したり、ボードゲーム……えーと、盤上遊戯で遊ばない？ 異国のも揃えてるんだぜ」

ストレージからモノポリーやらチェスのセットを取り出す。崩壊

世界で入手したものの、偶に暇つぶしで仲魔と遊ぶのに使っているボードゲームのセットだ。

「なんや子供扱いされているようで気に入らんわ」

「俺にどうしろと」

ふい、と表情を供俱璃の媛が背けてしまった。助けを求める様に視線を鳴海へと向ければ、肩を振ってどうしようもないと言われてしまった。ちよつとそれは酷くないだろうか……？

ライドウもライドウで、もうちよつと人となりとか説明を残してくれればよかつたのになあ、と思いつつ気合を入れ直す。日本人はへこたれない、社畜適正の高い日本人はこの程度では折れないのだ。

見せる、ブラック企業でも戦える日本人の心を。

「じゅるり」

「……」

「サマナー……」

アンに袖を引っ張られ、視線を鳴海へと向ける。どこか呆れた様子を浮かべつつも、小さく、口の端には笑みが浮かんでいるのが見える。それから視線を供俱璃の媛の方へと向け、掴んだアンを引きはがしながらそれを媛の横に置く。

「すいません、お茶入れている間はコレの相手をお願いします」

「ウチ護衛されるって話だった気がするんやけど」

「残念だったな——お腹の空いた娘には勝てない」

「流石ライドウが連れて来るだけあって濃いわ」

「警戒するだけ馬鹿らしく感じるわ」

最近、間食が多いなあ、と思いつつ鳴海に皿を出して貰い、そこにシフォンケーキを乗せる。どうやらライドウが珈琲豆を貯蔵しているらしいので、それを借りる。淹れる事に関してはDDSからチエファイがしつこく細かい指示を出してくるので、それに従いながら用意すれば人数分の珈琲を淹れる事が出来る。地味な重労働に、家事の大変さを感じた。

まあ、それはともあれ、

自分の仕事はライドウが帰ってくるまでの間、この平穏を守ってい

る事だ。

余程の馬鹿じゃなければ大通りに近いこの探偵事務所を襲おうなんて事は考えないだろうから、楽にしても問題はないだろう。

しばらくの間、女の子のご機嫌取りをしているだけで宝石がもらえるのだから、チヨロイもんだ、と判断する。早くライドウが帰ってくることを祈りつつ、人数分の珈琲を用意した。

ただし、その評価は、

「ライドウのが美味しいな」

「へたくそやん」

「君ら辛辣過ぎない……?」

という物に落ち着く。

「葬鳥ー！」

「あらら、寂しがらせちゃったかな？」

シフォンケーキと珈琲を食べ終わるとそれなりに満足してくれたらしく、文句を言う事はなくなったが、その代わりに暇そうにし始める上に、ペットらしい、ネコマタが威嚇して来るので、仕方がなくレクリエーションの準備をして、遊ぶことにした。どうやら未来産のボードゲームにはちよつと興味が薄いらしいので、脳の体操なんかで有名な言葉のゲームをちよつとした雑学から引っぱり出して遊ぶことにした。

というのも、俺にも立派な学生時代はあった。

ホームルーム前とか休み時間とか、暇な間は他の学生たちと遊ぶ時もあったのだ。後最近で言えば巖戸台分寮だが、脳の体操だとかで色々と思想ゲームや言葉のゲームはある。どうやら、供俱璃の姫——串鉈はその肉体の性質の為に目が見えないらしい。その為、ボードゲームは不適切だったようだ。

『見た感じ、多くのMagを肉体に溜め込む事で人型Magバッテリーの様な体質をしているみたいね……悲しいわねえ。その体質、確かにこの時代だとレアかもしれないけど未来になればブレイクスルーというか、ステイヴンが技術的に解決してしまうから、Magを人間で保存する必要がないのよね。彼女、未来でさえ生まれていれば普通に生活できたと思うと少し憐れね』

とのベルの評価だった。

Magバッテリー、つまりはスマートフォンに搭載されている電池と同じだ。その人間レベルのバッテリーがこの串鉈という少女……らしい。少なくとも事情の方は知らない。ライドウが教えてくれないからだ。ベルの発言、そしてコドクノマレビトの行動を見れば、彼らがこの少女を探しているというのは実に解りやすい話だ。

そしてたぶん大量のMagを使ってなんか高位分霊でも召喚するのだろう。



良くあるパターンだった。RPG的に考えて。まあ、割とよくあるパターンなのである。なのでライドウがこの子の護衛をしているのも、この子が利用されない為なのだろう。よくあるパターンとして、Magを解放したら死亡するとかだろうし。この時代、というか世界にはどうやらリカムやサマリカム系統を目撃しない、或いは超がつくれア魔法っぽいので、一つ一つの死が非常に重くカウントされている。だからこそ、代理の護衛なんてものを自分に頼んだのだろう。ともあれ、ボードゲームとは違う、純粋な知恵や機転をベースとした言葉遊びの類は以外にも串鉈が得意だった。最初は遠慮というより面倒がついていたが、二回程勝利を重ねると話は変わってくる。調子に乗って鳴海をノックアウトする辺りで完全に王者の風格を持ち始める為、急遽援軍召喚。

ベル、そしてチエフエイ召喚。

仲魔を投入し、知恵遊びに興じる事となった。そこにネコマタも追加され、悪魔vs人間の知恵をくだらないゲームでお菓子を食べながらやる事になった——が、まあ、これが良い気分転換になったように、それなりに白熱した。そして段々と日が暮れ始めた頃、そろそろライドウご帰還か？ と思った所で帰って来たのは葵鳥とかいう女性だった。初見なただけに、首を傾げながら仲魔を素早くDDSHへと戻してしまった。

「あー、大丈夫だよ。彼女は朝倉タエちゃん。ウチに良く来てる厄介ものだよ」

「タエじゃなくて葵鳥です。それよりもヒメちゃん、新しいお洋服にちよつと着替えてみない？」

探偵事務所にやってきたタエはそのまま串鉈を連れてお着替えへと向かってしまった。その姿を鳴海と共に視線で追いかける。

「この時間からお着替え……？」

「女つてのは良く解らないもんだな」

その言葉にお互い視線を合わせ、ハイタッチを決める。やっぱり男には女という生き物は中々理解出来ない。その認識を共有できる相手が居た事で実に助かった。その光景を椅子に座っているアンがジ

ト目で見つめてきている。どうやら賛同してくれないらしい。

「と、これはタエちゃんのお土産かな？」

「ん？」

そうやって鳴海が漁り始めたのは恐らくは朝倉タエが持ち込んできた荷物だった。そこに包まれているのは四人分の炭酸水の様に見える。その内一本を鳴海は持ち上げながら確認する。

「へえ、これって最近帝都で流行ってる炭酸水じゃないか。何でも疲れが取れるって話だけど」

「炭酸水かあ。俺は嫌いなんだよなあ」

炭酸水、水だから味がないくせに炭酸のしゅわしゅわ感だけが残るから、変な物を食っているようで嫌いなのだ。これがサイダーとか、甘い飲み物ならまだいいのだ。だけど炭酸水単体だとしてどうしてもだめだ。何かと混ぜたりしたらまだいいのだが。ただそのものを飲むのはそこまで好きじゃない。

「というか勝手に開けちゃ駄目でしょ鳴海さん」

「いやあ、ついつい……」

苦笑いする鳴海がそれを元の場所へと戻そうとしたところで、タエと串鉦が白菊を連れて戻ってきた。串鉦の装いは変わっており、活発的で動きやすい洋風のワンピースドレスだった。彼女の髪と同じく白いそれはどうも、サマナーとして戦い続けたせいかな血で直ぐに汚れそうという感想を抱いてしまう。まあ、口に出さない分にはセーフだろう。

「お、可愛く着飾れてるじゃないか。それならライドウもいちころだな」

「そ、そう？　って違うわ！　そ、そんなつもりはあらへんからな！」

「もう、そんなに恥ずかしくならなくてもいいのにヒメちゃんったら。つて、それよりも見た事のない人がいるけど……」

「あ、どうもお構いなく。ライドウが戻ってきたら自分も帰るんで」

「そう？　ああ、でもこれ、一緒に飲んで行かないかしら？」

そうやってタエが持ち出したのは先ほど、鳴海とチェックした炭酸水のボトルだった。どうやらそれがタエのお土産らしく、ここで開封

する予定だったらしい。鳴海の奴、命を繋いだな、と思いつつも、タエが炭酸水を開けて、それを振る舞おうとする。

「だめ」

それをアンが止めた。

「えーと……？」

「それ……は、だめ。めっ」

めっ、という可愛らしい言葉と共にアンがタエの握っていたボトルを素早く奪い取り、そのままそれを魔力で包んで消し飛ばした。それが消え去ると同時に、内部に隠されていたMagが露出する。それを理解出来ない鳴海は驚き、そして感じ取れる串鉈は更に驚愕する。「なんやこの禍々しいマグネタイトは!? これ飲んだらあかん!」

串鉈の驚愕に近い言葉が口から出ると同時に、素早くストレージからルーチェ&オンブラをストレージから電装し、それを両手で横に伸ばす様に掴んだ。それに合わせタエが串鉈を掴み、逃亡しようとするのをアンが進路を遮り、鳴海が当身をタエに叩き込んで気絶させた。

「葬鳥!」

「おい、これは——」

「囲まれてるぞ……!」

混沌とし始める探偵事務所内、アプリが起動する。

Suppress Attack!

……Hyaku Tarou Saved You!

《エネミーソナー》にも表示されなかった敵の気配が《百太郎》によって暴かれ、奇襲される寸前を警告として放つて来た。片眼鏡に自動的に《ハニー・ビー》と《エネミーソナー》が表示され、《百太郎》によって暴かれた敵の奇襲ルートが表示される。鳴海をアンが転がしながら、入り口と窓への射線を確保した。

敵がその射線に乗った瞬間、引き金を引いた。

コスモガン染みたルーチェ&オンブラの銃口から豪速の弾丸が連続で発射される。人間に使われる為ではなく、ダンテ級の上位者が振るう為に生み出された銃弾は簡単に音の壁を超えて、侵入しようとし

た悪魔たちの姿を一瞬でミンチに変えて吹き飛ばす。アンズー、そしてトウルダクが跡形もなく連射によって消え去ったのを確認しながらD D Sを即座に起動させる。

「鳩、ナラシンハ、ベル、チェフエイ！」

仲魔を一気に召喚する。ナラシンハは新しい権能の力で物質を透過して潜む事が出来る為、床や壁を抜けて襲撃の撃退に、ベルは窓際へと移動して蹴りでアンズーを殺害しながら攻め込むのを止め、チェフエイは子狐の姿へと変化して肩の上に乗る、

「サマナーよ、この娘、良くない物を飲んでる」

「治せ」

「承った——ゴッド浄化あ……！」

「ゴッド浄化」

鳴海の手によつて気絶させられたタエの頭の上に乗ると、鳩がゴツドパワーで彼女を汚染していたMagを一瞬で浄化させた。それを見ていて串鉈と白菊が信じられないものを見る様な視線を鳩へと向けている。

「ま、待ちんす。そ、その気配はもしや……」

「くるっぽー。くくくく……くる、くるっぽー！ ぽっぽー！」

「気配、漏れてるで」

「む、我が身から溢れ出す救済のオーラを隠しきれないのであればしょうがなくわああ——！」

サボっている鳩をアンが掴むと、それを鈍器の代わりに攻め込んでくるトウルダクに叩きつけ、跳ね返った瞬間にケリを叩き込んで連鎖コンボで昇天させていく。アンデッド系統にはどうやら、鳩ストライクが効果覲面らしい。流石神聖四文字の名前は伊達じゃない。

「どうなっただんだ一体！」

「俺が知りたいぜ……」

「葵鳥は……葵鳥は大丈夫よな？」

「安心したまえ少女よ、私はちよつと気持ち悪くなってきたが其方の婦人は無事だあ——……」

鳩が敵から敵へとバウンドしながら言葉を健気にも串鉈へと向け

ようとする姿は爆笑しそうになる。これでこの部屋の安全は大分確保出来ているが、それでもここで閉じ籠っていたら簡単には目に見えている。銃を構えたまま、どうしたものか、と考えながら《ハニー・ビー》を確認すれば、Magを大量保有する存在が近づいてくる。

「サマナー！ ヤタガラスの増援が外に来た！」

「よし！ 脱出の進路を確保しろ！」

「命令するのが板について来たわねサマナー？」

「では派手にやらせて貰おうか！」

「俺の事務所を吹っ飛ばすのは止めろよ!？」

「フレイダインツツ!!」

鳴海の言葉がやや遅かった。それよりも早く、核爆破と表現される核熱魔法、その中で習得したばかりの中で規模が小さくとも破壊力は最大級のフレイダインをナラシンハが察知した敵の塊へと向けて、壁を粉碎しながら放った。核熱が一瞬で圧縮され、爆裂する様に放たれて飲み込まれた悪魔を蒸発させながら逃亡の道を構築する。アンがタエと串鉈を掴み、此方で鳴海を掴んで探偵事務所に空いた穴から外へと逃亡する。

「これが追撃のグライダインさ！」

「俺の事務所があ——!!」

そしてそのまま、飛び出しながらナラシンハがグライダインで事務所を潰した。鳴海の喉から絶叫の様な声が飛び出し、口から魂が抜け出そうになっている。まあ、全部終わったらライドウかヤタガラスが必要経費として直してくれるだろうから、それで許してほしい。そう思いながら道路に転がり出た所で、ヤタガラスらしき女性三人組と合流する。

「流石《破壊魔》とヤタガラスにコードネームを付けられる人物というプロセス。援軍と逃亡先の案内の為に来たセオリーです！」

「本人的には非常に不名誉な称号なんですけどねえ！」

「お、俺の事務所……」

鳴海が呆けている中、ヤタガラスの増援の内黒装束の女二人が封魔

管を使って悪魔を召喚してきた。

「ほら、ここは私達で抑えてやるからさっさと行きな！」

「ここは《壬生一族》の方々にお任せして我々は帝都から脱出するセオリーです！　こっちはです！」

壬生一族と呼ばれた女たちが悪魔を召喚し、それで探偵事務所を襲撃した悪魔たちの残りを相手する。その間に鳴海がタエを抱え、白菊がネコマタ化し、それで逃亡を開始する。

空が淀んだ狂気の色に染め上げられ、完全に場所が変質していた。「異界化してやがる……」

帝都そのものが異界化する形に変質していた。曲がり角が別の路地へと繋がっていたり、空間がねじれているのが特徴だった。そこからは徹底した悪意を感じられる。《ハニー・ビー》がある為、それに助けに来たサマナー・風の行く場所を聞いて、合わせてナビをする事で異界化帝都を迷わずに外へと向かって進んで行く。

だが逃亡する此方を止めようとする姿が見える。

「女ヲ寄コセ！」

「餌！　餌餌餌、餌ダア！」

「ベル！　ナラシンハ！　チェフエイ！　アンは離れず護衛し続ける！　場合によっちゃスタマ先輩を投入してでも逃げるぞ！」

「帝都の破壊はナンセンスですよ破壊魔！」  
デストロイヤー

「好きで破壊してる訳じゃないっての……！」

指示に従って仲魔たちが動きだす。ナラシンハがマハグライダーで広範囲を重力で押しつぶし、電撃が通じる異形化帝都人に対して手加減込みのマハジオンガでSTUNさせ、その動きを封じていく——流石魔王の手腕、狙ってSTUNを引き出す事がこのレベルになると出来るらしい。耐性を持たなければSTUNハメが確定するというのが、実に恐ろしい性能だ。

だがそれに負けず、チェフエイが子狐から大人の姿へと変貌する。普段の省エネモードとは違う、五本の尾を生やした本気の傾国モードに入ったチェフエイだった。帝都から溢れ出る食欲、性欲、殺意、そのMagに混じる傲慢さ、強欲さ、溢れ出す貪欲さがチェフエイの力

を一時的に強化する。

「貴様ら、呆れ果てた欲だ。そのまま身を焦がし自滅しろ」

チエフエイの命令によって多重に神経と精神を蝕む状態異常が一斉に発生する。SLEEP、PANIC、CHARM、CLOSE、呪殺、様々な状態異常が欲望をトリガーに起爆する様に連鎖発動し、餌と叫ぶ異形の帝都人達がそのまま、自滅する様に自分の業に飲まれて動きを止めて行く。

「やるじゃねえか駄狐」

「ま、まあ、妾だつて五尾じゃしな！ 本気を出せばこんなもんじゃよ！」

「でもマザーハーロットの劣化互換よね、貴方」

「蠅王貴様ア——！」

ベルがチエフエイを挑発しているが、笑いながらベルはそれを受け流しつつ接近して来る電撃耐性の通る相手を無駄なく一発でSTUNさせ、確実に足止めしながら此方の逃亡時間を稼ぐ。素早く移動する為にアンがタエと鳴海を抱え、白菊が串鉈を抱えている。残された風が後方警戒をしながら道案内を続ける。

が、ガンガン敵が出現する。

それだけに中々前へと進まない。

道路から場所を屋根の上へと移動させ、地上を歩く異形共に捕まらない様にしながら移動を再開する。が、根本的に足の遅さが原因となっている。

「足はないのか、足は！」

「悪魔を召喚すると他のが召喚出来ないから温存したいプロセスですが——仕方がありません、護衛は其方に任せました！ オボログルマ！」

「ウオオオ、俺ハヤルゼエ……！」

風がオボログルマを召喚する。それに非戦闘員連中を積み込み、口笛でナラシンハを戻す。ベルとチエフエイの援護を受けながら戻って来たナラシンハを道路の上に乗せたまま、アンにオボログルマの護衛を任せ、

「ナラシンハ、ヴァラーハに！」

「了解ッ！」

ナラシンハをヴァラーハへと変身させ、道路で待つその背の上に飛び乗り、武器をルーチェ&オンブラからブルームへと切り替える。と、それに合わせ鳩が肩の上へと降りて来た。ヴァラーハがオボログルマを地上から護衛する様に走り始め、アンズーや地上の異形の視線を集める様に音を立てて走り出す。

「で、浄化できそう？」

「規模が広すぎて流石に我の今のレベルでは不可能だ。レベル40もあればこの程度の異界、一瞬で浄化して消し飛ばせたが」

「ない物ねだりも出来ない————なっ！」

狙撃する。

片腕でブルームを振り回しつつヴァラーハの背の上から見えた、アンズーを狙撃してオボログルマに近づけない様に叩き落す。ベルとチェフエイが後退しつつ合流しようとするのを確認し、息を吐きながら《ハニー・ビー》の反応を見る。敵に囲まれ過ぎていてまるでどうすればいいのかわからない。

「ともあれ、出口へ————」

Supprise Attack!

……Hyaku Tarou Saved You!

「ちい————ッッ!!」

ヴァラーハの背を蹴って横へと飛び退きながらブルームを足場に、ルーチェ&オンブラを引き抜いた。直後、ヴァラーハの背中を抉る様に噛み取り、蒼い鱗の龍がヴァラーハの体の上半分を食い千切った。血肉が舞いながらヴァラーハが即死した。その通り過ぎる蒼い竜の姿をアナライズする。

四聖獣 セイリユウ Level 57

「ハメ殺せベエエエルッッ！」

ブルームを飛翔させ、それに飛び乗りながら、家屋を粉碎しながらとぐろを巻くセイリユウの追撃を回避しながらDDSにヴァラーハを——戻さない。空へと飛び上がった所で、屋根の上を進んでいた



筈のオボログルマが横転し、それを粉砕する巨大な白い虎の姿が見えた。アンがそれに対して打撃戦を叩き込んでいる。チエフエイに指先で其方へと合流する指示をだしながら、

——セイリユウに追いつかれそうになる。

大口を開けたその姿はブルームに立ち乗りする此方に追いつきそうになり、

「残念——僕を殺すには二度じゃ足りないよ。グライダイン」

セイリユウが届く前にグライダインと共に変態したナラシンハの姿が褐色の青年の姿を取った。セイリユウの尻尾を掴みながら重力で抑え込み、それを大地を薙ぎ払う様に振り回しながら叩きつけて、帝都を粉砕しながら傷つけていき、

「それじゃ、死ぬまで痺れる時間よ」

ベルが追いついた。セイリユウの額に腕を叩き込み、脳に直接ジオダインを叩き込んだ。弱点属性を体内から直接流し込まれたセイリユウが絶叫を響かせるも、一切容赦しないナラシンハとベルの手によってセイリユウがハメ殺されて行く。

その間にブルームを飛ばして、オボログルマの集団に追いつく。白虎の攻撃を回避しながら《破邪の光弾》を叩き込み返し、その姿を怯ませた。サマーソルトを放つように白虎の鼻先を蹴り上げながら怯ませて、

此方が落ちる為の間を作る。

「《Show Time》……ッ！」

落下しながらダンテ直伝の奥義でL&Oを乱射しながらブルームを足で蹴り落としながら白虎にそれを叩きつけ、至近距離から神経弾を連続で放ちながら白虎の顔面に向かってブルームを叩き込む。

「追撃の《ランダマイザ》じゃー！」

そして弱り切った瞬間にブルームのケツを蹴る。

連動して引かれたトリガーから装填されたスタマが発射する。内部からスタマドラオンが放たれ、白虎を体内から消し飛ばしながら帝都の街を軽く破壊する。Magの霧となって霧散する白虎からブルームを回収しつつ、息を荒げながらその向こう側に出現する姿を見

た。

「――流石ライドウが推薦するだけの實力はあるみたいだね。まさかこれほどの實力があるとは思わなかったよ」

そう言っただけで周りに一つ目の鳥を浮かべ、何枚ものお札を握っている姿を見せるのは、

昼間、ライドウの横に居た青年、

「安倍星命……」

「ああ、そうだ」

ヤタガラスの味方だった筈の青年の姿だった。流石主人公。壮絶に裏切られてるじゃねえか、と心の中で罵倒しながらL&Oを星命へと向けて構えた。先ほど殺した筈のセイリユウとビヤッコ、それに加えスザクが星命の背後に集い、街を割りながらゲンブが出現するのが見えた。その全てが自分よりも高位の悪魔だった。ナラシンハとベルが合流するのを確認しつつ、

心を強く持った。決意と覚悟で心を満たす。

まだ、護衛のお仕事は終わっていないのだ。

だから身近な人物を参考に、星命を迎える。

「10秒やるぜ。ゴミ箱か。棺桶か。好きな方を選びな」

「君に従うだけの理由が僕には見つからないんだけど？」

「ああ、そうだろうな！」

星命は敵だ。自分よりもレベルは上だが——絶望的な程レベル差があるという訳ではない。セイリユウとビヤッコを殺したおかげでレベルが上昇した。その分を含めればある程度は肉薄できるだろう。星命との交渉が決裂した瞬間、ルーチェ&オンブラの銃口は既に星命の頭を狙っていた。

それにめがけて、迷う事無く引き金を引いた。音速を超える弾丸を使い魔を盾にする事で星命は回避し、カウンターにセイリユウ、ビヤッコ、スザク、ゲンブが襲い掛かってくる、素早く《アナライズ》でレベルと耐性を取得しながら情報共有し、四聖獣を無視しながら星命に肉薄する様に蹴りを叩き込む。

「ベル、セイリユウ！ ナラシンハ、ゲンブ！ スザク、チエフエイ！

ビヤッコはアン！」

「妾らレベルで負けておるんじゃけど!？」

「気合入れろよオ！ 仕事はライドウに受け渡すまでだぜ……！」

「クレイジー・ジャパニーズ……！」

星命に一気に肉薄し、蹴りを叩き込みながらオボログルマの横に倒れている集団から引き剥がそうとするが、それを使い魔が遮って邪魔する。使い魔を蹴りでミンチにしながら、銃弾を連射して星命を押し出す為に攻撃するも、それを使い魔の壁を作って時間を稼ぐのに利用し、星命が札を振るう。

「救急如律令」

「マカラカーン」

「トウーサムタイム」

マカラカーンで陰陽術を反射しながら生み出された隙を《トウーサムタイム》による連射で使い魔を一掃する。コスモガンであるL&Oにリロードの概念はMagと魔力が続く限り、気にする必要はない。ダンテ仕込みの音速連射で化け物を掃討していきながら一気に星命

に肉薄する。

そして蹴りを叩き込み、それをガードさせる。みしり、と肉がきしむ音を生みながら星命が蹴り飛ばされる。

「オン——」

吹き飛ばされながら星命が呪殺魔法を放ってくる。だが服の下に着込んだテトラジャマーがそれを阻害し、呪殺を無効化する。距離を開けた星命に対して装備をブルームへと切り替え、スダメ弾を放つ。進路上の家屋を全て爆裂し、帝都に傷跡を残しながら炸裂が星命を飲み込んでいく。それを符の一振りによって手元へと召喚したゲンブによって星命が耐えた。

ゲンブが蒸発するも、即座に蘇生する。動き出そうとするゲンブをグライダーが上から押さえつけ、家屋を貫通させるように大地へと落下させる。そして陥没した所にフレイダーンによる核熱爆破が連続でその姿を捉える。

その合間にスダメドラオンを連射する。放ち、コールバックし、サマリカームを鳩に使わせて再装填しながら再びブルームで星命へと向けて放つ。

「セイリユウ、スザク、ビヤツコ、ゲンブ」

それを星命が手元に呼び寄せた四聖獣の存在によってガードしながら死亡させ、そして死亡状態から再蘇生させる。終わりのないループにチィ、と吐き捨てながら再び地形を吹き飛ばす様にスダメをブルームから射出する。放つ破界の一撃による反動が両腕を痺れさせる。だがそれを鳩に癒させ、連続して星命を消し飛ばす為に判断し、動き続けながら戦闘を続行する。

「流石ライドウが選んだ代理なだけはある……格下と侮っていたけどまさかここまで戦えるなんて」

「俺と敵対した事を後悔したか！」

「確かに驚異的な対処能力だ。実力を瞬時に解析し、それに相応しい相手をぶつける事で即座に対処を可能としている。その上で希少魔法をいくつも備えている。間違いない。君はサマナーとしては僕が知る以上、ライドウに並ぶ厄介さを持っている。だからこそライドウ

同様、この世界から消えて貰うよ」

「やれるもんならやってみろクソガキ……！」

ガチャリ、と音を立てながらブルームをストレージに戻し、ルーチエ&オンブラを握り直した。スダメ連射では帝都が吹き飛び続けるだけで致命的なダメージを星命に与えられない。ここは四聖獣の抑え込みに仲魔を回して、自分と鳩で星命の相手をする必要がある。「子よ、熱くなり過ぎるな。ライドウを謀った青年が憎いのは解る。だがその怒りに飲まれるな」

「ッ……！」

鳩の言葉に冷静さを取り戻しながら符を取り出す星命の動きを阻害する様に、先行射撃を行って符が取り出される位置を先んじて射撃した。符が取り出された瞬間には先に放たれた弾丸が符に命中し、それが星命の陰陽術を不発に終わらせる。

「お前に相応しいのはカンオケだ……！」

銃口から数十を超える弾丸を雨の様に降り注がせながら弾幕を張るも、片手で結ばれた印によって星命の正面に障壁が生み出され、それが弾丸を阻んだ。

「ダンテ、《The Tower》！」

ラヴェンツァからベルベットルームで受け取った、ダンテの絵柄の塔のカードを稼働させる。瞬間、《射撃ガードキル》が自身の攻撃に刻み込まれた。時間を稼ぐ為に生み出された障壁を紙の様に切り裂きながら弾丸が星命に到達した。神経弾が星命の体を僅かに蝕んだ。

同時に、

Suppr ise Attack!

……HyakuTarou Saved You!

「こなっ、クソオ——！」

素早く屋根の上を転がりながら粉碎する様に蹴り飛ばして、直後、落ちて来た象を思わせるような悪魔の攻撃を回避する。転がった先で、多腕の悪魔が拳を複数構えていた。

Analyze……

妖魔 ガネーシャ Level 1

魔神 アタバク Level 159

「はっはっハッハッハ！」

「ライドウの様に、お前も苦しんで消えろ——！」

「電装《電撃弾》《神経弾》、セット！」

「テトラカーンッ！」

アタバクの拳が叩き込まれるも鳩のテトラカーンが間一髪間に合う。凄まじい衝撃を受けながらもアタバクが自分の拳によって攻撃を反射され、それで自傷していた。速度で勝るガネーシャが回避した直後から此方へと突っ込んでくる。テトラカーンの張り直しが間に合わない。

ここは、

「受けるっ——がっ——」

ガネーシャの攻撃を生身で受けた。ステイヴン製の概念強化防具を利用していなければ一瞬で体が真っ二つにされていただろう。衝撃はしかし、鳩が放つラスタキャンディのおかげで耐えられる領域にまで自分を強化し、耐えられた。

屋根が崩れるのを感じつつも、耐え抜き、血反吐を吐き捨てながら神経弾と電撃弾を装填したルーチェ&オンブラでトウーサムタイムを放つ。

ダンテ直伝の銃技が放たれる。神速のトリガーが弾丸の嵐となつて的確に射撃耐性を貫通しながらそれぞれの弱点属性を弾丸で穿つ。神経をアタバクが蝕まれ、ガネーシャが電撃弾によってSTUNする。

「月まで吹っ飛ベツッ！」

動きが停止した所を蹴って纏め、そのままブルームで市街地を吹き飛ばしながらスタマドラオンを放つ。爆裂の閃光にガネーシャとアタバクを飲み込み、完全に消し去って経験値へと変換させながら殺害する。さつきから何人も人を殺しているのに、それが心に響く事はない。

俺も、だいぶ人でなしになってしまった。

だがそれでも、

「星命くうん！ ゴミ箱かカンオケか選び終わったー？」

壁を蹴って、再び屋根の上へと上がり、ブルームからL&Oへと武装を切り替える。屋根の上へと着地すれば、星命が符によって陣地を形成している姿が見えた。

「それを必要とするのは君の方じゃないかな？」

星命が言葉を切り返しながら空間を陣地で歪めて行く。それを破壊する様にブルームをもう一度取り出し、それを地面へと打ち込んで地形そのものを破壊する事で構築されていた陣形を粉碎する。片足でブルームを抑え込みながらL&Oを星命へと向けた。狙われながらも、大胆不敵な表情を星命は崩さない。事実、《ハニー・ビー》は更にレベル50を超える悪魔数体の接近を知らせ、そして此方の仲魔が完全に分断されている状況を作っているのだ、

此方が何度か四聖獣を殺せているものの、有利かと言えば……相手の方が有利だ。

だけどそんな事はどうでもいい。

俺が許せないのは別の話だ。

別に、星命が実はコドクノマレビトの一員だというのは俺自身はどうでもいいのだ。

俺はどうでもいい。

だけど——こいつは、

「テメエ、ライドウを裏切ったな……！」

「子よ、落ち着け」

ふう、ふう、と息を吐きながら星命を睨む。普段は頼りにならない鳩の声が、ささくれだつた心を癒して行く様な気がする。それでも激怒に包まれた自分の熱は、欠片も消えやしない。

こいつはヤタガラスに居た。

そしてライドウと一緒に姿を見る限り、敬語を必要としないレベルで近い存在だったのだろう。

なのにこいつはライドウを裏切ったのだ。友情を裏切ったのだ。守るだけの力がある筈なのに。逃げる必要もなく、戦うだけの力がある筈なのに。なのにこいつは逃げた。俺の様に、裏切ったのだ、友情

を。

しなくてもいいのに。

それが殺したい程許せない。

自分から友を捨てる様な屑を。必要でもなく、その選択肢を考えて選んだクソを。

それだけは絶対に許せない。事情はどうあれ、友を捨てる様な奴は屑だ。クソだ。カスだ。そうでなくてはならないのだ。

そうじゃなきゃ——この旅は俺への罰にならない。

「お前は引きずり倒す。そして戻って来たライドウの前で土下座させてやる。安心しろ。一回ぐらいぶち殺してもサマリカームで甦らせるからな」

「我が」

鳩が肩の上で胸を張る。こいつがほとんどオプシヨンパーツの様に活躍しているが、こいつが居なきゃ間違ひなく戦いにすらならないだろう。とりわけ、ラストキャンディの効果が滅茶苦茶高い。支援魔法によるバフで全能力を限界点まで強化しているからこそ対応できる戦闘になっている。だが、

「無駄だよ——ライドウは帰ってこない」

「ああ、お前が起きている間はな！」

Suppress Attack!

……Hyakultarou Saved You!

跳躍した。直後、背後に忍び寄っていた斬撃を回避する。振り抜きに銃撃すればそこには刑務所で見えたオウハンの姿が見えた。ただし、今回はあのマスクを装着しておらず、素顔を晒していた。とんだイケメンもいたもんだ、と毒を吐き捨てながら引き金を連続で引く。オウハンと星命に同時に射撃するも、

オウハンが射撃を斬り払ってガードする。その間に星命が詠唱する。

「弾けて消えろッ！ スダマ先輩」

『夢は夢にトイレへ行きたいです』

後ろへと下がりながらスダマを召喚し、それを蹴り飛ばしてオウハ



ンと星命へと向ける。射撃の高速連射に反応し、スタマが爆裂する。指向性の存在しない花火の様な連続爆破が至近距離で発生し、空間を丸ごと飲み込んで行くのを鳩を壁にする事で自分だけ回避する。鳩のぐわあああ、という声が聞こえてくるのをガン無視する。

そのまま、どうせまだ死んでないであろう星命に銃口を向ける。

だが爆発を抜けて来たのはゲンブだった。

鈍器の様に投げつけられたそれを横へと跳んで回避した所で、

「まだ未熟だな」

その影から、オウハンが飛び出してきた。

「しま——」

「テトラカーン！」

鳩が素早くテトラカーンを張る。だがオウハンは此方の反応よりも早く、

「テトラブレイク」

テトラカーンを剥がされながらオウハンの剣が心臓に突き刺さった。吐血しながらも、強靱な超人としての身体能力が即死を許さない。心臓を貫通した剣を掴んで、それをそのまま握潰しながら引き抜いた。踏み込みながら頭突きをオウハンに叩き込んでいく。額から血が流れて顔を濡らす。

そのまま、銃を握ったままトリガーを引きながら殴る。

一撃、二撃、三撃——十六連撃。

ノータイムで打撃と銃撃を同時に行いながらオウハンに弾丸とダメージを叩き込んで行き、即死ダメージを鳩にサマリカーン等で回復させる。常時回復させながら殺す為に動きを作っていく。

だがその動きを崩されていく。

星命の符術で動きを抑え込まれて行く。デクンダで解除する頃にはガネーシヤ、アババクが新しく増えていた。オウハンはほとんどダメージを受けていない。更に異形化した魔人達が群がってくる。仲魔は全て迎撃の為に出兵している為、星命とオウハンを攻める為の手札が足りない。

スタマを爆裂させても、レベルと物量差で押し込まれ始め、

再び、刃が体に突き刺さる。符術によって能力を制限され、デクン  
ダデカジャをお互いに打ち合つてリセットし合う中で、此方が少しず  
つ削られていき、

「良く頑張った——だけど君には力が足りなかったね」

オウハンの新しい剣が胸を貫通し、それを横に引き裂く様に薙ぎ払  
われた。心臓を体から弾き出す様に吹き飛ばしながら、臓器を弾き出  
された。サマリカームで即死を直そうとするが、それよりも早く次か  
ら次の攻撃が体に突き刺さる。数の暴力から対応が追い付かない。  
痛みを声に出さない様に堪えながら引き金を引くが、

「サマナー……リユージツ！」

それよりも早く、数々の武器が体に突き刺さり、蘇生止めを行う。  
鳩が殴り飛ばされ、魔法が届かない様に距離を開けられる。

内臓が、腕が、足が引きちぎられる。

首が切断される。

仲魔が遠い。

「さようなら、サマナー。君の奮闘は中々のものだったよ」

——抵抗する暇もなく、体がバラバラに引き裂かれ意識を失っ  
た。

「がはっ、げほっ、ごほっ」

体中が痛くてまるで動かない。喉の奥に何かが詰まっているようで気持ちが悪い。咳き込みながら血反吐を吐き出すと、直後に柔らかい感触を感じながら抱きしめられていた。柔らかさにちよつとドキドキしながらも、死亡という経験は非常に恐ろしく、苦しい。気持ち悪いのでも怖いでもない。苦しいのだ。何も感じない。何も考えられない。存在しない。その状態がひたすら、苦しい。苦しいという事さえも理解できないほどに死んでいたのだ。

抱きしめてくれるアンの温かさが心地よかった。やはり、生きていくというのはそれだけで素晴らしい事だった。こうやって死を経験すると、より強く、死にたくないと思えてしまう。こんなにも死が安らかで、そして心地よいとは——気持ち悪い。死という現象を心地よく感じてしまう事が。それが恐ろしく、抱き着くアンの姿に手を回し、此方からも抱きしめ返していた。

人肌の暖かさが、生きていく事を感じさせる。それが凄く、心を落ち着かせる。ふう、と何とかそうやって人心地つけていると、

「うおっほん、ごほんごほん……」

と、アンの後方で此方を見ない様に背中を向けてくれている鳴海の姿が見えた。ワザとらしく咳をしながら帽子で軽く視界を塞ぎつつ、此方をチラ見しているのが見える。たぶん、自分とアンに配慮してくれているのだろう。この人、やつぱりいい人だよなあ……とそのリアクションを見ながら思う。アンを引きはがして立ち上がろうとするが、アンが解放してくれないので道路に座り込んだまま、

「心配かけたようで」

「いや、まあ、うん。心配はしたけどなんか俺以上にその子の方が物凄かったからな。正直驚いている間に色々吹っ飛んじやったよ」

「ん」

アンがぎゅつと此方を掴んで放してくれない。死ぬ事自体この業界では珍しくはない筈だ。保険も用意しておいたし、死ぬ可能性やり

スクは承知していた筈なのだが——アンはまだ、放してくれない。相当心配させてしまったようだ。流星に茶化す事も出来ない。

「しかし、良く生き返れたな。いや、生き返った事実も驚きなんだけどバラバラだったろ？」

鳴海の真つ当な疑問に、イケメンモードのナラシンハが壁を透過して出現し、鳴海がちよつと驚く。

「ま、そこは僕のおかげかな！ 僕の第三の権能、ヴァラーハは《再誕》の権能さ！ 原子分解した所で蘇生するんじゃないやなくて産まれ直すんだから肉体の損傷の激しさとかは関係ないのさ！ まあ、サマリカム対策に体を刻み始めた時は流星に僕もぞつとしたけどね」

ヴァラーハの権能《再誕》、それはナラシンハの前の姿の権能であり、全く使う事のなかった権能だ。全滅した時の保険、サマリカムでも蘇生できなくなった場合の保険、或いはナラシンハが連続で殺された場合、即座に戦闘復帰する為の保険。ナラシンハがその権能を使ってくれたのだ——というより、自動発動する様に、権能の権限を割譲して此方に渡しておいてくれたのだ。

先輩バスターからは偶に、蘇生対策の為の執拗なミンチ化があると言われている。サマリカム、リカム対策に蘇生できないレベルまで刻んで殺すという事もある。そう言うレベルになると蘇生魔法ではもうどうにもならず、神の権能クラスの蘇生術によってのみ、蘇生可能となる。

つまり、ヴァラーハの権能だ。

ヴァラーハはかつて、世界を支え続ける事によって、世界そのものを再誕させた猪だ。故に支え、そして生み直す事を手伝う権能を保有していた。今回はその保険が起動した形になる。とはいえ、一度使えばしばらくは再利用が出来ないのがこの権能の辛い所だ。サマリカム対策のミンチ殺しをもう一度喰らえば、今度こそ自分は完全に死亡するだろう。

一度限りの詐欺だ。同じ相手には二度と通じないだろう。

とはいえ、それで生き残ったのが全てだ。

辺りを見渡し、DDDSを確認し、一部の仲魔がDYING状態なの

を確認しつつ、近くに串鉈の姿を見かけないのを確認した。体から力を抜きながら、溜息を吐いた。

「クソ……奪われたか……」

「仕方ないセオリーです。流石に相手が上手でした」

視界の端で鳩が戻ってくるのが見えた。それと同時にぼろぼろの風の姿も見える。どうやら彼女も彼女で最後まで抵抗していたようだが、最終的には見ての通りの結果となってしまうらしい。アンに抱き着かれたまま、片手でDDSを操作して、鳩にサマリカムを使得わせてDYINGしているベル、チエフエイ、スダマを蘇生させる。これで戦力の復活は完了した。

「迷惑をかけたみたいだな」

「いえ、貴方が居なければ此方も殺されていたでしょうから」

「そうそう、落ち込む必要はないだろう。というか文字通り死ぬまで頑張ったんだ、俺達にお前を責める事は出来やしないさ」

「そう言って貰えると助かる」

これで依頼は失敗だなあ、と呟く。なんだかんだで仕事を失敗するのは初めての事だった。これまで順調すぎた、ともいえるのかもしれないが、それでも、純粹に失敗してしまった事は悔しい。

たとえ、この後、ライドウがどうせ全部どうにかしてくれるであろうとも。

「……」

そうだ、たぶんこの後、ライドウが全部問題を解決してくれるだろうから、自分が焦る必要はない。ただ、既定路線に戻るだけだろう。俺が最初からこの世界に現れなかった様な流れに、戻るだけだ。だから俺がそこに責任感や焦りを感じる必要はない。ただ息を吐いて、自分の至らなさに嫌気を感じるだけだ。本当に、

俺という男はどうしようもない程の雑魚で、モブだ。

「リユージ、めっ」

自分の存在に嫌気が刺しているとアンがそう言って、額を此方の額に軽くぶつけてきた。僅かな痛みを感じるものの、アンの顔がすぐそばに見える。普段は無表情で、何を考えているかわからない表情だ。

だけど一緒に過ごして来た時間のおかげで、彼女がどういう感情をその無表情で表しているのかは、だいぶ分かる様になってきた。これ、ちよつと怒っているな、という感じの表情をしていた。

助けを求めてナラシンハへと視線を向けるが、鳩がナラシンハの上に乗った状態で二人が逃げた。ベルとチェフエイはDD Sから出てきてくれない。

視線を鳴海と凧へと向ければ、さきつと視線をそらされた。辛い。

どうしたもんか、と考えながらあー、と声を零す。そう声を零せば、アンの真つ直ぐな瞳が此方へと向けられた。その視線に申し訳なきを感じつつも、もう一度あー、と声を零した。

「……心配させてごめん」  
「ん」

その言葉にアンが頷いた。

「怒る、の……別に……いい。だけ、ど……。見失うの……よく、ない」  
「……うん」  
「めっ」

「はい……」

そう言うのと再びぎゅ、つと抱きしめられてしまった。これは当分解放してくれないなあ、と思いつながら体から力を抜く事にした。改めて視線を戻した鳴海と凧の視線が優しい。いいだろう、これぐらいは。だって美少女に抱きしめられている訳だし。それにやっぱり、死んだ時のストレスって凄いものだったし。ここまで完全に死亡するとう事がストレスに感じるとは思いもしなかった。

少し怖いけど、恥ずかしいけど、それでも好きな子に抱きしめられている、というのは凄く安心する事だった。だけどそれも永遠に続けたいはられない。ふう、と息を吐いて、体に力を入れる。

「さて、行かなきゃな……」

呟きながら立ち上がるとうとするが、それをアンが許さない様に抑え込み、凧がいいえ、大丈夫のセオリーです、と声を出す。

「ライドウ先輩が帰って来ましたから」

そう言つて風が帝都の奥の方へと視線を向けた。それに合わせ、同じ方向へと視線を向けた。

破壊されてしまった帝都は今、遠くまで良く見える状態になっている。そのおかげで帝都の一角に塔の様な建造物が出現しており、そこから光柱が天へと向かつて伸びているのが見える。また同時に、そこを舞台に激しくぶつかり合うMagの気配と衝突の衝撃を目視する事が出来る。その上空、直上では巨大な口が開き、Magを喰らいあげているのも見える。アレがコドクノマレビトが大量のMagを求めていた原因だろうか……？

そこに超人としての視力を使えば、塔で戦っているのがライドウと星命だというのが解る。どうやら、死んでいる間にライドウが帰つて来たらしい。その姿を確認してから体から再び力を抜き、今度こそ身を完全にアンに預ける。良かった、と呟く。

「これで事件が解決できる……」

主人公の登場だ。間違いなくライドウはこの世界の物語における中心人物。彼が戻つて来たのなら——あのレベルからして、もはや心配する要素もないだろう。ライドウは当然の様に戦い、そして当然の様に勝利するだろう。それがヒーローという存在であるから。苦難を乗り越えて、勝利する事が約束されている存在だからだ。だからそこで、俺が頑張る必要はもうない。

それを理解してしまうと、果たして自分の今までの苦労は何だったのだろうか、とは思わなくなかった。周りに存在していた悪魔の気配も、今では非常にまばらでナラシンハと鳩に警戒を任せるだけどうにかなってしまう。

こうなると、後はライドウに全部任せるだけだろう。俺の仕事は終わってしまった。

結局、何もできなかつたなあ、と呟く。

『ま、それでいいのよ。私達は本来の役者じゃないんだからね』

『もしそれでも何かを変えようとするのであれば、それは傲慢というものじゃない』

「確かにな」

眩き、ちよつとだけ座る位置を調整し、石壁に背中を預ける様にし  
ながら座って体を休める。アンはその座っている状態の自分へ、前か  
ら抱き着く様に密着し、体を放さない。そろそろ解放して欲しいと思  
いながらも、自分も自分で、こうやって密着していると落ち着くので、  
口に出せなかった。

それを風はちよつと恥ずかしそうにしている。

「あー、だけど恥ずかしい姿を見せちゃったなあ……もうちよつと、こ  
う、師匠ダンテみたいにスタイリッシュに決める予定だったんだけどなあ  
……」

「お前の師匠は誰だか知らないけど、俺の目からすれば十分すぎる程  
に働いたように見えたけどな。そもそもお前が居なければ俺もそこ  
の嬢ちゃんもあの眼鏡に始末されてただろう」

「そもそも私は余り役に立てませんでしたしね……」

「まあ、個人で国を破壊できるレベルの相手だったからね、アレ……」  
レベルが50を超えれば、それはもはや立派な戦略兵器だ。爆発し  
続ける核兵器クラスの实力者。程度に差はあれど、個人で使役する悪  
魔等を含めて国家を破壊できるレベルの实力者になる。あの星命の  
指揮していた四聖獣を全速力で走らせれば、簡単に音速レベルの速度  
が出るだろう。それが日本を横断するだけで信じられないレベルの  
被害が出るだろう。

つまりはそういう領域だ。自分がそこまであの連中を強く感じら  
れないのはラストキャンディとランダマイザによる多重バフデバフ  
で能力値だけなら匹敵するレベルに強化していたからだ。その上で  
アナライズで弱点を見極め、それを攻める事の出来る仲魔を選出して  
いた所にある。

デカジャヤ、デクンダが使われてしまうと一瞬で崩壊する均衡だ  
が。

そういう意味では今回は相手が一枚上手だった。此方が支援魔法  
を使ってくるのをしっかりと学習して、デクンダとデカジャヤでしか  
りリセットさせてきていた。おかげでレベル差によって圧殺されて  
しまった。



……まあ、ライドウのレベルを見る限り、ライドウなら全く問題ないだろうが。

どうせ、勝利してしまうだろう。自分を裏切った相手を倒して。そこだけは自分の手でちよつと、反省させたかった。殺してサマリカームして、また殺してサマリカームを繰り返して。それで自分がどれだけ馬鹿な事をしたのか、それを反省させてやりたかった。だけど、まあ、主役が来たのなら彼に任せられた方が良いだろう。自分がでしゃばる様な事ではない。

別に、俺が主役という訳じゃないし。

「まあ、後は終わるまでゆっくりしていればいいか」

「俺としては吹っ飛んだ事務所をどうにかして欲しいんだけど」

「そこはほら、必要経費って事でヤタガラスが支払ってくれる」

「聞いた事のないセオリーです!？」

いやいやいや、良く聞いてよ凧ちゃん、と言葉を置く。

「俺が事務所を吹っ飛ばさなければ串鉦ちゃんもつと早期に捕まっていた。この場合、ライドウが追いつかない場合があった。つまり事務所の犠牲は必要だった」

つまり事務所の破壊は正義だった。Q.E.D.

「いや、それは絶対におかしいプロセスです」

「いや、必要だつて断言できたね……!」

「一体何が貴方をそこまで破壊に駆り立てるのですか……」

悪いのは破壊神スダマであつて俺ではないのだ。スダマ先輩がもつと物理的に輝いて弾けると囁くのだ。全部スダマ先輩が悪いのであつて、俺は何も悪くはない。間違いなく真の邪悪は爆発を起こしている方だと主張したい。まあ、少しだけテンション上げている事はここに認める。

はあ、と息を吐いていると、大地が揺れた。

視線を決戦の地へと向ければ、塔が破壊される姿が見えた。どうやらライドウが派手に暴れ回っているらしい。そしてその結果、巨大な蛇頭の怪物が塔を破壊しながらライドウを追いかけている。その巨大なサイズはここからでもアナライズを可能とする程、存在感に、M

agに満ちている。

蛇神 ジャトウオウハンシン Level 81

「ひゃあ、まだレベルが上がるのか、アレ」

「強い」

アンがすぐそばで囁く様に言葉を呟いた。オウハン……なのだからきつと、あの男が悪魔変身した姿なのだろうと予測を付けた。60代から一気に80代までレベルが上昇している姿は驚異的としか表現のしようもない。とはいえ、最近確認したライドウのレベルは90近く、行方不明から復帰イベントなんてものをこなしたのだ、恐らく90に突入しているだろうなあ、と思っている。

そこらへん、帝都最強の守護者なのだから、疑う余地もない。

悪魔の襲撃を警戒しながらも、全員でライドウの戦いを見守る。崩壊する塔を駆け抜けながらライドウがどうやら串鉦を奪還した様だった。そしてそのまま、悪魔を召喚し——逃げた。ライドウによって召喚されたオルトロスはこちらへと向かって屋根などを足場に逃亡してきている。少しずつMagが空へと吸い上げられてゆく様な感触の中、このまま放置していれば……いや、ライドウが関わったのだから、どうせ解決するか。

座ったまま、無言で時を過ごす。

オルトロスが此方へと向かって逃亡する姿と、塔を破壊した大地に到達した悪魔・オウハンがその巨大な龍の様な姿で大地を蹂躪しつつ、ライドウと戦う姿を見た。帝都を、そして自分の知人を守る為に一人で戦っている主人公という役割の人間を見た。

その苛烈さ、強さ、凄まじさは誰もが介入できない領域だった。

自分を遥かに超える巨大な敵に必殺の一撃を叩き込み、消し飛ばし、しかし再生されてもそこで諦めずに弱点を探りながら戦おうとする姿は、やはり、自分には今はたどり着けない領域だった。

「……」

その姿を黙ってみる事しか出来なかった。

『それがヒーローの宿命よ』

ベルがDDSから語り掛けて来る。

『ヒーローは本質的に救われないわ。最終的に超越者と呼ばれる領域にまで辿り着き、その宇宙最強の戦士になる。その戦いは仲魔がついて来れても、人は横に並ばない。だって当然よね？ 主人公に並ぶようなキャラクターがいたらそんなの詐欺じゃない、ねえ？』

『まあ、極限まで力を手に入れた者の行きつく先は常に孤独と決まっておるのじゃ。誰も、その力に届かない。だから誰もそれを理解できない。誰も、最後の戦いにはついて行けないんじゃないよ』

苦しみは常に一人で背負う。それが主人公の運命。

「……」

「……ん？ どうしたんだ？」

鳴海の声に、自分が再び、立ち上がっていたのに気が付いた。アンは抱き着いているが、その頭を軽く撫でてから自分の頬に軽く触れ、そうだなあ、と呟きながら無理矢理アンを引きはがした。

「誰かが……誰かが串鉈ちゃんを迎えに行かないと危ないだろう？ というわけで鳴海さんの護衛を頼む」

「了解したセオリーです。ですが……蘇りしたばかりで大丈夫ですか？」

凧の言葉にサムズアップを向ける。笑顔を浮かべ、そしてDDSへとナラシンハと鳩を一旦戻し、ブルームを取り出した。それを浮かべながら片足を乗せる。

「なあに、このまま引っ込んでるってのもちよつと、腹の座りが悪いっただけだ」

「リ्यूージ」

アンが良いの？ という言葉を投げかけて来る。それに対する答えは恥ずかしながらなかった。なんとなく、という感じだった。たぶん、このまま放置しても綺麗に収まるのだろう。俺は英雄でもなければ、ヒーローでもないのだ。だから俺が頑張った所で常に良い方向に流れる訳ではない。俺が無駄に気合を入れた結果、それが相手を助ける事になるのかもしれない。

それでもなんとなく、動かずにはいられなかった。

ここで見ているだけ、というのはしたくはなかった。

あのひよろ眼鏡の顔面に拳を一発叩き込みたいのもそうだ。けどそれ以上に、

「——女の子の前で仕事が終わったって休んでばかりじゃ、格好悪いし」

どうせなら、好きな子には特等席で一番恰好良い姿を見て欲しい。個人的な理由は、それに尽きるかもしれない。あの空に浮かぶ怪物、そして大地のオウハン神、この二つをどうにかできるとは思えないが、それでもあの串鉦の保護ぐらいだったら自分でも出来る。出来る事を放置して、何が男だ。

生きているのがあまりにも恥ずかしすぎる。出来る事をやらないのは怠惰云々の前に、恰好が悪すぎる。

「という訳で、まあ、必要ならもっかい死んでくる」

いや、たぶんまた死ぬだろうなあ、とは思う。もうヴァラーハの《再誕》は残ってないからミンチにならない様に気を付けなきゃならないが、まあ、女の子を回収するぐらいだったら問題はないだろう。たぶん。

「はあ——……」

此方のその反応に、鳴海は盛大に溜息を吐き、此方に何かを投げ渡してきた。それを受け取り、確認する。

見た事のない銘柄の煙草だった。そこから一本抜き、口に咥えてみる。それを見て鳴海はんー、と声を零した。

「まだ背伸びしたって感じがするな。ま、吸い方の一つ教えてやるから、ちゃんと戻って来いよ。ライドウ連れてな」

「頑張ってください。私はここで鳴海さんと朝倉さんを護衛していますので」

凧の召喚したオバリヨンが朝倉タエを両手で持ち上げながら軽いダンスを踊る。この緊急事態の中でもどこかコミカルな姿に小さく笑い声を零しつつ、両足をブルームに乗せ、その後部にアンが乗り込んた。

「じゃ、それではまた」

そして言葉のまま——ブルームを加速して飛ばした。

ここで、止まっていられなかった。怖いし、痛かったし、苦しいし、気持ちが悪い。

それでも、恰好の悪い自分にはもう成りたくなかった。好きな子の前で格好の悪い事は出来なかった。だからここで見ているだけ、という事は出来なかった。

だから前へ。

主人公の輝く場所へと向かって、自分でも出来る事を探して前へ。

「よし、見つけたー！」

「なっ、死んだ筈やないんか!？」

「残念だったな……わりと真面目に一回死んださ！ 辛いのかな！」

飛行させていたブルームから飛び降りながらネコマタと串鉈を乗せたオルトロスの横に着地する。そのままルーチェ&オンブラを引き抜き、それを一気に射撃した。串鉈を奪還せんとした悪魔の軍団に素早く神経弾を叩き込みながら、その後ろからついてくる巨大な触手の群れに向かってスタマを蹴り込む。それが爆破を起こしながら触手を吹き飛ばし、その向こう側でライドウが戦う、醜悪な姿の怪物の存在を目視させる。

かつては美男子だったオウハンも、今では醜い怪物となって帝都そのものを飲み込みつつあるサイズに変貌していた。触手を吹き飛ばしても一瞬で再生し、串鉈に手を伸ばそうとする。

「離れるなよ……！」

「わ、解ったわ」

串鉈が少しだけ気圧されつつも、オルトロスに乗ったまま近づいてくる。アンが竜巻で触手の追撃を防いでいる内にナラシンハを再召喚し、その姿を亀の化身——クールマへと変態させる。巨大化した亀の姿が結界を生み出し、それが周辺を遮断する様に力を生み出した。高速で津波の様に襲い掛かってきて叩きつけられる。それをクールマが権能の力と合わせて抑え込む。

「あ、ごめんサマナー。僕一人じゃ無理」

「鳩オオオ!!」

「我、降臨……！」

鳩を追加で召喚し、クールマの上に着地させる。ゴッドパワーでクールマの結界を強化しながらお馴染みのラストキヤンディで能力自体を強化していき、不浄の触手が結界を突破できないようにする。古代神と唯一神の夢のコラボによる合同結界を流石に突破する事は出来ないようで、結界の周りを埋め尽くす様に不浄の触手が溢れ返っ

ている。

「アン、突破できる？」

「ごめん……む、り……」

「駄目か……助けに来たつもりでハマってるんだけど俺……」

「いや、助けてくれんへんかったら飲まれとったわ。それだけ助かったで」

それなら、少しは走り出した意味もあるのかもしれない。そう思いながら足元を転がるスダマを踏んで動きを止めながら、周りを這いずる気持ちの悪い触手へと視線を向ける。こいつも、ライドウがきつとどうにかしてくれるだろう。そう思いながらストレージに叩き込んでおいたペットボトルを取り出し、中のスポーツドリンクを喉に流し込む。三分の一飲んだ所で残りをアンへと投げ渡し、回し飲みする。  
「……」

それを串鉈が少し、羨ましそうに見ているのを理解し、ストレージに仕込んでおいた別のスポーツドリンクのボトルを取り出し、それを串鉈へと投げた。それを受け取った串鉈は首を傾げながらペットボトルを見ている——ああ、そういうえばポカリってこの時代に存在しないものだったよなあ、って。此方のジェスチャーで開け方を理解したのか、ポカリを開けて飲んで、その味に驚いている様子が見える。

「非常食も持つてるけど食べる？」

「ウチら、触手に囲まれてるんやけど」

「この状況、焦ってもしょうがないしなあ」

「たべ……るっ」

アンの語尾がちよつと強い。考えればMagが空に吸い上げられているのだから、その影響でちよつとお腹を空かせているのかもしれない。ストレージの中に叩き込んでいたおやつを何個か取り出し、それをクールマに背中を預ける様に寄り掛かりながら食べ始める。アンも遠慮なくそれを食べ始め、串鉈も見ているだけだと辛いのか、近寄って団子を食べ始めた。

「根性あんなあ……」

「一回死んだからな」

「……」

「サマナージョーク、冗談だから。そこで申し訳なさそうな表情をされても困るんだよ……!」

軽く冗談のつもりで口にしたが、どうやら結構重く取られてしまったらしい。この業界、死んで蘇る事も普通にある事らしいので、そこまで死なせてしまった事は重くないのだ……まあ、蘇る側の理論だ。此方の世界だとうやら蘇生魔法が存在しない分、どうやら色々重いらしい。

「俺の出身には蘇生魔法があるから、死んでも生き返る事ぐらいなら難しくないんだよ。だから俺が一回死んだりする事ぐらいは織り込み済みなんだよ」

「それ、先に言ってもらわな解らんわ!」

「堂々と言うものでもないしな」

からからと串鉦の怒りのリアクションに笑い声を零す。先ほどもでは必死だった姿を見せていたが、今のリアクションで多少なりとも、感情が沸き上がってくるのが見えて来る。うん、其方の方がいいと思う。深刻な表情をし続けているよりは、多少は能天気な方がマシだ。そうだと思いたい。だって、ふさぎ込んでるだけじゃ問題が解決しないのは、

誰よりも自分が良く知っている。

だからこそこの世界再生の旅に出たのだから。

「まあ、君の事は安全圏まで絶対に逃がすから安心してくれ。俺が秒速でひき肉にでもならない限りは逃がせる筈だから」

「死んだら駄目やで? 目の前でバラバラにされた時は心臓止まるかと思っただわ……」

「はっはっはっは」

アンが横から腕をぎゅつと掴んできて地味に痛い。もう死んじや駄目、と言っている様だった。まあ、自分も好きで死のうと思っっている訳じゃない。ただ、格好悪い姿をしたくないのだ。男の子だ、というのを見ていて欲しいだけなのだ。だからちよつとだけ、格上相手でも頑張れているだけだ。ただこれ、本格的な殴り合いにはどう足掻い



ても混ぜれないよな、と思いつつ串鉈を見た。

良い子だ。

こんな、交流の短い相手でもしつかりと心配してくれている、優しい子だと思う。ライドウの事もいっぱい、心配しているんだろうなあ、とおそらくは彼のヒロインの姿を見て思った。だから頭をぽんぽん、と叩いた。

「ま、この怪奇・触手神よりもライドウの方が地味にレベルは高いから、負ける事はないと思うし。そこまで不安に思わなくても大丈夫だよ」

「本当に？」

串鉈がそう言っている間に、凄まじい光が奥の方から溢れ出すのが見える。美しい、綺麗な浄化の光は鳩が時折放つ光の種類に近い。それが触手を光で浄化しながら焼き払い、大地を粉碎してオウハン神を飲み込んだ。また帝都が崩壊しているなあ……とその景色を光を遮りながら眺めれば、辺りを満たしていた触手が消え去った。即座に動けるように待機しながら光が消え去った頃、

完全に触手が消え去り、残されたのは半裸のオウハン、そしてその近くに浮かび上がる星命の姿だった。空には怪物の姿が浮かび上がっている。オウハン神が倒れた後で、帝都中のMagを吸い上げる様に空の怪物が一気に全てを吸い上げて行く。オウハンが倒れた事でどうやら顕現の為に必要なMagを一気に吸い上げているらしく、凄まじい倦怠感を感じる。

「これ、は……！」

予想外の脱力感に片膝を大地につく。アンも同じように体から抜けていくMagに息を切らしながら片膝を大地につく。直接接触してもいないのにすさまじい勢いでMagが吸引されていく。流石に予想外の攻撃、その勢いに串鉈を逃がす事も出来ずに、力が弱っていくのを感じていた。

「封魔ッ！…これで少しはましになる筈や！」

だがそれに串鉈が対処した。どうやらMagの吸引を防ぐことができるらしい。そのおかげでMagの吸引が止まり、体が少しだるく

感じるも、動ける。立ち上がりながら弱り始めるクールマと鳩をDD S内へと戻し、視線をライドウの方へと向ける。刀を抜いたライドウは、それを星命へと向けていた。

「戦いが、終わる……？」

頭上に動かぶ怪物、それが完全に顕現する前にどうやら、星命を殺す覚悟を決めたらしい。他の皆共々、逃げる事を忘れ、魅入られる様にその光景を見ていた。

腕を広げ、怪物を歓迎する星命。それに向かってライドウが刀を持ち上げ、

——一直線に踏み込んだ。

音を超え、知覚を超えて加速したライドウの刃が、星命の胸を貫通し、必殺した。《エネミーソナー》から星命の反応が消失したのが確認できた。

安倍星命はそうやって死亡した。

そしてそれに連動する様に空に浮かんでいた怪物が弾ける。星命が死亡し、その死体が帝都の大地に転がり、禍々しいMagが空気中にばら撒けられる。星命が死亡し、それに連動して召喚される筈だった怪物が破裂して死亡し、汚染された黒いMagがばら撒かれていく。後はこれを浄化さえすればそれで帝都の争乱も終わるだろう。

……本当に？

「Magが……集まってる？」

串鉦の言葉を肯定する様に、帝都中に溢れ出す黒いMagが豪風を巻き起こしながら視覚化出来る程の密度で黒い線となって集まり出していた。凄まじい勢いのそれは串鉦を吹き飛ばしてしまいそうで、ネコマタに変化した悪魔のサポートがあっても、吹き飛ばしそうになる。その姿を素早く抑え込んで倒しながら、周りの家屋が粉碎され、そして集まって行く黒いMagの流れを見る。

それは星命へと集まり出していた。星命の死体に黒いMagが集まって行き、その口が動き出す。ライドウと星命とはまだ距離がある為、声は聞こえない。だが《エネミーソナー》には新しく、悪魔の反応が刻まれ始めていたのだ。

それも先ほど、空に浮かんでいた存在よりも遥かに巨大な反応が。

「っ——！」

「撃つんか!？」

「じやなきや手遅れになる様な気がする……!？」

「重いでありんす!？」

「ごめん……なっ!？」

伏せて抑え込んだままブルームを引き抜き、射撃する浮かび上がった星命の体に弾丸を狙撃して叩き込む。浮かび上がる星命の体に弾丸が何発も叩き込まれるも、まるで手ごたえがない。ライドウが気づき此方へと視線を向けるも、ぎよろり、と巨大な目玉を星命がその顔面に生やした。

悪寒を感じる。ブルームを狙撃体勢で構えていた体の動きが止まる。息が詰まる。

「リ्यूージー!？」

「あ……?？」

《アナライズ》をほとんど、反射的に発動させていた。表示される数値は星命が空へと向かって上昇して行く度に加速する様に強化されて行く。その様子を動く事も出来ず、恐怖と共に見つめる事しか出来なかつた。体が、まるで、動いてくれない。反応するライドウが封魔管を取り出すも、悪魔が召喚出来ない。

その光景を、誰もが無言と共に見守る事しか出来なかつた。

圧倒的黒いMagの嵐の中、その声は良く通っていた。

「悠久なる旅を僕はした。そしてこの星を見つけたんだ」

「ただ消耗しすぎた僕は再び力を得る為に本体を太陽の裏に隠した」

「そして、切り離れた精神と体の一部を幼い安倍星命に寄生させた」

「一つ教えよう、ライドウ」

「安倍星命は最後まで僕に主導権を譲ろうとしなかつた」

「だがそれを可能にしたのは君だ」

「君の刃が心臓に届いた時、彼の心は死んだ」

それはもはや安倍星命という姿をとることを止めていた。空に浮かび上がった怪物は人間の肉体を分解した。吸い上げた黒いMag

であらゆる傷を癒し、そしてその力で太陽の裏側に隠していた本来の肉体を呼び寄せた。それが分解された星命の肉体と結合し、一つの巨大な顔のジェスチャーを生み出した。

「さあ、救済の時だ」

そのシルエツトは神聖さすら覚える姿をしていた。だが後光が消えれば、それはあらゆる不浄と肉塊によって構成された、この世の存在とは思えぬ姿をしている。それは醜悪な触手状の肉塊が結びつく事で巨大な顔を作っていたが、それがほどけて行く。そうやって本来のその姿が出現し始める。

「今から君たちに自我を捨てさせよう」

「全てを平等にこの星の生物を僕の血肉の一部として」

そしてそれは。帝都の空を覆った。存在するだけで人間の心を恐怖と悪寒と絶望で覆った。あらゆる生物がその前には希望を失うという表現を理解するしかなかった。その巨体は帝都を覆い、そして更に帝都の外へとその異界を一気に拡大した。その異界は一瞬で規模を拡張させ、日本を飲み込んだ。そしてそのまま更に拡張し、地球という惑星そのものを飲み込み始めた。未だ、帝都を覆う程度の巨体しか持たずとも、それは世界中からMagを吸い上げ始め、圧倒的力を持ってこの星に降誕した。

「我が名は向こう側にある者!!」

外宙神 クラリオン

Level 201

けたたましい笑い声が嘲笑する様に響く。造物主の怒りがさく裂する。天上に崩壊した帝都を持ち上げられ、それが怒りを象徴する様に絶望として降り注いでくる。家屋の流星群が破滅として降り注ぐ。絶対的な破壊が帝都を一撃で終焉させる為にクラリオンより降り注ぐ。

その破滅の一つ一つが帝都に匹敵するだけの巨大さを誇っている。

その絶望の前に、あらゆる命が運動を停止し、抵抗という概念の無力さを理解する。生物としてのスペックが、次元が余りにも違い過ぎた。それはそもそも勝てる様な領域にはいなかった。ただ目前に存

在する生物を障害とすら見ておらず、食物連鎖の下位に存在する羽虫程度にしか認識していない。

だがそんな傲慢が許されるだけの絶対生物だった。

『サマナー！ 逃げなきや飲み込まれるわよ、サマナー！ 鳩！ 貴方の同類でしょ！ どうにかしなさいよ！』

『さて、我は肖像権パクられたただぞしかも数十秒だけ！ 訴えたのは我が方である。これは甚大な権利の侵害である。法廷で会うべきでは？』

『……駄目じゃ、サマナーが反応しとらん！』

手足が震える。逃げなくてはならない。本能が今すぐ飛び出せと命令している。だが見た事もない敵の強さ、その何をしても無駄という認識が、絶望的なほどに心を追い詰めて凍らせていた。何をしてても無駄。それを本能的に理解させられてしまっていた。

それが、体を動かす事を拒否していた。

どうしようもなく、体は恐怖で凍り付いていた。

——仲魔を、仲魔を——。

クールマとスタマを盾にすれば絶対に一手は凌げる筈だ。冷静に積み上げて来た経験と戦術眼が自分にそれを理解させている。だがそれを拒否する様に心と体が動いてくれない。悲鳴をあげたいほどの恐怖があらゆる動きを封じ込めて、行動する事を拒否していた。動かなきゃ、動かなきゃならないのに。それを理解しているのに体が動いてくれない。

帝都が、終焉する。

たった一撃。クラリオンが放った一撃で。

それだけで帝都が崩壊する。

——そんな絶望の中で動いたのは二つの姿だけだった。

「あつ」

一人は、ライドウだった。仲魔さえも召喚出来ない状態なのに、ライドウは刀を抜いた。さも、それが当然の様に。その視線は一瞬、後方で地面に倒れ込んでいる、自分と串鉦へと向けられた。それを見て、僅かに微笑み、そして迷う事無く刀を抜いていた。その周囲に、M

agドレインによって今にも消えてなくなりそうな光の刀を何本も生み出し、降り注ぐ絶望に対応する。

そしてそれに——アンが合流した。

その動きには一切の迷いもなかった。まだ心が一般人から抜け出せず、少し覚悟を決めたと思っただけなら実はそんな事さえもなかった、情けない自分と違って、

彼女は迷う事無く前へと出た。

「借り……る……！」

ライドウが生み出した光刀を何本か拝借し、それを融合させて一本の剣へと変化させた。それをライドウは了承しながら命を吐き出す様に力を込めて行く。そしてそれに習う様に、アンも生命力を燃焼し始めていた。そこにやめろ、と叫びたくても声が出なかつた。自分に出来るのは、攻撃が当たらない事を祈って、串鉈の盾になる事くらいだった。

いや、体が動かないからそれしか出来なかつた。

だからその光景を見続けるしかなかった。

造物主の怒りが降り注ぐ。一撃で帝都を粉碎し、完全に滅する事が出来る破壊。

それを前に一切の恐れを見せる事もなく突き進んで行く二人の姿を。ライドウの生み出した剣を足場に跳躍し、空の絶望に向かって跳躍するアン。そしてそれに続く様に剣を射出するライドウ。

その二つが同時に帝都に降り注ぐ絶望に衝突する。アンが放つ、限界を超えた《鬼神楽》とライドウの《五月雨斬り》が突き刺さる。それが降り注ぐ破壊を粉碎するも、

あまりにも、それは近すぎた。

粉碎しながらも、エネルギーは消えない。

破壊の中心からアンとライドウを爆裂が飲み込んだ。

そして帝都を、衝撃が襲った。

「なあ——アマラ宇宙ってなんだ？」

「ん？ そうね……説明しておくのもいいかもしれないわね」

それはある日の午後の話だった。夕食を食べてお腹いっぱい、幸せだった時の話になる。偶に出て来るキーワードは、自分が理解できないものが多かった。その大半は知らなくても生きて行けるし、必要ない、と教えてくれるものじゃなかった。だけどこの日のベルは気分が良かったのか、室内用タンクトップとホットパンツというラフな姿で横になりつつ、自分で団扇を扇ぎながらその疑問に答えてくれた。

「アマラ宇宙ってのは私達が知覚している並行世界の総称よ」

「並行世界」

「つまりは私達悪魔が何らかの形で存在するパラレルワールドの総称を《アマラ宇宙》と定義しているのよ。このアマラ宇宙の管理人はおそらく四文字だって認識しているわ。究極的にはこの管理人を打ち倒す事がウチのコスプレ王の目的よ。色々なアマラ宇宙に繋がる世界に出没する度にバリエーションを増やすんだからほんともう……」

支配人は何時も通り、ベルからぼろくそ言われていた。四文字打倒という目標が無ければ派閥から抜けているとか豪語さえしている。ベルは呆れながらも、話を続ける。その横には崩壊世界で調達された缶ビールが置いてある。

「えーと……そうそう、アマラ宇宙の話ね。私達の目的はその管理人を殴り飛ばして嫌がらせする事なのよ」

「いやがらせ」

「いや、だって無限の並行世界の管理よ？ 面倒なの嫌じゃない。ウチのも別に、宇宙が欲しいとかじゃなくて、四文字への愛を拗らせているだけだし……。まあ、めんどくさい話一種の反抗期よね。それでもカリスマと能力が揃ってしまっただからとんでもないんだけど。それに悪乗りするのが悪魔という存在よ」

えーと、それで、とベルが呟く。

「そうそう、アマラ宇宙には正史と外伝が存在するのよ」

「……正史？」

「そう。で、基本的にこの正史にも外伝にも全て、常に《ヒーロー》が存在するのよ。この概念が生まれた原因は正史における東京に核ミサイルが落ちた事で大破壊が発生し、それを生き抜いて生まれてしまった《ザ・ヒーロー》が原因ね。他にも《ガイア・ヒーロー》と《ロウ・ヒーロー》も存在したけど、大元は彼ね」

ぐびり、と彼女はビールを飲んだ。

「最終的に諸々の問題をヒーローが全部殴って解決してしまった事が問題なのよ。それが正史の宇宙だからね。ヒーローが苦難を乗り越えて全て殴り倒すって流れが正しい歴史に記録されてしまったのよ」  
つまり最初の戦犯の話だった。

《ザ・ヒーロー》という少年の話。苦難を全て乗り越え、虐殺し、その果てに全てを捨てて一人だけで最後の最後まで到達してしまった少年の話だった。ザ・ヒーローはそうやって正史と呼ばれる宇宙にその流れを刻んでしまった。つまりそれが基点となってしまうのだ。あらゆる悪魔の存在するアマラ宇宙の中で、ザ・ヒーローがそうした様に、

人間のヒーローが困難を乗り越える可能性を内包する物語が出来上がったのだと、ベルが言う。

「まあ、つまり戦犯ね。私達悪魔は圧倒的な力を持ちながら、人間に対して最終的に敗北するような可能性を獲得してしまった訳。だけどそれで話は終わらないわ。世界はそこからさらに分岐するわ」

それをベルが説明して行く。

「例えば核ミサイルが落ちない、平和だけどニャルラトホテプが人間で遊ぶために目覚めた為発芽したペルソナの存在する世界。或いはガーディアンによって守護される人間の世界。東京の終焉と共に人修羅の生まれる世界。可能性は分岐して広がったわ」

だけど、とベルは続ける。

「このアマラ宇宙にも主役って呼べる奴は常に存在しているのよ。ザ・ヒーローに負けず劣らず怪物的な才能と運気を兼ね備えた人間の中の怪物が。或いは人間の中の人間ね。そう言うのがこの宇宙で時



折現れて——そう、絶対に勝利するのよ。どんな苦難、挫折、絶望があつても最終的に絶対に勝利してしまう。そんなご都合主義の怪物の様な連中がこの宇宙に時々出現するのよ……」

それが、

「主人公よ。とんでもない連中だわ。なんだかんだで最後は勝つちやうんだから……」

だけどそれをどこか、楽しそうにベルは言っていた。悪魔は概念的な存在。遠い宇宙で経験したことを彼女もまた、覚えているのかもしれない。

◆

だからこそ、油断していたのかもしれない。何をどう見ても、あの実力と活躍具合。ライドウこそがこの世界の主人公だ。最終的には綺麗さっぱり、彼が問題を解決してくれるに違いない。そんな甘い考えが自分の中にあつたのかもしれない。だとすれば、この惨状は間違いない、自分が原因なのだろう。自分はヒーローという概念に甘えていたのだ。

考えれば簡単にわかる事ではないか。

俺は例外だ、と。いや、俺達が例外なのだと。

考えてみれば当然だろう。それに近い事は前々から言われていた。自由に動ける、舞台に存在しない演者。それが自分の立ち位置だとステイヴンが丁寧に説明していたではないか。だからそう、俺はこの物語のプレイヤーではない。

だとしたら、ヒーローの恩恵を受けないのも当然だろう。

ただそれだけ、それだけの話だ。

だけどそれを忘れていた。安心していった。油断していた。ただ圧倒的な力だけを見て、アイツさえいれば大丈夫だと思つてしまった俺が全て悪いのだ。

だから目の前の景色は、自分の怠慢が生んだ。

——アンの体が大地をワンバウンドし、転がった。

それを見かけた瞬間には駆け出し、大地を転がるその姿を引き寄せ、抱きしめた。近くでクラリオンが放った破局を破壊した影響か、アンの全身がぼろぼろだった。血を流しながら片目はぼつくりと割れており、片腕と片足が足りない。腹が大きく裂けており、内臓が今にも溢れ出しそうだった。きつく体を抱きしめ、歯を食いしばりながらアンの腹の傷が広がらない様に、自分の体を押し当てて、それ以上開かないようにする。

焦らなければ、魔法を使って回復すればいいだろうと気づくだろう。

だけど、仲魔の声が入ってこない。

ここまでぼろぼろになったアンを見るのは初めてだった。

これを見ただけで頭の中がごちゃごちゃになる。

全てを投げ出してでも、抱きしめたくなくなった。内臓がこぼれださない様に、傷口が広がらない様に必死にそれを掴んで抑え込みながらアンを掴んだ。片目だけになった状態で、

——アンは何時も通りの無表情ではなく、笑っていた。

その笑顔が余りにも綺麗で、余りにも少女らしくて、人修羅ではない少女の様なものに見えてしまつて——涙を、流さずにはいられなかった。

「リ्यूジ……馬鹿……私……サマリカームで、蘇られる……悪魔……」

「それは……」

そうだ、それはそうなんだ。それは解っているんだ。だけど違う、違うんだ。そうじゃない。蘇ればいいという訳じゃない。ひたすら胸が苦しい。こうじゃないし、そうじゃない。

ああ、言葉に出来ない。

言葉が、出てこない。言いたい事はあるのに、それが言葉にならない。所詮はハリボテの覚悟だった。何もかもメツキだった。それを理解させられた。自分は英雄なんかじゃないし、レベルが上がった程度でこれだ。本当のサマナーになんか、なれてはいない。俺は、どうしようもなく、弱い。

弱すぎる。

「リ्यूージ」

「っ、アン……？？」

名前を呼ばれた弱々しい手を伸ばし、それでアンが此方の頬を撫でた。そして、小さく笑みを向けてくれた。

「不安……心配、なる……で、しよ？ だから……」

続く言葉がアンの口から出る前に、言葉が止まり、血が流れ続け、アンに付属するDDSの表記がDYINGへと変貌した——つまり、彼女はここで一度目の死を迎えた。サマリカームを使えば余りにも簡単に覆ってしまう死だ。この傷も、鳩を召喚すれば簡単に癒せるだろう。

だが、その為に召喚しようとする指の動作が、余りにも重い。

DDSから鳩を召喚するだけでも、物凄く苦しい。

ただ命の気配が抜けてしまったアンの体を抱きしめ、そしてそこに残された体温を感じ取っていた。流れ出る血液と共に流れて行くその熱の温もり、それが消えていくたびに、胸の中に灯されていく物を感じる。

恐怖？ そんなもの、ずっとあった。

絶望感？ 旅を始める前からずっとあるに決まっている。

悲しみ？ どうしようもなさには常に悲観している。

違うだろう、これは、

「――」

無言の言葉を吐き出しながら、アンの体をゆつくりと置いて、上着を脱いで被せた。歯を食いしばりながら立ち上がり歯がその強さに、少し砕けた。口内に満ちる血液を吐き出しながら、DDSから鳩を召喚した。召喚された鳩は此方の指示もなく、サマリカームを発動させ、欠損したアンの体と命を蘇生させた。だが極度にMagが低下した影響か、彼女は目覚めない。

いい、見られなくても良い。

「俺が、馬鹿だった」

勝手に恐怖して、絶望して、格好いい所を見せようとして覚悟を決

めたように振る舞って。だけど結局は全部中途半端だ。やっている事も、覚悟している事も、態度もなにもかも。圧倒的に中途半端だった。実力だつてそうだ。

そう簡単に覚悟は決まらない。

そう簡単に人は変わらない。

そう簡単に人は、強くなれない。

だけど、

「だけど——ブチギレたぜ」

この際、小賢しい物は全部どうでもいい。ブチギレた。それだけでいい。もう、考えるのは止めだ。

恐怖、絶望、悲嘆、全部どうでもいい。全部、今だけは忘れることにした。そんな事がどうでもいいぐらいにキレている。その事実だけが今、自分の胸の中で全部を燃やし尽くしながら煮えたぎっている。ああ、そうだ。それだけだ。たったそれだけのシンプルな理由で、

——俺は何もかも忘れて、本気の本気を引きずり出せる。

恐怖も絶望も涙も全部怒りの燃料へと燃やし尽くす。この瞬間だけは全てを怒りにぶちまける。そうしなければ本気を出す事さえ怖い、小市民だ。理由がなければ自分の全力を引き出す事さえ出来ない。許して欲しい。情けない俺の様な男が君を好きになってしまった事を。

君が傷つきでもしないと、本気を出せない俺の様な男の情けなさを、本当に許してほしい。

だけど——今はそのせいで、本気で人間性さえ捨て去って、戦えそうだ。

◆

或いはその激怒のタイミングが、奇跡的にマッチングしたのかもしれない。

だがシナリオはシンプルなものだった。

簡単に言えば——激怒したのは一人だけじゃなかった。

串鉈は全部見ていた。ただ一人、膨大すぎるMagを保有するが故に、一人だけ正気を保って見続けていた。本来の流れよりもずっと近い場所でライドウと、そしてリユージとアンを目撃していた。それは竜二も知らない事だった。

だが彼女はリユージに感謝していたのだ。

ライドウには密かな恋心を抱き、そして竜二には多大な感謝を。それはなんて事はない。リユージが参加した依頼の一つ——つまりは刑務所での影武者の護衛依頼の話になる。

串鉈はそれをライドウから聞いて知っていた。

激戦の中で最後まで相手のボスに食らいつき、そして最終的に目標を守り切ったというサマナーの話を、竜二の話を串鉈はライドウから聞いていた。本来、それはライドウにとつては苦い経験になる話だった。ライドウは帝都の外へと依頼で動かされ、その間に刑務所では虐殺が発生する。

そこに串鉈の影武者が——大月が巻き込まれていた。無論、オウハンの手によって大月は死亡した。

だがそれを竜二は阻止する事が出来た。それは全体からすれば、本当に小さな流れだっただろう。彼女が生きていた所で大局に影響はない。事実、死んでいる人物の中でも特に力がある存在だった訳でもない。彼女は犠牲者であり、それ以上でもそれ以下でもない。

だが彼女を生かした事はライドウの心に無用な闇を差さなかった。串鉈に安心感という物を与える事が出来た。ライドウ自身が証拠と自信をもってそれを伝える事が出来た。それは僅かな変化だ。だけど心に一筋の光を生み出すのは十分すぎる変化だった。

串鉈は善人だ。

彼女は盲目である。だからこそ他人の心に機敏である。彼女には人の善悪が判る。そして人の表層ではなく、その下に隠れているものが見える。それは彼女が盲目であることと、彼女がMagを溜め込むその体質に由来するものがある。

だからこそ、彼女は感じる。悲哀、そして怒りを。

元々、串鉈はその身に詰め込まれたMagを解放する流れにあった。それは彼女自身の手によって。

本来の流れであれば彼女のそれは全てライドウへと向けられた。

だが彼女の視線はちゃんと、本来は舞台に存在しない筈の者を、イレギュラーをちゃんと、捉えていた。

ライドウと出会う事が無ければ、それが串鉈へと伝わる様な事はなかっただろう。彼と会話し、あの屋敷の庭で一緒に運動するような仲間でもなければ、態々ライドウが串鉈に影武者の無事を竜二が守ったとは言わなかっただろう。串鉈もそれを知らなければ竜二にこっそりと感謝を感じる事もなかっただろう。

結論から言えば、

——無駄な事は何一つなかった、そう言えた。

故に竜二が激怒に身を燃やし、立ち上がった所で、

ソレは顕現した。



光を感じる、空間に渦巻くMagが圧縮されて行き、それが体内に満ちていく。傷が、疲れが、魔力が高速で回復して行くばかりではなく、限界を超えた力が体の中に注ぎ込まれていく。だがそれは肉体を破壊する事無く、優しく満ちていく。そしてその中で、自分の中でまだ、未覚醒だった領域の力が胎動するのを感じる。

「——私の名はアメノオハバリ。あらゆる刀剣の神にして魔を駆逐する神々の剣」

その神は串鉈と入れ替わる様に登場した。彼女が腕を振るえばそれに従い、Magが渦巻き、自分とライドウの体を満たす。彼女は串鉈が特別なMagに干渉する能力を持っていたように、それを引き継いでいた。眼前に、極光でクラリオンの干渉を遮断しながら自分とライドウを見据え、語り掛けて来る。

「今の私には少女の吸魔能力が備わっています。それを通し大気中のMagを貴方達に分け与えています。現状、あの外宇宙の悪魔に勝て

るのは貴方達しかいません。依り代となり、眠っている少女の為に力を貸しましょう」

アメノオハバリの言葉にライドウが回復し、立ち上がった。そして此方へと視線を向けた。それに応える様に頷きを返した。ライドウもぼろぼろとなった外套を脱ぎ捨てて、拳を鳴らした。

「少女の心意気に敬意を表し、私も剣の姿となって力を貸しましょう——」

十束剣へと変化したアメノオハバリをライドウが掴む。それに合わせ、此方も悪魔を召喚する。前に出る様に踏み出しながらベルとチエフエイを召喚した。

「お姫様は私達で守るわ」

「うむ、サマナーよ。全力で怒りをぶつけるとよい」

片手を二人へと振りながらライドウに並んだ。片手で十束剣を掴みながら、もう片手で古ぼけた封魔管をライドウは抜き放った。それが恐らく、ライドウの切り札なのだろう。故にそれに合わせ、自分も溢れ出すMagによって導かれた、自分の力を覚醒させる。

恐怖と絶望で押し込み、ずっと蓋をしていた力に触れる。

自分の心臓に胸を当て、そこから一枚のカードを引き出す。

『そう——それでいいんだ、サマナー』

描かれているカードは褐色、白髪の青年が描かれた絵だった。器を二つ手にした褐色の青年がその中身を移している、《節制》のアルカナカード。それは常に、自分の中にあった。ただ、引き出せなかったのは俺自身が原因でしかない。

だが今、恐怖は欠片もない。

故にこの一枚に、自分の力の全てを込める。

瀕死の者すらMagの濃度だけで甦るこの空間、自分が受け取れる全ての力を、それをこの一枚のカードに注ぎ込む。生半可な切り札では勝てない、押し負ける。だとしたらオールベット以外の選択肢は残されていない。故に賭ける。自分が持つ最強の手札を呼び寄せて。

そこに、魂を込める程に熱量を上げて、怒りの全てを吐き出させる。

『君はヒーローではない。君は英雄ではない。だから君が戦う理由は

もつと陳腐で、くだらない物でいいんだ。誰かを守る為なんて大きな理由を持ち出す必要は欠片もない』

ライドウが封魔管を構えた。それに合わせ、此方もカードを正面に浮かべた。アメノオハバリによって供給されるMagを二つが全て吸収していく。その動きをクラリオンは極光が消えてから知覚した。超越者らしい傲慢で遅い動き。それは自分の力であればどうにでもなると確信した、初動の遅さ。

その家を超える太さを保有する触手を一気に伸ばし、剛撃を空から降り注がせる。

「——気高き瑞獣よ、四神の長よ」

「——星の終焉にて座す未来王よ」

力が圧縮、凝縮され、そして極限まで高められ——封魔管の解放を許す。本来のライドウのレベルでは召喚する事の許されない究極の召喚を許可する。それと同時に、タロットを通して未来王の覚醒が始まる。DDSから自動召喚される姿は進化の系譜を巡る。

魚、亀、猪、獣人、矮人、聖仙、理想王、英雄、覚者。

姿が巡り、そして最終——褐色に白髪、白い腰布を巻いた青年の姿へと辿り着いた。その姿に追従する様にその背後に機構が出現する。両腕の横に巨大な白い爪を生やした腕の様な機構が出現し、それが背中へと伸び、背後で機構として繋がり、光の翼を生やしていた。

究極と呼べる領域にある悪魔が召喚される。

その召喚に呼応する様に大気が渦巻いた。触手を切り裂きながら黄金の風と雷鳴が鳴り響く。それに合わせ空間が歪む。極限まで圧縮された重力が光さえも飲み込み、世界を焼く炎が触手を蒸発させた。

「今こそ我に力を貸し与え給え——！」

「この糞をぶち殺す為に力を吐き出せ——！」

クラリオンが放った破壊を逆に飲み込みながら姿が顕現する。黄金の鱗を持つ龍の頭にライドウが乗り、そして未来王が浮かべる片腕の上に着地し、空へと浮かび上がり、クラリオンが放った触手、30をも超える、レベルが100以下であれば一瞬で反応すら許さず消し



飛ばすその全てを、

二体だけで食い破った。

「召喚！・ コウリユウ！」

「顕現！・ カルキツ！」

本来は召喚出来ない筈の格の悪魔が、アメノオハバリによるMag  
限界突破、覚醒補助によつて限界を超えて顕現する。空間が超越級悪  
魔の登場に歪み、そして異界が悲鳴を上げる。だがそれを一切気にす  
る事もなく二体の悪魔が吠えた。

「久方ぶりに本気を出せそうな相手が出たか……！」

楽しそうにコウリユウが宙を舞い、吠える。黄金に輝く姿はあらゆる運命を捻じ曲げ、そして不吉を滅ぼす。クラリオンが呼び出した絶望による運命の袋小路を粉碎した。その存在によつて光が生まれた。存在しなかった勝機がコウリユウに導かれて呼び出された。極限を超えた力がライドウの本能と才能を磨き上げる様に覚醒させた。超越級の悪魔としての力が、通常の戦闘領域ではありえない数々の奇跡を生み出す。

だがが行えるのはコウリユウだけではない。

「接続——全王権限。《十大化身》、全権能覚醒」

未来王カルキの言葉と共に、完全に覚醒されたその権能が稼働する。そのデータがDDSを通して投影されて行く。

マツヤ《予言》絶対命中と絶対回避を自身に付与する

クールマ《創海》全門耐性・極に相性を変化する

ヴァラーハ《再誕》無限に蘇る

ナラシンハ《矛盾》自身に貫通・真を付与する

ヴァーマナ《踏破》境界超え・真を付与する

パラシユラーマ《聖仙》奥義を習得する

ラーマ《理想》魔との戦いで相手の蘇生回復を禁ずる

クリシユナ《英雄》悪との戦いに負けない

ブツダ《覚者》あらゆるデバフ効果を見捨てる

カルキ《粛清》星を滅ぼす者を滅ぼす

規格外とも表現できる数々の権能がカルキの覚醒に従い、稼働す

る。それはカルキという英雄が本来保有するパッシブスキルではないものであり、これでさえまだ、本来の力を完全に発揮できていない。だがそれでも空気中のMagを、クラリオンによって世界から吸い上げられ、そしてアメノオハバリによって分配されたそれはカルキとしての力を振るう事が出来る領域まで力を高めていた。

「空が淀んでいる。空気は腐っていく。人々の心は絶望の暗雲に覆われて、堕ちていく。動物たちは死に絶え、人は物語を刻む事もなく、地上の花は枯れていく」

覚醒した未来王と四神の長は、そのスキルやレベルにおいて同格だった。帝都の空に浮かび上がり、対面する両陣営は漸くこれで対等に向き合う事が出来た。そう、これだけの規格外の悪魔を二体揃えてもまだクラリオンに匹敵しただけだった。

そしてクラリオンは今もMagを地球から吸い上げていた。

「星が死んでいく——だがそれを滅ぼすのはお前の仕事じゃない」  
カルキが笑った。

「僕の仕事だ。さあ、誰の星で暴れているのか、この馬鹿に教えてあげようじゃないか」

「行くぞ人の仔よ。振り落とされるな。我も久方ぶりの戦闘で鱗を震わせている。己を抑えきれないかもしれないかもしれぬ」

「それで並んだつもりか、ライドウ、異邦のサマナー。だが所詮貴様らは不完全なる《個》……」

外宙神 クラリオン Level206

四聖の長 コウリユウ Level128

未来王 カルキ Level124

レベル100を超える悪魔が二体揃って、漸く互角の魔王。外宇宙から迷い出て来た侵略者。地球を滅ぼす災厄。人類という種を喰らう為にやって来た絶対君臨者。

それを滅ぼす為の戦いが——始まる。

誰かを守る為でもなく、

「俺の女を良くも傷つけてくれたな——！」  
それだけ。とてもシンプルな理由。

それで怒りを燃やしているから——それだけで、戦える。

「所詮は不完全な個の存在……貴様らが勝てる道理もない」

「お前は今からその不完全な存在にぼこぼこにされるんだよ」

「宇宙生物クラリオン！ 帝都を、人々を守る為にもお前はこれ以上、通さん！」

宣告に対してクラリオンの気配が膨れ上がり、常時世界からMagを吸い上げ続ける宇宙生物はもはや地上に顕現できる神としての領域に到達していた。だが元々本体を太陽の裏に隠せるほどの能力があるとするれば、ある意味順当な強さとも言えるかもしれない。既にクラリオンはここに顕現する前から惑星級の力を持っていたのだから。だから最初からこいつは、星を滅ぼすだけの力を持っていた。レベル100Over、それだけの究極の力を持っていた。ただそれでも慢心せず——そしていま、漸く慢心を抱いた。

重ねて来た戦術戦力計画、それによつて完全顕現したクラリオンのレベルは200を超え、そして今もなお星を枯らそうとMagを吸い上げ続け、レベルはゆつくりと上昇する。それがクラリオンに唯一の心の隙間を生み出している。究極の宇宙生物の心に、僅かな慢心を生み出している。

もし勝てるとすれば、この瞬間だけになる。

カルキの外骨格腕から背部ユニットへと居場所を移動させ、両腕が使える様にしながら、胸に手を当て、心の内海うちうみからカードを引き抜く。それを見て、デツキへと追加する。片膝をつく様に体を抑え込んで、剥がれないようにする。カルキの本気権限は一時的なものだ。自分が離れる様な事があればタロットの力も失われ、元のナラシンハマで戻るだろう。

だからここでぶち殺す。

アンを傷つけてくれた分を千倍にして——いや、ぶち殺して責任を取らせる。

「行くぞ、未来王。準備は良いか」

「貴様こそ、僕に置いて行かれない準備は出来てるのか黄龍」

悪魔が視線を向け合ったように、ライドウと己も一瞬だけ視線を交差させ——動き出した。反応する様にクラリオンが大地を砕いて持ち上げた。破壊された帝都の残骸が最初に放った絶望の天蓋よりも遙かに巨大で、そして数を揃えて浮かび上がる。流星となって降り注ぐそれは余波だけで帝都を滅ぼすだけに相応しい破壊力を兼ね備えている。人であれば超人であつても関係なく容赦なく滅する。人類抹殺の概念が込められたそれは見た目以上に強烈な猛毒を孕んでいる。

それをコウリユウから放たれた大雷撃が蒸発させて行く。黄金の雷はコウリユウが天を泳げば発生し、溢れ出すその輝きは一瞬で浮かび上がった残骸を塵へと変えて風に流す。それと共にコウリユウが黄金の風を呼び起こす。

封鎖された絶望の帝都に、黄金の風が吹く。

あらゆる不浄を浄化し、四神の加護をここに呼び起こす。《突撃の狼煙》となり、限界まで能力が一瞬で覚醒する。万物を遮断する障壁が出現し、それがあらゆる攻撃を防ぐ盾となる。コウリユウの咆哮に応じて四神が顕現する。セイリユウが宇宙の風を運び、スザクが超熱量の炎を風に乗せ、ビヤツコが重力を捻じ曲げて束縛し、ゲンブがその全てを包み込んで圧縮した。

「小賢しい……」

だがレベルが足りない。

その一言で四神招来の一撃がクラリオンによって放たれる波動によつて粉碎された。沸き上がる造物主の怒りに宇宙から破滅が召喚される。頭上を覆いつくす隕石の雨はもはや被害を帝都だけでは済まさない規模にまで膨れ上がっている。

「さあ、行くぞ！ 受けてみよ奥義！ マハカーラ・パスパター！」

カルキが天へと手をかざせば、大いなる破壊神の力を顕現させる。空から降り注ぐ光の柱が隕石諸共クラリオンを飲み込み、それでクラリオンを構成するMagを削りながら消滅させていく。音速を超えて飛翔する姿にしがみつきながら、Magを削つてもレベルが1程度しか下がっていないクラリオンの姿に軽い絶望感を覚える。それを

理解しているのか、クラリオンは焦らない。

触手を伸ばし、それを大地に突き刺して星から直接命を吸い上げ始める。

「無駄だ……」

「無駄かどうかは我らで決める」

ライドウの言葉に従いコウリュウの大雷撃が再び放たれる。先ほども強化された黄金の雷は音を超えて触手を切断しながら、空間そのものを帯電させる。雷が満ちる空間に封じられたクラリオンの全身に雷撃が駆け抜けて行くが、それを乗り越える様にクラリオンが動き出した。その横へとカルキが回り込んだ。

「はあああ——！」

拳を作り——光速を超えて殴り飛ばした。重力を捻じ曲げて時さえも超えて、命中してから拳が振るわれた。クラリオンのあらゆる防御を貫通して放たれた拳は空間を歪めながら核爆破を超える超熱量を連続発生させながら雷撃海を抜け出したクラリオンを一瞬で炎で包んだ。

空が雷炎で埋もれる。

終末に相応しい光景が広がる。

だがそれでも、クラリオンへのダメージは薄い。

「諦めろ。今のこの身には世界中のMagが集まっている」

クラリオンの言葉に眼光が光る。それと共にその眼から極大の閃光が放たれた。重力に縛られる事無く一直線に空を切り裂きながら、それは成層圏を突き抜けてつも横薙ぎに振るわれる。それをコウリュウとカルキが高速飛翔して回避する。それを超える速度でクラリオンが薙ぎ払った。コウリュウ、カルキがサマナーを守る為に互いに防御し、その一撃を受けた。

「ぐっ」

「ぐおっ」

両者から苦痛の声が溢れ出す。限界を突破した強化を施し、アメノオハバリによってMag供給などを行っていても、地力でクラリオンが圧倒している。それだけで圧倒的に不利だった。此方から攻撃を

仕掛け続けられない限りは勝ち目が見えない。クラリオンの放った神罰光によって吹き飛ばされ、大ダメージを受けている。コウリュウ、カルキは共に限界突破の影響でその耐性もほぼ完全耐性と呼べる領域に突入している筈だった。

それでもこの始末。

次元の違う相手だ。だが、それでも、

「全力を叩き込む。行けるか？」

「聞こえたな、カルキ。あつちに負けたら説教だ」

ライドウと共同する。吹き飛ばされた先で並び、そして一瞬でコウリュウとカルキが加速する。

「諦めの悪い者だ……なぜ無駄だと理解しない？」

クラリオンの肉体が二倍に膨れ上がった。吸い込んだMagで一段と成長した巨体、肉塊の体で空の全てを薙ぎ払う様に体を動かして来た。それに合わせカルキがコウリュウを外骨格で掴み、

一步を踏み出した。

そして到達したのは攻撃の向こう側。ヴァーマナの権能による完全自由移動を使用した結果だった。初めてみる物理法則を無視した動きに、クラリオンの攻撃が空振りし、その隙が見せられる。攻撃を乗り越えた向こう側で、コウリュウが口を開き、紫色の球体を圧縮してから飲み込み、それをブレスとして放った。

メギドラオン

極限を迎えたレベル領域でのメギドラオンが放たれる。圧縮されてから放たれた破滅の閃光はあらゆる物質を触れる前に消滅させながら進む究極の一撃となつてあらゆる耐性を無視して放たれる。完全なる破局。触れなくても消滅必須のそれがクラリオンを消滅させる為に一直線に攻撃を乗り越えた虚を突いて放たれる。

「その程度来る事は解っていた」

だがこの奇襲さえもクラリオンは読んでいた。完全なる破局が届く瞬間に、それは遮断された。まるで世界そのものを妨げるような障壁がクラリオンの間に発生し、それがクラリオンへとメギドラオンのブレスが届くのを阻んだ。その障壁を貫通しようと黄龍が黄金の

風を呼び、黄金の雷撃を交えながらメギドラオンを吐き出し続ける。だがそれは障壁に阻まれ——貫通しない。

「ああ、だがそれも僕には見えていたさ」

マツヤの権能で未来を見たカルキは、既にそれを破壊する為の手段を——弓を手にしていた。カルキの背丈を超える、外骨格が握る為の三メートルを超える光の弓。そこには一本の古ぼけた矢が番えられていた。

それは、メギドラオンに混ざる様に放たれた。

ブラフ マース トラ

古代インドの奥義が放たれた。あらゆる物理法則を無視し、絶対に貫くという反則的な能力を施された創造神本来の奥義が放たれる。それがクラリオンの展開した万物の障壁を紙屑の様に貫通し、

その細い穴をメギドラオンの咆哮が食い破った。

「なに——」

慢心し、油断していたクラリオンの正面からメギドラオンが飲み込んだ。紫色の完全なる破局は閃光となって空を照らし、紫色に世界を染め上げながら彼方へと突き抜けながらクラリオンの全身を焼き滅ぼして行く。生み出された傷口から黄金の風と雷が侵入し、強制的にMagを焼き焦がし、消滅させて行く。

それがクラリオンを弱体化させていく。ライドウが振るう十束剣が黄金の風と混じり合い、アメノオハバリの権能が黄金の風と融合する。吸魔の力が風に宿り、クラリオンが星から吸い上げたMagが再び星に、そして人々に還元される。余りにも膨大するMagはそれだけであらゆる傷を癒し、そして奇跡を可能とする。

それによって死すらも覆る。

死んでいた帝都に、世界に、僅かな希望の花が咲き始める。

そして当然、見えた勝機に手を止める必要もない。ライドウが仲魔を更に召喚していく。それに合わせ、自分の意識を全て、カルキへと集中して行く。ここで他の仲魔へと気を回す様な器用さが自分にはない。だから一つ、究極の一つに全てを押し込む。そしてそれにオールベットする。



「その期待に応えようサマナー！」

音速を超えて飛翔する。カルキとコウリユウが、メギドラオンで吹き飛ばされたクラリオンに捕捉されない様に両側に散りながら、一つ一つが国を亡ぼすレベルの攻撃を連続で叩き込んで行く。余波でさえ街や村を容易に消し去るだけの破壊力を兼ね備えた奥義から奥義の連続。それを繋げながらクラリオンの体の横を通り抜けながら放って行く。

百を超える斬撃と雷撃と暴風と矢が極限を超越したレベルの宇宙生物を襲っていく。その体が傷つき、徐々に、徐々に削げていく。だがそれと共にクラリオンの気配が膨れ上がっていく。

「人如きが……い……」

怒りの言葉と共にクラリオンの全身から怒りの波動が放たれた。それだけで周辺の空間が歪み、空間そのものが砕けて散っていく。巻き込まれれば防御もクソもない、一瞬で肉体がミンチとなる。即座に離脱する様に境界超えて距離を無視した連続移動でコウリユウを巻き込みながら離脱すれば、地球を覆わんとするクラリオンが空を封鎖し始め、正面に此方の姿を捉えた。

「良いだろう、貴様らを敵として認めよう……全力で滅ぼしてくれる……！」

「言葉遣いはどうした。余裕でも無くしたか？」

言葉ではなく行動でクラリオンは返答した。溢れ出すMagを利用して異界の中に異界を展開する。そうやって多重に異界を展開し、それを結界、バリア、陣地、異世界の様に様々な壁として構築して、一瞬でカルキとコウリユウを捉えた。

その直後に来るものをカルキが予知した。

「インドドラムッ！」

回避する様に横へ、異界の壁をヴァーマナで突き抜けながらインドラの力を招来する。神々の王の雷が神話を超えて呼び出され——それが全方位から分散への乱反射をして、異界の次元によって歪められて数千という閃光へと変貌した《大神罰光》によって満たされた。

逃げ場のないクラリオンの必殺を焼き払いながら無から有へ境界

を乗り越えて回避する。それはカルキにしか出来ない、権能を利用した突破方法だった。

それと同じ手段をライドウとコウリユウは取れない。

だが、それで死ぬとは欠片も思っていなかった。

異界結界を踏破する。乗り越えた先で雲を突き抜けながら帝都上空でコウリユウと合流し、正面にはクラリオンの単眼が見えた。《大神罰光》を放つても、既にクラリオンはそれを帝都の空全域へと、逃げ場を無くすように連続で放つ準備を整え終わっていた。故にそれは雲海を突き抜けた直後の此方の姿を求め、

「滅びよ——！」

放たれた。

「来たれガルダー！ ナーガ・ラージャ！ 我が前に運命を超える導きをシユカ！」

「来たれ福音、災厄を祓い清めよ」

連続招来によって90を超えたレベルの悪魔が瞬間的に召喚され、それが純粹な力へと変換され、クラリオンの極光と衝突し、飲み込まれて消滅する。クラリオンの回復能力はカルキのラーマの権能によって阻害されていた。どれだけMagを集積しようとも、それでクラリオンが回復する事はない。故に地球から吸い上げるMagをそのまま破壊力へと転換して吐き出していた。

幻獣が滅び去り、威力は弱まるも、それでも帝都を、日本をこの地点から向けられた方角までを滅ぼすには十分すぎる程の破壊力を保有している。

『ケケケ、困ってるようじゃねえかカルキ。だが安心しな。お前なら耐えられるさ』

カルキに呼び出された過去・現在・未来を見据えるインコ・シユカが運命を告知し、消えた。それに反応しカルキが此方をライドウの方へと投げ飛ばし、コウリユウの上に着地する。

そしてそのまま、カルキが神罰光へと突撃した。

飲み込まれ、その姿が消え——消滅する。

そして《再誕》した。

「この程度で僕も星も消そうとは調子に乗ったものだなッ！」

そしてその勢いのまま、完全回復した状態で復活したエネルギーを注いで中央から神罰光を引き裂いた。両側に割けた光の中央を通り抜ける様にコウリユウが加速する。すれ違いざまに再びカルキへと飛び移りながら、黄龍が正面からクラリオンへと衝突した。ライドウの振るう十束剣が致命の一撃を振るおうとして、

それが万物の障壁に阻まれた。

ソレだけは絶対にクラリオンは防いだ。

つまり、十束剣——それが致命傷になるのだ、とクラリオンは晒した。

「晒したな」

「お前の傷を」

それを見過ごす程馬鹿じやない。そしてクラリオンも、自分の弱点を晒した事を理解した。吸収するMagを増大させ、更に肉体を巨大化させていく。もはや空が肉塊で覆われている様にさえ見える。或いは空そのものが肉塊なのかもしれない。その圧倒的不愉快さ、気持ち悪さ、吐き気の中、

それでも希望の花は咲いている。

怒りの炎は燃え上がっている。

こいつだけは絶対にぶち殺す。その殺意が目の後ろでちりちりと刺激している。

「ならば、最大の―撃で貴様らを葬ってくれよう——！」

クラリオンのMagが胎動する。クラリオンを構成するMagそのものの、つまりはクラリオンが自らの命を燃焼する気配だった。素早くコウリユウとカルキで距離を開けながら、対応する為にお互いを見比べる。もはやどちらもぼろぼろだった。最初はレベルも120を超えていたのが、度重なる戦闘と消耗で100近くまでレベルは下がっていた。

これ以上戦闘が長引けば、クラリオンに飲まれるだろう。

次、クラリオンが本気の一撃を放ってくるだろう。

それを乗り越えながらカウンターで此方が必殺の一撃を叩き込む。

「これ以外に勝てる道はない」

そして、最後の一撃を作るのは、

「俺の役割か」

十束剣をライドウは掲げた。そしてそれを見て、頷く。だから此方で道を作ろうとライドウに告げ、前に出た。ライドウが後ろへと回り、仲魔を全て召喚する。背後でライドウが力を高めて行くのを感じとりながら、DDSから最後の仲魔を召喚する。

『スヤア……』

目を開けて眠っているスダマを取り出した。片手でそれを握りながら、もう片手でタロットを指に挟んだ。

「カルキ、次で全部ぶつけるぞ」

「良いのかい、サマナー？」

「沸騰しそうだけど、このクソをぶちまけられるならそれでいい——だから残った力、全部吐き出しちまえ」

その傲慢な言葉に、カルキは笑った。未来王、終焉世界最後の王は笑い、そして吠えた。

「良いだろう！ その胸に刻むが良い！ そして見よ！ これが星を終わらせ、新生させる者の力だ！ クラリオン——サマナーの為に今、貴様を敵として認定する。リグ・ヴェーダの汝の名を滅びる者として刻んでやろう……！」

笑いながらカルキは構えた。最終最強の一撃を放つ為に。そしてそれに応え、クラリオンが肥大化した肉体を削って放つ最強の一撃を放つ。宇宙から熱量を集め、太陽から直接炎を抜き取り、それを神罰光を織り交ぜた宇宙の光。

それがあらゆる現象を貫通して放たれる。

これを消滅させ、その上でクラリオンに万物の障壁を使わせないと、勝ち目はない。故にカルキが全ての力を、権能を、そして《聖仙》の力を引き出して奥義を開帳する。手を前に突き出し、それで球体を抑え込む様に生み出す。あらゆるエネルギー、光、現象、音、時、空間、その全てが吸い込まれるブラックホールが生み出され、そこに創生の炎が飲み込まれた。そうやって生み出されるのは惑星の死と生

誕を象徴する炎。

即ち超新星爆破になる。

それを圧縮、圧縮、圧縮させていく。星を焼き尽くすエネルギーを更に圧縮させる。やがてそれはビー玉規模のサイズにまで圧縮され、完成される。だがそれではエネルギーが足りない。それでもクラリオンには届かない。

故に、

「トリムルティ三界滅す——」

分身した。

二つの分身を生み出し、本体を含めて合計、三体に姿を増やした。分身といえは能力が減る事を懸念するだろう。だがそんな事はない分身も本体も一切力を落とす事無く同じ能力を保有していた。超圧縮された破壊を両手で抑え込んでいる状態そのまま。完全に同一の存在として、強さを落とさないうまま最終奥義を放つことを可能とする。それによって

究極の一撃が、三つ同時に放てるようになる。

そして、それを一切の躊躇もなく、三つ同時にクラリオンへと向かって放った。一つ一つが星を破壊する一撃。宇宙生物を燃焼させて放つ究極の破壊と破壊が正面から衝突する。

「クリタ・ユガ——……い！」

圧縮された超新星爆破が最後、カルキに貯蔵されたMagを全て吐き出し切った。タロットに込められた限定覚醒解除がそれによって終わりを告げる。アメノオハバリによるカルキの顕現が途切れ、カルキの姿からナラシンハマで姿を戻して、飛行能力を失って落下し始める。

だが最後の置き土産——分身からの超新星爆破はその仕事を果たした。クラリオンが放った閃光を圧縮しながら飲み込み、星を生み出す炎と太陽を飲み、喰らい合いながら消滅していく。スキルや概念さえも飲み込む超重力が万物の障壁、その行動そのものを飲み込み、障壁を張る事を封じた。

「なん、だ——」

クラリオンが言葉を続ける前に、ライドウが十束剣を構えた。全ての仲魔の力を束ね、それを乗せ、生み出された終焉の道に乗って突き進む。飛翔するコウリュウの姿も同様、最後までMagを吐き出し、弱り始めている。それでも加速された最後の一撃はもはや、止まらない。

宇宙炎の残滓に焼かれながらも、中央を突き抜けて行く。

ヒーローがその刃を大敵に届かせる為だ。

「まだだっ！」

だがその終焉にクラリオンが抗う。更にMagを吐き出し、万物の障壁を覚え直した。それによって再びクラリオンが絶対無敵の盾を習得する。

それはクラリオンの姿を大きく弱体化させる無茶ではあるが――

――十束剣を阻む絶対障壁だった。

故にライドウの行動はタッチの差で、

「起きろ――朝だぞ」

届かせる。

『《The Judgment》』

最後のMagを《審判》のタロットカードに注ぎ、スダマの瞳をクラリオンへと向けた。《審判》にアメノオハバリから供給される最後のMagを注ぎ込んで、限定覚醒を解除する。それによってスダマが一瞬だけ長い長い微睡みから目覚める。

狂気の存在しない瞳で、クラリオンとその障壁を見た。

『おはよう』

夢幻泡沫

そして――溶けた。虹色の泡となってクラリオンが張った障壁が、まるで夢や幻だったように。夢から覚めて、その残滓が消えて行く様に――真夏に降った雪が当然の様に消える様に、障壁は夢から現実へと回帰し、消え去った。

届かせた。

ライドウの振るう十束剣が巨大化し、仲魔たちの力を束ねて、それがクラリオンの目に突き刺さる。帝都の空にクラリオンの悲鳴と絶

叫が木霊する。だがもはや遅い。アメノオハバリ、その権能が振るわれる。極限まで溜め込まれたMag、その全てが十束剣に触れた個所から全て、吐き出される。

叫び声と魔力の発散によって抵抗するがもはや、全ては遅い。

吐き出され始めたMagはもはや、クラリオンの意思ではどうにもならない程に加速して吐き出され続ける。その姿は真つ二つに割られ、抵抗しようとしても蘇生も回復も許されず、そしてその為のMagも全てを失って行く。

「馬鹿な、このような、馬鹿——な——」

空にその声を響かせながら——クラリオン、その姿が消滅する。肉塊の空はそれによって打ち破られた。限界を超えたナラシンハとスタマがDYING状態となってDDSへと帰還される。極限状態での戦闘に付き合った肉体が、放出されるMagを受け取ってレベルアップする反動で全く動こうとしないまま、大地へと向かって落下して行く。

それでも、最高に気分は晴れやかだった。

「は——はは、ははは——！」

クラリオンが吹っ飛んだ場所から、帝都は青空を取り戻し始めていた。広がる蒼穹。その世界から落下しながらも、爆笑しながら落下し続ける。辛くて、

苦しくて、

絶望的で、

怖くて、

ブチギレて、

それでも——ああ、それでも、怒りのままに戦う事のなんて、楽しかった事か。俺の女の為だ、と叫んで暴力の振るう事のなんて楽しかった事だろうか。

ただ、ひたすら、思い返せば怖く——そして楽しかった。

だから、疲れたなあ、と爆笑しながら落下し、

優しい感触と共に、落下する姿を受け止められた。

蒼い髪が吹き抜ける黄金の風の中に揺れて、そしてその中から可愛

らしい、しかし小さく笑みを浮かべている素顔を見た。

「お疲れ様、リ्यूージ」

その声に、言葉に、安心感を覚えて、目を閉じながら呟いた。

「ああ……お疲れ様、アン」

凄く、凄く……疲れる戦いだつた。だがそれでも、胸の中には言葉に出来ないだけの達成感があつた。それは彼女を、大声で好きだと叫べたからかもしれない。

だから、

最後の力を込めて腕を彼女の首に回し、

唇を引き寄せて重ねた——そして、そのまま、笑いながら過労の中、意識を閉ざした。



その後の帝都の話をしよう。

つまりはクラリオンが死亡した後の帝都の話になる。

当然ながら首謀者であった安倍星命の死によって、そしてクラリオンの死によって秘密結社コドクノマレビトは解散した。帝都で暴れていたその構成員は全てクラリオンの養分になっていたらしく、最終的にその死体さえも残らなかった。首謀者の星命の死体も、オウハンの死体も他の結社員の死体同様、消えていた。Magに分解されてそれがクラリオンに食われたためであろうと判断された。実際、星命の肉体がほどけてクラリオンと同化している所を目撃したライドウがいたのだ。その結末が恐らく、正しい。

そしてクラリオンによって残された帝都の爪跡は甚大だった。

そもそも帝都自体、コドクノマレビトによる大規模な襲撃と異界化、それに事前に仕込まれていた人間の大规模悪魔化によってすさまじいレベルで被害を出していた。普通に考えればこれは再建不可能とも呼べるレベルだっただろうが、

予想に反し、実際の一般人への被害はそう多いものではなかった。まず、事前にオウハンの名前が刑務所時点で割れたために悪魔化した一般人の数が少なかったこと。それに続き水道の浄化が進み、そしてそこになぜか、神聖な祝福聖水と化していたことから、奇跡を起こす下地が事前に帝都には用意されていた、と表現できる。

故にそれがアメノオハバリが、十束剣によって解放されたクラリオンのMagに反応したのだ。超神聖祝福聖水を張り巡らされた帝都と、膨大な量のMag、それが一種の反応を起こして奇跡をそれを依り代とした少女の願いと共に発動した。

帝都は光に包まれ、傷は癒され、まだ魂が残っている人々は蘇生し、そして軽度の悪魔変化した人々は元に戻った。

無論、完全に悪魔となってしまう存在や、完全に死亡してしまつた存在、食われたり千切れたりした人々まで蘇れたわけではなかった。それでもそのMagが起こした奇跡は帝都全体を癒し、クラリオ

ンとコドクノマレビトが生んだ壮大な悲劇を、軽減する事で洗い流してしまった。

そうやって帝都は物理的破壊を除けば、大きく救われた。

そう、破壊は人々だけではなく、帝都という町全体に及んでいる。家屋、道路、地形、その全てが極限まで破壊し尽くされていた。当然ながら戦闘でそれを気にするだけの余裕はなかったのだから、コドクノマレビトの責任だと言えないだろう。当然、そいつらが死滅している以上、請求する先もない。

帝都の人間が目覚める前に、処理できるだけ処理しなくてはいけないヤタガラスのデスマーチが始まる。家屋の再建築。地形の修正。事件の捏造。記憶の処理。地方に飛ばしていたヤタガラスを引き戻しつつ、海外の組織と同時に連携して、日本の空を覆ったクラリオンという存在の隠蔽を行った。

神秘の力をフル稼働して帝都、そして世界でM a gの大量消費による連続昏倒事件を隠蔽する。

だがその中で、目覚めない者も出た。

串鉈だ。

元々供俱璃の媛としてM a gを解放するとそれが原因で崩れ去る事になる。それが供俱璃の媛としての末路になる。だがある種の奇跡か、いや、実際に奇跡だったのだろう、串鉈の体は崩れる事はなかった。それをヤタガラスはアメノオハバリの助力だと判断した。その影響で串鉈は何をしても目覚めない昏睡状態に陥り、目覚める事がなくなった。

なお、鳩を叩きつけたら一瞬で目覚め、悲劇なんて消え去った。美しいバッドエンドはゴッド奇跡っぽいものでなんか、こう、ふわっとしたい感じに解除された。どれだけそれが美しいものだろうと、それがバッドな結果である以上台無しにしてしまえばいいのだ。そういう精神で鳩を投げつけてみれば、馬鹿みたいな展開でハッピーエンドへと展開は変わった。

確かに、帝都は崩壊した。

だけど鳴海はヤタガラスに新しい事務所を建て直して貰えた。夕

エは汚染されていた状態からゴツドパワーで回復した。ついでに影武者の大月もなんだかんだで無事だった。ゴウトはボーナスでちよつと豪華なキャットフードを貰った。串鉈もなんやかんやでゴツドパワーで回復した。そしてライドウもかなり疲れた様子をしていたが、無事な姿で戦いを乗り越えた。

そして、無論——俺も。

◆

全速力で扉を開けて、目的の人物を見つけ出す。鳴海探偵事務所、コーヒーミルで何時も通り珈琲を作っているライドウの姿を発見し、スライディングする様に接近してから羽織っている外套の中へと滑り込む様に隠れる。外套と影のコンボで隠密性は高い筈だ。最近ナラシンハから学んだ気配の殺し方で気配を殺しつつ、

「いいか、絶対に俺がいるって言うなよ、言うなよ!？」

「お前……なにをした……」

ゴウトが滅茶苦茶困惑した表情で此方を見るが、それを無視してライドウの陰に隠れた。いないよー。リユージ君いないよー、と小さく呟いてから黙り込む。俺は石だ、石となるのだ。石になってしまふのだ。そう自分に言い聞かせる。寧ろSTONE化させる道具を用意して、それで一時的にSTONE化したほうが隠密性は高いのではないだろうか？

そう思いながら隠れる事十数秒後、

扉の開く音がした。

「リユージ……ど、こ……?？」

「アイツなら窓から逃げたぞ」

「ん」

鳴海の声がアンの言葉に応えられ、アンの気配と足跡が遠ざかって行く。それが完全に去って行くのを待ち、《ハニー・ビー》でマークされたアンの存在が離れた事を確認してからライドウの外套の下から転がり出て、壁に寄り掛かりながら息を吐く。はあ、と盛大に溜息を

もう一度だけ吐き出してから膝を抱え、丸まった。そしてそのまま、顔を膝に埋めた。

「どうして、どうしてこうなってしまったんだ……!」

「なんか面白さしか感じない気配がしてるんだけど何があつたんだ」

鳴海が面白そうに聞き、ライドウとゴウトが珍妙な物を見る様な視線を向けている。タエと串鉈はいない。どうやらお着替え中の様子だった。つまり、今、ここにはくだらない話の出来る男しかいないという事だった。もう一度周囲を確認し、そして《ハニー・ビー》でアーンが遠ざかった事をちゃんと確認してからいいか、とライドウたちに言葉を告げる。

「——俺は童貞だ」

「衝撃の告白だな」

「美女揃いの悪魔を連れていてそういうサマナーも珍しいな。ライドウか貴様」

「!？」

ゴウトからの思わぬ流れ弾にライドウが攻撃されていた。クラリオンの事件を通して、ゴウトとライドウももつと、立ち位置が近くなったような気がするなあ、と思いつつ、いいか、と話を続ける。

「俺は童貞だ。このほぼ十九年になりそうな人生の中で女性との付き合いなんてなかった。昔の俺は普通の学生で、普通に勉強して、そして普通に友達と遊んでいた。だけど女友達はいても、恋愛経験なんてものはないのだ」

「面白くなってきた」

鳴海が手をパン、と叩きながらソファに座り、手を揉みながら楽しそうに此方を見て、話に耳を傾けている。ゴウトはどこか呆れているが、ライドウはどこか、馬鹿話を楽しんでる様に思えた。

だから、まあ、話を続ける。

「そんな俺は一週間前に、ファーストキスを卒業したのだ……!」

「ああ、クラリオンを倒した後の……」

「良いシチュエーションだった」

ライドウがぐつとサムズアップしてくれる。うん、シチュエーショ

ン的には最高な事はあつたと思うよ。いや、本当に。あそこでキスしなきゃ何時するんだってレベルでのタイミングだったと思うよ。だけどね、そうじゃないんだ。アレはかなり戦闘の後でアドレナリンどばどば出てたハイテンションモードだったし。それ以前に大分前後不覚になつていたし。テンション高すぎて割とアレな状態だったし。「問題はあのキス以来、キスは解禁したと認識したアンにキスをせがまれる事だ……!」

「結婚式には呼べよ」

「花束は要るか?」

「さて……寝るか」

「お前ら人の苦勞を最後まで聞けよ!!」

立ち上がりフラストレーションをぶつける様に声を張り上げる。

「いや、解るよ!? 可愛いよ!? 好きだよ!? そして唇柔らかかったですよ!? だけどね、俺、童貞なの! そこまで心が強くないの! ライドウみたいにナチュラルに女を惚れさせてクールな顔を維持できる訳じゃないの! ライドウの様なナチュラルボーン女たらしとは違うの!」

「酷い話だ」

「あー、解る」

「そういう所はあるな」

「!?」

この話題に関してライドウの味方が居る筈もない。ライドウの顔の良さと、イケメンっぷりと、そしてそれが引き寄せる女性関係に関してはもはや話し合う必要もない程に解りやすい。そしてそれをあしらうライドウの紳士力の高さもそこはもう、議論する余地もない。ただどそう、話はそういうタイプの話なのだ。

だから聞いてくれよ、と話を続ける。

「童貞の! 俺に! 何度も! キスを要求して来るなんて! ハイレベルな事を彼女が要求して来るんだよ!」

両手で頭を押さえながらうづくまる。

「元々スキンシップ多いし……体柔らかいし……いい匂いするし……」

俺の理性壊れそうだよ……」

解るか貴様ら。突然抱き着いて来たと思つたら目を瞑つて唇を寄せてこようとするアンの姿が。あの時、一時のテンションでキスなんてしまったばかりに、それがオツケーサインとして認識してしまったアンがどんどんキスをしようとして来ている。そのアタックが本当にすさまじいもので、まだ鉄壁のリ्यूジ・ラインは崩壊していないものの、

「崩壊の危機にある……!」

「いや、別に崩壊しても良いだろう」

「というかそれ、リ्यूジがヘタレてるだけやないの?」

「女の子に恥をかかせちゃ駄目でしょ」

「情けない男め」

「全くだ」

いつの間にかタエと串鉦が入室し、それによってフルボッコにされている。もう、本当に泣きそう。なんで俺の気持ちを理解してくれる味方がいないのだろうか。だって、こう、解らないだろうか? 確かにアンは可愛いし、素敵だし、好きだし、俺だってキスとか色々いいちやいちゃしたいのも事実だろう。だけどそれはそれとして、

「こう、関係性が変わってしまっそうでね!?!」

「でもそれ、結局は男の理論やないか。女の方は早めに手を出して貰える方が安心するんやで」

「たぶんずっとアプローチかけてくれるのを待っているんじゃないかしら、アンちゃん」

「女性陣、強い」

「当然といえば当然だがな」

「擁護する要素がない」

「君たち皆、酷くない? 俺に対してあまりにも辛辣じゃない? ねえ、助けてよ」

気持ちの良いサムズアップが鳴海から向けられ、それでそのまま首を掻つ切るジェスチャーへと移された。ああ、つまり素直に当たって砕けると。そんな根性があれば、もう既に押し倒してるぜ、と中指を

鳴海へと向けながら、探偵事務所の姿を見て、小さく笑い声を零す。立ち上がりながらささやき、と、と声を零す。

「あまり逃げてても情けないし、そろそろ帰るわ」

「はよ抱きしめてやりーな」

「……心の準備が出来たら……ネ？」

まあ、俺も頑張ってみるよ、と串鉦の言葉に応えれば、串鉦がうん、と頷いた。事務所を出る扉へと近づきながら串鉦の頭を軽く撫でてから、苦笑しつつ出て行こうとしたところで、

「少し、待て」

「ん？」

出た行こうとしたところで、足を止めた。そう言ったライドウは珈琲を作る手を止めて、事務所から先に出て行く。どうやら自分の部屋へと向かったらしい。何事だろうか、と思い数分ライドウを待っていると、ライドウがその両手に少し荷物を抱えて戻って来た。

それは黒い外套と、細長くも布に包まれた物、そして一本の封魔管だった。

「これを」

それをライドウは此方に渡してきた。それを受け取り、重量を手の中を感じる。包みのサイズは、どこかで見た事のある長さをしており、金属質を感じさせる気配に、神聖さを感じる。その気配を自分は知っている。何せ、一週間前にそれと一緒に戦っていたのだから。それと同時に、封魔管の中の気配も、知っているものだった。だから驚きながら視線を上げてライドウを見た。

「ライドウ、これは」

「また、会いましょう。友として」

「――」

ライドウの言葉に、驚かされて、言葉を失ってしまった。いや、うん、確かにそうだ。

世界の記録は終わったのだ。

だからもはや、大正二十年に残る必要もない。

だからこつそり、別れを告げずに様子だけ見てから崩壊世界に帰ろ

うと思っていた——だがなんか、どうやらそれを見透かされていたらしい。言葉を失い、本当どうしようもないなあ、と片手で包みを持ち上げながらも片手で頬を描き、そして手を伸ばした。

「また会おう、ライドウ」

「ああ、また会おうリユージ」

さようならの言葉を告げず、受け取った物をストレージとDDSへと転送する。そしてそのまま、振り返る事無く鳴海探偵事務所を出て行く。暖かい視線と声援を背中に受けながら。心の内界でまた一枚、旅路を完成させるようにカードが完成された。

事務所の外へと出て行きながら、それを胸から引き抜いて取り出した。

「《Hierophant》……《法王》のタロット、か」

背中姿を見せるライドウの先に、光に包まれた帝都の姿が見えるタロットカードだった。そこに掛かっている名前は《法王》。象徴するのは信条、社会性、規律の順守、または——思いやり。

「ライドウに相応しいカードだな」

それを腰のカードホルダーに追加しながら、出た所で軽く頭を掻く。ゆっくりと歩き出しながら拠点へと戻って行く。流れて行く人混みはもはや一週間前の惨劇を忘れるかのように日常生活へと戻り、必死に遅れた分の仕事をこなそうとしている。人は強いとそれを見ていると思わせられる。どんな状況、どんな事態からも蘇って強く、その先を目指そうとする意志がある。

だからこの帝都も再び、元の姿を取り戻し——更に、その先を指すだろう。

未来へ。ライドウがいる限りはこの世界も大丈夫だろう。

そこを心配する必要はないし、俺が関わる事もないだろう。それはライドウの物語であり、自分の物語ではないのだから。だから……もう、いいだろう。ライドウにはバレてしまったし。

なんか、もう、

気分が——驚くほどに、清々しい。

『新たな主よ』



「……おお、コウリユウか」

『うむ。我は汝の心に凡庸さを見た。貴様の様な凡人が何故その領域にまで強くなれたか……いや、それは問うまい』

だが、とコウリユウは言葉を付け加える。

『主の前には先の見えぬ困難の運命が多重に絡まっているのが見える。ライドウと串鉈は主のそれを見てしまった。故に我が力となる事を立候補した』

「良いのか？ 場合によつちや合体素材にしちまうかもしれない」

『構わん。帝都の未来はこの戦いで光を得た。もはや我程の悪魔が必要となる戦いもないだろう……ならば、役に立つ戦場に立つ事が最終的な救いともなるだろう』

「ありがとう、コウリユウ。これから力を貸してくれ」

『気にするな。強敵と戦わせてくれれば、我はそれで満足だ』

また一体、仲魔が増えた。心強い仲間が増えた。自分の力もまた増えた。どんどん、人間という領域からそのレベルも合わせ、外れていつている自覚が存在していた。果たして、俺は本当に正しい道を進んでいるのだろうか？ 俺はちゃんと、自分らしく進んでいるのだろうか？

そんな事、解る訳もない。

答えはそう簡単に出るもんでもない。

だけどきつと、人間とはそれを問い続ける生き物だと思う。生きていく限りはその問から逃げ出す事も出来ないのだ。だから問い続けるのだ、一生。自分は正しいのか、自分は自分らしいのか、自分は……果たして、それだけの人生を送れているのか。

「ああ、だけどなんとというか——」

考えている間に、家に到着した。その前ではアンが待っていた。歩き、近づき、そしてその両手を取った。

「アン」

「なあに？」

「もう少し、後少しだけ待ってて欲しいんだ」

自分に自信が持てるまで。俺が俺らしいと思えるまで。人間とは

考える生き物だ。人間とは思考し続ける生き物だ。だから生きている限り、明確な答えにたどり着く事は出来ないと思う。LAWとかCHAOSとかDARKとかLIGHTとか……NEUTRALとか、色々とアライメントもあるし、そこから来る違いもあるだろう。

だけど自分が何であるかなんて、そんな簡単な言葉で表せるものでもない。

だけど解るのは、俺がこの子が好きだって話だ。

「君が好きだって胸を張って言える様になるまで、後少しだけ、待つてほしい」

「……言える？」

「後ちよつとだけ、頑張れば」

その言葉にコクリ、とアンは頷き、首筋に顔を近づけ、ちよつとだけ口づけしてきてから離れた。

「じゃ……我慢、する」

「我慢……？」

『私の知っている我慢と違う。これが近代の作法か……』

もしかしてコウリュウ君、ツツコミ系？ このパーティー、ほぼボケ倒す連中しかいないから人生辛そうだけど大丈夫？ そう思いながらも、心はちよつとだけ、幸せだった。まあ、好きな子にちゅーされて幸せじゃない奴なんていないのだから当然なのだが。

だからそれはそれとして、

「それじゃあ」

「うん」

帰ろう。

この大正二十年は楽しい場所だった。苦しい戦いもあつたけど——良い人たちの居る、世界だった。だけどここは俺の世界じゃない。俺の世界はあの崩壊し、今も必死に生きようとし続ける、戦い続けている世界なのだ。

現実からは逃げられない。

だから、最終的に立ち向かうしかないのだ。その現実には。

だから帰ろう。俺達の世界へ。

俺達の崩壊世界へ。あの世界は崩壊していて、インフラも壊滅して  
いて、悪魔だつて野放しだ。だけど、人が必死に生きようとする魂の  
輝きだけは絶対に負けていないと信じられる。そしてそこが俺の居  
場所だ。

俺の贖罪の場所だ。

失われた命は、背負う事しか出来ない。だから背負い、前に進もう。  
だから帰ろう、

「俺達の世界へ、帰ろう」

楽しかった大正二十年の帝都にさようなら。

——世界を再生する為に、別れを告げた。

## 四章 人間性の行き先 神州混沌行脚

未定義領域を超える。

扉が見えた。それを開き、そしてその向こう側に抜けた。影が目の前に差し込む。だがその先へと抜ければ——太陽の光と共に、そこから広がるシブヤの景色が見えて来る。新鮮の様に見えてどこか、淀んだ空気。だがそれは活気によって満ち始めていた。スクランブル交差点は前よりも賑わって露天の類が並び、結界によって悪魔が入り込めない様に駅周辺と、そこから繋がる主要エリアは管理されていた。

シブヤは、再生されていた。

『これが未来の帝都か……まるで街並みが違うな』

『あー、高層ビルを見て懐かしく感じるとはねえ』

『妾的にはあの屋敷の方が落ち着いたんじゃがなあ』

『すやあ……』

『さようなら大正時代、ただいま世紀末。ヒヤッハーな時代が僕らを待っているー！』

仲魔たちも仲魔たちでどうやら楽しんでる様だった。まあ、約一カ月ぶりのシブヤ、というか現代社会だ。帝都は確かに快適だったが、ホームではなかった。世界を超えて自分の世界へと戻って来た時、やはり……どこか、安心感を覚えるのだ。いや、安心感とは違う。なんというか、

世界そのものに歓迎されているような感じだ。世界そのものがおかえりなさい、と言ってくれている様な、そんな奇妙な感覚なのだ。不思議だ、星に意思なんてある筈もないのに。或いは、本当に世界そのものに意思があるのかもしれない。大地の信仰思想は大昔からあるのだ。星や世界の意思、擬人化、神、或いは悪魔。そういう存在が居てもおかしくはないかもしれない。

まあ、所詮は戯言だ。

崩壊したこの世界の排気汚染された空気を吸い込み、その帝都と比べた時のゲロまずさを味わい、ああ、戻って来たのだ、という事実を実感した。

ただいま、崩壊世界。俺には逃げられなかった。

「んー……長、かった……」

「だなあ。もう何年も過ごしたような気分だわ」

アンの言葉に同意しながら息を吐いた。なんだかんだで帝都での経験も凄い濃密だった。特にクラリオン戦辺りは、死神と塔の世界でも経験しなかったほどの苛烈で恐ろしい戦いだった。アレを経験した後では凄まじい時間を経験した様な気分になっていた。まあ、レベル2000over相手となんて早々出会えるものではないし。クラリオンも世界中からMagを吸い上げてレベルを200にまで到達させたのだ。

ああいうクラスとは出来たらお会いになりたくない。二度と。

ただ、これが最後だとはどうしても思えない。この世界でもレベル100に近いデビルバスター……というかダンテが存在しているし。少なくとも世界を丸ごと、魔界諸共飲み込んで崩壊させたのだ。

それを一瞬で作業を終了させたというのであれば、おそらくはクラリオンよりも上の存在なのだろう。

あまり、考えたくはない事だ。だが常に忘れずに覚えておかななくてはならない。

と、そうやってシブヤに戻った所で軽く頭を悩ませていると、スマートフォン——もはや完全に悪魔使役用の専用機器COMPと化したそれから映像通信が繋がる。装着している片眼鏡を通して空間に自分にのみ見えるスクリーンを通し、ステイーヴンの姿が見えた。

『よく今回も戻って来た、サマナー。その様子を見ると中々得難い経験を積んできたようだ』

「ああ、今回は前回と比べると大冒険だったよ……本当にね」

『ふむ……成程、かなりレベルが上がっているし何があったのかを知りたい所だが……その前に世界の欠損を埋めてしまおう。今回は直

ぐ近くにあるシブヤ・イチマルキューの屋上から解放が行えるようになっていいる。そこへと向かうんだ』

「了解」

ステイヴンからの通信が切断される。体を軽く伸ばして、未定義空間を抜けた妙な感覚を振り払いながらうっし、と気合を入れてからアンへと視線を向ける。それを受けてアンは頷きを返してくれる。なら、さっさと世界を解放しちまうか、と判断する。

そこからスクランブル交差点に出て、イチマルキューのビルを発見する。昔までなら階段を上って行く必要があっただろうが——もはや、そんな事を必要とする肉体ではない。

ビルの前に立った所で跳躍し、一回の跳躍で30メートル近く跳躍し、そのままビルの壁を蹴つてもう一度跳躍、ビルの端を掴んでその屋上へと外側からツーステップで到着する。その気になればたぶん、一回の跳躍で屋上まで飛び込む事が出来たな、と今の手ごたえを確認しながら確信する。

それだけに今の自分は——クラリオンという災害を乗り越えた自分は、強くなっていた。それにアンがついてきてくれる。彼女は前半部分で死亡していた為に、クラリオンから得られるMagのレベルアップ恩恵をややミスってしまった為、レベルはついに、自分よりも低くなった。

それでも俺は、

彼女を他の悪魔の様に、契約で縛ろうとは思わなかった。

好きな子を契約で縛って言いなりにするのは……ちよつと、格好悪い。

「しかし、最初の糞雑魚っぷりと比べたら怖いぐらい強くなったもんだ……」

それでも慢心や油断をすれば、あのレベル200を超えていたクラリオンの様に、死ぬ可能性が見えて来る。あの戦いは《完全耐性》や《全門耐性》vs《真・貫通》や《貫通・極》とかいう耐性という概念ISなに……？ と思わされるレベルの戦いだっただが、俺にも普通に弱点などが存在している。油断や慢心をすれば、クラリオンの百倍簡

単にぽっくり逝くだろう。慢心している暇なんて、今の自分にはない。強くなつた所でまだまだ、上の連中が存在するのだから。

それはそれとして、イチマルキューの上に着地すれば、そこには魔法陣が既に設置されてあったのを見た。どうやら、此方が帰ってきたらすぐにでも世界再生を行えるように事前にバーの誰かが準備しておいたらしい。あのバーの連中を見る限り、たぶんダンテなのだろうが……アレがこんなものを用意するのだろうか？ やっぱりあそこには自分の知らない住人が居そうな気がする。

それはともあれ、

「ステイーヴン、聞こえるか？ 到着したけど」

『此方でも確認している。君のスマートフォンを中継器と触媒として利用するからそれを中央に置くん。ああ、君は出ずに中に入ったままでいい。それなりのMagを要求されるが……今のそのレベルであれば、君一人でも十分だろう』

「了解、了解」

その他にもステイーヴンから指示が出される。どうやら世界再生の儀式はそこまで難しくもないものの、「魔」やMagをそれなりに要求されるらしい。前回、聖女と破戒僧の助力を求めたのはこれが、個人では足りなかったからだ。だがクラリオンを倒した恩恵を受けた今の自分であれば、この儀式を一人で完遂する事も出来る。

故に、魔法陣の中、完全にCOMPと化したスマートフォンを設置し、片膝をつく様に表示される手順に従い、儀式を遂行する。

やがて、Magと魔力を吸い上げられ、COMPから大正二十年で蓄積された世界情報が吐き出されて行く。それは魔法陣に従い、その中へと吸い込まれて行き——やがて、魔法陣から世界へと向かって発されていく。

それは情報概念として世界へと浸透して行き、世界に馴染み、そして世界が失った情報を、欠損を埋めて行く。そうやって無を有へと変貌させ、世界に存在していた、という事実へと修復していく。

それが自分の目には見えた。

概念という情報が魔法陣を通して世界へと染み込んで行く光景が。

錆び付き、崩れ、壊れ続けていた世界が少しずつその傷跡を癒し、そして本来の形を取り戻そうとする姿が目映って見えた。少しずつ、少しずつ、未定義領域が、空間が定義されていく。

存在しなかった世界が存在する。失われていた世界が、その形を大正二十年の情報を通して取り戻されて行くのだ。

そしてそれはやがて、巨大な震えへと変わる。蛇が脱皮する様に。新たな鱗を生やす時の様に。今までの殻を脱ぎ捨てて新生する様に。世界がその身を震わせた。一切建築物に影響しない地震が発生する。世界が揺れているのに、建物も道具も、何もかも動かない。それでも世界が震えているという事だけが伝わる、概念的な地震。それが世界を満たし、

そして止まる。

魔法陣は光を失うのと同時にその姿を消失させ、儀式が完了された。前の時よりも儀式が派手だったな、と思いながらCOMPを回収してポケットの中に戻す。儀式が終わると同時にステイヴンからの回線がつながる。

『良くやった、これで世界再生が再び進んだ。では拠点でささやかながら祝宴を用意して待っているぞ』

ステイヴンとの通信が切れて、祝宴を用意している、という言葉に苦笑してしまう。ステイヴンもステイヴンで、それなりの付き合いになって来た。いい感じに遠慮がなくなってきたよなあ、と思いつつ、アンに背中を叩かれた。

「宴……たくさん……」

「うんうん、たくさん食べたいのね。解る解る」

アンの食欲に満たされた表情を見るとこの子、やっぱり普通に食事が大好きなだけなのでは？ と思ってしまう。

だけど、まあ、美味しく食べる君がやっぱり好き。



シブヤの頑丈そうな扉から鍵を使って、ステイヴンのバーへと



戻ってきた。そこにはベルベットルームで聞き慣れたベラドンナの歌声と演奏が静かに、しかし落ち着く様に漂っていた。だがそれだけではなく、また店内が一段と広く拡張されていた。中央にはいくつかのテーブルが用意されており、立食式に食事が様々に用意されていた。何時ものカウンターの方を見れば、誇らしげな表情で包丁を片手に腕を組む支配人の姿が見えたので、やっぱり支配人が用意したらしい。

なお、テーブルに山盛りになっている料理を目撃した瞬間にはそれにアンが飛び出していった。完全に食欲の権化となっている。

「ただいまー。お土産は帝都饅頭とライドウお勧め大学芋スペシャルセツトだけでいいかな？」

「Hm m...: Let me just try...:」

とりあえずストレージから色々を買って来た帝都土産を取り出してみると、コミカルにやって来たダンテがそれを早速強奪し、カウンターの方へと持って行った。果たしてストロベリーサンデーが大好物の甘党の口に和菓子は——ダメだったらしい。一口食べてからがっかりとした表情を浮かべてストロベリーサンデーを頼んでいる。

ほんとあのイケオジはどうしようもねえなあ！ と、心の中で罵っている、知っている顔が出て来た。ステイヴンだ。奥の方にはイゴールとラヴェンツアの姿も見え、此方を見てから微笑むと、一礼してバーに内蔵されたベルベットコーナーへと戻っていった。帝都に居た時は世話になったし、挨拶しなきゃなあ、とその姿を見て思う。

「良く帰って来た、サマナー君。それで、私へのお土産は？」

「お前……」

「ダンテ君だけにお土産を渡すというのは不公平ではないかな？ ん？ 何か素材に出来そうな面白アイテムとかはないのかね？ 実は前回のブルーム作成以来、ちよつとしたレア素材で道具を作成するのにハマっていてね……」

「お爺ちゃん……」

本当に遠慮なくなつたなこいつ！ と思いつながら、何かないかなあ……と思いつ、そういえば黄龍をしまっていた封魔管が今では空つ

ぼになっていたな、と思いながらそれを取り出す。その説明をしながらステイヴンへと渡せば、ほほう、と声を零しながらそれを掲げていた。

「四神の長であるコウリユウを長年封じていた封魔管か……ふむふむ、これならコウリユウの魔晶石の代わりだけじゃなく、高純度のデビルソースの代わりにもなるな。よし、面白いものを作ろう。期待して待っていると良い」

そう言うとステイヴンは車椅子を作業室の方へと走らせた。本当にパワフルな老人だよなあ、とその姿が去っていく様子を眺めていると、

『まあ、ある種の永久戦犯なんだけどね』

『悪魔召喚プログラムの無差別配布は許しぢやならんじやろうなあ……』

『まあ、それはそれとしてサマナー。僕らもパーティーを楽しみたいんだけど?』

『む、良いのか? ならば我も人の姿に転じよう』

黄龍がやや召喚の軽さにびっくりしているが、仲魔とは近い関係をキープするサマナーとして、しっかり仲魔をねぎらう事になっているのだ。だからDDSから仲魔たちを召喚する。そこには新人の黄龍も混じっている。黄龍もどうやら、省エネモードとも呼ぶべき人型への変身が行えるらしい。その姿は着物を右側だけだけさせた、乱雑な黄金の髪を持つ筋肉質な肉体を持つ男の姿をしている。和風と中華風の装いが混じっている様な感じがする。

またイケメンが増えた。そう思いながら仲魔たちを解放する。ベルは既に食べ始めているアンのペースを落とさせようとしながら、鳩を捕獲して出汗用にそれを支配人に渡していた。ゴツドスープがその内回りそうだなあ、と思っていると、ナラシンハはカウンター席の方へと向かっていた。

よく見ればそこには、インド風の服装をした、褐色の老人が椅子に座っているのが見える。世界再生が進んだのに伴い、故郷の知り合いが顕現したのだろうか? また店の魔境度合いが上がっている。

いや、まあ、別に良いのだが。助かるし。

それはそれとして、自分も立食テーブルへと向かい、そこに並べられている数々の料理を眺めていると、横から皿を差し出された。

それを差し出してくれたのはラヴェンツァだった。

「これをどうぞ、リユージ様」

「あ、これはどうも……って別にそんな事をしてくれなくてもいいのに」

「いえ、これぐらいは劳わらせてください。肝心の戦いでは力にはなれませんので、これぐらいは手伝わせて貰わないと気が済まないのです」

良いのか、とイゴールへと視線を向けて確認すれば、イゴールはにやり、と笑うだけで何も言い返さない。いや、何か言えよこのデカ鼻、と心の中で罵るが、ちやほやされるのは純粹に嬉しいので、ラヴェンツァからお皿を受け取りつつ、テーブルの上の料理を何個かササッと皿の上へと移し、バー内の適当な壁を背にする様に皿の上の物を食べていく。

なんというか……本当、国境を選ばない内容だった。ローストビーフに焼き豆腐、豆とご飯を混ぜた料理に見た事の無いドレッシングのサラダとか。それらを少しずつフォークで突き刺して食べて行くが、どれもかなり美味しいのが悔しい。

悪魔王止めて料理王にでもなればいいのに。

「此度の再生で——」

ラヴェンツァが食べたり遊んだり料理されたりスダマに追いかけるられる事で忙しい仲魔たちや好き勝手やっている悪魔連中に代わり、状況を説明してくれるらしい。食べながら、その言葉に耳を傾ける。

「どうやら、日本全域が再生されたようです」

「日本全域、か」

「はい。現在ベルベットルームに集まった集合無意識によりますと、日本全域、南はオキナワから北はホツカイドウまでが再生された模様です。ただし、あくまでも日本という国、大地のみでその周りの海はまだのようです」

「うーむ、この中途半端……」

となるとオキナワつてアレ、海の存在しない未定義空間に浮かぶ島になってるのか？ 島民が発狂しそうだなあ、と思う。というか食料とか大丈夫なんだろうか、あちらへん？ だが海が再生していない、というのはちよつと驚きだった。ただ日本という大規模な土地が再生したというのは朗報だった。

「日本が……日本が、かあ」

「はい——貴方の努力で日本が救われました」

ピンとこない言葉だった。何せ、出来る範囲で行動していただけて、そこまでスケールの大きな話をされても困る。いや、つい最近宇宙生物を蒸発させてやったが、それはそれとしてブチギレた結果であり、日本を救うとか考えた訳ではなかった……。

だが、まあ、悪い気はしなかった。

「ですが大変なのは寧ろこれからかもしれません」

悪魔王の料理無駄に美味しい……チエフエイもそうだが、もしかして上位悪魔にとって料理とは必須スキルなのではないか？ という疑問を抱きつつある中で、ラヴェンツアの言葉に首をかしげてしまった。彼女の言う意味はちよつと解らなかった。

「土地が復活したのならインフラ回復するんじゃないの？」

「当然、ある程度の施設は復旧するでしょう。風力発電と原子力発電辺りは問題なく稼働するかと思います。ですがそれ以上に日本という土地では支えきれないレベルで人が帰還するのが問題になります」

「あー……」

そう言えば土地が復活すれば、消えた時にその土地に居た人間も同時に復活する、という話だった筈だ。というかそうやってヤタガラスとかが復活していた筈だ。確かに、考えてみればすぐわかる話だ。日本には自国内で食料を完全供給する事が出来ない。だから日本のみが再生した状態で長期間放置された場合、食料を食い潰して日本が潰れるだろうと予測できる。

「無論、それだけではありません。土地の回復に従い霊地の復活、悪魔の出現、そしてこの未曾有の危機に国津神や天津神が復活し、神州と

して日本を守る為に動き出すでしょう。場合によっては神話の再現すら発生するかもしれません——そう、帝都でのクラリオンの戦いの様な、そんな戦いが発生する可能性すらあります」

ベルベツトルームは各世界に存在する為、どうやらクラリオンの事もちゃんと知っていたらしい。しかしアレと同じ規模の戦いが発生するかもしれないという考えには恐怖しか覚えない。とはいえ、ラヴェンツァは頭を横に振る。

「最大の問題はそこではありません」

「と、言うത്？」

ラヴェンツァは言葉を答えた。

「カオス勢力とロウ勢力です。日本という土地が復活したのに従い、日本国内のロウ勢力とカオス勢力……つまりはメシア教とガイア寺院が国内という範囲に限り、復活します。リ्यूジ様があつた破戒僧と聖女は特別話の通じる二人でした。ですが日本支部にいる大半のロウとカオス勢力はそういう訳ではないので……」

「うわあ……」

つまり、抗争や内ゲバがこの状況で発生しかねないという可能性だった。まだ世界は再生し終わっていないのに、それでも争う可能性を保有しているカオスとロウ勢力。なんで静かに滅んでいてくれないのだろうか。

あ、蘇らせたの俺だった。

「——ですが、ご安心を」

ラヴェンツァが微笑み、そして此方の胸に手を当てた。それと共に一枚のカードを引き抜いた。それは運命を描いた車輪の内側に座り込む、ラヴェンツァが絵柄のカードだった。《The Wheel of Fortune》。《運命の輪》のカード。そのタロットカードを受け取った。

「人生という旅路を進む貴方よ。私は貴方の道を照らす為に存在します。貴方の混乱に満ちた道行きにささやかな光を与える為に存在します。ですから、どうか絶望しないでください。貴方は前と比べ、強くなりました。そしてこれからも強くなるでしょう」

ラヴェンツァが微笑んだ。

「私が全力で貴方が選ぶ道を照らすので——どうか、折れないように」

ローストビーフを噛み千切って飲み込みながら、小さく笑った。

「レベルが上がって、ワンパンで車をぶっ飛ばせるようになっても俺は強くなったって自惚れやしないさ。だからこんな情けない俺でも手伝ってくれるなら大歓迎さ」

《アナライズ》によって表示される、自分のレベルをまた、確認した。  
再界歩き リユージ Level 174

レベルを確認し、苦笑し、息を吐いた。ほんと、レベルばかり上がったけど——それでも別に、たいしたもんじゃない。これだけ強くなっても、心が強くなる訳じゃない。迷わない、迷えず飛び出せるだけの度胸と根性が、そして自分自身を信じられるだけの強さが欲しかった。

だからほんと、こんなレベルに意味はないんだ。

それでも、

「貴方の道<sup>うんめい</sup>を照らさせてください」

「ああ、これからも宜しくな……ラヴェンツァ」

気を抜きながら答え、天井を見上げながら思う。少し前に悪魔合体で仲魔のレベルを上げたばかりなのに、また合体でレベルを上げる必要があるだろう。強くなって、強くなって、最終的にどこに行きつくのだろうか？ もう既に大半の人間を超越するだけの、人類最上位の実力をこの時点で手に入れている。

だがそれでも、クラリオンやライドウ、ダンテ、その領域を見ればここはまだ、深淵の入り口にすら立っていないのだと解る。悪魔の世界、それこそ魔界すら含めた《本体》のレベルも込みとなれば、これでもまだまだの領域だ。

強さ——果たして、その果てはどこにあるのだろうか？

解らなくとも、それでも強くなる必要がある。

もう二度と、アンをあんな風に死なせない為に。自分の臆病と雑魚さ加減が原因で彼女を二度と死なせない為に。俺が強くなる理由な

んで、それだけで十分すぎた。そしてそれ以外の理由は大体どうでもいいかもしれない。だから、強くなろう。

いや、強くなる。

仲魔を合体変異させ、更に強くさせる。そして次の扉を見つける。次の舞台は街とかという規模ではない。

この日本という国だ。

国という規模から、扉を見つけ出さなくてはならない。だがとりあえず今は、それを忘れておく。

「古代インド流一発芸！ 創造神の毛根死滅波あ……！」

「あああああ、ワシの髪があ——！」

「主、主よ！ この青色の球体が追いかけて来るのを止めてくれないだろうか!?!」

「ここら、そんなに食べると太るわよ」

「運動……する……平気……！」

「語尾が強い、本気じゃぞ魔王！」

「反対側抑えて、無理やりでも止めるわよ」

「んー！ んー！ たべるー！」

「坊主のおごりでストロベリーサンデー追加で頼むぜ」

「ツケをいい加減払え。じゃないと煮込むぞ」

「ゴツド鳩煮込み雑炊……！」

「不味そう」

騒がしく、混沌としていて、けどそれが共通の目的と意識で統一されており——カオスとロウ、その双方が揃ってどんちゃん騒ぎの調和が発生している。きつと、真のニュートラルというのは中立を保つことではなく、ロウやカオス、

その双方がこんな風に、馬鹿をしながらも一緒に居られる場所こそが本物のニュートラルなのじゃないだろうか？

そんな居場所を彼女と過ごす為なら……頑張れる。そんな気がした。

## 神州混沌行脚 II

軽く全滅した。

途中からどこかの馬鹿が酒を投入したことが原因で地獄の様な光景が広がった。度数が数百を超越する神話製の酒。人類が飲む事を想定していないどころか毒を超えて一瞬で昇天する様な代物をどこかの馬鹿が投入したのが原因だ。人間であれば口に付けた瞬間その味の美味しさと真理に到達しそうな度数の強さに肉体そのものが蒸発するのだが、

幸い、超人レベルの人間ばかりじゃない。

一部悪魔が死亡し、自分もアンもその場でぶっ倒れるという結果になった。しかも翌日になってそれを持ち込んだ馬鹿はその事実を完全に隠蔽していた。ざけんな、店諸共吹っ飛ばしてやるぞ、という気概で半ギレ状態だった時、

犯人が見つかった。

神酒を持ち込んだ馬鹿は支配人がキッチンスタッフとして調達したディオニュソスだった。帝都に行っている間に料理酒を確保する為に雇った新しいキッチンスタッフだったらしいが、宴なら酒を持ち込まないといけないという純粋な善意から持っている酒の中で一番いい物——つまり生物にとってもそうでもない存在にとっても劇薬にしかならないもんを投入してくれたらしい。

死んでも即座に蘇る神話の時代は終わってるんだよクソが！ と、全員からリンチを受けて全裸で外に干されるディオニュソスを放置し、

翌日、

戦力増強の為の時間が来た。

今までの悪魔合体を担当していたのは悪魔王にして支配人のルシファーだった。だが合体技術そのものに関してはベルベツトルームの主、イゴールの方が遥か上にあるらしい。その代わり、純粋な悪魔に関する知識や組み合わせなどに関してはルシファーがトップに立っている。そしてそれらをサポートする合体用の施設や道具、これ



は数多くの邪教の館の技術や機器を見て、そして溢れ出す才能を保有するステイヴンが用意した。

つまりステイヴンによる最高の機器、支配人の知識による最高効率と最適解の合体チャート、それに付け加えて絶対に失敗しないイゴールによる合体。最高の体制で悪魔合体に挑戦する事が出来る様になっていた。今、地上で受けられる合体施設の中でも最高のサポート体制だとこれは言える。

なにせ話によれば、邪教の館と呼ばれる施設は必ずしもなんでもかんでも合体できるといふ訳ではないらしい。当然ながら悪魔の研究はかなり危険であり、邪教と呼ばれる領域に入るものだ。そして異なる悪魔の概念を完全に理解し、それを合体させるといふのは理解を超えたシステムでもある。それを完全にコントロールし、魔王などの種族を合体で生み出せる施設は、本当に稀有らしい。

それこそ、ステイヴンの知り合いとなるとヴィクトルと呼ばれる男ぐらいになるらしい。

その為、こうやって成功率100%で確実に狙った種族を強制事故でも介入で起こされない限りは発生せず、神話の英雄の化身や傾国の怪物を安定して変異させられる施設というのは、恐らく地上には存在しない。だからこの体制は非常にすさまじい状況だと表現できる。

それだけ、期待とする必要があるという事でもあるのだが。まあ、そこら辺はもうちょっと軽く考える事にした。余り深刻に考えていても仕方がない。今朝は昨晚作ったゴッド鳩雑炊があるので、それをカウンターにぶっ倒れて眠っているダントの横で朝ご飯に食べながら、悪魔合体に関する作戦会議を開いていた。

「俺の現在のレベルは74。つまりレベル74までの悪魔は使役できる」

「うん、だけど今なら僕だったらサマナーと絆で結ばれているし、10レベルぐらいは常時誤差として使役できる範囲だと思うよ。サマナーも覚えておくといい、真に絆で結ばれた仲魔とであれば契約は多少、範囲を拡大する事も可能だった」

「とはいえ、それはそれで維持コストと戦闘力の乖離で問題が出てく

るわ。ここは素直にフラットにサマナーのレベル未満で揃えるのが安全でしょうね」

「ふむ……となると妾もついに八尾までは一気に行けるかのう?」

「クラリオン戦には私も参加できなかったから多少レベルで遅れているわね……出来たらどこかでレベリングして、サマナーにレベルを追いつかせたい所ね。バアルのレベルは81、もうそろそろ私が豊穰神としての側面を取り戻す所まで来ているのよね……閣下、70まで私をイケニエ合体で強化できない?」

「難しい話だな。イケニエ合体はどうしても概念情報の汚染が激しい。真面目にバアルとして返り咲くつもりならイケニエ合体を利用しない方が良いだろう。ナラシンハとチェフエイの事に関しては問題は無い」

「こつちもこつちで最上位系のスキルカードはしつかりと描いたぜ。このレベルの悪魔とやりあう前提は必要だろう? 《メギドラオン》は」

悪魔絵師が《メギドラオン》のカードを用意し、支配人が合体する素材に《タル・カジャ》《スク・カジャ》《ラク・カジャ》《マカ・カジャ》持ちの悪魔を用意し、魔法を合体を通して融合させる事で、合体後に《突撃の狼煙》を覚えられる様にしようとしている。これをナラシンハが習得すれば、鳩の《ラストキャンディ》と合わせ素早く支援魔法との組み合わせで限界強化状態まで肉体を上昇させる事が出来るだろう。

「レベル70……となると僕が次に成れる化身は第七の化身ラーマになるね。まさかヴァーマナとパラシユラーマを飛ばして一気にそこまで駆け上がるなんてね……ああ、でも出来たら《ブラフマーストラ》を習得する踏み台用に幾つか射撃系のスキルが欲しいかな」

「妾も幾つか魔法やスキルを変異させたいから欲しい魔法があるんじゃないが」

「ふむ……少し待て、今合体ルートを再計算する。いや、待て。ここに習得する魔法やスキルを書いてくれ。私と絵師で分担して揃えよう」  
「うーん、《メギドラオン》《マハフレイダイン》《マハグライダイン》が

揃っているけどまだ融合変異させられそうにないか……なら《アギダイン》が欲しいかもしれないね、僕は」

酒のクリティカルヒットを喰らった腹に優しいゴツドパワーの籠った雑炊を食べながら、悪魔たちが真面目に会議しながら戦力をどうやって調整するのか、という話にちよくちよく口を挟みながら耳を傾けている。正直、話のほとんどは自分には理解不能な領域だ。

どうやら高位悪魔ともなると専用のスキルや魔法を習得するらしい。だがそれは普通に習得できる訳じゃなくて、類似の魔法やスキルを合体する時に覚えていた場合、それを融合させたり消費する事で自分が本来習得するスキルや能力へと変換させているらしい。特に化身と逸話の多いナラシンハ——というより本来のカルキはそこから辺が非常に多く、それらのスキルを取り戻す事を考えながら合体するとなるとかなり手間が必要となるらしい。

「ああ、でも私もうそろそろ《魔王の眼光》覚えられそうね」

「モトげきじょー……うっ」

アンがトラウマを刺激されたのかベルの一言でコミカルに倒れ込んだ。事故死の多いバーだなあ、と繰り返されるトラウマの記憶を放置しながら、なるべく理解出来る様に頑張り、耳を傾けながら覚えて行く。俺は連中のサマナーなのだから。運用する為にもちゃんと話を聞いて、そしてそれを理解しなきゃならないのだ。とはいえ、今回はレベルが大きく上がるという事もあって合体必須組のナラシンハとチェフエイはかなり入念に合体チャートを組んでいる。

その為にも悪魔絵師が先ほどからキャンバスを何個も消費してスキルカードを製造している。

ほんと、恵まれているなあ、というのが解る。

「主殿よ」

「ん？ コウリユウか」

振り向けば髪の毛にスダマが絡まっているコウリユウが横に座って来た。スダマを髪から外すと感謝されたので、解放されたスダマをハンドスピナー代わりに手の上で回転させて遊ぶ。こいつ、遊んでさえいけば満足するから安い奴だなあ、とスダマ先輩を評価する。今は

まだお休みという事で。それはそれとして、

「どうしたんだ？」

「いや、私も主殿の事情を聴いてしまつてな。ここが帝都の未来であり、そして崩壊した世界を救うという大業を成し遂げようとする途中だつたとはな」

腕を組みながらコウリユウはどこか、満足気というか納得というか……認める？ そんな感じの気配を見せていた。出会いは短く、共にクラリオン戦で出会つたばかりの仲魔だつたが——あの激戦を一緒に経験しただけあつて、戦友意識はお互いにあると思つている。

「というか主殿、か」

「疲弊したが故に力が落ちてサマナー以下となつてはな。それにやはり、大業を前に挑む者を主として持つのだ。ならば多少は敬意を向けるべきであらうと思つてな」

「いやいや、そこまで堅苦しくしなくていいんだよ？　うちは基本的に全体的に緩いし——ほら」

トラウマ直撃のアンはベルに介抱されているし、鳩は今日も鍋の中で出汁をストックされているし。アレがどう足掻いても真面目な悪魔、仲魔だとは表現し辛い。まあ、今日に限ってはナラシンハとチェフェイは自分の合体プランを詰める為に割と真面目な様子を見せているのが珍しいが。

「まあ、俺としては仲良く、そして力を貸してくれるだけでありがたすぎるんだけどな」

「それは些か、謙虚すぎるだろう」

コウリユウは良いか、と言葉を置く。

「主殿はあの帝都を守護するライドウと肩を並べた勇士だ。そして多くの命を守つた。それだけではなく、今もこうやって大業に挑んでいる。主殿がやろうとしている事は誰もが出来る様な事ではない。それは決して否定する事の出来ない事実だ。そして卑下する様な行いでもない」

コウリユウは頷き、言葉を続ける。

「貴殿は凄いのだ。ライドウの様に自身の行いを誇りに思え、とは言

わん。だが我らの主として、胸を張れる姿をしているという事を理解して欲しい。我も、自分より力があるのであれば誰にでも従うという訳ではない事を覚えておいてほしい」

「……ありがとう、コウリユウ。もうちよい、自分に自信を持つてみるよ」

「それが良いだろう」

満足そうに黄龍が頷くと、全裸で吊るされたディオニユスとは別に、臨時でキッチンに入っている新しい悪魔？ 神っぽい悪魔がキッチンの方からゴッド雑炊を黄龍の分も持つてきた。どうやら帝都時代は今よりもレベルが高かったこともある他、日常的に召喚できる環境でもなかったのですと封魔管の中で生活していただけあって、召喚されて自由に動き回れる状態を満喫しているらしい。楽しそうに雑炊に手を付ける姿を見て、話しかけるのをやめた。

その代わりに再び、合体チームへと耳を傾けつつ、会話に参加する。「自前で《貫通》は引つ張つて来れるから、習得する魔法やスキルは大體こんなもので僕は良いよ。ここまで来れば神器の方も漸く引き抜けるからね」

「妾もこれで問題ない。妾もこれで八尾、九尾が目前じゃな。本来の力のほとんどを漸く発揮できるといふもんじゃな。ふっふっふ、この時をずつと待つて居つたぞ！ 妾！ 人権復活！ 復活！ 復活じゃー！」

「何秒持つか賭ける？」

「賭けにならないだろ」

「酷い……」

目を放したら直ぐにコントし始める。チエフエイの耳を掴んで、その先端を親指の腹でフニフニする様に掴んでいると、蕩ける様な表情を浮かべてチエフエイがへなへたと全身から力を抜き、たれちえふえいへと退化した。

「で、合体とかどうにかなりそう？ 正直合体チャートとかちよつと理解を超えてるんだよね……」

その言葉に支配人はまあ、仕方あるまいと返答した。

「悪魔合体の業は数千数万数億を超える試行回数を経てに漸く理解を得られる邪教の術だ。そもそもここ以外では明確な継承法則とかさえも理解していないだろうしな……。私も、単純にこのアマラ宇宙で悪魔合体を無数に眺め続けてきた経験から良く理解しているのだからな」

「それが無きやまともに合体チャートは組めない、と」

「サマナー、悪魔そのものが仲魔にするのがハードルが高くて、機器もかなり未知の技術を必要とする。それでいて概念という要素が絡むゆえに物凄く不安定——データ、集まると思う？」

確かに、それは辛いわ、と思う。とはいえ、それをどうにかしてしまえるのがここにいる連中だと思おうと、地球最強の集団だとも表現できてしまうのかもしれない。こつそりと眠っているダンテを見れば、悪魔狩人 ダンテ Level 1105

何時の間にかレベル上がっているし。先日、どうやってレベルを上げたかを聞けばストロベリーサンデー食ってたら上がったとか殴りたくなる理由でレベル上げてるし。ここ、襲撃しようとしたら常時居ついている100レベル超えているダンテを突破しなくてはならないのだから、どう足掻いても難攻不落だよなあ……。と納得してしまう。

「まあ、合体に関しては後二日は時間が必要だな。チャートの変更に伴う素材の調達と……」

「カード作るのにちつとは時間が欲しいからな」

と、支配人と悪魔絵師が告げて来た。まあ、世界を渡る前とは軽く40近くレベルが違うのだから、事前の準備がある程度崩れてしまったのだろう。それでも二日もあればそれを取り戻してしまうというこの対応力には脱帽するしかないのだが。とはいえ、

「そうなるかと合体は延期か。……となるとレベリング？」

「そこがネックよね」

アンを背中に背負ったベルがびしり、と指先を向けて来る。格好は良いんだが——いや、やつぱ駄目だ。ツツコミどころしかない。一体どういうリアクションを見せればいいのかわからない。困った、ウ

チの仲魔が芸達者すぎて本当に困った。

「たぶん国内に70代で回れる異界なんて存在しないわよ」

「やっぱりかー」

現在のベルのレベルがクラリオン戦で気絶していたアンの護衛に回っていたので、完全な恩恵を受ける事が出来ずにレベル61になる。これでもかなり高い数値だが、それでもサマナーである自分と比べれば13レベルもの差がある。これは同レベル帯の相手と戦う時、戦力外になる可能性のあるレベル差だ。そして気絶していたアンは更にレベルが下がり、58程度しかレベルがない。チェフェイは戦闘非参加だったが合体でどうにでもなる。ナラシンハも合体でラーマへと化身を進めるから問題ない。鳩はそもそもレベル1から変化する予定がない。

スタマ先輩はテンションでレベルを上げるので無視する。

黄龍は現状、一番レベルの高い仲魔だから心配する必要がない。地味に魔法とスキルの構成も完成されていて、非常に強力な仲魔だ。

だからベルとアンのレベルを上げる必要がある。星命式四神虐殺マラソンで多少のレベルが上がったものの、完全に不十分だ。どこかでレベルが70代の悪魔が大量に存在する異界に突入して、虐殺するのが一番楽なのだろうが、

そんな、異界、存在する訳がない。

というか存在してて放置されてたら国が沈む。物理的に。

「レベルが上がれば上がる程、鍛錬する場所は限られてくるのよね。そして70代ともなれば準主神が出っ張ってくるようなレベルよ。80になれば地上で許される範囲で神話の主神が出没するクラスだわ。オーデインとか、あの辺のが出てくるレベルね」

「そんなのが大量出現する異界なんてやっぱないかあー」

溜息を吐きながら流石にそう都合よくはいかないか、と呟きながらダンテを見て、超例外存在の事に関しては忘れる。

「帝都に居た時のライドウはレベルが凄い高かったけど……アレは？」

「主殿、ライドウのあの強さは年月を重ねた上で才能と気合と根性に

よって自ら鍛錬し続けた結果だ」

「やつぱアイツ人間じゃねーわ」

体鍛え続けただけでレベルがあれだけ高くなるとかちよつと、いろんな意味で壊れていないだろうかアイツ？ 奴の事も例外リストの中にダンテと並んで叩き込んでやる事にする。だがそうなる就非常に困る。ベルとアンのレベルを上げておくことは重要な事なのだ。

「無論、次の《扉》の向こう側で強い悪魔を求めらるるのも全然アリだわ。どうせ、物語のある世界なんだから最終的にラスボス出て来るんだろうし。それ殴ればいいじゃない」

「圧倒的メタ読み」

だけどそれも確かに一つの選択肢ではあると思えた。今は合体可能な仲魔のレベルを合体で上げておき、アンとベルのレベル上げを一時的に放棄する。その上で扉の向こう側の世界、そのシナリオが進行している時に高位悪魔を殴り飛ばせばいいのだ。それが一番わかりやすい方法かもしれない。

だけどそれではこの世界に居る間はレベル不足になるかもしれない。ダンテを見れば解る様に、超越者の類は存在しているのだ、この世界は。その事を考えると早い段階でレベルをなるべく上げておきたいというのも事実だ。

それを考えて考慮した場合、やはりレベルアップしたいというのが事実だ。

最低でもベルとアンのレベルを70にまでは上げておきたい。

問題はそうやって相手する事の出来る悪魔が居ない事だろう。

まだまだ現代の悪魔業界に関する知識や知恵は足りていない。こうなると自分がまだまだ、この世界ではルーキーである事を思い出させられる。レベル70……流石に、自分では思いつかない話だ。どこか、都合の良い異界はない物かと考えるが、

「なんだ、そんな事を気にしているのか」

そんな事を言いながらキッチンの奥から褐色の老人が出て来た。昨日も見えていたが、まだ名前を知らない悪魔だ。ナラシンハの知り合いらしいので、ナラシンハへと視線を向ければ、



「ああ、彼はちよつと苦痛を我慢している生物が好きな創造神ブラフマーだよ」

「言い方ア！ ワシの紹介の仕方ア！ ちよつと苦行に耐え抜くその魂が好きただけだからア！」

「後見ての通り良いリアクションをしてくれる。時代が進めば進むほど影が薄くなつていく反動でキャラを濃くしたらしいよ。現状滑つてるけど」

「ワシの切ない事情暴露するの止めて。ほんと辛いから」

インド勢はキャラが濃い———というかキャラの濃くない奴がここにはいねえな、と再認識しつつ、ブラフマーに話を聞く。簡単そうにそう言うのであれば、解決策があるのだろうかよ、と。

その言葉にブラフマーが頷いた。

「簡単な話じゃよ。日本の国土復活に従い、国産みの逸話が疑似的にじゃが再現されている。それに従い今までは雲隠れしていた数々の神々も戻ってきておる。その内、レベルの高い連中殺せばええじゃろ。スサノオとか、ツクヨミ、アマテラスとか狙い目じゃろうな」

「あの、それ国家守護の主神级なんですけど」

なんか問題ある？ という視線を向けるブラフマーをナラシンハが厨房に隔離した。流石インド、発想が頭おかしい。だけどアイデア自体は悪くはなかったと思う。

「悪神や邪神、悪さをしようとしている連中なら殴り殺しても問題なさそうだな」

「そうね……となるとアマツミカボシやマガツヒノカミ辺りかしら……」

「ヤマタノオロチ辺りも狙えそうではあるな」

こう見ると日本が悪魔の無法地帯化しているからこそ、見つけれられる相手がいる……という感じだろうか？

これはちよつとした光明が見えてきたかもしれない。

「ナラシンハとチェフエイの合体を終わらせたら悪魔協会で仕事を探しつつ、情報収集……という感じになるかな、これは？」

その言葉に支配人が頷いた。

「それが一番だろう。ただし、常にガイアとメシアの動向に注意しておく必要があるだろうが。連中の事だ、放っておくという選択はまずないだろう。ヤタガラスからもスカウトが来るだろうし、その事も考えておくと良い」

支配人の言葉にうーん、と唸る。予想外に大変な帰還になってしまった。なんだかんだでこの日本全域から次の扉を見つけなくてはならないし。とはいえ、扉の事自体はそこまで心配していない。

なんとというか——時が来たら見つかる。

吸い寄せられる様な、導かれる様な、世界がそう求めている様な感じがするのだ。だからそこまで必死に探さなくても見つかる様な感じがする。とはいえ、アンテナは常に張っておいた方が良いでしょうが。

「まあ、こんなもんか」

コントや茶番を忘れないけど結構真面目に話していたなあ、と思いつつ、なんだかんだで茶番やコントに乗っかる事を覚えてしまった。今が楽しいなあ、と思いつつながら小さく息を吐いた。

世界はボロボロで大変なのに。

なんでこーも、今が楽しいのだろうか……。

## 神州混沌行脚 Ⅲ

「待たせたのお、サマナー。これで妾も《八尾》チエフエイじゃ。妾の最後の姿は《九尾》になる。そうなれば妾のレベル限界は豊穰神となった蠅王に近いものがあるじゃろう——だがそれまでは傾国という概念の本当の意味、見せてしんぜよう」

「《理想王》ラーマ、ここに第七の化身として顕現！ あらゆる魔を屠る理想にして至高の王の力。これは大切な人を取り戻す為に化身である運命に抗い続けた王の力でもある。その理想に燃えた力、僕は君の為に振るおう」

会議から二日後、《八尾》チエフエイと《理想王》ラーマの合体が完了した。大幅なレベルアップである為、かなり悩んだが、それでも悪魔絵師と支配人がソーマを一気飲みする事でオーバードーズしつつ頑張った結果、合体が完了した。これにより上位と呼べるレベルの悪魔へと二体が変異した。もはや最初の頃のネタの様な所はなく、強者という言葉に相応しいだけの能力を兼ね備えた悪魔へとパワーアップしていた。

「くっくっくっく、これで妾も八尾。今までは振るう事が出来なかった貪欲の権能も漸く稼働が可能となったわ。もはや妾に傷をつける事が出来るのは主神格や無我に精神性を昇華できる相手だけじゃ」

ロリボディを解除しているチエフエイの姿は大きく変貌していた。文様の刻まれた蒼着物がはだけた狐の耳と尻尾を生やした獣人女性の姿をしていた。乳が零れそうな恰好は艶やかで、見るものを意識しなくても勝手に魅了するだろう。それだけではなく怪しげな雰囲気は強制的に彼女へと視線を集める。その背部から生える八つの尻尾は彼女の力の象徴でもあり、格の高さを象徴している。もはや彼女が歩くだけで国は亡びるであろうレベルまで成長していた。彼女が歩けば男女関係なく全ての知性ある生物が彼女にその欲望を刺激され、貪欲にあらゆるものを求めて暴走する。

そして、そのまま国と共に亡びる。

そしてそれを戦闘能力にもしつかりと今のチエフエイはちゃんと

反映できている。專業デバッファーであったチエフエイの能力は更に強化され、戦闘に出現するだけでCHARM、STUNされ、彼女と同じ空間で時間を過ごすだけで更にそれは悪化していく。その上で《ランダムイザ》を継承、《ナーバスクラック》を習得して遠距離からの神経破壊魔法を習得したので戦闘能力を獲得し、このレベルの悪魔の標準とも言える万能魔法、その最高位の《メギドラオン》をも習得した。

ネタでも何でもなく、傲慢に振る舞う事が許されるだけの実力と能力を兼ね備えた悪魔となっていた。その耐性も上位の悪魔に相応しいものとして四属性耐性、精神神経吸収に加えて破魔と呪殺、その両方を反射する事が可能となった。つまり状態異常と即死系統に関しては《貫通》スキルを持ち込んでもチエフエイの耐性を突破できなくなったのだ。

だが凶悪な能力をしているのは決して、チエフエイだけではない。ラーマもラーマであらゆる能力が凶悪だった。

まずはラーマの合体はストレートに合体した訳ではなく、化身を経由する必要があったためにヴァーマナ、そしてパラシユラーマを経由してのラーマへの合体だった。これはそれぞれの化身の能力を回収する為だ。そうやって経由し、継承したラーマのスキルははつきり言えば化け物と表現できるレベルの領域に到達していた——超純アタッカーと呼べる役割に相応しい戦闘力がDDSで確認するだけで解る。

まずは広範囲を殲滅できる《マハグライダイン》と《マハフレイダイン》、これに《突撃の狼煙》を習得した事で素早く戦闘に登場しながら各種能力を強化できる。これだけを見れば殲滅戦が得意な能力の様に思えるが、それに加え様々な物理系統スキルをパラシユラーマ経由で変異させている。《テスバウンド》、《刹那五月雨撃ち》、《奥義一閃》等を融合変異させる事でそれを特有の奥義へと変異させた。

習得したのは《ブラフマーストラ》に《神器招来》。あらゆる耐性を無視した絶対貫通能力の一撃を放つことが出来る様になったり、また化身が人の姿へと突入した事もあり、それぞれの現役時代に振るって

いたメインウエポンである神器を召喚し、使う事が出来る様にもなった。これによるパラシユラーマの《パラシユ・ルドラ》やラーマの武器である《サルンガ》を使うことが出来、相手に合わせて武器属性を切り替えて戦う器用さが生まれた。

同レベル帯の中でも数歩抜きん出た、戦闘力に全てを捧げたような能力をしている。ヴァーマナの権能で見える範囲であればどこでも移動可能となり、パラシユラーマの権能で数多くの術を習得、そしてラーマの権能で魔の存在に対して極限の強さを見せる様になった。

間違はなくトップクラスの悪魔。格上相手だろうと相性次第では問答無用でぶち殺せるだけの力を秘めた化身の名に相応しい怪物的強さを見せる悪魔へとランクアップしていた。

ただ、一つ、問題は、

「お前その恰好どうした」

「ん？ 似合っていないかな？」

「似合ってるから困惑してんだよおめー」

当然の様にナラシンハからラーマになった所でその姿は変わっていた。まず最初に、獣人ではなく完全な人間の姿を取る様に變化している。その上で髪の毛は燃え上がる様な炎にメツシユで軽く金の線が混じった物をローのツインテールでまとめ、赤と金のサリーを着ている。つまりはインドの女性用民族衣装だ。女性用の服装とは少々おかしくないか？ と思うだろう、問題ないのだ。

なにせこいつ、今では立派な女の体をしているからだ。体のライン、控えめな胸のふくらみ、そして股間部の何もなさ、それは間違いなく女性体である事を証明する姿だった。いや、見た目は褐色が非常に薄い美少女の姿をしているが、

「どうした、王様。歴史の教科書が間違ってたか」

「いや、あつてるけど最終的に此方の方が都合良さそうだからね。早めに整えておいただけだよ」

その言葉の意味はまるで理解出来なかった。ただ理解できたのはパーティーの男子枠がこれでついに黄龍だけになってしまった、という事実だった。いや、見た目美少女は嬉しいんだが、それはそれとし

て男子が増えてくれないとちよつと居づらいというか……別に、ハーレムパーティーは求めている訳でもないのだから。

黄龍ともつと仲良くしよう。そうしようと心に硬く決意を固めた。まあ、性別が変わったから対応を変えるって訳じゃないし。そこまで大きな問題じゃない。

「なんじやろう。この貧乳に負けただって感じの妾の敗北感」

「後出しの方がインパクトが強い影響だな」

「つまり僕が正義という事さ！」

「輝くな鬱陶しい」

ぴかー、つと輝いて自己主張する馬鹿とインパクトで敗北した為にロリ化した敗北狐をDDS内へと叩き込んだ。他の仲魔に関しては既にDDSに格納しているので問題はない。後はアンもアンで視線を向ければサムズアップを向けて来る。どうやら出かける準備は万端だったようだ。だから装備を固めていく。

インナーはテトラジャマー。防具は月光館学園制服・改。コンバットブーツを装着する。COMPと繋がっている投影ディスプレイの片眼鏡。武器が滑らない様にする為の薄革の手袋。それに加え上から全身を隠す様にライドウの外套・スぺア。

これが今の自分の防具の全てだ。武器の類は全部COMPの電子ストレージに保管してある為、携帯する必要がない。その事を考えると他よりは楽かなあ、と思える。現在の保有武装は《ルーチェ&オンブラ》、《ガンナーズブルーム》、そして《十束剣》になる。メインウェポンをL&Oが担当している。ブルームは局地的な最大火力を出す時にスタマを装填したり、狙撃に使用する。十束剣は実はまだ、使うチャンスが来てないので使えてはいない。だが強い退魔性能を保有した神剣である為、これを使えば魔の属性を保有する存在に大きなダメージを与えられるだろう。

大半の悪魔に対する特攻を保有する神武器ではないだろうか……？　あまりに特攻範囲されるとバランス崩れている扱いされているが、そもそも現実がクソゲー化しているので、これぐらいのバランスブレイク性能なのが丁度良い。まあ、性能に関してはこの中で一番バ

グっていると思える。実地で使用してみるしかないだろう。

「さて、仲魔も揃ったし、そろそろ——」

「おおっと、待ち給え。忘れものだよ」

そう言うのとステイヴンが工房に繋がる扉から出て来た。徹夜したのか目の下には隈が浮かんでいるものの、非常に満足げな表情を浮かべている。工房から出て来たステイヴンは柄しか存在しない……おそらくは刀？ をこちらへと投げ渡してきた。それを受け取り、軽く見る。どうやら *Mag* を注ぎ込めばギミックが稼働しそうだ。

「これは——」

「うむ、黄龍を封じていた封魔管を素材に使った光刀だよ。概念的に一番相性の良い武器が刀だったからね。ただ、普通に刀として加工するなら刀鍛冶や二流にも出来る。だから注いだ *Mag* で再生可能な光刀にしたよ。出力次第では伸ばす事や強度を増す事も出来る」

だがそれだけではないぞ、とステイヴンが解説する。そしてダンテがカウンターから此方へと妖しい視線を向けている。あ、駄目だぞ。これ最初に遊ぶの俺だぞ。俺のだからな！ 素早く隠そうとするが、カウンターから立ち上がったダンテが強奪しに来る。駄目だぞ、俺の玩具だぞ！

「黄龍といえば龍脈、即ち日本という国を流れる大地の流れの化身でもある。即ち地震の化身という側面を持っている。黄金、光、風、雷——それだけではありきたりだろう？ だから私は思ったのだよ。

振るう度に空間を砕き、地震を空に生み出す刀なんて面白くないか!? とね……」

あこら、やめろ、それ十束剣なお！ 僕のお！ と抵抗してもダンテに両方共奪われてしまった。というかどうやってストレージから十束剣強奪したこのイケオジ。イケオジだからと言ってなんでも許されると思うなよ！ と思ったが、あっさりと鎮圧されてしまう。そのままダンテが十束剣と黄龍刀で変則二刀流で遊び始めてしまった。それを体育座りしながら眺める。

「Whirl Wind!」

「そう、この刀は斬るのではない、粉碎するのだよ！ 地震の力を取り出してそれを付与したこの刀は振るつた箇所に地震を発生、耐性を破壊しながら光と雷を流し込めるのだ！ 君の悪魔のベルゼブブは雷のスペンシャリストだ、連携すれば間違いないく——」

「ふんっ！ はっ！ There!」

体育座りしながらステイヴンがゴキゲンそうに解説する中でダントが玩具で一番乗りする様子を眺めている。流石超越者だけあって、武器を使うのが巧みだ。見ているだけで勉強になる。黄龍刀の居合なんて鞘からほとんど抜いたのが見えないのに空間にひび割れだけを残している。

そしてそのまま、それが店内で爆発を起こして色々と吹っ飛ばした。

「ダアントエ——！」

「はっはっは、坊主、これは返すよ。それじゃ、俺は逃げるぜ」

十束剣と黄龍刀を返して貰う。投げ渡されたそれを体育座りしたまま受け取りつつ、キレた支配人と創造神が店の外へと飛び出したダントをフライパン片手に追いかける姿をしばらく、無言で眺める。ステイヴンはそれに一切頓着する事もなく、楽しそうに解説を続けている。頭、大丈夫だろうかこのお爺ちゃん。ストレンジの中に十束剣と黄龍刀を格納する。

また、近接武器が増えてしまった……才能に《サクセサー》と《ガンスリンガー》しかないから、完全に武器で戦えるという訳じゃないから辛い。

『まあ、任せてよサマナー。僕が君を最低で一流程度の剣士には育てるから、今の僕はパラシユラーマを経由したし、問題なく君の才能以上の実力を引き出す鍛錬を行えるさ』

『最低ラインが一流とかいうインフレ感覚』

『やっぱり神話のスケールが違うのって概念存在としては卑怯よねえ』

「せやな」

仲魔たちの何時も通りの会話に答えながら横に同じように座り込



んでいるアンを見た。彼女も此方を見返し、首を傾げた。

「でかけ……る？」

「ここに居ても邪魔になりそうだし、行こうか」

準備は整った——おでかけの時間だ。

◆

相変わらず賑やかなバーから出たところでシブヤに出て来た。そこから移動して向かう場所はシンジユクだ。少なくともこの世界を出る前に悪魔協会が存在していた場所はそこだったからだ。前は安全なルートを通って移動していたが、もはやその心配をする必要はない。ブルームを取り出して二人乗り、そこで空を飛んで一直線にシブヤからシンジユクへと飛行した。

途中、出て来るケライノーやハーピーなどの悪魔は攻撃しなくても、そのまま突進すれば簡単に轢き殺せる。これがレベルによって増えた能力、その絶対差と言える結果だった。前は支援しか出来なかったのに……と、Magの霧になって吹っ飛ばされた悪魔どもに視線を向けるまでもなくシブヤからシンジユクへの飛翔を終えて、空からシンジユクを見下ろした。

世界再生と復興の影響か、電気がシンジユクには通っていた。

シンジユク駅だけではなく、大規模に結界を張りなおした影響かルミネやキノクニヤと言った大型店舗にも電気が通っており、その中を漁っている人の姿が窓越しに見えた。どうやら結界によって悪魔を追い出す事が出来たので、一般人の生存圏が広がっている様だった。軽くアナライズしてみればレベルは1、2程度。少しだけレベルが上がっている様に見える——過酷な環境で生活している為に、悪魔死亡時のMagを受けて多少は強くなっているのだろうか？

そんな事を考えながら着地する。ブルームをストレージの中へと放り込めば、

「そー！ 待てー！」

と、シンジユクに着地した時点で声をかけられた。振り返れば自衛

隊の隊員が銃を装備した状態で走り寄って来た。

「駄目じゃないか、君。なるべく入り口から侵入してくれなきゃ」

「あ、そういうルールが出来たのか」

俺が居ない間に色々とルールも追加されていたらしい。まあ、社会が少しずつ回復してきている影響でもあるのだろう。そう思いながら困ったな、と軽く頭を搔く。だがそれを見て自衛隊の男は少し待て、と言葉を置き、

「もしかして離れていたのかい？」

「ちよいと高位悪魔との戦闘の為に遠征を」

「成程……アナライズさせて貰うけどいいかな？」

「俺だけなら」

アプリの《アナライズジャマー》を自分の分だけ解除し、それから自衛隊の隊員にアナライズを許した。直後、化け物を見る様な視線を向けられ、それを確認しながらジャマーを再起動する。ああ、まあ、確かに70代ともなれば人類の中でも最上位に位置するだけの実力の持ち主だから、そういう視線にもなるか、と納得する。

ただ、ちよつとだけ、悲しかった。

「え、えーと……シンジユクにはどのようなご用件で？」

「高位悪魔の情報を求めて悪魔協会にちよつとね……場所、変わった？」

「あ、はい。現在は場所を変えて旧タカシマヤの一階を完全改装して悪魔協会シンジユク支部にしてあります」

「そうか、どうも」

「い、いえ、どうぞ、お進みください」

恐縮されている、というかどこか怖がられている。レベルがバレるとこんなもんか、と思いき歩き出すと、アンに軽く背中を叩かれ、腕を組んできた。

「い、ハ？」

「……おう」

まあ、俺だつていきなり高レベルを前にしたら心が折れるし、当然と言えば当然の対応だった。それを気にしないダンテやライドウが

やっぱり、凄いのだろうと思う。そして黄龍が言っていた様に、俺もいい加減強く、そして凄いなだという自覚を持たなきゃいけないのだからと思う。

少なくとも、そこら辺に居る屑でも雑魚でもないのだ。

自分で出来る事をちゃんと、自覚しなければならぬ。

まあ、それはそれとして、アンと腕を組んで上機嫌なままタカシマヤへと向かう。途中、通り過ぎる人々が視線を向けてきて恥ずかしくなるから引つ込めたくなるも、アンがしつかりと腕を絡めてロツクしている為、どう足掻いても逃げられない。力づくでそれを解除するのにも紳士的ではないし、腕に感じるアンの体の柔らかさに少しだけ悩まされつつ、

シンジユクの道路を歩いてタカシマヤへと到着した。大半の建造物は低位悪魔の出現とその略奪や被害によつて壊れていたり崩壊している所が多い。だがこのタカシマヤビルはどうかやら修復されているようで、所々修復の跡などが確認できる。ほお、と呟きながら眺めれば、それなりの人数が入り込んでいるのが見えた。

デビルバスター、増えているのだろうか？ そんな事を考えながら協会内部へと進んだ。

内装も大幅に塗り替えられている。黒をベースに、赤いカーペットが敷き詰められたシックな雰囲気が協会内には出来上がっており、壁の方には仕事が増え出されている他、サマナー用のターミナル等も設置されているが見える。

前見た時よりも人が増えており、職員も増えているのが見える。レベルは——全体的に低い。レベル8前後のデビルバスターが見える範囲に居るほとんどの様に思える。ただ野良で存在している悪魔のほとんどがガキやゾンビである事を考えれば、戦力としては十分な範囲だ。

……女<sup>アン</sup>を連れてくるからか、少々視線が突き刺さる。

さつさと中の方へと進んでしまおうとすれば、

「お、しばらく顔を出してないから死んだと思っただじゃねえか」  
声をかけて来る姿があった。その姿には見覚えがあった。

「おっさん、最初に説明してくれた……」

「おう、覚えてたか。しかもかなり強くなってるなお前……驚いたぜ。どっかで修行でもしてきたのか？」

「まあ、ちよつと世界を救つてた」

その言葉に初めてシンジユクを訪れた時、説明してくれたサマナーが爆笑した。この人はアナライズなしでもレベルが上がったって解つたし、それに怪物を見る様な目は向けなかった。それが少し、嬉しい。

「はは、世界を救つてたか。楽しそうにしてるなら良かった。それで……説明はいるか？」

「しばらく離れてて勝手にわからないから説明してくれると助かる」

「よっし、来た」

なんか、このサマナー……人に説明する事を生きがいとしているのだろうか？ でもネトゲとかで妙に親切に教えてくれる人とかいるよなあ、と思う。

「ここはシンジユク駅に展開していた悪魔協会を地上の安全が確保できたから移設した所だ。現在じゃトウキョウ最大の悪魔協会施設だ。一応《邪教の館》も併設されているからサマナーはマッカを払えば悪魔合体する事も出来るぜ」

「意外と発展してるな……」

「まあ、生き残ったサマナーやバスターで資金提供したからな。組織として色々と管理してる所のあるなしで俺達の生存率は大きく変わるからな。親切な技術者がターミナルを寄付してくれたおかげで悪魔協会に来れば悪魔のデータを確認する事が出来るしな。これ《DD S》って言うんだが、知ってるか？ 俺達が出会った悪魔のデータとかのデータをマメに入力しておけばいつでもここから皆が入力したデータを確認できるぞ。《アナライズ》を使っていれば更に詳細なデータが入力できる」

しかも、報酬も出る、とサマナーは円を指で作った。これ、絶対にステイヴンがデータ収集用に設置した奴だな……と理解してしまった。まあ、この崩壊世界、悪魔相手にマッカ交渉する必要がある

だろうから、報酬が出るのは純粹にイイ話……の筈だ。  
たぶん。

「ここじゃトウキョウを中心とした関東の情報が集まってくるようになってる。あっちは個人依頼。んであっちが組織絡みの依頼だ。あそこに行けばデビルソースとかを持っている場合、換金したり加工を依頼できる」

思っていたよりもかなり本格的に組織として稼働しているな、と思えた。まあ、生き残る為に頑張ったと思えばある意味順当なのかもしれないが。タカシマヤも、こんな崩壊世界では店舗だけ残っていても意味はないし、有効活用と言える。

「ちなみに昨日入って来たホットニュースによると関西はキョウト、ガイア本部はシコクでキユウシユウが勢力圏、トウホクはメシア勢力圏、ホツカイドウは試される地になったとか」

「試される地」

「なんかロシア系の悪魔が乗り込んで来たって話で本州と断絶しちまったらしくてな……」

「成程」

滅殺リスト最上位に叩き込んでおく。よっしゃ、見つけ次第ぶっ殺してやる。

しかし日本再生からたつた二日でこれほどまでに素早く情報が回ってくるとは流石人類の生き残り、生き足掻く事に関しては本当に優秀だと思う。もう既に地方と連絡を取って情報収集してるのか、と思う。

「と、そうそう。あそこにいる連中は情報屋だ。マツカを出せば調べきたりするから、詳しい話を調べたい場合は連中にマツカを出しておけ。今のお前のレベルなら舐められる事もないだろう……まあ、それぐらいか？」

「久しぶりのトウキョウで色々と勝手が違って困ってたから助かる」  
「気にするな、この業界は基本的に助け合わないと死ぬからな」

それは死ぬほど痛感してる。帝都、アレマジで死ぬかと思った。ライドウの協力がなかったら、今頃ここに居ないだろうと確信してい

る。ライドウ、マジでライドウ。この日本にも来てくれないかなあ、と切実に願っている。無敵の前転で危機を乗り越えて欲しい。

「で、なんか探しもんか？ 今は悪魔業界最高の好景気だぞ」

「世界が滅んだら好景気になる業界とかもう色んな意味で終わってるだろ……」

「まあ、存在しない方が間違いなく世界の為になるから……」

クラリオンの笑顔が空に浮かぶ。星を吸い尽くし食物連鎖の最上位に立とうとした絶対捕食者。その姿を思い出し、サムズアップを触手で作っている姿を想像し、間違いなく悪魔はこの世から消えた方が綺麗になるよな、と、

納得しようとして、

「ああ、いや」

頭を横に振る。

「悪魔の世界が無ければ彼女に会えなかったしな。無かったらよかった、っては言えないわ」

「は、ははは……成程、確かにそれは否定出来ねえな」

アンが腕をぎゅっと絡めて来る。幸せだけど、滅茶苦茶にやにやされているから、止めて欲しい。人前では出来るだけ止めて欲しい。ほら、人の居ない所なら問題ないから。心の中でそう叫んでも口にしなれば止められない。そしてそれを口に出す勇気が俺にはなかった。

なのでガン無視して話を進める。

「取り合えず、一部の仲魔のレベルが低いから高レベル悪魔の相手を探してるんだ。無駄になるかもしれないし聞きたいんだが……高レベル異界って出現してる？ 出来たら70代がいいんだけど」

「あつたら日本からシンジユク消えてる」

「ですよー」

「だけどそうか、とサマナーが呟いた。

「そういうレベルか……確かにそれだけレベルが上がるとレベルの低い仲魔をレベリングするのも大変になるな……今発見されている異界の中でも最高レベルのは50代の奴だしな……」

求めていた物ではないが、それでも結構高レベルの異界が出現して

いたらしい。シンジユクの安全を確保するついでにサクツと滅ぼしてきた方がいいだろうか？ ああ、でもこの世界でもそう言えばヤタガラスが普通に活動していた筈だ。それに、日本全域が復活したのだ、おそらくはライドウも復活している筈だ、この世界のライドウが。同じシステムがあれば、という話前提になるが。

それでもライドウの存在は頼りになるから居てくれないかな、と願っている。

「ん？」

と、そこでサマナーが首を傾げた。

「……アレ、お前の仲間違って横の嬢ちゃんでもいいんだよな？」

「ああ、後一人居るけど」

「人型で、お前の方がレベルが高いんだらう？」

「結構」

ベルはほぼ10レベル差、アンは20近い。結構レベルの差が出来てしまっている。だがサマナーの話を聞く感じ、

「高位悪魔を倒す以外にもなんか、方法あるのか？」

「あー……どうすつかなあ……」

此方の問いに物凄く悩むような表情を浮かべ、此方とアンを見てから、うわあ、と声を零しながら顔を抑え込み、そして物凄い苦悩するような表情を浮かべている。その余りの苦しそうな様子に思わず引く。

そのまま数秒間、固まる姿を見て、やや引きつつ、

「いや、その、そんなに悩むなら別に……」

「いや、いや、別に危険って訳でもないんだ……」

だけどな、とサマナーが腕を組む。

「この明らかに青春の気配がする推しの組み合わせに効率という概念で今の形を壊していいのかという内なる欲望とオタクとしての理性がしのぎを削っていてな……！」

「何言ってるんだこいつ」

理解不能っぷりに困惑していると、ちよいちよい、とサマナーが手招きして来る。こつちに来い、と自分を示している。なのでアンを見

て、解放して貰ってからサマナーの方へと近づくと、肩に腕を組まれ、体を引き寄せられ、そして声を小さく、スクラムを組む様に、アンに聞こえない様に喋り出す。

「いいか、俺がこれをお前に教えるのは苦悩の決断だ。考えたがレベル70代の悪魔なんて見つけられそうにないし、見つけた時点で俺が蒸発しそうだからな」

「お、おう」

「レベルアップのプロセス、知ってるか？」

「そりゃあ……」

レベルアップは体内にMagを取り込み、それを肉体に馴染ませる事で肉体が一つの上限を超える。それがレベルアップ現象であり、肉体がより高次の存在へと近づくのだ。純粹で不思議なエネルギーであるMagにはこれを可能とする力がある。その為、より多くのMagを取り込み、それを馴染ませる事がレベルアップでは重要だ。

だけど超大量のMagを一気に取り込むことで急速にレベルアップする事も出来る。それがクラリオンの時の出来事だ。

「だからレベルアップするには厳密に言えば悪魔と戦う以外の方法もある。Magを供給してやればいいんだ、人間から悪魔へと。だからメシアは信仰という形を利用する。人間は感情や信仰とかからMagを生み出せる生物だからな。それを奉納させる事で自身を維持したり、強化したりできるんだよ」

その話を聞いて、思い出してしまった。

「……あつ、あつ、あつ」

両手で顔を覆いながら悪魔と一切戦わずにベルとアンのレベルを自分よりも少し低い程度に上げる方法に気付いてしまったのだ。なので想像してしまった事に両手で顔を覆い、そして黙り込んでしまった。

「ああ……気付いちまったあ……」

うん、そうだ。そう言えばナカノのガイア寺院でやってたじゃん、連中……と、思い出してしまった。

「性交渉を通してMagって供給できるから、レベル差が大きければ



それで十分、レベル上げる事が出来るんだよ……」

サマナーの決定的な言葉に返答が出来ない。無理、無理無理無理。絶対に無理。セックスでMag供給してレベルアップとか絶対無理。赤くなっているであろう顔を自覚し、両手で顔を覆いつつ、

「マジ無理……ヘルプ……!」

「野郎共、青春相談室始めるぞ……!」

助けを求めた。

そしてそれに応じてやってくる。

「なんだって、いい感じの雰囲気を出しているのに踏み出せないヘタレ系男子だと？俺がアドバイスしてやろう……!」

「いいや、ここはサキュバスを相手に百戦錬磨の俺が真のアドバイスをしてやろう」

「死兆石踏んでマザハにターゲットされてしまった俺がお前の運命を救おう」

「面白そうだから混ぜて」

馬鹿どもが助けにやってくる——!」

## 神州混沌行脚 IV

「ふんっ！」

そうやって窓から男は飛び出した。その後、部屋に赤い服装の女が黄金の器を片手に飛び込んできたが、窓の方を見て窓から飛び出して行く姿を見た。その光景を会議室で集まった全員で見送ってからバン、と手をテーブルに叩きつける音がした。

「俺は思う——こう、甘酸っぱい雰囲気でつかず離れずしている男女の関係って尊い……」

「解る……」

「尊い……」

「静かに見守りたい……見守りたくない？」

「見守りたい」

「だけど時は残酷だ。ずっとそのままの関係を続けることは双方の心にしんどさがある。もっと踏み込みたい……だけど踏み込んで関係を変える事が怖い……だから踏み出せない。その右往左往している姿が凄く青春しててしんどい。俺の心にクリーンヒット。見守りたい。そしてそつと背中を押してあげたい……ならない？ ならない？」

「超なる」

「殺せよ……」

両手で顔を抑えて全力で椅子の上で体を丸め、消えたくても消えられない状況に羞恥で死にそうだった。というかいつそ死にたい。今なら死んでも特にストレスを欠片も感じない気がした。というか絶対感じない。だからお願い、殺して……殺して……そう呟くも、会議室に集まった馬鹿サマナーや馬鹿バスター、そして馬鹿職員は真面目な表情で腕を組みながら、人の青春をどうやって導くか話し合っていた。というかなんで職員まで混ぜてるのだろうか？

「これは由々しき事態だ……」

「由々しき事態なのはお前らの頭だよ」

シンジユク駅の頃、受付をやっていた男が腕を組みながら深刻そう

に言えば、周りの馬鹿どもがその言葉に深く頷いていた。お前らちやんと脳味噌使って考えている？

『主殿よ、大丈夫か？ 正気が削れる音しかしないが』

大丈夫じゃない。なお、現在女人禁制ルール発動中である為、DD Sには黄龍以外の仲魔が居ない。全員アンと一緒に待つてもらっている。そこまでする程のイベントなのだろうか、これって……？ 疑問しか存在しない。

「私はここに風俗で予行演習する事を提案する」

馬鹿なの一人がそう言うと、天井が開いて先ほど窓から消えた筈の男が戻って来た。そしてそのまま、風俗案を出した奴の顔面を殴り飛ばした。

「馬鹿野郎……！ 童貞だって人生に一度だろうか！ 確かに女性の処女の方が一般的には価値が高く見える。だが処女性だけではなく、童貞もまたこの業界では神秘性のある概念だろう！ それを風俗という場で失っては幼馴染として育ててきた二人の関係への裏切りだろうか」

「設定を捏造するな」

「ごめん……俺の童貞ヤギで失ったから……」

「レベルが高いわ。コメントに困るんだよ……！」

駄目だ、ほんとどうしよう、正気を失いそうなのにどう足掻いても逃げ出せる気がしない。何故だろうか、逃げてはならないという声が自分の内側から聞こえる気がするのだ……。

『もしやそれは幻聴なのでは？』

鳩の神託の可能性もあるので、後で鳩は締めしておこう。それはそれとして、この混沌としたSNSにいそうなオタクサマナー、オタクバスター集団をどうしろというのだ。なんかノートパソコンで参考資料用にエロゲを起動している奴までいるし。良くそんなもので知識があるって言えたな、お前。

「じゃあ設定を教えてくださいよ」

「設定じゃねえんだよ。リアルなんだよ。俺がVR彼女を連れて来たような言い方は止めろ」

このまま帰ってやろうかと真剣に考えたが、それでも自分の為にここまで集まってくれたのだから、追いつ返すのはちよつと……本当にちよつとだけ、心が痛む。折角集まったのだし、ここはアドバイスを貰う事にしよう。だから少し恥ずかしいので指先をちよつとつんつん、と合わせながら俯きがちになり、なんというか、と言葉を置いた。「その……好きな子がいて……」

「うんうん、続けて続けて」

「その……あの子、アンって言っただけど。凄い良い子、たぶん俺が間違えてなければ俺の事が好きなんだと……思う。いや、うん。きつと好きなんだ。何時も助けてくれるし、傍に居てくれるし、迷ったり間違えそうになったら声をかけてくれるし。あんまり口数の多い子じゃないけど」

「こう、なんというか、」

「短い言葉に感情というか……想い？　を込めているのが解るから、言葉が少なくても気持ちは伝わってくるから」

「こう、彼女と話しているのは幸せだ。もう少しだけ、その声を聴きたいと思うのはちよつと欲張っているかもしれないから、我慢する。「なんと言っか……俺も、その、一目惚れ。可愛いなあ、って最初は思ってたんだけど。頼りになるなあ、って思っつて。それで助けられているなあ、って思っつて。だけどこの子を支援したいなあ、って最近では思っつ様になっつて——」

ヒーロー。その素質がアンにはあつた。彼女は誰かが一緒じゃないと、そのまま風船のように飛んで行ける。飛んで行っつてしまう。だから誰かが彼女を地上に掴んでいないと駄目だ。俺は、彼女のそんな人になりたい。

「だけど俺、ナカノの生き残りでせ。生き残る為に色んな命を無視して逃げ切つたんだよ。友達とか、先生とか、助けを求めている人とか。その後で強くなつても助けられる人を助けなかつたんだ。きつと、誰かを最後まで助けたら次の誰かを助けなくちやいけなくなりそうで」

「誰かの命を最後まで背負うというのが怖くて。誰かを最後まで助けるといっつのが、怖くて。だから手を出せなかつた。仕事といっつ言

訳をしないと、誰かを助ける様な事さえ出来ない、臆病者で、

「そんな俺と違って彼女は守りたい！　って思ったらすぐに飛び出せる子なんだ。そんな彼女は凄く綺麗で、そして純粹で……俺みたいにかうやって一人助けるのに悩んだり、誰かを殺して生き残ったような男がそんな子を好きになって良いのか？　って思っちゃったりしてさ……」

うん、なんというか、それに尽きるのだ。

「俺みたいな屑が、誰かを本気で愛してもいいのだろうか」

俺は自信がない。

「俺みたいに他人を犠牲にして生き残った者が幸せになってもいいのだろうか」

俺が帝都で人を殺す事に躊躇を覚えなかったのは、誰かを見捨てて生き残る事が、誰かを殺す事と同義であつたから。既に誰かを殺しているから、既に乗り越えている——或いは吐き気がするほどに経験した事だつたからだ。

「俺は、あんな良い子に愛されても良いのだろうか……」

勃起するし、欲情するし、キスしたいし、というか今すぐにでも押し倒しに行きたい。だけど何よりも、アンを大切にしたい。だから彼女に触れる事が怖いのだ。彼女を穢してしまうような気がして、触れるのが怖い。

それが自分の全てだ。それが、俺がアンに触れられない理由の全てだ。

それを語り終えると、窓から入り込んだ赤い服装の女性が、そのまま床に倒れ込んだ。

「駄目……尊い……浄化される……」

そしてそのまま、光になって消えた。いったい何だつたのだろうか……うん、《アナライズ》だけは絶対に使わないぞお、と心の中で硬く誓っている。そんな中、話し終えた所で周囲からのリアクションを待っていると、溜息を吐きながら顔を片手覆ったり、俯いたり、どこか、昇天するような表情を浮かべている馬鹿ばかりで溢れていた。

「はあ、若返る……」

「この崩壊世界で一番の青春ラブストーリーだろこれ……」

「拡散しなきゃ……スレ立てしよ……」

「人の個人情報勝手に拡散するんじゃないよ」

手刀で真空波を放って個人情報拡散を防ぎつつ、話を聞いてどこか満足げな馬鹿どもが現実へと戻ってくるのを数分ほど、大人しく待っている。ここまで話したのだから、正直、何らかのまともなアドバイスが欲しかった。バーに居る連中は全員駄目な悪魔ばかりだし。連中、一言目は暴力で二言目はセックスだし。なおダンテのみ例外で一言目はピザ、二言目がストロベリーサンデーなので中身は大差ない。

だから会議室の椅子に座ったまま、で、と言葉を零した。

「なんか、アドバイスがあると嬉しいんだけど」

割と、切実に。それを求めていると、馬鹿の内が一人、手を此方へと向けた。

「タイム」

「許可」

「あつまあ——れえ——!」

テーブルを飛び越えて集まった馬鹿どもがスクラムを組んで、時折こつちを見ながらひそひそ話で相談しているのが見える。小声で会話しているものの、超人としてのスペックを活用すれば連中の会話もきこえてくるだろうが……まあ、流石にそんなことをせず、おとなしく連中が話し終わるのを待つことにした。

そして数分、のけ者にされてから、連中が元の席へと戻った。そして領きながら言葉を送った。

「相談の結果、今の君に必要な物を俺達で理解したつもりだ」

『信用できるのか……?』

黄龍さん、当然の疑問を口にする。俺もこの集団から何か、建設的な意見が出て来るとは、欠片も思っていない。だから話半分のつもりで耳を傾けていると、サムズアップを向けられた。

「今の！ お前に！ 必要なのは！ 男子会だ……!」

「何言ってるんだこいつ……」

そう言うのと両側にバスターがやって来て、腕を掴むと持ち上げられてゆく。そしてそのまま、ドナドナを歌いながら引きずられ、男子会とやらの連れ去られて行く。会議室の扉を開けて抜ければ、アンを始めとした女性仲魔陣がそこに居た。引きずられながら去って行くこつちを無言で連中が眺めているので、引きずられたまま、片手を上げる。

「じゃ、俺男子会行ってくるから」

『最近の男子会とは囚人の収容みたいな形で移動するのだな……』

「ここが特殊なだけだと思います。」

◆

それから連行されることしばらく、場所はシンジユクから大きく移動する事になった。途中、ジープで移動する事になったが、それよりも早い移動手段として黄龍を保有しているので、サクツと黄龍の背に皆を乗せて飛行、

向かった先はキチジヨウジのイノガシラ公園だった。外から見て解るレベルでイノガシラ公園は異界化されており、中からは高密度のMagの気配を感じられる。かなりの高レベルの異界である事がこれで解る。その上でここに到着した職員を含めた馬鹿連中は、仲魔等を召喚し始め、戦闘準備をし始めていた。その様子を試運転の為に十束剣を背負い、黄龍刀の柄を手に取りながら眺め、

「え、なにこれ」

「男子会」

『男子会で異界攻略……男の友情の築き方が凄いな……』

だからここが特殊なだけだよ黄龍さん。そう思いながらも異界に突入する準備を誰もが整えていた。人数は全部出十人前後。《アナライズ》すればレベルは大体30から40ぐらいで固まっている。前、受付をしていた男も見える。全体のレベル的には異界から感じる一番強い気配にやや劣っている、というレベルだ。様子を見る限り本気で突破するような様子なので、L&Oとブルームを電装待機状態にし

て、黄龍もいつでも召喚出来る様にする。周りを見渡しつつ、

「え、マジで突破するの？」

「男子会だからな！」

「ちなみに偵察によるとボスはテイターニアとオベロンらしいぜ！」

「俺達よりもレベルが上だ——参ったなあ！」

「じゃ、突撃って事で」

「嘘だろお前」

『ふうむ……主殿よ、我を召喚しては動きづらいだろう、今回は主の力と周囲の力を借りて戦うのが良いだろう』

「お、縛りプレイかな？」

間違いなく声は震えていた。ここにいる連中のレベルは間違いなく自分よりも下なのだから。舐める訳でも慢心する訳でもなく、ここにいる連中を全員生かして返すのなら、だれでもない俺が本気で戦つてオベロンとテイターニアを討伐する必要がある。そう考えていると遊ぶ余裕はないかもしれない。

「突撃——」

「お——」

「のりこむぞ——」

「緩い声で突撃するなあ——！！」

『帝都の未来もこうなるのか……』

だから特殊な連中ですってば、黄龍さん。

そう言っている間に声は緩いくせに支援魔法をかけたガチ戦闘態勢で異界へと元気よくジェノサイドしに馬鹿が飛び込んでいった。それを素早く追いかける様に飛び込めば、その先に広がっているイノガシラ公園は記憶とは違う姿を見せていた。

元々自然の多い公園だったが、それよりも更に花が咲き乱れる景色へと変貌しており……森、花畑、とそう表現できる風に景色は変わっていた。そこに飛んでいるのはピクシーやジャックフロストを始めとした《妖精》カテゴリーの悪魔たちだった。職員がメガホンを取り出し、

「えー、イノガシラ公園の異界の主よ。これが最終通告になる。今す



ぐ異界の拡張を止め、我々と共存する意思を見せるのであれば共に手を取り合う予定が此方にはある。この提案を受け取らないのであれば――」

と、降伏勧告中にメガホンは吹き飛び、職員がふむ、と持ち手だけになったメガホンを見つめた。

「これは交渉決裂だね？」

「戦争の時間だぞオラ……！」

そのまま、ガチで戦闘が開始される。嘘だろ……と思いつながら男子会という名目で異界攻略が開始されてしまった。出現している悪魔はピクシー、ジャックランタン、ジャックフロスト、そしてフォモール。どれでもレベルが30以下に属する悪魔であり、耐性破壊能力のある黄龍刀であれば余裕で、そして十束剣であれば塵すら残さず消滅させられる。そういうレベルの相手だ。

剣や銃、杖等を手に走り出してヒヤツハーし始めるいい年した連中をやや呆然と眺めてから正気に戻り、そのまま自分も戦闘に一気に突入する。とはいえ、最初に出現しているのは雑魚とも表現できる悪魔。自分が参加しなくても一瞬で殲滅し、蒸発させる。歴戦の馬鹿どもだけあって一瞬で雑魚の殲滅を終えてしまい、戦うまでもなく終了する。

そしてそれを見ていた僅かなピクシーたちが逃げる様に公園の奥へと去って行く。おそらくは異界の主へこの凶行を報告しに行くのだろう。

行くのだろうか、

「なにやってんの……」

「見て解らねえのか！」

「これから俺達じゃ倒せない悪魔が出て来るからお前に倒させるんだよ……！」

「最悪かよこいつら」

『まあ、頼られていると思いきょう』

黄龍の慰めを受けながらがつくりと肩を落としていると、森の奥の方から、此方へと向かって妖精たちを引き連れながら歩いてくる全身

を白い鎧で覆った騎士の姿が見える。片手には剣、片手には槍を握った騎士は此方から数十メートルの距離で動きを停止させる。

妖精 タム・リン Level 42

「悪いがこれより先は妖精の領域。人が入る事は許されない。大人しくここから立ち去ってくれ。俺も、余り人を傷つけたくはない」

「ならば人を攫うのを止める様に王に伝えてくれないかね？」

「無理だ。俺も所詮は役割に縛られる悪魔でしかないからな。だから諦めて帰ってくれ」

タム・リン——確かスコットランド系の騎士の悪魔で、女を魅了する能力を持っているのだったっけ？ これはマジで男子のみで突撃するのが正解だったらしい。或いはそれを知っていて突撃したのか。どちらにしろ、馬鹿である事に変わりはないが。

まあ、とりあえず

「——異界、潰せばいいんだよな？ この男子会」

「うむ、頼んだぞー！」

「勢いが良いなあ……」

まあ、頼られてしまった以上、やるのだが。だからタム・リンを見て、黄龍刀と十束剣を二刀流で構え、それを見たタム・リンが構える前に——一直線に突っ込んだ。素早く体を踏み込ませるように下へと沈め、黄龍刀を横薙ぎに振るった。黄金の斬閃が軌跡を描くものの、

「早いが素直すぎるッー！」

それをタム・リンが剣で阻んだ。

そして空間に亀裂が走る。ステイヴンが説明していた、空間に地震を起こすという黄龍刀の能力だろう。黄龍刀を振るい、衝突した軌跡から空間にひび割れが走り、それが接触した剣を震動と共に粉碎しながら伸びたひび割れがタム・リンの体に触れて、木の根みたいに伸びるそれがタム・リンの横腹を破裂させた。

「な、こっ！」

素早くタム・リンが回避に入る。それが一瞬でも遅ければその空震をなぞる様に走る雷撃に体内から焼かれて蒸発していただろう。流

石黄龍の別方面の力を完全に再現しているだけあって、中々凄まじいものになっている。

そしてタム・リンが回避する為に離れた所で、

「《ワールウインド》ッ！」

バーを崩壊させたダンテがやっていたように、十束剣をブーメランのように投擲する。それが逃亡したタム・リンの上半身と下半身を切断し、必殺した。どうやら斬られた端から浄化しているらしく、タム・リンの様な騎士相手には効果が薄いものの、純粋な魔を相手にするのであれば必殺性を見せる事が出来そうだと、一周して帰って来た十束剣をキャッチしながら判断した。

「この俺がこんなへたくそな剣術で……！」

「なんか今日、俺散々なんだけど」

それを最後にタム・リンが消滅した。圧倒的レベル差から来る速度と筋力、純粋なステータスの差をタム・リンは埋める事が出来ずにあっさりと消滅してしまった。帝都に行く前までだったらバフデバフ必須の相手だっただろうなあ、と解るだけに複雑な気持ちだった。だけどそうやってタム・リンを始末すると、

強く、背中を叩かれた。

「よう！ めっちゃくちや強いじゃねーか！」

「おお？ おう、まあ、うん」

レベル、74もあるし、とは口に出せなかった。今の戦闘でどれぐらいの強さがあるかはバレているだろうが。それでも具体的な数値を口にする事は出来なかった。だから、まあ、倒せて当然の相手だった。そう判断するも、戦闘を見守っていた連中は背中を叩いたり、肩を叩いたりして来る。

「しっかし少し前まではデバフに専念しているだけだったのにもう抜かれちゃったな」

「頼りになるじゃねえか」

「その調子で俺に楽をさせてくれよな」

「経験値ごっつあんです」

「最後の奴だけ顔を出せ」

だけど、なんとというか、  
こういう風に褒められるのは嫌じゃなかった。

## 神州混沌行脚 V

タム・リンを討伐すれば、この異界のボス以外にそれを超えるレベルの持ち主は居ない為、妖精たちが近寄らなくなった。その為、異界奥に居るオベロンとテイターニアへの移動は実にスムーズに進められた。基本的に悪魔さえ邪魔してこなければ《ハニー・ビー》もあるのだから、異界で迷う様な事はないのだ。それ以外にも《エストマ》等の探索魔法に特化した仲魔を保有するサマナー等もいたりして、移動の間も交代で役割を分担、電霊によるジャミングを一応は警戒して一人が常にマニュアルでマッピング作業を行う。

熟練のサマナーやバスターの探索技術というのを見せて貰った。光を失うダークゾーンではランタンや懐中電灯は意味がないのでライトマは必須。探索を電子技術ばかりに頼ったやり方に慣れてしまうとハツキングやクラツキング、電霊による妨害でまともに出来なくなってしまう場合もあるので、自分の手でマッピングする事が出来る様になるのは重要な事だったり教えて貰ったり。弱くても良いから探索特化用の仲魔、或いは戦闘終了後の状態異常などの回復専用の仲魔を用意しておくことの重要性とか。

探索という行動に対する一つ一つの備えが抜かりがなく、移動が非常に快適だった。その上で互いの死角を常にカバーする様に移動するのも何気に、凄かった。こういう細かい技術や気配りばかりはどう足掻いても自分がレベルを上げてても手に入れる事の出来なかった、時間と共に学ぶものだった。そこは純粋に凄いと思うし、学びたいところでもあった。

ただし、

「俺さ、数日前にノパソ拾ったんだよ。んで電源入れたらさ」

「おう」

「寝取られ系エロゲの途中だったみたいでさ、そのシーンが急にアツプで映ってさ……」

「辛いよな……」

「解る。寝取られ辛いよな」

「なんで有能なのに馬鹿しかいねえんだ……」

技術とか戦術とか、そう言う部分は本当に尊敬できるレベルで凄いのに、ここで全てが台無しだった。話している内容が本当にどうでもよすぎて、緊張感の欠片もない。それなのにパフォーマンスを一切落としていない辺り、本当にこの業界のプロフェッショナルと言える連中なのだろうとは思えた。

それでも参考にしたくはなかった。ただ、なんというか、

物凄く、楽しそうな事が凄い印象に残った。全力で命を懸けているのに、一切油断していないのに凄いいラックスしている。油断も慢心もないが、緊張はしておらず、しかし常に警戒を続けている。ナチュラルともいえる状態を常にキープしていた。自分の軽口は冗談、コミカルな動きや言動は全部、緊張感を紛らわせる為に吐いているものだ。

だけどなんというか……この人たち、ダンテと一緒にだ。

楽しんでいる、純粹に。自分が今いる状況を。

なぜそうも楽しめているのか、それが自分には不思議でしようがなかった。

そんな事を考えながら何者にも阻まれる事もなく、イノガシラ公園の奥に到着した。異界化されたイノガシラ公園の内部は拡張されており、元の時よりもっと幻想的で神秘的な空間へと変貌していた。それでも、基本的な姿はイノガシラ公園をベースにしている為、ところどころ知っている景色を見た。そんなイノガシラ公園の池前に花畑を作り、そこに妖精王オベロンと妖精女王ティターニアの姿があった。

DDSで確認した通りの蝶の羽を生やした肌色の悪い男と、緑色のドレスに身を包んだ女のペアだった。レベルは56と58、かなりの高位悪魔だ。少なくとも自分を除いた馬鹿連中が勝てるような相手ではない。

故に、彼らは見下していた。

人間を玩具とか、家畜とか、そういう感じの視線を向けてきているのが露骨に分かった。待ち構える二体の姿はどこか優雅で、幻想的で

はあるものの、その視線が全てを台無しにしていた。

「あら……まさかタム・リンを突破して来るなんて思いもしなかったわね」

「アレもアレで中々の強者だった筈だがね。いや、この場合は突破してきたニンゲン達を褒めるべきなのだろうね、ティーターニア」

「ええ、そうねオベロン。とはいえ、流石に私達の領域をこうも荒らしておいてそれを褒めるといいうのもおかしいとは思うけれどね」

それを眺めていると、何時も説明してくれている馬鹿が腕を組みながら頷き、此方に近寄ると耳元に小さい声で今からあれ、一瞬で結束崩壊させるから見とけよ、と呟いた。

「見えるか、坊主？ アレが倦怠期に入った夫婦だ。そろそろ盛り上がる為にアブノーマルプレイに手を出す頃合いだ。たぶんオベロン辺り、普通に浮気してるぜ」

「そ、こそ、そんな事はないぞー！」

「……は？」

ティーターニアが軽くオベロンにガンを飛ばしている。男の言う通り、一瞬でオベロンとティーターニアの間の空気が崩壊し、完全にオベロンが狙われる状態となっていた。その見事すぎる手腕には困惑するしかなかった。

「悪魔は情報概念体だけど同時に肉体を持って出現しているし、環境や状況、個人の性格もある。連中、姿はアレだけど割と人間らしさあるんだよな……話術、鍛えておくとそれだけで戦闘回避出来たりするぜ……まあ、今回は無理だろうけどよ」

会話して戦闘回避……ってのは考えたことがなかった。基本的に会話できる悪魔は向こうから話かけて来るし、それ以外はジェノサイドしてたし。勉強にはなるが——手段、どうにかならなかったのだろうか……。

そんな事を考えながら妖精夫婦を見ていると、

「も、もういいだろうティーターニア！ まずは侵入者を排除してから話し合えば」

「私は今の動揺を見過ぎしませんからね。場合によっては実家に帰ら

せて貰いますわ」

「待て、待て。それに関しては何じっくり話し合おう。な？　だからほら、侵入者を血祭にあげてから話し合おう、な？」

「……解りました」

「ふう——」

なんか、見ていれば見ている程オベロンが憐れになってくる。生暖かい視線でオベロンを皆で見つめれば、オベロンが咳払いをしながら腰からサーベルを引き抜いた。戦闘をする準備をどうやら整えたようだ。

「それで——よくもティータニアとの間に不和を生み出したな、ニンゲンめ」

「身から出た錆だろ」

「嫁さんは大事にしろよ」

「浮気とか嫁さんに申し訳ないと思わないのかよ！」

「どうせピクシーオナホ使ってるんだろ！」

「煩い！　煩い！　今貴様らを排除してやるからそこで待っている……！」

オベロンがサマナーたちの見事な話術で完全にブチギレ、ティータニアの視線が絶対零度レベルでオベロンに突き刺さる中、COMPへとアクセスし、そこからDDSを呼び出す。召喚できる仲魔は一体だけ。他の全員は今頃悪魔協会で女子会だろうか？　響きはいいけどあの面子、今は一国しか存在しない以上世界を滅ぼせそうだしなあ……と思う。まあ、それはともあれ、

「コール、コウリユウ」

召喚によって異界の空に黄龍レベル74、つまり自分と同じレベルの極大悪魔が召喚された。ライドウにとっては大変だった召喚も、帝都決戦の反動で弱体化された今、そしてDDSによって管理された召喚プロセスによって普通に召喚する事を可能とする。

空に出現した龍神黄龍はとぐろを巻きながら異界の大空に出現した。しかし黄龍の別格の存在感が出没するだけで異界を圧迫し、軋ませる。



「主殿よ、ここ狭いぞ。消し飛ばして良いか」

「ひっ」

「な、ななな、な、な」

妖精夫婦が出現した黄龍を見て、一瞬で動きを停止させる。馬鹿どもはこれにビビるどころかかっこいい、とか叫びながら記念撮影を開始している。本当に物怖じしない連中だった。なんというか……真面目に考えるのが馬鹿々々しくなってくる……。

だからふう、と溜息を吐いた。

変に肩を張っていてもこれはどうしようもないな、と。

体から力が抜けた気がした。

そしてオベロンとティターニアを指さし。

「めっ」

「ひっ」

それだけでびくりとした妖精夫婦の姿に、ちよっとスカっとした。その姿を確認しつつ、職員へと視線を向ければ頷きが返ってきた。

「人間と共存しろ」

「馬鹿な、何故」

「そうか、じゃあ体を伸ばすか……」

「あー！ やめろ！」

「やめろ？」

「やめてください！ やめてください！ 本当にやめてください！」

「攫った人は？」

「もう犯して妖精にしました……」

「なんで？」

オベロンが一瞬視線をティターニアへと向けたが、誰も居ない方向へと全力で拳を振るったら、そのまま大地が裂けながらひっくり返り、異界を貫通して外まで拳の破壊が飛んでいった。

「妻だけじゃ足りなかったからニンゲンで色んなプレイをしたかった……！」

「アナタ……」

オベロンの素早い自白にティターニアでさえ呆れている。もうど

うすんだよこいつ、という感じで両手で顔を覆う。何故だろうか、高位悪魔になればなるほど馬鹿になって行くのは基本なのだろうか？  
バーの連中みたいに。いや、でも黄龍はまともだしそういう訳じゃないと思う。

そう信じたい。

それはともあれ、オベロンと、ティターニアを指さし、自分を指さす。

「人間と、共存、オーケー？」

黄龍が異界の空で窮屈そうにしながら体を軽く震わせた。もう、完全に恐怖で動けなくなつたオベロンは縮こまって動きを止めているが、その代わりにティターニアが口を開いた。

「……ええ、この際妖精女王の名において約束いたしましょう」

「だ、だがティターニア……」

「囁るな汚物」

ひえっ、と声が漏れる。視線だけで殺せそうな迫力が今のティターニアには存在していた。実家に帰るとか話しているし。いや、まあ、その後の事は其方の事情だから介入する予定はないのだが、

「次、人間攫つたりしたのが俺の耳に届いたら土地諸共消えて貰うかな。コウリユウでぱつくんちよだ」

「主殿よ、我もグルメという概念を先日覚えた。ゲテモノは余り食べたくないぞ」

「我慢してね」

オベロンが面白いほどにビビっているが、ティターニアは少し考える様な表情を見せた。

「……人間と共存する場合、それは貴方の庇護下にあるという事になるのでしょうか？」

「む」

なんか、ティターニアが言って来た。俺の庇護下にあるか否か、という話だ。それを即答するのは難しい。別に組織のトップという訳でもないし、それにシンジユクに常に居る訳じゃない。ここを守護している立場でもないから、ちよつと返答し辛い質問だった。だが此方

の答え辛さを察知してか、

「それに関しては後日此方から使者を送りつつ話し合おう」

「……そうね。それが良いでしょう。では出口を作りますわね」

そう言っただけでテイターニアは異界の出口へと繋がるゲートを生み出した。それを確認してから黄龍をDDSへと戻した。これでどうやら交渉は完了したらしい……少なくとも自分が関わる範囲では。なんとか、終わった。そんな感覚を抱きながらさっさと撤収する。

とんだ、男子会になってしまった。

ゲートを抜けた所で肩を降ろし、漸く皆を守らなくてはならないというプレッシャーから解放された気分だった。大きく背筋を伸ばしながら腕を上げて、体をほぐす。黄龍刀と十束剣をストレージに戻し、首を軽く揉んでいると、

「とおー」

後ろから肩に腕を回され、そのまま捕まってしまった。逆側も同じように捕まり、

「はっはっは！ 見たかよあの顔！ 爆笑もんだぜ！」

「クズが不幸になる姿は何度見ても楽しいなあ！」

背中をばんばん叩きながら笑い声を零す。いや、まあ、確かに楽しかった。緊張もしたが、それでもいい経験になったのは事実だ。だけれどやっぱり、

「凄いのは俺じゃなくて何をやればいいのか、それが解っている皆の方だろうか？」

自分にはそう思えた。突発的な男子会なのに、最初から最後まで何をどう行動すればいいのか、それを完全に把握していた。そのおかげで動きや判断に一切の無駄がない。まるで事前に計画していたかのような滑らかさで全てを進めたのだ。正直、俺一人の努力よりも、皆のその流れの作りの方が凄い様に思えた。

そんな此方の言葉に、

「当然だろうか？ 俺達はベテランの馬鹿だぜ」

「人生毎日楽しく喰って戦って遊んで飲んで風俗に通う！ それらが俺達の人生ってもんよ」

「出来て当然なんだよ、それだけの練習と失敗と成功を繰り返しているからな」

そして、当然の様に、

「だからお前も十分すげえよ」

その言葉を否定しようとした。だけど、それを遮られた。

「見てみろよ。この中でコウリユウなんて大物使役できるサマナーは何人居る？ タム・リンを即殺出来る奴は？ オベロンやテイターニアを問答無用で降伏させられるのは？」

「それは――」

俺が、それだけの能力を持っているからだ。それを使えばこれぐらい出来て当然の話だから、特に驚く事でもない筈だ。それをそう伝えれば、ああ、そうだろう、と頷く。

「だけどそりゃあ俺達にとってもそうだ」

その言葉に職員が話を引き継ぐ。

「人間、誰しも才能差はあるが得手不得手が存在しているのは、悪魔であつても個体差というものが存在するのだから、当然の話だ。そして個人で出来る事もそうなれば変わってくる。君に出来ない事がある様に、私にも出来ない事は多く存在する。それを自分出来るから出来て当然と思うのはまだ良いだろう」

だが、と言葉を付け加えられた。

「だが他人にとってはそうではないのだ。他人にとってはそれは羨望の的だ。良いなあ、と今日、行動をしていて思った事があるのではないのか？ 逆に我々からも君へと向かつてそう思う事は何度もあつた。ナニカ特別な理由があるのかもしれない」

だけどそれで、

「それが君の力である事実が変わりはない。胸を張り給え。君は凄い。そして君が居なければタム・リンで数を減らし、オベロンとテイターニア相手では全滅していただろう」

「……」

一切隠さない、ストレートな言葉だった。ヨイショをしている訳でも、適当を言っている訳でもない。そんな事、今日この馬鹿みたいな

騒ぎに関わったから良く解っている。だからこの人たちが、本気で羨ましがり、喜び、そしてそれを楽しみ、そして自分の持つ技術やそれを出来る自分自身という存在に対して、胸を張っているという事が解った。

ああ、だからそうなんだろうな、と納得してしまった。

「良いか、坊主。俺達は明日には死ぬかもしれない」

それが今の崩壊世界だ。まだ世界は崩壊している。放置してればまた虚無に飲まれて消えるだろう。だけどそれだけではなく、普通に、この悪魔社会は何時でも死ぬ可能性を残した世界であった。

「些細なミスが死に繋がる。運が良ければ通りすがりの奴にリカームでも使って貰えるかもしれねえ。だけど大半の人間はMag抽出の為に犯すだけ犯すか拷問するだけして、全て吐き終わったら食われちまう。この世界はひついでえほどに残酷だ。今でもGPが天元突破して出現する悪魔に制限すらねえしな」

「だからこそよ、俺達は笑うんだよ」

馬鹿が笑う。

「どうせ後がないんだ。だとしたら馬鹿らしくないか？ 一々気にしたり怯えたり緊張したりとか」

「俺達は嫌だぜ、不安だらけの人生は。楽しくなきや生きる意味はないんだぜ」

「だったら笑うしかねえだろ。自分が出る事に胸を張って、俺は凄いいんだ！ どうせミスって死ぬなら俺の凄さを世界に見せてつけてから俺は死ぬぜ！ 死ぬときは笑ってな！」

「だから俺達は笑う訳よ。馬鹿をする訳だ。対策、トレーニング、強化、情報収集。当然、生きるために打てる手は全部手を出す」

「だけど、それとは別に、自分が出る事に対してプライドを持つ。それは彼らがプロフェッショナルだからではない。それが一番、生きる上で楽しいからだ。楽しくない人生に意味はない。」

だから、

「胸を張る」

「おう。今日も生き残った俺はすげえ……！ かつけえ……！ キヤ

バ嬢に自慢できるぜこれ！……つてな」

馬鹿だけど……凄い馬鹿ばかりだけど——物凄い馬鹿連中だった。

心の強い馬鹿だった。そして楽しい馬鹿だった。その姿を見て、もはや呆れと笑いの混じった声を零すしかなかった。やっぱり、この人たちは凄かった。なんというか、それ以外に表現するだけの言葉が見つからない。なんて反応をすればいいのか、それに詰まっていると解放され、

「俺は凄い!! おう、ほら」

「えっ」

「俺は凄い!! かつこいいい! 強い!!」

「えっ、あのっ、えっ」

「俺は! 凄い!」

……これ、絶対に言えつて事だよな?

余りにも恥ずかしすぎる。流石に無理だろうと思っている。だけど期待の視線が向けられる。周囲からのプレッシャーを感じ始める。助けを求めてCOMPを抜き、そこに表示されているSD黄龍に助けを求める。

『いいのではないか? 我も主殿は少々卑屈そうに見える。少しうるさいぐらいがちょうど良さそうに思える』

「こ、黄龍……」

助けが居ない。視線を馬鹿どもへと向け、えーと、と呟き、

「お、俺は凄い……?」

「疑問形ではなく!」

「お、俺は凄い!」

「もつと、魂を込めて!」

「俺は凄いッ!」

「腹の底から! 叫びたい事を言葉にしろ!」

「俺は凄い! だけどクラリオンは止めろッ!!」

「あの子の事が?」

「大好きだあ——! てめっ、このやろっ……!」

「ぎゃあ、怒ったぞお！」

「逃げろ！ 逃げろオ!!」

「誰一人として生きて返さないからな……! 赤ちゃんからやり直せ」

「若化弾はヤメロオ——!」

この馬鹿野郎共め……! と口に出しながらルーチエ&オンブラを引き抜き、馬鹿を言う連中へと向かって若返りの薬から作った、若化弾を装填して乱射する。命中すれば強制的に若返る弾丸は悪魔には無意味だが、人間であれば一発ごとに若返る力を持つている。それを乱射して馬鹿の集団を赤ん坊まで巻き戻してやる、と怒りを込めて乱射する。

「記憶から消し去れ……!」

「へへ、ただでは死なんぞ、拡散……拡散してやる……!」

「うーし、このまま逃げながら三次会の会場探そうぜ! 飲めるとこな!」

「トラポート」

「トラポートするいぞっ!」

わーぎゃー叫びながらシンジユクへの道を全力疾走しながら蹴りを叩き込んで馬鹿どもを転がして行く。当然の様に手加減しているし、遊びの様なものだ。なにやってるんだろうなあ、と思いつつも、叫ぶだけで凄い心が軽くなった気がした。

……なんというか、もう少しだけ、自分を認めて素直になろう。

そう思える付き合いだった。

そう思った瞬間、心の内界で新たなカードが生成されるのを感じた。その感触にああ、一方通行の感謝じゃなかったんだな、と小さく笑いながら、

この日は馬鹿の集まりで遊び通した。

## 神州混沌行脚 VI

三次会の場所は居酒屋《あぼかりぶす》という場所でやる事になった。経営者は終末が過ぎ去ってしまった為に無職へとジョブチェンジしてしまったトランペッター、従業員は黙示録の四騎士。それぞれ違うタイプのイケメンに姿を変えているので女性客への人気も高い、という無駄に気合の入った居酒屋だった。ただ、それでも客が少ないのはレベルとか関係なく、魔人として死の気配をどうしようもなく纏っているという事に理由があるらしい。その為、レベルの高い客が社会に紛れて生活している高位悪魔しかやってこなく、経営は中々難しいという世知辛い話を酒の席で聞かされてしまった。

経営者のトランペッター曰く、

「いやあ、魔人としてのアイデンティティとして死のオーラは外せませんからね……。私たち、アポカリプスを終えてしまうともう仕事がなくなってしまうので、何とか就職しないとこの先の生活が存在意義的にやばいんですよ。ははは、だからなるべく来てくれる人にはサービスしようと決めてまして。あ、時間になったのでサククス演奏しますね」

どうやら、自分のアイデンティティクライシスと真正面から向き合っている良い魔人……良い魔人？ らしかった。相変わらず崩壊世界は色んな意味でぶっ壊れてるぜ、と納得させられる光景だった。それでも普通に出される料理とか酒とか、美味しいので悔しい。

明るく熱血なレッドライダー君。

クールで眼鏡なペイルライダー君。

ショタで笑顔の眩しいホワイトライダー君。

ダウナーでどこか影のあるブラックライダー君。

厨房でキツチンを任されているアンチクライスト君。

皆イケメン。

皆、死のオーラを纏っている。正気なら近づくだけで失禁して、更に近づけばそのまま心臓麻痺するような連中である。そう、終末を通り過ぎて役割が終わって無職になった結果、レベルが一桁になろう



が、それでも彼らは魔人だった。そんな連中が居る店の客が来る筈がないのである。

だが馬鹿共は違っていた……！

ノリと勢いで突撃し、その上で常連を増やしてしまった。狂気レベルでは某バーとどっこいレベルの場所だった。とはいえ、男子会の三次会、そういう細かい事は耐えられるレベルなら気にしなくていいのだ。場合によっては死のオーラで変な雑魚が寄り付かないと考えればいいのだし。安全に死のオーラに晒されながら食事ができる所だと思えばいいのだ。

やや錯乱しているかもしれないが、それでも少しだけ、自分に素直になろうと連中のおかげで思えたのだから、まあ、こんな感じで適当にいいのだ。肩から力を抜いて、酒の飲み方というのを教わりながら、どういっておつまみが好きなのかというのをちよつと、色々と食べ比べながら調べて、ひたすら餌付けばかりされた記憶が残った。

そんな訳で飲んで、騒いで、武勇伝を聞かされて、あーだこーだアドバイスをされたり、馬鹿話を語ったりする場になった。インフラが、というよりは日本国内ではヤタガラスの尽力の結果、ある程度電波が復旧してきたこともあり、つぶやいた一等のSNSも復活しつつあった。そこに死のオーラを振り向くイケメンたちの写真をアップしてアピールしたり、SNSに魔人テロを行ったりして爆笑した。リピーター増えねえかなあ、とか笑ってたら襲撃されたので更に笑った。

笑った。

腹抱えて笑った。

馬鹿じゃねえの、何やってんだお前って。そうやって盛大に笑った。そりゃあ、もう、涙が出る程に。笑って、笑って、ちよつと息苦しくなって落ち着いて、また馬鹿やってる姿を見て爆笑して、蹴りを入れたり入れられたり、そうやって一晩中笑って騒いで遊んで、

◆

「ああ、楽しい時間だったなあ」

『私も食事が出来て満足であった』

夜が終わって朝になってしまった。トランペッターに従業員用のシャワールームを貸して貰ってきっぱりしてから、馬鹿の集まりは解散した。そのまま大半は悪魔協会へと戻って行ったり、異界探索の成果を整理したりと、それぞれの日常へと帰還した。そんな中、朝日が差し込むシンジユクの道路で手を大きく空へと向かって伸ばし、体をほぐしていた。

清々しい気分だった。こうやって、何もかも忘れて馬鹿し続ける様な、笑い続ける時間は何時ぶりだろうか？ 自分の手の中にあるカードを、

無名の魔術師たちが肩を組んで開いた手で中指を突き立てているタロットカード、《The Magician》、即ち《魔術師》のカードを見ていた。これを見るだけで昨晚の乱痴気騒ぎが思い出せる。

「俺が」

『……』

「まだ、学生だった頃の話だ」

俺は学生だった。数か月前までは。今でもそれを思い出せる。思い出さない様にしていただけ、こうなつては思い出せる。

「明日はなんの宿題を提出するんだっけ。そんな事を考えながらサボってネトゲ遊んだり、カラオケに行つてストレス解消したり、誰が一番上手く死体のフリを出来るか勝負しようぜ！ ってやって先生に救急車呼ばれて怒られたっけ……はははは」

少し前までは凄い馬鹿をやつてたよなあ、俺。それを今更思い出した。ずっと、忘れてた事。ツツコミ入れたり茶番に付き合ったり、呆れたりする事はあった。だけど学生時代だった時の様に、心の底から笑つてふざける様な事は、

「本当に、本当に久しぶりだったよコウリユウ」

空が眩しい。前は良く遊びで徹夜していたのに、そしてその度に空が明らむのを見てあつ、宿題やつてねえ、と眩くものだった。だけど今では空の明るさを見て異界の脱出とかを考える様になっていた。

世界が変わったから当然だと思っていた。だけど違うのだ。

「変わったのは——俺だ」

とてもシンプルで、とても簡単な話。俺が変わったただけだった。どんなに世界が変わっても。世界が終わったとしても。それでも、変わらない、自分のままでいられる。そういう人たちを見て漸く解つたのだ。俺は今まで、逃げてただけだった。

罪悪感。俺だけが生き残った。俺が他人を見捨てた。今の俺は恵まれてる。俺の様な男を好いてくれる女がいる。俺はどうしようもなく屑で、そしてどうしようもなく、救いがないのに。それでも好きと言ってくれる子がいる。だからこそ罪悪感が胸を燻り、直視する事を拒んだ。

つまりは、

俺がアンからずっと逃げていたのは、罪悪感から目を反らす行いだったのだ。

皆が死んだから彼女と出会えたのだ。

だから、彼女にストレートに向き合えなかった。

それが、如月竜二という男にある、根底であり、彼女を自分から抱きしめられない理由だった。笑って、全部吐き出して、それで昔、自分がどういふ学生だったのかを思い出した。そのおかげで良く解つた、自分が何故自信を持ってないのか。自分が何故アンを今すぐにでも押し倒そうとしないのかが。

全部、俺が悪い。

「罰……とは一種の救いだって解つたよ、コウリユウ」

『……』

「誰かが罰する事で、許されるんだ。だけど俺を罰せる人はもう、誰も居ないんだ。誰も俺を罰してくれない。誰も俺を叱ってくれない。誰も、俺の罪を知らない」

だから誰も罰許してくれない。

それが如月竜二の背負った罪である。

「——故に私はこう答えよう、汝を許そうと」

聞き覚えのある声に、肘を曲げて腕を前に出す。白い羽を散らしな

がらゆつくりと、空から降りて来た小さなシルエットが腕に止まった。鳩だった。何時も通り、うつすらと後光の見える鳩の姿をしている。

「大いなる父の名において汝を許そう、我が子よ。汝は罪に苦しんだ。そして今、それを見つめた。故に父として汝の罪を許そう」

だが、と鳩は翼を此方の胸へと向けた。

「汝が汝を許せていない」

鳩の言葉に頷く。

「罪には罰を。汝はそう言った。罪を知る者のみが罪を罰せる。故にリ्यूジよ、我が子よ。罪は知る者に裁かれる。故に、答えは簡単だ」  
鳩がそこで一旦言葉を止め、小さくうなずきながら啓示を出す。それは四文字でありながら、そうではない。彼は既に去った後なのである。もはや人の生活から彼は去った。残されたのは彼の教えと彼の物語だけ。もはや彼は天使たちに声を送る事もなくなった。彼は決して人を見捨てたのではない。もう、自分の存在は必要ないと、去っただけだったのだ。

故にこうやって、今は、愛と平和の良き隣人として来た。

「汝が汝を裁くのだ」

「――」

鳩の言葉に、呼吸を止めた――そう、誰も俺を裁けないのなら、俺が自分を裁くしかない。俺だけが知っている罪。俺がずっと目を反らしてきた、行わなければならない清算。今まではそれを認識し、この旅を罪を贖う為の旅だと思って来た。だけど違う、それは言い訳を付けて目を反らしているだけの行いだ。

そう思えるのは、やはり、

「良き出会いをしたようだな、サマナー」

『良き出会いだった、四文字よ。見よ、サマナーの目を』

タロットを見て、昨晚を思い出し、小さく笑い声を零し、鳩を肩の上へと移動させてからカードホルダーにタロットを格納した。朝日を浴びて、ああ、そうだなあ、と鳩の言葉に漸く、声を零せた。

「そうだなあ……ああ、そうだよな……ちゃんと、向き合わないとだめ

だよな」

罪には罰を。とてもシンプルな言葉に思える。だけどその意味は、深い。特に世界が崩壊し、法律なんてものがほとんど機能しなくなった今の時代では。誰よりも、何よりも個人のモラルが影響して来る。

だから、個人個人で判断しなければならぬのだ。

犯した罪を清算する方法を。

鳩が導いてくれたおかげで、余計なノイズが脳内から消え去った気がする。

「そう、俺は凄いな」

だから……勇気を振り絞る事だって出来る。怖くて、恐ろしくて、吐きそう。だけどそう、俺は凄いな。だからきつと、ちゃんと向き合って、そして笑ってアンに答えを出せる筈なのだ。いや、出したのだ。俺が、答えを。本当に彼女の事が好きで好きでしょうがないから。心の底から好きだって伝えて、抱き締めたいから。

その為にこの心に突き刺さる罪悪感の杭を引き抜きたいから。

このまま、これが残ったまま彼女と付き合っても、たぶん。幸せにはなれない。

だから、

「そう、過去なんだ、もう」

学校が楽しかったことも、カラオケに行ったことも。ネットゲをしていたのも、SNSで面白いつぶやきを探していたのも。もう、それは終わったのだ。帰ってこないのだ。馬鹿達との乱痴気騒ぎは、何よりもそれを理解させられてしまった。過ぎ去ってしまった時間。終わってしまった時間。もう戻らない過去。

時は過ぎ去って行く。そして過ぎ去った出来事をどうにかする方法はない。

さて、と呟きながらメールをステイヴンへと送る為にCOMPを取り出してメールを入力して行く。それが終わったらCOMPを再びポケットの中に叩き込んでブルームを今度は取り出す。それに軽いポップで飛び乗って飛翔する。

「男子会四次会、飛び込みゲスト一羽追加……って感じかな」

アン達には悪いが、ちよつとバーでお留守番して貰う。流石に男の格好悪いかもしれない姿をこのまま見せるのは恥ずかしい。だから帰ってくる頃にはもうちよい、まともに向き合えるようになっている筈だから。せめて、手を繋いでキスぐらいは。それぐらいは出来る様になるから。

だから向き合いに行こう。

「ナカノに行こう」

ブルームが高度を上げて空へと舞い上がった。そのまま、Magを吸収してエンジンを稼働させ、砲塔を正面へと向けたまま一気にナカノへと向かって加速する。サーフィンをする様に足を軽く広げた状態でブルームに乗ったまま、

一直線にナカノへ。

自分の罪が今でも眠っている場所へと向かう。

悔しいけど、馬鹿どものおかげで自分の足りないものは見えた。終わってしまったものが見えた。鳩のおかげでどうすればいいのか、解ってしまった。

少し、急かもしれない。

だけど答えを待っている子がいるのだ。だとしたらここで止まらない。

朝の空を蒼い一条の線となって駆け抜けて行く。



ナカノ高校。

自分の通っていた高校である。そう言えば少し前までは高校生だったんだよなあ、俺は。それを思い出しながら校庭に着陸した。当然と言えば当然だが、校舎もグラウンドも荒れ果てていた。周辺には悪魔の反応もある。もう好き好んでナカノに残っている人間もいないし、悪魔の巣と化している。《エネミーソナー》からは懐かしい、ガキやインプの気配を感じる。

十束剣を抜いて肩に背負えば、その神聖な退魔の力があらゆる不浄

なる魔を、雑魚を近づけずに消滅させる。これを持ち歩けば少なくともこの低レベル共を一々相手する必要もなくなるだろう。

そこまで考えた所で十束剣をしまつて、代わりに習熟の意味を合わせて黄龍刀を取り出した。

……十束剣が怨念まで消しちまつたら意味ないからな。

もし、残っていたら話になつてしまふが。それでも残っている可能性はある。それを多少は期待している——酷い奴だ。そう思いながらも、校庭を越えて、そのまま校舎の中へと進んで行く。

いたるところに血の跡と破壊の痕跡が残されている。

目をつぶればここを必死に駆け抜けた記憶が脳裏に甦る……。悲鳴が、助けてという声がお前だけ助かるなんてずるいという声。それが鮮明に思い出せる。逃がそうとしてくれた先生は一瞬も持たずに死んだ。クラスメイトは天井から落ちてきたスライムに溶かされた。気が付けばガキと隣のクラスの子が融合して異形化していた。吐き気を覚えるも、それを飲み込んで、無言のまま、昇降口を抜けてから上へと、階段を上つて行く。

そこから三階へ——三年生の教室のある廊下へと出る。

ここも、所々赤く染まつている。今もガキが徘徊しているのを黄龍刀で素早く刃を形成して斬り捨てる。音もなく消滅したガキが死んだと理解する前に消え去つた。逃げ出した時と比べて、本当に強くなった。だが心の方はどうだろうか？

俺は、自分の罪に向き合える程、強くなれただろうか？

「……」

ガキを殺し、インプを殲滅し、彷徨う学生服やスーツ姿のゾンビを滅する。ゾンビたちに理性はなかった。話しかけようにも、もはや生前の人としての全てを失つていた。時折、混沌とした肉体が蠢いているのが見えた。悪魔と融合した成れの果て。急激なMagの増加に耐え切れなくてミュータントになつてしまった人間。言葉も意思もなく、生きているだけの肉塊も処理する。

そうやって悪魔を処理して進み。

かつて、自分が授業を受けていたクラスルームに到着する。扉は壊

れていて、壁にも穴が開いている。どうやら悪魔がぶち抜いたらしく、そのまま中に入れる様になっていた。

そしてクラスルームもクラスルームで、もはやかつて授業を受けていた場所の様な整いはなかった。机は薙ぎ倒され粉碎され、怨嗟がこびりつく様に爪痕が壁や床に残り、血の跡が残されている。

それでも、誰かの霊が残っているという事はなかった。

異界化している訳でもなかった。

このクラスルームを見て、理解する。

ここに特別なものはなにもない。ここで発生した悲劇は既に、過去のものなのだ。終わってしまった事件であり、それによって何かが変わったという訳でもないのだ。自分が固執し、そしてずっと見つめる事を避けていた出来事は、

今の崩壊世界からすれば、

「ありふれた悲劇だったんだな……」

それだけだった。

教室の中に進み、まだ無事な椅子を取り、かつては自分が座っていた場所にそれを置き、そこに座った。背を椅子に預けながら足を組み、ストレージからとあるものを取り出した。

鳴海から借りた煙草だ。まだ、返していなかった。だからそこから一本拝借し、それを口に咥えて、指のスナップで火花を起こし、火をつけた。煙草の吸い方は馬鹿から習ったばかりだ。だけどこのけむっぼさは正直、慣れないものがあつた。それでもちよつとだけ、この口の中に広がる苦さを味わいたかつた。

この感触が、苦しい。

「もし……スケジュール通りに進んでれば」

もはや季節とかそういう概念は消え去ってしまったのだが。それでも、経過した月日を考えると、

「卒業式を少し前に終えたぐらいになったかな……」

そうすれば俺も、ちゃんとした社会人になっていた筈だ。今とは、全く違う。普通の世界で、普通に学生としての時間を終えて社会人……或いは大学生になっていただろう。ああ、でも俺は勉強好きじや



ないし、たぶん大学は辞めて働いてただろうなあ、とは思う。

「卒業、したかったな……」

ちゃんと皆にさようならを言いたかった。だけどその機会はもう、永遠に来ない。過ぎ去ってしまった時の中で終わってしまったのだから。だからこの学校での出来事は全て終わり、それを知る人間もない。自分一人を除いて。

「ここに来れば、何かが変わる——とは、別に都合よく思った訳でもない」

覚醒とか、覚悟とか、そういうのとは縁遠い人間だと思っている。そういうのはアレ、湊とかライドウとかダンテとか、ああいう連中に相応しい言葉だ。ちよつと特別な才能があるだけで、自分は何かの主役という訳じゃない。

ああ、そう考えればステイヴンとは同類なのかもしれない。

彼自身は特別ではない。ただし、特別な才能を持って、それを完全に活かしているだけだ。彼は主役でも主人公でもない。それでも恐ろしく、強い。だけど普通に強いだけなのだ。きつと自分はああいうタイプなのだろう、と思う。

「きつと、罪に向き合うというのは、刻む事なんだろう」

その言葉に黄龍も鳩も言葉を挟まない。それでいいと思う。特別に何か、言葉を求めている訳でもない。そして何か、大きく変化したわけでもない。流石に、意識してから一気に改善しようとするのは、虫のいい話だったのかもしれない。それでもしっかりと、この惨劇の現場は胸に刻んだ。

もう二度と、この景色を忘れる事はないだろう。

そしてこれが既に終わってしまった事件である事も、忘れはしないだろう。

何をどう足掻いても、時は前へと進んで行く。そして生きて行くのなら——進み続けるしかないのだ。

本当に、本当にごめんなさい。

「だけど——お前らとの過去の時間よりも、彼女と一緒に居る未来の時間の方が、今の俺にとっては大事みたいなんだ」

だから忘れないし、胸に刻んで行く。何時か、この出来事も完全な過去として忘れるかもしれないだろう。だけどそれはまだ遠い、未来の話だ。

今はただ、俺は凄い奴なんだ。自分にそう言っつて、選択する事に胸を張る事しか出来ない。だけど、まあ、それでいいと思う。必要以上にここに引つ張られる様な事はたぶん——もうないだろう。

苦しみが終わつた訳ではないし、まだ罪に対して罰は執行されていない。

だけどそれを忘れる事もないだろう。

この口に残る、煙草の苦い不味さの様に、口の中に何時までも残るだろう。

だからアン達と会うまで、この煙草を吸い終わるまでここに残る事にした。苦さが口から消える所まで時間を過ごし、

そうしたら何時もの様に——いや、何時もよりも少しだけ前を向いて帰ろう。

まだ、やる事はたくさんあるのだから。

## 神州混沌行脚 VII

前へ。

ただ走る必要はない。

昨日よりも一歩だけ、前へ。

歩くような速さで、焦らず、ゆつくりと、自分のペースで。駆け抜ける方法もあるのかもしれない。だけどその必要はどこにもなかった。だから見つめ、そして理解し、忘れないように刻む——何時か、それが自然と自分の中から忘れられる日まで。それでいいのだと思う。

とりあえずは、俺が凄いという事だけは、ちゃんとと言えるようになった……気がするから。

小さいけど、大きな一歩だと思う。

そう言う訳で、ナカノ高校から帰還した。内心、ちよつときつぱりした気分だった。学校に行けばかつての級友たちが自分を呪ったりしていないか？ と思ひもした。だけどそんな事はなかった。全員、普通に死んでいた。そして誰も、何も残せてはいなかった。それが残念でありながら、少しだけすつきりする理由にもなった。もはや彼らが自分を恨んでいたかどうか、それを理解する手段はないのだ。それを聞き出す事は出来ない。

想像で補完するしかできない。だけど、たぶん呪ったと思う。普通に。

だってあそこは普通の学校で、普通の人間しかないなかったからだ。特別なナニカがあった、というのは特になかったのだ。だから自分も、必要以上に気負わず、忘れず、そしてそれでも生きて行く事を選ぶしかない。

だからナカノからシンジュクに帰ってきた。新宿の悪魔協会へと戻って来れば、ロビーにアンや他の女性型仲魔とクリスマスツリーにデコレートされてしまったスタマが待っていた。

「待て、我が家のファイナルウエポン一体どうしたお前」

「いや、何時も同じ姿じゃ可哀想だしちよつとおしやれしようかな？

って思ったんだけど……」

「なんか、ツリーの装飾に使いそうって妾が言ったらどこからともなくツリーが……」

俺達が持ち込みました、と背後でサムズアップを向ける馬鹿達が見えた。ああ、うん。君たちならやれそうだよな、と思いつながらスダマをDDSへと戻そうとすれば、

クリスマスツリー諸共仕舞われてしまった。

「……」

「……」

「……」

無言でDDSを起動し、スダマを召喚すれば、それにツリーが付属としてついてきた。そしてそのまま、再びDDSに戻す。無言でそれを眺め、腕を組み、首を傾げ、そしてもう一度DDSを確認し、《メリークリスマスはICBMで》等という称号を獲得しているスダマを見て、もう一度首をかしげる。メリークリスマス？ ICBMで？ 冬を核の冬にでもするのだろうか……？

「……まあ、いつか！ 一般業務に戻るからDDSにおかえりー」

そして考える事を放棄した。使えばその内わかるだろ！ ぶっ放す時が楽しみだなあ！ いやあ……本当に……もう、合体も必要ないし、勝手にレベル上がってるし、というか勝手にスキル進化してたりするし……正体、帝都の時にちよつと見えてしまったというか。もしかして、夢見ている状態だからカオスなのだろうか？ まあ、深く詮索しない方がアレ、心に優しいからそれでいいや。仲魔どもをDDSへと叩き込んで行く。

『実家の安心感』

『なんだかんだでこのDDS内って安心するのよね』

『あ、そのの棚に置いてあるサモサ取ってくれないかな？』

『むう、これでいいか未来王』

『ありがとう、コウリユウ』

「地味にDDS内がどんな風になってるか気になる」

とはいえ、今はこれでいいや。そう思ってCOMPをポケットの中

に叩き込み、そして丸一日待たせてしまったアンへと向き直る。そして軽く片手で頭の裏を搔く。

「結構待たせてごめんな？」

「ん……もう、大……丈夫……？」

アンの首を傾げながらの問いに、人差し指を口元へと持って行く。

「その答えは誰も居ない時に……な？」

「ん」

周りの馬鹿がひゅーひゅー言っているので中指を突き立てて笑いながら、アンへと視線を戻せば、

「ん」

今度は、前よりもちよつと嬉しそうにそうやって声を零した。彼女の微妙な表所の変化を観察するのが、ちよつとした自分の楽しみだった。だからそれが見えて自分も満足気なのだが——周辺では熱そうに服やファイルを使って自分をばたばたと仰ぐ連中が続出している。もしかして狂ってしまったのだろうか……？

まあ、それはともあれ、これで漸く所用を終わらせて合流完了。

本来の目的であったレベリングと情報収集へと戻る。その為にもカウンターへと向かえば、白髪をぼさぼささせた、眼帯で片目を覆った、タンクトップ等という超ラフな姿の中年が座っていた。

「やあ、楽しそうだったけど良い時間は過ぎせたかな、サマナー君。僕も一緒に遊びたかったんだけどね。何故か上司が率先して遊びに出ていっちゃったからね。なんか僕が取り残されちゃった……」

「すまないね！」

後方から謝罪する意思ゼロの声が飛んできた。それを眼帯の受付は溜息を吐きながら、まあ、慣れてるからいいや、と呟いた。

「ああ、僕はおでん君とでも覚えておいて。これから悪魔協会であれこれする時は僕が専属でお仕事するから。長い付き合いになるかもしれないから宜しくね」

「知ってるかもしれないけどキサラギ・リユージだ。なるべく長い付き合い合いにしたいから宜しく」

握手を交わし合う。それで挨拶が終わった所で、

「とりあえず、君がいない間に話は聞いておいたよ。高位悪魔と戦いたいんだって？ 中々物騒だけど今の日本には必要な事だろうし、悪魔協会は全面的に君を支援するつもりだよ……まあ、高位サマナーを敵に回したくない、という一部の本音もあるけど」

どこことなく、緩い気配でおでんが資料を取り出した。なんとというか、シンジユクには凄い個性的な連中ばかり集まるよなあ、と思う。余り隠していないから解るが、目の前のおでんもどこことなく、神格の気配を感じる。特徴から大体正体は解るものの、転生体か本人かガーディアンか、全く判別がつかない。なので、詮索する事を止める。そしておでんが広げたものを確認した。

「まずは中国地方の島根県。ここではヤマタノオロチが確認されたよ。既に街を六つ程滅ぼしているね、これは。これ以上被害を広めたい為にも早急な対処が必要そうだな。だけどこれだけ暴れば、スサノオが出現しそうでもあるんだよね……そう考えると場合によってはどうにかなるかもしれない。予測レベルは79。一応はクズノハの方が対処しようとしているらしいけど、世界崩壊のごたごたで身動きが取れないらしいね……」

初手からかなりレベルの高い相手の情報が出てきた。だがそれで終わりの様ではなかった。

「次は四国だ。ここにはガイアの日本最大支部……つまりは日本における本部があるね。どうやら世界崩壊に対抗する為にイザナミを呼び出そうとして失敗。黄泉平坂を開いて四国は黄泉の国と化した。そこに君臨したのは冥界の女王ヘル。四国に降臨したヘルはどうやらそのまま、四国をニヴル Heim として上書きしようとしているみたいだね。これにガイアが現在抵抗中。僕の予測だけど、まあ、放っておいても良いんじゃないかなあ？ とは思うよ。連中も秘密兵器の一つや二つぐらい仕舞い込んでいるし。これはレベル大体68だね。ヤマタノオロチと比べると少し弱いかな？ ……弱いつて言えるこれ？」

で、まあ、と話を続ける。

「最後は北海道。北海道は現在本州から封鎖されているけど、これを

処理したのはどうやらメシア教の様だね。情報を確認したところ、どうやら北海道ではチエルノボグとハイグロトが降臨、両者が領土争いをしてそれをメシア教が叩いているみたいだね。作戦終了までは北海道は封鎖されている……けど、まあ、君と黄龍なら日本国内でいけない所はないだろうね。ここはレベル63と61。他の所と比べればややレベルは下がる代わりに二体相手にしなきゃならないね」

ただ、とおでんは付け加えた。

「でもメシア教の日本に居る大司教の正体がウリエルだった気がするんだよね。たぶん本気になったら最後の剣ばつさりするからそこまです心配する必要はないんじゃないかな」

「ひでえラインナップだぜ」

「うん、まあ、高天原の神々が降りてくる前にどいつもこいつも基盤を作ろうとしているからね。こんなもんだと思うよ。それで、どうするかな?」

南はヤマタノオロチが暴れながら四国が死国になりつつあり、北を見ればハイグロトvsチエルノボグで北海道が死んでいつている。どこを選ぼうとも、地獄である事に間違いはなかった。そしてどれに手を出さなくても、勝手に問題は解決するだろう、というのが見えた。当然の話だが、俺は主人公ではない。だから俺が関わらなきゃ救えない、俺が居なきゃならない、なんてことにはならない。

唯一の例外はこの世界の再生だけで、それ以外に関してはノータッチでも回り続ける。英雄症候群なんて起こさず、

どこまでも、自分らしく。

俺らしく。俺という人間を思い出して。そうやってやっていこうと決める。俺はヒーローでも英雄でもない。大きな志もない、ただの力あるモブだ。だがそれはそれとして、

自己主張の激しいモブでも別に悪くはないよな? とサムズアツプを向ける連中を見て思う。連中から視線を外して、アンへと向けて、

「日本国内を巡るデートとかどうよ」

「一緒……なら、楽……しい、よ」

アンの返答を聞いて、答えは聞こえたようなものだ。おでんに振り返りながら、笑みを浮かべた。

「クズノハガイアメシアに恩を売りつけてくる」

「必要以上に働いても新しい仕事が増えるだけだよ？ それでもやるのかい？ ー、なら仕方がないなあ。位置情報は直接君のCOMPに送るからちよつと出して貰ってもいいかな？ ……うん、このアプリなんだけど今送るのね？ うんうん、これ、ダル君が職を失ったから暇潰しに組んだんだけど、ちよつと売りに出そうかと思ってるアプリで」

「終末での無職率高くない？」

『末世だからね！』

『役割終わった連中は大変よねー』

なんか、もう、ほとんど答えの様なもんだが、とりあえず就職に関してはお祈りしておく。それはそれとして、COMPに新しく登録されたアプリは《ザ・ネスト》というアプリであり、悪魔協会で請け負った依頼をチェックしたり、合流地点などを地図と合わせて表示したり、記録を取る事で仕事の遂行をサポートする為のアプリの様だった。これがあれば現地までナビゲートしてくれるだろう。

アプリのインストールが完了すれば、そこに三つの依頼が追加されている。

・ヤマタノオロチ再殺

・死国解放戦線

・北海道決戦の横槍

・生きて帰ってくる事

……いや、四つだった。おでんへと視線を向ければ、ウイंकが帰ってくる。

「おっさんのウイंक貰っても……」

「あー！ 酷いなあ！ 折角格好つけたのに！ ……でもまあ、個人的に応援してるよ？」

「おう」

片手を持ち上げてさよならを告げながらアンと一緒に悪魔協会の



外に出る。COMPをポケットの中にへと戻しながら、軽く体を捻つて、伸ばして、そしてこれから達成するであろう日本南北高位悪魔虐殺マラソンの準備に入る。ぶっちゃけ、消耗品の方は帝都で結構入手しているのだ。クラリオン戦のお礼とかで。神経弾とかも大量に今はストックしてあるし、取り立てて買い込む必要のある物はない。

「ランチは島根か四国でなりそうだな……」

「何が……ある……?」

「俺もあっちの方はあんまり詳しくないからな……《あほかりぷす》みたいなお店あると良いんだけど」

「今度、二人で、行って……みたい」

アンのその言葉に振り返り、そうだね、と小さく笑ってから視線を合わせ、軽く頷いた。そこから視線を空へと向けて軽く跳躍し、そのまま空中で逆さまになる様に大きく跳んだ。シンジユクの姿を眼下に収めながら、アンと共に跳躍した空の中で、

「コール、コウリュウ!」

DDSプログラムから黄龍を召喚する。新宿の空に黄金の鱗の龍神が出現し、その出現と共に黄金の風が吹く。不浄を浄化しながら木っ端悪魔を気配のみで苦しめ、消滅させるのは高位悪魔特有の特権でもある。日本の、土地の化身とも呼べる黄龍を呼び出し、ライドウがかつてそうやったように頭の上に着地する。片膝をつく様な姿勢で安定させながら、横に並ぶアンと手を結ぶ。

「ヤマタノオロチ退治か……龍神として負けられぬ戦いになりそうだな、主殿よ」

「なに、俺一人じゃ無理だけどお前らが居てくれるならなんとかなるさ。行こうぜ、マラソンの時間だ」

黄龍の頭の上に乗る、黄龍が空を泳ぐ様に飛翔して行く。今、物凄く目立っているんだろうなあ、と思いつつも少しづつ、それを楽しめる様になっていた。だからそのまま、悪びれず、反省する事もなく。黄龍に乗って島根県へと向かう。吹き抜ける風の感触が気持ちが良い。

今なら少しだけ、勇気を出せる。

だからアンと頭の上で並んだ所で、此方から手を握った。

◆  
レベルが70を超える黄龍であれば、国内の移動にほとんど時間を必要としない。そもそも移動すれば簡単に音速を超過する領域にこのレベルではあるのだ。だとすれば、移動に時間という概念はほぼ存在しない様なものだ。後は周辺へと被害を出さない様に考慮すればそれで終わりである。音速を出してもどうせ、自分の体や防具が吹っ飛ぶような事はない。何せ、これが人類最高峰のスペックだからだ。そしてそうやってシンジユクを出て少し、中国地方へと突入する。そこでヤマタノオロチが封印されていた島の方へと向かおうとして――その必要がなくなったのを目撃した。

簡単に言えば中国地方は蹂躪されていた。  
凡そ幅、80メートルほどの巨大なナニカが大地を這いずる様な痕跡が大地には刻み込まれており、そこには水が流れている。それが一切周辺の地形や建造物に頓着する事無く移動し続ける様な痕跡が残されていた。それによって山が真つ二つに割れて、そして都市が何個も壊滅しているのを黄龍の頭の上から眺める事が出来た。

移動するついでに軽く攻撃した、という感じの痕跡が見える。放たれたのは……雷撃と水撃だろうか？ 空気が軽く帯電しながら大地や建造物が焦げているのが見える他、都市が陥没しながら水に沈んでいる。炎が見えないので燃やしたわけではなさそうだ。ただそれでも壊滅的被害が出ている様だった。人の気配は死滅しているし、都市も完全に破壊されている。

これは電子機器の類は全滅してるな、と確信させる。

「ヤマタノオロチの伝承、酔って負けて尻尾に叢雲の剣がある事以外知らねえんだよなあ」

『ヤマタノオロチは水害の化身よ、マスター。どうにもならない荒れ狂う水流を龍として見立てたのが存在としての始まりね。そこに伝承と信仰補正が入って変化を持って今の怪物的な龍となったわ。言

い方は悪いけど現代の概念を悪く受けた一例ね』

ベルの説明にほほお、と呟く。確かに信仰やら創作の影響を明らかに受けている悪魔とかは存在している。八岐大蛇もおそらくはそういう悪魔の一つなのだろう、と判断する。それはそれとして、これだけ甚大な被害をまき散らしながらも停止せず、進んでいる化け物にはこの世からご退場願いたいのだが。

八岐大蛇の行進はどうやら四国方面へと続いているようだ……本能的に強敵を求めているのかもしれない？ どちらにしろ、

「追うぞコウリユウ！」

「任せよ」

お仕事の時間だ。コウリユウの頭の上に居る間に十束剣を引き抜き、それを背に回す。最近知った事だが、神秘の剣だけあってこいつは握ってなくても勝手に浮いていてくれる。なので背中に戻しておけば背負ってなくてもそこで位置を固定してくれる。それに合わせ、先制爆撃の為にブルームを引き抜く。

『お風呂に入ったなら窓の外にオーロラが広がっていた。私はその輝きに魅入られる様に外へと飛び出した。北極の空気を全裸のまま浴びながら凍り付いて行く感触に死を覚えた。だがその光景は余りにも美しく、たわしだった』

『最後まで頑張つてよお！』

『最後の最後に電波が戻ってしまったの……』

スダマをブルームに先に装填しておく。コウリユウの周りを流れる風にライドウの外套が揺れるのを感じながら、視線をアンへと向けた。

「俺とコウリユウとラーマと駄フォックスで先制取るから、アンとベルは後から来てくれ」

そう言うのとアンがむー、とちよつとだけ、頬を膨らませた。可愛い。だけどそこで表情を作ってから、何かに気付く様に変えた。そして小さく笑みを浮かべた。

「最初……と、逆……だ、ね」

「……ああ、そうだったな」

最初はアンに守られていた。女の後ろに居なきや戦えない、恥ずかしい奴だった。だけど今は違う。前に出て彼女を守れるだけの強さを得た。そうやって変わった自分を、少しだけ誇らしく思う。

今度は、俺が前に出る番だ。武器はまだまだ未熟だが、前衛でも戦えるように武器の扱い方はラーマから前々から学んでいる。それを少しずつ、自分の形にして、力へと変えて行くのだ。

一歩ずつ、進む為に。

だから黄龍の上、ブルームを何時でも射撃できるように構えつつ、這いずる様な川の痕跡を追いかけて行く。それを追えば追う程川の水は荒れ狂い、激しい水流が周りの空間を削りながら流れて行き、空を暗雲が覆って激しい雨が降り出す。

雷鳴が轟く中、

「姿を捉えたぞ……！」

島根県を横断蹂躪する八岐大蛇の姿を見つけた。八首の龍神は背丈が余裕で100メートルを超えるだけの化け物サイズを誇っており、八つの首はそれぞれ、別方向を眺めながら這いずり、それだけで地震を起こしながら周辺地形を変形させて進む。八岐大蛇が引き連れる暴風雨と共に周りの空間は削れていき、勝手に崩壊する。

「上位悪魔が存在するだけで脅威つてのはよく理解できた」

『これを達成すれば晴れてドラゴンスレイヤーね』

『魔の退治であれば僕にお任せ！』

『新生した妾の力、見せてやろうぞ』

『何時も通りラストキャンディの仕事が始まる……我は鳩、ラストキャンディの化身……！』

仲魔たちも気合十分。約一羽、アイデンティティクライシスを発症しているが雑炊になったりする鳩の事に関しては今更なので無視するとして、黄龍の頭の上に立ち、飛び降り、仲魔を召喚できる体勢を整えた所で、

超人の視界が、八岐大蛇に接近する小さな姿を見た。

それは音速を超過した速度で大地を割る様に飛び出し、紅色の女物の着物を着ながらもどこか、男の様な、女の様な、中性的な肉付き、顔

をした長い黒髪の人物であり、それが悪魔であると《ハニー・ビー》の反応から見て取れた。

そしてそれは此方が八岐大蛇への攻撃を開始するよりも早く、八岐大蛇の足元へと、認識される前に到達し、刀を引き抜いた。

「天軍の剣ッ!!」

巨大斬撃を放ち、その一撃で八岐大蛇を数百メートル吹き飛ばした。

その一撃で刀が粉碎され、折れた。それを投げ捨てながら登場した人影が中指を八岐大蛇へと突き立てた。

「俺の草薙剣……天叢雲剣を貰いに来たぜ、蛇！ さっさとくたばって俺に献上しな」

当然、それで敵を認識した八岐大蛇は吹き飛ばされた時に発生したダメージの全てを完全回復させてから攻撃者へと視線を向け、八つの首、全てを殺意を持って向けた。交戦直前に横取りされたなあ、と思いつつも、口から出て来る言葉は違っていた。

「新たな殺戮者のエントリーだ……!」

『なんで日本神話ってキチガイ系DQN系多いんじやろな』

永遠の謎ではあるが、このまま、八岐大蛇は放置できない。

そう、経験値とドロップの為に。

そう——我々も新たな殺戮者としてエントリーするのだ……!」

## 神州混沌行脚 VIII

COMPへとコールが入り、音が聞こえて来る。

『此方、クズノハ。此方、クズノハ。応答願う——悪魔協会のサマナーよ、此方クズノハ。応答願う』

COMPから入ってくる着信に素早く返答を返す。今、地上では八岐大蛇と乱入者が戦闘している。

「はいはい、此方八岐大蛇殺戮し隊。ご用件をどうぞ」

『っ！ 援軍感謝する、現在クズノハ四天王は丁度海外遠征中で国内には存在していない。クズノハ四天王なしでは我らのレベルは60代が平均、止められはするが犠牲は出る。だがそうすると……』

「いや、事情は大体察せる。それでどうしたらいいんだ？」

『八岐大蛇の討伐を頼みたい。虎の子の霊的国防兵器であるヤマトタケルノミコトを出したのはいいが、ライドウ以外に御せるものが居なくて逃亡してしまった……おそらくは八岐大蛇へと向かったのだろうが……』

地上から轟音が聞こえる。龍の咆哮と地形が吹き飛ぶ音が聞こえる。

『……そつちに居るみたいだな！』

「うん」

『では此方は進路上の避難活動を行っている。幸運を祈る、サマナー』  
そう言つてクズノハからの応答が聞こえなくなる。現場に居ないから何をしているか解らなかつたが成程、もう避難誘導をしていたのか。レベル60代だという話だし、そこは心配いらないだろう。寧ろ問題は地上で戦っている、倭建命の方だ。どうやら国に縛られていたらしいが、世界崩壊とライドウ不在が原因で完全に解き放たれてしまった様だ。

まだ戦闘前の内に《アナライズ》を行つておく。

災厄 ヤマトオロチ Level79

英雄 ヤマトタケルノミコト Level71

『普通に戦えるレベルね』

ベルの言う通り、普通に八岐大蛇と戦えるだけのレベルを持っていて。とはいえ、どうやら持ち込んでいた刀は最初に壊した一本だけだったらしく、それ以降は攻撃スキルを使わず、拳と蹴りで八岐大蛇と戦っている。拳を振るう度に地形が変わり、そして八岐大蛇が殴り飛ばされ、数百メートル高くバウンドしてからそれを倭建命が大地へと向かって叩き落してダंकを決めている。

攻撃を行う度に地震が発生し、八岐大蛇からの攻撃を倭建命が全て、回避か打撃で相殺している。

だが、

『このままだと押し負けそう……かな?』

八岐大蛇は喰らう端からダメージを全て完全回復していた。何らかのスキル……の様に思える。だがそれとは別に、八つの首がそれぞれ別々に魔法を使い、同時に攻撃等を行っており、バフとデバフと攻撃と回復と妨害が首によって同時に連続で発生している。倭建命の動きは派手で、かなり威力が高い。だがそれとは別に、行動回数が八岐大蛇は圧倒的に勝っている。

流石神話の時代でも酔わせて弱らせる必要のあつた蛇龍だけはある。恐らく伝承をなぞる事で弱体化させる事は可能なのだろう。悪魔は概念的な存在だから、そういう逸話や伝承を再現する事によって召喚出来たり、弱体化させる事が可能だったりするのだから。だから八岐大蛇もそうやって弱体化出来るのだろうか、

そんな暇はない。

「じゃ、日本全国神格殺戮マラソン始めるか」

呟き、アンの姿を盗み見て、それから一気に黄龍の頭の上から飛び出す様に跳躍した。落下しながらブルームを右腕に抑え込み、両腕で抱える様に握り締め、トリガーに指をかけた。同時にDDSへとアクセスする。ラーマを呼び出し、空中でラーマも片手を持ち上げた。頭上では黄龍がメギドラオンを圧縮して飲み込んだ。ラーマが暗雲の上に力を集約させた。射線が被らない様に空中を蹴って、横へと跳びながら構え、三方向から同時射撃が行えるように場所を確保した。

「俺達からの挨拶だ」

「是非とも受け取ってほしい」

「では良いか？ 死ね」

ラーマの腕が振り下ろされマハカーラが放たれる。黄龍の口から燃烧されて昇華されて生まれたメギドラファイアが吐き出される。トリガーを引いてクリスマススペシャルエディションスタマドラオンが発射された。そういえばお前クリスマス仕様だったな、とトリガーを引いてから思い出した。

三方向から同時に発射された破壊が八岐大蛇という怪物を着弾点に同時にヒットする。

『クリスマス消滅のお知らせ』

CO—OPによって連携された一撃、《トライ・ディザスター》とでも呼ぶべきそれが衝突し、一瞬で八岐大蛇を飲み込んだ。その爆発からはなぜかクリスマスに使う装飾品が飛び出してくる不思議。爆発の色も実にメリーな色をしており、またスタマ先輩やらかしてる……と一瞬で解る光景だった。それでも破壊力自体に低下は一切ないどころか、CO—OP連携により倍増し、連続爆破が地上を飲み込んでから、八岐大蛇が進んできた方角へと向かって爆裂が連鎖する。それに飲み込まれ、押し出される様に八岐大蛇が吹き飛び、しかしその爆発の内部から紫色の光が見える。

▽龍の眼光

▽突撃の狼煙

▽突撃の狼煙

▽蛇頭八真

メギドラオン

攻撃を喰らっている時間そのものに割り込んで極限まで強化された八岐大蛇が八つの行動を一つの行動に圧縮した。それによって八つのメギドラオンが一度に同時に放たれた。一つ一つが都市を消し飛ばし、地図から消し去るだけの破壊力がある究極の万能魔法。

「チエフエイ、鳩」

チエフエイが召喚され、八連メギドラオンの前に立たされた。八つの尾が折り重なり、それが盾の様に動きながら正面からメギドラオン



の連打に衝突した。接触する度に尾を中心として破壊が左右へと別れて行き、左右へとメギドラオンの破壊が数十キロ単位で駆け抜けていく。チエフエイが落ちないように鳩がラストキャンディと常世の祈りを同時に発動させ、チエフエイを支援する。

尾を焦がしながらもチエフエイはそれを耐え抜き、

「《メギドラオン》を禁ず」

八岐大蛇のメギドラオンを封じ込めた。破壊の直後に新しく吐き出そうとした八岐大蛇の動きが一瞬停止する。メギドラオンを更に連続で吐き出そうとしたが、それを封じられたが故のエラーだ。チエフエイ八尾は、万能耐性をついに取得した。他の仲魔では鳩のみが保有するそれは、究極の破壊であるメギド系列の魔法やスキルに対して、巻き込まれても耐える事が出来るとい嬉しい耐性になる。それに加え、チエフエイは自身が受けた魔法の類を一定確率で封じる事が出来る。

今までは後衛からデバフを専業としていたが、八尾となって、一気に前線で壁となりつつ同時進行でデバフを行えるように進化していた。

ある種、存在そのものが害悪な能力構築とも言える。

前に出て来た攻撃を耐えながら手段を潰しつつ能力を下げても多重に状態異常を重ねていく。これ以上ない害悪だった。

どっかの糞鍵を思い出す。いや、でも、まあ、この悪魔業界、基本上に行けば行くほど神話レベルでインフレするしこれぐらい許されるのかもしれない。それはともあれ、八岐大蛇が動きを停止させたので、その瞬間にチエフエイが更に八岐大蛇と視線を合わせた。

それだけで脳髓が蕩けた。片眼鏡に表示される八岐大蛇の状態にCHARM、STUN、CLOSE、SLEEPが追加されている。

「お休……みっ！」

そしてラーマが左右に広げた手を閉じて合わせた。それに従って八岐大蛇の両側の台地が盛り上がり、動きを停止した姿を挟み込んで飲み込み、一つの山となってそのまま封じ込めた。とはいえ、山程度で八岐大蛇を止められるとは思えない。状態異常が解除されたら即

座に吹き飛ばしてくるだろうとは予測できた。だけどこの時間は欲しかった。

「お前、ライドウ……の外套を被ってる割にクズノハじやなさそうだな」

振り返れば少しだけはだけた着物を直す倭建命の姿が見えた。そう言えば今羽織っている外套は帝都ライドウのもの——つまりはクズノハのもんだったなあ、と思い出す。ライドウからのプレゼントだから外してないのだ。

「いや、俺はクズノハじやないよ。ちよつとした縁があつてこの外套は貰っているだけで。フリーのサマナーでこの蛇を始末する依頼を引き受けただけだよ」

「へえ、あの頑固者ライドウ以外にそれだけ戦える奴がいるとはな。まあ、いいぜ。一緒に戦いたいってなら別に構わないぜ。俺としちや楽になるならそれで構わないしな」

「んじや、共同戦線宜しくな」

「おう、あの蛇ぶつ飛ばすぞ」

手を出せば倭建命が手を出してそれを叩きあつた。これで共同戦線を確定した。そしてその直後、八岐大蛇を封じ込めていた山がその内側から消し飛んだ。それと同時に雷雲が激しく鳴り響きながら豪雨が降り注ぎ始める。八岐大蛇から広がる気配が空間を侵食しながら異界化を開始する。どうやら戦う為に自分に有利な空間を形成しようとしているらしい。

「コール、ベル」

「さて、格上相手の戦いね。でも合体でスキルと魔法を揃えている分、此方の方が有利よ。相手の大きさにビビらず冷静に対処すれば負ける相手ではないわ」

「ふあい……と、おー」

育成組を召喚する。ベルが出現し、そしてアンが黄龍から降りてきた。黄龍はある程度の高度を維持しながら、力を溜め込み、八岐大蛇に対するリアクションの準備をしていた。此方が仲魔を召喚し終わり、黄龍刀の柄を握ると、

「ところでお前、なんか刀か剣ないか？」

「はい」

十束剣を投げ渡す。それを受け取った倭建命の表情が笑みに歪んだ。ちよくちよく視線が十束剣へと向けられていたのは見えていた。なにせ、これは素戔嗚が八岐大蛇を討伐するのに使用した剣だ。八岐大蛇を討滅するのであれば、一番相性の良い武器になるだろう。

「はは、中々解ってるじゃねえか。テンションがダイブ上がってきたぜ、これは」

上機嫌に十束剣を握り、それを眺めると、肩に担ぎ——今までの粗暴な気配が消失した。代わりに深海の底に居る様な、静かな気配を纏った。これが日本神話の神殺し、神話最強の剣士の気配か、とまだまだ、自分の先の遠さを自覚しながら、

布陣を終えて、八岐大蛇を見た。

八対の目を全て殺意で赤く染め上げた八岐大蛇は豪雨で地形を段々と水没させながら自分の力を高めて行く。それを眺めていると、ベルの声が聞こえて来た。

「良い、サマナー？ レベルが70代を超えればもはや戦いのスケールが変わってくるわ。攻撃一つで山や街が消し飛ばし、範囲を縮小してもそれだけの威力が込められているわ。誤射した場合の危険性、解るわよね？」

その言葉に八岐大蛇へと視線を向けたまま、頷く。ベルが言葉を続けた。

「だから高レベルでの戦いのアドバイスよ。同時攻撃はなるべく止めなさい。場合によってはお互いの攻撃を相殺し合ったりする事になるからね。その代わりに、攻撃から次の仲魔へと攻撃を繋げるように連携する事を意識しなさい。その方が効率的に攻撃を重ねる事が出来るわ」

「サンキュ」

ベルに感謝を告げて、八岐大蛇を睨んだ。踵まで水に水没する様になった所で、八岐大蛇が咆哮を響かせた。

そしてその眼光が輝いた。

## ▽龍の眼光

「だが駄目じゃ」

眼光に視線を合わせ、瞬間的なブレインハックに近いCHARMをチェフエイが叩き込んだ。八連続で発生する筈だった龍の眼光がそれによって機能停止する。

「さて、レベルが低いからって別に何もできない訳ではないって事を教えようかしら」

ベルがかつて豊穡と雨の神だった頃の権能の一部を限定的に開放した。八岐大蛇が生み出した豪雨のコントロールを奪取し、八岐大蛇を強化していた雨を停止させた。

「くるっぽー」

「イケメン、下準備タイム！」

「もうお前男じゃないだろ」

《ラストキャンディ》と《突撃の狼煙》が発動し、一瞬で能力が限界まで強化された。ストレージから取り出した反魔鏡を取り出して使用する。溶ける様に消えていく数千万円。だがそれと引き換えにマカラカーンが発動する。鳩がラストキャンディに行動を割いている以上、安全性を取るならこれが一番だ。

「はは、こいつはご機嫌——だなっ！」

そして最大限の支援を受けた状態から十束剣を背負った倭建命がそれを振り下ろし、《天軍の剣》を再び放った。大きく足を目の前の大地に叩きつけながら後ろから前へ、そしてそのまま斜め下へと抜けて行く様に全力で倭建命が剣を振り抜けば、その軌跡が極大の斬撃となつて、十束剣が保有する神聖さと混じり合い、魔を滅する極閃となつて放たれた。

八岐大蛇がそれに飲み込まれた。斬撃が八岐大蛇を飲み込んでもその背後へと突き抜け、地平の果てまで貫通してあらゆる魔を浄化し、滅する。それを八岐大蛇があらゆる妨害を乗り越えて復帰した。その傷はダメージと同時に癒え始める。

「だが駄目だ、それは許さない」

ラーマの権能。魔に対する超特攻の能力が発動する。その瞬間、八

岐大蛇の傷が癒えなくなった。八岐大蛇がそれでもダメージを首の一つに押し付ける。全てのダメージを背負った首が八岐大蛇の代わりに死亡し、腐れ堕ちる。

「まーかじゃーま、おん」

そして残された首に対してアンが魔法を封じ込める。八岐大蛇の支援魔法をこれで封じ込める。それに怒りを燃やし、咆哮が轟く。

「だが駄目じゃ」

チエフエイ、先手で行動を失敗させてから待機していた状態から即座に行動、再び瞬間魅了で八岐大蛇の行動に介入して失敗させる。

「さあ、たったの一撃で百回は死ぬ準備は出来たかしら？」

「運命を捻じ曲げる。そう、これは心臓へと突き刺さる一矢」

ベルが《魔王の号令》を発令する。概念的な弱点、属性による概念的なダメージ、それを限界まで踏みにじる様に引き上げた。それと同時に、ラーマが一撃の必殺率を捻じ曲げて上昇させた。あらゆる行動が致命傷に繋がりにやすくなる。

「うーいちゃ……めっ」

人修羅から《ゼロス・ビート》が放たれる。灼熱雨が降り注ぎながら水分を蒸発させる。それと同時に八岐大蛇の皮膚を溶かし、それを周りの地面に接着する様に溶かしていた。声と言っている事は可愛いのに、やっている事は欠片も可愛くなかった。寧ろ恐ろしかった。でも好き。

八岐大蛇の物理的な行動を物理的に封じ込めた。

「《テトラカーン》……これで備えは万全であるな？」

スタマの再装填を完了させれば鳩が駄目押しの《テトラカーン》で物理反射を付与した。これで物理魔法共に反射状態。急に八岐大蛇がカウンターを決めてきても無傷で乗り越えられる。それを貫通できそうな《メギドラオン》に関してはチエフエイが封印したので、問題は無い。その上で魔封状態になっている。魔法は放てない。

「そんじゃ、さよならだなっ！」

「メリークリスマスはどこへ消えた!!」

『ここだよー』

動けない八岐大蛇に容赦なく《天軍の剣》と共にスタマドラオンを叩き込んだ。クリスマスカラーに爆裂しながら耐えようとする八岐大蛇の頭上から《メギドファイア》が降り注ぐ。圧縮されたメギドラオンのブレスが殺す為を削ってまで覚醒しようとした八岐大蛇の動きを物理的に封じ込め、押しつぶす。その衝撃で八岐大蛇が鎮座する大地が蒸発し、融解し、日本に穴を生み出しながら、熱によって融解する事でマグマで満たされた穴に八岐大蛇を叩き込んだ。

「もはや妨害はいらなそうじゃな！」

「敵が高位になればなるほど、重要なのは一方的に状況を整えて蹂躞する事よ。常に先手を、上手を取って相手を封殺する。この戦術の正義っぷりは何時の時代も変わらないわ」

「さあ、もう一発だ」

マグマの中から這い上がろうと足掻く八岐大蛇に《天軍の剣》と続けてスタマを射出する。連続で爆発し、八岐大蛇が埋まっていた大地そのものを消し飛ばし、その背後にある地形にあった全てを吹き飛ばしながら更地に変え、日本の狭い国土を更に削った。受けるダメージの全てを一つの首へと集約して行くことで、八岐大蛇はこの状況を乗り越えようとした。

特攻とも言える十束剣の極閃を受け、その身はぼろぼろに削られながらも、酒などによる弱体化が入っていない分、致命傷に届いても即座に首を犠牲にして耐え抜いていた。腐り堕ちた首は全部で四つ、まだ八岐大蛇の首が半分残されている。そこに再起の可能性を巡るも、「羅刹王すら一撃で滅する、究極の奥義を見よ」

ラーマが弓を抜き、それを構えた。極限まで強化を重ね、弱点を看破し、それを拡大させ、そして即死させられる状況まで持ち込んだ。完全に封殺された八岐大蛇はスタマ弾と倭建命が放った極閃の影響で動きを封じ込められている。

故に、外す理由は存在しなかった。

「ブラフマーストラ」

静かに、太陽弓サルンガから奥義をラーマが放った。太陽そのものとも表現できる一矢は八岐大蛇を貫通し、日本国土を抜けてそのま

ま、外の未定義領域に達して消滅する。

だが八岐大蛇を貫通したその一矢は抜けた時点で役割を果たして  
いた。

「十度蘇る羅刹王すら一撃で滅した矢だ。果たして君は羅刹王すら超  
えられるかな？」

ラーマの声に返答する様に、八岐大蛇がその内部から膨張し、太陽  
と見間違う様な劫火を体内より炸裂させながら破裂した。先ほどま  
で蛇神が存在していた空間を空まで届く火柱が包み込み、何秒経過し  
ても消えない光となって命も魂も燃やし尽くして再生も蘇生も許さ  
ずに消滅させる。

「……ま、超えられる筈もないか」

DDSと《エネミーソナー》から八岐大蛇の反応消失を確認。それ  
と同時に膨大なMagが経験値となって収集されて行くのを感じ取  
る。また一つ、自分の強さが増して行くのを感じながら、依頼を完了。

これで島根県が八岐大蛇に悩まされる事はもうないだろう。殺し  
方が多少というか、かなり酷かったしもう二度と出てこない事を祈  
る。だが同時に、これだけのレベルの戦いが出るのだという事を知  
るにもいい機会だった。まだ高レベルになったばかりで、力を持て余  
している。

もうちよつと何度か高位悪魔と戦って、この力の使い方をちゃんと  
学ぶ必要がある。

確かな手応えを感じつつ、拳を握った。

## 神州混沌行脚 IX

「高位になればなるほど、概念的な行動が増えて来るわ。言葉遊びとも言うけど。まあ、それだけ存在として高位であるという事でもあるわね。代表的なのは時間軸に介入して自分の行動を増やす《眼光》と呼ばれる奥義ね……まあ、さっきのはかなり上手くいった例ね」

「成程なあ」

ベルの説明に納得していると、此方へと向かって投げられたものをキヤッチした。十束剣だった。見れば倭建命が軽くマグマを払いながら剣を片手に戻ってきた姿が見えた。その手に握られている剣は十束剣にも負けず劣らず、凄まじい力を秘めた剣であるのが一目瞭然であり、それが手に馴染むように、倭建命は握っては握りを緩めるのを繰り返していた。どうやら、目当てのものを手に入れる事が出来てご満悦の様子だった。

「やっぱこれだな。これがねえとしつくりこないんだな、これが……どうした、妙な視線を向けて」

「いや、レベル的に問題ない事は解ってるんだけどさ……」

肩にマグマがついているのを見ると、ちよつと妙な気持ちになる。数か月前までだったら即死案件なんだよなあ、と倭建命が肩のマグマを払い落すのを目撃した。今では自分も立派な超人、マグマの中を泳いでもまるで熱く感じないだろう。そのまま無傷で上がって来れるレベルで肉体の次元が違う……まあ、当然とも言うかもしれないが。

「れべる、あーっぷ」

「私もこれでレベルアップね」

アンとベルの言葉にDDSを確認すれば、二人共レベルが上がっているのを確認できる。だがクラリオンの時の様な爆発的な上昇はない。やはり、アレクラスでレベルが一気に上がるのは難しい話なのだろう。ヘル、チエルノボグ、ヘイグロト討伐で70代これ、無理なんじゃないか？ とちよつとだけ思い始める。調べた中で一番レベルの高かった八岐大蛇でこれなのだから、他の連中を倒しても劇的にレベルアップする事はなさそうだ。



それでもアンが60代に入ったのが幸いか。成果はあるのだ、ここで切り上げる理由にはならない。それに今の戦闘、八岐大蛇のデビルソースを入手する事に成功している。これはいい資金源になってくれそうだ。そう思いながら黄龍以外の仲魔をDDSへと戻して行く。その様子を倭建命が横から眺めていた。何か言いたそうにしているのを感じる。視線を倭建命へと向ければ、少し悩んでから、まあ、いか、という声が聞こえた。

「なあ、お前」

「ん？」

「お前さ……俺を仲魔にしてみる気ないか？」

悪魔契約のお誘いだった。そりゃあ勿論、高位悪魔を入手するのは非常に助かる話だ。それも倭建命言えば日本神話の神秘スレイヤー最強格だ。神殺し属性も保有しているからそれだけで非常に強い。さっきの戦闘でも十束剣のスペックを始めて握るのに使いこなしていた。剣士としてもハイエンド。そう考えると欲しい仲魔ではあるが、

何故、という疑問がある。その視線を向ければ倭建命がああ、と声を零した

「俺は元々は先代ライドウの仲魔なんだよ。アイツの頃はまだよかつたけど今代が結構ガキでなあ。頭が固い上に俺を霊的国防兵器として国に縛り付けやがったんだよ！」

「つたくと、と倭建命がやや憎々しくライドウの事を語った。

「……だけど、まあ、こういう状況だ。義理で八岐大蛇は斬つてやつた。ついでにライドウが国内にいなけりやあこんな状況じゃ俺を縛りきれないしな。先代は良い奴だったけど今代は気に入らねえ」

「だから環境を変えたい、か」

「おう。八岐大蛇を餌扱いで食らいつく奴なんて中々見ねえぜ？ そういう所は気に入った。後はこのままクスノハやヤタガラスに使われるのもめんどくさいって話だな」

これ、契約したらクスノハに怒られないか……？　と思いましたが、空を見上げれば黄龍が今日も元気に輝いていた。そもそも、黄龍

自体日本の龍脈、大地の命の化身とも言われているし、それを保有している時点でもはや怒られる要素はある。

……よっし、深く考えるのは止めよう。

「まあ、いいや！ 怒られそうになったら支配人のせいにして突きだしてやろうつと。俺は如月竜二、宜しくな」

「俺はヤマトタケルノミコト、コンゴトモヨロシク」

新しい仲魔、ゲット。契約し、DDSへと倭建命を入れる。これで強力な仲魔がまた増えた事になる。黄龍やラーマと同レベル帯で人間サイズだから、市街地での戦いで活躍してくれそうだ。

黄龍やラーマ、確かに強いけど二体とも、攻撃がインフレしすぎて基本、地形を吹き飛ばす事前前提になりつつある中、規模が小さそうな攻撃を持つ仲魔は重要の様に感じた。あ、いや、待て。さっきまで拳で地形を破壊してたわ。前言撤回。新たな破壊者が登録されただけだった。

『お、さつき一緒に肩を並べた奴だよな？ 宜しく頼むぜ』

『宜しくなのじゃ』

『宜しく！ 早速だけど君の名前は倭建命だっけ？』

『ああ、そうだぜ』

『じゃああだ名はミコっちゃんだね！』

『!?!』

『妾は良く駄狐って呼ばれておるぞ』

『それあだ名なのか……?』

『ちなみに僕は特にあだ名とかない！』

『あだ名をつけようとした意味はなんだ』

『特にない。そしてアレは鳩！ アレは核の冬』

『くるっぽー』

『かーくかーくかーく』

「もう仲良くなってるな」

相変わらずツツコミ処しか存在しない空間だった。やはりDDS内部がどういう風になっているのか物凄く気になってくる。ただ、会話を聞いている感じどうやら黄龍と同じ、ツツコミ属性として頑張っ

てくれそうな気配がある。心の中で頑張れ、頑張れとエールを送っておく。まあ、仲魔たちの交流から意識を外し、

「次……は、四国……だ……ね」

そう、次は四国だ。確か四国は現在、ガイアがヘルと戦っている……らしい。距離的に次に向かうのは四国で、その後北海道のチエルノボグとヘイグロトを血祭に上げる予定になる。そっちはメシア教が抑え込んでいる。

……不思議と、ちよつとぐらいゆつくりしてもいいんじゃないこれ……？　と思つてしまった。いや、でもガイアとメシアのアレな話は割とよく聞く。ナカノやシンジユクの連中が非常に特殊だつて言うのも割と聞いている。そしてその上で本来のガイアとメシアの話を聞いていると、双方消滅してくれねえかなあ、と切実に思う。

『か、か、彼らは、その……やつぱ擁護無理』

『無理すんな鳩』

鳩でさえ匙を投げる。まあ、それでも人類の為に防衛線をしている形、完全に腐敗しているという訳ではないのが解る。少なくともチエルノボグとヘイグロトを抑え込む動きをしている間は、メシアはある程度は信じられる。問題は弱肉強食のガイアの方だ。連中、乱入してヘルぶつ飛ばしても大歓迎しかなさそうないメージしかない。勧誘とか大変そうだなあ、と思いつつ、

「行……く……」

「まあ、そろそろな。正直行く前に軽く飯を食っておきたい所だけど、別に食わなくても死なないしな」

少なくとも軽く断食した所で数週間程度、余裕で生存できるのが超人だ。いや、或いは年単位で絶食しても余裕かもしれない。だから別に、食事をしてから向かう必要もないだろう空腹はそのままだろうが。四国を解放したらうどんとかラーメンだかを食べればいいのだ。お店が開いている事を祈りつつ。黄龍に乗り込もうとしたところで、

COMPから着信が入った。ポケットから引き抜いて着信を確認すれば、戦闘前と同じナンバーだった。つまりはクズノハからの着信になる。なんか、出鼻をくじかれてばかりだなあ、と思いつつながら通話

する。

「はい、もしもし此方八岐大蛇の……ぐつぐつ煮込み？　を料理した一般通過サマナー」

『そんなサマナーが一般でも困ります。と、そうではありません。此方でも八岐大蛇のMag反応消滅を確認しました。ありがとうございます。あります、そしてお疲れ様でした。これで中国地方はしばらくは安定するでしょう。此方の実力不足を其方に頼むようでしたら本当に申し訳ありませんでした』

「いやいや、此方も此方で都合があつた訳だし」

ほんと、感謝される様な事じゃない——いや、まあ、感謝されると確かに気持ちは悪くないが。内心、もつと褒めてちやほやしていいのよ？　とか思つてたりする。そう思える分、少しは自分も前進しているのかもしれない。

『報酬の受け渡しに関しては後日するとして、今、時間はありますか？　今避難キャンプでカレーの炊き出しをやっているのですが、顔合わせのついでに昼食でもどうでしょうか？』

その言葉にどうしようかなあ、と思つているとちよんちゃん、と肩を叩く感触があつたので、振り向けばアンが目を輝かせていた。

「クズノハカレー……」

そう言えば地味にライドウが珈琲淹れたり主婦スキル高かつたし、意外とクズノハってそういう方面の技術も高いのだろうか？　まあ、アンが乗り気だし行くと決める。どうせ時間を食つても数時間程度の誤差だし。

「それで困るのガイアかメシアだしな！」

『せやの。あ奴ら欲望の塊じゃし。好かんわ』

『あいつらはもうちよい苦労しとけ』

『いや……まあ、うん。私が言えた話でもないわね』

『ランチタイムなので休業っ！』

『それでいいのか……』

『あけましておめでクリスマス』

スダマ先輩がそろそろ新年を迎えそうだった。それはそれとして、

アンが乗り気なら一切構わない。クズノハに向かう事を伝え、黄龍の頭の上に今度こそ飛び乗る。COMPに避難キャンプの場所をマーキングして貰ったので、それに従って空を素早く黄龍で移動する。

「かれー、かれー、かれー……」

カレーが好きなのか、カレーの歌を作曲して歌っているアンが可愛すぎて死にそうだなあ、と思いつながら。

しかし最近、かなり感情豊かになってきたなあ、と思う部分が多々ある。

精神的に成長しているのはどうやら、俺だけじゃない様に思える。

◆

流石に避難民の居る場所を黄龍で突撃するのは色々と酷いので、それを考慮して途中からはシンジユクで購入したバイクに切り替えた。目立たずに移動したいときはこれで決定だな、と思う。今では走った方が早い、音速で走って移動する人間なんかみたら、町中に恐怖の記憶として残ってしまうだろうし。

それはともあれ、クズノハが島根県の人々の為に用意した避難キャンプの規模は意外と大きかった。キャンプとは言うものの、整地された大地に大量のログハウスが設置してあるのが見える。Magの気配が漂う感じ、このログハウスは悪魔が生み出した素材を即座に加工して作られたように思える。

それが大量に存在する為、小規模な街になっている。流石60代もあればこれだけの事は出来てしまうのか、とその対応を見て驚いた。自分もそこそこ悪魔を運用しているつもりだったが、流石専門訓練を受けている専門のサマナーは発想や展開力が違うな、と納得させられる。どうやら悪魔の力を使って足りないインフラや資材を賄っている様だった。

『クズノハと言えばエリート中のエリートよ。全員がサマナーとバスター、双方の訓練を受けた上で三ヶ旬時間の実践訓練を経験している。あらゆる悪魔の知識を頭の中に叩き込んで、様々な武器や道具を

使えるように学習している。その上で軽い陰陽術程度だったら誰でも使えるって集団よ』

『ま、言っちゃまえば日本最強の組織だからな。組織の規模はガイアやメシアに負けるし、国内で言えばヤタガラスにだって負けるだろう。だけどクズノハだけでそれら全部駆逐できる程度の実力はあるぜ』  
「マジでエリート中のエリートなんだなあ……」

悪魔の幅広い知識を保有する他、何をどうすれば効率的に状況を進めれるかというのが解っているのだろう。そこら辺の知識は自分にはないものだ。今度、もうちょい最低限、自分の仲魔に関してだけでも勉強しておくか、と自戒しておく。それはさておき、避難キャンプに到着したのでバイクから降りてそれをストレージに戻す。

「ん……あまり、悪い……感情……ない？　良い、香り……する、から、かな？」

「ん？　ああ、そういうえば……」

アンの言葉にそういえば避難キャンプの雰囲気は穏やかなのが解った。彼女の言う通り軽く空気の匂いを嗅いでみれば、どこことなく心が落ち着く匂いを感じさせた。それ以上の効力はないが、不思議と闘争心を失って行くような匂いだった。

「このお香は鎮静、リラックス、ストレス軽減を持つコノハナノサクヤヒメ様に調査して貰ったものです。本当ならあまりこういう手段はとりたくないのですが、八岐大蛇クラスとなると一般人ではその気配に当てられるだけで発狂死してしまいますから……」

残像と共にスーツに帽子を被った初老の男が近くに出現した。超人的な感覚がその登場を僅かに察知出来たので、特に驚く事はなかったが、それでもそういう動きが出来るレベルである事を判断させるには十分だった。片手で帽子を押さえながら登場した男は、少し疲れたような表情をしており、目の下には隈が出来ているものの、笑みを浮かべて来た。帽子を取りながらそれを胸に当て、一礼した。

「悪魔協会のキサラギ・リユージさんですね？　今回は非常に助かりました。おかげで多くの命と部下の命を守れました。どうもありがとうございます。其方の人修羅の方も、助力に感謝します。ありがと

うございます」

本当に、安心する様にそう言ってくる男の姿を見て、茶化したり、大したことはなかった、と言葉を向ける事が出来なかった。アンに助けを求めて視線を向ければ、首を傾げ、そして唇を僅かに動かすのが見えた。

「がん……ば」

最近、本当にリアクション豊かになってるなあ、畜生。だけど好き。そう思いながらもあー、と声を零した。

「そのー……うん。誰か、死なないでいい人が死なずに済んだのならそれでいいんじゃないかな。人が減ったら……なんというか」

今のこの世界は狭い。日本だけが残されている。だから人が減ったら、

「その分、世界が寂しくなるし」

その言葉にクズノハの男は言葉を失い、驚くような表情を浮かべ、しかし笑う様に声を零した。

「は、ははは……ああ、いや、すみません。失礼でしたね」

「いや、気にしなくても。俺も俺でちよつと今のはどうかと思っただし」「いえいえ、寂しくなる、ですか。私は嫌いじゃありませんよ、今の言葉は。同僚や部下が一人いなくなるだけでも凄い静かになりますからね……そうですね、寂しくなるのは嫌ですね」

とても普通な理由ですが、と付け加えられてしまった。普通で悪かったな。まあ、所詮はモブだし、自分が思いつく理由なんてそんなものだ。大体アンと個人的な感傷が理由でしかない。日本の為とかそういうのはちよつと、無理だ。自分にはスケールが大きすぎる。そういう事を考えるだけ無駄だ。だから、まあ、

「カレー。カレー食べに来たんだよカレーを」

「Curry」

「見ろよ、ウチの可愛い子を。余りの食欲に流暢な英語で求めているぞ。どうしたの?」

「たべたい」

「そっかー」

本当に食欲旺盛になってしまった。Mag不足はクラリオン戦の超大量Magで一時的に回復しているから、今はそんなはずもないだけだなあ、と思うもこれ、普通に食べるのが好きなだけだよな、と理解する。

そしてそれを見ていたスーツの男は苦笑する。

「では案内しましょう。私の名前はクズノハ内ではレイジで通っています。宜しくお願いします」

「名前は……もう知ってたな、そう言えば。宜しくレイジ」

案内されながらキャンプの中を進んで行く。多少不安な様子を見せる人間はいるものの、大体の人間は落ち着いている様に見える。やはり、お香の効力があるという事だろうか？ それに飢えている姿も見えない。

「しかし助かりました。実はオオゲツヒメを確保してしまって、ヤマタノオロチ出現に合わせてスサノオが出現するようであればオオゲツヒメを守る為にスサノオを倒す必要もありましたので……」

「オオゲツヒメ……」

『知らない方が幸せ。そういうケースもあるのじゃ』

『まあ、そうだな』

『うむ』

そこまで言われると気になってくるが……知るのも恐ろしい部分がある。ともあれ、問題は解決したし、ここでやるべき事は済ませた。四国へと行く前に腹ごしらえをするだけだ。

「じゃ、それじゃあカレーご馳走になるな」

「ええ、どうぞ。現在は食料生産も安定していますし、ヤマタノオロチを倒してくれたサマナーを無下にする理由もありませんし」

「じゆるり」

「はは、こう見えても結構料理の腕には自信があるんですよ」

カレーを求めて奥へと進んで行き、ご馳走になる。この避難キャンプの人達が家に帰れる様になるのは何時頃なのだろうか？ 果たして壊されたものは復旧するのだろうか？ この景色を見ていると、嫌



でも世界は崩壊している事を理解させられる。

自分は幸運で、比較的復活している環境で生活出来ている。

だけど、この人たちは違う。

とはいえ、他人の面倒を見れる程自分には余裕がある訳じゃないし、そういう立場でもない、改善してやろうとも思わない。だからカレーを食べて、腹を整えたら出て行くだけ。

そんな中で食べたカレーは。

思わず、お代わりを求めてしまうぐらいには美味しかった。

## 神州混沌行脚 X

黄龍の頭の上に乗って移動する最中、直ぐに四国へと音速で飛翔せず、飛行機程度の速度でゆっくりと移動していた。頭の上に乗りながらCOMPを取り出して、その中に記録されている仲魔のデータを改めて確認していたのだ。そろそろ仲魔の数が結構増えてきている。だから改めて能力や特徴を把握し直そうという魂胆である。

「……ってベルママが言ってたから四国に行くまで軽く見直そうか」「うん」

『誰がママよ。ぶっ飛ばすわよ』

『ママ。腹がよじれる』

『お、死にたい様ね？』

『……おい、さて、その不定形生物押し付けるのを止めろ！ 止めろ！！』

『新たな仲魔への通過儀礼じゃ』

『甘んじて受けよう！ 僕もやった！』

『我は日常的にセットで投げられるぞ』

『我も一発芸の道具として使えって言われて渡されたな』

『……ん？ もしかして前の職場よりもブラックじゃないのかここ？』

やはり仲魔連中は楽しそうだ。そのまま仲良くやっついていて欲しい。はしゃいでいる仲魔たちを一旦放置して、DDSのデータを確認する。アンも契約状態なので、アンのもデータも見る事が出来る。とはいえ、アンは肉体があるし、上下の契約もしていないので無理矢理指示する事は出来ないし、DDSに入る事も出来ないが。

DDSを見た感じ、アンの耐性はほぼフラット。現状、弱点も耐性も存在しない。そしてどうやらデフォルトで弱点耐性なるもの取得している。どうやらガードキルや弱点付与系統の能力に対して高い抵抗力を保持し、無効化する事が出来るとの事。つまり《貫通》等の影響を受けないという事だ。能力的には力と魔のバランスが良く、物理でも魔法でも戦える両刀アタッカー、そして独自の技として《鬼

神楽》や《ジャベリンビート》、《マグマ・アクシス》等を習得している。どれもどうやら人修羅専用のスキルや魔法らしく、追加で生み出せる効果が非常に優秀に見える。様々な属性に手を出せる分、相手の弱点を選んで攻撃できるという器用なアタッカーでもあった。レベルは八岐大蛇戦で上昇し、60代に突入した。

次に最古参その二と三である、チエフエイとラーマは少し前に悪魔合体で能力を確認したばかりなので飛ばす。今、保有している仲魔の中で二大やべー奴である事は八岐大蛇に対して封殺決めている時点で良く解る。最初の頃は鈍器扱いの魚と防具扱いの子狐だったのに。

という訳で、スタマ大先輩のデータを確認している。その最大の特徴はノリとテンションと気分でスキルや能力が変動する事だろう。それでも基本的には全くレベリングを意識しなくても俺にレベルを合わせてくれるという点にある。

「あ、気が付けば習得スキルに《夢幻泡沫》追加されてるじゃん……」  
万能属性ですらない、独自の属性扱いなので耐性に引っかけられないというどこか反則さを感じるスタマ大先輩の奥義。あのクラリオンの万物の障壁さえも一瞬で蒸発させた謎の技だ。そう、謎なのである。それ以上、正体を詮索してはならない。今はまだおねむだからそのまましておくのが大事だ。起きてしまった場合の事を考えて、子守歌の練習でもしておいた方がいいかもしれない。

「頼んだぞ駄狐」  
ドルミナー

『妾の名前を言ってみろ』

『タマモ』

『んー！ 惜しいー！』

『姐己ー！』

『ニアミス！ ニアミスじゃぞー！』

『ゴン……お前だったのか……』

『ぶっ飛ばすぞ』

また仲魔内で殴り合ってる連中を放置し、こっそりとスタマ大先輩のデータの閲覧を止める。称号が《門松あるよ》に変わっていたのを見て、ついに年越しに成功したんだ、という感想しか出なかったから

である。役割は何時も通り核兵器運用。スダマドラオン弾として今後もマップ兵器扱いで頑張つて貰おう。ところで門松どこから持ち出したの？ 次はなんだろう。血のバレンタインになるのだろうか。コロニーでも落とそうだなこいつ。なおレベルは常に自分と同じ数値を最近、キープしている。まるで調整されているかのようなレベルで同じなのだ。

「スダマ大先輩の運用に一切の変化なし！ 滅茶苦茶楽な部類だな……」

「でも……頼りに……なる」  
「おう」

なんだかんだで、未だに純粋な一撃での破壊力はスダマドラオンが最高値をキープしていたりする。

そして次に鳩。神聖四文字。絶対神。ただし、今回は愛と平和、平穏と友情。つまり愛すべき隣人として平和の象徴である鳩の姿で顕現している。合体事故を装ってダイレクトに殴り込んできたデンジャーな奴でもある。信仰心がレベルになるという特徴を保有している為、今のレベルは8程度しかない。うん、まあ、それぐらいは感謝しているという事でもある。信仰する程ではない。つまり完全耐性を保有しておきながら直接的な戦闘能力は皆無になる。ただし、それは戦力として見た場合だ。

鳩自身は一種のオプションパーツ扱いにして運用する。肩にでも乗せておけば自動的に《ラストキャンディ》で全体の強化を支援し、《常世の祈り》で回復を行え、《サマリカーム》で即座に蘇生が出来る。それに使用する魔力やMagは鳩支払いではなく、俺が支払う様になつているので、根本的に余裕がある。その上で戦いでは必須とも言える《マカラカーン》と《テトラカーン》、即死対策の《テトラジャ》も覚えている。オプションパーツとして運用する限りはすさまじい化け物っぷりを発揮する、專業アシストになる。しかも完全耐性で死なないのでずっと妨害されずに行動できる。

それに最大神としての威光があるからか、その神聖さが時折妙な効能を発揮する。これ！ と言えるような運用がその神の威光には存

在しない代わりに、非常に便利で不浄の浄化やバッドエンドを本能的に粉碎する力を持っている。なんだかんだで便利な奴だ。完全耐性持ちだから咄嗟に盾に出来るというのも余りにも便利すぎる。ただしきつき、スダマ先輩の《夢幻泡沫》習得を確認してしまったのでそれで死亡できると発覚してしまった。やはりあのICBMやばい。『安心安定の我である』

『掴みやすいサイズつてのが最高よね』

で、次がベル——つまりベルゼブブだ。契約内容は彼女を豊穰神バアルにする事だ。ベルゼブブは元はバアルという神であり、とある神話の主神であった。だが四文字の信者によって占領された時にその信仰は徹底して踏みにじられた。なんとバアルを祭る神殿をトイレにして小便ぶっかけてまで貶めたそうだ。そりゃあ殺意で満ち溢れるに決まってるわ、と納得するしかない。

なお、それを四文字本人が一切命令していないのが本神、困惑の所。信者は何時の時代でも宗教と信仰の為なら超えちゃいけないラインをヒヤッハーしながら乗り越えて行く事を再確認できてしまう一件である。

逆にそれだけバアルという神が危険視されていた、という事の証明でもあった。

なお能力はバアルから零落している為、一段階全てにおいて劣るとベルは言っていた。耐性的には弱点は存在せず、多くの耐性、神経や精神無効を保有、破魔や呪殺に関してはついに反射まで取得している。八岐大蛇戦でレベルアップしたのもあり、その霊格がバアルに近づきつつある。主神クラス的能力がちらほらと見え始めている。

スキル構成的には電撃を主体としており、《電撃ガードキル》を保有している為、相手が吸収でもしない限りは誰が相手であろうと問題なく電撃を通せる他、《STUN極大拡大》というスキルを保有しているらしく、異常耐性を保有しない相手であればほぼ確定でSTUNを誘発できることもある。レベルが先ほどの戦いで上がった事でついに《魔王の眼光》と呼ばれる所謂眼光系スキルを習得。時間軸に介入して瞬間的に複数の行動を割り込ませる事の出来る超高位悪魔のスキルを

獲得した。それ以外にも《魔王の号令》に《死蠅の葬列》も習得、魔王の名に相応しいだけの實力を取り戻しつつある。もうほとんど、ベルゼブブとしては完全体とも言える。

「というか《死蠅の葬列》覚えたのならこれだけ連打してればいいのでは」

『大体あつてる』

『ん？ あ、いつの間にか万能高揚増えてる』

ベルのサムズアップが脳裏に浮かんだ。そのイメージを追い出して、次に新しいデータを見る。つまりはライドウから託された仲魔、黄龍の存在だ。

帝都守護の最大戦力にして東西南北を守護する四神の長。また龍脈の化身とも呼ばれ、それはこの土地という概念そのものでもある、と呼ばれる存在でもある。つまり黄龍が存在する事は元気な土地を表す意味でもある。ライドウ、それを他人に預けて大丈夫だったのか？

クラリオン戦でのレベルオーバーブーストの影響を受けて、本来であれば90代は存在する黄龍も、現在では自分と並ぶ程度のレベルにまで下がっている為、何とか使役する事が出来る。そうじゃなきゃ間違いない使役出来ないレベルの悪魔だ。その能力も超高位悪魔に相応しいだけのものがある。

属性の耐性に関してはほぼオール耐性、無効化ばかりで弱点は皆無。その上で専用スキルとして自分が場に居るだけで浄化や地脈の正常化、酸素の確保等環境を整える能力に非常に秀でている。それに加えレベル50台ではあるが、四神を召喚する事が可能となっている。攻撃手段は広範囲を一気に薙ぎ払える《大雷撃》に《メギドラオン》、そしてそれを圧縮してブレスへと昇華させて吐き出す《メギドラファイア》等を習得している。元々クズノハで管理されていた悪魔らしく、高いレベルで習得しているスキル等が固まっている。とりあえず出しとけ、という感覚で戦闘に出しておくだけで場が整う。安定する。非常に優秀な奴だ。

「鳩程ではないが、我も浄化などの力に関しては強い適性を持つ。瘴

気で溢れる場所であれば野営が出来る程度には浄化できるぞ」

『ただし穢れ切った結果龍脈になったじゃろぬしは』

へえ、そんな逸話があったんだ、と納得させられる。それはそれとして、地味に黄龍は仲魔の内でも最大級のサイズの持ち主である。その大きさは黄龍一頭で小規模な異界であれば抱え切れずにそのまま内側から破裂して消滅するレベルで大きい。シンジユクの空に浮かべばシンジユクの端から見えるレベルで長大だ。おかげで乗り物扱いすれば移動が楽だし、それなりに頭の上であればくつろぐ事も出来る。便利な奴だった。サンキューライドウ、フォーエバーライドウ。有効活用させて貰います。

で、これで最後の仲魔だ。

つまり、先ほど加入したばかりの元霊的国防兵器、倭建命になる。

『俺は元々先代ライドウ……あー……大体60年前か？　ぐらいからちよくちよく悪魔合体の応用で能力とか強化してるからな。強いぞ。ちなみに先代は今代と違って90代超えてたぜ、レベル。その頃は俺も同じぐらいはあったんだけどな』

今の倭建命のレベルを見る限り、今代のライドウが使役できるレベルまで落とされてしまったのだろうか？　ともあれ、今の倭建命のレベルは自分でも使役する事が出来るので丁度いいし、そのスキルや能力構成も非常に高いレベルで完成されている。クズノハにもイゴール級の悪魔合体師が存在しているのかもしれない。

ともあれ、基本となる《物理ハイブスター》を抑えつつ、《エボルヴ》も最上位のを搭載して純粋な物理による攻撃力を極限まで増大させている。《貫通・極》によって通常の貫通に加え、吸収、反射、無効化にテトラカーンもどうやらそのまま無視して叩き切る事が出来る様になっている。究極の脳筋とでも表現すべき構成になっている。その上で《神格特攻》で神性持ちに対する高揚を抑え、《勝利の雄叫び》で継続戦能力も大幅に強化している。そして安心安定の《不屈の闘志》を搭載。それに加え《天軍の剣》とかいう物理、斬撃系統の最上位攻撃手段まで保有している。

『というか我、《天軍の剣》ミカ君のモノだと思っただが』

『昔メシアに召喚されたミカエルをぶち殺してスキルカードとして吐き出させて覚えたもんだよ。《空間殺法》も悪くはないんだけどな』

『何時ものメシア』

『ただ、まあ、天叢雲剣も手に入ったし。こっちのが手に馴染むからもういらねえわ。サマナーなんか有用なスキルカードないか？ 要らないからこれ消そうぜ』

『使うだけ使われて塵の様に捨てられるミカエルの剣』

『所で俺に十束剣使わせない？ とうか貰っていい？ 仲魔になつたなら俺も使ってもいいよな』

「ぐいぐい来るなこいつ」

とはいえ、自分が握るよりも遥かに優秀だから倭建命には十束剣を場合によつては使わせる事も考えるべきかもしれない。ただ個人的な感覚、余り使われたくはないのが本音だ。

「ライドウ……に、貰った……もん、ね」

アンの言葉に頷く。十束剣もライドウから友情の証として託されたものだ。黄龍共々、俺がしっかりと使いこなせるようになりたい。あつさりと使いこなした上にミカエルの専用技をあつさりと連打していた倭建命の姿を見ていると、絶対にその領域に到達できるような気がしないが。

『ま、俺に斬れないものはないさ。天叢雲剣も今ならあるしな。真つ直ぐ行って斬り飛ばすのは任せろ。そう言うの得意だからな、俺は』  
「まあ、頼りにはして……ん？」

倭建命のデータを見てみると、性別部分がバグってる気がする。

「なんだこれ」

『胸も逸物も穴もあるって事だよ』

「ほえー……そういうのは初めて見るな」

『まあ、僕ら神性があるとうかモロ神サイドだからね。僕とか一応超ぎりぎりヒューマンだけど属性的には化身だから結局は神だし』

『私達神は根本的にそりゃあ姿は自由自在だから性別なんて見た目と役割、後は楽しむ以上の意味はないわ。つまり本質的に雌雄同体ね』

神とは完全なる存在である。故に男であり、女でもある、という事



だろう。

『ま、俺の場合神の血が濃いからこうなってるだけだ。人間としての側面のが強いから他のあっぱらばーよりは話は通じるぞ』

『お、言うわねこいつ』

『処す？ 処すかの？』

『あ、こら、お前ら叢雲をその不定形に差し込もうとするの止めろ！』

マジで止めろ！ フリじゃねえから止めろよ！』

『解った、じゃあ入れるね！』

『フリじゃねえって言うてるだろ！ 芸人じゃねえんだよ……！ 冒流的な形にされそうだからほんと止めろよ！』

やはり新人は玩具になる運命なのだろう。倭建命——もうミコトでいいな、と勝手にニツクネームを決める。ミコトが馴染んでいるようだし、これで仲魔全員の能力のチェックを終わらせた。COMPをしまつて黄龍の上から見える景色へと視線を移せば、

「あ……見えて……きた」

「四国だな」

四国が見えてきた。顕現したヘルによって四国は死の国に変質している……という話だった筈だ。どんな様子を四国は見せているのだろうか？ 気になるその様子を黄龍の上から真っ直ぐ向ければ、

草木が枯れていた。

大地が荒れ果てていた。

そしてその大地に紫色の瘴気が漂っており、この世ならざる雰囲気が四国の大地を覆っていた。空も四国の上からは赤く染まっており、通常とは別世界の様な姿を見せていた。四国そのものが丸ごと、巨大な異界化している様な、そんな風にさえ見える。そして《エネミーソナー》を眺めれば、それが探知できる範囲にはおびただしい程の屍鬼と妖鬼の気配が存在していた。死の国が開いた、というよりは四国そのものが死の国となってしまったような、そんな惨劇を目の前に行っている様な状態だった。

八岐大蛇もアレはアレで酷かったが、環境テラフォーミングを行っている分、此方の方がもっと残酷かもしれない。ヘルを倒した所で四

国をもとに戻すのは相当大変だろう、これは。まあ、俺は何も悪くないから責任感とか感じないが。

「こいつあひひでえ」

ただ、それだけは言えた。

「良くない……気配、い、っばい……いる」

「全部敵だと思おう？」

その言葉にアンがコクコクと頷いた。その様子を見てから四国とどうか完全に死国となつてしまった大地を眺め、腕を組み、首を傾げる。

……もしやこれ、手遅れでは……？

まあ、でも、ヘルの経験値は欲しい。

となるとやはり、突撃するしかないだろう。

「ゴウリュウ。一番戦闘が激しい所へと突っ込むから、そこまで居る奴適当に消し飛ばしちやってくれ」

「拝承した主殿よ」

命令と共に黄龍が黄金の鱗を輝かせ始める。それと共に四国へと突入し、黄金の風を呼び寄せる。浄化と破魔の混ざり合った黄金の風が黄龍がその大地を飛び越えて行くのと共に、吹きすさぶ。それに触れた不浄と死から蘇つて来た悪魔たちが端から消滅して行く。とはいえ、こいつらはレベル30に届かない雑魚共ばかり、経験値にすらならない。本命はもつと奥に居る筈のヘルだ。

「まだ倒されていなければいいんだけどな……」

四国の状況にどう足掻いても面倒になりそうな予感を感じつつも、ブルームを引き抜いてスタマを装填する。何時でも爆撃が出来る様に準備を進めながら、

死の大地となつた四国入りを果たす。

## 神州混沌行脚 XI

想像の数倍、四国がヤバい状況だった。

ぶっちゃけ、これ、一般人の類死滅していないか？ というレベルだった。

空から眺める限り広がるのは赤い夜の空。そして荒れた大地に生命の気配がしない景色。だが死霊と屍鬼、鬼の類だけは腐るほど存在している。時折Magを捻り出そうと既に死んでいる死体を犯したりする悪魔の姿を目撃する。その全てを黄龍が通り過ぎる際に風で浄化しながら消滅させていく。四国の大地に出現した悪魔どもを問答無用で消滅させながら進んでいく。

戦いの気配の方へ。

超人の聴覚、そして超直感で大体、どっちの方角で戦闘を行っているのか、というのは解っていた。故にそれをもっと感じ取れる黄龍にここからはナビゲートを完全に任せ、飛翔して行く。気持ち悪い場所となってしまった、四国は。少なくとも自分が授業で習った四国という場所はこんな気持ちの悪い所ではなかった。

成程、これが高位悪魔の領域という奴なのだろう、と理解させられる。先ほど、四国に突入してから体がやや重く感じる。体感、10レベルぐらい能力を抑え込まれている様な感覚だ。この四国そのものがヘルの支配する異界として降臨しているからだろうか？ これはあまり悠長にしていられそうにないな、と息の下で呟けば、

「主殿、あそこが今の主戦場の様だ」

「んー？ どれどれ、ターゲットはいるかな？」

黄龍に乗って移動すればすぐに目的地へと到着する。風を吹かしながら飛翔すれば、戦場が見えた。荒れた四国の大地で、人間と悪魔の集団が乱戦を行っているのが見えた、数十の人間、それよりも多い規模の悪魔に対して連携を意識しない、個々人の武勇を前面に押し出して戦闘をしている、という感じだった。それに対する悪魔の反応はやや鈍くも、耐えてからカウンターを取る様な動きで対応を行っていた。全体的に人間側が火力不足で押されている感じだろうか。

……いや、一部突出している戦力が戦線を支えているからまだ持っているのか。

恐らくこれがガイア勢なのだろう。そして無数に存在する悪魔は先ほどもまで黄龍が浄化させてきた雑魚とはどうやら違うようだ。《アナライズ》してみる。

英霊 無名 Level 131

英霊 無名 Level 127

英霊 無名 Level 129

「大体30前後の……無名の英霊？」

『クソが、死んで英霊となった連中を呼び起こして使役してるのか』

ミコトの半分吐き捨てる様な怒りの言葉に、その意味を理解した。かつて戦い、死んで、そして眠った人たちを呼び起こして悪魔として使役しているのだ。確かに、黄泉の国があると言われる四国で、それも冥界の女王であるヘルなら問題なくそんな事も出来るだろうが、あまりにもこれは酷い。

「コウリュウ、吹っ飛ばせるか？」

「いや、人が近すぎる。諸共吹き飛ばす事になるだろう」

「という事はラーマ、チェフェイ、スダマも出番ねえな」

『派手でごめんね！』

『妾の出番スキップ？』

『ナイスバルク』

逆にベルと、仲魔にしたばかりのミコトは出番がありそうだ。鳩はオプシオンパーツなのでどこでも召喚して運用できる。なので先に武器の換装を行う。ブルームから背に十束剣、腰に黄龍刀の柄を。両手にルーチェ&オンブラを握り締め、ダンテスタイルでの戦闘準備を完了させる。

アンの方を振り向けば、サムズアップが返ってくる。準備は万端らしい。

『サマナー、コツは強気で居る事よ。特にガイア連中は弱気な連中であっさり食い物にするからね。少し過剰なぐらい派手にやるといいわ』

『実感の籠った言葉じゃな!』

『まるでガイア教団に深くかかわった事がある発言だよね!』

『身内への攻撃材料見つけたら容赦ねえな』

躊躇なく黄龍から飛び降りる。黄龍の頭を蹴って勢いよく飛び出す様に飛び降り、戦場のど真ん中へとクレーターをぶち込む様に生み出しながら着地する。ルーチエ&オンブラを軽く両手で回転させるようにガンプレイしつつ、さて、と周囲を囲む人間と英霊に向ける。

「悪魔協会からのサマナーのデリバリーサービスなんだが……」

左を見て、右を見る。囲まれている。強気に……強気に? 個人的にそんな態度をこの状況でも貫けそうな人物は一人しか思い至らないので、何時も通り、参考にさせて貰う。ほら、アレでも師匠だし。「で、3秒やるからカンオケに戻るか。それともカンオケに戻されるか。選べ」

言葉の返答はない。その代わりに両側から英霊が刀を抜いて襲い掛かってきた。それをバク転で背後からも襲い掛かってきた英霊と合わせて飛び越える様に回避し、三体の英霊が纏まった所で、

上から落ちて来たアンがスカートを抑えながら踏み潰す様に着地した。三体の英霊が一瞬でミンチになってMagとなり、消滅した。綺麗なフォームで両手を上げており、採点を求めている様だったので、両手でサムズアップを向けた。

その様子を眺めていたガイアが口を開く。

「やべー援軍が来たぞ……!」

「ヒヤア!!」

「外様に負けてんじゃねえぞ!! アイツよりも多くぶち殺して自慢しろ!!」

わあい、疑問や困惑するよりも早く殺す作業に戻ってる。彼らのメンタルは形状記憶金属か何かだろうか? 何故こうも適応能力が高いのか。そう思いながら射撃し、近くに居た英霊にヘッドショットを決めて即死させる。

「鳩、カモン」

「我だけか……いや、確かにこの程度なら我以外は不要だな」

「おうよ」

黄龍をCOMPの中に戻しつつ鳩に何時も通り《ラスタキヤンデイ》を使わせ、ルーチェ&オンブラで連続射撃に入る。ラーマにさえ銃撃だけは別格と評価された射撃術は、目を離していてもあっさり英霊の眉間に命中させられる。一発で英霊を一体撃ち殺し、素早く乱戦状況を改善する為に射撃する。それに合わせアンも《破邪の光弾》で薙ぎ払う様に英霊を消滅させていく。

流石にレベル差がある相手に負ける理由はない。レベル差が広がり過ぎてそもそも止まったように見える。二挺拳銃を抜いて《トウーサムタイム》から《ワールウィンド》を放てば、それだけで十数という無名の英霊がMagとなつて消滅して行く。

消滅していく際、その表情はどこか、解放されたような表情だった。『そら寝てるところを叩き起こされて無理矢理動かされてるんだ。苦しみでしかねえよサマナー。基本的に生きるつてのは苦しみなんだよ。特に死んだ後だとな』

『感覚的に言うとなサマリカムを受けた直後、蘇っているストレスと無の感覚。アレをずっと味わっているようなものだよ』

「猶更、殺してやらんとな」

眩き、射撃を連打した。素早く射撃しながら次を撃ち殺し、一撃一撃で始末しながら帰ってきた十束剣を蹴り飛ばしてもう一周飛んで行って貰う。大体自動操縦機能があるので、割と適当に投げても敵をぶった切つて戦つてくれる十束剣の能力に関しては、剣術が凡人レベルの身としては助かる思いだった。

だからそうやって戦場に嵐の如く介入し、アンと共に一気に英霊を蹂躪する。鳩が最低限のバックアップとして常に《ラスタキヤンデイ》と《常世の祈り》を放つ準備をしているので、間違つて何らかの致命傷を受けても即座に復帰するだけの準備は完了している。

なにか、自分でも知覚していない専用の対策でも施されない限りは敗北する要素がない戦いだつた。

そしてそのまま、一気に一番の激戦区だつたらしい戦場を制する。終わつてしまえば格下しか存在しない戦場だつた。久しぶりに安心

できる、余裕のある戦いだっただけに軽く息を吐きながら軽く銃を投げ上げてキャッチし、それを腰の裏へと回す様にストレージの中へと格納した。ふう、と息を吐きながら横で浮かんでいる十束剣を背へと戻し、だいぶすつきりした四国の戦場を見渡した。

周囲にはそこそこ倒れているガイア勢の姿が見える。

「鳩、適当にサマリカムしておいてくれ」

「良いのか？」

「助けられる人間を見て放置している方が気持ち悪いだろ」

「解った、指示に従おう」

少し嬉しそうに羽ばたく鳩がDYING状態、つまりはまだ蘇生可能なガイア勢を蘇生させる為に動き出すのを見た。それを認識しながら小さく、息を吐いた。自分が想像している以上の被害と混沌がこの日本を覆っている。

そうだよなあ、と呟く。

今では雑魚扱いのレベル20代、30代でも、普通の人間にとっては絶望の塊になるのだ。誰もが自分の様にレベルアップの機会を持っている訳でもないし、俺みたいにレベルが上がりやすい訳でもない。周囲にいるガイアも大半のレベルは10代から20代前半ばかり。今の戦いで多少はレベルアップしているものの、激戦区へと連れて行けば全滅するであろう人達ばかりだった。

「なんだ、見えない内にだいぶ大きく育ったな、お前」

此方を知る様な声に、その方へと視線を向ければ上半身半裸、筋骨隆々な破戒僧の姿が見えた。見覚えのある破戒僧の姿は、最初に世界再生をする時に助けてくれた、ステイヴンの協力者だった。

「あ、ダンさん」

「よう、久しぶりだな。あつという間に俺よりも強くなりやがって……。まあ、俺一人じゃ全員抱えられるかどうか怪しいところだったし、援軍感謝するぜ」

拳を作って此方へと破戒僧が向けてくる。それに合わせ拳を作り、拳と拳を叩き合わせれば、満足気によし、と頷いた。そしてそのまま、残された残りのガイアーズに視線を向けた。

「見えたなテメエら！ こいつは俺よりも強く！ そして俺達の助けに来てくれた！ 心強い援軍だ！ そしてテメエら雑魚は今、助けられた！ ガイアの法を口にしてみろ！」

破戒僧の言葉に、蘇ったばかりのガイアーズ、まだ生きているガイアーズ達が口を開き、声を張った。

「弱さに逃げるな！ 強さを認めろ！ 恩を忘れるな！ 強者を敬え！ そして超える事を目指せ！」

「そうだ！ 俺達は誰よりも強さを尊ぶ！ 強き者が正しいという訳ではない！ だがその強さの裏には積み重ねられた努力と苦労が絶対に存在している！ 俺達ガイアーズはそれを忘れないし、認める！ テメエらがここで吐く言葉はなんだ！」

「救援、ありがとうございました！」

「良しッ！」

「すつげえ体育会系……」

『じゃが思ったより空気は悪そうじゃないのう？』

それは思った。見ている感じ、アクは強いけど決して悪と断言できるわけではない、そう言う連中だった。或いは破戒僧・驍の存在が清涼剤になっているのかもしれない。自分が知っている一番強いガイアーズだし、上がまともなら下も統率されるという事だろうか？ まあ、どちらにしろ、

「お久しぶりです」

「止めてくれよ。あの時はともかく、今じゃお前のが力は上だ」

「それがガイアのルール？」

「おう、強い奴が偉い、つてな。まあ、それだけじゃ生きていけないからその上で人格とかある程度考慮されるけどな。それでもお前は俺よりも上だ。胸を張って堂々としてくれ。こんな短時間で抜かれたのは初めてだぜ」

まあ、此方にも色々あったんで。そろそろ本格的に敬語で喋る事を止める練習、始めた方がいいのかもしれない。ちよくちよく素で敬語対応しそうになってしまいう時があるのだ。まあ、元の小市民としての感覚が染みついてるのが原因だと思うのだが。まあ、根本的には一



一般人なのだ。この業界に踏み込んでまだ数か月だし。元の感覚が抜けていなくてももしようがないと思いたい。

「とりあえず、一旦拠点に戻ろうと思うんだがどうする？ うどん出すぜ」

「うどん……！」

アンが食いついた。その様子に半ば呆れつつ笑い声を零す。まあ、どうせヘルの事を聞かなくやいけなかったのだ。流石に八岐大蛇とは違い、一番大きな戦場でこの様子だったのだ。本体は隠れてどこからか英霊を送り込んでいる。だとしたらまずは情報収集から始める必要がある。

「じゃ、話を聞くついでにご馳走になろうかな？」

「よっし、それ来た。なんか移動手段はあるか？」

「黄龍なら」

「それで本部乗り込んだら爆笑できるしやろうぜ」

それ、やってもいいの……？ とは思ったが、破戒僧からサムズアップが返ってきた。どうやらやらかしちまえとの事だった。なので握手をし、悪い笑みを浮かべた。

うどんを食べる為に黄龍に乗る事が確定した。



それから纏めてガイアーズを黄龍の背に乗せて、香川へと飛翔した。現在、四国前後がヘルに乗っ取られている現状、ガイアの日本本部はまだ無事な香川へと移動させられた。そしてどうやら、高松城を改造してそれを拠点運用している、との事だった。元々年代が古ければ古い程力を増す世の中なのだ、古い城壁跡というのは防衛拠点を構築するには丁度よい素材でもあった。高松城を近代式に改装しつつ、高松市を巻き込んで一大防衛拠点へとヘル対策に仕立て上げているのが今のガイアーズの状況だった。

ちよつと、ガイアとしてはあまりにもまとも過ぎなのではないか？ そう思ったが、世界が崩壊しているので遊んでいる余裕もないとい

うのが答えだった。まあ、確かに正論ではある。ガイアの癖に……！  
とは思いつつも、今は恐ろしく真つ当に機能しているので特に文句はない。それでもガイア主義は見えている。

自由と混沌を愛し、力を敬うという思想。

メシアンの掲げるロウ思想とは反対、法と秩序は存在しなくても個人の自由と思想を約束し、その上で滅ぶ事も自由であるという考え。そこに束縛はないが、力への待望と尊敬が存在する。明確に強い奴が偉い為、力のある存在は基本的に回りからの人望を集める。

駆け上がる強ささえあれば、ほとんどすべてが許される。それがガイア思想だった。

「とはいえ、なんでもかんでも許されるって訳じゃねえけどな」

「俺ら、確かに自由を愛してますけどそれって別に無法オンリーって訳じゃねえっすからね」

「俺らが自由を愛するのは法律の中だけじゃ息苦しい部分があるからっすからね。弱いと搾取される。法律では守れない仲間が居る。だからこそ俺らガイアーズは団結して自由を求めるんっすよ」

「まあ、確かに一部がレイプ！ ファック！ セックス！ 性交渉！  
ってスタイル確立しちゃってるっすけどね」

「でもダンの旦那や、兄貴みたいに強いけど人格が伴ってるやつってのがやつぱりガイアの中でも一番人気でるっすよ。兄貴、ガイアに入ってみないっすか？ 明確なルールはないからアレはダメ、これはダメって言われる事ないし、結構楽しいっすよ。うどんもタダだし」  
「兄貴は止めてくれよ……」

「おうどん……」

『食べ物で釣られるのは止めなさい。めっ』

『ベルママ……ママ……』

『おい、腹いせで叢雲を不定形にあ——！ あ——！！』

『アミノマジョサイバンケン』

『お正月から15世紀へタイムスリップ！』

またミコトが犠牲にさせられている。これ、大体流れが出来たな？  
と思いつながら思ってたよりもまともなガイア主義というものに触

れた。それでもベルが言う様な極力オスな主義を掲げるガイアも存在するという事らしいので、安心する事はやはりできないのだろう。ただ本来のガイア主義は法律では守れない者、法によって弾圧される思想や趣向、それを守り、そして一緒に協力して立ち向かう事をベースとした、《思想と魂の自由》をベースとしている様に感じられる。

力への渴望は守る為のものだ。

無法はそうでなくては認められないものがあるから。

法と秩序に対抗できるのは力と意思。それを重ねる為には途方もない努力と経験が必要になってくる。だからこそ、ガイア主義は力を掲げるのだろう。それを得るための努力は、誰もが苦しむと解る道だからこそ。

「ま、おかげで俺も人間を止めて破戒僧さ。俺は酒も女も煩惱も絶てなかった生臭だからな。破門されちまったわ。だけどそれを止められなくても信仰は生きている。ちゃんと感謝しているんだぜ？　だけどそれを世間一般じゃ許さねえ。だけどガイアならそれを許容できる、って話だ」

解りやすい例えだった。もっとイメージ的には反社会主義者に近いものだと思っていたが、そんな事はなかった。とはいえ、それで安心できるわけでもないようだが。

ともあれ、ガイア寺院、ガイア教団とも海外では呼ばれる組織の話をして貰いつつ、香川県高松市へと到着する。空を飛翔する黄龍の存在と強さにビビる人が続出する姿を、目を輝かせながらガイアーズ連中は楽しんでいた。逆に黄龍という守護神の意味を持つ存在はどうやら転機が来たであろうという事を確信でもしているだろう。

どちらにしろ、黄金の美しい龍の姿はこの四国の行き止まりに新しい風を呼んだ。

淀んでいた空気を黄龍の呼び起こした風が浄化し、重苦しいヘルの生み出した冥界の空気を祓った。そうやって高松城上空に到着すると、破戒僧が片手を持ち上げてんじゃ、と声を零した。

「依頼をしている分直ぐに通されると思うから、ちと下に降りるだけ

降りて待つてくれ。俺は大将に話を通してくるからな。ああ、黄龍はそのまま出してきておいた方が実力が解りやすいからな、変に絡まれずに済むわ」

「おう、解った」

「んじや、直ぐ戻るな。ネズ！ テンドウ！ お前らは兄さんが待つている間の面倒を見ろ！」

「うっす！」

「了解つす！ じゃあ、待つている間うどんしりとりでもしますか？」

「うどんしりとり」

『凄く気になる……』

物凄い題材が限定されているのだが大丈夫だろうか？ 黄龍の上に乗ったまま、振り返つてうどんしりとりを提案したテンドウへと視線を向ける。テンドウはそれを受け止め、胸を叩いた。

「任せてくださいっすよ。うどんしりとりはうどんの名前だけでしりとりをする香川の伝統的なゲームっすから」

『オチが読めた』

『いやいや……流石に……なあ……っ？』

「ごくり、と生唾を飲み込みながらテンドウが話を続ける。

「それじゃあ始めますよ？ さぬきうどん！」

自信満々にそれをテンドウが宣言し、そして表情を固まらせた。

「アレ……また負けちゃいましたね……うどんしりとり、何故か勝てた事がないんすよね……」

『嘘じゃろ』

クラリオンを超える恐怖とスダマ先輩を超える狂気と出会った瞬間でもあった。

恐るべし、ガイアーズ……！

## 神州混沌行脚 XII

「大将が面会の準備を整えたぜ——ってなにやってんだ？」

ネズとテンドウとアンの四人で待っている間、ひまなのでしりとりで遊んでいた。うどんさえ抜けば普通なのだ、うどんさえ。何故そこでうどん縛りをした理由が一切解らなかつた。だから黄龍を空に浮かべたまま、その下で暇潰しにしりとりで遊んで待っていた。喉渴いたら飲み物持つてくる、と言われてもストレージに色々と食料とかぶち込んであるし、ぶつちやけ何かを頼まなくても特に問題が無かつたりする。

超人になってから食べたものは完全に消化されてエネルギーに、というか M a g に変換されるのでトイレに行く必要すらなくなつた。これ、超人としては割と普通のことらしいのだが。

まあ、そういう訳で頭を悩ませる問題は M a g や経験値の事ばかりだつた。なので普通にしりとりで遊んで待っていたら破戒僧が戻つて来たという次第だつた。というわけでしりとりを切り上げ、破戒僧へと視線を合わせた。

「とりあえず、アンだけ先にうどん食べさせられない？」

「ああ、おう。ネズ、テンドウ。嬢ちゃんを食堂に連れてつてやれ」

「了解つす」

「お任せください旦那！」

「うー、どん」

『ちよつと見てて不安になるわね……サマナー、私もついて行っていないかしら』

まあ、一人ぐらい付けた方が安全だろうし。ベルを召喚して、アンの護衛につける。護衛が必要なレベルでもないが、アンの口数が非常にアレなので、翻訳にベルを付けておいた方が何かと、誤解を生まずに済むだろう。ベルとアンが食堂へと案内される姿を見送りながら、今度は破戒僧について行き、高松ガイア城の奥へと向かう。近代化改修によって城という名前ではあるものの、実質的には要塞に近いものを感じた。

霊的防衛、物理的防衛、二種類の要素がこの城には用意されている。何をどう足掻いても絶対に死守してやるという意思を感じる。

それはそれとして、破戒僧に案内されて奥へと進んで行く中、ガイア僧やガイアーズの姿を目撃する。流石重要拠点を防衛する為の人員だけあって見えるレベルが高くなってきている。大半が30代はレベルを保有している。だがその中に時折、40代にまでレベルを伸ばす者も見える。

今の崩壊世界、一般的なサマナーやバスターの上位組平均は大体40前後という所だろうか？ これまでは倒せる悪魔の関係でそこら辺が上限だったが、今では壊れたようにレベルの高い悪魔が出現してきていた。出現する悪魔の都合でレベルが上がれなかつた連中も段々力を付けて来る頃合いなのだろうか……？ まあ、どちらにせよ、自分もひたすら悪魔を殴り倒して強くなるだけだ。

強くならなければ、出来る事も出来ない。

強ければそれだけいいのだ。

だから破戒僧について行き、城の中へと進み、近代風に内装を施されている場内を進んで、その中の一室へと案内された。先に入った破戒僧が頭を軽く下げる姿が見えた。この男でも頭を下げる事があるんだな、と思いながら反射的に《アナライズ》を行い、そのレベルの高さに驚いた。

魔王 サンモトゴロウザエモン Level 183

現在日本に存在している悪魔としては最大級、最上級のレベルを保有している存在だった。ただダンテのレベル100超えを見ると驚きはしない。そもそも全盛期のダンテはその更に上のレベルを保有していた疑いさえある。今でさえリハビリ中なのだからまだまだ上がるだろうなあ、とは既に諦めている。だから自分より高い悪魔が出現した所でああ、またか……以上の感想が出てくるような事はなかった。

まあ、というかクラリオンとかいう化け物を見ちゃった以上、100レベルでも超えてくれないキヤインパクトが薄い。

「大将、連れて来ませ」

「おう」

ドスの効いた声で奥に居た姿が振り返って来た。それで見えるのは黒髪をオールバックに流した、サングラスを装着した黒いスーツの巨漢だった。上位者特有の凄まじいまでの気配を纏った男は威圧しているのだろう。此方へと視線を向けながら、値踏みしているのが見える為、

「おいおい、折角援軍に来たのにそれはないんじゃないか」

軽口を零す。それに魔王が唇を歪めた。

「アナライズした上でそれだけの軽口が零せるか。合格だな。ダン、お前は下がってろ」

「了解、っと。じゃあな坊主。暇なときに酒でも飲もうや」

破戒僧が退室し、山本はデスクの向こう側の椅子に座り、足を組んだ。軽く顎で勝手に座れ、とジェスチャーしつつ葉巻を取り出し、それを啜える準備を進めていた。遠慮する理由もないので、適当に来客用のソファに座った。

……なんというか、やや落ち着かない。

『ガイア日本トップの山本五郎左衛門、アクの強いガイアを日本で見事にまとめ上げてる魔王だな』

ミコトが知っている事を説明してくれる。そういえば元はクズノハ所属だ。そう考えると情報を持っているのだろう。だから素直に耳を傾ける事にした。

『なんつっても土着の魔王だ。ずっと昔から顕現しているタイプで平和を乱そうとはしないタイプだ。純粹に自分との同類とかを守る為に受け入れる土壌としてガイアに下った……って話だったか？  
まあ、魔王ではあるけど悪い奴じゃねえよ。面倒な奴だったらライドウが暗殺してるしな』

『生きている事が全ての答えだね！』

『面倒な連中は特攻兵器RAIDOUの出番じゃな！』

『いや、まあ、確かにそうなんだが……なんか、釈然としない……』

言いたい事は解る。だがそいつらに言うだけ無駄である。だけど馬鹿な会話を聞いていれば自然と、肩から力が抜ける。体に力を入れ

ているのも馬鹿々々しくなってくる、というのが本音だが。

『……まあ、ガイアってのはメシアに排斥された連中を受け入れる為の土台でもあるからな。サンモトはそこら辺上手くやってるよ。妖怪大将って言われるだけはあるな』

ミコトの話を聞く限り、悪い人物ではないのは解る。ただし、それが俺の味方であるかどうかとは、また別の話だ。

「で、悪魔協会から依頼を請け負って援軍として来たんだが……？」  
「ああ……儂はここで戦えない連中の面倒を見る必要があるからな。動けん。とはいえ、部下の中で頼りになる連中もヘル一人だけならどうにかなるが……英霊を含めた連中相手だと少々厳しくてな」

ふう、と山本が煙を吐き出した。ゲストの前でありながら堂々としたその吸いっぷりには惚れ惚れとするものまであった。まあ、あくまでも憧れだ。鳴海に借りた煙草を吸ってみたが、クツソ不味いので根本的に肌に合わないという事を理解してしまったから、自分が喫煙者になる様な未来はないだろう。なんというか、あの匂いが嫌いなのだ。そう言えばダンテも同じことを言っていた気がする。

「相手はヘルだけじゃない、と？」

ふう、とその言葉に山本が煙を吐き出した。そしてその煙が形を変え、絵を空中に描く。それによって表現されるのは狼と蛇の姿だった。

「冥界の女王ヘル、兄弟、フェンリルとミドガルズオルムも同時に出現している。ミドガルズオルムが今の四国を囲ってる」

「なんだって？ 気配がなかったぞ」

「運が良かったな。おそらくは休眠状態だったんだろうな。だがおかげで儂がここから動けない。奴が体を動かすだけで四国が崩壊しかねないからな。それに英霊兵団とフェンリル。手が足りぬわ」

ふう、と再び山本が息を吐いた。少し部屋が煙たくなってきた。

「で、俺がヘルをぶっ飛ばせばいい、と」

「ああ。ワシはミドガルズオルムの抑えに回る。今、四国の生きている人間は全員高松に集めたしな。他を防衛する必要もない」  
「そんなに死んでるのか……」



「末世を迎えたのだ。それぐらいは死ぬだろう」

人がたくさん死ぬ案件だとは思っていたが、それでも四国は一都市を残して壊滅するなんて思いもなかった。だけど成程、上位悪魔が動き出せばそういう規模で死者が出る、というのは良く理解した。そして同時に、ヘルに対する殺意も湧き上がってくる。こいつあぶち殺さないと採算が取れないよなあ、と。まあ、元から殺す予定ではあったのだが。

「で、戦えるのか？」

「ここに来る前に八岐大蛇を始末してきたけど？」

「ふむ……それならヘルの相手も出来そうだな」

ふう、と山本が煙を吐いた。そろそろ煙が鬱陶しくなってきた頃合いだ。山本はしばらく、考える様に椅子に座りながら足を組み、無言を貫いていた。此方からかける言葉は今はない。クライアントは向こう側なのだから、言葉をしばし、待つ。煙の中、ある種の居心地の悪さを感じていた。だがその沈黙を山本は破った。

「……ヘルの出現までにはまだ時間がある。奴は儂を警戒して姿を現そうとはしないからな」

「殴り飛ばした？」

「一回だけな。残念ながら仕留めきれんかったがな。そこで奴を仕留めきれなかったのは儂の不手際よ。まあ、嘆いていた所でしようがない。奴は今は使い捨ての出来る戦力を地上に送り込むことで此方を疲弊させる事に動きを切り替えている。しばらくは姿を隠し続けるだろうな」

あの英霊兵団の事だろう。無理矢理目覚めさせられたかつての日本人たちの英霊。それをヘルは戦力として利用している。あんまり、許せるような内容ではない。英霊自身、物凄い苦しんでいるという話でもあったし。

「だが貴様が黄龍なんぞ連れて来たおかげで話が楽になる。黄龍の浄化の波動でこの四国を一度一掃する。それでヘルが張った冥界の衣を四国から剥がそうとすれば、それに対応できるのはフェンリルと奴自身のみよ」

「そこを狙って潰す、か」

その言葉に山本が頷いた。

「浄化の力そのものでは足りん。それに指向性を与える為の道具は明日までにこっちで用意する。持て成すから今夜は泊まっていけ」

鍵を使えばいつでもバーに行けるからぶつちやけ、ここで泊まる必要はない。というか黄龍に乗ればどこへでも移動できるし。だけどそこには山本五郎左衛門としての筋があるのだらうと思う。故にその歓待を受け入れる事にした。

『それで正解だよサマナー。相応の格を持った人物が来た場合、それを持て成すのも支配者としての矜持だ。それを拒否するのは友好の否定につながるからね』

『まあ、面子を潰す行為じゃからな。日本人は謙遜しやすい性格をしておるから、ここは注意するんじゃぞ』

色々と覚える事も増えてきたが、帝都に居る間にみっちりとベルから色々悪魔や昔の時代の作法とかは教えて貰っている。その成果が漸く見えてきたという感じだろう。山本との話し合いは悪くなかった。山本もどうやら、ジャミングはしているもののMagの質から大体の力量を割り出せているようだし。お互い、損をする話でもない。

「ではまた明日会おう、悪魔協会のサマナー」

「ああ、明日は四国に青空を取り戻そうとしようか」

この赤い月はあまり見えていて気持ちよくはないから。そう思いながら山本との話し合いは終わった。部屋をでれば破戒僧が待ち構えているのが見えた。片手を上げてよっす、と挨拶をしながら、  
「で、どうだったよ。大将は」

「とりあえず契約成立。明日、合同でヘルを釣り出して始末する事になったよ」

「こりゃ頼もしいな。って事は大将の事だし今夜は宴になりそうだな。とりあえず嬢ちゃん居る食堂へと案内してやるよ」

「正直大人しくうどん食ってるか心配だったから頼むわ……」

「はははは、まあ、波乱の似合いそうな子だったしな……」

「やめて、ほんとやめて」

ただでさえ可愛くて強くて可愛い上に賢くて可愛いのでから狙われてもしょうがない理由しか存在しないのだから。物凄く心配になってしまう——相手の事が。握り潰していないだろうか？ 軽く振り払った勢いで人間ピンボールに発展してないだろうか？ アンはああ見えてどこか抜けている所があるので非常に心配だ。

「はあ……まあ、俺もうどんでランチにすつか」

「なーぜか残ったのが香川だからな。うどんは美味いぜ。しつかり食べていけよ。何せ世界が崩壊してもクオリティが落ちる処か《終末香川うどん》とか《アポカリプスうどん》とか発明しているからな」

「もしかして高松市の人々正気やられてない？」

「まあ……多少は」

瘴気、やや漂っているししょうがない部分もあるか。それでもまだ、全滅していないだけ凄いのだろう、と破戒僧の横を歩きながら考える。山本五郎左衛門は即座にこの状況を突破する為に必要な道具や、どう行動すればいいのかが分かった。

だけど俺にはそれが解らない。とりあえず原因をぶち殺すという知識しかない。それにしたって特別な手順が解らない。場合によっては適当に地上を薙ぎ払って呼び出す必要すらあるかもしれない。そこで直ぐに答えを出せて、判断できるだけあの魔王は凄いなと思えた。

「大将……どう思った？」

「凄い迫力のある組長っぽい人。……いや、まあ、底の読めない人かな」

その言葉に破戒僧が笑った。

「はっはっはっは。大将はなあ、元々は日本全域の社会に紛れて暮らす悪魔の面倒を見てたんだよ」

その言葉に首を傾げる。結構、初めて聞いた概念だった。

「可能なのか？」

「おう、意外とこれがあるんだわ。人型に擬態して、悪魔としての力を極限まで抑え込んで隠して。後は日常的に消費するMagの量を節

約すれば、笑ったりしている人間が放つMagだけでも存在し続ける事が出来るんだよ」

「そういう悪魔連中の面倒を見ていたのがあの魔王だという話だった。」

「近代化すりゃあする程自然が減つてくからな。山の中に暮らしていた悪魔とかは自然と居場所を失って、技術の向上によってヤタガラスとかの監視網も厳しくなって、捕まる悪魔も増えた。そういう連中の為に立ち上がったのが大将よ。ガイア教団に幹部として所属して、日本を任せられたんだわ。んで海外からガイアの協力者を呼び込んでそういう悪魔や社会に馴染めねえ俺の様な馬鹿を集めたって訳よ」

『たまげたのお、凄いまともじゃ』

『何時ものガイアはどこへ消えた……？』

割と失礼だぞお前ら。

「けど聞いていたガイアのイメージからは離れて行くのは確かだ。もっとヒヤッハーしている様な連中ばかりだと思っていた。だけどここで聞いている分は、かなり真面目というか……弱者の保護と団結を目的とした集団に思える。」

「まあ、日本だけが特殊だと思っただ方がいいぜ？」

「そうなのか？」

「現代日本は宗教という概念に関しては恐らく一番寛容で広い視野を持っていて国だからな。元々異なる思想を受け入れて調和する性質を持っている——つまり潜在的にNeutralの性質を持っているんだよ、この国は」

城の外へと出た。相変わらず空は赤い。この空もヘルを始末すれば元の青空に戻るだろう。本当に、しようもない世界だと思う。

「こんな空を見る為に世界を再生した訳じゃないのにな……。」

「……お前が海外に出る時は気を付けろよ」

「……？」

破戒僧が足を止め、此方へと振り返りながら言った。

「日本のガイアとメシアは世界全体で見ればかなりマシな方だ。トツプがまともなのとヤタガラスとクスノハの質が高いつてのがあるか

らな。どう足掻いても日本という国の内部で戦争すりやあ最終的にヤタガラスとクスノハが勝ちちまうから、ガイアもメシアも過激な連中を送り込めねえ。だからまともなのが比較的が多い。全部まともって訳じゃねえからな」

『まあ、先代の仕事だったな。第二次世界大戦に乗じて欧州からメシアン、アジアからガイアーズを大量に乗り込んできたのをライドウと俺で片っ端から皆殺しにしてやったぜ。問題を起こそうって考えさえなければ死なずに済んだらもうけどなあ』

そこで容赦なく殺すって選択肢を取れる辺り、自分が知っている14代目帝都ライドウよりも非情なライドウだったのかもしれない。自分の知っているライドウはアレなんだかんだで甘さを残している男だった。少なくとも最後はそう見えた。そしてそれがあの男の魅力だと思う。まあ、それはともあれ、

「……海外、そんな酷いのか?」

「アジアのガイア勢力圏は無法地帯。アメリカや欧州を始めとしたメシア勢力は表向きはなんでもねえが、政治の裏にはメシアが関わってねえところがない程だぞ」

「うわあ」

こんななん世界再生止めたくなくなりますわ。いや、止めないのだが。とか止められない。それでも世界再生を進めれば、メシアとガイアのやべーところが復活するのだと思うとげんなりする。

「ま、心配すんな。大将もメシアン所の代表……ああ、日本のな? は少なくともお前の事情を知ってるからな。過度に干渉するような事はしねえよ」

「そりゃあ良かった」

「ちよつとした勧誘合戦はありそうだけどな」

その言葉に再び歩き出しながら呆れの溜息を吐き出せば、がっはっはっは、と笑う声が聞こえた。まあ、そりゃあ、世界を唯一修復できる存在なのだから当然どの組織だって欲しいなあ、とは思う。まあ、最終的には強くなれば全部解決する。勧誘しようと思わなくなるほど強くなればそれで問題解決だ。強ければ強引に引き入れる事も出

来ない筈……だ。

まあ、まだ先は長い。考えてもしようがない。

『そうそう、未来が見れる訳でもないんだから、サマナーは困った時に考えればいいさ』

『手遅れにならなきゃいいけどな』

まあ、そんなガイアの内情の話をされながら、食堂へ、うどんの主戦場へと向かった。平和にやっつけて欲しいなあ、と思いながら食堂へと案内され、そしてそこでうどん、おそらくは4杯目のアンとベルの姿を目撃した。

そして近くの壁にケツ丸出しで突き刺さって若干焦げている人間たちの姿を見た。それを目撃しただけで大体何があったのかを察した。だからとりあえず、それを全部無視して、アンに近づき、

「美味しい?」

「うん!」

気持ちの良い元気な返事を貰った事で全部良しとした。

これでまた戦える……!

『コスパの良いサマナーじゃなあ』

『俺はこいつが美人局に遭わねえか心配だよ』

勝手な事を言う仲魔を無視して、自分もうどんランチタイムに突入する事にした。

## 神州混沌行脚 XⅢ

昼食をうどんて済ませる。

それが終わるとだいぶ暇な時間になる。正直な所、黄龍で日本を好きに回れるので別に、今日ここに留まる必要がない。ただ、魔王に歓待されるというのならそれなりに楽しい食事になるであろう事は予想できる。それを楽しみにしている人修羅が存在しているので、それから逃れる事はしない。つまりは、まあ、何時も通りの事をここでやるしかない。日帰りで出かけて戻ってくる事も考えたが、余りオーバーワークをするのも体に良くない、というのが仲魔の話だった。

『サマナー、確かに君は強くなった。それで誰かを救えるようになった。そして君の力で実際に誰かを救う事が出来た。島根の避難キャンプの人達が全員生きてるのは君が八岐大蛇を討伐する、という努力を行った結果だよ』

だけどね、とラーマは付け加えた。

『一度無茶をすれば、それが残る。一度無理をすればもう一度、と思ってしまう。無謀を達成してしまえばそれは可能になってしまう。解るかな、サマナー。そうだ、無理無茶無謀を達成する事は格好良く見える。だけどそれは少しずつ溜まっていくんだ。乗り越えれば乗り越える程次のハードルが高くなっていくんだ、それが別に必須という訳でもないのに。そして最終的には自滅する』

だから、と話は続く。

『君が努力する必要はあっても、それを必要以上にする義理も義務もない。強い力には責任が伴う、なんて言葉は所詮敗北者の言葉だよ、サマナー。それは力のない人間の妬みの言葉でもある。力がないからある者を動かす為の言葉だよ。弱き者にとって、力のある存在を動かす事が出来た時点で、或いはルールで縛る事が出来た時点で勝利なんだから。だから君がそれに縛られる必要はなにもないんだよ』

と、という言葉を仲魔から貰っている。まあ、まさしくその通りというものだった。だから遠征するような事を止めて、純粹に何時も通り過ぎようという事になった。そして何時も通りはなんだろうか？

という話になれば、

まあ、普通に帝都の頃を思い出す。

そして日常的に鍛錬していた事も。

うどんを食べ終わる頃には案内と世話役が破戒僧からチエンジしており、日本のガイア寺院に所属する褐色黒髪という中々珍しい容姿の巫女が案内に変わった。こども露骨だと歓待されている感があった、逆に新鮮だった。ただ仕事はちゃんとやってくれるので、体を動かせる場所を求めれば、高松城の鍛錬場を貸して貰えた。こういう状況だからこそ鍛錬しているというガイアーズはそれなりに居るもので、割と人の姿を鍛錬場には見かけた。

当然、普段はいない奴がいると目立つし、巫女と美女を伴ってやって来たので、目立つ。とはいえ、体を一番動かしやすい場所はここらしいので、周りの視線を気にせずに鍛錬する事にする。案内された所でサンキューと告げ、思考から他の連中を完全に排除する。その上で召喚する仲魔はラーマ。姿は変わらず、赤金のローツイン、サリーを着た女性姿だ。

「周りの視線を気にせず何時も通りを振る舞う姿、実にグッドだよサマナー。さて、それじゃあ鍛錬を始めるよ」

「宜しく頼むラーマ」

「リユージ、がん、ぼっ」

アンにサムズアップを向けてからラーマに視線を戻した。

うん、とラーマは笑みを浮かべて頷き、拳を構える。最近はいンド式の武術で基本となるカラリパヤットやラーマが始祖である古式ムエタイ等を教わりつつも、根本的な武術の才能がないので、徹底して基礎というか基本を叩き込まれている。どんな武器も、どんな戦闘も、基本となるのは格闘術。その上に武器の扱いがやってくる。格闘術を学ぶ事で体という武器の動かし方を理解する必要がある、とはラーマの言葉だった。

少なくとも《ガンスリング》で銃を運用する為の体術はちゃんと存在している為、そこまで壊滅的という訳ではない、との話だった。だがそこからの発展性も応用性もない。1+2=3の問題、自分はX



＋XⅡ3という状態になっている。つまり土台となるものがない状態で一気にエンドまで到達しているという形になる。答えに到達すりゃあそりゃあ便利だ。だけどその前提となる部分が抜けている。だからそれを別の所に運用できない。

ラーマ曰く、別段、この業界でそれは珍しい事じゃないらしい。

少なくともデビルサマナー、デビルバスターという連中はレベルが上がれば強制的に才能が開花され、それで戦うのが普通だ。下手な物に手を出して失敗する方が危ない。だから才能を伸ばした一点特化が普通である。そして足りない部分を他人やサマナーでカバーする事で問題を解決する。それは悪魔でも変わらない。アギ系統しか覚えられない悪魔、電撃系統が得意な魔王。当たり前であり、それを他に応用しなくても普通に強くなれる。

だけどそれでは足りない、というのが単純な話だった。

同じレベルの相手と戦った場合、勝利するのは相性の良いほうだ。

相性でも互角であれば？ 個人の技能と経験が勝っている方だ。

上位になればなる程煮詰まってくるのがこの世界だと言われている。レベルが80、90を超えればもはやレベルそのものは余り意味がないとも。そうなってくると後は相性差、そして持っている手札の数が勝負の内容になってくる。そしてその場合、一点特化型は封殺されやすい部分がある。だからある程度、個人でも大体何でも出来る様になる必要がある。

そういう意味でも、いろんな事が出来る様に鍛錬は続いていた。パラシユラーマを経たラーマの今の育成能力は前よりも上がっており、教えられたものが吸い込む様に吸収されていく感覚がある。

だから今日も、時間を見つければレベルアップにつながる鍛錬を行う。何時かこれが役立つ時が来ると信じて。

拳を握り、構える。左半身をやや前にした形で。自然とそうなる様に何度も鍛錬を繰り返している。左右で拳を作りつつそれもやや持ち上げる様に前へ。最初の頃は拳を繰り返すのに一旦、それを引こうとする癖があった。だけどそれも今では不要と肉体が理解して、素早く前へと拳を繰り返せるようになっていく。そして右足を直ぐに蹴

り出せるようにそれも持ち上げている。

そう、構えは古式ムエタイをベースにしている。ラーマといえは古式ムエタイの始祖でもある。つまりこの世界で一番上手く扱える存在でもあるのだ。始祖としての伝承補正でそうなっている。一応カラリパヤットも学んだが、あちらは特殊過ぎて少々、難しい。その為現代にも継承されて、解りやすい方である古式ムエタイをベースに技術を教えて貰っている。

同じようにラーマ側も古式ムエタイの構えを取る。

そして発動するラーマの《サイダイン》、つまりは念動力魔法の最上級。ナラシンハを経由する時に習得した魔法でもあった。《グライダイン》や《フレイダイン》の方が遥かに優秀な上、普段は使う必要もない魔法だが、それとは別の運用で利用する。

《サイダイン》の念動力が自分の体を捉え、そして構えの細かい部分を痛みと共に強制的に矯正するのを感じる。強制的に正しい形へと構えを細かい部分まで調整すると、それをそのまま、スローモーションでラーマとの組手が始まる。

「さあ、今日も何時も通り細胞の一つ一つに自分が今経験している動きを記憶させるんだ」

「おっす」

そのままラーマと組手が始まる——と言ってもほぼオートパイロット状態である。《サイダイン》の影響で体が勝手に動く。なるべく脱力して自然に動きを受け入れながらも、体に力を入れて、動かされる動きをトレースする様に動かす。それに相対するラーマは同じ速度でゆつくりと、しっかりと観察できる速度で体を動かしてくれ。自分と相手の動きをそれぞれしっかりと認識しつつ頭の中に叩き込んで行く。

体力的には余裕なのだが、体がきつい。腐っても《サイダイン》だから手加減していてもミチミチと体が締め付けられているし、常に一定の痛みが鍛錬の間は主張し続けている。曰く、痛い方が体と記憶に残りやすく効率が良いからという話だった。理屈は解るが、それでも結構辛い。しかもそれをノンストップでひたすらずっと、ゆつくりと

続けて行く。全く終わりが見えてこない為、精神的にも辛い。

それでも指導者、武芸の師としては神話に名を残すクラスでも最上位の化身を兼ね備えている。その為、どんなに嫌でも覚えようと思えば、勝手に覚えて行く。体が動かされた軌跡を学んでいくのを感じられるのだ。無論、それだけでは駄目だ。

「良いかい、サマナー。この距離で拳が飛んできた場合は——」

「この高さまでの蹴りであれば逆に利用できる。これ以上高くなると——」

「ここまで密着された場合、おそらくはノーモーションでの徹しを放ってくるから防御するだけ無駄になる。逆にその威力を受け流して距離を開けた方がサマナーには有用だろうね。経験しようか」

と、完全に継接ぎを教える訳ではなく、一つ一つ流す様に経験させて行き、それをパーツとして蓄積する。継接ぎのそれをどうやってピックアップし、繋げるかで成長を見る予定なのだ。なので時折、急に《サイダイン》を解除して戦闘速度まで体を加速させてそのまま殺しに来る。その内容は先ほどまで学んでいた内容がベースになるので、先ほどまで学んだ事をピースとピースを繋げ、動きとして連携させながら対処する必要がある。

「今の打撃、本当に必要だったのかいサマナー？ もっと別に繋げる方法があつたんじゃないかな？ さ、やり直そうか」

そうやって対処していると、超一流の武芸者からその動きを教わっているのに、自分の成長力が一流程度であるのを自覚させられる。また同時に、まだ自分の方がラーマよりもレベルが高いのに、ステータス的には彼女に劣っているという事実も自覚させられる。

レベルが上がって体力が大幅に上昇していても、流石に同レベルの相手から《サイダイン》を喰らいつつ鍛錬を行えば、数時間程度で体力が尽きる。

何時も通り、汗だくになりながら座り込む。

「はい、お疲れ様サマナー。一日一歩、これで君は更に前へと進めた。その成長を忘れず、慢心せずその歩みを続けてくれることを祈る」

「俺も、慢心して格好悪くはなりたくないなあ」

苦笑しながら息を吐き、立ち上がりながら体を伸ばす。この疲労感がまた気持ちいいので、それを素直に消すのもどうかと思うし、安易に回復魔法を使う様な事はしない。だからもう一度ふう、と息を吐き捨てて呼吸を整えた所で、

「お疲れ様ですリユージ様。此方をどうぞ」

「ん？ ああ、態々こんなものを」

「いえ、案内と世話を任されていますから」

そういう事で巫女からタオルとスポーツドリンクを受け取った。その気遣いが嬉しかった。ふう、と息を吐きながら顔周りの汗を拭き取りながらスポーツドリンクを飲む。食事も排泄も必要のない肉体になったが、それでも鍛錬の後に飲むドリンクの美味しさは変わらない。い。

と、じーつとこつちを見ているアンの視線を見つけた。

「どうしたんだ？」

「んー……ん？」

その言葉にアンが首を傾げた。本人でも良く解っていないらしい。出自は非常にアレだが、相変わらず謎な部分が残る子だなあ、と思う。

そこが可愛いのだが。

『致命傷じゃな？』

『ほら、恋は盲目って言うだろ？』

『ウチの人修羅が可愛いのは当然でしょ』

『ツーストライクだな……』

「この後のご予定はありますか？ 汗を流したいのであればシャワー室を開けますが」

「ああ、いや、それはいいよ。水も貴重だろうし。これがもらえれば十分」

そう言つてタオルを持ち上げる。水なら帝都から死ぬほど持ち込んでいるから、それで軽く流せばいい。だから別にシャワーなしでも問題ない。少なくともそういう生活に関しては崩壊初期で慣れている。なんだかんだで人間のバイタリテイが育てられる環境だと思う

——まあ、今も続いているのだが。

「まあ、特にこの後は予定もないけど……勉強、かな」  
「勉強、ですか」

巫女の問い返しに頷く。

「悪魔との交渉方法、他の人間とのコミュニケーションの取り方、仕草や話すタイミング、神話や伝承に関する知識……まあ、色々」

『まだまだ学ぶ事は多いわよサマナー』

『婿を認められないから育成する教育ママと見た』

『貴様、また揺り籠に剣を突っ込まれるぞ……』

『止めろよ……妙にピカピカになって戻ってきたんだから……なんだよ天叢雲剣＋１って……』

ちよつと、スダマ先輩目覚めかけてない？ それとも夢の種類変えた？ 今度睡眠薬でも目の中にぶち込んでみるか、と仲魔たちの会話を聞きつつ思った。

「強さに貪欲なんですね」

「強さに貪欲というよりは必要だからやってるって感じに近いよ。俺、そもそも数か月前までは一般人だったしな。もうこの業界からは逃げられない。力が無きや好きなように生きる事も出来ない。だったら勉強しなきゃダメだろ」

生きるために必要である事は事実だ。そしてベルが魔王としての知識から必要な物を教えてくれるなら、それは教えて貰える環境としては最上のものだ。偶に、途中で鳩をデイスる事だけは止めて欲しい。時々アイツ、めんどくさくなる時があるのだ。まあ、そこは一種の人間性アピールと思おう。悪魔に人間性を求めるのもおかしいけど。

まあ、それだけの話だ。

特別な事ではないだろうと思う。誰だって、必要になれば努力ぐらにするだろうし。今だって誰もが生きる為に必死だ。その中で俺があーだこーだ偉ぶる事でもないだろうと思う。だから、まあ、勉強しよう。

そう思った所で、

「——おうおうおう、ナカダさんに挨拶がねえとは中々キマってん

じゃねえか……!」

「おお!? ああん!」

『なんか物凄く楽しそうなのがきたぞ』

モヒカンにサングラスを装着した理想的な姿をしたガイアーズの両脇をこれまた、一目でチンピラと解る連中が挟んでいる。滅茶苦茶睨みながらああん? おおん? とか唸ってる。凄い、特に怖い相手でもないのに怖く感じる。これはもはや一つのスキルなのではないか? と思うぐらいには迫力があつた。なんだろう、この圧倒的ガイアーズ的なムーヴメント。

『安心感かな!』

うん、それ、と仲魔の声に内心で頷く。噂に聞いていたガイアーズという連中、その真の姿に漸く出会えた……! という感動があつた。これ、どう対応すべきかなあ、と感動と困惑で悩んでいると、巫女が前に出てしまった。

「何をやっているんですか貴方達は。この方は現在の四国を助けに来てくれた援軍ですよ。山本様も歓待する事を望んでいる中、そのような態度を取るとは……!」

そうだね、と心の中で頷き、巫女さんの正論に頷く。それに対する、モヒカンチンピラチームの返答は、

「ヒヤッハ! ひゃ、ヒヤッハ!」  
「!?」

モヒカンが急にヒヤッハし始めた。しかも真顔で。まるで言語で会話している様な反応、困惑しか見せる事が出来なかった。それに合わせ、後方から眼鏡を装着したインテリ系チンピラが出て来た。「ナカダさんはおいおい、お前の様なひよろい奴が援軍とか冗談を言ってくれるじゃねえか……って言っています」

「俺この流れリアルでやるの初めて見た」  
「すみません、本当にすみません……!」

しかもそのナカダとかいう奴、横を向いて滅茶苦茶驚いているというか頭を横に振っている。違うのかよ。

「ひゃ! ヒヤア!」

「俺は自分で確かめた相手しか信じらねんだよ……！ とナカダさんは威嚇しながらうどんを要求しています」

もう既に仲魔どもはCOMP内で爆笑して使い物にならなくなっている。俺も思いつきり爆笑したい。明らかにモヒカンのナカダさんが困惑しているというか、腕を交差させてバツ印を作っている。ただ単純に言語障害のある人だったらしい。

「ナカダさんのクロスファイヤーの構えだ……！」

「マジで殺る気だぞ……!?!」

「すみません、ウチの馬鹿どもが本当に……！」

理想的なガイアーズな流れをするかと思っただが、完全にドリフかアンジャツシユか、そういうタイプの流れが始まっている。ポテチとコーラを片手に眺めていたい気分だった。やっぱりトツプがまともだと下もまともになるのか。いや、待て、下がうどんしりとりとかヒヤツハー語で話しているのだ。

もしかして魔王山本五郎左衛門もこれに匹敵する潜在能力の持ち主なのでは……？

「おい、てめえ、こつちの話を聞けやア!!」

「ふんっ！」

返答の代わりに飛び込んで、ドロップキックを顔面に叩き込んだ。綺麗なスパイラルを描きながら飛んで行く姿を眺めつつ、それが高松城を囲む堀の中に沈んだのを目撃し、サムズアップを向けてから首元へと持っていく、搔っ切った。

「お前ら、ガイアならガイアらしくもつと雑に因縁吹っ掛けて殴ってこいよ」

「りゅ、リ्यूジ様!?!」

「イキが良いじゃねえか！ やつたろうじゃねえか！」

「俺らのボスが認めたって力を見せてみるやあ！ 援軍は呼ぶけどね!!」

「あ、ナカダさんもう帰っていいっすよ」

「!?!」

『腹が笑い過ぎで痛いんじゃがこれ』

ガイア教団、ガイア寺院、或いはガイア。その主義主張故にベルカらの評価は無法者の集団だった。女を見つければ犯し、男を見つければ殺す。家を見つければ略奪し、困った人間を見つければ見捨てる。エゴイズムの塊であり、他者を必要としないのに集まる、矛盾した力を求める無法者たち。それ故に一切信用も信頼できず、そして背中を見せるべきでもない相手。ガイアーズは隙さえ見つけければ糧とする為、殴りかかってくる。それがベルの——というよりは一般的なガイアーズ。

ただその法則はどうやらここ、四国では通じないらしい。

うどんに飲み込まれたかどうかしたのか。

どちらにしろ——予想を遥かに超えて愉快な連中だった。

まあ、なんとというかこういうガイアーズばかりだったら別になんも問題ないな、と思いつながら援軍に大量のガイアーズを呼び込まれ、大乱闘スマッシュガイアーズへと発展しつつ午後を過ぎた。



## 神州混沌行脚 X IV

スマツシユガイアーズが結構楽しいレクリエーションとなったもので、気付けば時間は過ぎ去って宴の頃となっていた。暴れて遊んでいる間に宴の準備は進められ、そして遊んでいる内になんとなくだが、ガイア連中との親近感というか、友情みたいなのを構築しつつある。

ガイアというのは元はメシアに排斥された連中ばかりなので、社会的不適合者が多いが、そればかりではなく、なんとなく居づらかったり、事件に巻き込まれて社会に居られなくなったとか、そういう連中の受け皿でもある。最初は懐疑的だが実力を示してオープンになれば、結構簡単に仲良くなれる連中で、投げ飛ばしたり蹴り飛ばしたりでかなり派手に遊ぶことになった。

だがそれも終われば、高松城の宴会場に通された。そこに居るのは自分とアンだけではなく、明日の作戦に参戦する多くのガイアーズもそうだった。奥の舞台の上には山本五郎左衛門の姿が見えた。その姿を確認した途端、全てのガイアーズが無言を作り、黙る。集まった連中が飯の間で無言のまま、背筋を伸ばして魔王を見ていた。

流石の統率っぷりだった。そうやって全員が集まった所で、漸く魔王が口を開いた。

「テメエら、笑えているか?」

魔王が問うてくる。それに無言で言葉を誰もを受け止める。

「馬鹿な事に聞こえるかもしれねえ。だが笑えない人生に生きている価値はねえ。だから飲め、食え、そして女も用意したから抱け。そして笑え」

魔王が笑みを浮かべ、もう一度言葉を口にする。

「笑え! 明日、ワシもテメエらも死ぬかもしれねえ。だから笑え!

死ぬ、最後の瞬間まで! 今更テメエらに改めて告げる言葉もあるかよ。騒げ、全てを忘れて笑って、そして明日も笑って逝け! そしてあの小娘に本当の地獄つてもんを見せてみる!」

言葉にガイアーズの咆哮が高松城に響き、それを合図に宴が始まっ

た。うどん——だけではなく酒、肉、魚、野菜、大量の新鮮な料理が並べられていた。正直、備蓄とかが気になってくる量ではあった。だがそれを気にして食べないのは礼に欠ける。こうやって招かれた以上はしっかりと食べるのが礼儀であり、

既にそんな事を知るか、というレベルでアンが食べ始めているので俺が考えるだけ無駄だった。自分も料理に手を出し——そしてその美味しさに軽く痺れる。最近、美味しい料理ばかり食べているから舌がだいぶ肥えてきたなあ、と思ってしまう。なんだかんだでチエフエイも料理上手なんだよなあ。

「どうぞ、お酒をお注ぎしますね」

「あー、別にいいんだけど……」

「いえいえ、好きでやっている事ですので、どうぞ」

こうやって歓待される事は初めての経験なので、中々に気分が良い。美人さんにお酒を注いでもらうというのも初めての経験だ。まさかこんな日が来るとは思いもしなかった。少し前までは学生だったんだよなあ、と懐かしみながら酒に口を付ける。超人になってしまった影響で、全く酔えない。酔おうと思えばまだ酔えるのだが、明日ヘルとの戦いがある事を考えると簡単に酔う事は出来なかった。

と、そんな風に料理を食べていると、見慣れた破戒僧の姿が酒瓶を片手にやってきた。

「よう、坊主——いや、リユージュか。もうおまえを坊主っては呼べねえな」

「別に坊主でもいいよ。若いのは事実だし」

「それを素直に認められるってのがもう坊主って呼べねえ所さ。嬢ちゃんも楽しんでるか？」

「ん」

口に肉の固まりをほお張らせつつ、アンがサムズアップを向けた。大いに楽しんでいられるらしい。今度、暇なときには《あばかりぷす》にでも連れて行くべきだろうか。あそこも終末系創作料理が結構美味しかった。マザーハーロット風スパゲティとか、赤騎士のトマトスープとか、黒騎士のイカ墨ペンネとか。割と好きだった。

「で、おっさんは何しに来たんだよ？」

「いや、飯食うだけじゃ暇だろう？　話相手にでもなつてやろうかと思つてな」

「あ、旦那ずるいつすよ！　俺もサマナーの兄貴と話したいいつすわー！」  
「俺も俺も！　どうやったらそんなに強くなつたか話してくれよおー！」

破戒僧が話しかけてくるのを待っていたのか、周囲のガイアーズも食べながらも此方へと意識を向け、話しかけて来る。ここらへん、あんまり悪魔協会の馬鹿連中と主義主張以外は変わらねえなあ、と思える。いや、実際はそうなのだろう。主義主張が違うだけで、それでも楽しく生きていこうとしている連中なのは、トップの言葉を聞けば解る。

「笑え、か」

魔王・山本五郎左衛門の言葉を思い出す。印象的な言葉だった。

「俺らのボスはなあ、見た目はすっげえ怖いけど、俺達の事を良く考えしてくれるし、何時も助けてくれるんだぜ」

「そうそう。つまらない人生に意味はない。だから人生を笑えるほど楽しくしてやるからついてこい、つてな」

その言葉を補足する様に破戒僧が苦笑しつつ瓶から直接酒を飲みながら教えてくれる。

「大将が時々自分の足でスカウトしてんだよ」

「マジか」

「ああ。大将は割とフットワーク軽い方なんだよ。まあ、あの人は強いから誰も心配しちやあいねえけどな。けどあの人を誘つてくれたおかげで今楽しくやれてるって奴は多いぜ。大将も昔から化かし合いとかでわいわいやってるのが好きだからな。戦つたりする事よりもたくさん集めて宴会している方が性に合ってるんだわ」

成程なあ、と呟きながら酒が空になった、と思つたら注がれた。どうも、と巫女さんに軽く感謝すると、ついでに皿の上に色々と料理を乗せてくれていた。これは次に何を取るかと心配せずに食べられそうだ。

「山本の事を気に入ってるんだな」

「少なくとも日本ガイアーズで嫌ってるようなやつはいないと思うぞ。あの人は個人の力よりも率いる事とその管理に特化してる魔王だからな。日本ガイアはメシアと比べると結構勢力圏が広いんだぜ？ 東北の方はメシア勢力圏でもウチの連中とかいるしな。まあ、メシア自体があまり日本じゃ勢力持てないってのもあるけどな。救済思想はこの国じゃウケが悪いんだわ」

「俺ら、将来の救済よりも今の充実感が欲しいっすわ」

「金！ 飯！ セックス！」

「だけどレイプはダメ、絶対」

『世紀末じゃない!! こんな詐欺じゃない!』

『褒めろよそこは』

しかし海外と比べ、日本のガイアはモラリテイが非常に高い。それは話に聞いているガイアのイメージとは全く違うから驚く事でもあった。

「ん？ ああ、大将が基本的にそこはきっちりしてるからな。安易に犯罪に手を出さない様に見張らせてるし、女が欲しければある程度はガイア内でも都合出来る様になってるから。後は、まあ力つてもんのかえ方を教えられるからな」

「力の考え方？」

オウム返しのように言葉を繰り返せば、破戒僧が頷いた。おう、そうだと。

「力つてのはあれば振るいたくなるもんだ。ありやあそれだけで意味がある。力に溺れる奴が出てくるのは当然だ。そして俺達ガイアーズは力の信奉者だ。だけど、だからこそ力の在処つてもんを良く理解しなきゃならねえ。力に任せて刹那的な快楽を求める事を否定はしねえ。だけどそれは結局のところ力で力をねじ伏せる行いだ」

その言葉にガイアーズがサムズアップを向けた。

「囲みます」

「メタ装備用意します」

「油断している瞬間を狙います」

「そして囲んで殺す」

「ま、そういう訳だ。力で力を制した所で、より大きな力でぶつ潰されるだけだ。或いは数で、とか。それが普通だ。だから強くなっただけで自惚れんな、って話を教えられたりするんだよなあ」

部下の教育が本当に良く行き届いているガイア教団連中だった。だけどそうか、と納得する。これ、根本にNeutral思想が混ざっているのだ。根本に調停と調和が混ざっているのだこのガイアは。だからこそ恐ろしく真つ当な部分があるのだ。たぶん、原因……というかこの担当が魔王山本であるから、なのだろう。

『日本の魔王は西洋とかの魔王とは違って人を殺す為に出現する生物ではないからね』

『寧ろ生活に紛れ込んでいたり生活していたりするパターンが多いのお』

『そして通りすがりの俺らに殺される』

『やっぱ日本人怖いわ』

折角だしストレージに叩き込んでおいた酒、幾つか解禁していいよ、とDDS内の仲魔へと送れば、崇める声が聞こえて来る。お前らの信仰心安いなあ……と呆れつつ、酒をもうちよつと飲み進め、思った。

ガイアがこんなもんなら、メシアはどうなのだろうか……？

『我はもう鳩だから関係ないな！』

『事前に切り捨てに来やがったぞこの鳩』

「ま、お前も存分に楽しめ。相手は強敵だしな。楽しめる時に楽しめなきやあ生きてる意味もねえ人生だ。お前も最後は笑って逝けるように、今を楽しめ」

そう言っって背中をぽんぽん、と叩かれた。この魔王はどうやら、大変部下に慕われているらしい。言う事も大体は理解できるし、恐ろしく真つ当だ——それがこれからも、世界が再生してからも続く事を祈る事しか自分には出来ない。

料理を食べながら思う。

世の中、そこまで捨てたもんじゃないのかもしれない、と。

◆  
宴が終わると大抵のガイアーズが床に倒れている。当然ながら酒も出ていたのだから、それに酔いつぶれている連中が出ていたのだ。アンも食事に満足した様でお腹いっぱいになるまで食べたので、その介護にベルを出して夜風に当たる為に宴会場の外へと出た。酔い潰れなかったガイアーズはどうやら用意された女を犯しに行ったようだ。まだ童貞の自分にはハードルが高い。

だから改装された高松城の蔭へと、誰もいない場所へと移動し、ストレージから鳴海の煙草を取り出して口に啜えた。

『おや、サマナーが煙草を吸うとは珍しい。気に入ったのかい？』

『ふ……そういう訳ではない』

『何故コウリユウが自慢げなんじゃ』

それが男の世界つてもんさ。口に出す事もなく誰もいない、気配もしない闇の中に体を沈め、一人ぼっちの空間で煙草に火をつける。その煙をたつぷりと吸い込みながら息を吐き出し、赤い夜空に紫煙を解放する。

「あー……不味い……」

不味い。信じられない程不味い。やっぱり煙草は嫌いだわ、と吸いながら思う。

『だったらしなければいいんじゃないかのお……』

『ふ、男には時には浸りたくなる時があるのだ狐』

『だからなんでコウリユウが自慢げなんじゃ』

煙草は不味い。たぶんその自分の意見はずっと変わらないだろうと思う。だけどこの不味さが丁度良かった。適度にストレスを感じる。体が少しだけ、重く感じられる。ただの煙草だ。普通の煙草だ。だけどこれが嫌いだった。この味が、苦さが嫌いだった。喉に絡みつくような不快感が気に入らない。

だからこそ丁度良かったんだと思う。レベルが上がって、強くなつて、超人になつて、それでいて帝都を救ってしまった。多くの人間を

助けてしまった。違う、そうじゃない。俺はそういう男の器ではないのだ。調子に乗りたくはない。俺はもつと小さくて、そして自分の周りの幸せだけを守ればそれでいいのだ。そりゃあ、まあ、困った人を見かけたら助けることぐらいはするだろう。

だけど世界を救おうなんて考えちゃいない。結果として助けてくれるだけだ。だから感謝され、歓待され、それで浮ついた心を落とすには——この、苦さが一番だ。この崩壊世界には一つも存在しない、帝都産の煙草。今あるパケットの中身が無くなれば、それで使い終わってしまう煙草を一本一本大事に吸っていかないと駄目だ。だから煙草を通して、不快感を自分の体に取り入れる。

そして、自分という人間を自戒する。

忘れるな、と。そりゃあ多少は浮かれてもいいし、楽しんでもいい。だけど調子に乗るな。それだけの話だった。自分の気持ちや感情が自分からコントロールの外れそうになったら、煙草を吸う。そうするとこの嫌悪感が体を満たして、自然と落ち着かせてくれる。内側から体を蝕もうとするニコチンの感覚が気持ち悪く、そして落ち着いた。「ふうー……慣れたくない味だなあ」

まあ、おそらくは一生慣れない味だ。

「……アンを拾ってこなきゃな」

煙草が半分灰になった所で、宴会場で放置している彼女を拾わなくては。そう思い、残された吸い殻を吐き捨てて踏み潰す。人を殺して、悪魔を殺して、酒を飲んで、煙草を吸って、それで金を貰えるようになった。生活出来る様になった。昔とは大違いになったもんだ。そう思いながら歩き出そうとしたところで、

「ああ、リ्यूジ様。やっと見つけました」

「ん？ ああ、巫女さん」

山本に命じられて世話をしてきている巫女だった。どうやらいなくなつた所を探しに来てくれたらしい。

「探させちゃったかな」

「いえ、食後の一服が必要なのも解りますので」

「俺はいや、うーん……」

「……？」

まあ、ストレスを感じる為に煙草を吸っている、と言っても理解されないだろう。あの教室で覚えた煙草の苦さを忘れない為に吸っているなんて事、それを知るのは黄龍と鳩だけで十分だ。他の連中は知らなくていい、男と鳥類だけの秘密だ。ところであの鳩、なんだかなで無性なのが驚きなんだよなあ……。

「まあ、宵の良い頃になってきました」

「ああ」

明日はヘル戦だ。黄龍を酷使用する予定だし、相手がフェンリル・ミドガルズオルム、ヘルで集結して戦う場合、此方もフルメンバーで戦う必要がある。その場合、ミドガルズオルムには黄龍とチェフエイをぶつける必要があるし、フェンリルに対処できそうなのはラーマとミコト、となるとベル自分アンスダマと鳩でヘルに対応する必要がある。一番頼りになるアツカーを他の所へと流す必要があるのだ、

厳しい戦いになるだろう。早めに寝た方がいいだろう。そんなや泊まる場所に案内して貰うか、と思っていると、

巫女服の上半身をはだけさせた。下着をつけていない巫女服の下に隠されていた乳房が露わになる。そのいきなりな行動に、外面は平静を装いつつ、内心では滅茶苦茶焦っていた。

……ああ！ なるほどー！ なるほどなー！ そういうのなー！  
そういう意味で世話してくれてたのなー！ なるほどなー！ お兄さんそういうの良くないと思うなあ……！

『見えるかいミコっちゃん！ アレがクソ雑魚ヘタレ童貞サマナーだよー！』

『成程、これは見てる分には面白れえわ。だけどミコっちゃんは止めろ』

『ヘタレゲージ伸びてるぞー』

そのゲージ初耳なんですけど。そう思いながら平静を取り繕い、あー、と近づいてくる巫女の姿を片手で制す。

「言われて来たんなら別に求めているって訳じゃないし、必要ないから」



見ている分には目の保養にもなるが。だけど直接の相手となると、見知らぬ相手とは少々童貞としてはハードルが高いと思います。せめて、最初ぐらいいは好きな子と経験したいという想いがある。だから物凄く勿体ないし、興味はあるのだが、遠慮しておく。だがそれをものともせずには巫女の方は近寄って来た。制するために出した片手を回避しつつ、するりと内側に入り込んできた。やべえ、後ろ壁だ。「それなら心配ありません。ガイアの巫女として、強い雄と交わるのはそれだけで荣誉ですので」

「そ、そうなのか。だけどほら、こんな時間におっぱじめて明日の朝に響いたら問題だしな？」

「性魔術を嗜んでいるので、起きる頃には寝る前よりも気分が良くなるぐらいですよ」

「おっふ」

『さあ、盛り上がってまいりました！ サマナー！ 必死に抵抗！』

『日本人のお断りの仕方！ だが通じない！ なんて悲劇！』

『行け！ そこじゃ！ 食らいついて押し倒せ！ 押し倒すんじゃ！』

『あ、主殿？ ここはストレートに断った方が良いのでは？』

『黙ってるよコウリユウ。ここからが面白い所だぜ？』

『セーブ……セーブ……CG回収……』

『すまんが誰かドルミナーをかけてくれないか？ 揺り籠の方が目覚めそうだ』

『あー、はいはい。任せるのじゃ。ほうれ、新鮮なドルミナーじゃぞー』

こっちはこっちで激しく困るが、COMP内部もCOMP内部で地味に酷い事になってない？ それはそれとしてお前ら、後で見てるよと心の中で叫んでおく。それにしても体が近い。胸に手が行きそう。チエフェイの体とはまた別種の淫靡さを感じさせるものがある。やばい、流されたくない。どうしよう。

と、

「——だめ」

と、巫女が絡みつく前に横から体を引つ張られ、抜け出した。おわ？ と間拔けな言葉を零しつつ引つ張られれば、知っている感触。良く知っている体の温かみに触れているのが解った。少し前までは満腹で完全にダウンしていた癖に、少しだけ頬を膨らませつつ、

「だめ。私……の、リ्यूージ」

「あ、いや、アン？」

と、相手の返答を許す前に此方を掴んだまま、跳躍した。そのまま高松城を飛び出し、周辺の雑木林の中へと飛び込んだ。巫女さん、此方が飛び出す寸前、薄く笑っていたような気がする。

だがその事を深く考える暇もなく、雑木林に連れ込まれると、両手でアンに抱きしめられてしまった。その様子をどう表現したらいいのだろうか。いや、なんというか、これって自惚れていなければ、その、

「……嫉妬、してる？」

「……わか、らな……い」

そう言うとアンは抱きしめたまま、体を此方に密着させ、呟く。

「チェフエイ……とか、皆……なら、いい。け……ど。知らない……女の、人、と……いると……胸が……苦しい」

たぶん、とアンは言う。

「嫉妬」

「……」

どうすりやあいんだろうか？ だけどころいう時に限って仲魔連中は何も言わない。つまり自分で考えろ、という事なのだろう。まあ、俺もちよつと可愛い巫女さんを相手にちよつといい気になつていた部分もあるだろう。そこは素直に悪いと思う。だから考えて、

「アン」

「ん」

名前を呼んだ。その呼びかけにアンが顔を上げた。身長は俺の方が高い。こうやって密着していると彼女の体の小ささが解る。自分よりも小柄で、背の低い子なのだ。たとえば、彼女が自分よりもレベルが低く、そして既に俺よりも高いステータスを保有していたとしても

——それでも、彼女は、俺よりも小さい女の子だった。可愛らしい、そして嫉妬もする女の子だった。

だから此方を見上げたアンに、見下ろす様に視線を合わせながら、唇を重ねた。

「ん……」

短い、唇を重ねるだけのキス。それを数秒ほど続けてから此方からも抱きしめ返しつつ唇を放した。

「ごめんな、俺に根性がなくて」

「待ってる、って、答えたのは……私」

「うん、だけど——嫉妬させた原因は俺にもあるからさ」

だから、他に出来る事が解らないので、抱きしめて、好きだって伝える事しか俺には思いつかなかった。そう、明確に愛していると断言できる子はこの世で一人だけ。アン、ただ一人。

「君の事が、好きなんだ」

「ん……嬉、しい」

そう言つてもう一度、唇を重ねた。今度はもうちよつとだけ、強くお互いを抱きしめながら。

「私も……リ्यूジ、の、事……好き、だよ」

そう言うアンの耳が、少し赤くなっていた。本当に、本当に彼女の事が好きだ。誰にも渡したくないぐらい。あらゆる障害から守つてあげたいぐらいに。俺達にロクな結末が待っていない事なんて良く解っている。世界が滅んじまった。他の世界を巻き込んでまで世界を再生しているんだ。きつと、許される様な事じゃない。そんな事、大量の悪魔が協力している時点で解る。

魔王も神も悪魔も破綻者も異端者も超越者も。

全員が協力し合う事で漸く成し遂げられる何かが待っている。

たぶん、というか確実に俺ではどうしようもない何か。そして既にみんなが一度は敗北している存在がいる。それがきつと、この世界を滅ぼしたのだ。魔界と共に。そして今では地球が再生されている

——たぶん、魔界と共に。

そんな中で、馬鹿みたいな青春を送っている自覚がある。普通じゃ

ないけど好きになってしまった、それを確かめ合いながら少しずつステップを踏んで行く。こんな状況なのだ、もつと早く前に進めと言われるかもしれない。

だけどこの、もどかしい時間が、どうしようもなく愛しいのだ。

どうしようもなく大事に思えるのだ。

きつと、後でまた振り返つてこの時間を笑い合えるように……そんな時間を過ごしてるのを、許して欲しい。この何もかも足りない世界で普通ではないけど青春を少しだけ……せめて、普通の男女みたいに過ごす事を次の扉が見つかるぐらいまでは許してほしい。それぐらいに彼女が好きで、大切にしたいのだ。

だから今は精一杯抱きしめて、唇を交わす。それだけで胸の中は暖かった。それだけで、明日も明後日もその後も戦えるぐらいには胸が暖かった。心の内界に新たなカードが生まれるのを感じ取りながら、赤い夜空の下、抱きしめ合って唇を重ねるだけの短い逢瀬を楽しんだ。

## 神州混沌行脚 XV

翌朝。

赤い空の朝が来た。代り映えのしない朝。しかし空気に漂う殺気と緊張感は今までとは別物だった。既に作戦に参加する為のガイアーズが防衛のために高松市に散らばり、警戒を開始している。鍛え上げられた肉体に備わった力、それが今四国最後の都市を防衛する為に散らばった。そして高松城で黄龍を召喚した、その下で山本を迎えた。

此方へと向かって投げて来たもの、それを受け取る。受け取ったのは何らかの宝玉だった。それを掲げて、赤い空に透ける姿を見た。

「こいつは？」

「龍玉だ。コウリュウの力を増幅するものだと思えば良い」

「あいよ」

まあ、それ以上の説明も必要がないだろう。と、そこで山本は去らずに、此方を見た。

「……ガイアに来るつもりはねえか？」

「誘いに乗るとは欠片も思っていないだろ」

「馬鹿が。それでも聞かなきゃ可能性はないだろう？」

成程、確かにそりゃあそうだ。ありえない。そう思っているも実はそうじゃないかもしれない。その可能性を魔王は知っている。そして確かめる事に躊躇を覚えない。その姿が自分には格好良く見えた。成程、確かにこれについては行きたくなる。だけどダメだ。

俺には俺のやる事がある。ガイアでもメシアでも駄目だ。俺が俺として、俺らしくある為の道を進むのだ。無論、それはカオスでも口ウでもなく——それでいてニユートラルでもない。そんな枠組に囚われているのが馬鹿々々しい。

俺は俺の道を往く。

「じゃ、吉報を待ってな」

「ふん、終わらせてさっさと次の場所へ行け」

その言葉に笑わせてもらいながら黄龍の背へと飛び乗った。その

上には既にアンが乗って待っていた。視線を合わせ、頷きを貰った所で黄龍の頭の上へと移動し、龍玉を片手に、黄龍へと語り掛ける。

「やる事は解っているな？」

「任せよ。クラリオンでもなければ我は止められぬ……！」

心強い言葉を受けながら黄龍が飛翔し始める。龍玉と感応する様に黄金の風を生み出し、それが四国の大地に流れ始める。そうやって流れ始める風はあらゆる不浄と穢れを浄化し、この大地に染みついた死の概念を浄化していく。黄龍の浄化の力が高松市から離れる様に飛翔していく中、拡散していく。

死とは究極の穢れである。誰かがそういう思想を生み出した。死とは汚く、淀みであり、静かであり、そして不浄でもある。抱えきれない不浄の先に死がある。故に死とは穢れそのものでもある。そして黄龍には浄化の力がある。それを龍玉で強化し、四国の大地に拡散させていく。元々国を一つ滅ぼす事が容易なレベルの悪魔なのだ、それが強化されたのであれば、その出力は凄まじいものを持つ。あらゆる穢れが黄金の風に乗って浄化され、ヘルがこの四国の大地に呼び出し、そして張り付けたニヴルヘイム、或いはヘルヘイム。それを浄化の黄金風が引っ掻き回し、引き剥がす様に亀裂を差し込んでいく。

そして空の一角が崩れた。

赤い空の一角が破損し、その向こう側に隠れていた青空が見えた。

瞬間、大地が裂けた。

大地を粉碎しながら泳ぐようにすさまじい巨体が四国を割って音速を超えて迫ってくる。その巨大さはそれこそ幅だけで都市一つに匹敵するだけの巨大さがある。即ち、見える範囲が全てその巨体だけで覆われているとも表現できる。ヘルが対応しに来るのは解っていたが、初手からミドガルズオルムをぶつけて来るとは思わなかった。

「予定通りやるぞコウリユウ」

「任せよ」

目元がきらり、と光ったような気がする。黄龍から飛び降りつつ、DDSへとアクセスし、そこから追加でもう一体、仲魔を召喚する。

「チェフエイ！」

召喚と同時に、地響きと共に巨体が出現した。ぼろぼろの毛皮、八つの尾、そして骨の体。内臓を全て引き抜かれた巨大な軀の八尾。美しさを欠片も感じさせない醜い軀の体を晒したチエフエイが巨大な狐の姿となって顕現した。

「妾は余りこの姿が好きではないが——他ならぬサマナーの頼みだ、晒すでしょう！」

黄龍とチエフエイの巨大な姿がミドガルズオルムへと衝突し、それが四国を割りながら突撃してきたミドガルズオルムを逆に吹き飛ばした。チラツと盗み見たレベルはチエフエイと黄龍の方が上回っている。ミドガルズオルムの逸話的には特攻になる様な要素はない。チエフエイと黄龍のコンビで十分抑え込めるだろう。世界蛇の相手はあちらに任せるとして、そのまま黄龍から飛び降りた勢いで着地しつつ、

DDSから鳩を召喚し、他の仲魔を即時召喚待機状態とする。

「我、降臨……！」

「へッルちゃあ——ん!!ぼろぼろなこの世界に超神聖存在ぶつけたらどうなるかなあ——！」

「そして我ストライク……！」

鳩をトスしたのをアンがサマーソルトを放つように蹴り上げた。加速した鳩の姿が一瞬で音速を超えながら空へと消えようとして——豪雪と共に飛び出した巨狼によって阻まれた。空へと打ち上げられた鳩がダルクスマッシュで大地へと叩きつけられるも、激しくバウンドしつつ無傷で戻ってくる。

「ラーマ、ミコト、魔物狩りは得意だろうか？」

「では片付けてしまおうか！」

「やーつと天叢雲剣を存分に振り回せるな」

着地した魔狼、フェンリルを狙い討つように《ブラフマーストラ》と《天叢雲剣》が放たれた。絶対燃焼の太陽弓から放たれた究極の貫通攻撃、そして水害と災厄の龍神の尾から転生した神剣の水による絶対斬撃。二種類の貫通、切断能力が相殺する事無く、戦士として最上位の技量によって調和された。

放たれた空間が水蒸気爆発によって連続爆破されながら消滅していく。

「ベル」

「四国がどんどん削れてるわね、これ。全く手加減を知らない連中ばかりだわ」

そこは超高レベル悪魔による戦いだから必要経費とするしかない。まあ、このクラスの悪魔となれば日本というレベルの島国程度であれば、割とあっさり沈める事も出来るだろう。悪魔が戦う上でそういう事をしないのは人間がMagの最大供給源になっているから、そして悪魔も陸地を必要とするからだ。故に四国は沈まないと思うなあ——沈まなければいいなあ、と思いつながら、

「で、お前が出てこないなら兄弟ぶち殺してこの冥界を二度と展開できないう様に潰すぜ」

虚空へと向けて挑発すれば、空間が歪み、赤い夜の赤みが増した。赤い川が四国の大地を流れ始め、そして死者の声が木霊する。その中で空間を超えて出現する気配が感じられる。

「——忌々しい、本当に忌々しいニンゲンどもめ……!」

その言葉と共に女は顕現した。無数の軀を引き連れ、それによって塗装された道の上を歩く、まだどこことなく若さを感じさせる女の姿。氷の様に凍り付いた髪色をした冥界の女主人、ヘル。少なくとも姿は人間に蒼海の色ドレスを着せたような姿をしている。だがこいつは北欧神話における終末を乗り越えたかもしれない存在だった。即ち今の終末後の世界に適応している存在だと言ってもいい。

とはいえ、

死神 ヘル Level 68

……事前情報と合致はする。ただし耐性面はかなりガチガチだ。DDSを調べて確認したヘルの耐性は雷と炎が弱点だと表記されていたが、このヘルに弱点はなかった。弱点を突けない相手になる癖に、氷結、破魔、呪殺、精神、神経に無効化を保有している。流れからしてデバフ耐性持ち、という事だろうこれは。

「邪魔をするなニンゲン」



「邪魔をする？ とんでもない」

ルーチエ&オンブラを引き抜いて、その片方を真っ直ぐヘルへと向ける。その銃口に捉えた瞬間、超直感的に絶対に弾丸を外さないというのを確信できた。何をどう避けようとしても絶対に命中する。銃とはそういうものだ。少なくとも自分にとっては。狙い、引き金を引く時点で何をどうしても絶対に当てられる。それが恐らく才能というモノなのだろう。握った時から大体どういう風に扱えばいいのかが解る。どうすれば効率的に運用できるかが解る。剣や刀を握った時にはない感覚だ。それが《ガンスリンガー》という技能として出ている。

「10秒くれてやるぜ、ヘル。ゴミ箱か、カンオケか、選びな」

「10秒も必要はない！ 死ぬのは貴様だ！」

返答の間に引き金を引いた。音速を超過する弾丸がヘルに衝突しそうになり——その前に、ヘルを守護する軀に衝突し、相殺された。今のは当たるコースだったんだけどなあ、と思いつつ横へとアッと別れる様に飛ぶ。

「貴様は良い軀になりそうだな……！」

「悪いな、軀になる予定は当分ないんだ——ベル！」

「はいはい、解ってるわよっ！」

軀の波がヘルより放たれた。それに合わせ《死蠅の葬列》が放たれる。地の底から沸き上がった死蠅が軀と衝突し、軀を啄ばみながら死すら死滅させていく。だがその軀の背後を抜けて飛び込んでくる影が複数見える。合計5体、

英霊 無名 Level 59

強いッ……！！

耐性は物理耐性が多め、これで時間を稼ぎつつ裏からヘルが大魔法でカタを付けるという形か。横へと飛び退きつつ、アンも攻撃態勢に入る姿を見て、彼女の心配をしている場合じゃないな、と自分に言い聞かせる。

なにより、この中で一番能力が低いのは俺なのだから。

「まあ、だからと言って負けないけどな」

こつちに飛び込んでくるのは3人。人間だから、サマナーだから集中的に狙われているという形だろう。当然の対応だと考えながら《トウーサムタイム》で広域射撃しつつ、

そのまま——相手へと突っ込む。射撃は英霊の体に到達し、しかし物理耐性に阻まれる。英霊が迫ってくるのが見える。一発でも喰らえばずんばらりと行きそうだなあ、と手に持つ刀を見ながら考え、  
「The Tower」

《塔》のタロットから射撃絶対貫通を引き出した。英霊が接近する瞬間、その動きを見切る。ラーマから学んだ体術を基礎に、銃を効率的に運用する様に、ルーチェ&オンブラの銃身で攻撃を受け流しながらそのままカウンターでヘッドショットを決める。そして射撃しながら相手を足場にし、頭上を取って逆立ちする様に弾丸を浴びせる。

そして着地。英霊を始末する。

「死ね！　そして我が戦列に加われ！」

数百メートルを超える軀の壁がヘルと此方を遮った。そしてそれが津波として落ちてくる。雑魚の処理をしている間に準備を整えた必殺の超広範囲攻撃が視界の範囲全てを埋め尽くした。軀の全てが槍や剣などの武器で武装されている。見える範囲全てを埋め尽くすそれに対して、

自分で対処する。

「はい、どーん！」

ルーチェ&オンブラからブルームへと切り替えてスダマを発射する。発生する爆裂がその方向の全てを巻き込んで消し飛ばし、クレーターを生みながら四国を横断する。土地の再生ってどうやるのだろうか？　そう思いながら軀の波を真つ二つに引き裂いた。だがその向こう側にヘルの姿はない。殺気が背後の空間から伸びて来る。

「メギ——」

「ま、そんなところだと思っただわ」

背後からのメギドラオンにベルが《魔王の眼光》で割り込んだ。そのまま号令を発し、《コンセントレイト》で威力を底上げした。

「ドラオン」

「啄め死蠅」

《メギドラオン》と《死蠅の葬列》が衝突した。凄まじい破壊が相殺し合いながら横へとエネルギーが逃げ、大地を割りながら亀裂を刻む。くつ、と苦悶の声をヘルが零す。積んでいる分、ベルの方が威力で勝った。メギドラオンを僅かに抜けた死蠅がヘルの姿を蝕もうとして、ヘルの姿が消えた。

それと入れ替わる様に十数を超える英霊が取り囲んできた。素早く跳躍し、ベルとアンに合流する。鳩が肩の上に乗る、《ラストキヤンデイ》で能力の底上げをしてくる。

「無駄だニンゲン……もはやこの地は我が国となった。他の場ではともかく、ニヴルヘイム内では負けぬ！」

国内自由ワープ、という感じか。八岐大蛇よりも遙かに厄介な性質だと思う。素早く盗み見ればミドガルズオルムと取っ組み合う黄龍と、その体を千切ろうとするチェフエイの姿が大地を粉碎しながら見える。連中が動いたたびに四国の大地が揺れている。そして四国を揺らしているのは連中だけじゃない。一切遠慮なく《ブラフマーストラ》と《天叢雲剣》をラーマとミコトが乱射している、馬鹿みたいに乱射して大地を焦土に変えながらフェンリルを追い詰めている。フェンリルも対抗する手段がないのか、豪雪を呼び寄せながら対処しようとしているものの、凍る気配の無い天叢雲剣の生み出す水斬と太陽弓が生み出す破壊の奥義に翻弄され続けていた。あちらの勝負はどうにかなりそうだな、と理解できる。

まあ、問題はこつちだ。

「ど………する？」

「流石に固有領域の特権を握り潰すような権能私にはないよ」

「こういう時は、素直に力を借りるのさ」

タロットカードを掌に浮かべる様に引き抜いた。描かれる絵柄は死神。死を背負った湊の絵柄が刻まれている。それにMagを注ぎ込み、助けを、力を求める。

その瞬間——イメージが脳裏を走った。

◆  
花——花が咲いている。

学園の屋上、終わりの季節にして始まりの季節。全てが終わった後、少年は車椅子に乗せられた状態で、機械の少女によってそれを操作されていた。そんな学園の屋上の上で、少年はそこから宙を見上げた。

欠けた月の浮かぶ宙を。

小さな微笑を浮かべ、そして懐から一つの武器を取り出した。それは銃にも見え、そして同時に、それによって引き起こされるイメージを増幅させる為の道具。もはや、それを少年は必要としなかった。それだけの領域に全てが終わった後で辿り着いた。だけどそれは少年にとつての一つの様式美だった。

だから銃をこめかみへと持って行った。

「しようがないな……」

そう言つて引き金を引く少年の表情は、

もはや——空虚さは消えていた。

◆  
「クロニクル・タナトス」

極点からペルソナが一時的に世界を超えて顕現する。タナトス。死の形が出現する。それを湊が振るつたのを見た事がない筈なのに、その名前は自然と口から出た。その力、能力、そして行える事が自分の中で自然と理解できた。そしてそれを通して、空虚さの消えた少年の存在を感じた。どこか、満たされたような、或いは存在してはならぬものが消えたような、本来の形へと戻った少年の存在感を世界と時を超えて感じ取った。

或いはそう——それがエンディング。未来からのサービスなのかもしれない。

「……まあ、また顔を出すつて約束したしな。折角だ、サクツと終わら

せちまおうか。<sup>タナトス</sup>「湊」

言葉に応える様に再生物語のタナトスは吠えた。その背に浮かぶ棺桶を震わせながら体の底から咆哮を轟かせる。それに合わせる様に空の色が変貌して行く。赤から緑色へ。朝から夜へ。空間が上書きされる様に死を想わせる夜へと世界を変貌させた。

影時間と呼ばれる空間がニヴルヘイムを上書きした。同時に空間に隠れ潜んでいたヘルが空間を支配する権限を失って吐き出された。役割を果たしたタナトスはその姿を消失させつつあり、展開された影時間もそれだけで消え去ろうとしている。だがヘルが空間から吐き出された瞬間、

完全に無防備な姿をさらしている。

それを見過ごす程の無能はここにはいない。

「《真理の雷》よ？　しつかり味わいなさい」  
「がっ」

それをベルがSTUNさせた。《真理の雷》によって動きを封じられたヘルの前へと向かって歩いて進んで行く。影時間が剥がれ、壊れて行く中で、ルーチエ&オンブラを引き抜き、ルーチエをアンへと投げ渡した。それを受け取ったアンと共に、背中を合わせながら痺れて動けなくなっているヘルの前に銃口を同時に突きつけながら立った。

「ゆい……ごん、どーぞ」

「聞くだけは聞いてやる」

確殺できる距離。妨害も介入も絶対に間に合わない距離で銃口を突きつけた状態で、STUNしているヘルを見た。ヘルは追いつめられている事実が大きく眼を見開き、そして喉を震わせた。

「我は……私は、ただ、また家族と過ごせる場所が欲しかっただけなのに……」

それだけ。それがヘルが四国を乗っ取った理由だった。家族と過ごせる場所が欲しかった。だがそのフェンリルもミドガルズオルムも、たった今食いちぎられて消滅している。その気配がヘルにも伝わっているのか、涙が流れ始める。

とはいえ、答えは決まっている。

「お前、殺し過ぎ」

「ばい、ばい」

同時に引き金を引いてヘルの頭を破裂させた。そしてそのまま残された肉体を踏みつけて粉碎する。それですべてがMagになって消え去るのを確認しながらはあ、と溜息を吐きながら頭を搔く。

「なんで、こう、悪魔ってのは極端から極端なんだろうなあ……」

どうしようもない気持ちの悪さを端に感じつつも、これで四国の滅亡は回避された。空を見上げれば赤い空が終わり、本来の青空が戻って来た。それを見上げながら溜息を吐く。

「次は東北から北海道だな……」

ルートのメシア教の日本本堂へと挨拶しなくては北海道に押し入る様な真似になつてしまうだろう。

四国程面倒にならなければいいんだが……そう思いながらも絶対に面倒になる事を確信していた。

## 神州混沌行脚 XVI

ガイア———というか破戒僧とは連絡先を交換したので、戦闘が終わって青空が戻った所でメールを受けた。次に行く場所があるのでガイアで休む事をお断りしつつ、黄龍に乗って神格連続殺害ツアーの最後の土地へと向かって飛翔する。向かう場所は四国から更に北へ、東北のアオモリになる。本州と北海道の境目となるアオモリにはメシア教の日本における本部が存在している。

北海道はアイヌ信仰が根付いているから取り込めず、南部は仏教や神道のガイアが強い。そして中部に関してはそもそも、社会人に信仰とか気にしている時間がない。信仰の好き嫌いとか以前に、基本的にそういう事を気にしている余裕のない社会だった。物凄く悲しい事だが、そういう理由からメシアが日本に参入する事は非常に難しかった。

そこでメシアが流れ着いたのがアオモリだった。本州の最北部、しかし北海道には届かない。人が少なく、そして本州の果てであるここは社会の喧騒からも遠く、まだ信仰の付け入る隙間があった。そういう事情から日本メシア最大の聖堂はアオモリに存在している。というより街規模で存在しているという話だった。そもそも米国や英国がバックとして存在しているのがメシアの強みなのだから、札束で叩ける範囲であれば滅茶苦茶強いのだ。

流石資本の犬。

「しかしこつちに来るのも初めてだなあ……」

『なんだ、旅をしたことないのかサマナーは。旅は楽しいぜ』

「今の世代は旅をする事自体が珍しいんじゃないかねえかなあ」

『まあ、私らの時代とは違うからね』

黄龍の頭の上で苦笑いを零す。そうだなあ、自由に旅というのも今更、悪くはなさそうだと思う。その時は黄龍ではなくバイクで移動する事になるが、全部終わって平和になったら世界横断の旅に出るというのも楽しそうだ。今では黄龍に乗ってパッツと移動するばかりだが、国内には色々と悪魔の伝承が残されている。それを改めてゆつく

りと見て回るのも楽しそうだ。

「まあ、今の時代、どれだけ勉強が出来て、成績が良くて、それでいい会社に入れるかが重要だからな」

『……その何が楽しいんだ？』

「いや、まあ、そうなんだけどさ。そればかりじゃ生活できないんだよ」

『だったらいつそ社会生活捨てるよ。半端にこだわるぐらいなら投げ出したほうが楽になるぜ』

「気楽に言うなあ」

とはいえ、ミコトの言っている事も間違いではないのだ。いつその事、もう学歴とか全部投げ捨ててしまった方が楽かもしれない。今更、学生には戻れないし。心配した所で無駄だし、食事しなくても生きて行ける。気楽な生き方だ。

『ま、そこら辺の道楽は俺に任せなサマナー。きつちり悪い世界にお誘いするぜ』

「だ、め」

アンがぶくり、と少しだけ頬を膨らませる。

「リ्यूジ……わるくなるの……めっ」

その言葉にミコトが笑った。

『将来は尻に敷かれそうだな、サマナー』

『ウチの子だから当然じゃない』

『ママ……ママ——あ、こら！ 妾が悪かったから直接放り込むのやめい！』

完全に罰ゲーム扱いされているスダマ先輩、どうやらDDS内部だと姿が違うらしい、というか不定形化しているっぽい。もはやスダマ先輩という姿はスダマ先輩のアバターの的なアレなのではないのだろうか……？ いや、ここは深く考えない方がいいだろう。考えたらあかんタイプだし。スダマ先輩はスダマ先輩。破壊力のユニバーズレコードを目指す存在。良し。

「ま、悪い遊びは追々として——アオモリのメシアンか。不安が残るな……鳩？」



『いや、我に話を振られてもマジで困る』

DDS内部から鳩の声がする。そもそもだ、と声を放つ。

『我は既に人の世を去ったのだ。そこに残したものがあろうであろう。だが既に世は人に委ねられた。人の時代が始まったのだ。故に我が残る必要もない。我は去った後のメシア教とかちよつと我でも引く……』

『始まりは千年王国を建国しようとした天使共よね』

『我、そんな事、頼んで、ない』

鳩も鳩で大変そうだ。黄龍の頭の上に座り込むと、後ろから寄り掛かる様にアンが乗っかってくる。顎を肩の上に乗せてCOMPを同じように覗き込む。背中に胸の感触を感じつつ、もうそんな事で俺は慌てないぜ……！ と少し進歩した自分の精神力を誉めつつ、悪魔協会に送って貰ったメシア教に関する情報を閲覧する。

ガイアが基本的に国内の人間で構成されているのに対して、日本メシア教の構成員、その上位や幹部に当たる人間はほとんどが海外からのものであるのが特徴らしい。日本ガイアが基本的に地域密着型というか、国家密着型というか、日本人の流れを組んでいるのに対してメシアはそうじゃない。ガイアは日本人で構成されているからこそああだったのだ。

なにせ、日本という国家は海外の他の国家と比べれば実に奇妙だ。

宗教は信仰ではなく感謝、そして生活。日常と宗教というモノが生活に混じり過ぎている影響で根本的な信仰心が現代ではなくなっている。その代わりにその行いが日常のルーティーンとして刻まれている。つまり宗教を意識しながらその意識が一般レベルでは非常に薄い国家である。

それでいてよく創作とかで神話や伝承、空想存在をネタにする。発達したネットワークと文化が元からの日本人の気質と合わさって化学反応を起こしている。受け入れ、それを自分の形として変化させる事に抵抗がないのが日本人という民族だ。だから考えを受け取りながらそれを受け流したり、独自の形へと変える力がある。その為、ガイア思想を受け入れても、それをもとから存在している中庸的な、調

和する日本のニュートラル気質と合わせて、ガイア穏健派が誕生した。

だがこれは海外には通じない。日本の外の宗教観はどちらかという侵略という面が強い。そしてそれは当然、メシア教も同じだ。かつて英国が、スペインが、フランスが植民地を開拓しながら改宗を強制したように、メシアもまたそうやって勢力を広げる。とはいえ、その相性が日本人とは悪かった。自発性を促すならともかく、強制される事に酷い反発を覚える民族である為、メシア思想は受け入れられない。

『だから連中、一度大規模な移民を行ったんだよ』

ミコトがそこから経験を交えて繋げる。

『まあ、第二次世界大戦の直後だな。日本が負けた後の話だよ。米兵が日本を歩き回っていた頃の話な？ 兵士に紛れてメシアンの連中も大規模な人員投入を行ったんだよ。日本ってのは八百万の概念でどの神仏も平等に力を蓄える事が出来る珍しい土地だからな』

だけど、これが良くなかった。

ヤタガラスもクスノハも戦争には参加しなかったのだ。

人界の出来事は人界に任せる。サマナーやバスター、裏世界の人間は表の諍いに関わるべきではないというスタンスを愚直にも貫き通したのだ。それが国家の敗北へと繋がっても。恐らくは既に日本の敗北を予見していたのだろう。そしてその後に来る本当の文化、神話伝承の侵略に対応する。

そしてそれは成った。

『俺と先代でメシアンを殺して回ったんだよ』

金で土地を買い漁り、地上げ染みた真似をするメシアンを虐殺し、送り込まれた上位天使や大天使を皆殺しにした。ミコトがこの間捨てた《天軍の剣》もその時のミカエルを血祭に上げて取得したものらしい。そんな経緯で入手したら確かに雑に捨てられてもしようがねえな、って納得するしかなかった。

『まあ、元々メシアンの方針と日本って国の気風が合わなかったんだよ。だからお得意の文化侵略を展開したけど戦争に出ずに丸々残さ

れていたヤタガラスとクズノハに軽く虐殺されて強制的に縮小化、今じゃ東北の北部に勢力を持つ程度になったって話だ』

意外とやんちゃをしていたミコト、しかし考えればどうやらかなり昔から召喚されているらしいのだから、ある意味それぐらいの経験はしているのだ、という話でもあった。だが聞けば聞くほどメシアンという連中に関して不安になってくる。

でもあれだろ。

「実は割とまともでしたー！　というパターン来るだろ？」

『……』

『……』

『……』

『……』

『……』

『……』

『……』

『……』

「ごめん、誰でもいいから喋らない？　スダマ先輩でさえノリでも黙るのちよつと怖いから……」

『一部ではそうでも全体は……』

急に黙りだす仲間の様子に冷や汗が背筋に走る。え？　メシアだけはまともになる事はないの？　なんでそんな勢力まだ国内に残してるんだらう？　ヤタガラスとクズノハの仕事では？　……いや、まあ、たぶん政治とかあるであろう事実は解る。それでも崩壊世界でもまだそのごたごたを巻き込まなければいいなあ、と思いつつ、

アオモリ大聖堂への空路を往く。

◆  
アオモリ大聖堂のある場所は一言で説明すれば外人村とでも説明すべきなのだろう。日本、というかトウキョウ内部でも良くある。イメージとして近いのはチャイナタウン等だろう。全くその国の気風に染まる気の無い、自分の元々の文化を持ち込んで根付かせた街。故

にアオモリ大聖堂は一つ、メシア教の街とでも言える都市に変貌している。ヨーロッパを思わせる建築のレンガの建築物、タイルによつて舗装された道路。そしてどこことなく見かける宗教的なモチーフ。それがメシア教の街だった。そこを含めて、アオモリと呼ばれている。メシア教の状況を考えて刺激したくもないので、ある程度近づいたら移動方法を黄龍からバイクへと切り替える。道路の上をアンとタンドムで進んで行けば、周辺地域に全く悪魔の反応がないのを感じ取れる。おそらくはメシアが周辺の安全を確保する為に浄化しているのだろう。シンジユクと同じように、結界も感知できる。そしてそれだけではない。

パワー等の低位天使が安全を確保する様に、サマナーの姿もなしに浮かんでいる姿が目撃出来た。どうやら、道と周辺の安全を確保する為に活動していたらしい。思わず、射撃してしまいそうだったが、敵意が存在しない事から誤射せずに済んだ。

四国やシンジユクとはまた違う独自の景色に、少し驚きつつも、道を道なりに進んで行けばアオモリの街並みが見えて来た。その前に立つテンプルナイトの様子も見えた。近づきながらその姿を《アナライズ》でスキャンしてしまう。

人間 テンプルナイト Level 131

人間 テンプルナイト Level 132

「普通に強いな」

『まあ、門番つてのは強い奴がやってないと意味がないからね。雑魚に門番を任せて突破されたりでもしたら困るでしょう？ こういう仕事は職務に忠実で一定以上の実力がある者に任せるのが一番よ。重要な施設や場所であればなおさらね』

『つまりそれだけこの土地の重要度が高いという話じゃよ』

解りやすい話だった。まあ、メシア最大の拠点だと思えば確かに、これぐらいはいるものだろう。そう思いながらバイクの速度を落とす、ゆっくりとアオモリの前で停止させる。風に当たって軽くずれていた片眼鏡を修正しつつ、

「へい、悪魔協会から北海道の悪魔討伐依頼を受けたキサラギ・リユウ

ジだ。依頼者に会いたいから中に通してくれ」

「遠路遙々ようこそ、サマナー。貴殿の到着を歓迎する」

態度も言動も予想外にまともだな、と白亜の鎧に身を包んだテンプルナイトが一礼しながらどこかへと連絡を取るのを見た。直ぐに連絡を終えて、此方へとテンプルナイトが兜に隠された視線を向けた。

「今案内の者が来ます。それまでどうかお待ちを」

「ういよ」

その言葉にここからは徒歩だな、とバイクから降りる。アンに片手を貸して降りるのを手伝いつつ、終わったならそれをストレージに戻す。それを少し驚いた様子でテンプルナイトが見ていたのが解る。

「これが最新式のサマナーの装備ですか……」

「いや、まあ、俺が特殊つてのもあるけどな」

「リユージ……凄……の……!」

拳を握ってアンが強くアピールするのを見て、テンプルナイトが苦笑を零した。

「現在の崩壊世界で配布されているデジタルデビルシステムでしたっけ？ アレを拝見させて貰いましたが、欧州や米国で配布されている悪魔使役プログラムとはまるで利便性が違いますね。今の時代、レベルの高い技術が出回っているのは安心できますが、この騒乱が終わった後の事を考えると少し憂鬱ですね」

『そりやそうよ。今出回っている5世代ぐらい先のを使ってるんだから、スペックが段違いなのは当然よ』

ああ、やつぱりそれぐらい技術力がステイヴンと他ではまるで違うのか。まあ、自分はその中でも特に恩恵にあずかっているのだが。

『というか無ければ死んでるわよサマナー程度』

『僕ら！ バックアップ！ ハイスペックな道具！ これがあつて漸く余裕が生まれる程度かな!』

知ってた。だけど、まあ、ないもの強請りをしていた所でしょうもない。自分の出来る事を出来る範囲でやっけて行くだけだ。だからテンプルナイトのどことなく、愚痴の様な呟きに耳を傾けていると、奥の方から歩いてくるシスター服姿の人物を見つけた。歩く度に揺れ

る長い金髪の持ち主は、ナカノで見た姿だった。

聖女クラリツサは柔らかな笑みを浮かべた。

「お久しぶりです、サマナー・キサラギ。少し見ない間にだいぶ遅しくなったようですね」

「そういうクラリツサさんも大分強くなってるけどな」

あの破戒僧もそうだったが、聖女もレベルがだいぶ上がっていた。二人共最初あった時は40前後だったが、今ではそれも大きく上がり、50を超えるレベルに入っていた。どうやら俺がいない間に高位悪魔を倒して強くなっていたらしい。まあ、確かに40代50代の悪魔だったらまだ群れて見かける……その状況がおかしいのだが。

「私はまあ、必要に駆られまして……」

「何が必要に駆られてですか！ 率先して自分から飛び込んでいるじゃないですか！」

「大司教がもうちょっと大人しくしていて欲しいとお嘆きでしたぞ！」

「大丈夫です——大司教の限界は見極めてます」

「そういう事ではありません……！」

「……」

テンプルナイトの言葉をあつさりを受け流すクラリツサの姿を見て、ああ、うん。若干呆れながらその姿を見た。破戒僧・驍もそうだったが、

「まる、で、変わって……ない、ね」

「そうだな」

『これがメシア最後にして最大の良心であつた』

『ありうる』

辛いからほんと脅すの止めて？ まあ、それでも事前に味方がいると解っただけでも少しだけ、助かった。流星に味方なしかった場合は困る。なんというか……安心できる要素がなかった感じで。でも、まあ、クラリツサがいるなら少しは大丈夫だろうと思える。少なくとも、世界再生を最初に頼んだ彼女は、ステイヴンの知り合いだ。その点、安心できる要素がある。

「アンさんも元気でしたか？」

「ぐっ」

アンがクラリツサの言葉にサムズアップを返す。それを見たクラリツサが嬉しそうに頷く。

「調子は良さそうですね。四国の方から物凄いエネルギーを観測できたので、少々不安になりましたが、この様子だと無事に四国の方は終わらせたようですね。では聖堂の方で依頼主の大司教がお会いになりますから、案内しましょう」

と、歩き出す前にクラリツサが言葉を付け加える。

「ああ、大司教は事情を理解しているのでご心配なく。あの方はメシア教でも恐ろしく真面目で公正な方ですから」

『大体誰か察した』

『おう、誰か吐けよ鳩』

『拷問タイムじゃー!』

鳩、自分の信仰地にて拷問に遭う。何時もの事だしそこまで気にしない。アンと共に並んで、クラリツサの後を追う。街の中も時折悪魔・エンジエルの姿を見かける。それがどうやら街中の警備を担当している様に見える。歩きながら辺りを見渡すところだけまるでヨーロッパに紛れ込んだような感覚が強い。

「大、丈……夫？」

アンの疑問にクラリツサがええ、と答えた。

「今の所暴走するような兆候はありませんから」

『言外に問題はある、と教えてくれている様なものね』

外観はぶつちやけ、シンジユクよりも綺麗で整っている。そういえばメシア思想はアポカリプスを乗り越える事にあつた。つまり前から世紀末や終末、その後を想定して街づくりを行っていたのかもしれない。

『終末が来ないなら自分で終末にするって連中よ?』

『力を得る為には手段を択ばないけど別に世界を滅ぼさないガイアと比べると……』

どうしてこんな組織が生まれてしまったんだ……! と内心思い

つつも、クラリツサが通り過ぎる子供たちに軽く手を振っているのを見た。

「せーじよさま！ またあそんでね！」

「ええ、また今度遊びましょうね、ウイリアム」

「聖女様！ 新鮮なアップルパイを焼いたのですが！」

「すみません、ベイリー。今は客人の相手をしなくてはいけないので。終わったら改めて伺いますね」

「聖女様！ パンツ見せて！」

「《アギダイン》」

耐火装備で全身を包んでいた馬鹿が大炎上する。そして耐え抜いた馬鹿がサムズアップを向けながら倒れた姿を、近くにいた馬鹿が回収する。うーん、流石日本人。強い。だけでもうちよつと先ほどの英人たちのまともさを参考にして？ とは思わなくもなかった。

まあ、表向きには平和に見える。

この裏に潜んでいるものはまだ見えないし、関わる予定もない。自分分はさつさと北海道のクソ連中を殴り殺して経験値にする予定だけなのだから。

「アップルパイ……」

「あら、興味ありますか？ それでは私の分を食べてみますか？」  
「ん」

こくり、と頷くアンと微笑ましそうにそれを見るクラリツサのやり取りを見ると、なんだか力が抜ける。まあ……必要以上に警戒する必要もない。ここらへん、力を抜きつつ警戒するというのはあの馬鹿連中がやっていた、なんだかんだで高等技術だ。羨ましく思いつつも、段々と聖堂が見えて来る。

このアオモリで一番巨大な施設になる。その奥で大司教が待っている。



## 神州混沌行脚 XVII

聖堂に入った。

恐ろしいほどに金がかけられており、丁寧に清掃されている。それが年月を経ても神秘的な輝きを失わずに信仰心を捧げられているのは、空気中に漂うMagの気配を察せば簡単に解る事だった。信仰心によるMag補充をこの聖堂では行っていた。メシアとしての常套手段らしいものの、こうやって実際に目撃するのは自分にとっては初めてだった。継続的にMagは補給されるものの、一度の量は多くない様に感じる。これで良くもまあ、悪魔を維持できたものだ。

いや、崩壊前のこの施設ならアークエンジェルやパワー程度を維持できればそれで十分だったのかもしれない。ただ、今はやはり悪魔を狩った方が早いだろうという気はする。まあ、それはそれとして、聖堂の中に入って行くと、多方面から自分に突きつけられる様な視線を感じる。

明らかに歓迎されていない様な視線の類だ。針の筵の様な、睨むような、憎悪や殺意さえ感じる様な視線を浴びている。流石にこういう類の視線は初めてなだけあって、少しだけ、痛みを覚える。それを察知してか、アンが手を繋いでくる。その手のぬくもりから感じる暖かさが、心強かった。それだけで心が強くなる気がするのだから、俺という男はチョロイ。それをクラリツサが見て、小さく微笑ましいものを見る様に笑ったが、それで止める様ではない。

リユージはネオ・リユージとなったのだ……！

『その先のレベルアップはセックスしてからじゃな！』

必要経験値が余りにも次元が違い過ぎる。

そんな風に向けられる視線を乗り越えながらクラリツサに連れられ聖堂の奥へと進んで行くと、やがて一人のローブ姿の男が聖堂、その礼拝堂で待っている姿が見えた。此方を礼拝堂の中へと進ませると、クラリツサは小さく頭を下げてから礼拝堂の外へと出た。

礼拝堂の奥には片膝をついて、祈りをささげる男の姿が見える。ローブ姿の男は静かに、無心で祈っている。その姿をなんとなくだ

が、邪魔してはならないと思えてしまった。その為、しばし無言で待ち続ける事にした。アンも興味深げに周囲を見渡し、礼拝堂の様子を眺めている。

それが数分ほど続くと、

「お待たせしました」

男が立ち上がり、そして振り返った。金髪の中性的な、男か女かも解らぬ顔立ちの……たぶん、男だ。最初に受けたイメージがそうだったからだ。だからきつと男。彼が此方に、柔和な笑みを向けた。自分でもわかる、この人物は《徳》が高いのだと。神聖さを感じさせる存在だった。他の天使などは次元が違うレベルの神聖な存在である。「ようこそおいでなさいました、放浪者。貴方の歩んだ道、そして選んだ選択肢に敬意を。再びこうやってこの地に姿を現す事が出来たのは、人々が再び命を得る事が出来たのは貴方の勇気のおかげです。その苦難の選択肢、私は尊敬し、敬意を抱きます——ありがとうございます」

そう言つて大司教は頭を下げた。ここまでストレートに感謝される、というのも滅多に存在しない経験だった。ちよつとだけ、対応に困った。四国の山本とはまた違うタイプの指導者だからだ。ああいうカリスマタイプは普通に対応できるが、普通に人徳等で導くタイプは……声がかけ辛い。

「リ्यूジ……だも、ん」

だから、代わりにアンがサムズアップを返していた。それを見た男が小さく笑い、

「どうやら、良き関係を構築出来ている様で」

「……俺には勿体ない程良い子だよ」

うん、本当にそう思う。だからこそ大切にしたいと思っている。頷きながら片手を出す。

「サマナーのキサラギ・リ्यूジだ」

「日本メシアを統括する大司教のウリエルです」

大天使 ウリエル Level 80

『正義と炎の天使ね。こいつは聖人として地上に居た時代があったっ

て話だったかしら？ 問答無用で悪人を消滅させる事の出来る正義の剣を保有していて、その関係から悪に対する正義の戦いを得意としている奴だったわね』

『異なる正義とかには全く通じないタイプだな』

ウリエル、自分でも知っている大天使の名前だ。四大天使の一角でウリエル、ガブリエル、惨殺死体ミカエルとラファエルの名前は創作でもゲームでも余りにも有名すぎる。日本では積極的に狩られたり女体化させられたりヒロインにされたりで大人気のポジションだ。他にも技名にもされていた気がする。それが現実として存在しているのは一種の感動さえ感じられる。

とはいえ、メシア教。

本当にまともなのか……？

「リ्यूジ。彼は……大丈夫」

アンが安心させるようにそう言ってくる。その言葉にウリエルが苦笑する。

「私をお疑いでしょうが、それもしようがなく思います。メシア教の上層天使は根本的に千年王国樹立の為に行動しています。私も同族の手によって現界しましたが、正義の剣の手前、現代の悪となる様な行いは出来ませんでした。私は——正義の執行者、ウリエルですから」

ウリエルはそこで言葉を区切り、溜息を吐いた。

「主が去られ、そして声が我々にも届かなくなりました。残されたのは数々の言葉と理想のみ。大天使たちはその中で悲しみと怒りで狂うしかありませんでした。残されたものから主の意思を考えるしか出来ませんでした。結果が今のメシア教です。私は……人としてあった時もありました。その同胞程、今の時代を捨ててまで千年王国を樹立するという事に魅力を感じられませんでした……」

ウリエルが寂しそうに呟き、此方を——いや、その向こう側にいる、DDS内部の鳩を捉えている。

「主よ、何故言葉を下さらないのですか？ ……いえ、いえ。本当は解っています。貴方は去られたのだと。私達も自分の足で立ち上が

り、貴方なしでこの荒野を進まなくてはならない時が来たのだと。ですが……」

ウリエルはそこで言葉を黙らせてしまった。その事に対して、俺は言える事が何もなかった。ただ、

『愛しき隣人よ』

鳩の声が出た。

『メシア教の暴走に関しては、我は言い逃れをしない。これは我が偉業に差した影の様なものだ。それを我が知りつつ放置した結果の様なものだ。我は……だからこそ地に彼を墮とした。……いや』

鳩はどこか、悲しそうに呟いた。

『すべては私の不徳が生んだ事であろう。そこは言い訳はしない』

鳩は鳩で、大変だったのだろう。まあ、今じゃ鳩の姿でしか顕現していないのを見れば、どれだけこの鳩が苦勞しているのも少しは解るかもしれない。とはいえ、だからと言ってお前の雑な扱いが修正されると思うんじゃないぞ鳩。

『えっ、待って、我今超いい感じにかっこよかったのに……!』

『突然消えてフオローもクソもないから当然だよね!』

『せめて書置きぐらい残すか顔を出せよ』

『我も辛いから無理なのだ!』

『なんでじゃ』

『空気悪くなるから』

『今夜は鳩鍋よー』

『そんなー』

「……と、脱線してしまいましたね」

ウリエルが話を戻す。

「貴方には是非、ホツカイドウで暴れ回っている悪魔を討伐して欲しいんです」

「確かチエルノボグとヘイグロトだっけ？」

死神のチエルノボグと曖昧な時間を司るヘイグロト。二体とも高位悪魔であると事前におでんから聞いている。倒せばそれで経験値になるだろうから、後はそれが目標レベルに達するか否か、という

所だ。今の所、結構レベルは上がってはいるのだから、相手がたんまり経験値を溜め込んでいる事を祈るしかない。まあ、この二体ならある程度は期待できそうだ。そう思っていると、

「いえ、この二体は討伐されてしまいました」

「はっ」

ウリエルが困った表情を浮かべる。

「実は昨日、チエルノボグとヘイグロトが同時に討伐されてしまったんです……突如出現した第三の高位悪魔に。チエルノボグとヘイグロトは相性が悪く、《正義の剣》で焼き払えなかつたので、今度こそ！とは思ったのですがどうやら二体以上に相性の悪い相手だったので私の方ではもうどうしようもなくて……」

「ええー……」

ウリエルでダメなのか……と、ちよつと引く。だけど、まあ、結局はぶち殺す悪魔が変わっただけだ。此方のパーティーは状況に依じて手札を切り替える事の出来る強力な仲間が居る。その事を考えればある程度の相性などは封殺が出来る筈だ。というかこの再生チーム、所属している悪魔がどれも超一級なので大抵の悪魔には負けないのだ。

だから、まあ、ウリエルに話の続きを求めた。

「で、相手は何に変わったんだ？」

「ハスターです」

「えっ」

「ハスターです」

——そつち系ついに来ちゃったかあー……！！

いや、まあ、もお、うん。スダマ先輩見てれば大体お察しである。そりゃあ居るんだろう？ とは思ってもいた。だけどここまでストリートに顕現していると言われたらもはや納得しかない。そうか、ハスターなんて創作の存在かと思つたが実在してたんだ、と苦笑いを零しながらなんてこった、と片手で顔を覆う。アンはどうやらハスターを知らないらしく、首をかきげている。

「ハスター……？」

「創作神話・クトゥルフに出現する邪神だよ」

『アレ、干渉さえしなければ大人しかったのに、外宇宙の深淵を覗き見ちゃった人間がいるせいでこっちにやって来たのよね……』

まさかのラヴクラフト氏大戦犯。いやあ、でもこんなことになるのは氏も思いもしなかっただろう。とはいえ、成程、ハスターかあ、と呟く。

「ええ。正義でも悪でも中庸でもない、真なる混沌といえますか、人類が築いた概念の外側に存在しているのでそう言う括りそのものが通じないと言いますか……」

「成程、正義の象徴からすれば対象外だ、と」

「はい。発動すれば間違いなく滅ぼせるのですが。しかし、それに合わせイタクア、ビヤーカー、ミルゴまで出現している始末でして、ホツカイドウは現在わくわくハスターランド化している様です……」

「ホツカイドウあまりにも試され過ぎでしょ……?」

ホツカイドウが一体何をしたって言うんだ。これ、ケース的には四国よりも地獄なのではないだろうか……? となるとSAN値耐性みたいなもんが必要になってくるのだろうか? まあ、日常的に正気が削れる気がするし、今更気にする事でもないな、と気づく。ともあれ、ハスターとその眷属をぶち殺せばいいという話になるのだろうか。

「ま、ショットガンはないけど怪物を殺す事には慣れている。俺がホツカイドウから神話生物をぶっ飛ばすよ」

「それを聞いて安心しました」

ウリエルは柔和な笑みをこぼす。しかし次にすいません、と言葉を置いた。

「今、ホツカイドウは大結界によって封鎖中です。これはクトゥルフ勢の狂気が本州へと漏れ出さない様に対冷気結界を改良したものです……ホツカイドウに入るならそれを一時的に解除する必要があります」

「張り……直し?」

アンの言葉にウリエルが頷く。

「入った後は改めて張り直す必要があります。そうしないと狂気汚染が本州に浸食するので」

「ほんと生きてるだけでロクでもねえな神話生物」

COMPを取り出し、SDスタダマ先輩を見る。

『遠き星々覗き込む？ 深淵の呼び声に答えるのか？ 背徳の美酒。』

許されぬ罪の味。正義も悪も墮落する狂気の坩堝。それでもまた繰り返すのか？』

『ドルミナー』

『すやあ……』

ほんとロクでもねえ。となると、やる事は大体決まってくる。片手で頭を押さえる。

「となるとどこで一泊、か」

「となりましょう。此方で部屋の内意はさせて頂きます。何か、必要な物があれば便宜を図りましょうですが……その……」

ウリエルがやや、言い辛そうにしている。その、と言葉を置きながら頬を描く。

「正直、明日までの拠点をお持ちなら其方に居る方が快適じゃないかと思ひまして」

「あ……」

ウリエルの言葉に、礼拝堂に入る直前まで感じていた視線などを思い出す。どうやらメシアはガイア程居心地の良い場所ではなさそうだった。それを理解したのか、ウリエルがそうですね、と言葉を置いた。

「今現在、日本のメシアは私が完全に掌握出来ている訳ではありません。私を筆頭としたメシア穏健派……この終末の世界で他の勢力と手を取り合い、協力しながら乗り越えようとする派閥です」

聞いている限りは恐ろしく真つ当だ。というかこれがウリエルやクラリツサの所属する派閥なのだろう。

「これが現在メシアの四割になります」

「四割」

「はい。残りの六割が所謂改革派で、この日本を制圧して千年王国を

今こそ樹立するべきだと言っている勢力でして……」

『待ってました!』

『何時もの』

『変わらないなあ……』

『お、何時ものメシアじゃん。殺そうぜサマナー』

ミコトくんちゃんは少し黙ってて。いや、というか……状況を解っているのだろうか？ 今、世界が崩壊しているのだ。自分が再生の旅に行かなければそのまま消滅してしまうのだぞ？ その中で千年王国樹立を目指すとかマジかよ、としか言葉が出てこない。いや、なんというか、本当に。お前ら正気なの？ としか言葉が出てこない。

「まあ、私が大司教で筆頭として押さえているので派手な行動はありませんが、それでも部下たちからはどうやら、水面下で改宗を強要したり、研究を始めている者達も出ている様でして……」

「うわぁ」

『これよこれ！ メシアはこうじゃなきゃね!』

安心感から仲魔がはしゃいでいるのが解る。でも、まあ、確かに知っている組織が知っている様子だと安心するよね、とは思う。ともあれ、これは確かにあまりここで足踏みしない方が良さそうだ。

「それにもし、貴方が世界再生をしている張本人だと知られれば……」

「知られれば……?」

「一部が暴走して殺しに行くでしょう。今の環境は救世主を探し、呼び出すのに理想的な環境ですから。千年王国を築くにしても、都合が良いでしょうし」

「正気かよ……」

「いつ……もの」

何時もので処理されてしまうメシアの所業。ウリエルも本当に心苦しく思っているのか、苦笑いしか浮かべられていない。いや、まあ、苦勞してそんな大司教だなあ、と心の中でひっそりと思ってしまう。ともあれ、ガイアの所は実力主義とトップのまともさに救われたが、此方はあまりにも宗教色が強すぎる。その影響でトップがまともでも個人で暴走してしまっているのだ。そして暴走した個人が多すぎ



るからそれが派閥となっているのだろう。

救えない。

「ですので、いったん拠点に戻って貰うのが良いかと……」

「うん、まあ、拠点には鍵穴さえあればどこからでもアクセス可能だし、そこら辺は特に問題ないかな」

「そうでしたか。なら此方で部屋を用意しましょう。明日の朝までには此方でも準備しておきます。本当に、此方の力不足を押し付ける様で申し訳ありませんでした」

「いやいや、苦労しているのは解ったから……」

もう、何も言えない。ウリエルは胃を痛めていそうだなあ、としか言葉が出てこない。うん、まあ、クラリツサとウリエルには多少優しくしても良いだろうと思う。まあ……今日はこの外人村っぽい場所での寝泊りや料理を諦めて、素直にバーで過ごすのが良いだろう。

「アップルパイ……」

「それは支配人に頼もうぜ……それじゃ、ウリエル。また明日」

「ええ、歓迎できずに申し訳ありません。その代わり報酬の方はご期待ください」

ウリエルの言葉に苦笑を零しつつ、時を過ごす為に礼拝堂を出て行く。再生中の日本に新たな問題を見つけ出しながら。

## 神州混沌行脚 XVIII

結局、聖堂の一室をポート代わりに利用させて貰い、ステイヴンのバーへと戻って来た。なんだかんだで拠点として活用するのはここが一番長い。帰って来たという安心感がここには存在している。最近聞こえる様になってきたベラドンナの演奏を聞きながら入店すると、普段はカウンターでストロベリーサンデーかピザを食べているダンテの姿がない……暇な間にトリックの一つでも教えて貰おうと思ったのに。カウンターの向こう側に居る支配人に視線を向けた。

「ダンテは？」

「オキナワに捨てて来た」

「ダンテエ……」

いや、まあ、ダンテの事だしその内勝手に戻ってきているだろう、というどことない確信があった。あの男に根本的に不可能の概念は存在していない気がするし。ともあれ、バーに戻ってくると安心できる。今夜はここで時間を過ごす事にするので、溜息を吐きながらカウンターの方へと向かうと、素早くアンが横を陣取ってきた。

「すとべリーさんでえー」

「アレの真似はしない方がいいぞ。ともあれ、其方はどうするかな」

「あー、なんか頭の疲れが抜けそうなもので」

「ふむ、了解した。少し待っていると良い」

そう言つて支配人<sup>ルシファー</sup>が厨房の方へと消えて行く。果たしてメシアンがルシファーがバーのマスターをやっているという光景を見たらどう反応するのだろうか？ それにしても《あばかりぷす》もあるし。あそこ、メシアンに襲撃されてねえかなあ、と今更思うが、普通に客として招きそうな気しかない。まあ、その時はその時だ。

「はあー……疲れた……」

「おつ……か……れ」

カウンターに倒れ込むと、アンにぽんぽん、と頭を叩かれる。その様子を眺めている他の客人たちがその様子を眺めているのが解るので、顔を横にズラし、店内の方へと視線を向けた……また出入りして

いる悪魔が変わっている様な気がする。新しく見えるのは中華風の道士の服装の若い男だ。視線を受けた男は此方に気付き、

「なんじゃ」

「いや、ガイアはまだよかつたんだけど、メシアが非常にアレだったんだよなあ……つて思ってただけなんだけど」

「カツカツカツカ。まだガイアがまともに見えるのはそれが日本国内じゃからよ。メシアもまだまだ、日本国内だけであれば世界的に見えてまともな方じゃぞ？ アメリカでは聖都建設計画アルカディアやら救世主計画を実行しとるんじゃ。まだまだ楽な方じゃぞ」

そう言いながら道士はカウンター席まで来ると桃を取り出してそれに齧りついた。流石にそこまでヒントを出されれば解る。

「太公望？」

「正解じゃ。ま、国もその後の国も仙郷も滅んでしまつて文無し宿無しじゃがな！」

カツカツカ、と再び太公望が笑った。そうか、中華はまだ再生前だったな、と思い出す。ただ世界再生のステップを考えると、次回辺りが中華再生になりそうな気がしなくもない……まあ、となると中国遠征になるのだろうか？ 魔王蚩尤とか出て来そうで非常に怖い。まあ、出て来たらその時はその時で普通にぶつ殺すのだが。寧ろぶつ殺せるだけの力が必要なのだが。

それはそれとして、

「太公望はここにどうしてんの？」

「儂か？ なに、ここに居る連中は策謀には向いていても人間個人というものを良く知らぬ故に負けてる連中ばかりじゃからのう、いちよ儂が知恵を貸してやろうかと思つてな！」

「本音で」

「いやあ、あの悪魔王も良い桃を仕入れておるのお！」

「だと思つたわ」

再び笑いながら桃を齧る太公望の姿を呆れながら見てると、太公望がまあまあまあ、と手を前に出す。

「なに、儂も単純にただ飯食らいをしておるわけじゃないわ！ この

太公望！ そこのらのぽんこつ共よりは遥かに優秀な頭を持つておる！ なあに、一つ知恵を貸してやろう！ ほれ、なんか儂に問題を提示してみろ」

「えー……」

太公望の姿を疑わしげに見ながら、体を持ち上げ、腕を組む。その間に支配人がアンにサンデーを、そして自分に白玉あんみつを緑茶と一緒に持って来た。ああ、確かにこれぐらいなら丁度いいかな、と思いつながら茶を片手に持って、首を傾げる。

「……良く考えたら世界が崩壊しているだけで特に問題抱えてないんだよな」

『恋愛相談』

「そ、それはほら……解ってる事だから……ね？」

ベルの鋭い指摘に冷や汗をかきつつ、軽くアンを見れば、サンデーを食べるのに忙しそうに全然聞こえていないようだった。いや、まあ、うん。触れ合う事に対する恐れとか躊躇は大分なくなった。キスも……ちよつと頑張ればできる。だからその先は、俺が頑張るだけの話だし。今は、まだいい。まだこの距離感に浸りたいのだ。だから、まあ、

「んー……仲魔を使った戦術とか？」

「なんじゃ、そんな簡単な事で良いのか？ ちつと駒を見せろ見せろ」

まあ、バーに居る以上は味方なのだから、太公望に仲魔を隠している意味はない。自分の保有している仲魔を見せ、具体的に何が出来るのかを確認してみる。それを確認しながらふむふむ、と太公望が頷く。

「なんじゃ、駒だけなら割と良いのが揃うておるじゃないか。特に黄龍と理想王の組み合わせが良いのう。これなら天候ぐらい簡単に操れるじやろう。それで雷雲を呼び寄せれば蠅王の雷撃と黄龍刀の力を更に引き出せるじやろう」

「あー……天候かあ……」

「あと陣地や結界の事は気にしておるか？ 軽く環境を有利にするだけでも話が変わってくるぞ？ 天候、地形、足場、空間。陣地といっ

てもこれだけの種類がある。その一つ一つを自分の仲魔と繋げて考えてみよ。ほれ、利用できそうなイメージがあるじゃろう？」

「……」

さっきの雷雲もそうだが、例えば霧を生み出してしまえば、辺り一面は水分だらけだ。それをそのまま天叢雲剣で干渉して全包围斬撃とかミコトならやり遂げられそうだ。そういう環境を整える力が黄龍と、手札が豊富なラーマにもありそうだ。何気に第五の化身であるパラシユラーマが確か最高の聖仙で、その術技を引き継いでいるという話だった。

此方が何か思い至る様子を見てから、うむ、と太公望は頷く。

「戦いはただ単純な力のぶつかり合いにあらず。寧ろ戦う前が重要じゃ。何をどうやって動かすか。何を準備してどういう効果を与えるか。結果を生み出す為にはどうする必要があるのか。使役する立場であればどういう風に最大限の力を発揮できるのか、それを考えるのが寧ろ戦える事よりも重要じゃ」

「……うつす、勉強になりました」

素直にそう答えると、太公望が再び、笑った。

「なあに、このぐらい気にせんとも。それと態度を改める必要もないぞ。儂も家賃替わりに手伝っているだけじゃしな。うほー！ 桃うまー！」

支配人へと視線を向ければ、イケメンスマイルとサムズアップが返ってきた。もしかして貴方、魔界での仲魔の勧誘方法こんな感じなんですか……？ しかし、見事力オスもニュートラルもロウが滅茶苦茶なこの空間で良くやってられるなあ、としか言えない。まあ、そういう垣根を超えなきゃ成し遂げられないものがあるのだが。

ふう、と息を吐いてあんみつを食べ終わった。口の中に残る甘さをお茶で洗い流せば、頭がすつきりとしてきた。やつぱり、ある程度糖分を摂取したほうが頭の中がすつきりするな、と思う。ベラドンナの歌声を聞きながらゆっくりとカウンターによりかかり、軽く体から力を抜く。

「ふうー……明日まで暇だな。どうすつかな……」

体を思いつきり動かす為に外に出かけるか、或いは勉強でもするか。ステーキヴンがどうせ暇そうにしているだろうし、何か装備の改造を頼んでもいいかもしれない。地味に何時の間にか仕込まれていた防具の自動修復機能には感謝している。これが無かったら蘇生した時に破損したままだったし。

『お、暇かサマナー?』

と、DDSからミコトが話しかけて来た。

『だったら俺とサシで飲まないか? 他の連中と比べて俺は日が浅いな、ちよつとした相互理解の為に……どうよ?』

「あー……確かに悪くないかもしれない」

「今、酒と言わなかったか!? 酒と言ったな!？」

酒の押し売りディオオニユソス君が厨房の方からにゆるり、と出現してきた。見ての通り、酒の話になった瞬間全細胞が活性化してレベルが10ぐらい上がる馬鹿である。ただ発狂さえしていなければそれなりに有能な奴なので、チョイスからまともそうなのを貰う。自分の知らない、日本酒だった。それを受け取ったら、

何時もの奥の部屋へと移動する。



「ぶ——っはあ! さあ、やっぱ現代の酒は美味いよな」

胡坐をかく様に床に座り込んだミコトは日本酒をお猪口に注ぎ、それを飲む。その姿は女物の着物に袖を通して。戦闘時は少しだけはだけている時もあるが、今はちゃんと着ており、その男か女も解らない……いや、やや女っぽい中性的な容姿と合わせ、美人の様に思える。何より長い黒髪が実に女性らしさを表している。だがその言動や態度は完全に男のものだ。声もハスキーボイスで男とも女ともとれるから不思議なもんだ。こういうどっちでもある、という存在は初めて見た。

「酒はなあ、昔のは昔でも美味しかったけどなあ。やっぱ飯や酒ってのは時代が進めば美味しくなるもんだって解ったな。だけど今代は

そういう娯楽が俺らにはいらねえつつてさあ……」

「えっ、酷くね」

「そう思うよな?」

ミコトはそう言っただけで笑う。

「寧ろお前が俺らに自由を与え過ぎなんだよ」

「えー……」

ミコトがゆっくりと猪口に酒を注ぎ、それを口元へと運ぶ。

「そもそも、悪魔を信用する人間がいねえのさ」

「そりゃあ……まあ、意味は解るけどさ。命を預ける以上はそういうもんじゃねえの?」

信用しなきゃ死ぬ。信頼出来なきゃ死ぬ。きっと彼らにも思惑、魂胆があるのだろう。だがそれはそれとして、信頼関係を築かなきゃならない。そうしなければ生きて行けない。デビルサマナーとはそういうもんじゃないのか? と俺は思っている。だけどミコトがそれが間違いだって言う。

「お前が考えている悪魔との関係ってのは先代ライドウや数十年業界で戦ってるようなベテランが漸く到達できる領域って奴だ」

ミコトが酒を注ぐ。

「まあ、お前はちよい特殊だって事を加味しても、悪魔と信頼関係を結ぶってのは中々簡単な事じゃねえんだよ。基本的に人間は悪魔を恐れる。殺している奴を勧誘して仲魔にしたりするんだから、ま、当然だよな。殺されかけて交渉される事を恨む悪魔だっているしな」

……その事を考えれば、俺は幸運なのかもしれない。

根本的に俺の仲魔は全員、自分の意思で手伝ってくれることを選んだ連中ばかりだ。だから恐怖を感じないのかもしれない。ビジネス的な契約関係を結んでいるとは思いますが、

「まあ、俺に取っっちゃ仲魔との関係は……友達というか、そういう類のもんだと思ってるし」

「はは……そう来たか」

なにか、おかしい所でもあっただろうか? そう思うが、いや、とミコトが頭を横に振る。

「寧ろお前の方が正しいのかもしれないよ。そういう意味じゃお前は才能があるよ、サマナーとしては。仲魔を手伝わせたくなるような弱さがお前にはある。それがお前の魅力だと思うぜ」

「クソ雑魚だつて自覚はあるから止めて？」  
「褒めてるんだけどなあ」

「だけど弱い事が魅力だと言われても正直、滅茶苦茶困るのだ。もう既にレベルが高いというだけで、他の悪魔には能力的に敗北しているのだから。俺のレベルは今、高位悪魔を屠った影響で70代後半に差し掛かっている。だが、ステータスを見ればアンの50代だった頃のレベルしか存在していない。支配人の手によってレベルの上限を解除して貰ったものの、それで別段、才能が増えるという訳でもない。明確にスキルやらステータスとしてこの業界、才能が数値化される。」

《ガンスリンガー》があるから銃への適性があると解った。

だがレベル以下の仲魔に負けるステータスを見て、フィジカル的な才能は一切ないという事も理解出来てしまった。

「まあ、個人的にはそこが面白いと思うんだけどな。才能の無い奴が頑張ってる姿を見る程面白いものもないってもんだ」

「俺はお前の娯楽か」

「はは、あんまり間違つてないな。俺もサマナーの事はこの短時間だけどそれなりに気に入ったしな。そういう弱いけど頑張ってる姿はオレ的には結構高得点なんだよなあ……」

「そういう所を褒められてもあんまり嬉しくはない。もっと、もっと強ければ——そうすれば、たぶん、色々と変わるだろう。昔の結果を変える事が出来ない以上、これから自分が味わうかもしれない悲劇を乗り越える為にも、自分はもっと強さが欲しい。今はずっとそう願っているけど、現実は厳しい。」

「ミコトが猪口を置いた。そして此方へと胡坐をかいたまま、視線を向けて来る。」

「俺はまだ仲魔になってから日が浅い。だから辛辣な事も言える。だから言えるうちに言っておく……いいか？」



ミコトの言葉に頷く。じゃ、遠慮なく。そう言ってミコトは猪口に酒を注ぎ、その中身を飲み込んだ。

「まず、戦う事そのものに才能がない」

「知ってた」

「いや、知ってたじゃねえよ。もっと別の話だ」

此方の反応をミコトがバツサリと切った。

「そもそもお前は銃ぐらいしか能のないサマナーなんだろう？ それで超強力な仲魔を揃えているんだから、前を仲魔に任せてお前まで戦う必要はないんだよ。第一、銃よりも強い攻撃手段を持っている仲魔が居るんだ。自分で戦う事に思考を割くよりも、仲魔を効率的に動かす事に思考を割いた方がまだ楽だし成果が出るだろ」

「……」

「そういう所で才能がないって話をしてるんだよ。センスがないよ、お前って。まあ、だけどここは言われて勉強すりゃあ誰にだってどうにかできる範囲だ。だけど感じてるんだろ？ 根本的な実力不足を。強くなれば強くなるほど置いて行かれる感覚を」

ミコトの言葉に頷いた。覚悟はしていたが、それでも自分は人間だ。超人、覚醒者と呼ばれるカテゴリーに入る。それでも人類だ。超越していてもベースとなった存在に変わりはない。転生者でもなんでもなく、元が普通の人間なのだ。だから特別強くなるという訳ではない。スタンダードな超人なのだ。

悪魔やヒーローには勝てない。

「だけど経験や修練を積みめば——」

「そんなの、時間が必要な事だつて解ってるだろう」

ミコトがゆっくりと酒を注いだ。

「お前もそりゃあ強くなれるだろうさ。才能がないからって悲観する必要はない。その為に経験を重ねればいい。様々な事を学んで、経験して、ノウハウを吸収して学習し、それで能力には頼らない強さを手にすれば、能力がクソみたいでも格上を倒す事は出来る」

そのイメージは見えている。あの馬鹿連中がやっていた事だ。だけど、そのイメージは遠い。

「時間が、いる……」

「ああ、そうだな。まあ、環境考えてお前が先代ライドウとかに勝てる様になるまで必要な時間は……ざつと20年ぐらいか」

破格の短さだ。たった20年で世界トップクラスの力量に到達できるという事だ。だがそれは歴史、神話でも最強クラスの先生を召喚した教育環境での話だし、それだけではなくそんな環境が続いた場合の話。

この世界が続いた場合の話だ。

そんな時間はない。

まあ、なんとなく、解っていた事だった。はあ、と溜息を吐きながらミコトが飲もうとしていた猪口を奪って、酒の中身を喉中へと流し込む。一瞬、喉を焼くような感触を覚えるが、酒精が喉を通して体の中に堕ちていくのを感じ取った。それを飲んだ所で、猪口をミコトへと返した。

「まあ、なんとなく……分かった事ではあるんだけどさ。俺、頑張ってるつもりなだけだなあ……」

それでも、ミコトが突きつけたのは現実。今はまだいい。それでも最終的にはどう足掻いても足りない。仲魔にも、そして彼女にも追いつけないという現実だった。いずれはそうなるだろうと薄々感づいていた事だったが、それでもストレートに言われると結構ショックな事だった。

だけど、同時に助かった。今のうちにそれを知れた。おかげでその時までには準備、覚悟が出来る。

「どうした、落ち込んだか」

「うん……割と。だけど、まあ、解ってた事だしな」

解り切った話だが、この程度の理由で足を止める事は出来ないのだ。どんなクソ雑魚であれ、凡人の烙印を押されても、

「足を止める理由にならないからな。俺の理想は地球が完全再生したら難しい事を全部その後に見れるヒーローに全部投げつけて、どっかひっそりとした場所で静かにアンと一緒に暮らす事だぜ？ 俺のハッピーエンドまでは止まらないよ」

恥ずかしいから言いたくないけど。それでも、酒が入っているなら口から零してしまうかもしれない。それを聞いていたミコトは吹き出しそうになりながら、此方にもう一杯勧めて来る。それを受け取りつつ、飲み干す。強い。だが、それぐらいの強さが丁度良かった。

「サマナー、お前馬鹿だろう」

「知ってるわ」

「いいや、解ってねえ。悪魔に恋愛する奴ってのは大体破滅するのが相場なんだよ。それを本気で突っ走ってるお前も、それを応援している馬鹿共も、本気になってる人修羅も馬鹿でしかねえ」

「けどな、とミコトは言葉を続ける。

「そういう馬鹿は嫌いじゃない」

そう言って笑う姿は美人、とも表現できる。流石は神代の血を色濃く継いでいる古代人なだけはあった。ふう、と息を吐きながら進められた酒を飲み、交わす。こうやって一対一でコミュニケーションを取るの、なんだかんだでミコトが初めてかもしれないな、と思いつつ。

と、そこで、ミコトが酒を飲む手を止める。

「サマナー。どうせお前の事だ、これからも恰好付けようとして無茶するんだろ」

「……うん、たぶんすると思う」

せめて、あの子の前では格好良くいたい。格好良い自分の姿を見せたい。彼女の後ろに隠れて守られているだけの存在にはなりたくない。男としてのプライドがあるのだから。だから彼女の前は無理でも、せめて横で立ち続ける事の出来る自分でいたいのだと思う。

「ほんと馬鹿だな。だけど。まあ、それに当てられた俺も馬鹿って事だな……」

ミコトがどこかに静かにそんな声を零し、

「聞け、マスター。これから先、絶対的に能力、経験が足りなくてどうにもならない状況が出て来るだろ。だから俺が事前にその攻略法を教えてやるよ」

「え、あるの」

「あるぞ。割と悩ましいけどな」

ミコトが此方に酒を進ませせてくる。それを受け取り、口につける。それなりに飲んでいるが酔えないのはやはり、超人らしい特徴だった。ミコトも同じような状態で、完全に素面を保っている。だからそんな状態の中で、ミコトは言ってきた。

「簡単な話だ。特別な血筋でもなく、才能を吐き出し切って鍛え抜いた奴らが更に力を得る為には外側からそれを持ち込むしかないんだ」  
力が必要になった時、足りないと感じた時、明確に仲魔に対して遅れを感じた時、

「俺と合体しろ」

そう、ミコトは告げて来た。

「俺をお前の相手の相手の合体に使え。そうすりゃ俺の剣も才も経験も全部お前の一部となって力になれるだろ。ま、多少は特徴を引き継いじまうが……一番までもに強くなれる方法だろう」

まるでなんてこともないかのように、ミコトは告げて酒を飲んだ。その宣言に一時停止しつつも、ミコトの目は一切笑っていないかった。本気で——自分と合体しろと、それが最上の手段であると告げて来た。

ミコトの目を見れば、それが本気の言葉であるのが、意思と胸に湧き上がる新たなタロットの存在と共に確信できた。だが、  
「なんで……」

そんな言葉が口から漏れた。まだ出会って数日程度の仲魔なのに。何故、全てを捧げられるのだろうか？ 合体するという事は消える事だし、クズノハから出奔したばかりではないか、ミコトは。だからその疑問を口にしようとして、

楽しそうに笑うミコトの姿を見て、言葉を止めてしまった。楽しそうに酒を飲みながら、どこか、遠くを思い浮かべる様に、しかし笑い、「頑張れ、なんて無責任な言葉は俺には言えないよ。だからお前は、お前が歩ける分だけ歩け……応援してるぜ、サマナー。弱くてそれでも恰好付けようとするお前の様な馬鹿を、俺は愛しているからな」

小さく笑う、その姿を見て——どこか、伝承に描かれていない本

物の神人・倭建命という人物を見た気がした。

## 神州混沌行脚 XIX

「坊主よ、これを持って行くが良いぞ」

翌日、バーを出る前に太公望から何かを投げ渡された。中国語で書かれている書物だった。漢字を読めるからある程度なら問題ないのだが……それでも全て読み込むには正直、一定のレベルの中国語を学ぶ必要があるだろう。ちよつとしためんどうささを感じた。太公望から受け取ったこれを眺めてから視線を太公望へと戻した。

「これは……」

「うむ、サクツと儂が書いた兵法書よ。お主専用のな」

腕を組みつつ頷いた太公望が人差し指を持ち上げた。

「良いか、お主の周りに居る英霊や魔王はどうやら知識を与える事は出来ても、その使い方直感的に理解するタイプばかりじゃ。技術や知識を与えた所でそれをどう使うかというのが欠けておる。教えて、後はそれを自分の発想の中で育てていくという考えを持っている馬鹿ばかりじゃ」

『あ?』

『あ?』

『沸点低いなあ! ストレスはゴミ箱へ!』

『おおい、我をパスするのは止めろ。鳩は! サンドバッグではぬわあ——』

仲魔たちがまた楽しい事をしている……。正直、連中がそうやって仲良くしているのを見るのは割と羨ましい。俺もそれぐらいはつちやけられたらなあ、と思ってしまう。全ては俺のノリの匙加減という事は解っているのだが。まあ、それはともあれ、太公望から受け取った本をストレージに入れる。

「暇なときは読むと良いぞ。それは儂が考えたお主の力の使い方、動かし方、そして応用可能な範囲での戦術を記載しておる——無論、ちゃんと大陸の言葉を勉強せねばまるで読めない様にしてあるがの!」

太公望、地味に良い性格しているよこいつ。その態度に呆れつつも

感謝する。後ついでに今度はホツカイドウでの戦いだ。そのままホツカイドウで大暴れするだろうし、その後はホツカイドウに残るかもしれない。食事の事を支配人に頼んだら、お弁当を用意してくれた。アン用に重箱でセツトされたお弁当を受け取り、それをストレージへと仕舞ってしまふ。それで半分ピクニック扱いになっているかもしれない、ホツカイドウへの出立の準備が完了した。

バーを出た所で繋がる場所は聖堂内。そこから事前に打ち合わせで決めていた合流場所へと行けば、聖女クラリツサの姿が見える。此方を見ると手を振って来て挨拶してきてくれるので、此方も手を振り返して挨拶を忘れない。社会人の基本である。聖堂内でクラリツサと合流するも、周囲からは視線を感じる。

それらを全て無視する。

「おはようございます、サマナー・リユージ。その様子だと良く眠れたようですね」

「ああ、ちよつと深酒しちやっただけだな」

普通にそうクラリツサへと返すと、

「あの異端者、聖女様に馴れ馴れしく……」

「実力があるとかなんだか知らんが、外様の分際で……」

嫉妬交じりの視線を感じる。昨日よりも殺意が濃いのは、或いはウリエルとクラリツサが防波堤として守ってくれているからかもしれない。正直、そこに関しては申し訳なく思う。だがそれはそれとして、守ってくれるのは此方のパフォーマンスを維持する為でもある。有難く守って貰おう。流石に今、メシアンを殺すのは躊躇する。この先の関係を今はまだ悪くしたくはない。

『しかしのお、サマナー。連中、聖女聖女と呼んでいる癖に明らかに色欲を孕んでおるぞ。妾の欲望センサーに犯したいという意味がビンビン伝わってきて呆れ果ててしまふわ』

姦淫は禁止していなかったっけ？ ……まあ、悪魔の絡んでいる世界なのだから、何かしらの抜け道が存在するのだろう。自分の中ではメシアンが関わりたくない連中トップクラスに入っている。アンが魔人のオーラで視線の類を全て追い出している間に、クラリツサと共

に聖堂を出て、そのままアオモリを出る事にする。

もう、アオモリに残る必要はない。アオモリを出た所で、クラリツサがさて、と呟く。

「もはや貴方の戦いに私は不要でしょう。私では足度纏いになる領域……ですが境目までは案内させて貰います」

「よろしく頼む」

「たのむー」

「ふふ、任せました」

笑みを浮かべると、クラリツサが軽く胸を叩きながら任せろ、とちよつと、聖女らしからぬ動きを取った。でもなんというか、それがとても彼女らしいものに見えた。そして唱えられる魔法は《トラポト》、習得できる異能者も悪魔もそれなりにレアとなる移動魔法。それを利用してクラリツサが一瞬で場所をアオモリから本州と北海道の境目、

その端の大地へと転移させた。

そうやって到着した現場は異様だった。

本州とホツカイドウの間には海が存在しない為、未定義の無の空間が広がっていた。だが宙は無事の様で、飛行すればその向こう側に行く事が出来る。だがその先にある景色は——狂っていた。

メシアが張ったとされる大結界、その障壁の向こう側は目玉が張り付いていた。見える範囲、目玉が数千という規模を超えて張り付いており、そしてそれが一つずつ、この結界を維持するメシアンやテンブルナイトを監視していた。だがそれだけではなく、その向こう側の空間は狂い、螺子曲がり、そして風が吹いては血が結界に叩きつけられ、それが一瞬で渴いては新しい血液が結界に叩きつけられた。

本能、そして生理的嫌悪感がひたすら脳の中枢を刺激し続ける光景だった。

思わず足を止め、その景色を見てしまった。

「……うへえ」

そうとしか言葉を零す事が出来なかった。そして同じように景色を眺めていたクラリツサが声を張った。



「状況報告」

「はっ！ 十数分ほど前に狂気結界に対するハスター陣営からの侵食が開始されました！ 現在テンプルナイトとメシアン異能者の六芒浄化結界と聖遺物による増幅で何とか拮抗を保っていますが、限界が数時間以内に訪れるものと思います！」

「報告！ 目玉を直視し続けたものが吐き気、嘔吐、P A N I Cの症状を起こしています！」

「続報！ P A N I Cしたものが目玉を見るとどうやらP A N I Cが深化し、精神そのものが崩壊するようです！」

「被害者多数！ しかし心霊治療による回復を確認しました！」

「浄化装備による一定の効果を見せています。どうやら奴らには破魔がある程度通じるようです」

見つめるだけで発狂する恐怖の神話生物群、クトゥルフ神話。神話生物。真なる狂気。深淵にて覗き込む者を待ち続ける恐怖すら恐怖する宇宙の怪物。或いは、クラリオンと同種である事を考えてしまえば納得する事の出来る存在なのかもしれない。しかし、自分の《ハニー・ビー》を見て確認する限り、

ホツカイドウの入り口が真っ赤に染まっている。

《エネミーソナー》が雑魚ではあるが、数えきれないほどの敵の存在を伝えている。その姿を確認し、頭の後ろを搔く。参ったな、こりや、と声を呟かせる。そしてその言葉の続きを仲魔が引き継いだ。

『これは——全滅したな』

ホツカイドウが。間違いなく、この環境の中で生きていけるとは欠片も思いもしなかった。それを確認し、素早く装備を召喚する。浄化能力が桁違いの十束剣を取り出し、背負いながら黄龍刀を左手に、そしてブルームを右手で肩に背負う様に入り、それを大地に突き刺す様にセットする。そしてそこに、脳漿と石灰を固める事で作る事の出来る弾丸を装填した。即ち《魔弾タスラム》。最近ステイヴンがちよくちよく量産していたアイテムである。撃てば万能属性の弾丸となる。《塔》のカードにも持続時間がある。《アナライズ》は恐らく確実にやっつけてはいけない行動だろう。たぶんそれをトリガーに破滅する

だろうと、クトゥルフ系統の特性から判断する。

だから弱点を気にしないで撃てる《魔弾タスラム》を装填する。これで万能属性で雑にゴリラアタックできる。カートリッジは全部で3個、一つのカートリッジに1.5発装填されている。全てセットして万能属性射撃は合計4.5発まで撃てる。これだけありや十分だろうとは思う。

「ラーマ、黄龍、ベル、ミコト」

『恐らくこういう類には妾の精神神経効果は一切意味がないじやろくな』

『私も流石に力を使えば怪しまれるだろう。アクセサリとしてであれば問題ないぞ！』

駄目です。スタマ先輩？ 最近ちよつと眠りが浅いみたいなので少しお留守番である。まあ、それでも十分に戦力は整っている。ウリエルからの情報で相手が超高レベル悪魔になっている事が唯一の懸念だが、それでもこの面子であれば最終的にはどうにかなると思っている。

「コウリユウ！ 浄化波動を全力で放って狂気を中和できるか？」

「やってみよう」

「ミコト、アン、ラーマ、ベルは全力戦闘準備！ 発狂しない自信のない奴は引っ込んでろ！」

黄龍刀の柄を噛んで保持しつつ、両手でブルームを抱えて構える様にセットする。ラーマが《突撃の狼煙》で事前に能力を極限まで上昇させてくれる。ベルの《魔王の号令》で致命撃を極限まで強化される。事前に多重にバフを構築し、それでホツカイドウに乗り込む前に極限まで準備を重ねる。だが反発する奴がいた。

「貴様が誰かは知らぬが、我らに命令をするな！」

「クラリツサ様、何故このような無法者を!?!」

「彼には力があるからです。サマナー・リユージ、ホツカイドウは……?」

言葉にラーマが答えた。

「もう手遅れだよ、アレは。感染浸食の最終フェイズに突入している

よ。土地そのものを諦めるしかない——あれはもはや汚物カとしか表現できないものさ」

「そうですねか……」

クラリツサは悔しそうに言葉を呟いた。俺も、正直ホツカイドウそのものがアウトになるとは、思いもしなかっただけに少しでもショックを受けている。とはいえ、ショックを受けている暇があつたら準備をするのが先決だ。黄龍が浄化の風と波動を放って、それで感染狂気を駆逐し始めている。これで眼球からの狂気感染は防げるが、それは所詮対処療法でしかない。

ハスターを殺し、このホツカイドウの地を丸ごと浄化しなければそもそも問題は解決しない。

つまりホツカイドウを埋め尽くす狂気を滅ぼす必要があるのだ。

「忠告はしたからな……!」

ブルームを構えて、クラリツサへと視線を向けた。それを受けてクラリツサが頷いた。

「対狂気個人クラス防御展開! 全魔力を防御に回して対ショック準備! 結界を一時的にだけ解除してから再構築します! その間、大結界なしで耐えますよ!」

「はっ! 了解しました!」

クラリツサの指示に統率されたメシアンの返答が返って来た。それに合わせ、忙しくメシアンが動き出す。その動きを視界から外し、ひたすら、眼球の動きを見ていた。此方を見て、そして何も訴えない様な無機質な瞳を。何かを求めているが、訴えてはいない。不思議な目玉共だった。覗き込めば覗き込むほど、正気を失って行くのだろうが、

日常的にSANITYを消費する仲魔がいるのだ、このレベル程度今更でしかない。

「結界解除します! 5秒前! 4! 3!」

結界解除のカウントが始まる。それに合わせ一気に魔力を周辺から感じ、それが防御に入り、カウントがゼロになると共に結界が解除された。

それと同時に、その向こう側に押し込められていた、ホツカイドウという蟲毒の大地で育て上げられた深淵の狂気が溢れ出す。空気、視線、音、気配、その全てを媒体に狂気感染するそれは一瞬で本州を染め上げようと大河となつて未定義の狭間に堕ちながらも届こうとする。それを見て、笑みを浮かべる。

「それでも馬鹿は言うのさ——馬鹿が何時狂気に負けるつてな。

《The Magician》

狂気が接触する瞬間、馬鹿どものカードを使用する。一瞬で精神に対する絶対的な無敵性を獲得し、それをサービスで軽く、広げてみた。範囲は広くはない。だが自分の近くに居る人間ぐらいであれば、その範囲に巻き込める。それで狂気を完全遮断、弾きながら、正面へと向けたブルームのトリガーを引いた。

一発の《至高の魔弾》が放たれた。

無限に加速し続ける弾丸は失速せず、距離を稼げば稼ぐ程速度を増加させ、そして一秒以下の時間で本州へと、溢れ出す狂気へと突き刺さつて貫通し、その背後へと抜ける。

本番はその直後に発生する。

《至高の魔弾》が放たれた後の空間を追従する様に、空間が粉碎された。追いかける様に弾丸が通つた周りの空間が粉碎されながら歪み、砕かれ、微塵に粉碎されながらホツカイドウへと着弾する。距離を稼げば稼ぐ程破壊の範囲が広がる魔弾は着弾時には周辺半径500メートル範囲を巻き込んで粉碎するまでに加速していた。

それによつてホツカイドウの上陸ラインに集まっていた目玉と狂気の塊を吹っ飛ばした。

「ビュー、派手にやれるもんだ」

《魔弾タスラム》、銃に装填できる弾丸の中では威力、範囲、貫通力、連射性、その全てにおいて最高基準の弾丸。それゆえに作れる人物も、その数も限られている上に発射できる装備でさえも限られるというまさに魔弾の名に相応しいだけのモンスターバレットだった。なにせ、ルーチェ&オンブラでは射撃できず、ブルームでないと発射できないという問題児なのだから。

それでもこれだけの効果があるのは知れて良かった。スダマ先輩なしでも距離さえあればこれは破壊力を稼げそうだ。そう思いながら迷う事無く前へと一気に加速し、

アオモリ最後の大地を踏んで一気に跳躍した。

本州とホツカイドウの間にある距離を、全力の超人の身体能力で無理やり飛び越えて突破してしまう。ホツカイドウの狂気汚染された大地にそうやって自分の足で踏みしめて、着地した。後方にメシアンたちを置いて。

そして地獄を見た。

土地は全て腐った色に変貌した、と思ったら爽やかなホツカイドウの景色が見え、次の瞬間には大地が全て内臓によって構築されているのが見えた。耳にはまるで誰かがすぐ側で呟いている様な雑音が響き続ける。常にどこからか視線を感じる。人間だった肉塊が死ぬ事も出来ずに死ぬ事を求めてホツカイドウの大地を徘徊し、喰らい合っている姿が見える。

空を見上げれば月に目玉が生えていた。

空は触手で覆われ、呪われた演奏がどこからともなく聞こえてくる。空に舞い上げられた人間は高き空の中で降りる事も出来ず、永遠に終わらない絶叫と恐怖を吐き出し続けており、それが終わったら氷結して大地に叩きつけられて砕け散る。

狂気、圧倒的冒瀆と狂気。

このホツカイドウという大地は全滅していたのがもはや確信できた。

感じる範囲全てに狂気が蔓延している。触れてはならない、知ってはならない水底で眠る邪知が地上に溢れ出している。それを楽しみながら興味もなく空を触手を生やした肉塊の様な、不定形の様な、或いは形が存在しない翼の怪物が風を纏いながら飛んでいるその呼び声に誘われて眠っていた眷属たちが再び世界に姿を見せ始める。イタクア、ビヤーカー、ミィゴ、そしてそれらの犠牲によって生み出された人だった異形の存在達。それだけがこのホツカイドウに残されている全ての生物だった。

ある人間は肉塊だった。

ある人間は脳味噌だけを生きたまま摘出させられ、それをデコレーションとして木に飾られている。だが狂気に汚染された木は肉塊となつて脳を食つた。そしてそれで融合して木はそいつとなつた——肉塊の木のまま。そしてそれを大地が食つた。

「やれやれ」

ブルームの先端を大地に突き刺し、そのまま引き金を引いた。放たれたタスラムが大地に突き刺さり、そのままそれが大地に亀裂を生み出しながら広範囲に広がって万能属性の爆裂を周囲へと広げながら大地から狂気の命を奪う。

この大地に存在する生物、無機物、大地、それそのものがハスターに汚染されている。ブルームを引き抜き、引っかかる肉塊を振り下ろしながら、ハスターを見上げ、到着した仲魔たちに指示する。

「———どれだけ土地を削つてもいい」

空に浮かぶハスターが敵を認識する。存在しない目で此方を捉え、そして歓喜と畏怖と恐怖と悲しみと人には理解できない感情で見つめてきた。もしかして眠っている子の事を感じたのだろうか？ まあ、しよつちゆうバカスカ打ち出しているから残り香があるのかもしれない。まあ、それを察知されたところで、どうしようもない。

ブルームを肩に乗せ、左手でカードを引き抜く。

《The Temperance》、《The Strength》、《The Hierophant》のタロットを抜いた。間違いなく舐めて、或いは余裕をかまして戦える相手ではないと、空に浮かぶハスターを見て判断する。

「全部始末するぞ」

これは残しておくだけ駄目だ。根本から切除しなければならぬ。ハスターを殺した上で狂気を破壊しなくてはならない。即ちホツカイドウそのものを破壊する必要がある。そうじゃなければ残つて本州を汚染するだろう。

故に、

持てる力の全てで———このホツカイドウを滅ぼす事を決めた。

## 神州混沌行脚 XX

《節制》、《The Temperance》のカード。それはラーマを、本来のカルキとしての状態へとレベルはそのままに復帰させるカード。限定覚醒<sup>リミテッド</sup>とでも表現する。髪色が白髪へと変貌すること以外はそのまま、様々な能力が解禁され、その名をカルキへと変貌させる。ラーマの頃でも超級の仲魔だったが、カルキへと変貌すれば更に力が増幅する。そしてそれはカルキだけではない。

《剛毅》、《The Strength》のカードによってミコトも限定覚醒される。発動する事によってミコトが神の血を覚醒させ、その能力が限界まで引き出される。濃い神気を纏う様になり、その服装は品のある女物の着物へと変わり、纏められていなかった髪の毛も結われ、その出自を思い出させる高貴さを見せつける。天叢雲剣もその姿を古刀へと変貌させる。

そして最後に《法王》、《The Hierophant》のタロット。帝都ライドウの術技を使用する事を許す。というより発動させればどうすればどういう風に使えるか、というライドウの知識が一時的に流れ込んでくる。効果が終わった時はそれはそのまま、全部忘れてしまうのだが、

今は十分過ぎる。覚醒した事によって超スペックを手に入れたカルキとミコトが一瞬で音を置き去りにして加速し、残像すら残さずホツカイドウの大地を蹴った。それに合わせ十束剣を抜き、それを大地に突き刺し、まずは大地を犯す狂気を一気に弾き出す為に、滑り込んできたアンと一緒に柄を握った。視線を合わせ、頷き合い、そして背中合わせに柄を握りながら魔と人の力を同時に十束剣へと注ぎ込み、それによってライドウの奥義を引き出した。

「天命滅門——！」

文字通りの奥義。人魔揃って発動される絆の奥義。それが十束剣によって増幅され、瞬間的に凄まじい力となり、あらゆる不浄を祓って清める力となってホツカイドウの大地へと叩き込まれた。それに拒否反応を起こす様に大地そのものが怒りの咆哮を放つ。だがそれ

よりも神剣とクズノハ、ライドウの奥義が勝る。狂気に汚染された大地から狂気が浄化され、殺し尽くされていく。そしてそれに追い打ちをかける様に空に浮かぶ黄龍が黄金の風を呼び覚まし、それによって大地からクトウルフによる汚染を除去していく。

大地を覆う混沌がアンカーを失った事で急速的に力を失っていく。無節操に生えていた肉塊の木、空間に鳴り響く異音と絶望の音色、それらが大地の浄化と共に滅されていく。ライドウの奥義を放つただけに消耗は大きいものの、それでもかなりの広範囲から悪影響を除去できた。

根本的にホツカイドウ全体を浄化するには時間もリソースも足りない。だが玄関口を陣地として取得する事が出来た。足元の安全を確実に確保するのは、相手のテリトリーに踏み込んで戦う場合、恐らく最も重要な事の一つになる。少なくとも昨日、太公望と話していたそうやってテリトリーを確保する事の重要性を理解した。

——ここで、自分がどう動くべきなのか、数瞬だけ考えた。

そして判断した。

「カルキ、ミコト、コウリユウは元凶をぶちのめせ！ ベルとアンは好きなだけ地上の連中をぶちのめせ！ この大地から全部叩き出してやるぞ！」

指示に従って仲魔たちが一瞬で動き出した。そして本州と此方を遮断する様に、再び大結界が展開された。これで増援も援軍もなしか、と思いつながら何時もと別に変わりはいしねえか、と呟く。どちらにしろ、ハスターは殺す。そしてその経験値を頂く。一番レベリングを必要としているベルとアンは大量の敵を相手させて経験値の取得に集中させる。その間に自分は十束剣でちびちび土地を浄化しつつ進んで行く。

「メシアンがいないのならもう出てきても平気か？」

『いや、監視されているだろうから止めた方がいいだろう。今回の隣人は純粹に回復に専念するのが良いだろう』

「そっかぁー」

鳩の言葉に返答しつつブルームを後ろへと向けて引き金を引く。



回り込んでいた怪物の気配に射撃したが、どうやらビヤーカーがこんにちわ！ しに来ていたらしい。《至高の魔弾》に耐えられる筈もなく、ビヤーカーが爆散する。それをブルームのボディに映る反射で確認しつつ、ハスターの増援に向かおうとするイタクアの姿が見えた。「入場禁止だ」

《至高の魔弾》で合流するよりも早く撃墜する。上半身を消し飛ばしたイタクアがびくびく動いているが、二射目で下半身諸共救いのない人たちも殺した。塵もなく消し飛んだ姿を確認しつつ上へと上げていたブルームを降ろし、息を吐く。

「……殺すのに慣れてきたな」

大物を二体沈めたので空から地上へとターゲットを切り替え、地平を埋め尽くす肉塊の森に射撃する。情報が欠損しているのか、或いはどこか完全じゃないのか、自分の知識やネットで調べたような黒い湖は見当たらない。或いはクトゥルフという属性そのものが暴走して混沌を引き起こしているのかもしれない。どちらにしろ、これは最後まで放置していたら残された世界にとって致命傷となる。切除するしかないだろう。地上を魔弾で薙ぎ払いながら跡形もない景色を生み出し、冷静にレバーを引いて次の弾丸を進めた。

『隣人よ、安心するといい。汝は別に殺す事に慣れたのではない。感覚が麻痺しているだけだ。いずれ、何も無い平和な時代が来た時、自分が犯した罪に苦しむだろう、汝はそういう者だ』  
「……それはどうかな」

戦えば戦う程心が渴いていくのが解る。苦しみも悲しみもあるけど、それでも人を殺す事に何も考えずに迷う事無く殺せるだけの意思が今の自分にはあった。少なくとも今は躊躇していない。必要だから殺せている。そうやってきている自分が少しだけ、怖いというのも事実だ。

それでも殺す。経験値も欲しいし、仕事であるのも事実だ。だけど自分が戦わなければ、自分の知っている人間が消えるかもしれない。それが寂しい。

その為であれば、まだ戦える。

だから再びブルームを持ち上げて構えて、そして地平線にあるすべてを消し飛ばす様にトリガーを引いた。同時に空が光に包まれた。地上の狂気を駆逐しつつ空を見上げれば、ハスターと仲魔たちの決戦が繰り広げられている。

風の神性と呼ばれ、クトウルフ独特の発狂を誘発する死と冒涇の風。それをまずは黄龍が黄金の風を吹かせる事で浄化と狂気で相殺し合い、堰き止めている。それによってハスターに有利な空間を生み出す事を阻止している。それに合わせ黄龍の背の上を足場にするカルクとミコトが一切の躊躇もなく、ハスターを貫く様に連続で奥義を放つ。超重力と新生の炎がハスターの体を巻き込みながら千切りホツカイドウの地表へ衝突し、大地をそのまま海岸を突き抜けるまで突き抜けて吹っ飛ばし、天叢雲剣が放つ斬撃、それが放たれた後で崩れ、風に乗って循環し、水圧によって物理的な強度を無視して切り裂く、禊の水斬となって全方位からハスターに斬撃を叩き込んで行く。

それでもハスターは諦める事無く、冒涇的な言葉を口に浮かべ、精神破壊に大災厄を呼び寄せようとする。深淵の呼び声に同種を呼び寄せようとする。だがそれを音さえも飲み込むカルクの重力が消し去り、無駄な行動を挟んだ対価にその肉体を空から陥没させ、ホツカイドウへと叩き落とす。クレーターを生み出しながら陥没させ、大地と同化し始めるハスターをハスターに付着した水滴が斬撃となつて切り離す。

そして大地に叩きつけられたハスターの横へと《ヴァーマナ》で回り込んだカルクがその姿を地平線の果てまでクリタ・ユガで弾き飛ばす。クラリオン戦の時の様な問答無用の絶対破壊能力はそこにはなかったが、それでも破格過ぎる破壊力でハスターという神性を一方的に蹂躪していた。

或いは《汚物の破壊者》というカルクの属性と、根本的に星の侵略者であり、地球人視点から汚物としか表現できない、クトウルフ神群とは非常に相性が良いのかもしれない。ただその姿に一切遅れる事無く、カルクが攻撃を終わらせて隙を見せそうなタイミングで寸分の狂いもなく行動し、動きを切り伏せてカバーする様に無数の斬撃を一

つの軌跡から生み出すミコトもミコトで異様すぎた。

これが本来の、超越級悪魔の実力の片鱗と呼べるものかもしれない。

汚染、狂気、侵食、精神崩壊。

そういう方面に特化した悪魔では、《The Magician》と黄龍の浄化と精神完全耐性の組み合わせは鬼門なのだろう、明確に有効な攻撃を生み出せずにハスターは空から引きずり降ろされ、星と日本という国の守護者のチームに蹂躪に近い扱いを受けていた。宇宙から地球に顔を出しに来たお前が悪いんだぞ。

まあ、それはともあれ、

見ている間に北海道の地表が、大地が割られて行く。凄まじい勢いで異形が殺されながら、ハスターの蹂躪が進んで行く。空を飛ぶ眷属どもをチラ見しながら叩き落して行く。そうすれば次第にホツカイドウを包む狂気の気配が薄れていく。

それでも樹林する肉塊の木々の姿などは消えない。そしてそれがある限り、この大地はどうしようもなく、救いがなかった。

救いが、ない。

十束剣とライドウの奥義で大地を浄化させながら進んでも半径数百メートル程度の範囲だけだ。それを延々と繰り返すのは無理がある。だから根本的な原因であるハスターを排除したら、ある程度大地を割って、沸き上がる狂気そのものを削減する事で歯止めし、そこから浄化作業を進める事でしかこの大地を再利用できないだろう。

この大地は既に終わっているのだ。その様子をこの大地を踏んで、漸く解った。そしてこういう事がこれからも先、どんどん発生していく事も解ってしまった。或いは、太公望がバーに出現して、陣地や空間の事を考えろと講釈したのは、この時の為だったのかもしれない。

「……」

しばし、絶叫と悲鳴が溢れ返る大地の上に立ち、禍々しい色の空が少しずつ、本来の色を取り返す景色を眺めつつ、呟く。

「やるか」

『別にサマナーがやる必要はないんじゃないぞ？』

チエフエイが呟きに言葉を差し込んできた。それにいや、と答える。

「別に力に義務とか責務があるとは思わないし。俺がやる必要ないつても解る。だけどそれとは別に、誰かがやらなきゃいけないなら……ここで俺がやつても問題ないだろうって事だよ」

『DMなサマナーじゃなあ』

自分から面倒な道を選んでいる自覚はある。それでも、何も無駄な事はないと思っている。人生とは長い旅路だと思う。その旅路を自分はまだ、歩き始めたばかりである。しかし、今、自分の旅路は最大の危機、その時期に突入していると思う。苦難から苦難、そして苦しみの連続が続いている。だけどそれだけじゃない。良い事だったたくさんあった。

巖戸台では学生の気分を味わえた。帝都では友達を作れた。バーの連中は馬鹿ばかりだし、悪魔協会の連中も馬鹿ばかり、ガイアも馬鹿しかいなかったし、メシアは……まあ、うん、頑張つて欲しいとかコメントが出ない。でも悪い出会いじゃなかったと思う。

全部、自分の旅路に必要な出会いだったと思う。そしてそれはこれからも続く。

「二歩ずつ、一歩ずつ前へ。その為には俺が踏み出さなきゃならない」この出来事も、また、自分の血肉となつていつか、自分を助けるだろうと思う。そう思って自分でやる事にする、強制された訳でも、その必要があるからでもなく、自分の旅をそうやって進むと決めたら。

だからこのホツカイドウを殺す。

そう決めて、仲魔たちに指示を出す。空にある怪異を墮とせ。地に蔓延る苦痛を消し飛ばせ。悲鳴を孕む大地を崩せ。

俺の手でこの地を終わらせる。狂気を駆逐する。また自分が一歩前に進む為に。

……仲魔を自分と合体させる事なんて必要ない強さを得るために。その為にも、前へ。

◆  
ホツカイドウの戦いは結論から言えば——蹂躪の一言に尽きる。  
ハスターは恐らくレベルが70代後半、或いは80はあっただろう。だがそのスペックのほとんどは精神耐性を破壊し、発狂を促しながら相手を自滅させる、どちらかと言えばチエフエイと同じタイプの悪魔であり、スペック的に戦闘力そのものに関しては高くはない。風の神性という属性から風を操って戦闘を行う事が出来るものの、サポートとして出している黄龍が風の操作能力を有している為、空間リソースの奪い合いに狂気汚染と浄化による拮抗により、ハスターの得意とする能力がほぼ封殺されているという事実があった。それに加え、眷属のイタクアやビヤーカーに関してはそこまで問題にならないのは、地上から駆けつけるのを目撃してから射撃すれば殺せる程度の雑魚だったという事もある。

星の汚物を終末に除去する役割を持つカルキと、日本という国を長年守護してきた神性バスターの倭建命相手には少々、相性が悪すぎた。万全のサポートがあったというのも一つの理由だった。それ故にハスターは消滅した。欠片も残さず。死んだ時にばら撒く狂気の種も纏めて全部その周辺数十キロ範囲諸共大地を完全に消し去って排除した。小牧を中心とした範囲を消し飛ばし、大きく円形に食い破られた痕跡をホツカイドウの大地に生み出して、それに加え何発かの斬撃の影響によって全体的な面積が今までの3分の1までに減らされた。

最終的な結果から言えば、ホツカイドウの形が削られ、変形した。本州とホツカイドウを繋ぐ玄関口は完全に崩壊、海が再生すれば恐らく今まで以上に長いフェリー旅がホツカイドウへと進むのに必要になるであろう。その上で更にホツカイドウに進んで行けば、

家畜を育てる為の牧場は人間を育てて肉塊へと加工する人間牧場へと変質していた。その人間も生まれた時から加速されて育ち、そして同時に変異して地獄を見ながら知識を与えられて発狂していた。

ホツカイドウ内の時間が加速していたのだ。邪神の遊び場として

完成させ、本州に流入するまでの間に。故に、都市も、牧場も、汚染された森も、大地も、それを地表から浄化しながら焼き尽くし、もう駄目と言える大地はそのまま、消滅させて切除する以外の選択肢が無かったから。

そうやって、メシアンが結界を維持している間にハスターら邪神群を始末していき、そのまま北上する。

ホツカイドウの地形を削り、抉り、減らしながら南から北へと向かって残された肉塊、ミⅡゴ、そしてハスターに連れられて出現した邪神をただただ始末して行く。最初のショックは酷かったものの、日常的にもつとやばいのと接している分、ハスターさえ何とかなつてしまえば、もはや問題はなかった。

残された狂気では、もうどうにもできない。残された邪神群全てとはいかずとも、北上する中で《エネミーソナー》が感知できる全ての反応を死滅させた。

そしてそのまま、北上し続け、

「——ここにきてさ、昔……親と遊びに来たことがあるのを思い出したわ」

宗谷岬に到着した。日本最北の地。小さなモニユメントが存在し、その端に到着し、岬の崖に腰を下ろした。その先には未定義の空間が広がっており、背後には焼き払ったばかりの死の街の姿がまだ残されていた。吐き気を催すような穢物の臭いが、ホツカイドウに踏み入れてからは消えない。

「ガキの頃、親と一緒にここに来たことあるんだわ」  
「ん」

横に座るアンが、その話を聞いてくれる。

「まあ、その時は結構なガキ……というかまだ一桁の頃でさ、あんまし……良く覚えてないわ。だけどここにきて、ここが日本で一番北にある所だぞ、って親父に言われて……それですっげえはしゃいだ事を今更になって思い出したわ」

あーあ、と声を零した。

「ホツカイドウ、生キヤラメルが美味しいって話だったから一度ぐら

い、食べてみたかったんだよなあ……」

「だけど、もう無理だろう。育てる環境も、場所も、人も、その全てが狂気に汚染され、歪められ、異形となった上で始末された。もはや生産される事はないだろうなあ、と思う。いや、支配人に聞けば確かにどうにかしてくれるかもしれない。」

「だけど人間が作る生キャラメルはもうないんだと思うと、ちよつと寂しい。」

「なんかさ」

「うん」

「……後味、悪いな」

「……ん」

横に座るアンが身を寄せ、手を握ってくれる。それだけで元気が出てくるから単純な男だと思う。だけど……うん、まあ、彼女の前では格好つけるよりも、何時も通りの自分でいた方が楽だとも思う。

後味の悪い結末だった。

結局のところホツカイドウは全滅、消毒して北上しつつ、ホツカイドウの最北端にたどり着いて昔を思い出した。そして呆れる様に後ろへと倒れ込み、かつてはそこに到達でき、宗谷岬のシンボルとも、モニメントと呼べるものは崩されており、

その代わりに、

——そこには一つの扉が用意されていた。

大破壊

そう、言葉が刻まれた扉が寝転がれば、扉に掘られているのが見えた。

それはまるで最初から、この地獄の景色を乗り越えて見つけ出すのを待っていたように、そこに静かに輝いているのが見えた。導かれていく様に、望まれている様に、乗り越える事を期待されている様に……。

自分のせいじゃないと解っていても、どうしても滅入る。

「空、蒼いなあ……」

寝転がりながら空を見上げつつ、DDSからの情報をグラスに映し

た。度重なる高レベル悪魔との戦闘で、ベルとアンのレベルは大きく上昇していた。ベルは漸く念願の70代に突入し、

アンのレベルは、69まで上がっていた。

始まる前であれば5レベル差ぐらいであれば誤差の範囲だっただろう。

だがレベルが上がったのはアンだけではない。自分と、他の仲魔たちもレベルは上がっていた。70代の後半ラインにレベルは上がって入っていた。それにタロットによる覚醒の反動でラーマもミコトもしばらくはD Y I N G状態が維持され、蘇生不可能状態に陥っていた。その事を考えると、やはりレベルをトップにある程度追いつかせたい。

合理的に考えるなら———する必要がある様に、なっていました。

その事を考え、昔を思い出し、奥歯に挟まる様な気持ちの悪さを忘れられず、

はあ、と呟く。

「空が青いなあ……」

この宙がどこまでも蒼ければいいのに。だけどそうじゃない。この青空は途切れる。無の中へと。これはどこまでも続かない空なのだ。そしてそれを取り戻せるのが俺だけになる。

なるから———もう、どうしようもなかった。

アンとベルを抱く必要があった。

ここまでやって、後味の悪さを我慢して、それでも足りなかったのだ。



## 神州混沌行脚 XX I

「ただいまー」

ホツカイドウを軽く滅ぼした所でバーに帰って来た。面倒なので黄龍の背に乗ってDYING状態のカルキを大結界にぶつけて物理的に破壊し突破。クトウルフ・ファック・ユー、最強なのは精神破壊より物理的な破壊なんだよ屑が、とメシアンの前で滅んだホツカイドウを存分にアピールした所で、クラリツサに軽く説教を喰らってバーにやつと帰ってこれた。色々と情報があるから、とりあえず次の行動に移る前に、落ち着ける場所で情報整理したいのが事実だった。

「良くぞ帰って来た旅人よ」

「何か土産はあるかな？」

「お帰りなさいませ、貴方の旅路を記録しましょう」

「うーん、今日は賑やか」

ステイヴンが部屋から出てきてバーに居るのも珍しい。支配人もどこか機嫌が良さそうだ。やつほー、と戻ったアンが上機嫌にラヴェンツアと両手を叩き合わせて挨拶をしているのが見えた。あの二人、どこことなく同じ気配がするというか——仲良くなるの、早いよなあ、と思う。まあ、それはともあれ、帰って来れたので八岐大蛇のデビルソース、ヘルとその兄弟のデビルソース、後はハスターのデビルソースを入手した事を告げつつ、カウンター席に座った。後は勝手にストレージからステイヴンが引っこ抜いてくれるだろう。

そんな事よりも、

「めっちゃくちや疲れた……まさかホツカイドウが丸々ダメになるなんて思わなかった……」

カウンター席に座った所で額をカウンターに叩きつけて、疲れましたのアピールをする。それを見て支配人が興味深げに見てから、しかし溜息を吐いた。

「外宇宙の邪神群か。アレは根本的に好き勝手やっているだけだからロウもカオスもニュートラルもない、アライメントや人類の生んだ概念の通じないものだ。そもそも敵対する事が間違っているし、相手を

するなら極論、精神耐性を高めて物理的に消し飛ばす以外の選択肢がない」

「魔界でもそういう扱いなんだな……」

ゴキブリとか、そういう類の扱いを受けている事を理解する。だが逆に利用できればそれだけのコズミックホラーが手元で扱える道具として備わるという事でもある。支配人が最高傑作とスダマを呼んだのはそういう意味があるんじゃないだろうか？ と今更ながら思う。まあ、それはそれとして、

「次の扉、見つかったからなあ……」

「ほう、これは年貢の納め時、というものだな」

後ろの方から背中突き刺さる視線を感じる。それをガン無視する。もう少しだけ、もう少しだけ覚悟を決める時間をください、と胸の中で言い訳している。はあ、と溜息を吐きながら本当にどうしようか、と呟く。いや、やるべき事は解っている。タイムリミットが来ただけの話なのだ。だから常識的に考えて……いや、常識的ではないが、それでもアンを、そしてベルを抱く必要がある。

ラーマとミコトが反動でしばらくDYINGで状態が固定されるとなると戦力はチエフェイ、ベル、アンがメインとなってしまう。黄龍は広大な土地が無いと召喚出来ないし、スダマは環境破壊がセツト、鳩はメシアンの前では絶対に召喚出来ない仲魔筆頭だ。その状況でまたハスタークラスの相手をするのは厳しい。

やっぱり、ベルとアンのレベルを少なくとも自分やチエフェイクラスまで上げておく必要がある。扉を抜けた先でまた強敵とエンカウト、というのも十分にあり得る可能性なのだから。少なくとも1回、いきなり大型シャドウとエンカウトという事故が発生している以上、笑える事じゃなかった。

「しっかし」

呟く。

「大破壊……あんま、まともそうじゃない世界に繋がりそうだなあ……」

そう言葉を口にした瞬間、ガラスの割れる音と、誰かが倒れる様な

音に顔を持ち上げた。視線の先には車椅子を倒してしまったステイヴンと、そして動きを完全停止させた支配人の姿が見えた。二人の姿を交互に眺めていると、ステイヴンが浮遊して車椅子を元に戻し、座った。お前今何やった？　と思いつつも、ステイヴンが物凄い違和感を欠片も感じさせない、芸術的なターンを決めながら作業室へと消えて行く。

「ほ、ほら、作業があるので……」

「し、新作の開発をする為に少々裏へと引つ込もう……！」

『滅茶苦茶心当たりあります、しかも悪い事やったので超話しづらいですアピールなのじゃ』

物凄く良く解る反応であり、あちらの世界にはステイヴンと支配人が確定、しかもおそらくはまるでロクな事をしていないという事実が判明してしまった。あの二人のリアクションがアレなのだから、これ、相当アレな世界なのでは？　と、密かに《節制》と《剛毅》のカードを使ってしまった事を後悔している。メイン火力不在の状態での反応は少々やばいかもしれない。

「大破壊とは」

ラヴェンツアの声に、振り返る。

「とある世界にて発生する、東京や文明、社会を崩壊する現象に対して与えられる出来事の名称です。原因はICBMだったり衛星砲だったり、或いは何らかの術や儀式と様々な方法で異なりますが、それで東京を中心として文明社会が崩壊した時の事を《大破壊》と呼びますが……」

ラヴェンツアが逃亡した支配人とステイヴンを少し、呆れる様な視線で追った。この子も大分、表現が豊かになったような気がする。

「……ルイ・サイファーとステイヴンの反応を見るに、どうやら原初の大破壊の事を思い出されたようですね」

「原初……ああ、ザ・ヒーローとかつて奴が出てくる」

その言葉にラヴェンツアが頷く。そういえば帝都に居る時、ベルがぼろっとザ・ヒーローとの戦いの話をしてくれたのを思い出す。確か東京が崩壊して、その後で極N―Nアライメントの少年がロウも力才

スも皆殺しにしたお話だった筈だ。

『ちなみにその戦い、私も閣下も100レベルを超えた状態だったわ。天使共もね』

「ええー……ウソだろお前……」

それ、ほとんど帝都でのカルキ&黄龍タッグを相手にした時と同じような状況ではないか。ちよつと、というか余りにもアレ過ぎてちよつとびっくりするんだが。というか最終的にそういうレベルの悪魔が出没するんだぞ、とベルが教えてきてる。これ、間違いなくアンを押し倒せと暗に伝えてきているだろう。

「まあ、それ以外にもメギドアークの発射や、東京受胎もありますから……」

「それ、スケール大きくなってないかな、ラヴェンツアちゃん」

「……おや？」

ラヴェンツアがてへり、とアピールしてくるが、可愛いので許す。そしてその許しの視線を感知したアンが近づいてきて此方の頬を掴んで引つ張ってくる。浮気をするつもりは一切ないから、許してほしい。だけど、そうか、と呟く。

「今度は崩壊した世界が舞台になるのか……予め物資をストレージに積み込んだ方が良さげだな」

帝都や巖戸台の時の様な、現地で大量の物資を調達するというスタイルは出来なさそうだな。一応、帝都や巖戸台から大量の食糧や生活必需品は持ち込んでいるのだ。少なくとも一財産になりそうなレベルで。これだけであれば此方の世界での生活も楽になるだろう、という為。だからある意味、それだけならこれで突入できるが。

「何を持ち込むべきかなあ……」

カウンター席、足を組み、腕を組み、考える為に思考を巡らせようとして、

『で、そうやって逃げるのサマナー？』

「……」

『私、二度目は言わないわよ』

それだけ告げて、DDSが黙り込んだ。何もわかってなさそうなら

ヴエンツアとアンだけが此方を見て、動きを停止させた姿に首を傾げている。バーのベルベットルームのあるコーナーへと視線を向ければ、ベラドンナが少しムーディーな曲を歌ってくれているし、ピアノストが演奏の合間、片手でサムズアップを向けて来る。

余計なお世話だよ畜生。

頭の後ろを軽く搔き、とりあえず、

「……シャワー浴びてくる。絶対入ってくんなよ？」

身を清めてくる事にした。困った。そして本当に困った。とりあえずこの頭を冷やす為にも、冷水のシャワーを浴びに行く事にした。

◆

冷水のシャワーを浴びても、まるで頭の火照りが消えない。相当参っているらしい。上だけ裸の半裸の状態で、水滴を全て拭いた後でバーから通じる今の自室へと向かい、ベッドの上に倒れ込んだ。そのまま、壁側を向く様に顔を隠し、溜息を吐く。

……うん、解ってるんだ。世の中そんなに甘くないって。

壁を向き、ベッドに倒れたまま思考する。冷静に。自分がここ数か月、サマナーとして積み上げた判断だ。ハスターを倒す為にカルキとミコトをDYINGさせたのは必要経費だ。アレは放置してればその内更に大きな災禍へと繋がるタイプだ。だから迷わず処理する事が重要だ。その後、戦力が一時的に低下するとしても。

その結果、戦力は限られてしまった。しかも相手にレベル100以上の悪魔が出現する可能性があるのであれば、事前準備にベルとアンのレベルをチェフエイと同じラインまで上げておく必要がある。レベル差が大きくなればなるほど、動きが乱れて仲魔で連携させ辛くなる。だからなるべく、仲魔内でのレベル差はフラットな状態が理想的になる。だからベルとアンも70代後半までレベルを上げるのが理想なのだ。

だが戦えるような高位悪魔はそうそう出現しない。居るとすれば山本五郎左衛門とウリエルぐらいだろうが、日本で活動している組織

のトップを襲撃するとか、国そのものを敵に回しかねない行いだ。ガイア、メシア、そして日本を乱すものとしてヤタガラスとクスノハも制裁してくるだろう。流石にそれは本意ではない。ならどうするか？　と言えば一つだ。

セックス、それが一番効率が良い。

古来から性交は儀式の一つとして見られており、互いを高め合う為の行いでもあった時代が存在した。だがそれだけではなく、Magを譲渡する上で一番これが効率の良い手段でもあるらしい。生活を通じた感情などの高まりからMagは生まれる。故に性交中はMagが人間側から生み出され、ロスを少なくMagを譲渡し、それで仲魔を強化する事が出来る。まあ、それでも仲魔にはレベルの上限が設定されている。これで強く出来る範囲にも限界はある。

それでも仲魔がレベル限界に到達していない場合、或いは自分のレベルに並べる場合に関しては、これが非常に有用な手段になってくる。それとなく飲み会の時に話を聞いてみたが、仲魔の性別を異性にして使役するのはこういう手段を必要な時に取れる為でもある、というのがある種、業界の常識でもあった。異形型悪魔用に擬人薬なんてものも存在していたりするらしい。逆に異形フェチを満足させる為だけに異形化薬もあるとか。

助けを求めようにも、DDSの連中はうんともすんとも言わない。自分で考えろ、と言いたいのだろう。お前ら、普段は茶々を入れるのに、こういう時だけは直ぐに無言になって黙っている。

本当に、優しい連中だ……。

壁を向いたまま、溜息を吐く。そして解ってる、と呟く。

抱かなきゃダメなのは解っている。そもそも俺が弱い。一種の芸を持つているからこそ、どうにか戦闘に参加できているというだけだ。これで《ガンスリンガー》さえなければ魔弾も放てず、完全にお荷物だっただろう。だがそれでも、本当に高位悪魔相手となると、俺が参加できる隙は全く無い。事実、ハスターとの戦いでは俺が一つもハスターへと攻撃できていない。全部、戦闘力トップスリーの仲魔に任せている。

ミコトの言っている事は間違っていない……だからこそ仲魔をなるべく強化しておく必要があるのだ。理屈では解っている。それは、それに別に抱きたくないという訳ではない。寧ろ逆だ。同じ時間を過ごせば過ごすほど彼女が魅力的に思えてくる。そのまま押し倒して滅茶苦茶にしてやりたいと思える。

何時もは済ました表情しかしていない彼女のあの表情を、快樂でどろどろに蕩けさせてやりたいと思っている。犯して犯して犯して、組み敷いて泣いても犯して体に徹底的に自分という存在を刻み込んでやりたい。超人になったからか、或いはそういう素質があったのかは知らないが、それでも彼女を犯したいという気持ちがある。そういう考えをすれば普通に勃起もする。

……うん、健全な男子なのだ。そりゃあ、獣欲の一つや二つぐらい抱えている。

「だけど、そうじゃないだろ!? 大切にしたいだろ!? 一時の衝動で押し倒すのは良くないだろ!」

言い訳染みた言葉を吐き出す様に口にし、しかし逃げているだけだと自分でも解っている。あの子はずっと、こつちを待っている。受け入れる準備が出来ている。だから問題があるのは俺の方で、単純にヘタレているだけだ。

自分とあの子の関係が壊れてしまうんじゃないかと、それを恐れているだけだ。

だけどそれがそう簡単に壊れるものではないと解っているのは、誰よりも俺だった。仲魔を含めたこの出会いの中で誰よりも弱く、そして助けられないとここまでやってくる事も出来なかった俺だからこそ、解るのだ。彼女は俺を見捨てるつもりも、変わるつもりもない。彼女は彼女だ。抱いた程度では、何も変わりはないって。恐れているのは俺だけだ。

変わってしまう事を俺が恐れているのだ。

彼女はそうでも、果たして俺がそのままいられるのか。

少しずつ、少しずつ、戦いを重ねるごとに変わっていく自分を自覚する。少しずつ、殺すのに慣れていく。誰かが死ぬ事にああ、また誰

か死んだのか、と受け流す。《サマリカム》すればいいだろう？ と死ぬ事が、命の値段が軽くなって行く。俺が死んでも戦いに勝てるならそれでいいし、終わった後で蘇生して貰えばいいや、と思ってしまう所もある。

俺が、昔の頃から大きく変わってきている。それはもう自覚している事だった。そしてたぶん、その内ミコトと合体もするだろう。そうしなければこの先へと進む事も出来なさそうだからだ。全部、俺が未熟で、そして心が弱いからだ。だからもつと、強い心が欲しい。常にそう願っている。

だけど何時だってそうならない。まるで試すかのように毎回、世界が心を折りに来る。

一体何度、俺は苦しめばいいのだろうか。

辛い……そしてしんどい。

「ふうー……どうすつか……」

呟き、顔を枕に叩きつけてひと眠りしてから考えようとする、扉の開く音がした。たぶん、アンが入って来たのだろうと思う。今はちよつと、顔を見るのが辛いのでそのまま、振り返らずにベッドに横倒しになった状態で倒れていると、

無言のまま、近づいてくる気配がした。振り返らずそのまましていると、近づいてくる気配がぎしりと音を立てながらベッドの上に乗りと、

——そしてそのまま、ぴったりと後ろにくっついた。

背中に柔らかくもポリウムのある主張をそのまま、素肌で感じられる。少し、しっとりしているのはシャワーを浴びて来たからだろうか？ なんて事を冷静に考えていた。背中にはアンの柔らかいふくらみ、それがダイレクトに押し付けられていた。

それが彼女がどういう姿をしているのか、想像するには難しくはない。

「……」

此方が無言を保っていると、更に後ろから密着する様にアンが体を密着させてきた。裸の背中与胸が密着し、押し付けられる様に触れたそれが、挟まれる様に形を変えるのを背中で感じられる。そして更に



密着したアンが、腋の下を通す様に、腕を回した来た。そのままぎゅつと、後ろから抱きしめられる。

「……」

肌の感触を感じながらしばらく、互いに無言を貫き通した。眠気はない。このまま眠る事なんて不可能だった。そのまましばらく、互いの体温を感じとりながらこのままの姿勢を維持していた。だけど、沈黙を破る必要があった。だから、

「俺さ」

「うん」

「……実は、さ。怖いんだ」

「……うん」

言葉に詰まりながらも、それをなんとか、アンに伝える事にした。体を動かさず、少ししつとりとしたアンの肌の感触を背中に感じながら。言葉が続ける。

「君を……抱いたら、それで俺が変わってしまいそうで、今の関係が変わってしまいそうで……触れるのが、怖いんだ。ずっと君と一緒に居たいけど、触れた結果消えてしまいそうで、泡の様に溶けてしまいそうで、夢から覚めてしまいそうで……どうしようもなく、怖いんだ」

夢、そう、全ては夢。

深淵で夢を見続ける白痴の王の様に、夢を見続けているのかもしれない。壮大な冒険の夢を。だけどその中で、本当に幸せだと思ってしまうたら、

その夢が、終わってしまいそうで、  
全部消えて、普通の学生に戻って——そんなの、今更耐えられない。  
い。

考え出せば頭の中がぐるぐると回り始める。好き。怖い。大事にしたい。夢から覚めたくない。旅をし続けたい。一緒に居たい。変わりたくない。だけど進みたい。複雑な感情が絡み合って、それを表現する事が出来ない。そのもどかしさを言葉にする事が出来ない。だから言葉に詰まってしまう。

「あの、ね」

それをほぐす様に、アンが言葉を口にする。顔を寄せ、それを肩の上に乗せ、首に自分を擦りつける様に、身を寄せて来る。

「最初に……ね。リ्यूジ、見た時……は、凄く、可哀想に……見えた」

酷かった。支配人に助けられた直後の時だった。これが力になると人修羅・アンを預けられた。その頃の俺は地獄から逃げ出したばかり、安全な場所を探そうにも見つからず、そして漸く見つけたのが支配人だった。そして助けられ、アンと出会った。

「辛……そう、で。泣、きそ、う、で……だ、けど。ちゃ……んと、見て……た」

アンは、それを嬉しそうに言う。

「ちゃんと、私を……見てた」

あの時の俺は、この少女の異様な恰好と、文様と、しかし触れられない、芸術の様な美しさに言葉を失っていたのだ。この美しい、穢れの無い少女を預けられた状況に呆然とじつ、しかし生き延びなくては、という感情で溢れていた。そしてこの子も、今度こそ、絶対に一緒に生き延びるのだ、と。自分にそう言い聞かせていた。誰も助けられなかった。全てから逃げた。だからこの子だけは絶対に死なせてはいけない。

……そんな彼女は自分よりも強く、そして悪魔を殺せる實力を持っていただけに全く意味のない覚悟だったが。

「でも、嬉しかった」

アンは言う。

「私、は、まだ、意識、が……薄………かった」

ぼんやりしていた、とアンは言う。

「中に……記憶、記録、なんか……いっぱい、あった。私じゃない、もの、たくさん、あった。だけど——」

だけど、とアンが言葉を区切り、そして小さく笑った。

「リ्यूジが、見てくれたおかげで、私は……《私》に……なれた」  
そして、

「リ्यूジを見た。頑張つて。泣きそうで。でも頑張つて、少し、空  
回ってる、マイ・サマナー」

アンは、嬉しそうに、幸せそうにそれを呟いた。胸にこみあげて来  
るものがある。そしてアンは言う。

「リ्यूジ、の……背中、姿、情けない、って……人は、思う、かも、  
しれない、けど……」

言葉を強く、感情を込めて、何時もよりもちゃんと喋れるように、ア  
ンが想いを込めて言葉を放つ。その一言一言だけで泣きそうになっ  
てしまう。ほんと、別に涙脆い訳でもないのに。涙が流れそうだっ  
た。

「だから、私は、リ्यूジの、ちよつと、情けないけど、ちよつと、無  
理な、頑張つて、笑ってる……恰好付けてる、姿、が……」

アンが言葉を区切り、背中から感じるアンの鼓動が、何時もよりも  
早いのを感じとりながら、その言葉を聞いた。

「好きだよ」

その言葉を聞いて、我慢できなかつた。

アンを押しつけて振り返り、そのまま此方から抱きしめて、体を引  
き寄せて唇を重ねた。一瞬だけアンが驚くも、直ぐに応える様に目を  
瞑って受け入れた。だがそれだけじゃ足りなかつた。そのまま舌で  
唇を割り、口内に侵入し、舌先でアンの舌先に触れ、突き、そして反  
応する様に絡めて来る舌を受け入れながら唇を重ねた。

数秒間、たつぷりとティープキスを続けてから口を放し、押し倒す  
ような姿勢でマウントを取った、アンの姿を見た。湯上りで髪が少  
だけ濡れており、ベッドの上に広がっている。両腕は頭の横へと倒さ  
れており、頬は紅潮している。興奮しているのか胸が早めに上下して  
おり——服を纏っていない体が目前に晒されていた。

「そんな事を言われて、我慢できるほど俺だつて自制できる訳じゃ  
ねえんだよ……!」

「ん……恥ずかしい……けど、リ्यूジ……なら、いいよ」

腕を広げ、求める様に差し出し、アンが表情を、明確に微笑ませた。

「いっぱい、愛を、ください」

## 神州混沌行脚 XXII

押し倒したアンの首元に顔を寄せ、そしてまずはその首筋にキスする。ゆっくりと、軽いキスを重ねつつ、少しだけ、その首筋を舐める。それにアンが軽く体を震わせ、その吐息の熱の色を伝えてくれる。ここ最近はなかったが、それでも何度かチエフエイから女体の扱い方、というモノは教わっている。女性とのセックスの時、直ぐに秘部に触れればいいという訳じゃない。

性感帯は他にもあるから、まずは体に触れて、刺激し、そして性感を高める。必要以上に強く触れず、まずは体を撫でる様に擦る。性感が高まって来ればその反応は自然に体に出て来る——というのは覚えた。

だからまずはアンを気持ちよくする事から始めた。大事だからこそ、痛い思いをさせたくないし、気持ちよくなって欲しい。後は可愛い姿を見たいという想いもあった。首筋、鎖骨とキスしつつ、片手で抱きながらも片手で腹、臍の周囲を軽く撫でる様にペッティングする。

「んっ」

キスを受け、体を撫でられるたびにアンの口から聞いた事のないこさばゆそうな、しかし熱のこもった艶っぽい声が聞こえる。もう既にそれなりの熱を帯びており、目を覗き込めばそれが潤みながら何かを求めているのが解る。だけど直ぐに本命には取り掛からない。唇を合わせ、片手で腰を抱きながらも片手を胸へと持つて行く。今まで一度も触れる事はなかったアンの形の良い胸を、そうやって手の中に収めた。既に勃起している乳首が、アンの興奮を伝えてくる。

それでもゆっくりと愛撫を続ける。胸全体をマッサージする様に弱く揉みながら、掌の接触面積を広げ、そして胸の感触を味わう。腕や背中では感じていた感触でも、こうやって直接自分の手で触れてみると、まるで違う。一種の感動すら感じる柔らかさだった。手で掴め、柔らかく、少し力を入れれば形を変える。これが女のものだ、と理解させられる。そして同時に、あの子を今、自分が好きに出来てい

るといふ状況が、どうしようもなくズボンの下で逸物を勃起させる。  
「んっ、ふう、はあ」

そして胸を愛撫していけば、キスを求める様にアンが舌を伸ばしてくる。それに求める様に口を重ねながら胸を愛撫する。掌全体で押し、転がし、そして優しく擦って行く。手を動かす度に掌でアンの乳首が掌で擦れて、それにアンが反応し続ける。声が唇を重ねている間に少しずつ漏れ出し、息継ぎを求めて少しずつ、少しずつそれが押し留め切れなくなっている。体の方は、もう愛撫を始める時点である程度出来上がっていたようだった。期待されていたのだろうか？ どちらにしろ、愛撫に身を任せ、必死にキスを重ねる姿は愛らしい以外の言葉が見つかからない。

その姿を見てると、少しずつ我慢できなくなってくる。それを抑え込む様に唇を重ね、腕を胸から下げて行く。谷間の間に指を流し、そこから腹を、臍の上を滑らせ、そのまま太ももへと走らせ、そこから下腹部へと——つまりは秘部へと持っていく。

「っ、あ、はあ、リユージ、私、あ、はっ、もお」

一瞬だけ躊躇する。だが一線を超えると決めた。故に躊躇するのをやめた。懇願するような声に誘われたのかもしれない。だけどそれ以上にこの少女の事が欲しかった。彼女を完全に自分のモノにしたかった。そういう欲望に突き動かされ、アンの秘部に軽く指を触れさせる。上半身同様、裸に露出されている下半身の、その秘部は余りにもあつさりと触れられ、

既に濡れている。

それこそ秘部から溢れて垂れる程に。軽く割れ目に指をなぞらせれば、それだけでアンが目を見開き、その指を上へと持ち上げて行けば、やがて包皮の下で勃起している陰核にたどり着く。それを軽く、解放してやる様に指で弾く。

「んっ——！！」

それで絶頂を迎えたアンが、見た事の無いような表情と反応を見せた。抱きかかえる腕の中で、絶頂した影響でアンが脱力している。それでも切なそうに此方に視線を向けて来る。完全に蕩け切った瞳は

何を求めているのかが、解りやすかった。それに自分も、今更ここで止まる事も出来そうになかった。

一旦アンを解放してから立ち上がり、スラックスとパンツを部屋に脱ぎ捨てた。そうすると解放された逸物が先走りの汗を僅かに纏いながら反り返るほどに勃起していた。ここまで強く勃起できるものなんだな、とどこか見当違いの事を考えならベッドへと視線を向けられ、ベッドの上に仰向けになっていたアンが、此方へと視線を向け、股間へと視線を向けた。

「入る……の……？」

「たぶん」

「たぶん」

「初めてだから……ね？」

「ん……じゃ、試し、て、みな……きや、ね」

「そう……だよな？」

僅かに疑問形が残るが、それでもベッドに近づき、再び上に乗ってアンの姿を正面から見下ろしていた。正面には隠されていないアンの肢体が見える。白いすべすべとした肌に、ベッドに広げられた蒼海を想わせるような蒼い髪。そしてその白の中に差し込まれた、朱の色。発情し、興奮した体に宿った普段は存在しない、彼女の体の熱。それが普段にはない、色香を生み出していた。誘われるがままに前へと少し進み、アンの足の間に自分の体を挟み込んだ。

アンの股の間に入り、そして勃起させた逸物を割れ目の前に浮かべた。濡れる割れ目の間から分泌される愛液が、そして快樂に火照ったアンの体の、秘部がヒクつき、まるで誘っている様にさえ見えた。勃起している逸物を軽く割れ目に摺り寄せ、愛液を勃起したものに擦り付けて行く。龟头と陰核が擦れ合う度に悩まし気な声がアンの口から漏れ、期待するような視線を向けて来る。

だから愛液と我慢汁でテカってきた逸物を片手で握り、もう片手でアンの腰を掴んだ。それで視線をアンへと向ける。

「挿入るぞ」

その言葉に息を整えてから、アンが頷いた。

「うん……来て」

亀頭を割れ目に何度かこすりつける。その度に感じる快楽を歯を食いしばって耐えながらも、愛液で濡れているせいも、中々挿入する事が出来ずにいる。焦らず、一旦落ち着いて腰を抑えているのに使う手を戻し、それで割れ目を軽く広げた。

そうやって閉じていた秘部の中を完全に露出させ、

興奮のままに逸物をその中へと沈めた。

「っ——」

亀頭が膣の中に挿入されていく。まだ先端が入っただけだが荒い息を立てながらアンが身を軽く振る。更に腰を進めて行く。感じる僅かな抵抗を破りつつ奥へと進ませていけば、その度にアンの体が浮き上がる様に、胸を張り上げる様に反応し、満たされる様な声を口から溢れ出させる。完全に雌として自覚するような、色の籠った声だった。

誘っている声だ。

だから一切の抵抗を無視して、そのまま肉棒をアンの中を蹂躪する様に進めて行く。それが少しずつ、少しずつアンの中へと収まってくごとに、アンが体をねじらせ、よがらせ、そして声にならない声を発しながら体を大きく反らし、しかし膣に納まって行くモノを受け入れていた。

やがて、それが根元まで完全に膣の中に入り切り、逸物の根元と秘部が接触した。その状態で腰の動きを止め、一番奥にまで収めた状態のまま、いつの間にか荒げていた呼吸を軽く整えながら、アンの方へと視線を向けた。

「はあ、はあ、はあ……はあ……」

快楽に蕩け、瞳を潤ませ、そして口の端から軽く涎を垂らしながらもアンの視線は接合部へと向けられており、

「ほん、と、に……はい、ちゃ、った……」

驚くような、しかし明確に悦びの声を漏らす様に声を放った。その視線は僅かに血を流す接合部へと向けられ、それから逸物を収めている自分の腹へと向けられ、そして不思議そうに、視線を戻した。その

アンに折り重なる様に、抜けない様に腰を抑えながら体を倒して口元へと顔を寄せた。そこでもう一度唇を重ね、

「大丈夫、か？」

「すごい……ふわふわ、して……る」

確かめる様にアンが腹に触れると、それで体をびくりと震わせた。悦びの吐息を零し、それで逸物を収めている膣が、絶頂の気配に収縮するのを感じた。それで一気に余裕を無くし、意識を総動員して、まだ射精しない様に堪える。だがアンは自分の不用意な行動で絶頂したばかりか、体を軽く震わせている。駄目だ、我慢できない。

「ごめん、こんなエロ過ぎるのに我慢できるか……！」

腰を引き、逸物のカ리가ぎりぎり入り口から出ない所まで引っ張り出し、

——そこから一気に腰を叩き込んだ。

腰を叩き込んだ瞬間に感じる膣の締め付け、心地よさ、それをもはや言語化する術が自分にはなかった。ただ、単純に、気持ちがいい。そうとしか言葉を表現する事が出来なかった。好きな子を犯し、身体の一部が完全に体の中に埋まり、合一し、そしてそれでいて支配しているという状況。一突き、それで絶頂の余韻に震えていたアンの方が大きく跳ね上がり、未だかつてない嬌声はその喉の奥から吐き出されてきた。

ああ、駄目だ、こんなの我慢できない。

気づいた時には一突き目で一番奥に射精していた。子宮を征服する様に一気に射精し、それで逸物が少し楽になるのを感じてから本格的にアンを犯す為に腰を掴んで引き寄せて、腰をぶつけた。未知の快楽、感覚、手淫などとは訳が違う、別次元の気持ち良さ。好きな子と繋がっているという事実が興奮させ、頭から理性を吹っ飛ばす。何度も何度も腰をアンの中へと叩き付け、口から溢れ出す嬌声を更に引き出す様に、跳ね上がった体を片手で支え、そのまま対面座位へと無理矢理変えさせる。アンのを下半身を持ち上げて叩き落す事で何度も何度もその膣に自分の形を覚えさせるように犯しながら胸の前で揺れる胸、勃起した乳首を舌先で舐めてから軽く、甘噛みする。



「っ——あ！っ——っ!!」

声にもならないアンの嬌声が涙と共に流れ出る。そのかわいらしさに嗜虐心を刺激される。逃げられない様にその体を押さえつけながら再び射精し、腹の中を精液で満たす。それをそのまま抜かず、押し倒して上から押し潰す様に犯す。

犯す。欲しい、君の存在が。ただ、ひたすらに、君の事が愛おしく、欲しい。それを証明する様に体に自分の存在を腰を動かして刻んでいく。アンもそれを求める様に腰に足を回し、体が離れない様にしてくる。

貪る様にそのままお互いをひたすら犯し続けた。

◆  
「はあ、はあ、はあ……」

それから数時間、ひたすらアンを犯し続けた。それでもまだ、逸物は勃起していた。未知で初めての刺激、強すぎる快樂にアンがダウンしてしまい、ベッドに倒れ込んで気絶していた。それでも勃起する事も、アンを求める事も止められず、気絶しているアンの両足を脇に抱えて、再び秘部に逸物を差し込み、犯し始める。

「あ、あ、あ、っ、あっ」

気絶し、意識を失ってもなお、アンから嬌声が途切れない。気絶していても感じ続ける可愛い子に所有者を教え込む様に、気絶しているその膣の中に精液を再び流し込み、逸物を引き抜いた。

精液がまた、膣から溢れ出して流れ出してくる。白濁に濡れたアンを見れば、再び嗜虐心が疼いてくる。もっと、もっと、欲しい。犯したい。その気持ちが増え上がってくる。

「あー……確かに仕込むって言ったけど、これはやり過ぎよあの駄狐……」

聞き覚えのある声に振り返れば、部屋の入り口にベルが立っていた。何時の間にDDSから出て来たのだろうか？ふう、と何とか息を整えて言葉を口にしようとしたが、それよりも早く、ベルがストラッ

クスを脱ぎ、黒いヒモの下着を晒した。上はそのまま、ネクタイとシャツ姿で、しかしそのアンバランスさがどこか、淫靡さを兼ね備えていた。そのベルが近づき、そしてベッドの端に近づいてきた。

そしてベッドに乗ると、顔を逸物に近づけて来た。

「んー、私がこうやって奉仕するのも久しぶりね。硬さも大きさも十分すぎる程だし。あの子を潰しちゃう程だから、私も十分に楽しめようね」

そう言うのとベルが舌を逸物に這わせてきた。ゆつくりと舐め上げてから片手で横髪を抑え、それを口の中へと導いてきた。口の中で舌を使って逸物を奉仕しながらしごき上げて来る動作に、射精感を覚える。直ぐに射精したくなるも、それを堪えるが——駄目だ。先ほどまでアンと交わっていた影響で快楽に寛容になっている。

ベルの頭を押さえ、その喉の奥に射精する。たっぷり数秒間、全部射精しきるまで頭を解放せず、ベルが飲み込む音を聞いた。それから頭を放す。

「ふう、中々主張が激しくなったようじゃない、サマナー？ でもそれぐらい強引な方が丁度いいわ」

ペロリ、と唇をベルは舐めると、ベッドの上を這い、ベッドの上で気絶しているアンの横に並んだ。そしてシャツのボタンを軽く外し、ブラジャーを引っ張って胸を露出すると、四つん這いになる様に此方へと尻を向けて来た。

「さあ……最初にあの子と二人きりの時間を用意してあげたでしょ？

声を聴いていたら疼いて疼いてしょうがないのよ。そろそろ私もサマナーの太いのが中に欲しいんだけど……どうかしら？」

そう言いながらベルが軽く腰を振り、そして器用に指を使って秘部周りの下着を横へズラし、もう片方の手で秘部の中が——膣が良く見える様に、それを左右にぱっくりと開いた。

「ちなみに、新しい体だからこれは処女よ、サマナーんっ！」

言葉を最後まで放つ前に、ベルの背後から四つん這いの姿、その膣の中にいきなり一番奥まで逸物をねじ込んでやった。半分本能的に、こいつはアン程丁寧にやる必要もないと思っていた。思っていた。

故に既に洪水とも表現できるベルの膣穴に逸物を奥までぶち込み、そしてそのまま腰を動かして犯し始める。処女の証であった破瓜の血が流れ出すのを気にする事もなく、腰を振って獣の様にベルを一方的に犯す。

「くっ、あつ、こ、これよ、これ！ あ、はあ、やっぱり、サマナー、いいわ、凄く、いいわ……！」

腰を叩きつける様に、一方的に犯す様に腰を叩きつけ、それを奥の奥、子宮の入り口をこじ開ける様に押し付けながら犯していく。ベッドの四つん這いになるベルの姿を更に上から押し潰す様に犯し、ベッドに叩き落として後ろから、密着する様に獣のセックスを実践して行く。ベルが楽しむような、喜びの声を放っていく。

その姿を犯す——犯し続ける。

子宮に精を放ち、腹を満たしても、更に犯す。ベッドを大きく揺らしながらベルの口から一切、余裕の言葉を奪う様にその膣内の性感帯を逸物でごりごりと抉り、言葉を奪ってベルの理性も吹っ飛ばす。そうやってベルを犯している間に、気絶していたアンが目覚める。

「ずる、い……！」

「ごめん、我慢できなかったの」

そう言うベルを反省させるために強く突いて、その奥に再び射精してから引き抜き、起きたばかりのアンを仰向けにベッドの上で倒し、再び膣内に逸物を沈める。安心感を感じながら腰を動かし始めれば、ベルがシックスナインの姿勢でアンの上に乗ってくる。そしてどこか慣れた舌使いで接合部へと舌を這わせる。犯す度に愛液と混ざった精液の飛沫が顔に飛ぶも、それを一切気にせず、淫核に舌を伸ばして虐めていく。それにアンが息を荒げながら狂いそうな程、声を零す。

「ぎ、サマナーもアンも楽しみましょう。だって私達、レベルがまだまだ足りないからたつぷり犯して貰わないとね……♡」

その言葉にベルの体を反対側へと引き上げてから倒し、そのまま秘部と秘部を重ねた。アンを犯す様に腰を動かせば、その反動で淫核が擦れ合い、ベルの性感帯が刺激されて行く。空いている手でベルの膣

に指を突っ込んで、先ほど見つけたGスポットを指で刺激し、  
ひたすら、ただひたすら、犯し続けた。

## 神州混沌行脚 XXIII

「もうやだ、死にたい」

カウンターに言葉と共に突っ伏すと、背中を軽く叩かれた。視線を持ち上げれば、ディオニコソスがサムズアップを向けている。

「で、どっちの膺のが気持ち良かった？」

ルーチエを引き抜いてそのまま頭を吹っ飛ばしてやった。

しばらくあの世で反省してろよお前、とディオニコソスが《不屈の闘志》で甦るのを眺めつつ、もう一度溜息を吐き、カウンターに突っ伏す。自己嫌悪で軽く自殺したい気分だった。まさか、まさかだ、

「まさか俺があんな人間だとは思いませんでした……」

頭を抱えて蹲る。結局、ベルとアンを並べて、夜通し犯すのだけでは満足できず、そのままもう一晩ぶっ通しで二人を犯し続けた。覚えてたての猿みたいにひたすらセックスしてはセックスをし、そのままセックスを続けて精液で腹が膨れるまで犯し続けた。そして自分のMagが減ってきたところで漸く正気に戻れた、という始末だった。その時にはアンもベルもベッドの上で精液濡れのまま倒れていた。あそこまで気持ちいいとは思わなかったし、

それに女を屈服させる事があそこまで楽しいとは、まるで思いもしなかった。

今でも二人の喘ぎ声を、悦ぶ表情が、そして逸物で膺を貫いて犯す時の声が、表情が、感触が思い出せる。それで興奮しそうなのを無理やり精神力で抑え込み、溜息を吐く。ブラフマーがディオニコソスを店の外へと捨てて来るのと入れ替わる様に、店の入り口からアロハシャツの男が帰ってきた。

「I'm Back! マスター、ストロベリーサンデーを頼むぜ」

アロハシャツ、サングラス、短パン、脇にシーサーを抱える上に麦わら帽子という恰好だが、どこか似合っている事を感じさせるのに激しく負けた感じがした。シーサーは体を震わせるとバー内を歩き出し、気に入ったコーナーを見つけて丸まった。ダンテ同様、勝手な奴だった。その姿を見て、カウンターの支配人が呆れた表情を浮かべ

た。

「ダンテ……もう戻ってきたのか……」

「なんだ、俺の事が寂しくて涙で枕を濡らしてなかったのか？ 俺に一つ盛大なハグでも……あー、やっぱお前からはいらないわ。坊主からも戻った方がまだマシだな」

「このダンテイズムよ」

バーの中が一気に騒がしくなった。こいつ一人でだいぶ騒がしくなってくるのは、この男の特有の暖かくも騒がしい気配のせいだろう。笑いながら戻って来たアロハダンテは適当にカウンター席に座り、自分は目の前に置かれた水をちびちび飲む。自分がやった事を反省して、ちよつと食欲は激減していた。あれほど荒れるとは俺も思いもしなかった。

ベルとアンはチエフエイを連れて女子会を始めてしまったので妙に疎外感感じるし。

「というかダンテ貴様、どうやって帰ってきた」

「ん？ ああ、アカラナ回廊渡ってきたんだよ」

その言葉に支配人が動きを止めた。それに聞いた事のない単語だった。

「アカラナ回廊……あれが復活したのか？」

「現代Onlyだけだな。過去にも未来にも繋がる道は壊れてた。普段住み着いている連中も大半が消えてたぜ。今は便利な移動手段程度だったぜ」

アカラナ回廊、聞いた事のない場所だった。気になるのでCOMPを取り出し、軽くキーワードを入力して検索してみる……反応があった。悪魔業界ではそこそこ知られた場所らしく、どうやら未来や過去へと移動する事の出来る場所らしい。ただし侵入手段がルナティックでも表現できる難易度であり、根本的に利用できるような場所でもない。だが入り込めれば過去や未来へと移動する事も可能となる。

ほんと、この業界は滅茶苦茶だった。これを使えばもしかして崩壊世界を救えるのでは？ と一瞬だけ考えたが、未来も消えてた、とダンテは言ってたのだ。つまりまだ、救えるような状態ですらないのだ

ろう。一瞬だけ見えた希望が消えてしまった気分だった。

「それよりどうしたんだよ坊主。まるでこの世の終わりの様な表情をしてるぜ。まあ、世界は既に終わっちゃったんだけどな」

まるで笑えない冗談だった。背中を叩かれるも、まるで笑えない。だけど、まあ、振り返り、アンの姿がないのを確認してから、一瞬だけどうしようか考えて——この中ではまだ比較的にまともな人間の男という事もあって、ダンテに相談する事にした。ともあれ、昨晩何をしたのか、そして今、どんな気分なのか、それを口にしてみた。滅茶苦茶恥ずかしい話だが、不思議とこの男になら話せる気がしていた。

それを聞いて、ダンテは珍しく茶化すわけでもなく、口を閉ざす、

「H m m……ちよつと難しい問題だな」

ダンテは少しだけ考えてから、

「お前の仲魔や店の連中はなんて言ったか？」

「気持ち良ければそれで良くね？ って」

「ああ、まあ、だろうな」

連中、セックスをスポーツや娯楽の一つ程度にしか考えていない。おかげで相談する意味がまるでないのだ。だからここで、一番まともそうな人間であるダンテに話をするのだ。彼以外の人間はここではベルベットルームの絵師とピアニスト、それと後はスティーヴンだが絵師以外は全員童貞だった。そして絵師も今は出張中でバーにはいなかった。だから頼れそうなのは、ダンテぐらいだった。

なので何か、導きの様なものを期待してダンテへと視線を向ける。それを受けてダンテは顎髭を軽く擦りながらH m m、と物凄い綺麗な発音で呟く。

「まあ、俺もそこそこ女遊びには慣れてるからな……あんまり参考にならないぞ？」

「人間からの意見の方が悪魔より参考になりそうなんで」

まあ、それなら、とダンテが言葉を口にする。

「まず、お前はちよつとセックスに幻想を抱き過ぎだ。気持ち良くて楽しいなら別にそれでいいだろう？ 第一相手が了承してきて何も

言われてないんだろう？ だったらそこに罪悪感を感じる方がおかしいんだよ」

「ええー……」

物凄い暴論を叩きつけられている気分だった。

「いや、だって」

「いやもクソもねえだろ。相手が喜んで、自分も喜んで、気持ちの良いセックスするのはそういうもんだろ？ そりゃあ相手が嫌がったり止めてって叫んでるなら話は分かるぜ？ だけどそんな事言われたか？」

「いや、まあ、なかったけど……」

というか足を回されてがつつりホールドされたりしてた。ベルなんか滅茶苦茶誘惑して積極的に犯されに来てた。それは真面目な事実だし、ベルに対抗心を燃やしてアンも這い寄ってきていた。その姿は滅茶苦茶興奮したのも事実なのだ。

「だったら悩むほどの事でもないだろ。相手が気持ちよく、そして楽しんでいたって解るならお前はそれに胸を張ればいいんだよ。セックスするのは双方気持ちよくなって意味があるんだ。それが達成できたのなら成功したって事だろ」

それに、とダンテが付け加える。

「本当にショックを受けたのか？ 人間の薄皮一枚下がどうなっているのかはお前自身が良く知っている事だろう？」

「……」

「だから大事なものは忘れない事だ。セックスするなら自分だけじゃなくて、しっかり相手も楽しませる事。お前は悪魔じゃないんだ。ちやんと忘れず、一人だけ楽しむようにならなければそれで大丈夫だろう」

ダンテの普段の言動や行動とは違い、彼の今の発言は恐ろしく真つ当なものだった。そしてそれだけではなく、真面目に頷ける内容だった。確かに途中からは結構勢いで犯し続けてたが、それでもベルもアンも、起き上がった頃は文句を言うどころか楽しんでいたし、またやろうとかまで言っていた気がする。その事を考えれば、自分の手綱を



放してしまった事が失敗なだけで、セックス自体は悪くなかったのだ  
と思える。

まあ、初めての経験だっただけに、色々とショックが重なってし  
まったのかもしれない。

「誰だって初めてはある。それで少し暴走するのもしようがないだ  
ろ。俺も初めてデビルトリガーを引いた時は酷い事になったしな」

「たぶんそれ違う話」

すかさずツツコミを入れると、ダンテが笑い声を零す。

「ま、頑張りなよ、坊主」

頭をぼんぼんと叩かれ、ストロベリーサンデーを支配人から受け取  
ると、それを食べ始めながら声を零してくる。

「それに一度抱けば次があるからな。お前のガールフレンドも、仲魔  
も、いよいよ解禁って事だからどうせ何度も抱くんだ。今のうちに諦  
めるか慣れた方がいいぞ」

「待って、最後に爆弾発言を置いてかないで」

ど、どういう事だダンテ！ 答えるよダンテエ！ と声に出すが、  
ストロベリーサンデーの世界へと旅立ってしまったダンテにはもは  
や、その声が届かない。完全にストロベリーサンデーの世界へと突入  
している。このアロハほんと役に立たねえなあ！ と評価している  
と、COMPから仲魔の声が聞こえてきた。

『主殿よ、性交は最も簡単な力を高める為の儀式だ。それにサマナー  
はどうやら膨大なMagを生み出し維持できる体質の様だ』

「つまり」

『長時間交わる時間さえ確保できれば、強力な悪魔を相手にせずとも  
レベルだけであれば双方向の交わりで強くなれるだろう。アン殿が  
初を頂いた今、女性陣にはもう遠慮する理由がない。それ以外でも性  
交渉は魔術との関わりが深く、悪魔によつては交渉として要求する場  
合もある』

「知りとうなかつたわそんな話……」

溜息を吐きながら頭を抱える。とはいえ、ダンテと話したおかげで  
気分は比較的になつていった。少なくとも罪の意識は感じない程

度に。気持ちいいのなら、気持ちが良い程度で考えておけばいい。まあ、結構インパクトの強い初体験となってしまうが、それでも思い出に残るって考えればいいのだ。そう考えれば良い。チェフエイが部屋の角から女の顔で此方を誘っているのはこの際、無視する。今はとてもじゃないが、そんな気分じゃない。

それに今、漸くレベルが揃った。

レベルが77のラーマ、ミコト、黄龍、チェフエイ。レベルが74まで上がったアンとベル。この程度のレベル差であればほぼ誤差のラインだ。レベル差が5あれば流石にまたレベルを上げる事を考えたが、これであれば問題はない。そして自分も、セックスをした影響でレベルが1上がってレベル78になっていた。後2レベル程上がれば自分もレベルが80代になるだろう。

後一週間ぐらいセックスしてればレベルが上がりそうな気配がある。とはいえ、そんな事している暇がないのだが。まあ、ガイア連中が専用の性魔術を鍛錬した巫女を保有する理由が良く解るものでもあった。気持ち良くて、楽しくて、それで強くなれるのであればやらない理由はないよな、と思う。

手段だ。手段の一つとだけ、思っておこう。

それにそもそも、俺はレベルが上がっても今更、恩恵が薄いだろう。俺のレベルが上がっても使役できる範囲が広がる以上のものがない。

だから一旦、情事の事を忘れておく。チェフエイに関してはその内、抱かなきゃ拗ねそうだなあ、と思いながら。

「次の扉……大破壊って話だけど。何を持ってばいいか解る？」

その言葉に支配人が渋い表情を浮かべるが、即座にそうだな、と言葉を零す。

「大破壊……もしそれが私の思った通りの世界になるのであれば、それは二段階のステージで構築されている」

「二段階？」

その言葉に支配人が頷いた。

「二つ目は最初のまだ文明のあった頃。カオスを象徴する自衛隊のクーデター。そしてロウを象徴するアメリカ大使館。この二大勢力

を中心にニュートラルを象徴するレジスタンス勢力の三つ巴の戦いだ」

「また争ってる……」

カオスとロウ勢力、常に戦い続けないと満足できないのだろうか、連中は。いや、或いは一方的にロウ……というよりメシア勢力が排他的なのだろう。聞いてみた感じ、ガイア勢力は何時だってそれをメシアが許容できるのであれば、ガイアに含んでも良さそうな感じがあった。少なくともそういうのを受け入れられるからこそそのガイア、という感じはあった。

ただメシアがガチキチの終末前提思想な上に全ての宗教思想に対して排他的なのが悪い。

つまり存在そのものが割と終わっているという悲しみ。

「ああ、そしてこの戦いはICBMが東京に落ちる事で終わる」

「マジかあー……」

「発射するのはロウ勢力——というよりメシア教だ」

「言葉も出ない」

ベルたちがガイアやメシアを説明する時、何で連中がキチガイであると良く表現しているのかが解った。確かにこれはキチガイの所業だわ、と納得するしかなかった。なんでいきなり東京にICBMをぶち込む必要があったのだろうか。

「そして続きはその30年後、ロウ勢力がカテドラルを東京湾の上に建築した。その周辺を舞台にカオス勢力とロウ勢力が争い、大洪水で地上が一掃されたり」

「地上滅んでる……」

「後はそれら全員をザ・ヒーローが皆殺しにする戦いだっただな」

「強い」

支配人の話を聞き、体を起き上がらせ、腕を組み、考える様に天井を見上げ——そして視線を戻した。

「なんだこのキチガイ共……」

ICBM落として大聖堂建築して大洪水で地上を滅ぼすっていったい何事だろうか。マジで連中一回は終末を経験しないと駄目とか、

そういうルールでもあるのだろうか？　なんとというか、話が通じる通じないとかそういう次元を軽く超越している予感しかなかった。

「まあ、ベルベットルームを拠点に活動すると良いだろう。アレは時の流れに縛られない。ICBMも大洪水も30年の時もベルベットルームで時間を進めれば問題なく到達できるだろう。恐らく世界の記録、その取得完了に必要なのは物語をその区切りまで進める事なのだろうと私は思っている」

つまり、ICBMや大洪水の対策を事前に考える必要があるのだろう。その事実を、軽く頭を掻き、そして溜息を吐く。進む先は最初、こことは違って文明のある現代らしいし、その間は特に生活は心配する必要がなさそうだ。問題はICBMが落ちた後、支配人が説明する所ではどうやら今の崩壊世界よりも酷い状況になる様だった。

その事を考えたら、事前に物資やアイテムの類を詰め込んでから出発したほうがいいのかもわからない。それにあんまりのんびりやっていると、一人だけお預けを喰らっているチエフエイに襲われかねない。なるべくラーマとミコト復活の時間を稼ぎたいが、それを待っていた所で世界がまた未定義に飲まれ始めても困る。

行動できる時に行動するべきだろう。

それを考え出すと、自然と前向きになれる。

「……うん」

よし、と呟く。やる事が見えると自然と冷静になって考えられるのは、ある意味職業病かもしれない。もう既に自分も、超一流と呼べるだけの実力を兼ね備えたデビルサマナーだ。何時までもぐだぐだしている訳にはいかない。セックスも道具の一つだ、そう割り切るしかない——アンが相手の時以外は。

だから何が必要になるのかを考える。まず崩壊する世界でバックアップがベルベットルームだけの事を考えると、食料と弾薬などを大量に持ち込むのが良いだろう。それ以外にも交渉用の宝石、スキルカードも欲しい。

とりあえず、レベルは揃えたのだ。次の世界へと移動し、この世界を再生する為の作業を始めたい。ラーマとミコトが死亡しているが、

危ない所へと近づかなければいいんだ。レベル100を超えた悪魔の相手とかは、ザ・ヒーローとかと呼ばれる奴に任せればいい。そう、帝都の時みたいに関わる必要はないのだ。

そして準備が終われば——次の世界へ。

## 第五章 運命を変える為に必要な事 大破壊

出発の朝、ステイヴンが出てこねえなあ、と思ったけど既に仕事は完了しており、気が付いたらストレージの中にアップグレードマニユアルが追加されていた。どうやら今回持ち込んだデビルソース等でルーチエ&オンブラ、そしてガンナーズブルームを強化してくれたらしい。ガンナーズブルームは動力部分とフレームの大幅な強化を行って飛行制限を排除、成層圏までぶち抜いて行けるパワーを手に入れた。

そしてルーチエ&オンブラは神話級の存在の素材を利用する事で全体的に強化された。今までは魔人クラスの人間が使用しても壊れない、連射の利くハンドガンという形だったが、それだけではこれらの戦いについて来れない為、全体的なオーバーホールを行って強化された。強度、連射力、対応弾種、全てが強化された。今までも人間が振るう事の出来ない武器だったが、その怪物つぷりに拍車がかかった。更に、使用者のMagを吸い上げる事で純粋な破壊力が上昇する様になった。

メインウエポンが銃であり、これからも使い続ける前提なら武器の強化も必要であろう、という事でデビルソースを使ってステイヴンが強化してくれたらしい。そのおかげでこれからは上位悪魔相手に通常弾で十分なダメージが叩き込めそうになった。それにラーマがDYING中でもあるので、それに合わせて再生阻害弾を幾つか納入して貰った。撃ち込めば魔に属する存在限定で回復魔法や再生能力の類を一時的に無効化させる事が出来る。

なお、材料はラーマの髪の毛である。ちよつと切らせて貰った。

そう言う事でラーマ、ミコト死亡状態で再び日本の最北端、つまりは現在の世界の最北端へと戻ってきた。そこから北にはまだ、世界が存在していないかった。

「……少しだけ浸食してるな」

「そう、なの？」

「まあ、普通の人には解らないかな」

自分だからこそわかる様なものだ。前よりもほんの少し、気付きもしない程度だが世界の終わりが近づいている。この感じだと三カ月もすれば日本を削り始める感じだろうか？ まあ、今まで通りのペーパースなら余裕がある。ただあちらの世界では30年の時間が必要となるらしいし、その事を考えたら微妙……だろうか？

どちらにしろ、やるかやらないかだ。そしてやる、と決めたのだ。だったら足を止められない。

世界の終わりから目を離し、視線を背後、モニメントの代わりに設置されている世界の扉を見た。そこに刻まれている大破壊というタグを確認し、ふう、と息を吐く。これを抜ければ新たな世界に到達する。だから深呼吸をして、それを抜ける準備をする。出た先はどうなっているか解らないので、ブルームを横に浮かべ、ルーチエ&オンブラを両手に握り、十束剣を背負う。横を見れば、アンがサムズアツプを向けてくる。

「私も、いけるよ」

「うっし」

セックス以来、アンも足りなかった何かを補充したのか、言葉が前よりも少しはつきりしてきた。なんとというか、欠如していた人間性を再獲得している？ 或いは定義されている。そういう感じだった。まだ口数は少ないし、無表情というかクール系？ みたいな雰囲気がある。だけど前よりも楽に喋れる様になった、というのは見えた。

「いい、リユージ」

拳をアンが持ち上げてくる。銃を握ったまま底を見せる様に拳を持ち上げ、横に並んだアンと拳の底をぶつけ合った。それで勇気を分け与えて貰う。

そのまま、目の前の扉を蹴り開ける。そしてそれを抜けた。何時も通りの光と世界を超える感覚が包んで行く。だけどレベルも上がり、そして二つの世界を超えてきた。この程度で揺れる程、弱くはなかった。

つまり、慣れた。

扉を広げた先に広がっていたのは——宇宙だった。

無限に無限を内包し、その無限が無限を生んでいた。その間を一つの道が繋がっている。それこそがこの世界の扉だった。無限に存在する宇宙に設置された、専用の通路。それを渡る為の入り口。ある意味、アカラナ回廊と同種の存在なのかもしれない。それが今の自分には良く見えた。

だからそこで足を止めて、振り返った。

そして見た。

「なんだこりゃあ……」

振り返った先に存在するのは自分が通ってきた扉だった。だがそれは虫食いの様に所々欠けていた。一部が古く、継接ぎの様に別々のパーツで繋げて応急処置している、という感じの扉だった。いや、まさしく丁度自分の世界の状態でもあった。それが良く理解出来てしまった。

「瀕死、じゃねえか」

見えてしまった。ステイヴンや支配人、あのバーに集まった連中の視点が。超越者の視点。彼らは何を見て何を想って、どうして助け合う事を選んだのかを。これは駄目だ。これをそのままにしてはおけない。これは既に死んでいる。それを生きている心臓をコピーして、動かしている様なものだ。既に致命傷だ。この世界は致命傷を受けて、そこから蘇生されている。

「——」  
それを蘇らせたのが同時に、自分であると直視させられた。

「リユージ、大丈夫？」

「ああ、いや、大丈夫だ。ただ、サボれないなあ、って思ったただけだから」

サボれない。見てしまった。理解してしまった。強くなって、自分の肉体はそうでもないけど……この性質と、才能は育っていた。だから嫌でも理解してしまった。自分が一体何を蘇生しようとしているのか。宇宙だ、宇宙を丸ごと一つ再生しているのだ、自分は。まだ無



限の中の一滴しか再生していない。

だがこの宇宙は今、蘇っている。抗っている。

宇宙がまだ生きたいと叫んでいるのを感じてしまった。

「そうか、お前も生きてるのか……」

星だけではなく、この宇宙そのものも呼吸している。その妙な事実にどこか、不思議な感触を感じつつも背を向けた。まだ、旅路は始まったばかりなのだから。まだまだ、世界には足りないものが多すぎる。それを取り戻す為にもまずは、この道を抜けなければならない。少しだけ心配そうにしているアンに視線を返し、微笑んでから元の道を進み始める。

その先にある、扉へと向かって。

近づけばその向こう側の世界へと引つ張られるのを感じる。その流れに乗って、そのまま、世界を、宇宙を超えて新たな世界の扉を抜けた。

一瞬の光、そして浮遊感。それから全てが消えて、そこから新たな世界へと繋がる。目を開ければ光と共に新たな世界へと繋がった。数歩、歩き出す様に目の前の確かな大地を踏みしめて前に出た。片手で光を遮る様に影を作り、そして光が消え去った所で漸く、周りの状況が見え始める。

ゆつくりと、ゆつくりと、光が消えて周りの状況が把握できるようになってくる。

そして見えてくる、周囲の風景が。変わりゆく景色はカーペットの敷いてある足元を見出し、そしてその上に自分を立たせている。そこで漸く、自分が何らかの建物の中に居るのだという事を理解させられる。両手に銃を握った状態で出現した所で、軽く周辺へと視線を向ける。

周囲に見えるのは大量の天使だった。

通路を警戒する様に浮かび上がり、そして警備をしており——此方が突然出現した事実、完全に動きを停止させた。自分も、そしてアンも、突然の事態に思考停止をして、ふう、と息を吐きながら片手に手を当てる。

「よつし、誰でもいい。なんで扉がこんなところに通じていたのか、それを説明してくれる奴はいないのか。前回まで誰もいない所に通じてたじゃん!!」

「ご機嫌斜め、とか?」

「扉が?」

「うん」

「ご機嫌斜めじゃしようがないかなあ……」

ふう、と溜息を吐いてからこめかみを軽く揉み、そして視線を近くのパワーへと向けて、その肩を軽く叩く。

「へーい! ちょっとした迷子だよ! 気にすんなよ! 今出ていくからな! じゃあな!」

「ばいばい」

手を振って去って行くこうとするが、天使パワー、ヴァーチャー、そしてアークエンジェルが道を塞ぐように取り囲んできた。素早く両側へとルーチェ&オンブラを向け、アンが蹴り出せる様に片足を持ち上げて構えた。剣が、視線が、そして発動待機にされている魔法が全て、自分たちへと向けられているのを感じる。

「魔人……!」

「それに高位サマナーか! 貴様! ここがどこだか解っているのか!」

「いや、ほんと、解ってないんだよ。突然放り出されたから。はは、ほら、全部扉君が悪いからさ」

「何を言ってるんだこいつは……どうやって入り込んだ! 答えよ!」

「いや、殺して頭の中を読んだ方が早い」

「その魔人も素体は良い、良いぼた——」

言葉が終わるよりも早く引き金を引いた。ルーチェ&オンブラがクソを口から吐き出そうとした天使の頭を一撃でミンチにして吹っ飛ばしてやった。それに反応して連鎖する様に他の天使が行動開始しようとするが、それよりも此方が引き金を引く動きの方が遙かに早い。一瞬で素早く銃弾を連射させ、挟み込む天使の頭を全て綺麗に動

く事もなく吹っ飛ばし、全て即死させる。

「あー……やっちゃった……」

片手で顔面を抑えると、アンに首根っこを掴まれて、ずるずると引きずられて移動を開始する。

『開幕から腹が痛い程笑わせて貰ったんじやが』

『ごめん、サマナー。私も笑ったわ』

「お前ら……」

アンに出口へと向かってずるずると引きずられつつも、追いかけて来る天使の姿を目撃するのでそれを射撃して頭を吹っ飛ばし、殺す。なんなんだこの天使の巢は、とちよつと辟易しながらしゃーない、と気分を入れ替えて立ち上がり、復活する。自分の両足で立つと、アンがこつちへと視線を向けて来る。

「もう大丈夫?」

「もう大丈夫」

言葉を吐き出すのと同時に横に蹴りを入れて突っ込んできたヴァーチャーをアンが蹴り飛ばした。その姿が床や壁に届く前に蹴りの衝撃でミンチになって吹っ飛んだ。俺、この子を良く一方的に犯し続ける事出来たよな、とその破壊力を見ながら思える。まあ、自分の前では可愛い娘だから一切問題ないよな! とも思えてしまうあたり、本気で恋をしていると思う。

それはそれとして、天使が余りにも雑魚過ぎて話にならない。

どれだけ高位天使であろうとも、そのレベルは一桁しか存在しない。銃を撃つ必要もなく、それをストレージに投げ込んでから蹴りと拳だけで対応しても余裕だった。故に装備を全てストレージの中へと格納してから、迷路のように入り組んだ通路を抜ける——のが面倒になってきた。

「もう脱出していいな!」

「えい」

タイミングを合わせて二人で壁を蹴り飛ばし、そのまま小規模異界化していた空間を出口まで無理矢理ぶち抜いて作成した。建物の外へとそのまま素早く脱出し、出た所で振り返る。

「アメリカ大使館——！」

日米戦争に発展しちゃう——！ と、心の中で叫んでいるとチエフェイとベルが大爆笑しているのが聞こえて来る。お前ら絶対に近いうちに笑った事を後悔させてやるからな！ と誓いつつ、逃亡する為にカメラにも記憶にも残らない、超人と悪魔特有の超スピードで大地を蹴り、

一気に離脱した。

◆

「H m m m ……1999X年か」

「ダンテの、真似？」

「真似」

あのイケオジ、仕草が日々格好いいので、その動きとか仕草とか、ちよつと盛り上げ方とか真似、というか参考にさせて貰っている。あの陽気な感じは自分に一番足りないものだと思っている。まあ、せめて、少しは明るくしていないとやってられないというのも事実なのだが。それはともあれ、

時は1999X年の東京だった。どうやら20年近くタイムスリップしている世界だったようだ。マツカではなく円がまだ機能している時代でもあった。正直な話、また文明的な生活が出来る上に、現代寄りな世界だったようだからかなり安心している。

『間違いないわサマナー。ここはICBMが落ちる世界ね』

『メシアが酷すぎると噂の』

『本当にすまない……』

まあ、部下が勝手にキチガイになる事は鳩にさえどうにかできるものでもないのだ、そこは普通にしゃやらない、と慰めておく。それよりも重要なのは今、ここで自分たちが何をするのか、という事になる。とりあえずはアメリカ大使館から大きく逃亡して、井之頭公園まで逃げてきた。此方は妖精の異界は展開されていない、普通の公園になっていた。腰を落ち着けるには丁度よい場所だった。

とりあえずは、この世界に関して色々整理する。

「まずは空気中の M a g が薄いな」

「お腹が、すいちゃう……ね」

『寧ろこれぐらいが本来は普通なのよ。私レベルの悪魔が地上に降臨するには本来、数千人の犠牲が必要ってレベルよ？ 場合によっては国家レベルの犠牲だったりもするわ』

『まあ、ゲートパワーが足りぬのお。妾らを召喚した所で M a g 不足と G P 不足でまともに顕現する事も出来ないじやろう。素直にサマナーらと鳩のみでどうにかするのが良いじやろうて』

『我も手伝いたいが、天使がいる以上、私の扱いは気を付けると良い』  
『場合によっては全メシアンから最優先目標にされる場合があるな』

まだ、悪魔が堂々と地上に出現出来ない世界。その為、根本的になりソース等が足りずにいる。だからこそ、生身である自分たちの身が今の状況では戦力となっているのだろう。なんというか、どうやらこの世界、魔界とまだ本格的に繋がっていない為、人間を媒介として召喚されるか、或いは大量の M a g をどうにか準備し、それで維持するしかない。

ゲートパワー、つまり G P が低いとはそういう事だ。

門でもあり、維持コストでもある。これが低いと大型の悪魔は地球に出現できない。なお崩壊世界はそれが完全にぶっ壊れて魔界と直通しているレベルになるので、高位悪魔の顕現とかにはまるで困らないのだ。嬉しい反面、悲鳴しか出てこない気持ちも非常に良く解る。

井之頭公園のベンチに座りながら、溜息を吐く。周辺では低 G P 故にちよつとした低位悪魔が溢れ出る状況となっており、他の人には見えないクイックドロウで瞬殺してストレンジに銃を戻した。まだピクシーやガキ辺りしか出現していないが、それでも一般人からすれば致死性だ。見かけたらとりあえず殺す事になっているが、

「どーすんだ、これ」

「ん、んー……？」

このまま放置してれば I C B M が落ちてくる。G P の上昇によってここが崩壊した世界になる。だから行動方針を組み立てなきゃい

けない。とりあらず、ある程度の流れをベルが知っているらしい。それに合わせて行動するか否か、という所になる。

『まあ、放射能が通じるレベルでもないんじゃないの。ICBMスダマが落ちて来るのを見過ぎして、爆心地で記念撮影してもいいんじゃないぞ』

「つぶやいたーが炎上するってレベルじゃねえな」

『ちなみにICBMの落ちる理由はさっきのアメリカ大使館に居るトールマンという男が原因よ。回避するならサクツと殺せば解決ね』  
「……」

ベルにそう言われ、少しだけ悩む。果たして自分がその手段を取っていいのか、どうかを。それに首を傾げるが、ベルが声を零す。

『まあ、今すぐ判断しなくていいわ。大体の流れを私が覚えているし、状況が迫ってきたら教えるから。それまでは文明社会を楽しめばいいわ』

「食べ歩き……いー」

アンが目を輝かせている。成程、確かに今の状況なら好きに移動して好きに食べて回る事も出来るだろう。それこそ北海道へと飛んでジンギスカンを食べるとか。そう考えると帝都から離れられなかった時よりも自由かもしれない。

『まあ、この世界はWW2でヤタガラスとクズノハが壊滅しちゃったからね。ぶっちゃけ、今の状況であれば止められる存在はないわよ？』

「んー……とりあえず適当なホテルの部屋を借りて、それを拠点にするかあ」

とりあえず、ICBMをどうこうする、とはあまり考えない。どうせ、俺は衝動で動く男なのだ。深く考えた所でその時の衝動で全部投げ出してしまおう。だったらその時まで、好き勝手やってればいいと思う。

だから、とりあえずは拠点確保だ。金は腐る程あるのだし、最高級ホテルのロイヤルスイートを借りたい。《マリンカリン》でも使えば大体一般人はどうとでも騙せるし、そのノリで楽しもう。

崩壊前の東京観光を。

## 大破壊 Ⅱ

「もぐもぐ。美味しい」

「たーんとお食べ」

今川焼をはむはむと小動物らしく、しかし凄いペースで食べているアンの姿を見て苦笑する。結局、東京から離れる事はなかった。その代わりに、東京内を色々と回って、買い物とか食べ歩きをしている。あまり、扉から離れるのが嫌だという事もあるが、拠点をパークハイアット東京に決めたのだ。新宿に近いという理由がある。

一番高い所を適当に頼んでみたら一晩100万円を超えとかいう超驚きの事実である。流石超高級ホテルとでも言うべき貫禄が存在している。とはいえ、既に崩壊世界では円なんて概念、マツカに駆逐されかかっているのでケツを拭く程度の価値しか存在していない。だから自分も基本、もう円は持っていない。その代わりのマツカであり、

その代わりの貴金属や宝石類である。

帝都からはクラリオン戦の報酬でちゃんとプラチナインゴットを大量に貰っているし、それ以外にも宝石類も悪魔交渉用に大量に持ち歩いている。表世界では少し珍しいかもしれないが、悪魔業界では拳サイズのダイヤモンドは見かけるのだ。ノッカーやノーム、それ以外にも魂合や魔晶技術によって宝石と宝石を融合して大きくしたり、儀式用に純度を上げたりという事は割と簡単にできる。

それを売れば、数千万ぐらいの金を用意するのは簡単だ。高レベルサマナーは金銭感覚が容易く壊れるという話はよく聞くが、それをよく理解する出来事だった。プラチナとダイヤモンドを幾つか放出した金でパークハイアットの一番高い部屋をしばらく貸し切りにする事にした。少なくとも数週間は泊まり続けても浪費して遊べるだけの額を用意するのは簡単だった。

帝都ヤタガラスとクズノハ支払い様様である。

そういう訳でベルベットルームも無事に部屋に開通したので、遠慮なく外へと飛び出す事が出来た。この東京は帝都の時よりも時代が

進んでいる。何せ、1999年なのだから、スマートフォンなどは無くて、少しずつコンピュータという概念が普及し始めていた時代でもあった。

あの帝都よりも発展した街並み、そして多くの文化が海外から入り込んでいる。基本的に食べられるものや種類が今までは限られていたが、ここに来れば好きなレストランに入って食べる事が出来る。今川焼とか初めて見るアンにとっては珍しいものばかりの景色だったのだろう。今川焼を食べ終わると、今度はたこ焼きの店を見つけ、そっちの方を指さしている。

そしてそんなアンが好き。つつい財布の紐が緩んでしまう。甘いの解っているが、つつい緩んでしまうのは正直、しょうがない事だと思っている。だから許してほしい。それにしてもアンの写真が撮りたいから、カメラでも購入すべきだろうか？COMPのカメラ機能でもいいが、やるなら本格的な物が欲しい。金ならあるのだから、別に良いものを揃えても問題はない筈。

「たこ焼きかー。俺も食べるのは久しぶりだな」

「美味しそう」

店の外側のカウンターから8個入の1パックを購入し、前に置いてあるベンチに座って、パックを広げる。焼きたてで熱いたこ焼きの上では鰹節が躍っているのが見える。その普通の料理では見えない現象に、アンがおお、と声を零し、つまようじを刺して口へと運ぶ。

刺して口へと運ぶ。

「カリカリ……ふわふわー」

「外国人はタコが苦手な人が多いらしいんだけどね。んむ、ありがとー  
あーん、をして貰って口の中にたこ焼きを放り込んで貰った。別に、焼き立てで熱々だろうが、それでも超人ボデイからすれば微々たる熱量だ。火傷させたかったらアギダインでも持って来いという感じだった。たこ焼きを食べて楽しんでいると、アンが口を雛の様に開けて、待っているのが見えた。何を求めているのかはわかるので、その口の中につまようじで刺したたこ焼きを放り込んでやった。

「幸せ？」



「幸せ」

ふふ、とアンが笑った。普通の少女の様な、花の咲くような笑みだった。それを見るとああ、俺はこの子が好きなんだなあ、と再確認できてしまう。たったこれだけでやる気が沸き上がってくるのだから簡単な男だ。

「……あの、たこやき一つ」

「食ってみるか……」

「一パックください」

アンとたこ焼きを食べさせあっていると、そんな声が周囲から聞こえてきた。先ほどから視線は感じていたが、どうやら美味しそうに食べるアンに釣られてお客さんが入ってきた様だった。少し前までは暇そうにしていた店員が忙しそうに動き出すのを見て苦笑しつつ、つまようじを口元へと運んで、啜えた。こうも平和だと流石に少し、戸惑う。

ここ最近はあるまりゆっくりしていなかったのも事実だ。クラリオン戦からの流れ、傷や体力の回復を終わらせたらひたすら悪魔の相手ばかりをしてきた。そうなると漸く掴んだ、つかの間の休息という奴だろうか？ 今しばらく、命の危機レベルの悪魔は出現しないそうだし、そう考えたら心もある程度安らげる。だがそれはそれとして、  
「将来、こうやって一緒に居られたらいいな」  
「うん」

将来の事。今まで、あんまり深く考えていなかった。だけどそろそろ、この平穏の中、自分がすべきこととは別に、したい事を漸く、考え始めていた。

きっかけは恥ずかしいけど、アンとセックスした事だった。アレで色々踏ん切りがついたような気もした。確かに自分には自信がないのは事実だ。だけどアンを求め、そして同時に求められた。だとしても、もしもその責任を背負わなければならないだろうと思う。少なくとも、もう逃げるのはダメだ。彼女なしでは自分も、到底まともに生きていけそうにはない。

だからなあ、と思う。

「お前と一緒にこの先も生きていきたい」

「私も、リユージと一緒に、いいな」

「んんんっ!!」

唸り声が聞こえるので、振り返ればたこ焼き屋の店員が壁を殴っていた。どうしたんだ一体……？　と思いつながら食べ終わったたこ焼きのパックを膝の上に乗せて、手を繋ぐ。そのまま、何をすることもなく食べ終わった余韻を楽しむ様に肩を合わせ、並んで座っている。

「んんんっっ！」

またどこからか唸り声が聞こえた。振り返ればたこ焼きの人が両手で顔を覆っているのが見えた。どうしたのだろうかこの人は……？　まあ、きつと疲れてるんだろう。そう思いながらさて、と呟く。

「次はどこに行こうか」

「んー……お洋服、でも、見る？」

「そうすっか」

現代ものの服装はシンジユクで調達している。だがそれとは別に、ある程度のファッショントレンドというモノも取り込んでおきたい。一応、クズノハから認識阻害の符というモノを貰っていて、どんな格好をしていても違和感を抱かれないという効果のあるものだ。これのおかげでアンはスパツ丸出しルックだし、俺も制服と外套のキメラルックを維持できている。というかこれに馴染み過ぎて結構着替えるのが手間なのだ。ちゃんと洗濯とかはしているのだが。

とはいえ、馴染める服装を探すのが一番だという話もある。ちよつと、ファッション店を覗くのも悪くはないだろうと思う。そう言う考えから新宿の服飾店を軽く見て回ろうとしたが、

ちよつと、空気が悪くなっていた。

そうやって見かけるのは銃を持った男たちだった。その服装を見れば、一瞬で自衛隊であるのに気付く。個人的に自衛隊の評価は高い。何せ、あの崩壊世界で最優先で民間人を守ってくれている人たちだからだ。だが今の彼らは……自分が崩壊世界で知る様な、格好良い姿ではなかった。どこことなく険悪で、周囲の人間を睨んでいる様な、格好悪い姿を見せていた。

「なんだあれ……」

足を止めて、周りを睨んでいる自衛隊の姿を見て眩いた。小銃で少し、周囲を威嚇している様にさえ思える。新宿には似つかわしくはない、そして自衛隊の見たくはない姿を見てしまった気分だった。この世界、全体的に人間が屑になっっている様な気がする。いや、或いはそれが悪魔から干渉を受けた結果だろうか？

自分の世界と比べて、良心となるストッパーが一切存在しなかった世界……の様に思える。悪い方へ、悪い方へ人が進んでいく。そうでもなければいきなりICBMが落とされてくるかよ、としか言えない。

……まあ、関わらなければいいだけの話だ。

「なんで、誰も、銃の事を、言わない、の？」

「……んー？」

そう言えば自衛隊員が銃をぶら下げているのに誰も文句を言っていない。というか遠巻きに怖がっているだけ……じゃない、何らかの力が働いている？ 首を傾げ、流れを魔力とMagの流れを見るのに切り替える。ついでにアナライズし、相手の力量を調べる事にすれば——驚く事にレベルがぎりぎりニケタ存在していた。魔力の気配を発する物品を懐に収めている。

「……同じもんか？」

「お札？」

たぶんそれ、とアンの言葉に答える。たぶん何らかの道具で認識を阻害しているのだ、今の姿を見ても違和感が少ない様に。

『ああ、そう言えばゴトーなんて軍人がクーデターを予定してたわね。その下準備じゃないかしら？ 確かカオス勢力よ』

「お前、そう言う事は先に言えよ……」

『ごめんごめん、どうせ放置しててもザ・ヒーローが始末しちゃうから』

「軍人ぶち殺すのかよこえー……」

余りにもアグレッシブじゃないだろうか、それ。そんな事を考えながら自衛隊の見える場所から去ろうとしたら、

「おい、なんだその髪色は！」

自衛隊の男がどうやら、アンを見つけてしまったらしい。まあ、物凄く可愛いし美人だしそりゃあしゃないわ、目が行っちゃうよね！と納得するが、最初に指摘するのはアンの髪色だった。ゆつくりとアンを指さしながら近づいてくる。下品な笑みを浮かべているのが気に入らない。

「んー、大和撫子なら黒髪が当然だろう？」

「そんな髪色で歩き回っていて恥ずかしくないのか？」

「俺達の相手——」

言葉が終わる前に三人纏めて顔面を殴り飛ばす。数メートル軽々と吹っ飛び、回転しながら地面をバウンドし、そして再び回転しながら道路に飛び出す姿を見て中指を立てる。

「ロウもカオスもまず犯す事しか脳味噌にねえのかよお前ら!! 根本的に同じかよ!!」

中指を突き立てながら転がった自衛隊員共へと視線を向け、頭を揺らしながら起き上がろうとする姿を見て、連中が起き上がるよりも早く、トラックが道路を走って隊員どもを轢き殺してミンチにした。

「おおー」

「うわあ」

周辺に血肉が飛び散り、腕やら内臓やらが辺りに散乱する事で悲鳴が勃発し、一瞬で新宿の中心部がパニックに包まれる。あちゃあ、と声を零して頭を抱える。殺っちまった、と。しばらくは平和に過ごすつもりだったのに、これでは自衛隊に喧嘩を売ったようではないか……。

「とりあえず逃げるか」

「とーぼー」

「シヨッピングはまた今度だなあ」

苦笑しながら絶叫する人々の間に紛れ込む様に逃亡する。この時代から監視カメラはあったっけ？ と軽く首を傾げながらとりあえずはここにはいられない。一旦引き上げよう、という事でパークハイアットへと向かって逃亡する。

◆  
「ふう、とりあえず水面下では地雷が大量設置されているという事実は非常によく理解出来た」

最高級ルームのプレジデンシャルはもう、一つの家というレベルで設備が整っている空間だ。それこそVIP用の部屋だから、ある種当然と言えば当然だ。一晚100万という金額を消費するのにふさわしいだけの設備や空間が容易されており、部屋全体が品のある風に整えられている。ぶっちゃけ、嫌いじゃなかった。避難する様に戻ってきたところで、ソファに座り込む。

「はあ……まともにおでかけさえもできないな」

「でも、平和だったね」

「ああ、崩壊世界と比べるとな」

最近の四国やホツカイドウ情勢と比べると、やっぱりどう足掻いても平和とを感じる。ICBMが落ちて来たらその限りではないが、所詮はICBMだ。どうせ威力が《フレイダイン》程度と考えれば、俺でも素で受けて耐え切れるレベルの破壊力だ。自分で言っていてちよつとこれは悔しい。本当に人間止めてるわ。

しかし解った事がある。ソファに座り込み、だらり、と背もたれに倒れてつつ、

「とりあえず、またロウとカオス勢力が馬鹿やってるのは解った。ガイアーズは居るのか？」

『この世界、ガイア教徒はいないのよねー。その代わりに完全に悪魔で構成されたカオス勢力がメシア教によって統一されたロウ勢力と戦う事になってるわ。この戦いで理解しちゃったのよ、人間という生物を運用する効率の良さと可能性の広さが。だから次回から人間をたぶらかしてガイアを設立したのよね』

「ほんとクソだなお前らー」

『ぐうの音もでない』

つまりICBMが落ちて来るのもこのとばっちりを受けたという

部分があるのではないだろうか……？ カオス勢力とロウ勢力が根本的にクソであるというベルたちの発言の根拠、その意味を漸く理解してしまった。とはいえ、今の状態ならまだまだ雑魚がたくさんいるだけだ。ここで俺が動き出してトップ連中を始末して回れば、

『ICBMは落ちないわね。その代わり、ペルソナ使いが出現する世界に続くわ』

成程なあ、と呟く。つまり、俺がICBMを阻止すれば湊達の存在する未来へ繋がるのか、この世界は。となると彼らが生まれて来る未来を守るといふ事にもなるのだろう。それを考え、湊達、今頃何をしているのだろうか？ と少しだけ考えてしまう。中途半端な所で離脱してしまっただけに、ちよつと先に進めているのかどうか、無事かどうか心配だ。

ああ、でもなんか、近いうちに会いそうだなあ、とは思っている。クロニクル・タナトス。それを使った感覚がまだ、脳裏に焼き付いている。車椅子に座り、欠けた月の下で空虚なものなんて全て吹き飛ばしたような姿を見せた湊。普段の彼は嫌いだったが、彼があんな風に笑えるようになるならば、

「ICBM、阻止するか」

「しちゃうの？」

そう言うとアンが正面から馬乗りになつてくる。片手でその腰を抱いて支えると、アンが視線を降ろし、唇を重ねてきた。それを受け入れながらそうだねえ、と言葉を返す。

「……やつぱり、ああいう景色になるって思うとちよつと放置はできないよな、やつぱり」

崩壊した世界。

崩れたビル。

跋扈する悪魔。

忘れられたモラル。

消えゆく文明。

自分の崩壊世界の様子を思い出して、そしてこの東京が、そして日本の姿がアレと同じようになってしまふと考えると、ちよつと放置は

できない気がする。だからICBM、破壊してしまおう。トールマンという男を暗殺するか、或いは落ちて来るICBMが到着する前に迎撃してしまえばどうとでもなるだろう。

スカートの間隙から手を差し込み、スパッツに包まれたアンの尻に触れる。それに合わせる様にアンが体を密着させる。クロッチの部分が股間部に来るように体を寄せ、胸を押し付けて来る。そして再び、唇を重ねる。

「リ्यूジ、Mag、足りない」

「ああ、世界全体でまだMag不足だったからそうか……」

という事はまた、派手にセックスしないといけないのか、と完全に火が入っているアンを見て納得する。それはそれとして、余りにも脈絡もなく発情していないか？ とは思わなくもない。

『満月発情じゃろ。COMPの中に居れば問題はないんじやが』

『月齢に影響されやすいのよ、悪魔は。特に満月と新月は影響力高いわよ』

「だからお前らそういう情報はさあ——んむ、ちゅ」

「ん……ちゅ、れろっ」

舌と舌を絡め合わせながらもアンが股間に陰部を押し付け、それで軽く自分を高めている。完全に発情しているのがそれで解る。まるで抑えが利かない様な態度に少しだけ戸惑うも、そういえば今までは無垢だったから耐えれたのかもしれない、と憶測する。まあ、それ以上考えるのも無粋だろう。

まだ東京の平穏は長い、愛ぐらい語り合っても誰も文句は言わないだろう——。